館山市萱野遺跡・宇戸台遺跡

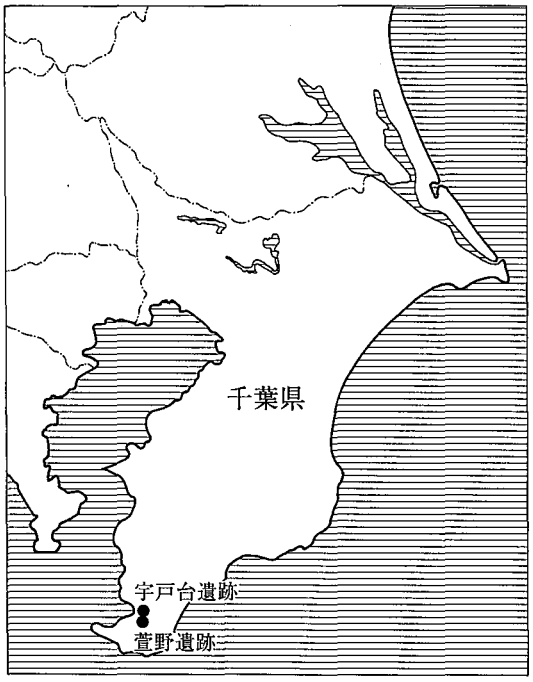
— 地方道路交付金委託富津館山線埋蔵文化財調査報告書 —

平成22年3月

千葉県県土整備部
財団法人　千葉県教育振興財団

館山市萱野遺跡・宇戸台遺跡

— 地方道路交付金委託富津館山線埋蔵文化財調査報告書 —



萱野遺跡全景（北から）

萱野遺跡全景（南から）

萱野遺跡環濠（SD－016・018）出土土器

萱野遺跡出土玉類

萱野遺跡出土銅製品

萱野１号墳出土土器

宇戸台遺跡全景（北から、前方は萱野遺跡）

序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設置され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第639集として、千葉県県土整備部の地方道路交付金委託富津館山線建設事業に伴って実施した館山市萱野遺跡・宇戸台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、安房地域では調査例のない弥生時代の環濠集落跡や古墳時代から中世にわたる館山市域の開発状況を示す遺構が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年３月

財団法人　千葉県教育振興財団

理事長　篠　塚　　俊　夫

凡　例

1　本書は、地方道路交付金委託富津館山線に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県館山市山本字芦野1,196－１ほかに所在する萱野遺跡（１）、同市国分字館ノ原239ほかに所在する萱野遺跡（２）及び同市腰越字上の台44－２ほかに所在する宇戸台遺跡（遺跡コード205－007）である。

3　発掘調査から報告書刊行に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査および整理作業の期間、担当者は、本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は、副所長白井久美子　上席研究員小林信一が行った。第１章・第４章・第５章は両名で担当し、第２章・第３章は白井が担当した。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御指導・御協力をいただいた。千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県安房地域整備センター、館山市教育委員会、櫻井敦史・高橋直樹・藤澤良祐・本吉正宏氏

7　本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　地形図「館山」「千倉」「那古」「安房古川」　1：25,000

第２図　館山市発行　地形図「№12」　1：2,500　昭和55年測量　平成２年修正
館山市発行　地形図「№13」　1：2,500　昭和55年測量　平成２年修正
館山市発行　地形図「№18」　1：2,500　昭和55年測量　平成２年修正
館山市発行　地形図「№19」　1：2,500　昭和55年測量　平成２年修正
安房郡三芳村役場発行　三芳村全図　1：10,000　昭和50年１月測図　平成14年９月部分修正

第３図　『千葉県安房郡館野村入地図』「館野村全図」　1：10,000　昭和12年

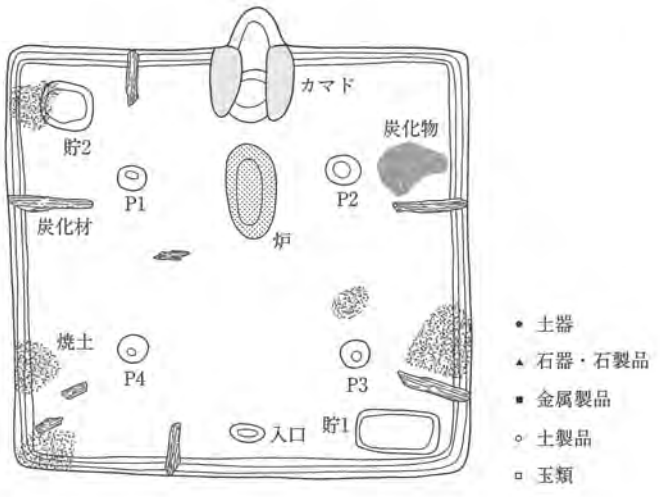
8　周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

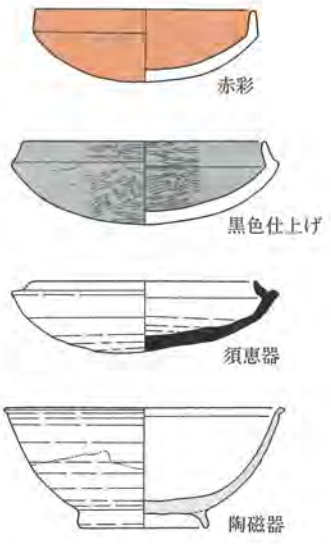
9　本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。測量成果は日本測地系を使用した。

10　本書で使用した遺構番号等は、基本的に調査時の番号を踏襲したが、古墳及び宇戸台遺跡の方形周溝墓については新たに番号を付与した。

11　本書に使用した遺構実測図の縮尺は竪穴住居跡・掘立柱建物跡平面図1/80、カマド1/40、土坑1/30、溝は平面図を1/200、断面図1/40、古墳・方形周溝墓1/80を基本としている。

12　遺物実施図は1/4を基本とし、金属製品は1/2～3/4を基本とした。





本文目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　遺跡の位置と環境……3
　第３節　調査の方法と経過……9

第２章　萱野遺跡１次調査区……12
　第１節　概要……12
　第２節　調査の成果……12

第３章　萱野遺跡２次調査区……17
　第１節　弥生時代……17
　　１　中期の竪穴住居……17
　　２　後期の竪穴住居……22
　　３　環濠……57
　　４　土坑……70
　　５　方形周溝墓……70
　　６　グリッド等出土遺物……76
　第２節　古墳時代……81
　　１　出現期の竪穴住居……81
　　２　出現期の古墳……86
　　３　後期の竪穴住居……95
　　４　土坑……123
　　５　グリッド等出土遺物……124
　第３節　奈良・平安時代……127
　　１　竪穴住居……127
　　２　土坑……135
　　３　グリッド等出土遺物……136
　第４節　中世……136
　　１　掘立柱建物群……136
　　２　ピット群……146
　　３　土坑……146
　　４　グリッド等出土遺物……149

第５節　その他の遺構と遺物……152
1　溝・道状遺構……152
2　土製品・玉類・金属製品……166
3　石器・石製品……168
4　鍛冶関連遺物……175

第４章　宇戸台遺跡……180
第１節　弥生時代……181
1　方形周溝墓……181
第２節　古墳時代……188
1　古墳……188
2　竪穴住居……194
第３節　奈良・平安時代……198
1　竪穴住居……198
2　掘立柱遺物……210
3　土坑……214
4　ピット群……215
第４節　中世以降……217
1　溝・道跡……217
2　井戸……221
第５節　その他の遺物……221
1　トレンチ・グリッド等出土遺物……221
2　鍛冶関連遺物……222

第５章　まとめ……226
第１節　弥生時代……226
第２節　古墳時代……231
第３節　奈良・平安時代……234
第４節　中世……236

報告書抄録……巻末

挿図目次

第 1 図　萱野・宇戸台遺跡と周辺の主な遺跡 ……4
第 2 図　萱野・宇戸台遺跡位置図 ……5
第 3 図　萱野遺跡周辺地籍図 ……7
第 4 図　萱野遺跡２次調査区トレンチ配置図 …11
第 5 図　宇戸台遺跡確認・本調査区 ……11
第 6 図　小グリッド設定図 ……11
第 7 図　萱野遺跡１次調査区全体図（１）……13
第 8 図　萱野遺跡１次調査区全体図（２）……14
第 9 図　萱野遺跡１次調査区土層断面図 ……15
第 10 図　萱野遺跡１次調査区出土遺物 ……16
第 11 図　萱野遺跡２次調査区全体図（１）……18
第 12 図　萱野遺跡２次調査区全体図（２）……19
第 13 図　弥生時代遺構配置図 ……20
第 14 図　SI001・007 ……21
第 15 図　SI023……23
第 16 図　SI031、SI061・062の炉 ……24
第 17 図　SI003（１）……26
第 18 図　SI003（２）・004……27
第 19 図　SI018……28
第 20 図　SI019（１）・055……29
第 21 図　SI019（２）……30
第 22 図　SI024……32
第 23 図　SI025・034・036……33
第 24 図　SI030A・030B……34
第 25 図　SI042……36
第 26 図　SI043・047 ……38
第 27 図　SI044（１）……39
第 28 図　SI044（２）……40
第 29 図　SI045……41
第 30 図　SI046……42
第 31 図　SI048・049 ……43
第 32 図　SI050……44
第 33 図　SI051・052 ……46
第 34 図　SI053・056（１）……47
第 35 図　SI054・056（２）・057……49
第 36 図　SI058……50
第 37 図　SI060・071・110……52
第 38 図　SI066・067・073・074……53
第 39 図　SI076……55
第 40 図　SI032・033・083～090……56
第 41 図　SD016……59
第 42 図　SD016出土遺物……60
第 43 図　SD018と周辺全体図……61
第 44 図　SD018遺物出土状況（１）……62
第 45 図　SD018遺物出土状況（２）……63
第 46 図　SD018出土遺物（１）……64
第 47 図　SD018出土遺物（２）……65
第 48 図　SD018出土遺物（３）……66
第 49 図　SD018出土遺物（４）……67
第 50 図　SD018出土遺物（５）……68
第 51 図　SD018出土遺物（６）……69
第 52 図　SK002・005・006……71
第 53 図　SS001 ……72
第 54 図　SS002・003・004・005……74
第 55 図　SS002・003・006 ……75
第 56 図　Ｂ区グリッド等出土遺物（１）……77
第 57 図　Ｂ区グリッド等出土遺物（２）……78
第 58 図　Ｂ区グリッド等出土遺物（３）……79
第 59 図　Ｂ区グリッド等出土遺物（４）……80
第 60 図　Ｃ・Ｄ区グリッド等出土遺物 ……80
第 61 図　古墳時代遺構配置図 ……82
第 62 図　SI014（１）……83
第 63 図　SI014（２）……84
第 64 図　SI014（３）……85
第 65 図　１号墳平面図（SX001・004・005）……86
第 66 図　１号墳南周溝（SX001）土層・
　　遺物出土状況 ……87
第 67 図　１号墳南周溝 出土玉類 ……88

第68図　1号墳北周溝（SX004）土層・遺物出土状況……89
第69図　1号墳出土遺物（1）……90
第70図　1号墳出土遺物（2）……91
第71図　1号墳出土遺物（3）……92
第72図　1号墳下層遺物……93
第73図　1号墳上層遺物……94
第74図　SI006……96
第75図　SI002・011……97
第76図　SI010……98
第77図　SI013（1）……100
第78図　SI013（2）・015……101
第79図　SI016……102
第80図　SI017……103
第81図　SI020・028・029・039……104
第82図　SI035・040・041……105
第83図　SI059……107
第84図　SI063……108
第85図　SI064・065（1）……109
第86図　SI065（2）……110
第87図　SI065（3）……111
第88図　SI065（4）……112
第89図　SI068（1）……114
第90図　SI068（2）・069……115
第91図　SI070・077……116
第92図　SI078……118
第93図　SI075abc・082（1）……119
第94図　SI082（2）……120
第95図　SI082（3）……121
第96図　SI079・081……122
第97図　SK009・018・025……123
第98図　SK026・027……125
第99図　B区グリッド等出土遺物……126
第100図　C・D区グリッド等出土遺物……127
第101図　奈良・平安時代遺構配置図……128
第102図　SI005……129
第103図　SI008・009・012……131
第104図　SI021・022・027……132
第105図　SI026……133
第106図　SI037・038……134
第107図　SK010・011b……135
第108図　グリッド等出土遺物……136
第109図　中世以降遺構配置図……137
第110図　掘立柱建物群配置図（1）……138
第111図　掘立柱建物群配置図（2）……139
第112図　SB001・002・008……140
第113図　SB003・004・005……142
第114図　SB006・007……143
第115図　SB009・010……144
第116図　SB011・012、SA001……145
第117図　SK013・016・020・021・024……147
第118図　SK012・015・019・023……148
第119図　グリッド等出土遺物……150
第120図　出土銭……151
第121図　SX003……153
第122図　SX003出土遺物……154
第123図　SD001・002・014……155
第124図　SD003・007・008……156
第125図　SD004・005（1）・017……158
第126図　SD004・005（2）・006……159
第127図　SD010・011・012・013・028・030……160
第128図　SD019・022・024・026・027……161
第129図　SD019・020・021・023……162
第130図　SD022・025・026・027……163
第131図　溝出土遺物（1）……164
第132図　溝出土遺物（2）……165
第133図　グリッド等出土土製品……166
第134図　グリッド等出土玉類……167
第135図　グリッド等出土金属製品……168
第136図　石製品・石斧・磨石類……169
第137図　敲石・石錘・石皿……171
第138図　磨石・砥石類（1）……172
第139図　磨石・砥石類（2）……173
第140図　磨石・砥石類（3）……174

第141図　磨石・砥石類（４）……175
第142図　鍛冶関連遺物分布図 ……176
第143図　鍛冶関連遺物（１）……177
第144図　鍛冶関連遺物（２）……178
第145図　鍛冶関連遺物（３）……179
第146図　宇戸台遺跡全体図 ……180
第147図　弥生時代遺構配置図 ……181
第148図　１号（SD003）・２号（SD002）
　　方形周溝墓 ……182
第149図　３号方形周溝墓（SD005・006）……183
第150図　４号方形周溝墓（SD010）（１）……185
第151図　４号方形周溝墓（２）……186
第152図　５号方形周溝墓（SD014）……187
第153図　古墳時代遺構配置図 ……188
第154図　１号墳（SD001）……189
第155図　２号墳（SD005・006・008・009）……191
第156図　２号墳出土遺物（１）……192
第157図　２号墳出土遺物（２）……193
第158図　SI002・010・011・012・013・014・015、
　　SK002……195
第159図　SI015出土遺物……196
第160図　SI017……197
第161図　奈良・平安時代遺構配置図 ……199
第162図　SI001・003 ……200
第163図　SI004・005・006・008・009……202
第164図　SI004・005・008出土遺物 ……204
第165図　SI007（１）……206
第166図　SI007（２）……207
第167図　SI016……208
第168図　SI018・019 ……209
第169図　SB001・002・003……211
第170図　SB004・005 ……213
第171図　SB006……214
第172図　SK001・003・004・005・006……215
第173図　SH005・012・014出土遺物……216
第174図　SD004・007・011・012・013……218
第175図　SD011出土遺物……219
第176図　SE001……220
第177図　トレンチ・グリッド等出土遺物 ……222
第178図　鍛冶関連遺物 ……223
第179図　敲石・砥石 ……224
第180図　弥生後期～古墳出現期の集落出土土器
　　……229
第181図　出現期～前期の古墳出土土器 ……230
第182図　萱野遺跡中世陶磁器組成・型式グラフ
　　……238
第183図　宇戸台遺跡中世陶磁器組成・型式グラフ
　　……240

表　目　次

表１　萱野遺跡中世陶磁器総量一覧……242
表２　宇戸台遺跡中世陶磁器総量一覧……247
表３　萱野遺跡（２）・宇戸台遺跡遺構一覧 ……248
表４　萱野遺跡（１）土器観察表……255
表５　萱野遺跡（２）土器観察表……255
表６　宇戸台遺跡土器観察表……302
表７　萱野遺跡銭貨観察表……307
表８　萱野遺跡金属製品観察表……307
表９　宇戸台遺跡金属製品観察表……307
表10　萱野遺跡鍛冶関連遺物観察表……308
表11　宇戸台遺跡鍛冶関連遺物観察表……309
表12　萱野遺跡玉類計測表……309
表13　萱野遺跡土製品計測表……310
表14　宇戸台遺跡土製品計測表……310
表15　萱野遺跡石器・石製品観察表……310
表16　宇戸台遺跡石器・石製品観察表……318

図版目次

巻頭図版１　萱野遺跡全景（北から）
萱野遺跡全景（南から）
巻頭図版２　萱野遺跡環濠（SD016・018）出土土器
萱野遺跡出土玉類
萱野遺跡出土銅製品
巻頭図版３　萱野１号墳出土土器
宇戸台遺跡全景(北から、前方は萱野遺跡)

図版１　萱野・宇戸台遺跡空中写真
図版２　萱野遺跡１次調査区
第２トレンチ遺構確認状況（南から）
発掘状況（北から）
SD001・002・003・004完掘状況（北から）
SD004（北から）
SD001・003・008（南から）
SD001内杭出土状況（南から）
図版３　萱野遺跡２次調査区
Ｂ区、SS003と周辺の遺構群（北から）
Ｂ区、SD018と周辺の遺構群（北から）
図版４　Ｂ区、１号墳下層の遺構群（北から）
Ｃ区遺構群（北東から）
図版５　Ｃ区、SI013・017とその周辺（西から）
Ｃ区、SI005・015とその周辺（南から）
図版６　Ｃ区、SD003・014（東から）
Ｃ区、SX003、SD004・005（西から）
図版７　Ｃ区、SX003、SD004・005（南東から）
Ｄ区、SD016・029検出状況（北西から）
図版８　SD016（北側環濠）南東部（西から）
SD016北西部（北西から）
SD016南東部遺物出土状況
SD016遺物出土状況
図版９　SD018（南側環濠）全景（西から）
SD018遺物出土状況（西から）
SD018遺物出土状況近景
図版10　１号墳南周溝(SX001)遺物出土状況(西から)
１号墳南周溝遺物出土状況（北から）
図版11　１号墳北周溝(SX004)遺物出土状況(西から)
１号墳北周溝遺物出土状況（東から）
図版12　SI001全景（南東から）
SI002全景（東から）
SI003全景（南から）
SI004全景（南から）
SI005全景（南から）
SI005遺物出土状況（南から）
図版13　SI006全景（南から）
SI007遺物出土状況（北から）
SI010全景（南から）
SI010カマド（南から）
SI011全景（西から）
SI011カマド（西から）
図版14　SI012全景（南から）
SI013全景、遺物出土状況（南東から）
SI014全景（南から）
SI015全景（南から）
SI018全景（東から）
SI019全景（東から）
SI024全景（南から）
SI026全景（西から）
図版15　SI026全景（南から）
SI026カマド（南から）
SI028全景（南から）
SI040全景（南から）
SI042全景（南東から）
SI044・003・043全景（南から）
図版16　SI045全景（南西から）
SI046全景（南東から）
SI046炉石出土状況（南東から）
SI047全景（西から）

SI049全景（西から）
SI050全景（南東から）
SI058全景（南東から）
SI058炉石出土状況（東から）
図版17　SI059全景（南から）
SI068・064・065全景（北から）
SI065全景、遺物出土状況（北から）
SI076全景（北東から、065を含む）
SI078遺物出土状況（東から）
SI083炉石出土状況（北東から）
１号墳下層、V14の住居群（北東から）
１号墳下層、U15・V15の住居群（北西から）
図版18　SK002（南から）
SK006遺物出土状況（東から）
SK012（東から）
SK024土坑（南から）
SK026全景（西から）
SK026遺物出土状況（北から）
SD004・005（北から）
SD008（北東から）
図版19　SD010（北東から）
SD011（東から）
SD014（南西から）
SD022、SS003西溝（南東から）
SB001（南東から）
Ａ区全景（東から）
Ｂ区ピット群（西から、左隅はSX004）
Ｃ区ピット群（南から、手前はSD003）
図版20　萱野遺跡１次調査区出土土器・
２次調査区住居跡出土土器（１）
図版21　住居跡出土土器（２）
図版22　住居跡出土土器（３）
図版23　住居跡出土土器（４）
図版24　住居跡出土土器（５）
図版25　住居跡出土土器（６）
図版26　住居跡出土土器（７）
図版27　住居跡出土土器（８）
図版28　住居跡出土土器（９）
図版29　住居跡出土土器（10）
図版30　住居跡出土土器（11）
図版31　住居跡出土土器（12）
図版32　住居跡出土土器（13）
図版33　住居跡出土土器（14）
図版34　住居跡出土土器（15）
図版35　住居跡出土土器（16）
図版36　住居跡出土土器（17）
図版37　住居跡出土土器（18）
図版38　住居跡出土土器（19）
図版39　住居跡出土土器（20）
図版40　住居跡出土土器（21）
図版41　住居跡出土土器（22）・土製品
図版42　住居跡等出土土器（23）
図版43　土坑出土土器（１）
図版44　土坑出土土器（２）・
方形周溝墓出土土器（１）
図版45　方形周溝墓出土土器（２）
図版46　古墳出土土器（１）
図版47　古墳出土土器（２）
図版48　古墳出土土器（３）
図版49　古墳出土土器（４）
図版50　古墳出土土器（５）
図版51　古墳出土土器（６）
図版52　溝出土土器（１）
図版53　古墳上層出土土器・溝出土土器（２）
図版54　環濠（SD016・018）出土土器（１）
図版55　環濠（SD016・018）出土土器（２）
図版56　環濠（SD016・018）出土土器（３）
図版57　環濠（SD016・018）出土土器（４）
図版58　環濠（SD016・018）出土土器（５）
図版59　環濠（SD016・018）出土土器（６）
図版60　環濠（SD016・018）出土土器（７）
図版61　環濠（SD016・018）出土土器（８）・
溝出土土器
図版62　グリッド出土土器（１）

図版63　グリッド出土土器（２）
図版64　グリッド出土土器（３）
図版65　グリッド出土土器（４）
図版66　グリッド出土土器（５）
図版67　グリッド出土土器（６）
図版68　グリッド出土土器（７）
図版69　グリッド出土土器（８）・土製品
図版70　グリッド出土土器（９）
図版71　グリッド出土陶磁器（１）
図版72　グリッド出土陶磁器（２）
図版73　弥生時代出土石器
図版74　流紋岩石製品
図版75　磨石・砥石類（１）
図版76　磨石・砥石類（２）
図版77　磨石・砥石類（３）
図版78　磨石・砥石類（４）
図版79　磨石・砥石類（５）
図版80　出土鉄製品・古銭
図版81　宇戸台遺跡
全景（南から）
全景（北から）
図版82　Ａ区全景（南から）
Ｂ区全景（南から）
図版83　SI001・002・003（南から）
SI004（西から）
SI004カマド（西から）
SI009カマド（南から）
SI004・005・006・008・009（西から）
図版84　SI007（南から）
SI007遺物出土状況（南から）
SI010・011・012・013（北から）
SI013（南から）
SI014・015、SK002（南から）
SI016（南から）
図版85　SI016カマド（南から）
SI017（南から）
SI018（南から）
SI019（南から）
SI019カマド（南から）
SB002（西から）
SB004（西から）
SB005（西から）
図版86　SB006、SD011（中世道）（南から）
SK002（西から）
SK003（南西から）
SE001（南から）
１号墳、２号方形周溝墓（東から）
１号墳遺物出土状況（南から）
図版87　Ａ区全景（南から、中央は２号墳、３号方形周溝墓）
１号方形周溝墓、SI017（南東から）
図版88　２号墳前方部西周溝遺物出土状況(西から)
２号墳前方部東周溝遺物出土状況(東から)
４号方形周溝墓（南東から）
４号方形周溝墓北溝遺物出土状況(南西から)
５号方形周溝墓（北西から）
４号方形周溝墓西溝遺物出土状況(南から)
図版89　住居跡出土土器（１）
図版90　住居跡出土土器（２）・
方形周溝墓出土土器（１）
図版91　方形周溝墓出土土器（２）
図版92　方形周溝墓出土土器（３）・
古墳出土土器（１）
図版93　古墳出土土器（２）・溝等出土土器
図版94　土製品・鉄製品・石製品

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

千葉県県土整備部は、館山市街地の混雑緩和のため、富津館山線の建設事業を計画した。この事業に当たって千葉県県土整備部は、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を提出し、千葉県教育委員会から、事業地内に遺跡が所在する旨の回答を得た。その後、遺跡の取扱いについて両者の間で協議が重ねられ、発掘による記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人千葉県教育振興財団が実施することとなり、千葉県と委託契約を締結して発掘調査を実施した。

発掘調査から整理作業・報告書刊行にいたるまでの調査組織および担当者は以下の通りである。

1　萱野遺跡

発掘調査

平成11年度

期　間　平成11年４月５日～平成11年４月30日

内　容　確認調査　上層600㎡/3,666㎡

組　織　調査研究部長　沼澤　豊　南部調査事務所長　高田　博

担当者　主任技師　笹生　衛

平成14年度

期　間　平成14年８月１日～平成15年３月31日

内　容　確認調査　上層450㎡/4,500㎡

本調査　上層4,500㎡

組　織　調査研究部長　斎木　勝　南部調査事務所長　高田　博

担当者　研究員　城田義友

整理作業

平成15年度

期　間　平成15年５月１日～平成15年７月31日

内　容　水洗・注記～記録整理の一部

組　織　調査研究部長　矢戸三男　南部調査事務所長　鈴木定明

担当者　上席研究員　石川　誠　研究員　沖松信隆

平成17年度

期　間　平成17年６月１日～平成18年１月31日

内　容　記録整理の一部～実測の一部

組　織　調査研究部長　矢戸三男　南部調査事務所長　高田　博

担当者　上席研究員　伊藤智樹、石川　誠

平成18年度

期　間　平成18年10月１日～平成19年１月31日

内　容　接合の一部～トレースの一部

組　織　調査研究部長　矢戸三男　南部調査事務所長　高田　博

担当者　主席研究員　相京邦彦

平成19年度

期　間　平成19年９月１日～平成19年９月30日、平成19年11月１日～平成20年１月31日

内　容　実測の一部～挿図作成の一部

組　織　調査研究部長　矢戸三男　南部調査事務所長　西川博孝

担当者　研究員　半澤幹雄

平成20年度

期　間　平成20年７月１日～平成20年10月31日、平成20年12月１日～平成21年３月25日

内　容　拓本～挿図・図版作成の一部、原稿執筆・編集の一部

組　織　調査研究部長　大原正義　中央調査事務所長　折原　繁

担当者　副所長　白井久美子

平成21年度

期　間　平成21年７月１日～平成22年３月20日

内　容　図版作成・挿図の一部～原稿執筆・編集・報告書刊行

組　織　調査研究部長　及川淳一　中央調査事務所長　折原　繁

担当者　副所長　白井久美子

２　宇戸台遺跡

発掘調査

平成18年度

期　間　平成18年10月４日～平成18年11月30日

内　容　確認調査　上層238㎡／1,666㎡

本調査　　上層1,300㎡

組　織　調査研究部長　矢戸三男　南部調査事務所長　高田　博

担当者　上席研究員　麻生正信

整理作業

平成21年度

期　間　平成21年６月１日～平成21年12月20日

内　容　水洗・注記～原稿執筆・編集

組　織　調査研究部長　及川淳一　中央調査事務所長　折原　繁

担当者　副所長　白井久美子　上席研究員　小林信一

第２節　遺跡の位置と環境（第１・２図）

萱野遺跡は館山市国分字館ノ原の平坦地にある。ここは館山平野の中程に位置する旧三芳村（現南房総市）下堀から館山市山本にかけて南北に連なる旧砂州ないし浜提跡（現海岸線から６列目）[1]に営まれた遺跡で、平久里川の一支流である滝川が遺跡の東～北側を廻っている。一方、南～西側は一面の水田地帯となっている。標高は15m前後であり、滝川沿いが相対的に幾分小高いものの、それ以外は水田面より比高２m～３m程度の微高地である。今回調査した部分は遺跡北側の滝川寄りの地であり、遺跡内では排水に便な居住に適した地といえる。

本遺跡は弥生時代中期～中世までの複合遺跡で、弥生時代の竪穴住居49棟、環濠２条、方形周溝墓６基、古墳時代の方墳１基、古墳時代の竪穴住居28棟、奈良・平安時代の竪穴住居14棟、土坑24基、平安時代以降の掘立柱建物跡12棟、ピット群、柵列１条、溝跡28条を検出している。遺跡では若干の縄文時代の遺物（縄文中期に属する土器片）が出土しているが、その主体は弥生時代中期～後期および古墳時代の集落と墓域である。また、中世に至って大規模な開発と土地利用が行われているようである。

宇戸台遺跡は、館山市と南房総市の旧三芳村の区域にまたがって存在し、平久里川支流滝川に開析され、地震により隆起した旧海岸平野砂堤帯上の平坦地に立地する。標高11.8m～14.0mの畑地である。

本遺跡は弥生時代中期～中世までの複合遺跡であり、弥生時代の方形周溝墓４基、古墳時代の前方後方墳１基、方墳１基、古墳時代後期～平安時代にかけての竪穴住居19棟、土坑６基、平安時代の掘立柱建物跡６棟、ピット群、中世の井戸跡１基、道路跡１条、溝跡１条、時期不明溝跡３条を検出している。

当遺跡からは若干の縄文時代の遺物（縄文後期に属する土器細片、縄文時代後期～晩期の石鏃）が出土しているものの、その主体は萱野遺跡と同様、弥生時代・古墳時代の集落であり、また、中世の遺構群である。

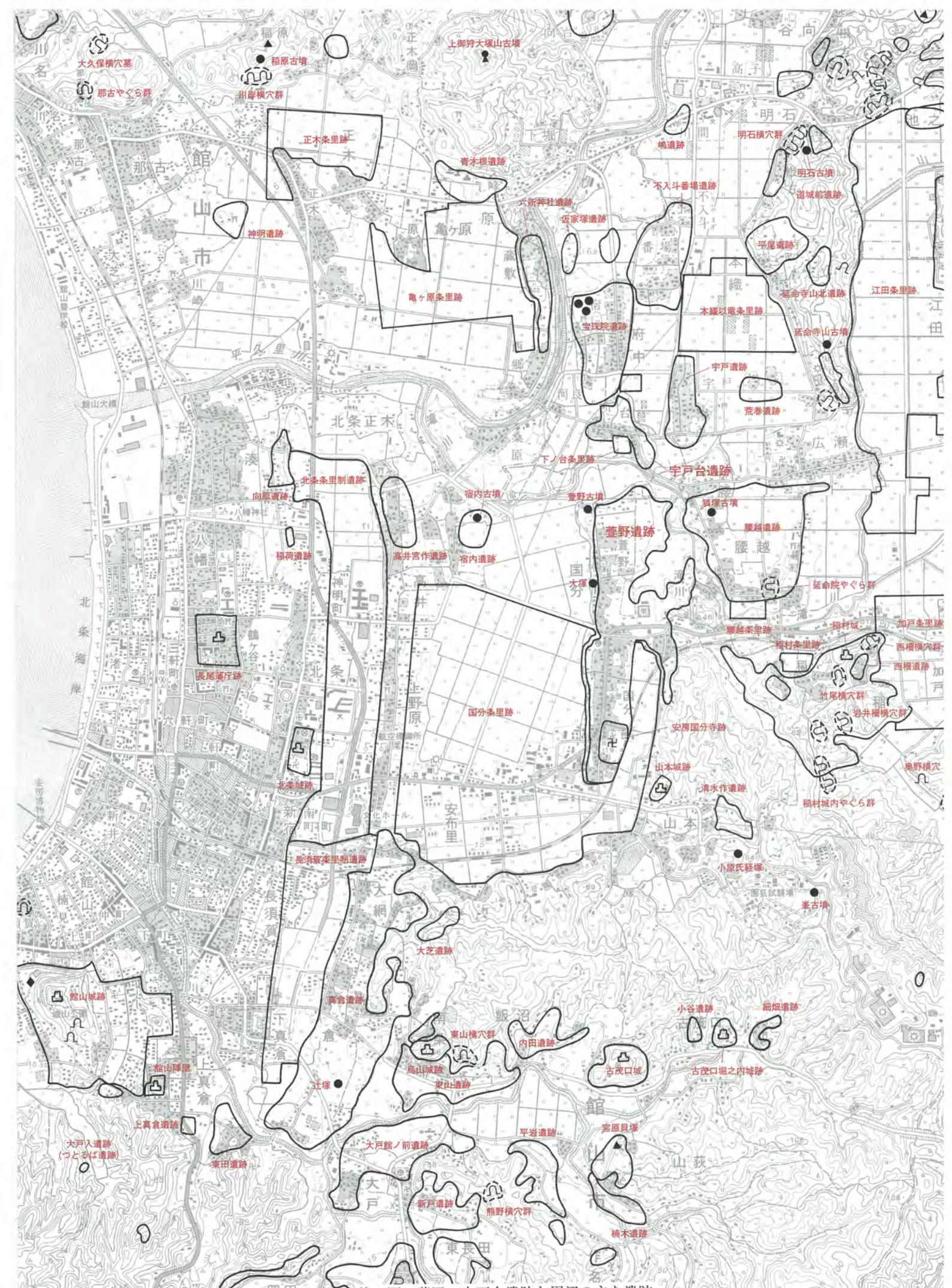
ここでは、関連する時代を中心に周辺の歴史的環境を概説することにしたい。

弥生時代では発掘調査例として、南側地続きの安房国分寺跡[2]、滝川対岸の旧三芳村府中に位置する仮家塚遺跡[3]・宝珠院遺跡[4]、南東至近の稲村城跡[5]、長須賀条里制遺跡[6]、上真倉の東田遺跡[7]などである。また、表採・単独出土例としては延命寺山北遺跡[8]、赤坂遺跡[8]（館山市宮城の丘陵上）、御庄和田遺跡[8]、などがあげられる。

この内、中期の遺跡としては仮家塚遺跡が代表的な調査例である。安房地域では初めての弥生中期に遡る方形周溝墓群（６基）の検出例であり、恐らくその南側に営まれた集落に対応する墓域であろう。次に、長須賀条里制遺跡では堰として利用された小規模な旧河道から多量の土器や木製品が出土している。この他、延命寺山北遺跡では中期の壺形土器が、御庄和田遺跡や宝珠院遺跡では中期に特有の石器（太形蛤刃石斧）が出土ないし採集されている。

弥生時代後期の遺跡としては、仮家塚に隣接する宝珠院遺跡（住居跡１棟）があげられる。また、安房国分寺跡では、後期の合口壺棺が黄褐色砂層面から出土した。周辺に集落の存在を示唆するものであろう。弥生時代の遺跡については、表採資料が多いことから未だ知られていない例がかなりあると思われる。

古墳時代の調査例では、東田遺跡で集落跡（住居跡10数棟）・祭祀跡等、仮家塚遺跡で前期の集落跡（住居跡３棟）、加賀名遺跡[9]で中期末～後期に属する集落跡（住居跡２棟、祭祀跡一か所）、長須賀条里制遺跡で後期の集落跡が検出されている。この時代の遺跡は比較的多く確認されているが、分布地図などでも単に土師器、須恵器とある場合が圧倒的であり、奈良・平安時代を含めた幅で考える必要がある。



第１図　萱野・宇戸台遺跡と周辺の主な遺跡

第２図　萱野・宇戸台遺跡位置図

古墳については、前記宝珠院遺跡で中期に属する古墳が３基調査（確認調査のみ）されている。また、館山市峯古墳では複数の色ガラスを使った稀少なトンボ玉を含む玉類などが出土した。しかし、館山市内で確認されている古墳は10基を超える程度であり、平野部など墳丘部が消滅した例を考慮したとしても上総以北との相違は明瞭である。ただ、これを単純に過小評価することは適当でないと思われる。丘陵上の前方後円墳（上御狩大塚山古墳）や圭頭大刀、環頭大刀等の遺物を出土した海岸段丘上の古墳[10]（坂井翁作古墳）も存在する。また、近年の調査で明らかになった大寺山洞穴の舟形木棺墓（計12基）[11]や丘陵部に広くみられる横穴墓[12]の存在に着目すべきで、安房地域の古墳は多様な葬制や副葬品のあり方などから総合的に検討する必要がある。

一方、古墳時代の安房を語るうえで祭祀遺跡[13]は見逃せない。祭祀の遺物としては、高坏を始めとした土器と、土製模造品（剣形、鏡形、玉形等）がある。両者は必ずしも併存するものではなく、それは中期後半に比定される加賀名遺跡で土製模造品がほとんど伴っていないことからも理解されよう。これらの品々が古代祭祀における神々への供献品であることは言うまでもないが、それが何故安房に多いのかは祭神との係わりも含めさらに議論が求められよう。この他、古墳時代のいわゆる小規模水田跡が長須賀条里、東山遺跡で検出されている。

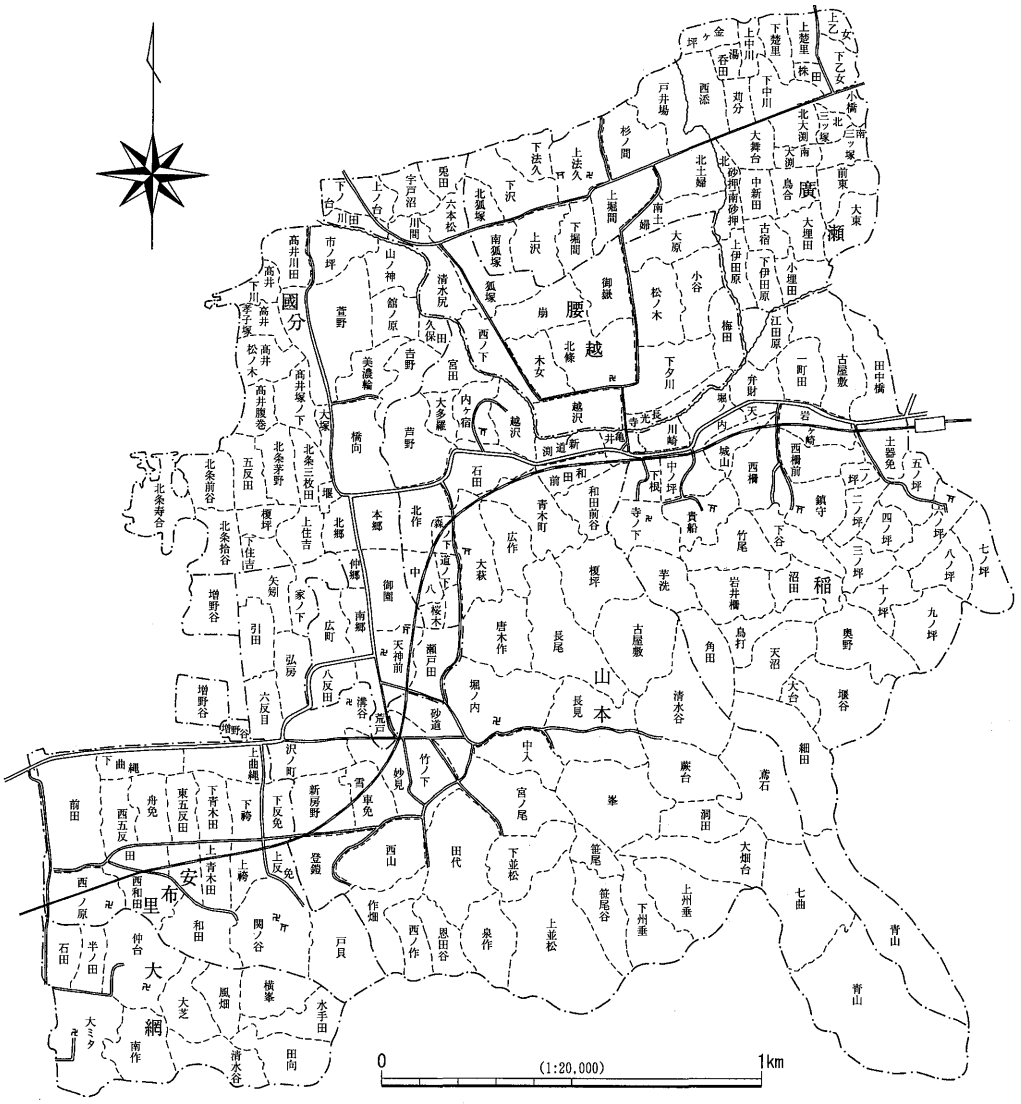
奈良・平安時代は萱野遺跡の南に安房国分寺（僧寺カ）が置かれたように、当地周辺が安房の中心としての位置を占めるようになる。戦前から発掘調査が行われ、戦後も３次にわたる遺構確認調査が実施され、金堂跡が検出されている。出土した瓦の量が少ないことや、軒平瓦が見られないこと（平瓦代用か）などから、総瓦葺きを否定する見解がある。また、金堂以外の様相が不明であること、その存立期間の短さ（天平宝字元年～仁和二年頃）によって単なる定額寺院であったとの指摘もある。なお、国分尼寺推定地には二か所あり、その一つが大塚古墳に隣接する通称尼房の地である。当遺跡からは南西400mに位置する。

一方、集落については古墳時代と同様、周辺で広くその分布が確認されている（県遺跡分布地図参照）。しかし、発掘調査例となると極めて乏しく、その意味で両遺跡の成果は貴重である。

萱野・宇戸台遺跡の北側には府中という地名があり、ここは古くから国府が置かれた地とされてきた（例えば『安房志』）[14]。しかし、既に指摘されているように、府中とは中世的な名称であり、それが必ずしも国府と同一を意味するものではない。とはいえ、安房国府が平群郡に置かれたのは確かであり、諸環境を考慮すればこの府中周辺が最も可能性が高いのも事実である。

条里制遺構については古くから研究があって、その復元図も公にされている[15]。今日でも現存する条里地割そのものの年代について従来より新しくみる考え（11～12世紀）が主流となりつつある。安房の場合、発掘調査で確認されたのは奈良・平安時代に属する長須賀条里（条里型水田）が一番新しいものである。その他、踏査例[16]としては、江田、北条、加戸条里があるが、面的な調査は限られたものであり、その実態を捉えたとは言い難いところがある。なお、宇戸台遺跡の調査地点の西隣りには、すでに消滅しているが、下ノ台条里跡があり、遺跡の北東側には本織以竜条里跡（消滅）、北西側には亀ヶ原条里跡（消滅）があり、萱野遺跡の西側には国分条里跡・北条条里制遺跡、南西には長須賀条里制遺跡がある。付近一帯の水田は、現在の市街地にも及んで広範に広がっていたことがわかる。

中世では当地特有の墓制として「やぐら」があげられよう。横穴を穿つという点で古代の横穴墓と類似するが、墓室底面の小さな坑のなかに火葬骨を納め石塔を建てるという点で、墓地を岩陰に求めたものと



第３図　萱野遺跡周辺地籍図

いう見方もできる。このような墓が上総～安房の西海岸沿い、とりわけ館山～丸山にかけての丘陵裾に多くみられ、その分布と様相については研究の蓄積[17]がある。

城館は里見氏が近世に至って居城とした館山城、中世に居城とした稲村城を始めとして、とりわけ平野の南側に多く分布する。大井城、山本城など、明らかに新しい構造を有する城郭はともかく、古いものが明確でないのは一族の内訌ゆえ（館山市域は義豊系の拠点）であろうか。

中世集落についてはまったく今後の課題というしかないが、長須賀条里制遺跡では掘立柱建物群と恐らくそれに伴うであろう12～16世紀にわたる陶磁器が出土している。他に東田遺跡や当遺跡もそうであるが、現在の生活・生産領域と多分に重なった立地である。

最後に萱野遺跡との関わりから、長尾藩についてふれておく。明治２年、徳川氏の駿河移封に伴い藤枝より本田氏が当初長尾（現白浜町）に入ったが、のち北条に陣屋を構え、藩士の屋敷地は萱野に求めた。調査地点は丁度この一画に当たっており、その南側で検出されたピット群や出土陶磁器はそれとの関連が指摘されようか。[18]

註1　千葉県編　1963「安房郡砂丘列分布図」『千葉県史料』原始古代編　安房国

2　①滝口　宏　1977『安房国分寺第一次調査概報』安房国分寺調査団

②市毛　勲ほか　1973『安房国分寺第二次調査概報』安房国分寺調査会

③　〃　1988『安房国分寺第三次調査概報』安房国分寺調査会

3　①新井和之ほか　1991『仮家塚遺跡』三芳村教育委員会

②大渕淳志ほか　1994『安房仮家塚』三芳村教育委員会

③杉江　敬　2000「仮家塚遺跡」『年報№11』財団法人総南文化財センター

4　今泉　潔　1988『古代寺院跡（宝珠院）確認調査報告』千葉県教育委員会

5　永沼律朗ほか　1983『千葉県中近世城跡調査報告書第2集－稲村城址・臼井城址－』財団法人千葉県文化財センター

6　①高梨友子ほか　2004『館山市長須賀条里制遺跡・北条条里制遺跡』財団法人千葉県文化財センター

②高柳正春　1995『長須賀条里制遺跡』長須賀条里制遺跡調査会

③折原洋一　2008『館山市長須賀条里制遺跡』山武考古学研究所

7　平成8年・9年、当文化財センター発掘調査。

8　三芳村史編纂委員会編　1984『三芳村史』三芳村

9　杉江　敬　1999『加賀名遺跡」財団法人総南文化財センター

10　①対馬郁夫　1968「館山市坂井翁作古墳調査報告」『会報』第2号　館山市文化財保護協会

②対馬郁夫　安藤鴻基　1983「千葉県館山市翁作古墳の出土遺物」『古代房総史研究第2号』古代房総史研究会

11　岡本東三編　1997『館山市大寺山洞穴遺跡発掘調査報告書』大寺山洞穴調査会

12　横穴墓については次のような概説、発掘及び分布調査報告書等がある。

①千葉県編　1963『千葉県史料』原始古代編　安房国

②館山市史編さん委員会編　1973『館山市史・別冊』館山市

③野中　徹ほか　1979『舟ヶ作横穴群発掘調査報告書』三芳村教育委員会

④杉江　敬　1996『林ヶ作横穴群発掘調査報告』館山市教育委員会

⑤戸倉茂行ほか　2003「安房国地域」『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会

13　森谷ひろみ氏の歴史地理学的研究成果を紹介するに尽きる。また、近年では考古学的手法で出土遺物を報告する試みもみられる。

①森谷ひろみ　1966「祭祀対象不明の祭祀遺跡とその沖積地質について－館山市東長田および大戸館ノ前遺跡の場合－」『千葉大学文理学部紀要』第4巻4号

②森谷ひろみ　1971「千葉県館山市沼つとるば祭祀遺跡の発掘結果からみた遺跡付近の小地誌」『千葉大学教養部　研究報告B－4』千葉大学教養部

③城田義友・吉野健一　1998「安房の古墳時代祭祀」『研究連絡誌』第53号　財団法人千葉県文化財センター

14　斉藤夏之助　1908年『安房志』多田屋書店

15　註1文献

16　君塚文雄氏ほかによる成果（註１）がまずあげられるが、木下　良氏による国府との関係から周囲の条里（本織以竜条里跡）を論じたものもある。なお、既刊の報告書は江田条里、長須賀条里等があげられる。

①木下　良　1967「国府と条理との関係について」『史林』第50巻－５号

②玉口時雄ほか　1975『千葉県館山市　条里遺構調査報告書』館山市条里遺跡調査会

③註６－１文献

17　平面プランが撥型ないし逆台形で、埋葬施設は奥壁に並行して一か所の棺床を有するタイプが圧倒的である。なお、その分布や概要を記した文献及び調査例としては次のものがあげられる。

①野中　徹　1989「房総のやぐら－安房上総地域を中心として－」『房総文化』16号

②井上哲朗・宮瀧交二　1989「房総半島の「やぐら」について」『六浦文化研究』創刊号

③井上哲朗　1997「房総半島における「やぐら」－線刻・浮彫五輪塔を中心として－」『史館』第29号

④井上哲朗　2001「房総半島における「やぐら」の存在形態」『中世房総の権力と社会』

⑤千葉県史料研究財団編　1996『千葉県やぐら分布調査報告書』千葉県

18　千葉吉男　1983『会報』創立15周年記念第15号別冊（長尾藩史考）館山市文化財保護協会

千葉吉男　1984「続・長尾藩史考（二）」『館山と文化財（会報第17号）』館山市文化財保護協会

第３節　調査の方法と経過

１　萱野遺跡

萱野遺跡の調査区は、館山市国分字館ノ原の平地を南北に縦断するように設定されている。付近一帯の平地は、滝川沿いが標高14m～15mと相対的に高く、それ以外は水田面から２m～３m程度高い微高地である。今回調査した部分は遺跡北側の滝川寄りの地点で、遺跡内では水捌けの良い居住に適した地といえる。

発掘調査は、平成11年度と平成14年度に行った。調査対象面積は8,166㎡である。

平成11年度には、まず8,166㎡のうち、南側の3,666㎡について600㎡のトレンチを入れて確認調査を行った。その結果、弥生時代～中世の流路跡が見つかり、縄文時代～中世の遺物が出土したが、明瞭な遺構が検出されなかったため、確認調査の範囲で調査を終了した。

平成14年度は、北側の4,500㎡についてまず10％（450㎡）のトレンチを入れて確認調査を行った。その結果、調査区のほぼ全面にわたって弥生時代～中世の遺構・遺物が多数検出されたため、引き続き4,500㎡全域の本調査を行うこととなった。

調査に当たっては、平成11年度本調査区を１次調査区、平成14年度調査区を２次調査区とし、さらに２次調査区をＡ～Ｄ区に分けて行った。また、遺構名称の略号は、調査時点では掘立柱建物跡＝SB、竪穴住居跡＝SI、方形周溝墓＝SS、溝状遺構＝SD、土坑＝SK、ピット＝Ｐ、性格不明の遺構＝SX、包含層＝SHの略称を接頭に付していた。報告書では、原則的に調査時の名称を踏襲しているが、整理作業によって遺構の性格が変更されたもの、他の遺構と同一であることが判明したものは新名称を付与し、（　）内に調査時の略号番号を表記した。

発掘調査に当たっては、遺跡とその周辺を含むように、公共座標に基づくグリッド設定を行った。20m×20mの方眼を被せ、それを大グリッドとした。大グリッドは、北から南へ１・２・３…、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…の記号を付け、更に大グリッドの中を２m×２mの小グリッドに100分割し、北西隅から

00・01…とし、南東の隅を99とした。これにより、大グリッドと小グリッドの組み合わせで、A1－01、C2－55というように小地区名を表示した。

2　宇戸台遺跡

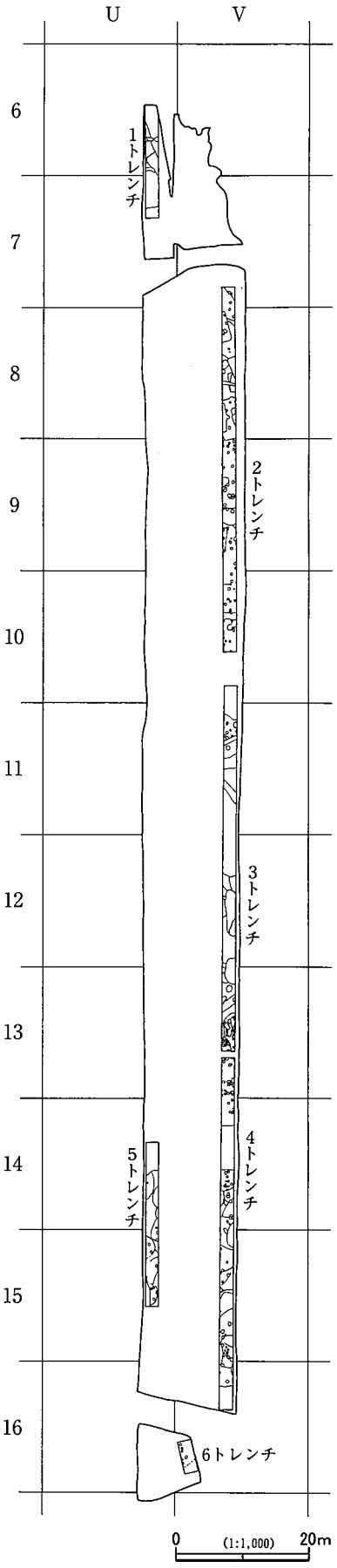
宇戸台遺跡の調査区はほぼ南北方向に設定されており、調査地点の番地は館山市腰越字上の台44－２ほかで、標高11.8m～14mの畑地に立地する。調査地点には表土面に土師器の散布が濃く認められた。

確認調査は平成18年10月４日～平成18年10月20日まで行った。南北方向に４本のトレンチを入れ、対象面積1,666㎡のうち、238㎡を調査した結果、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡群及び掘立柱建物跡、溝跡を検出した。

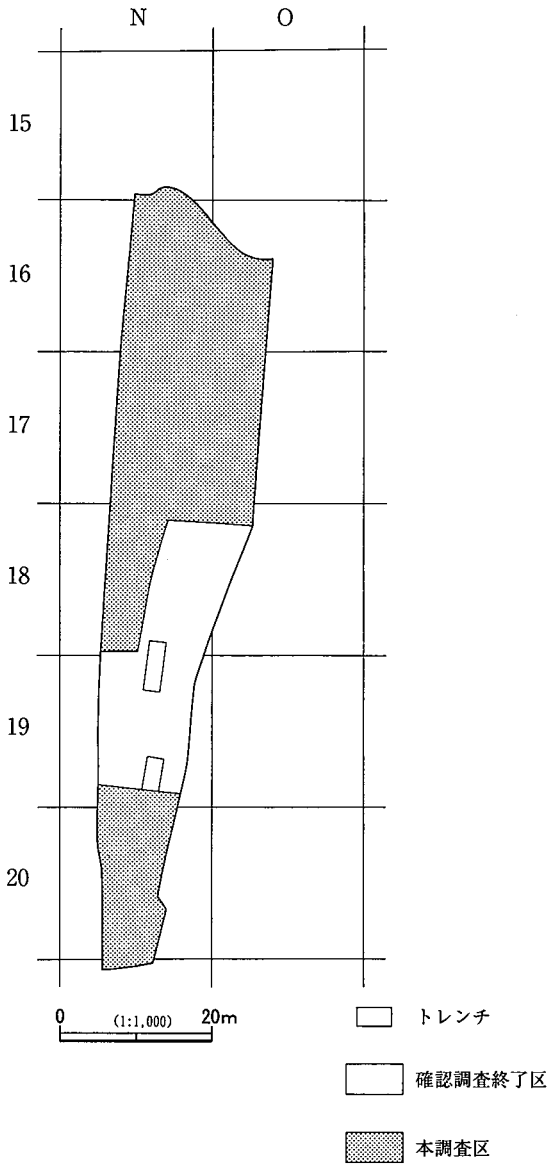
なお、調査区の中央付近は削平により、遺構の検出がみられなかったため、本調査区は分断され、Ａ区・Ｂ区の２か所となった。本調査の対象面積は1,300㎡である。

本調査は、確認調査終了後、引き続き調査を行い、平成18年11月30日に終了した。遺構名称の略号は、調査時点では掘立柱建物跡＝SB、竪穴住居跡＝SI、土坑＝SK、溝跡・方墳周溝・方形周溝墓周溝＝SD、遺物の出土した人為的なピット＝SH、井戸＝SEとしたが、整理作業では、基本的にそれらを踏襲したが、SDの略号は道路・溝跡のみの表記とした。方墳周溝墓および古墳は、略号を使用せずそれぞれ名称を付与し、調査時の略号番号は（　）内に表記した。

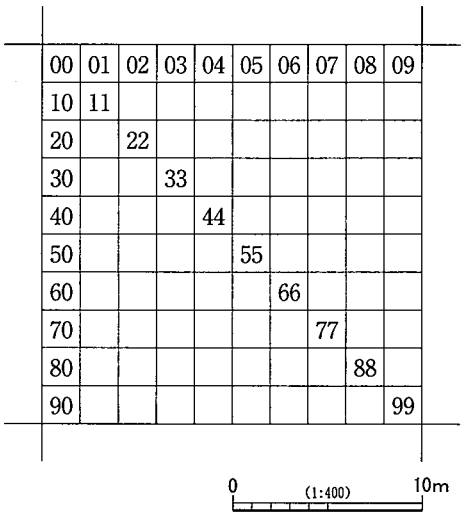
発掘調査にあたっては、公共座標（日本測地系）に基づくグリッド設定を行った。20m×20mの方眼を被せ、それを大グリッドとして、北から南へ１・２・３…、西から東にＡ・Ｂ・Ｃ…の記号を付けた。大グリッドをそれぞれ２m×２mの小グリッドに100等分した。基本的に前述の萱野遺跡と同様な表記方法である。なお、遺跡が異なるため、萱野遺跡の大グリッドとは不連続である。



第４図　萱野遺跡２次調査区トレンチ配置図



第５図　宇戸台遺跡確認・本調査区



第６図　小グリッド設定図

第２章　萱野遺跡１次調査区

第１節　概要

萱野遺跡は現在の海岸線からおよそ３㎞東に入った砂丘列に立地する。１次調査区は、館山市街地から２㎞ほど北西に入った、国道128号線と交差する地点である。前掲のように、萱野遺跡の調査区は砂丘列後背の平地を南北に縦断するように設定されている。基盤層は砂丘本体の海成砂層ではなく、平久里川ないしは支流滝川の洪水堆積起源と考えられる河砂、軟質砂岩ブロックを含むシルト層である。堆積の時期は、基盤層の中から縄文時代中期の土器が発見されていることから、この時期以降であることが判明している。付近一帯の平地は、滝川沿いが標高14m～15mと相対的に高く、それ以外は水田面から２m～３m程度高い微高地である。滝川の現河床面との比高は６m～８mで、河岸段丘面のような地形変化を示す。

１次調査区は遺跡の南端部にあたり、西側に隣接する病院敷地は、1997（平成９）年に（財）総南文化財センターが調査し、中世の所産と考えられる溝と土壙が確認された。溝からは、瓦、龍泉窯系青磁、常滑産陶器が出土している。瓦には軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦があり、平瓦のすべてに三鱗・横線・花菱・×印などの文様がある。また、軒丸瓦には三巴文・珠文、軒平瓦では瓦当に陽刻による剣頭文が認められる。これらの瓦は鎌倉極楽寺などの鎌倉時代後半の寺院から出土する瓦と類似しており、13世紀後半から14世紀前半の年代が推定される。

第２節　調査の成果（第７図、図版２）

発掘調査は、平成11年度に3,666㎡を対象として行った。600㎡のトレンチを入れて確認調査を行った結果、弥生時代～中世の流路跡が見つかり、縄文時代～中世の遺物が出土したが、住居跡や土坑などの人為的な遺構が検出されなかったため、確認調査の範囲で調査を終了した。

調査の結果、調査区北半は埋没谷が入っており、特に北西部は深い谷地形であることが分かった。一方、調査区南半では弥生時代および古代～中世前半の自然流路とそれに接続する用排水路と思われる溝を検出した。流路内には部分的に杭が打ち込まれており、その周辺では時期の特定できる土器が出土しており、弥生時代から中世にかけての館山平野低地部における土地利用状況を知る上で貴重な資料を得た。

弥生時代の流路（第８・９・10図、図版２・20）

調査区中央部で大きく蛇行した２条の流路が検出され、弥生時代の遺物がまとまって出土している。１条はSD－001・004とした流路で、さらにそれより古いと見られる流路がSD－005とした溝状遺構である。近世の水田耕作土の下に堆積する黒色粘質土下で検出され、流路内には暗褐色砂質土・黒色粘質土・黒色腐植土が砂礫層と互層を成して堆積する。

SD－005では弥生時代中期の甕の破片（21）や後期の壺（19）・鉢（20）の破片が散漫に出土した程度であるが、SD－001・004では弥生時代後期後半の壺（１・２）・高坏脚（３・４・11）・小型高坏坏部（５）・甕（６～８・14）・壺のミニチュア（10）・壺底部（12・13）がある。また、15～18・22は後期の壺の破片である。22はSD－001と重複する古代～中世の流路SD－003で出土している。

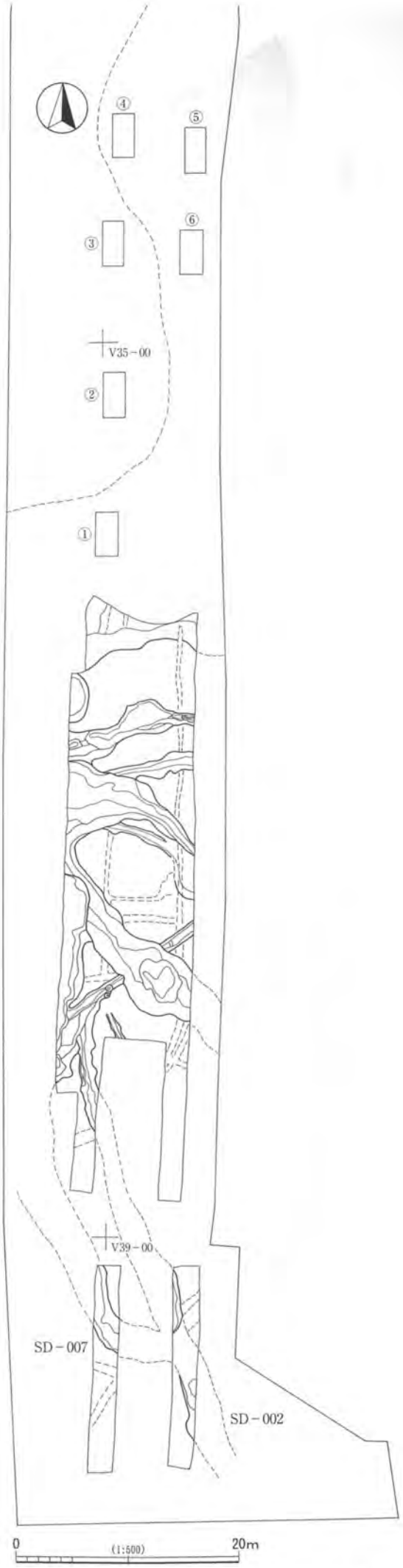
古代～中世の流路（第８・９・10図、図版２）

調査区南部で検出されたSD－002・003・007・008・009では、奈良・平安時代の土師器・須恵器のほか、中世前半の陶磁器・カワラケ・古銭・獣骨・瓦などが出土している。弥生時代の流路SD－001を切っていることから見て古代～中世にわたる流路と捉えられる。このうち、SD－002・007・008は自然流路跡と見られるが、SD－003・009はこれらに接続する用排水路と考えられ、ほぼ直交して配置されている。

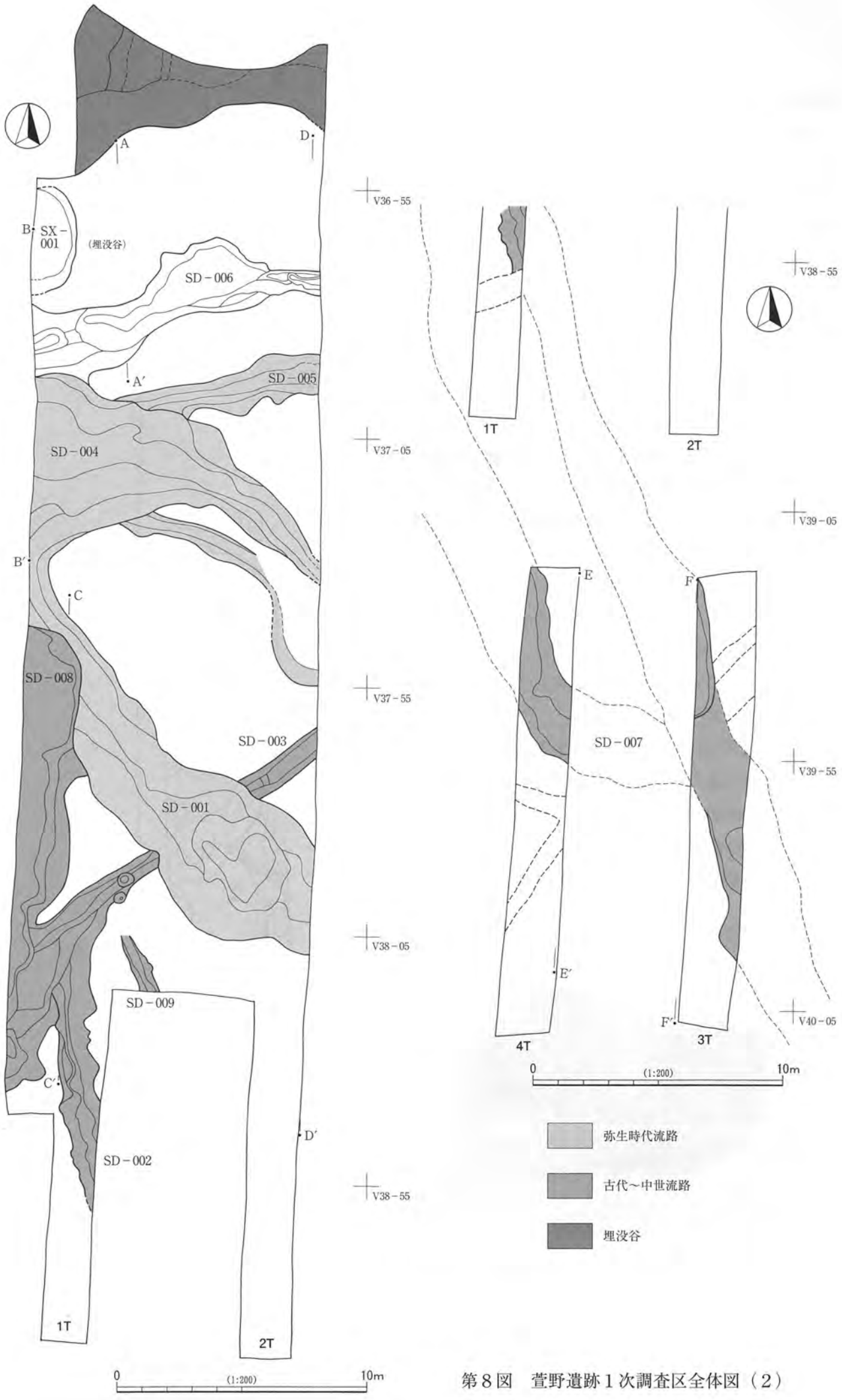
この地点では近現代の水田耕作土と近世の水田耕作土が酸化鉄沈殿層を挟んで良く残っており、中世前期の遺物を含む黒褐色粘質土層の下には暗褐色粘質土層・砂礫層・灰黒色砂層が堆積している。平面的には捉えられていないが、調査区南東の壁際では近世の溝跡も検出された。

遺物の大半は細片化し、摩滅している。図化に耐えるものはほとんど無く、SD－002から出土したカワラケ灯明皿（９）を図示するにとどまる。このほかの中世陶磁器、カワラケについては組成と型式類別を別稿にまとめている（第５章第４節）。これらは、全体として13世紀後半から14世紀後半の渥美産陶器および古瀬戸後期様式前半期の瀬戸美濃が中心である。西側に隣接した既調査区で出土した瓦の年代とも齟齬がなく、付近に鎌倉時代後半の北条得宗家と関連の深い寺院に関連する遺構が存在したものと思われる。

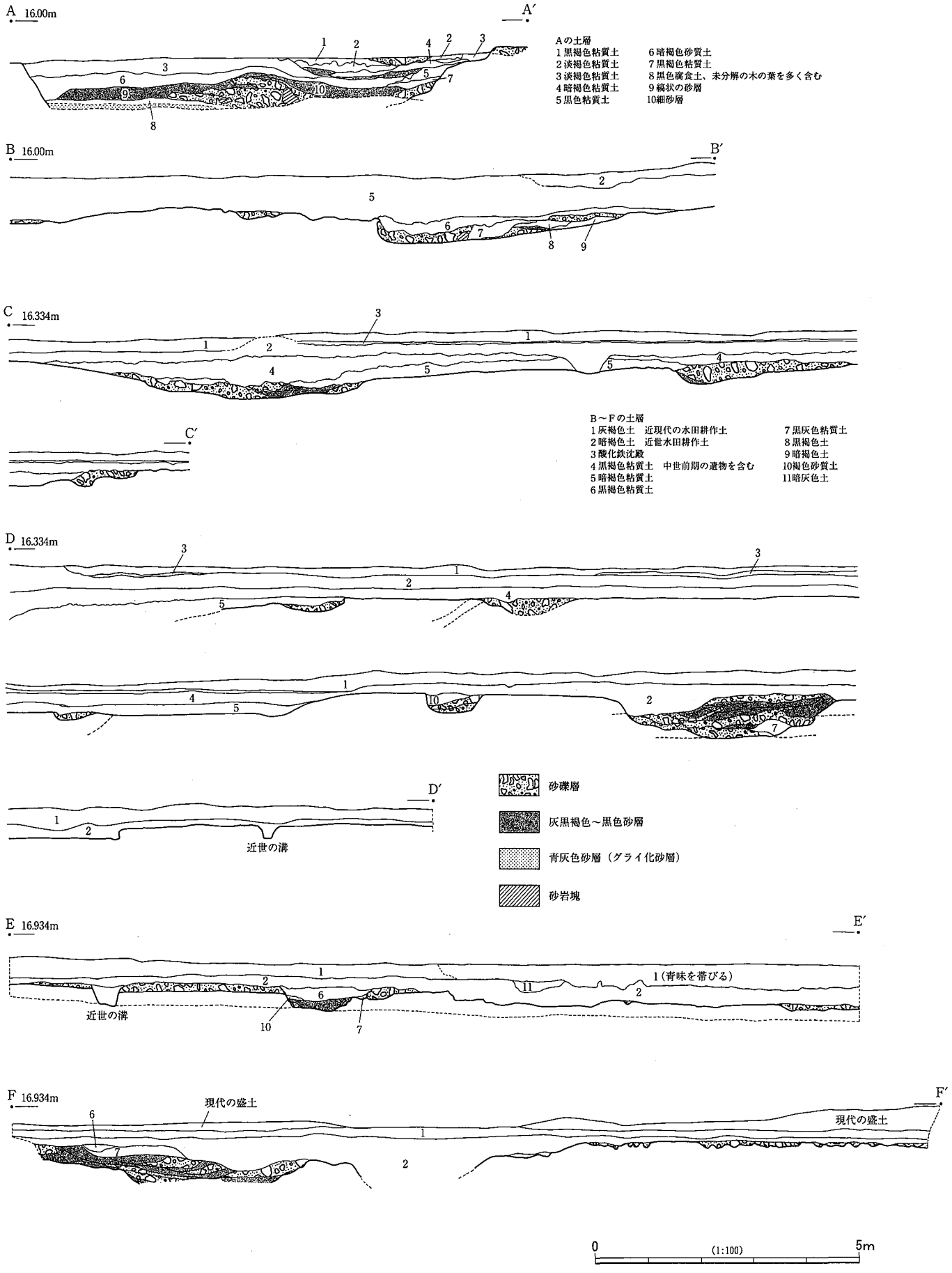
クジラの化石
グリッド③表土下1.7mの海成層（貝を含む暗褐色砂礫層）から出土



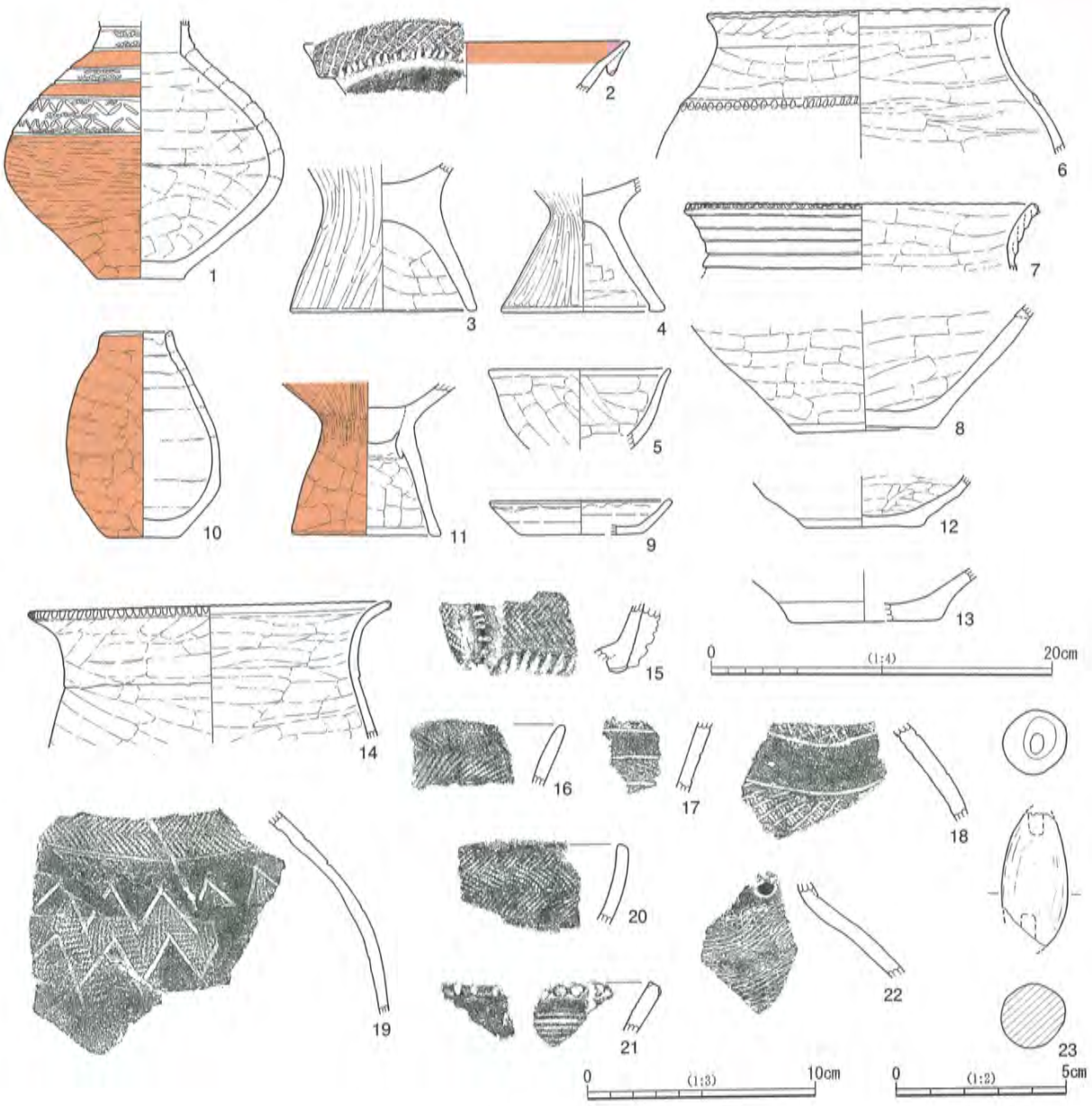
第７図　萱野遺跡１次調査区全体図（１）



第８図　萱野遺跡１次調査区全体図（２）



第９図　萱野遺跡１次調査区土層断面図



第10図　萱野遺跡１次調査区出土遺物

第３章　萱野遺跡２次調査

第１節　弥生時代

本遺跡の弥生時代の遺構は、調査区北側と中央部南寄りで検出された２条の環濠、方形周溝墓群、方墳（１号墳）の墳丘下に密集する集落跡によって特徴づけられる。古代以降の土地利用によって失われた遺構も多いが、方形周溝墓と集落の配置や環濠と集落の関係など、同時代の棲み分けが窺われる内容をもっている。

１　中期の竪穴住居

弥生時代中期の竪穴住居は調査区南部に位置する方墳１号墳の墳丘下で検出された。その他の場所では中期の住居跡は見つかっていない。これは、１号墳の墳丘が存在したことによって後世の攪乱や土地利用による削平を免れた結果と思われるが、上記のように環濠（SD－018）の北側には中期の方形周溝墓群が築かれているため、それを境に居住域と墓域が分かれていた可能性が高い。従って、調査区の南側にはさらに居住域が広がっているものと考えられる。

SI－001（第14図、図版12・73・74・78）

１号墳の墳丘下南端に位置する。弥生時代後期のSI－046と古墳時代出現期のSI－018が重複するが、竪穴住居内の遺存状態は良好である。長軸4.8m、短軸4.5mの円形竪穴住居跡で、壁の立ち上がりはほとんどなく、最も遺存のよいところで高さ25cmである。壁溝は所々、途切れている。主柱穴は４か所、中央部北寄りに炉、その対面に入り口の梯子穴が配置されている。主柱穴の内側に硬化面が広がり、生活の中心域であったことがわかる。炉の南側には長さ・幅とも21.3cm、厚さ8.0cmの炉石（７）が置かれていた。炉石は付近の海岸で採れる礫石（凝灰岩質砂岩）が用いられている。

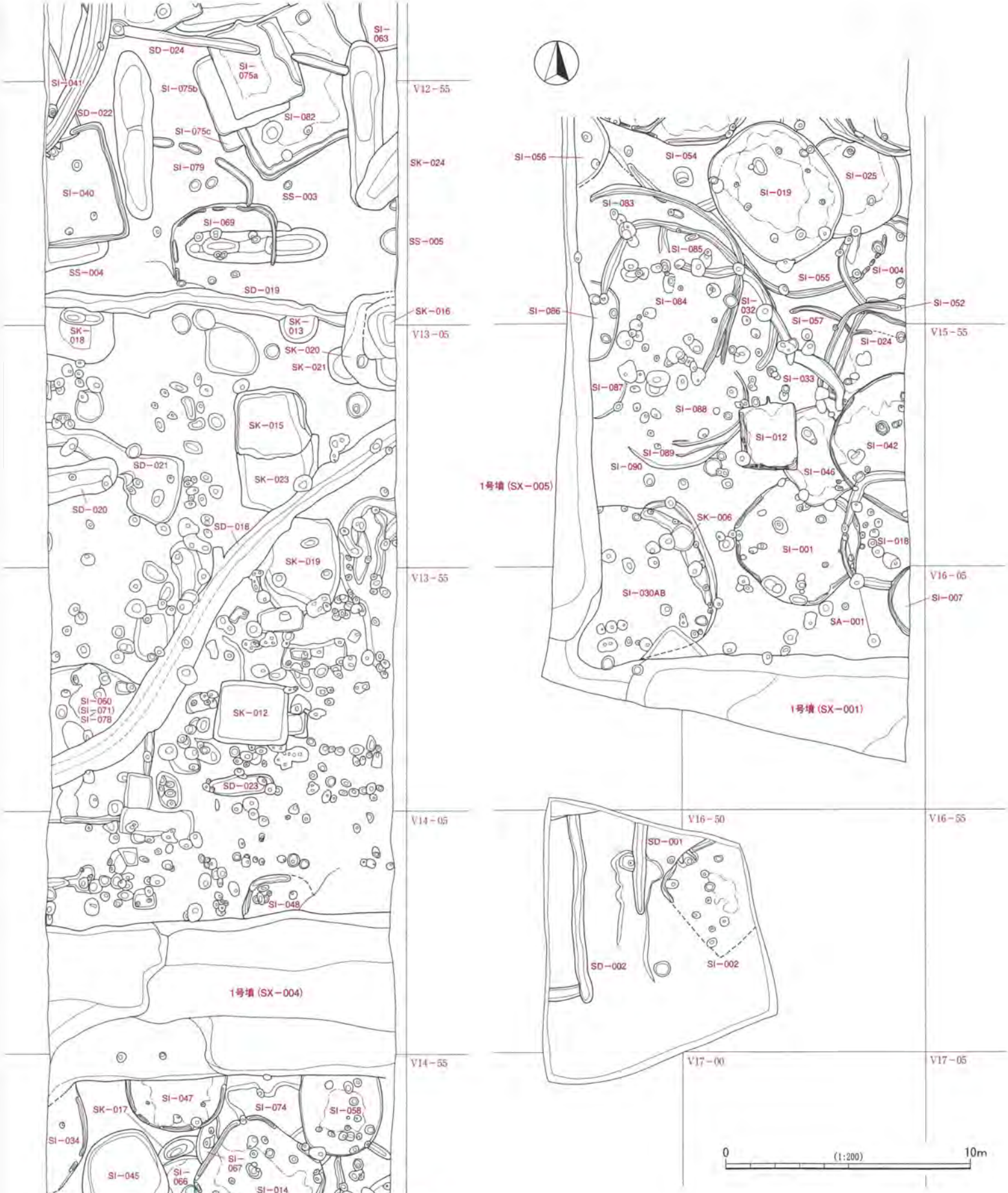
遺物（第14図、図版20）遺物には砂岩製の小型の扁平片刃石斧（９）、砂岩の砥石（８）、流文岩の砥石（10）のほか、土器の破片（１～６）が出土している。土器はいずれも小片で、１は後期の混入品の可能性もあるが、その他は中期に遡る資料である。刺突文をもつ壺口縁部（４）、幾何学模様の磨り消し縄文（５）、甕の羽状条痕文（６）は中期中頃の土器に見られる特徴である。

SI－007（第14図、図版13）

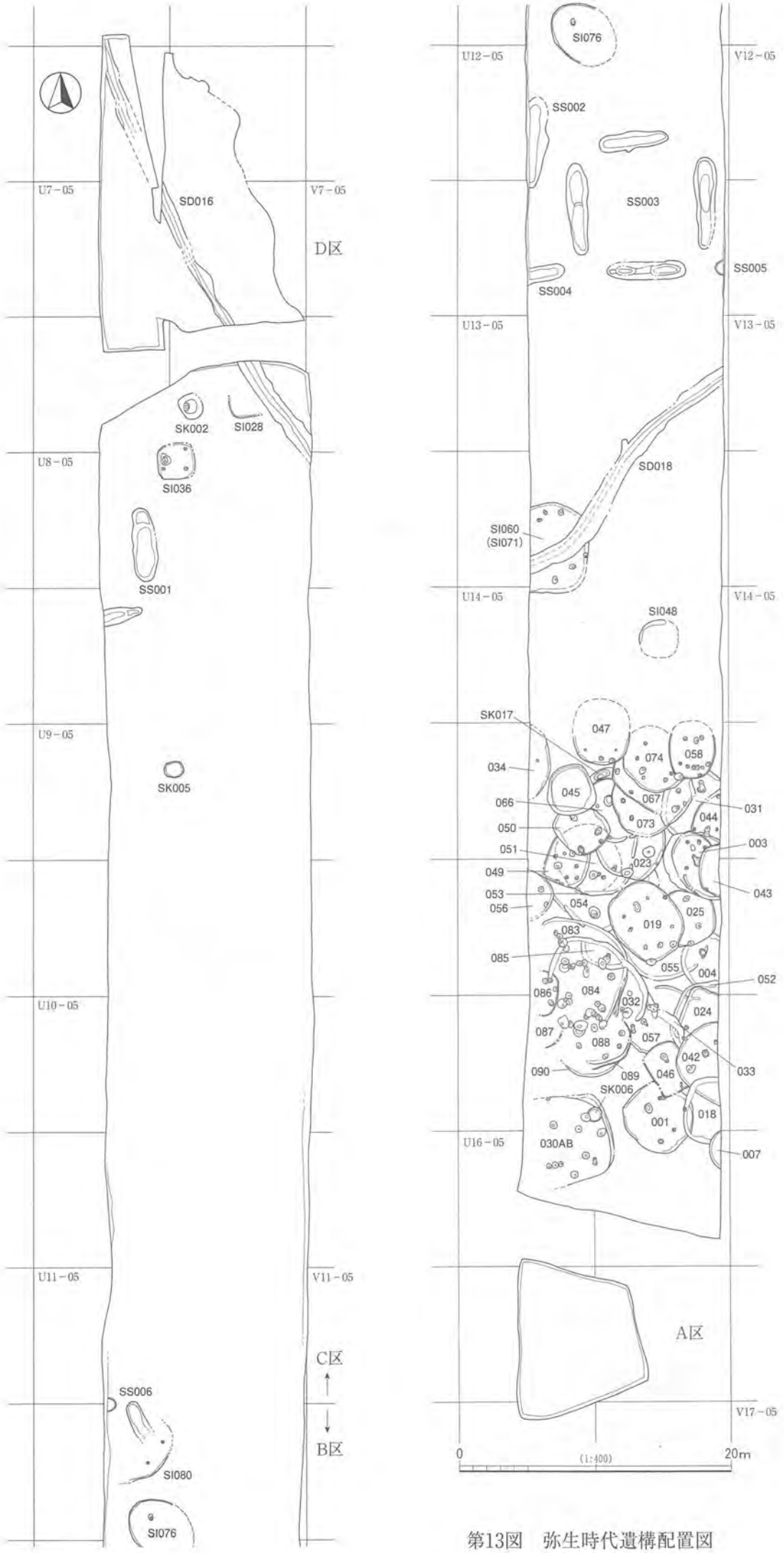
１号墳の墳丘下で検出された住居跡でSI－001の２m東に隣接する。大半が調査区外にあり、西側の一部のみが調査された。平面形は楕円形か円形と推定される。竪穴内の施設は検出されていないが、壁溝が巡ることを確認できる。覆土は焼土粒・炭化粒・炭化ブロックを含む土砂の自然堆積である。

遺物（第14図、図版21）軽石の砥石（２）・砂岩の砥石（３）と甕が１点出土している。甕は短く外反する口縁部の下端に粘土紐接合痕を残す形式で、口縁部には刻み文が施されている。中期後半の新段階に位置づけられる。

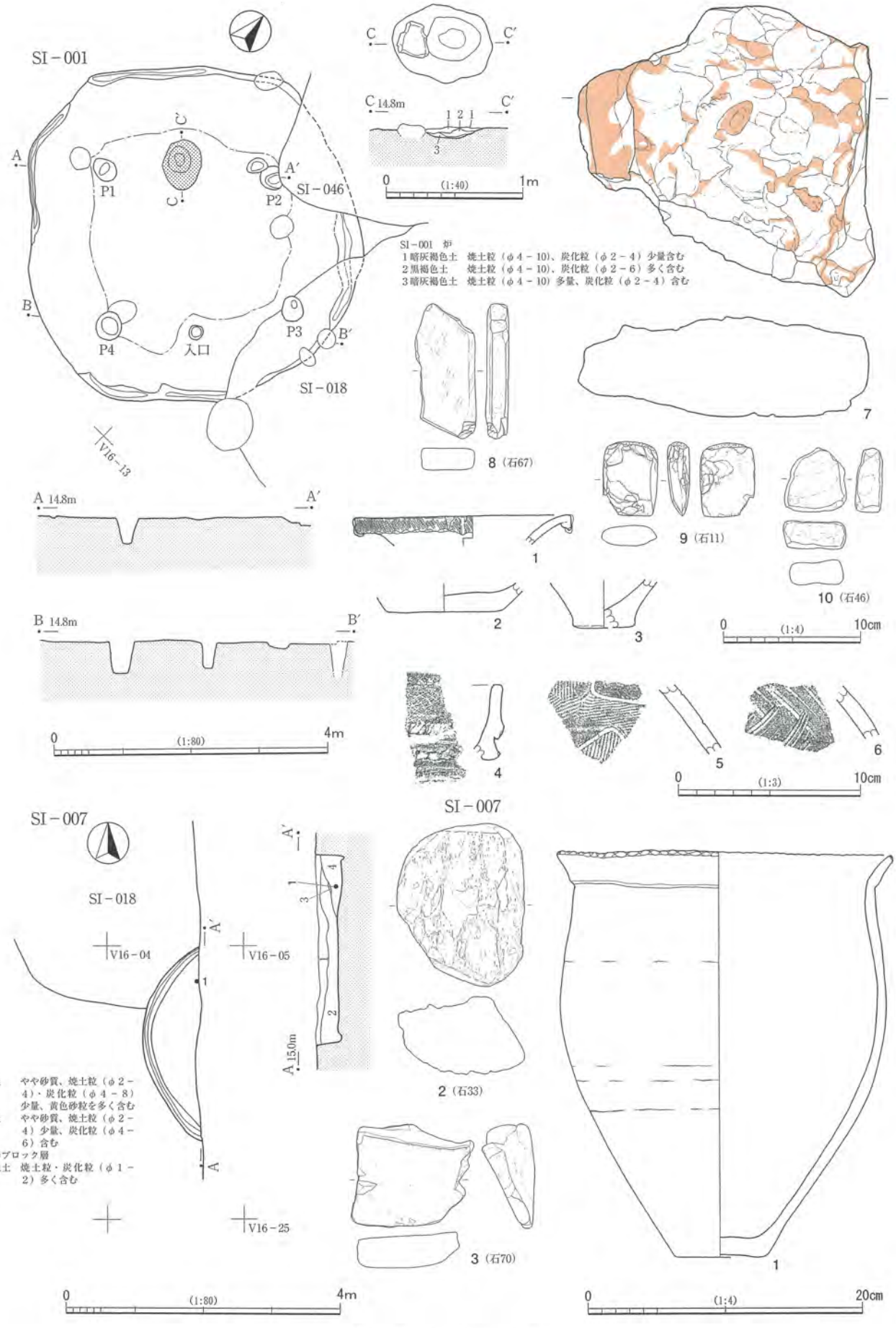
第11図　萱野遺跡２次調査区全体図（１）



第12図　萱野遺跡２次調査区全体図（２）



第13図　弥生時代遺構配置図



第14図 SI－001・007

SI－023（第15図）

1号墳の墳丘下北西寄りで検出された住居跡で、弥生時代後期のSI－049・050・053・054・073が重複する。著しい重複のため北半を欠失し、重複を免れたのは柱穴P2の周辺部に限られる。壁の立ち上がりもほとんど失われており、壁溝によって平面形や規模を知ることができた。残存部は長軸4.15m、短軸3.55m、深さ19.0cmで、円形の竪穴住居跡と推定される。主柱穴は南寄りに2基検出されたが北側は不明である。東側の柱穴は上部が大きく広がっているため、抜き取られたのであろう。北側にあったと思われる炉は遺存せず、南の壁際に入り口の梯子穴がある。遺物の遺存状況は比較的良好で、床の硬化面も広い範囲に残存している。下層の覆土は良く残っていたのであろう。

遺物（第15図、図版26・27） 床硬化面の中央部に遺存の良い遺物が多い。口縁部と肩部に羽状縄文の装飾をもつ甕（1）、波状口縁の甕（4）は全容の分かる例で、後者はほぼ完形である。床からやや浮いて出土しているものもあり、5の鉢や11・12の壺口縁は後期の遺構から混入した可能性もある。壺・鉢にS字状結節文・羽状縄文（交互斜縄文）の装飾が用いられている点、厚手の台付甕が存在することから中期後半新段階～末葉の土器群と考えられる。また、P2の北側で銅製の指輪と見られる破片が出土している。

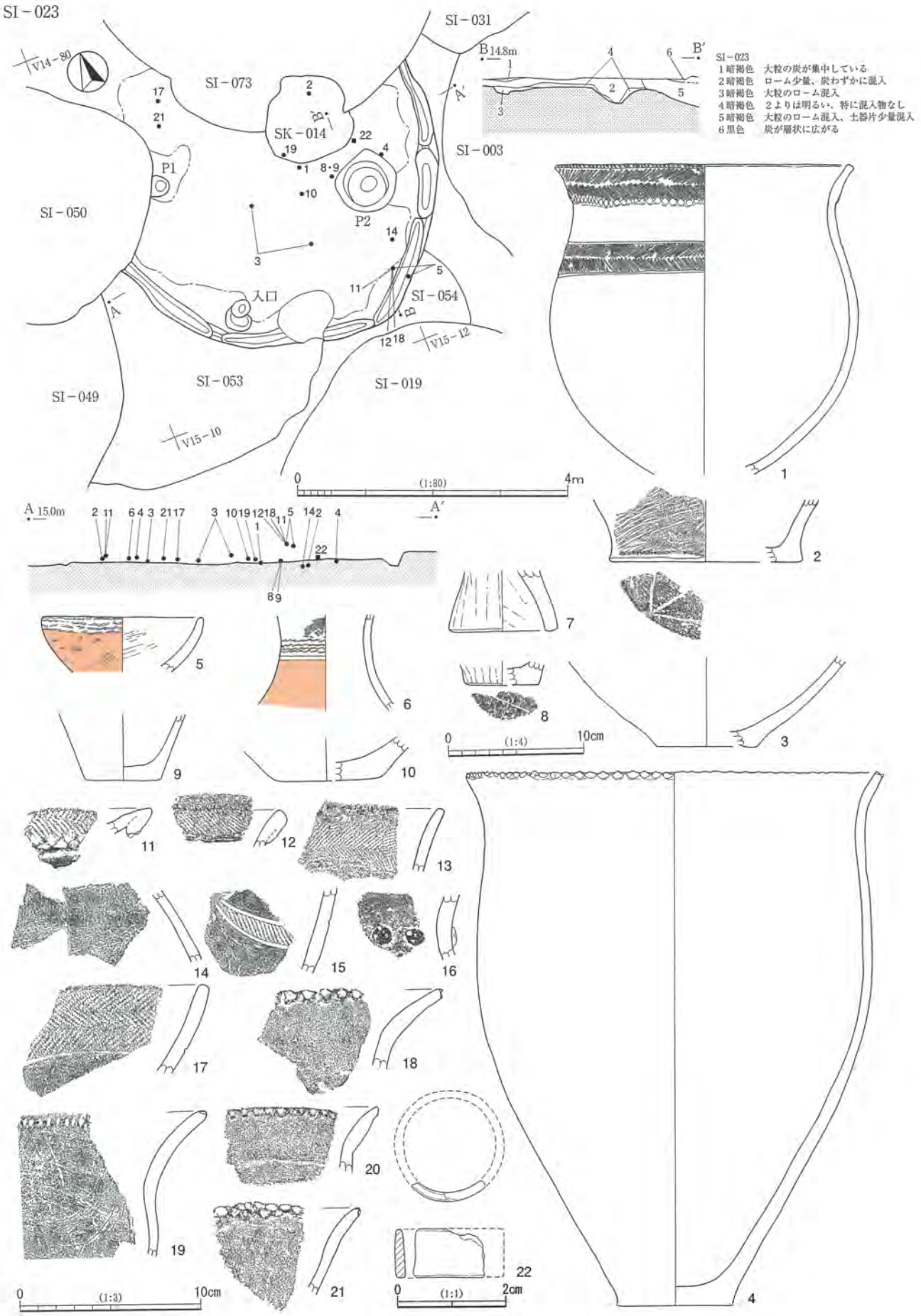
SI－031（第16図、図版26・27・75・76）

SI－023の北東に近接する。弥生時代後期のSI－003・044・058・067・073・074が重複し、さらにその上に古墳時代出現期のSI－014が築かれている。東半分はほぼ欠失し、北側コーナーも失われている。SI－023と同様、壁溝によってその範囲を知ることができた。炉が3基あり、北東の2基はSI－061・062の炉とされているが該当する竪穴住居が見当たらない。また、西に重複するSI－067も実態が明らかではない。本竪穴の炉は南西寄りのものと判断されているが、大半の炉が北寄りにあるのを見るとSI－061・062の炉が本竪穴に伴う可能性を否定できない。長軸は5.20mと確認できるが、短軸は現状で2.85mしか残存しない。深さは最も深いところで50.9cmである。主柱穴と考えられるピットは、南西の炉を本竪穴に伴うものとすると、北西部の2か所（P1・P2）が該当する。

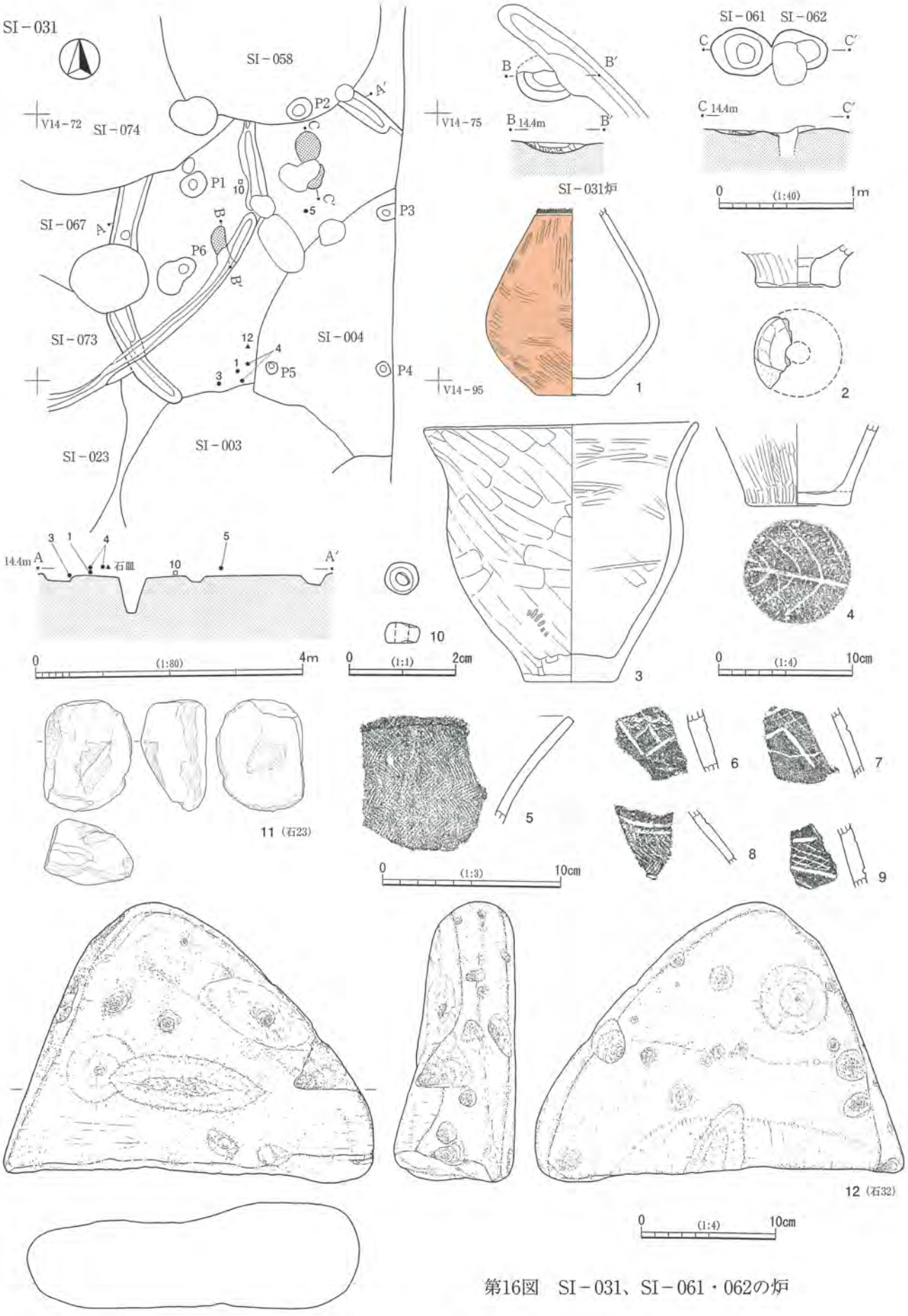
重複を免れた南側の一角に遺物がまとまって出土した。小型の長頸壺（1）・小型の甕（3）・壺底部（4）と共に石皿（12）が出土している。小型の甕はほぼ完形で、ヘラナデ仕上げであるが、底部付近に縄文の痕跡がある。他に、底部に単孔を開けた甑（2）、壺の口縁部～肩部の破片を図示した。5の壺口縁には外面全体に羽状縄文が施文され、頸部から肩部の破片には沈線区画の網目状撚糸文や羽状縄文が使われている。これらは中期後半新段階～末葉の土器群と考えられる。石皿には海蝕孔のある凝灰岩質砂岩が用いられ、凹石・台石・砥石と様々に使われている。このような形状の石皿は弥生時代の例がほとんどないため、縄文時代のものを再利用した可能性が高い。覆土内で出土した砂岩の敲石も本竪穴に伴う石器であろう。

2　後期の竪穴住居

弥生時代後期の竪穴住居も1号墳の墳丘下に集中して検出された。墳丘外では、環濠SD018と重複するSI－060、方形周溝墓群の領域で検出されたSI－076に限られ、中期の竪穴住居と同様に後世の攪乱や土地利用によってかなり削平されていると考えられる。1号墳の墳丘下の住居は重複が激しく、全容の分かる例は極めて少ない。また、主柱穴・炉などの施設の帰属が不明な例も多い。遺物の所属についても識別が


SI－023
SI－031
SI－073
SI－003
SI－050
SI－054
SI－053
SI－049
SI－019
SK－014
P1
P2
入口
V14－80
V15－12
V15－10
B 14.8m
B′
A
A′
SI－023
1 暗褐色　大粒の炭が集中している
2 暗褐色　ローム少量、炭わずかに混入
3 暗褐色　大粒のローム混入
4 暗褐色　2よりは明るい、特に混入物なし
5 暗褐色　大粒のローム混入、土器片少量混入
6 黒色　炭が層状に広がる
0 (1:80) 4m
0 (1:4) 10cm
0 (1:3) 10cm
0 (1:1) 2cm

第15図　SI－023



第16図　SI－031、SI－061・062の炉

困難な例が多く、住居の前後関係には不明な点が多い。

SI－003（第17図、図版12・15）

1号墳の墳丘下の調査区北東部に位置し、建て替えないし拡張が行われている。北側にSI－031・044、東側にSI－043が重複する。SI－031・043は本住居より古い時期のものであるが、先に発掘されたため本住居の北壁と南東部が失われている。SI－044は本住居より新しい。北西側に拡張され、炉が2基縦列している。P1・P2が拡張部の柱穴、P3～P5は当初から設置されていた柱穴と見られる。拡張後の長軸5.30m、短軸4.26m、深さ36.1cmの隅丸方形竪穴住居跡である。壁溝によると、拡張前の竪穴は長軸5m、短軸4m前後の規模であったと推定できる。

土層断面図には、周縁部床面に炭化物が多く堆積していたことが記録されており、平面図を見ると炉の周囲に焼土、竪穴の中央部東寄りに炭化物が広がっていたことがわかる。覆土は炭化粒を含む暗灰褐色～黒灰色の砂で、粘性のある土砂と記録されている。遺物の出土層位は覆土上層から下層に及んでいるが、ほとんどの遺物は床から浮いて出土し、炭化物層より上で出土している。

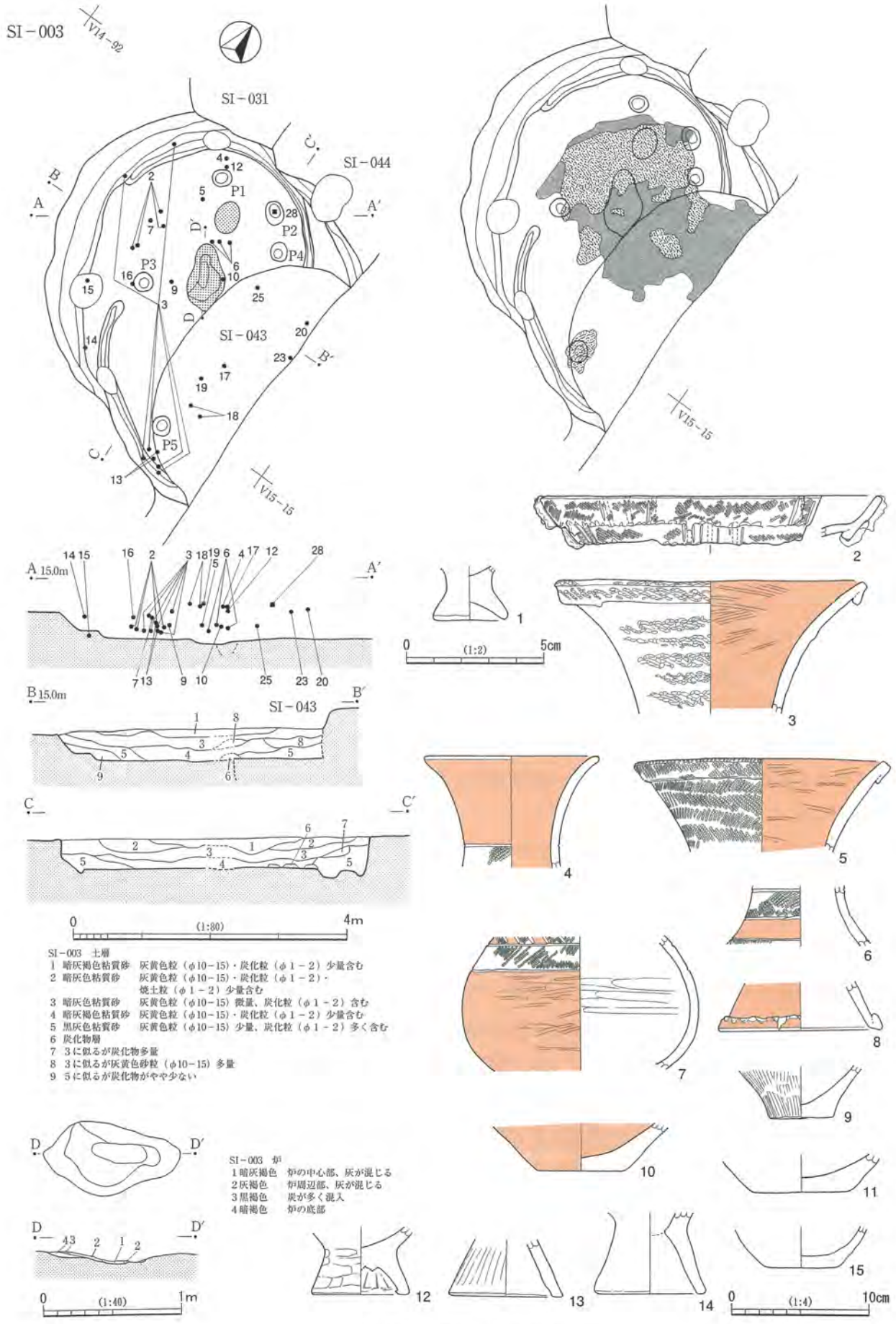
遺物（第17・18図、図版20・74・76・78） 遺物は全般に遺存が悪く、全容の分かるものはない。壺類が多く、新古の特徴をもつものが混在している。最も新しいと考えられるのは2段の文様帯をもつ口縁部（2）である。板状の粘土紐を高く立ち上げて内湾する有段口縁をつくり、さらに外面には粘土紐によって段を区画し、各段に3本一組の棒状浮文を5単位ずつ交互に配置している。口縁内面の立ち上がりが明瞭な19・21や球形化した胴部をもつ7、脚端を内側に折り込んだ台付甕脚もこの時期のものであろう。最も多いのは、多条の縄文帯を用いた壺である。折り返し状の口縁部に狭い文様帯をもち、口頸部には多縄文帯とS字状結節文帯をもつものがある。沈線区画に磨り消し縄文を充填した壺類や鉢類、脚が直線的に開く台付甕もほぼ同時期の土器群で、上記の土器群より先行するといえよう。さらに、直口の小型壺が先行すると見られる。これらは後期初頭から後期後半にわたる土器群で、最も新しい土器が本住居に伴うものといえよう。

ほかに、P2の上層で銅釧の破片（28）が出土している。また、覆土内の遺物に流紋岩（29）・凝灰岩（30）・砂岩（31・32）の砥石がある。

SI－004（第18図、図版12）

1号墳の墳丘下の調査区東端に位置し、北側にSI－025、西側にSI－055、南西にSI－025・054が重複する。東側の約1/4は調査区外にある。現状で長軸4.36m、短軸3.15m、深さ9.2cmの楕円形竪穴住居である。主柱穴は検出されておらず、竪穴の北寄りに炉がある。幅20cm前後の幅広い壁溝がめぐっているが、壁の立ち上がりは5cmに満たない。また、壁溝の内側にさらに幅の広い溝が記録されており、この周囲で遺物が出土している。北側と南側の広い範囲で炭化物が分布し、北の壁際には焼土ブロックも見られる。

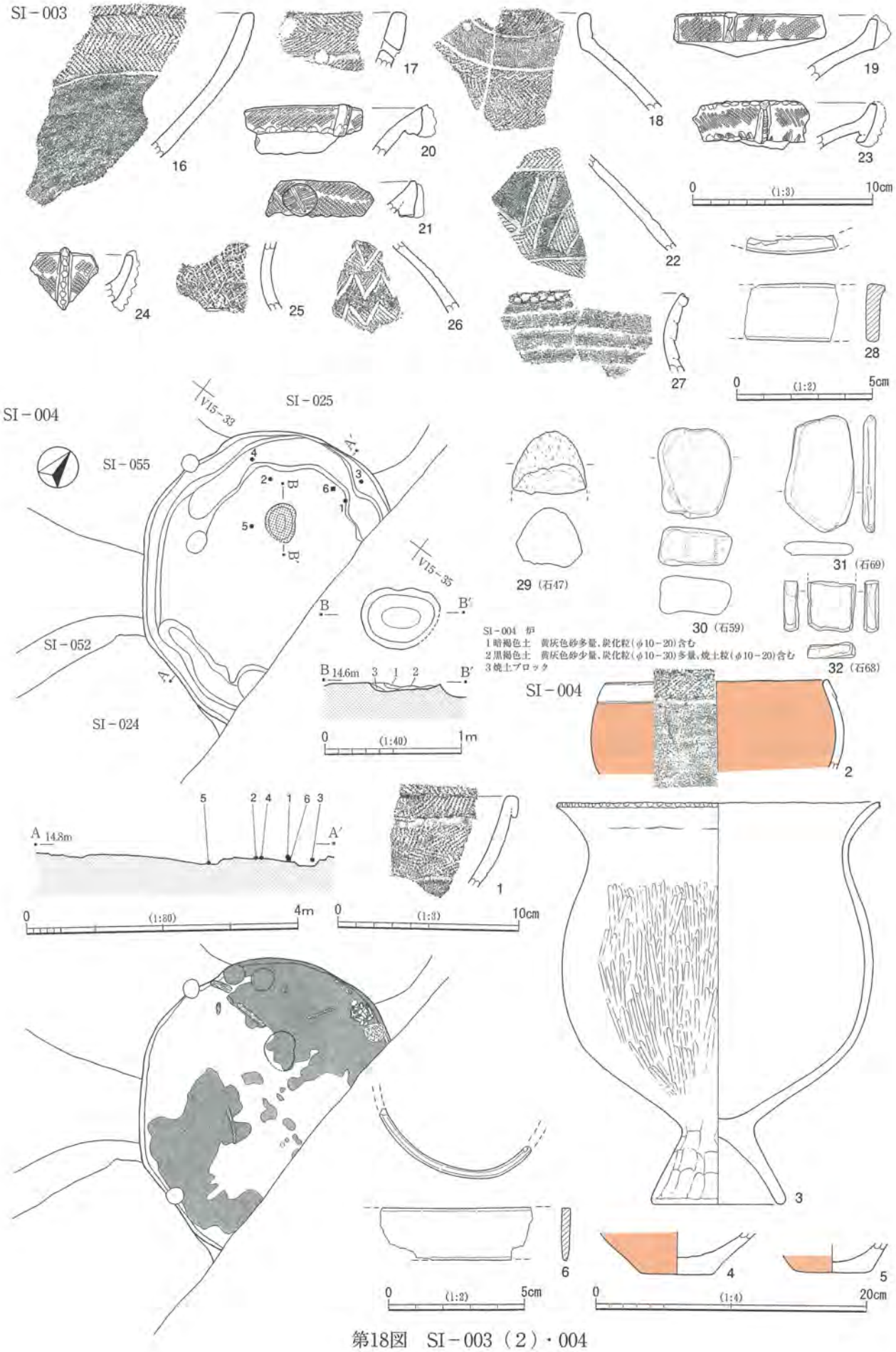
遺物（第18図、図版20） 北の壁際で出土した台付甕（3）が最も遺存がよく、約90％が残る。これを指標に本竪穴に伴うと見られる遺物を図示した。口縁部に縄文帯をもつ鉢が2点あり、いずれも口縁端部に縄文をもつ。他に赤彩された壺底部が2点ある。また、北側の溝付近で板状銅釧の破片（6）が出土している。



SI－003　土層
1　暗灰褐色粘質砂　灰黄色粒（φ10－15）・炭化粒（φ1－2）少量含む
2　暗灰色粘質砂　灰黄色粒（φ10－15）・炭化粒（φ1－2）・焼土粒（φ1－2）少量含む
3　暗灰色粘質砂　灰黄色粒（φ10－15）微量、炭化粒（φ1－2）含む
4　暗灰褐色粘質砂　灰黄色粒（φ10－15）・炭化粒（φ1－2）少量含む
5　黒灰色粘質砂　灰黄色粒（φ10－15）少量、炭化粒（φ1－2）多く含む
6　炭化物層
7　3に似るが炭化物多量
8　3に似るが灰黄色砂粒（φ10－15）多量
9　5に似るが炭化物がやや少ない

SI－003　炉
1暗灰褐色　炉の中心部、灰が混じる
2灰褐色　炉周辺部、灰が混じる
3黒褐色　炭が多く混入
4暗褐色　炉の底部

第17図　SI－003（1）



第18図　SI－003（2）・004

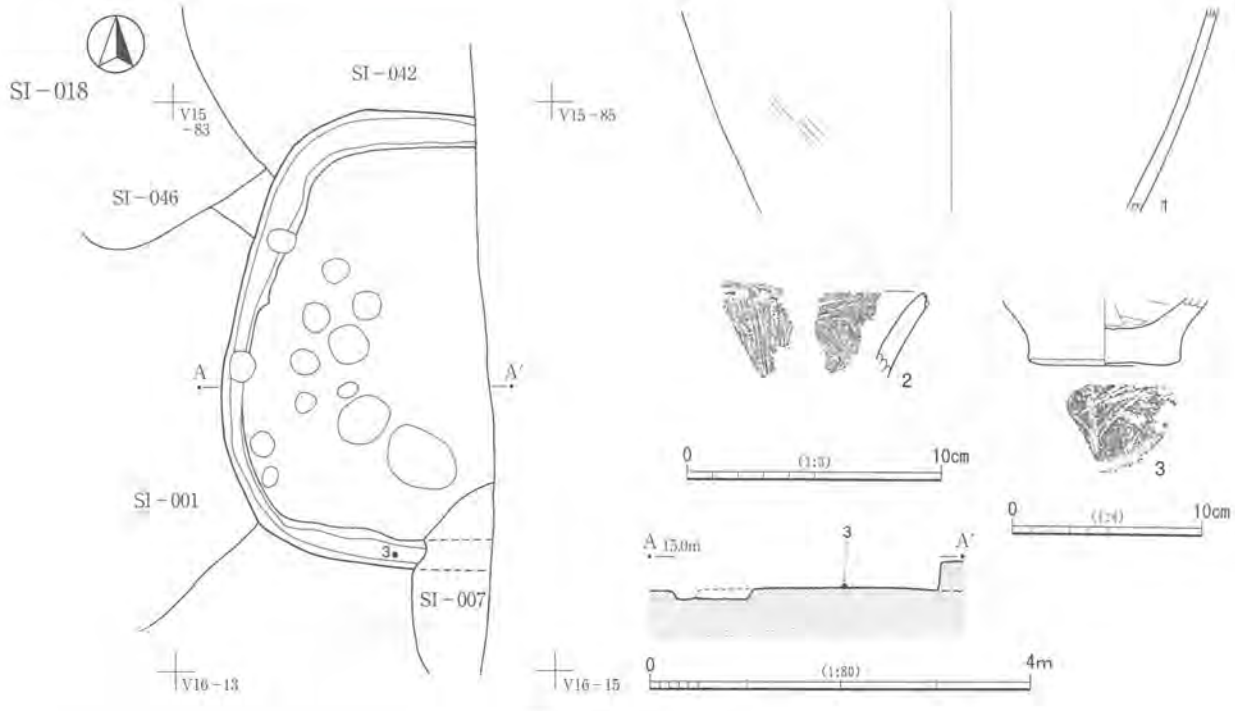
SI－018（第19図、図版14・23）

1号墳の墳丘下の調査区南東隅に位置し、東側の半分は調査区外にある。北側にSI－042・046、西側にSI－001、南東にSI－007が重複し、これらより新しく築かれたことが記録されている。長軸4.65m規模の隅丸方形竪穴住居である。著しく削平を受けており、竪穴の深さは7.8cmにとどまる。壁際には幅20cm～43cmにおよぶ幅広い壁溝がめぐるが、主柱穴、炉などの施設は検出されていない。南側の壁溝で壺の底部が出土している。また、覆土から甕の胴下半（1）と口縁部（2）の破片が出土した。甕の破片は中期に遡るもので、重複する中期の住居跡SI－001・007からの混入品と考えられる。

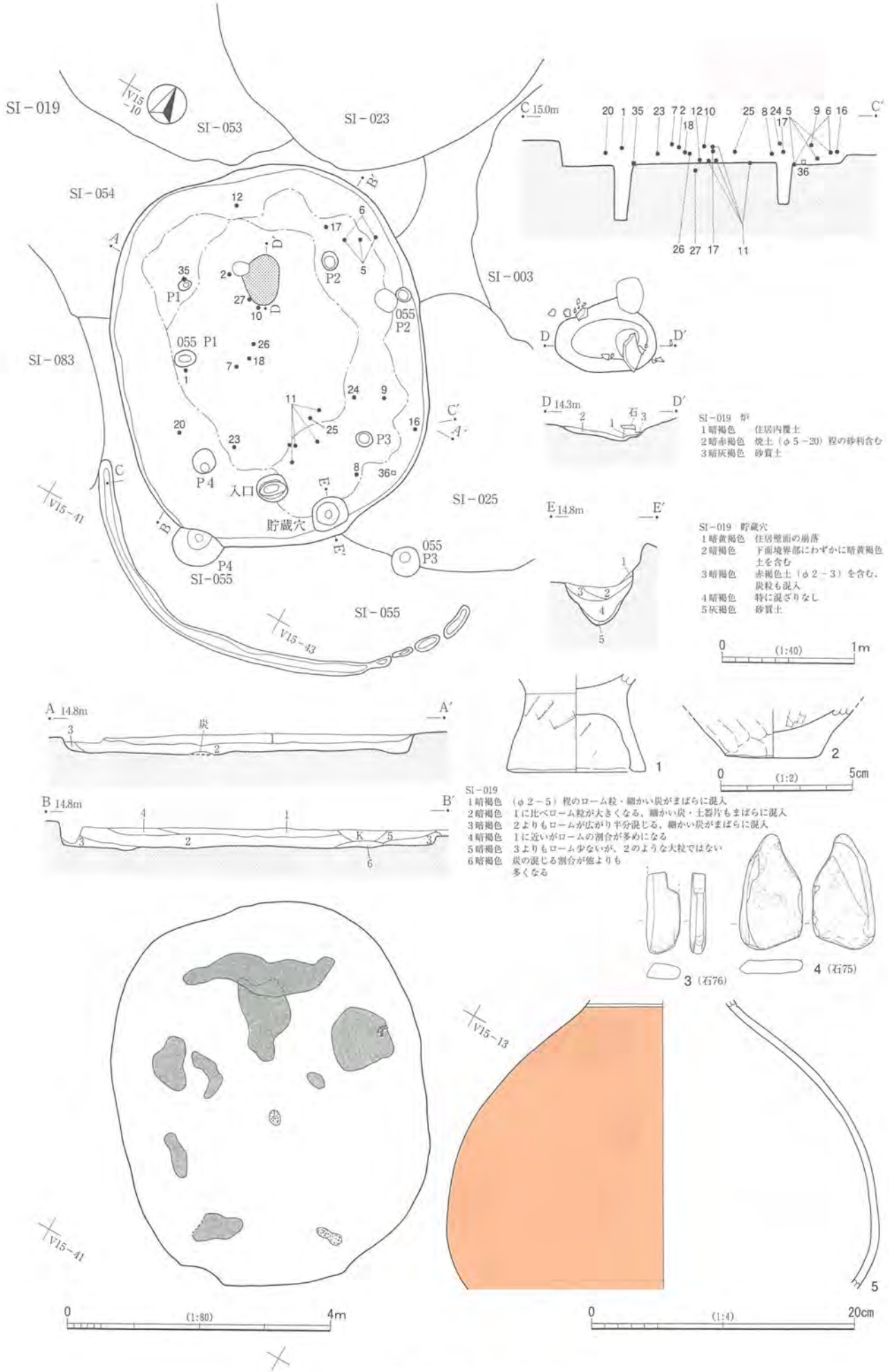
SI－019（第20図、図版14）

1号墳の墳丘下調査区の中央部に位置する。北側にSI－023・053・054、東側にSI－025、南側にSI－055が重複するが、ほぼ全容が残る希有な例である。長軸5.50m、短軸4.80m、深さ35.8cmの楕円形竪穴住居跡である。主柱穴は4本、北寄りに炉が配置され、炉の対面に入り口の梯子穴、南東の壁際に貯蔵穴がある。床の硬化面が広範囲に残り、特に主柱穴の内側に顕著である。炉の北端には板状の炉石が置かれていた。竪穴内にはローム粒・炭化粒を含む暗褐色土がほぼ水平に堆積し、北側を中心に炭化物が分布する。

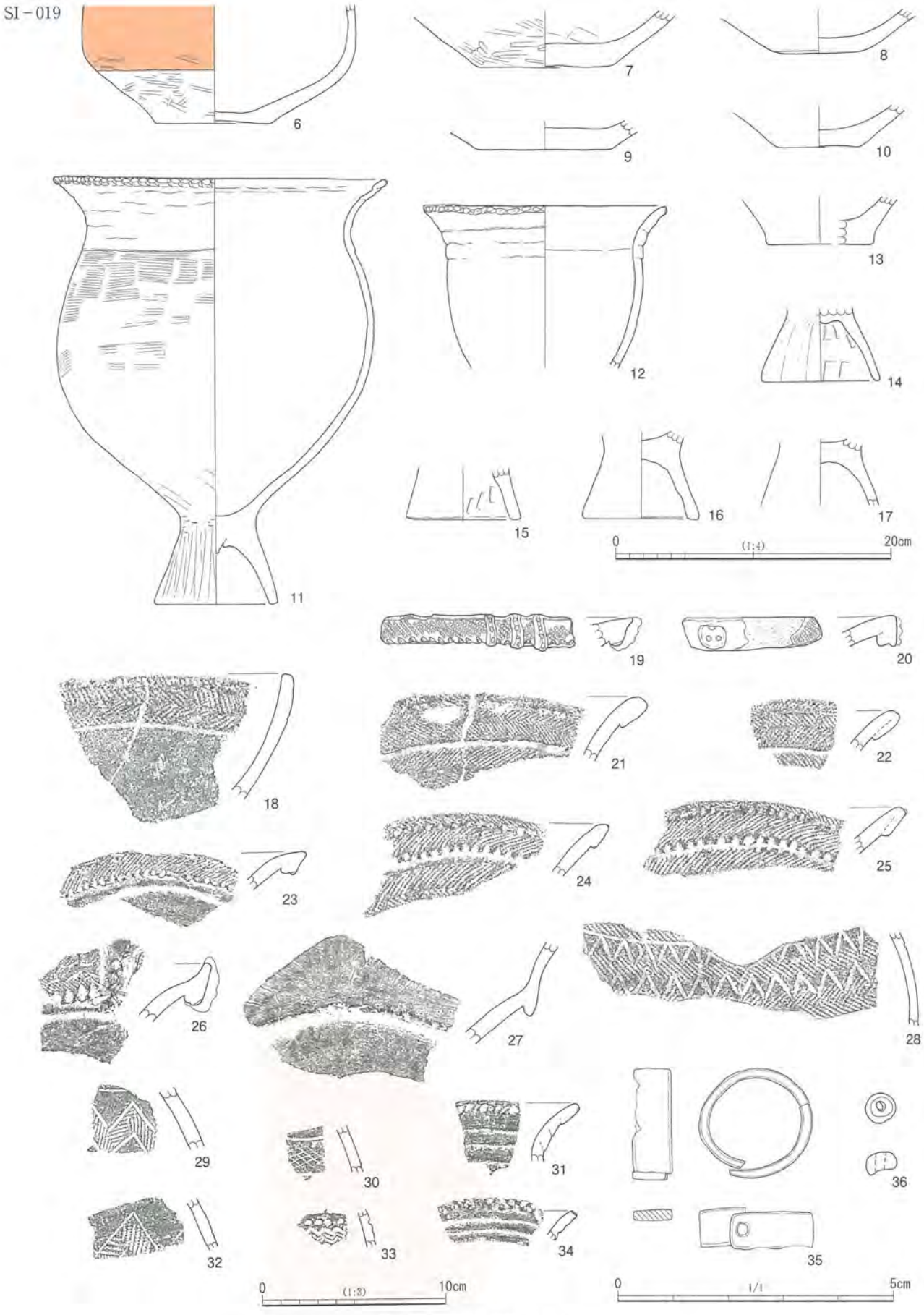
遺物（第20・21図、図版25・78）　遺物は竪穴内全域で出土しているが、床面直上で出土したものは少なく、壺（5・6）・台付甕（11・12・14）、青銅製の指輪（35）、ガラス小玉（36）に限られる。壺は2点とも胴部下半に最大径をもつ下ぶくれの器形が特徴である。台付甕は、刻みによる波状口縁と多条の粘土紐積み上げ痕をもつ在来の平底甕に脚台が付いた形式である。11に見られる無花果形の胴部と外面のハケ調整は、S字状口縁台付甕の影響を受けた後期後半以降の特徴である。他の掲載遺物は、ミニチュア土器（1・2）・砥石（3・4）も含めて覆土から出土し、遺存の悪いものが多い。それらの遺物については重複する住居跡から混入した可能性もある。



第19図　SI－018



第20図　SI－019（1）・055


SI－019
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
0 (1:4) 20cm
19
20
18
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0 (1:3) 10cm
0 1/1 5cm

第21図　SI－019（2）

SI－024（第22図、図版14）

1号墳の墳丘下調査区の南東部に位置し、SI－052の床下にすっぽり嵌って検出された。北側にはSI－004、南側にSI－042が重複する。土層断面図（C－C′）を見ると、SI－042が最も古く、次いで024→004→052の順に築かれたことが分かる。竪穴内の施設は壁溝と根太痕の一部のみで、炉・主柱穴は検出されていない。床には硬化面が残り、遺物も出土していることから床面の遺存状態は良好で、諸施設は元々竪穴内になかった可能性が高い。床面の遺物は特に甕類の遺存が良好である。

遺物（第22図、図版26・27・74） 台付甕が4個体あり、口頸部に多条の粘土紐接合痕をもつ大小の例が確認できる。SI－042の台付甕と比較すると、脚台の接合方法が異なる。SI－042例（4）では底部にほぞを作り出して脚台に嵌め込んでいるのに対し、本跡の例（1・4・6）では脚台に甕本体を積み上げ底部の粘土円板を嵌めて接合している。この接合方法はSI－004でも用いられており、より新しい技法といえる。その他の土器は断片的な資料が多い。壺類は口縁部に羽状の縄文帯をもち、棒状浮文をもつ例（3）がある。また、覆土内から流紋岩の砥石（15）が出土している。

SI－025（第23図）

1号墳の墳丘下調査区の中央部に位置し、東側をSI－019に切られる。北側にはSI－003、南側にSI－004・055が重複する。遺構の記録から見たSI－003・004・055との前後関係は微妙で、土層図もないため判然としない。北側の壁寄りに炉があり、中央部には硬化面が広がる。南東に柱穴様のピットが1基検出されている他は柱穴がなく、主柱穴が竪穴外にあったことも考えられる。覆土の上層に炭化物の集中が見られ、中央部にはかなり大粒のローム粒を含む暗褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。

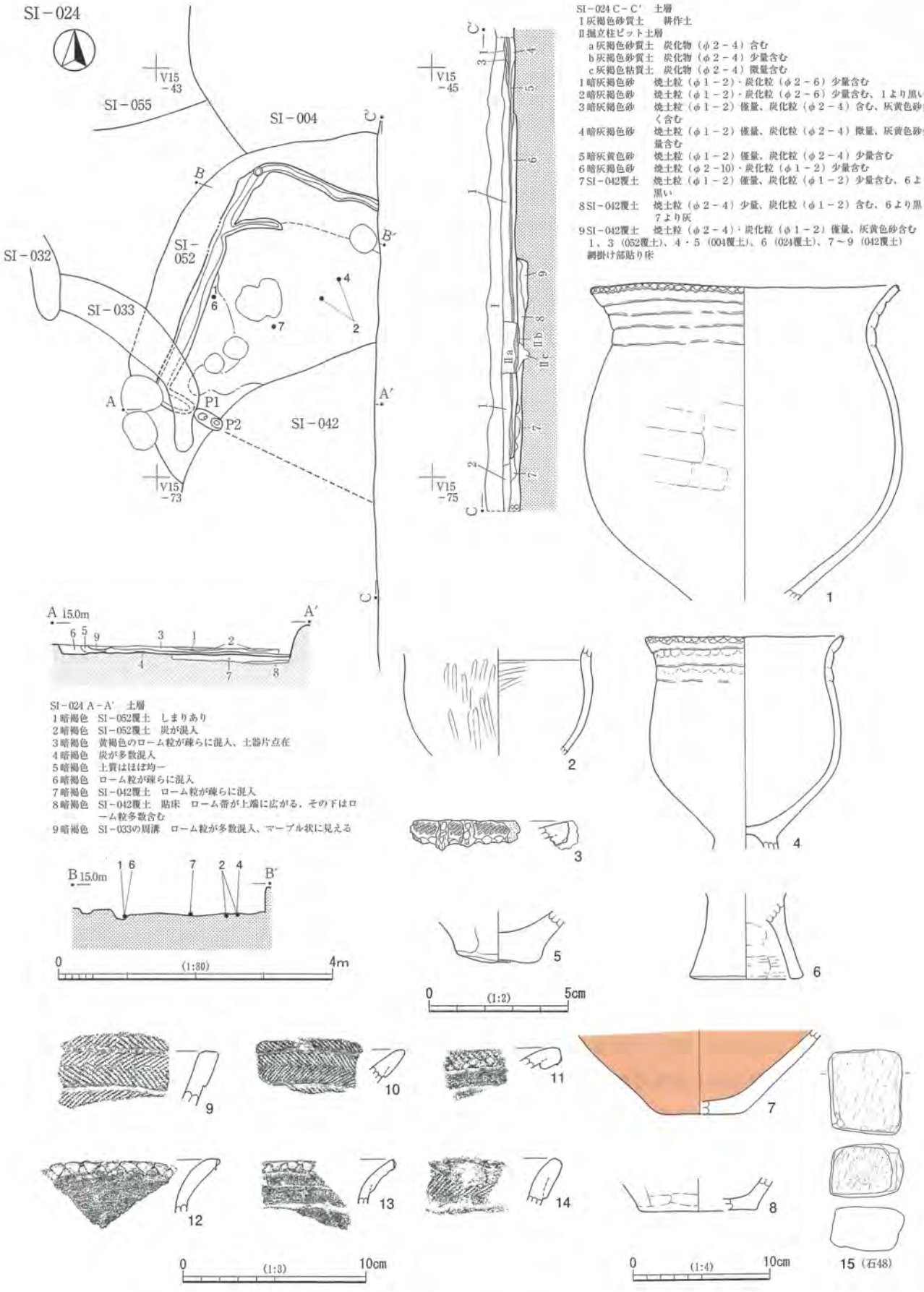
遺物（第23図、図版26） 遺物は少なく、いずれも小片である。台付甕の脚部が2点出土していること、中期に遡る遺物がないことから後期の遺構と判断した。他に断片的な資料であるが壺底部（1・2）、鉢（5・6）、壺口縁（7）、甕口縁（8～11）がある。鉢の口縁部には羽状の縄文帯（5）、網目状撚糸文帯（6）が施されている。

SI－028（第81図、図版15）

C区の北縁のV7－72～83グリッドに位置する。1辺2.20mの小規模な隅丸方形の竪穴である。奈良・平安時代のSI－037、古墳時代後期のSI－017・039と重複している。また、環濠SD－016とも重複し、SD－016が先行して発掘されたため竪穴の東側を失っている。東壁と南壁の一部に壁溝があり、南壁溝の中で小ピットが検出された。柱穴・炉などの施設は検出されていない。覆土からは重複するSI－037のものと思われる土師器甕底部と須恵器蓋（第106図、図版26）が出土しているが、本跡の時期を示す遺物はないため竪穴の形態から弥生後期の遺構に含めた。なお、本跡の図はSI－039の図に組み込んでいる。

SI－030A・B（第24図）

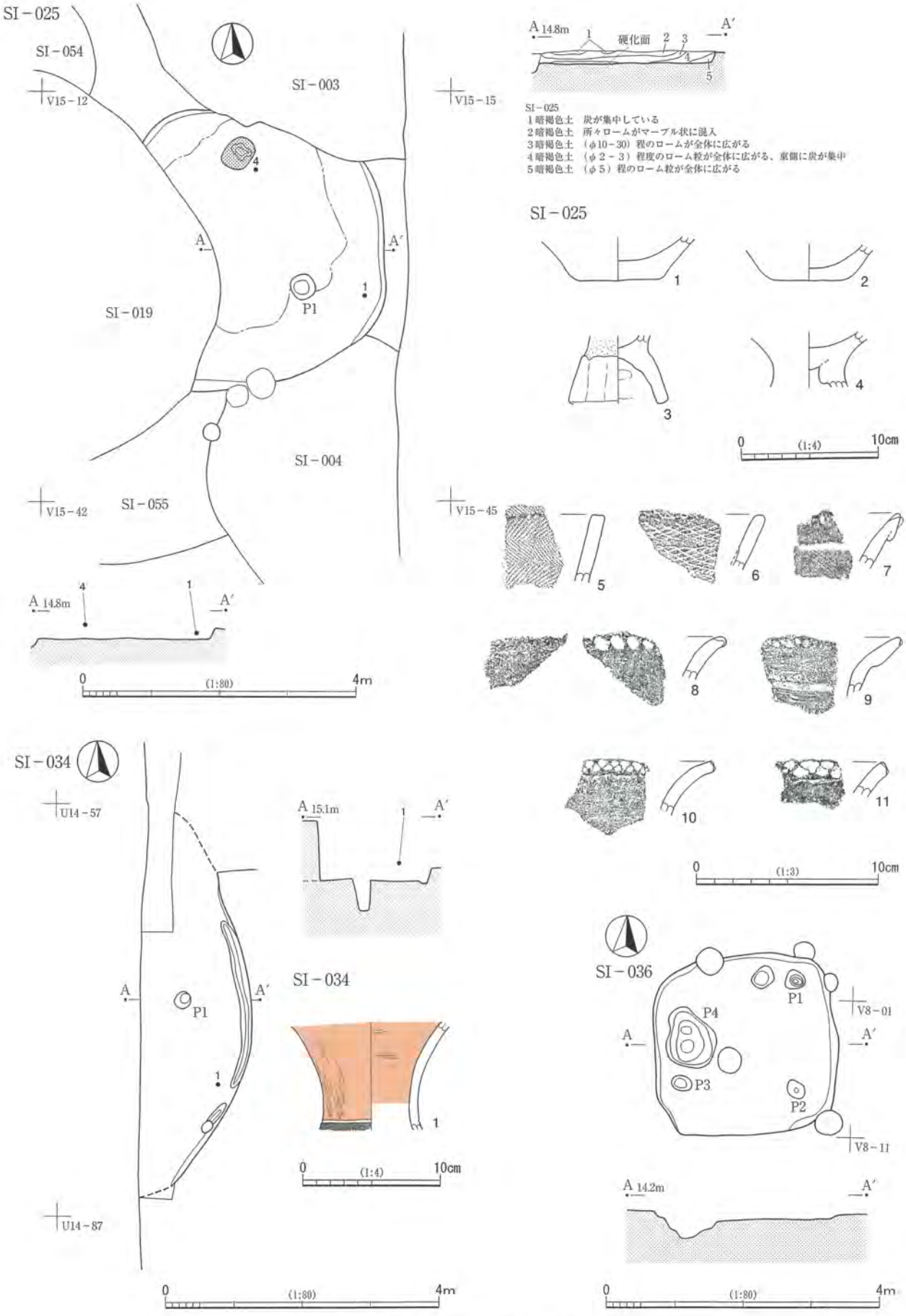
1号墳の墳丘下にあり、墳丘の南西コーナーに位置する。SI－034と同様に1号墳北周溝（SX－004）の掘削によって大きく削平され、西側が失われている。やや位置をずらして建て替えられており、壁溝の検出状況などから030Aが先行すると考えられる。030Aは隅丸方形に近いプランで、主軸をほぼ南北に置



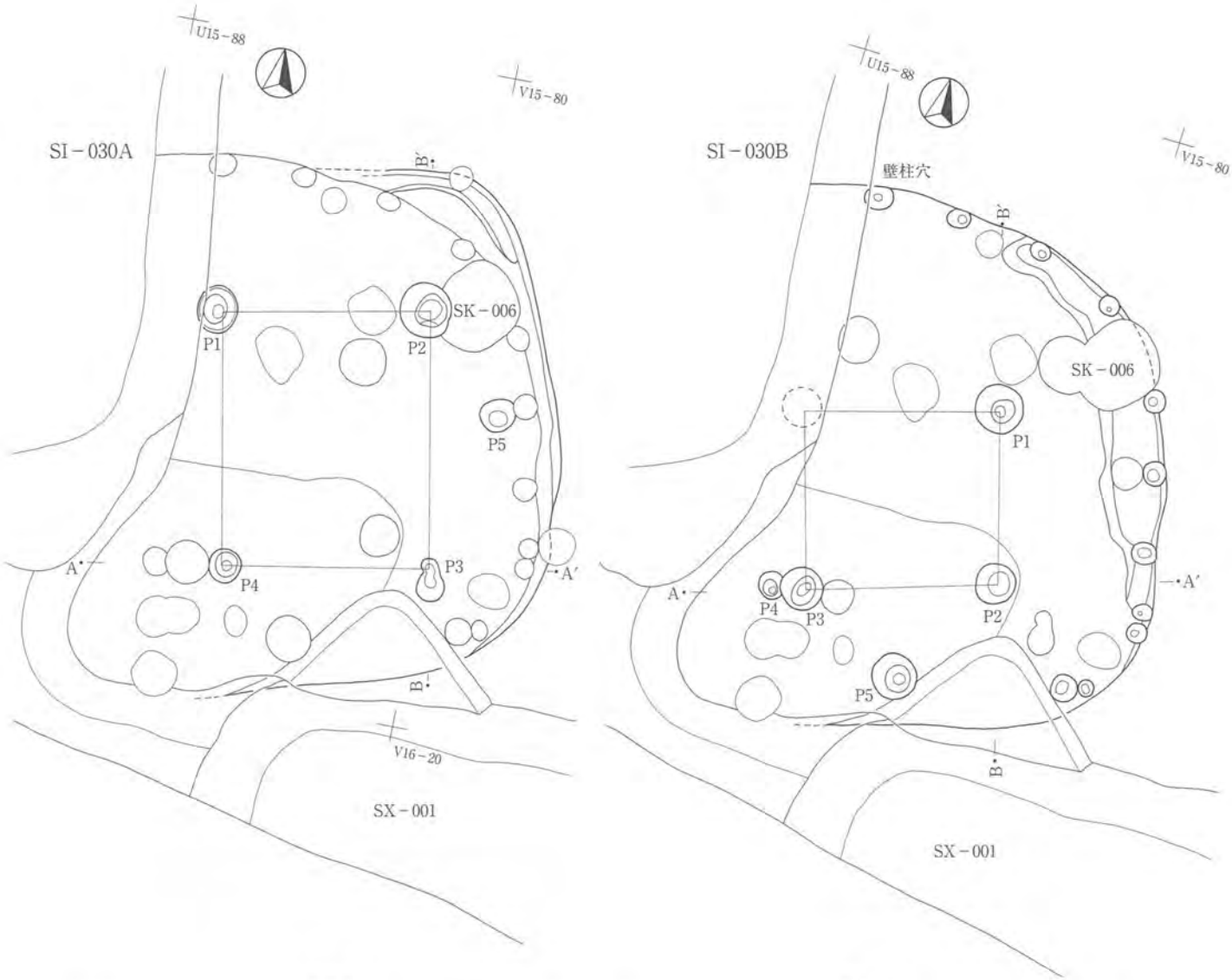
SI－024 A－A′　土層
1 暗褐色　SI－052覆土　しまりあり
2 暗褐色　SI－052覆土　炭が混入
3 暗褐色　黄褐色のローム粒が疎らに混入、土器片点在
4 暗褐色　炭が多数混入
5 暗褐色　土質はほぼ均一
6 暗褐色　ローム粒が疎らに混入
7 暗褐色　SI－042覆土　ローム粒が疎らに混入
8 暗褐色　SI－042覆土　貼床　ローム帯が上端に広がる．その下はローム粒多数含む
9 暗褐色　SI－033の周溝　ローム粒が多数混入、マーブル状に見える

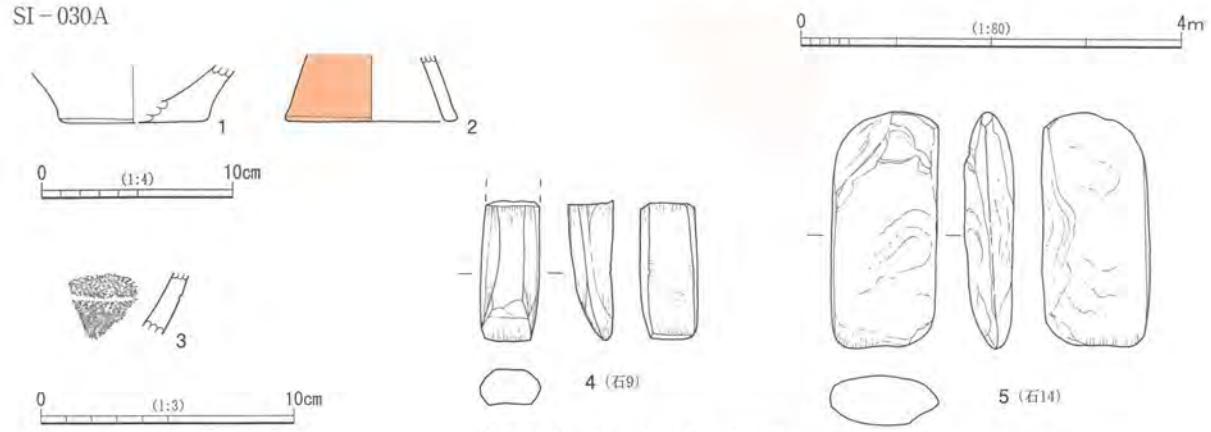
SI－024 C－C′　土層
Ⅰ灰褐色砂質土　耕作土
Ⅱ掘立柱ピット土層
　a灰褐色砂質土　炭化物（φ2－4）含む
　b灰褐色砂質土　炭化物（φ2－4）少量含む
　c灰褐色粘質土　炭化物（φ2－4）微量含む
1 暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ2－6）少量含む
2 暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ2－6）少量含む、1より黒い
3 暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ2－4）含む、灰黄色砂多く含む
4 暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ2－4）微量、灰黄色砂少量含む
5 暗灰黄色砂　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ2－4）少量含む
6 暗灰褐色砂　焼土粒（φ2－10）・炭化粒（φ1－2）少量含む
7 SI－042覆土　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ1－2）少量含む、6より黒い
8 SI－042覆土　焼土粒（φ2－4）少量、炭化粒（φ1－2）含む、6より黒く7より灰
9 SI－042覆土　焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ1－2）僅量、灰黄色砂含む
1、3（052覆土）、4・5（004覆土）、6（024覆土）、7～9（042覆土）
網掛け部貼り床

第22図　SI－024



第23図　SI－025・034・036





第24図　SI－030A・030B

いている。竪穴内には多くのピットがあるが、炉と判断できる施設はなく、辛うじて４本の主柱穴が残っている。また、北東コーナーに壁溝が認められる。030Bは20cmほど西に立て替えられており、壁柱穴が巡るのが特徴である。平面形は東西に長い楕円形で、030Aとは主軸が約90°異なる。東側には幅の広い壁溝が見られる。主柱穴は判然としないが、P1～P3が該当すると思われる。P5は入り口施設であろうか。

遺物（第24図、図版26・73） 遺物は少なく、AとBに伴うものを分けることはできなかった。甕底部（1）・高坏脚部（2）・鉢の破片（3）のほか、粘板岩（4）とホルンフェルス（5）の石斧が出土している。結節文と縄文原体の押捺文で区画された特徴的な文様をもつ壺頚部が出土している。

SI－034（第23図、図版28）

１号墳の墳丘下にあり、墳丘の北西コーナーに位置する。１号墳の周溝掘削によって大半が失われ、東側の一部が残る。南東にはSI－045が20cmの距離に近接するが、竪穴部の切り合いはない。東側壁溝の一部と柱穴１基が検出された。壁溝付近で壺頚部が１点出土している。沈線で区画された縄文帯があり、無文部は赤彩されている。

SI－036（第23図）

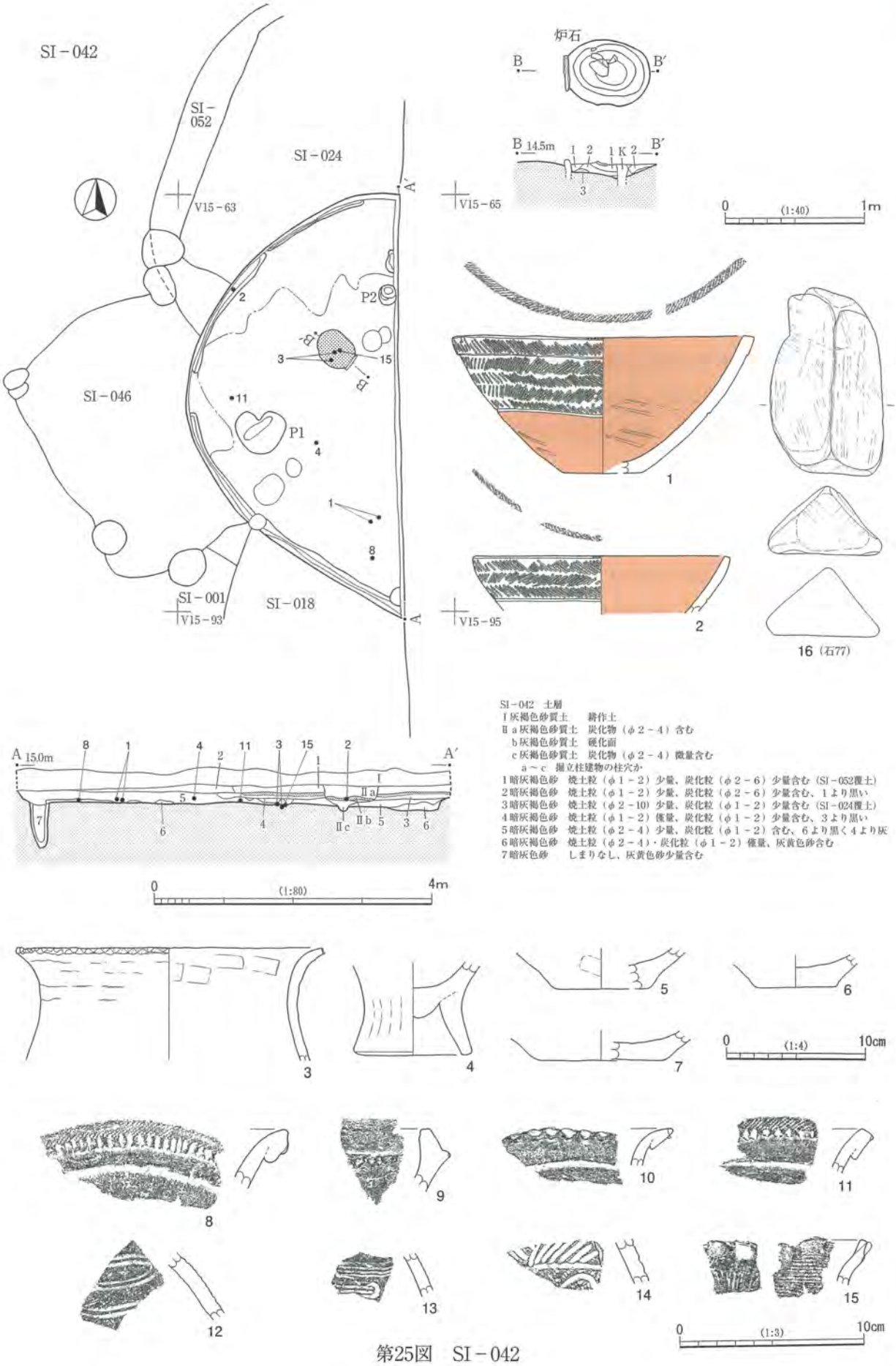
C区調査区の北端、V8－00グリッドに位置し、SB－004に切られている。2.5m×2.0mの小規模な方形竪穴で、隅は丸みをもつ。床面では５基のピットが検出されたが、主柱穴とは考えづらい配置である。P1～P4は深さ14.9cm～29.4cmで、東側のP1・P2は主柱穴の一部と見られるが、西側の中央部に偏ったP3・P4は別の施設であろう。P1・P2に対応する主柱穴は竪穴外にあったと推定せざるを得ない。なお、P1の西に隣接するピットは深さ７cmほどの浅いもので、用途は特定できない。竪穴内に炉跡はなく、遺物は土器の小片のみであった。生活痕の希薄な遺構である。

SI－042（第25図、図版15）

１号墳墳丘下の１棟で、調査区の南東端に位置し、東半は調査区外にある。北側にSI－024・052、西側にSI－046、南側にSI－018が重複する。調査の記録ではSI－018・024が本住居より新しいと判断されている。覆土の土層断面図を見ると、本跡の覆土中にSI－024の貼り床（網掛け部）が検出されているためSI－024が本跡を切って築かれたことは間違いないと思われるが、SI－018との前後関係はよく分からない。

楕円形の平面プランをもつと見られ、北西の壁寄りに炉がある。炉の南端には板石が立てられている。主柱穴は炉を挟むように北側の２基が検出された。

遺物（第25図、図版28・78） 遺物の出土状況は散漫であるが、炉で出土した甕（3）やSI－024の貼り床から出土したものは本跡に伴うことが明らかで、西側の床面で出土した土器群も本跡の遺物と捉えられる。口縁部～体部に広い縄文帯をもつ鉢（1・2）、刻みによる波状口縁をもつ甕（3）、台付甕（4）、折り返し状の二重口縁に縄文帯と刻み文をもつ壺（8・11）がある。図示したその他の小片は重複する遺構から混入した可能性があり、口縁部下の突帯に刺突文をめぐらした甕（9）、沈線文で飾られた壺（12～14）、波状口縁の甕（10・15）は中期に遡る土器群である。



SI－042　土層
Ⅰ灰褐色砂質土　耕作土
Ⅱａ灰褐色砂質土　炭化物（φ２－４）含む
　ｂ灰褐色砂質土　硬化面
　ｃ灰褐色砂質土　炭化物（φ２－４）微量含む
　ａ～ｃ　掘立柱建物の柱穴か
１暗灰褐色砂　焼土粒（φ１－２）少量、炭化粒（φ２－６）少量含む（SI－052覆土）
２暗灰褐色砂　焼土粒（φ１－２）少量、炭化粒（φ２－６）少量含む、１より黒い
３暗灰褐色砂　焼土粒（φ２－10）少量、炭化粒（φ１－２）少量含む（SI－024覆土）
４暗灰褐色砂　焼土粒（φ１－２）僅量、炭化粒（φ１－２）少量含む、３より黒い
５暗灰褐色砂　焼土粒（φ２－４）少量、炭化粒（φ１－２）含む、６より黒く４より灰
６暗灰褐色砂　焼土粒（φ２－４）・炭化粒（φ１－２）僅量、灰黄色砂含む
７暗灰色砂　しまりなし、灰黄色砂少量含む

第25図　SI－042

SI－043（第26図、図版15・28・78）

1号墳墳丘下、調査区の東端に位置し、SI－042と同様に東半は調査区外にある。土層断面図で明らかなように、本跡の上にSI－003が築かれたため本竪穴の上半は失われている。覆土にはローム粒が多量に含まれ、φ10㎜～20㎜の大粒のローム粒が多く混入するため人為的に埋め戻されたものと思われる。本跡の覆土上面にはSI－003の貼り床が確認されている。竪穴内には炉・柱穴などの施設はなく、壁溝も見られない。生活痕は希薄であるが、覆土に炭化物の集中が見られる。

遺物の出方は散漫で、遺存も悪く全容を知る資料はない。北西コーナーの床面で出土した台付甕の底部が唯一本跡に伴う可能性の高い遺物である。覆土から鉢・壺・甕が出土しており、鉢・壺類は沈線区画に縄文を充填した文様をもつ。他に、砂岩の砥石が1点ある。

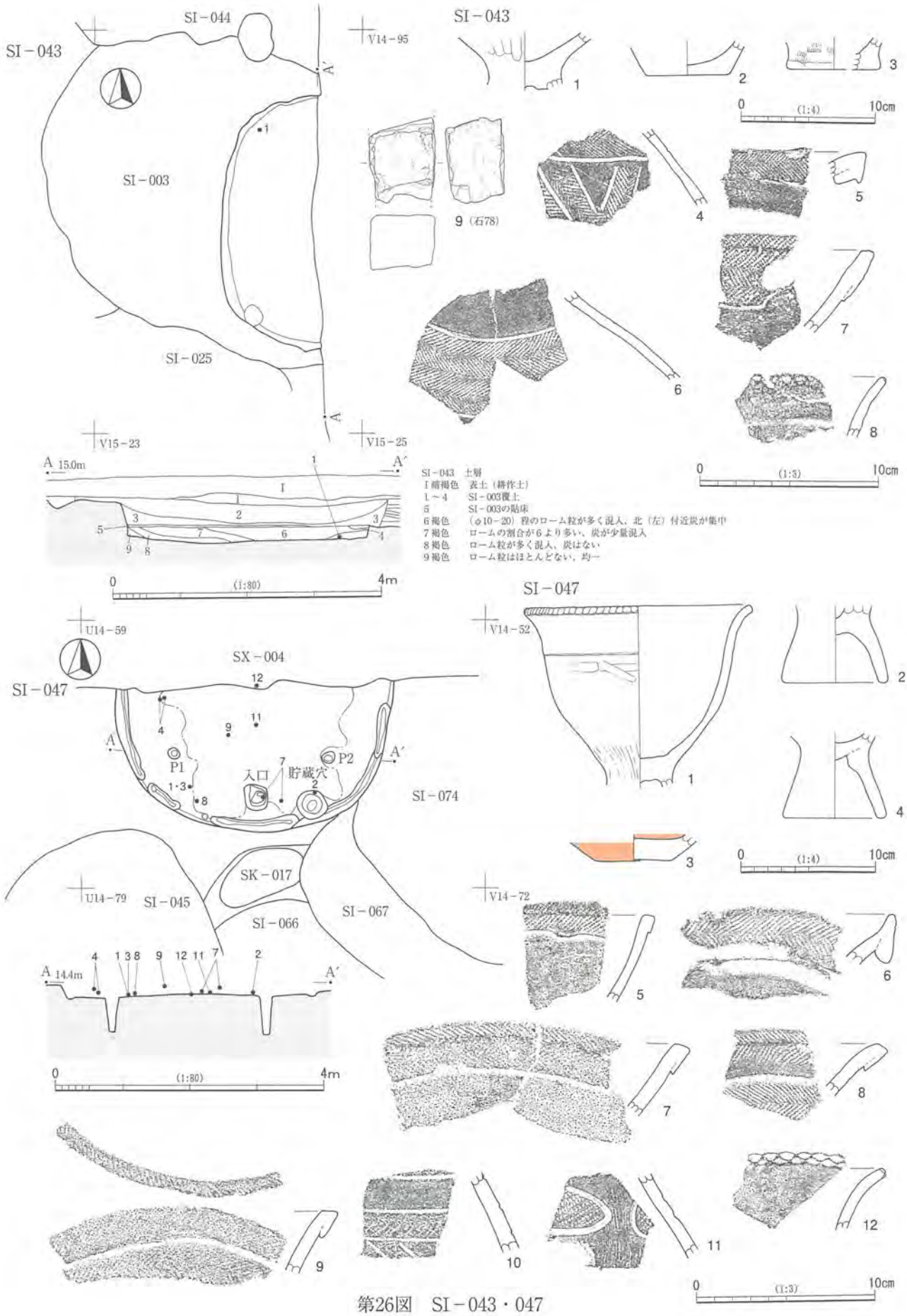
SI－044（第27図、図版15）

1号墳墳丘下、調査区の東端に位置し、東側は調査区外にある。北西側はSI－031、南側にSI－003・043が重複する。弥生時代中期のSI－031を切って築かれていることは明らかで、003に切られる043より新しいと考えられるが、遺物のみの比較では003との前後関係は微妙である。発掘時の記録では003が044の覆土を切っていることが示されているが、本竪穴部の土層が一部しか記録されていないため詳細は不明である（043の土層断面図参照）。全体の約1/4ほどが検出されていると見られ、略円形ないし楕円形の竪穴が想定される。主柱穴は1か所しか確認できないが、建て替えが行われていると見られ（P1・P2）、竪穴内の方形の区画は建て替え前の施設に関連するものであろう。

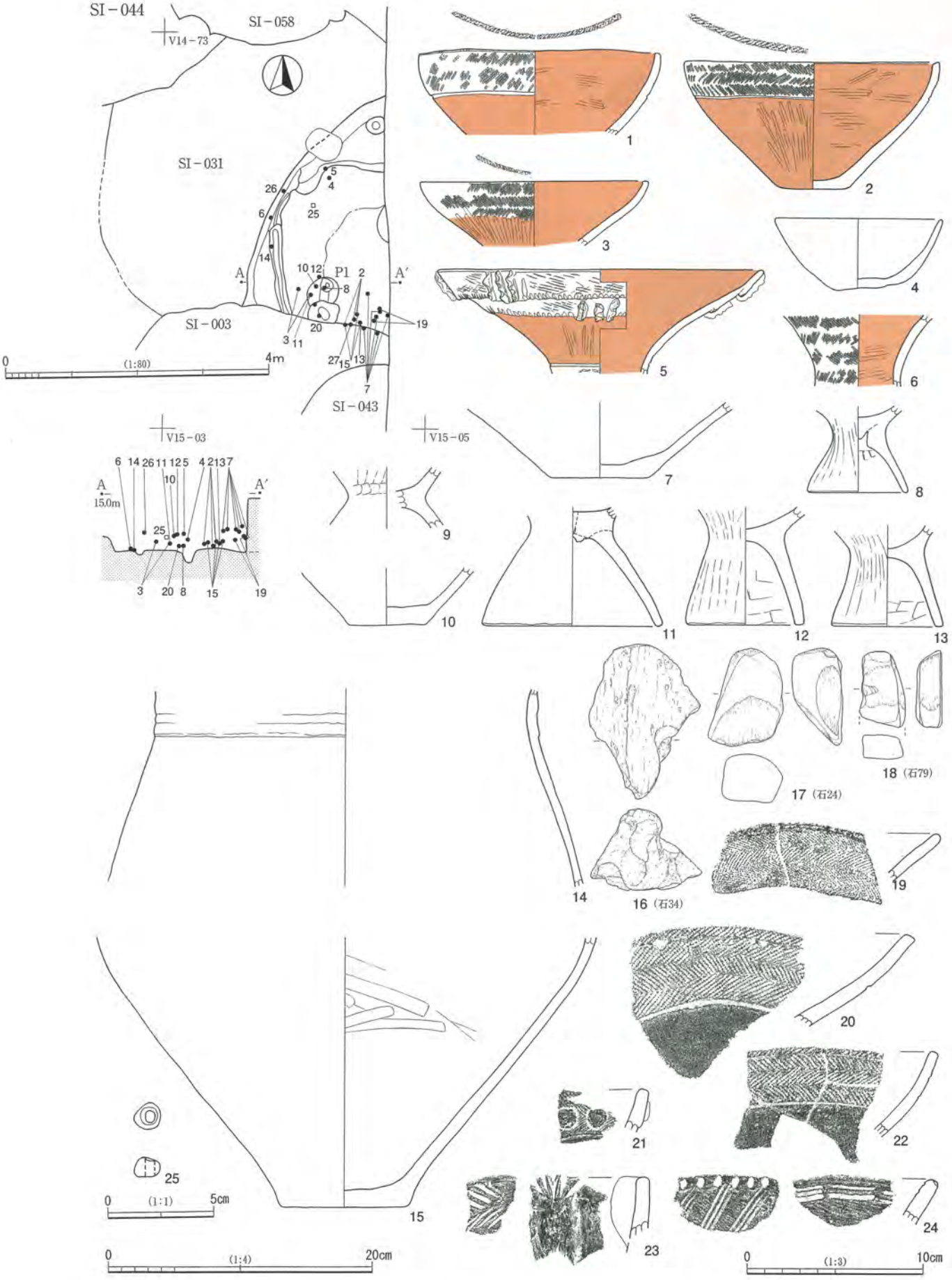
遺物（第27・28図、図版29・30・75・77・78）　遺物は柱穴とその周辺部に集中している。出土位置を図示した遺物は本遺構に伴うと考えられるが、破片を図示した遺物のうち23・24は弥生時代中期に遡る資料で、混入品と考えられる。口縁部に縄文帯のある鉢が5個体（1～3、20・22）あり、いずれも口縁端部に面をもち縄文の施文が見られる。また、無文の小型の鉢（4）が1点ある。壺には2段の文様帯をもつ有段口縁壺（5）、羽状縄文帯で飾られた直口壺（6・19）があり、1は頸部が細く締まり、球形の胴部がつく形式である。口縁部の文様帯には無節の網目状撚糸文が施されており、沈線文で区画された文様帯に無節の網目状撚糸を充填しスリット状の沈線文を飾った球形の胴部破片（26）は同一個体の可能性がある。甕には頸部に多条の粘土紐接合痕をもつ平底の甕（14・15・27）のほか、台付甕が3個体出土している。台付甕はいずれも脚台部のみで全体の分かるものがない。

SI－045（第29図、図版16・29・30・73・77）

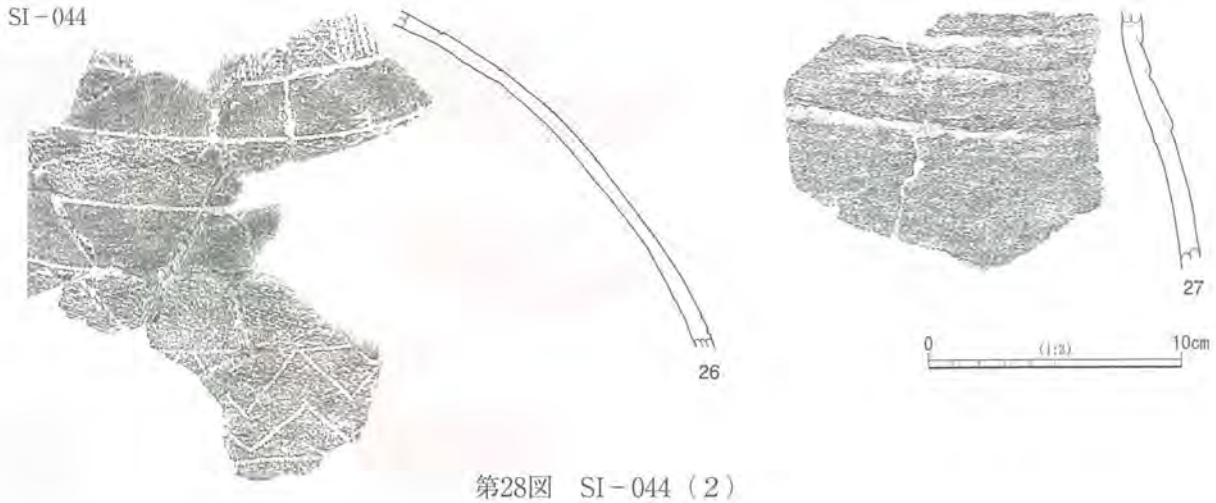
1号墳墳丘下の北西コーナーに位置する。東側はSI－066、南側にSI－050が重複し、いずれも後期の土器を出土している。SI－050との関連土層図では、本跡がSI－050を掘り込んでいることが記録されている。しかし、2・4・5・5′層をSI－050の覆土と見ることもできるため、切り合いが逆転する可能性もある。3.35m×3.25mの円形の竪穴内には、柱穴・炉などの施設はなく、炭化物と焼土塊が散在している。遺物はそれほど多くないが、玄武岩の環状石斧（11）と軽石の砥石（12）が含まれている点は注目される。環状石斧はほぼ半分に割れており、一撃で割れたような割れ口である。石材は多孔質の玄武岩で、中央の孔は両側から穿孔され、内側に明瞭な稜がある。孔の周囲に突帯はなく、横から見ると低いソロバン玉状に見える。外縁の稜は図の下方に偏っており、場所によっては丸くなっているが、それらが摩滅によるもの



第26図　SI－043・047


SI－044
SI－058
V14－73
SI－031
SI－003
SI－043
A
A′
P1
0
(1:80)
4m
V15－03
V15－05
15.0m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16（石34）
17（石24）
18（石79）
19
20
21
22
23
24
25
0
(1:1)
5cm
0
(1:4)
20cm
0
(1:3)
10cm

第27図　SI－044（1）



第28図　SI－044（２）

か使用によるものかはっきりしない。県内の出土例の多くは安山岩などの比較的固く緻密な石材で作られており、本例のように多孔質の石材を用いた例は見当たらない。

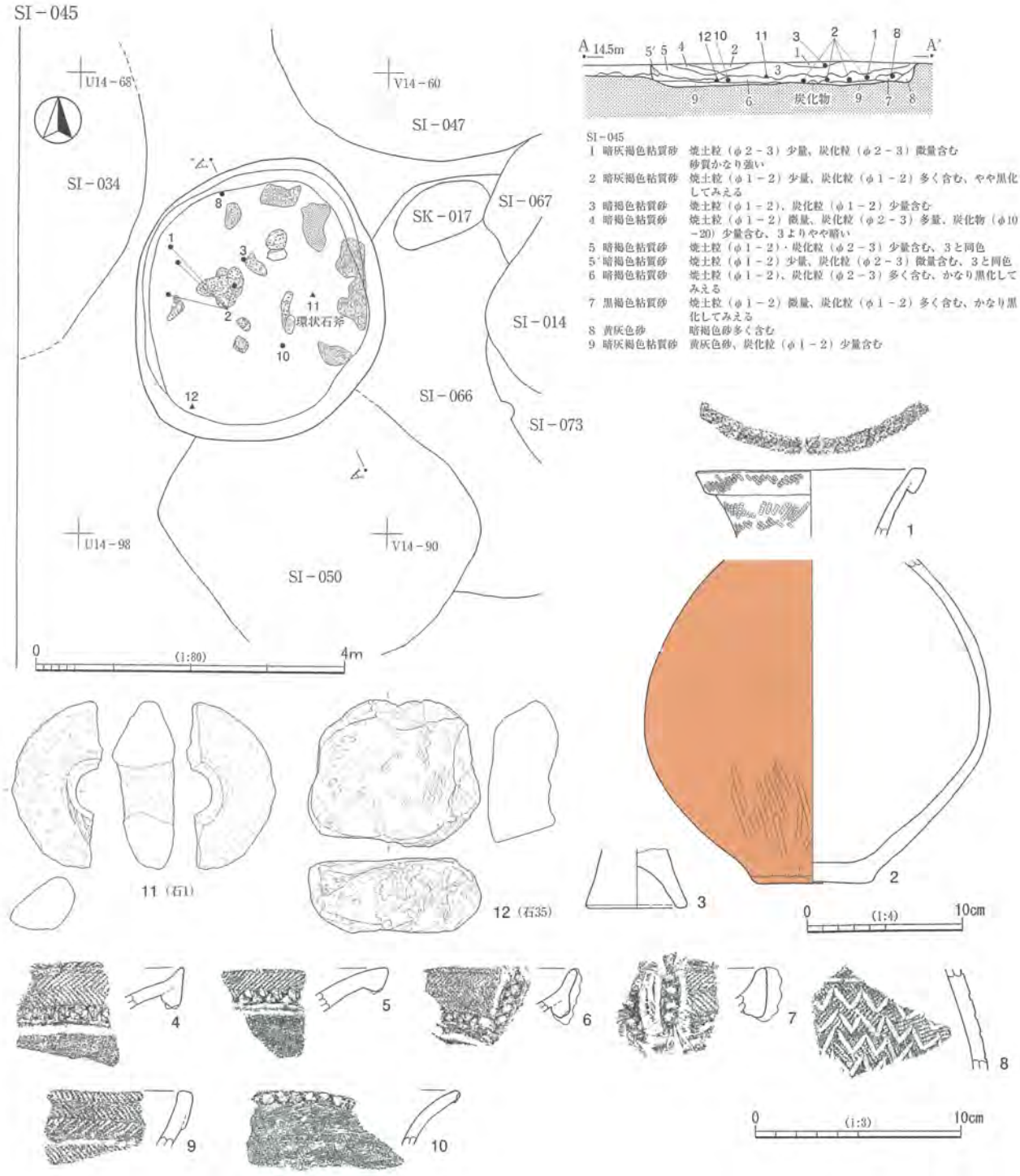
出土した土器では竪穴北西部で出土した１・２の壺が最も遺存が良い。これらは接合しないが、砂粒を多量に含む特徴的な胎土などから同一個体と見られる。施文は口縁部のみにあり、単節の縄文が用いられている。肩部から底部は無文で、外面は赤彩されている。胴部下半の張りが弱い形態の特徴も加えて、後期後半の壺と考えてよいであろう。

SI－046（第30図、図版16・30）

１号墳墳丘下の南寄りに位置する。北側はSI－012・052、東側にSI－042、南側にSI－001・018が重複する。SI－012は１号墳の墳丘削平後につくられた奈良・平安時代の竪穴遺構、SI－018・042は本跡を切っており、後期新段階以降の竪穴住居である。一方、弥生時代中期のSI－001は本跡に切られている。本竪穴は長軸3.55m、短軸2.70mの長方形で、楕円形～隅丸方形の後期住居跡群の中では異色である。竪穴内に主柱穴はなく、炉の南側に炉石を置き、対面の壁際に入り口ピットをもつ。この炉と入り口ピットの構造は本遺跡の弥生中期後半から後期に通有の特徴である。しかし、同様の炉をもつSI－042は楕円形の平面形をもち、竪穴内に主柱穴をもつ一般的な後期の竪穴住居で本跡とは大きく異なる。本跡は出土遺物が少なく明確に伴う遺物がないが、上記のような遺構の状況から見てSI－001とSI－042の間、すなわち後期前半の住居跡と推定される。また、SI－042の炉石は南端に設置されており、本跡のように炉石の南にさらに掘り込みをもつ形態が先行するのであろう。

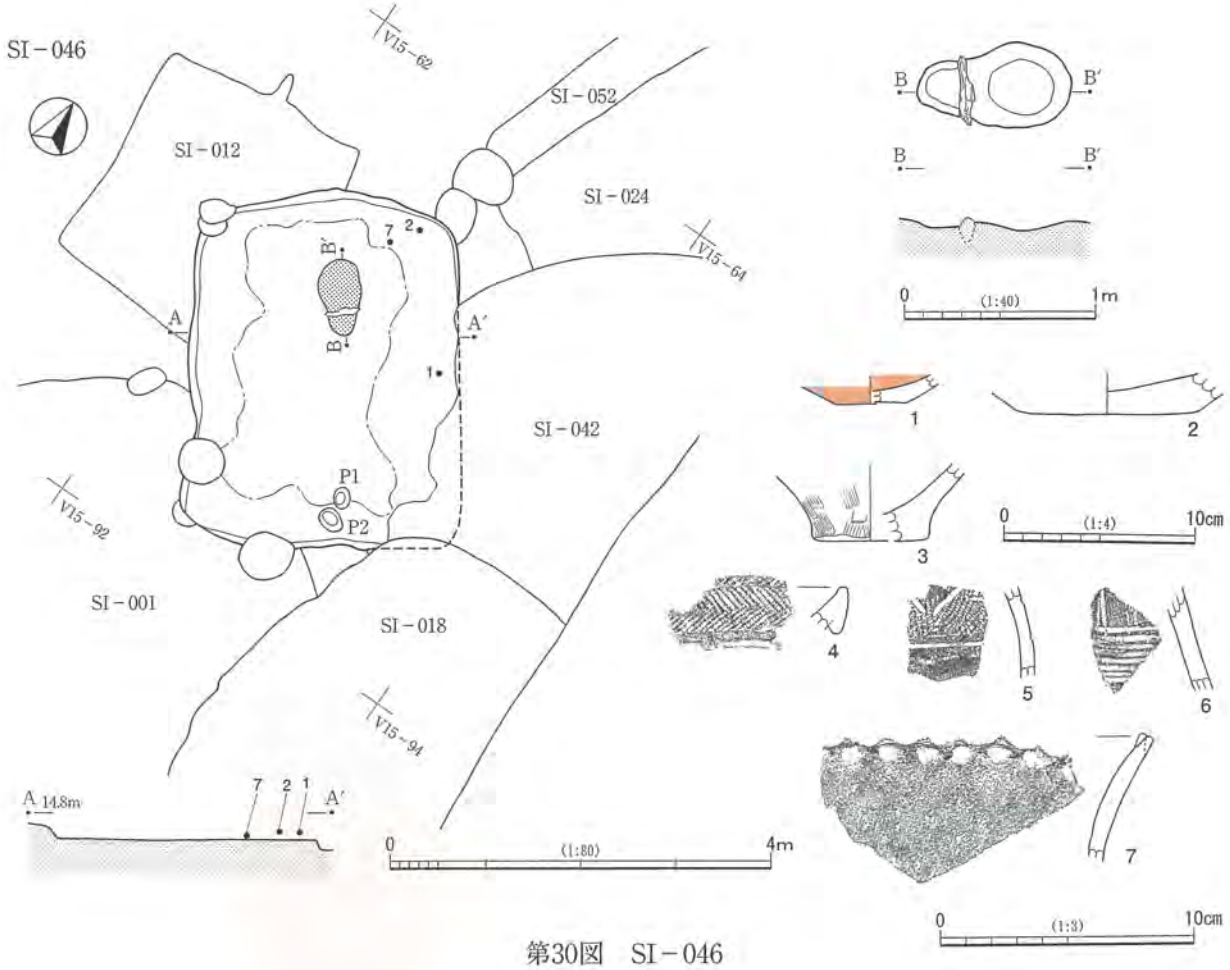
SI－047（第26図、図版16・30）

１号墳墳丘下の北端にあり、北半は１号墳の北周溝（SX－004）の掘削によって失われた。南東の壁がSI－067・074に接しているが、本竪穴との重複部は僅かである。壁際には断続的に壁溝がめぐっている。炉と北側の主柱穴は失われており、南側の主柱穴２基と入り口の梯子穴、貯蔵穴が認められる。貯蔵穴は円形で、南西の壁際に壁溝を切って設置されている。１号墳墳丘の裾部に位置するため、墳丘の構築時に削平されたらしく、竪穴の掘り込みは極めて浅くなっている。



第29図　SI－045

遺物は床面近くで比較的多く出土し、脚台部を除いてほぼ完存する１のように削平されている割りには遺存のよいものがある。台付甕（１）は口縁部が開いて底部に向かってすぼまる器形で、口縁部と肩部の境に粘土紐接合痕があるが、後期の平底甕に通有の多条接合痕はない。口縁端部は面取りして刻み文が加えられている。脚台部（２・４）はいずれも分厚いつくりで、端部は丸く仕上げられている。拓本を図示した折返し状口縁のうち、５・７は鉢ないし高坏の坏部、６・８・９は壺の口縁部である。折り返し状の



第30図　SI－046

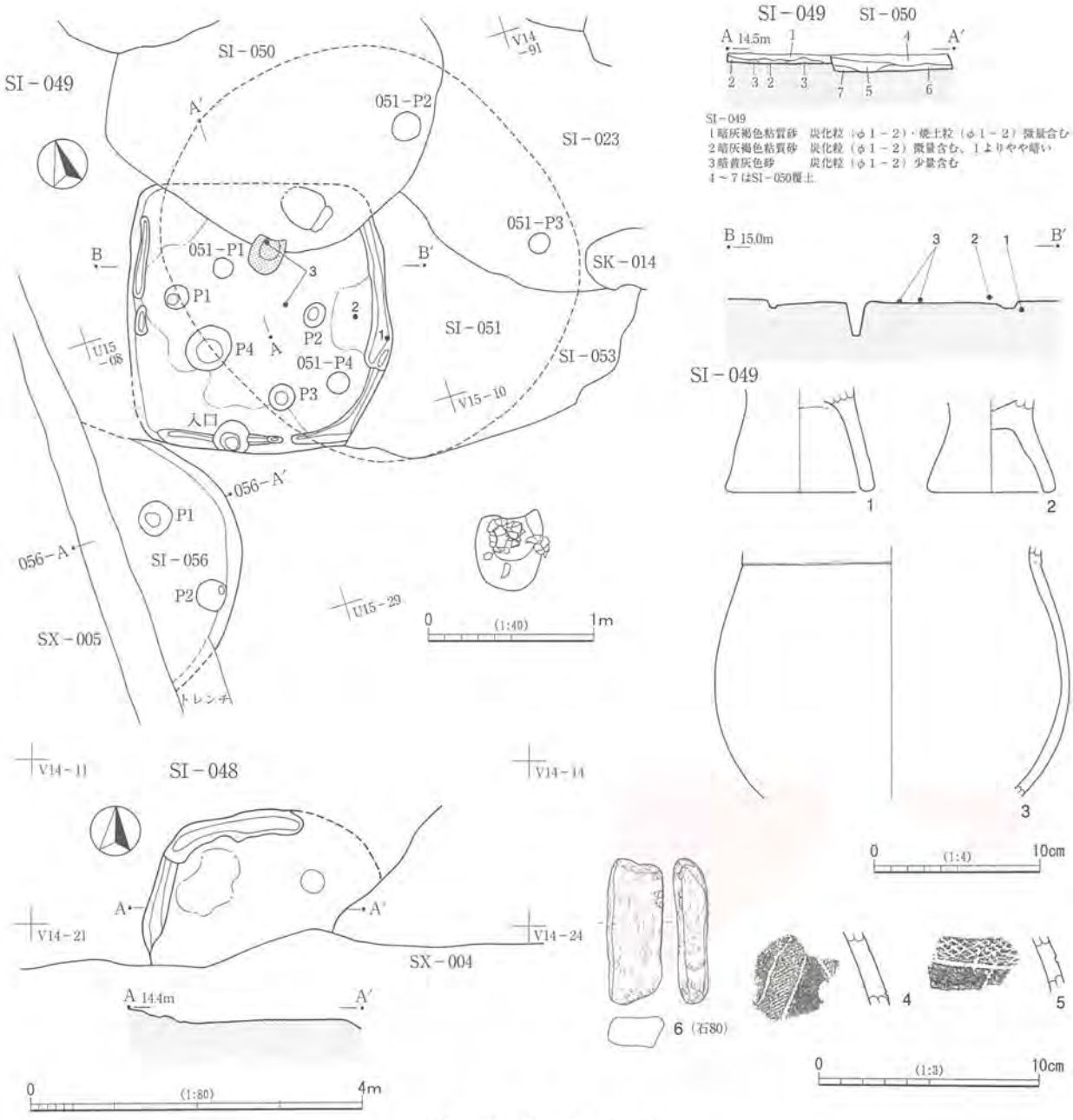
貼り付けが幅広く発達した6と口頸部に羽状状文を配した8は後期でも後出の壺に見られるため、混入品と捉えられる。壺頸部～胴部の破片には沈線文区画に網目状撚糸文（10）と単節の縄文（11）を充填したものがあり、10は後出の後期後半、11は中期に遡る混入品である。口縁端部に刻みをもつ甕口縁（12）は本跡と同時期のものであろう。

SI－048（第31図）

1号墳の北周溝（SX－004）の外側に位置し、南半は北周溝（SX－001）の掘削によって失われた。壁溝の一部と貼床の一部が遺存し、壁の立ち上がりは10.4cm残っている。柱穴・炉などの施設は検出されていない。出土遺物もない。

SI－049（第31図、図版16・30・78）

1号墳墳丘下の北西コーナー付近に位置する。SI－050・051・053と重複する。土層断面の記録からSI－050に切られていることは明らかで、SI－051が後から建てられている。また、SI－053は本住居によって切られている。壁の立ち上がりはほとんどなく、壁溝の存在によって竪穴の構造が分かった例である。中央北寄りに炉が配置され、対面する南壁の中央に入り口ピットがある。P1～P3が柱穴と見られるが全体の配置は明らかではない。また、P4の帰属や用途も明瞭ではないが、他に帰属する遺構がないため本

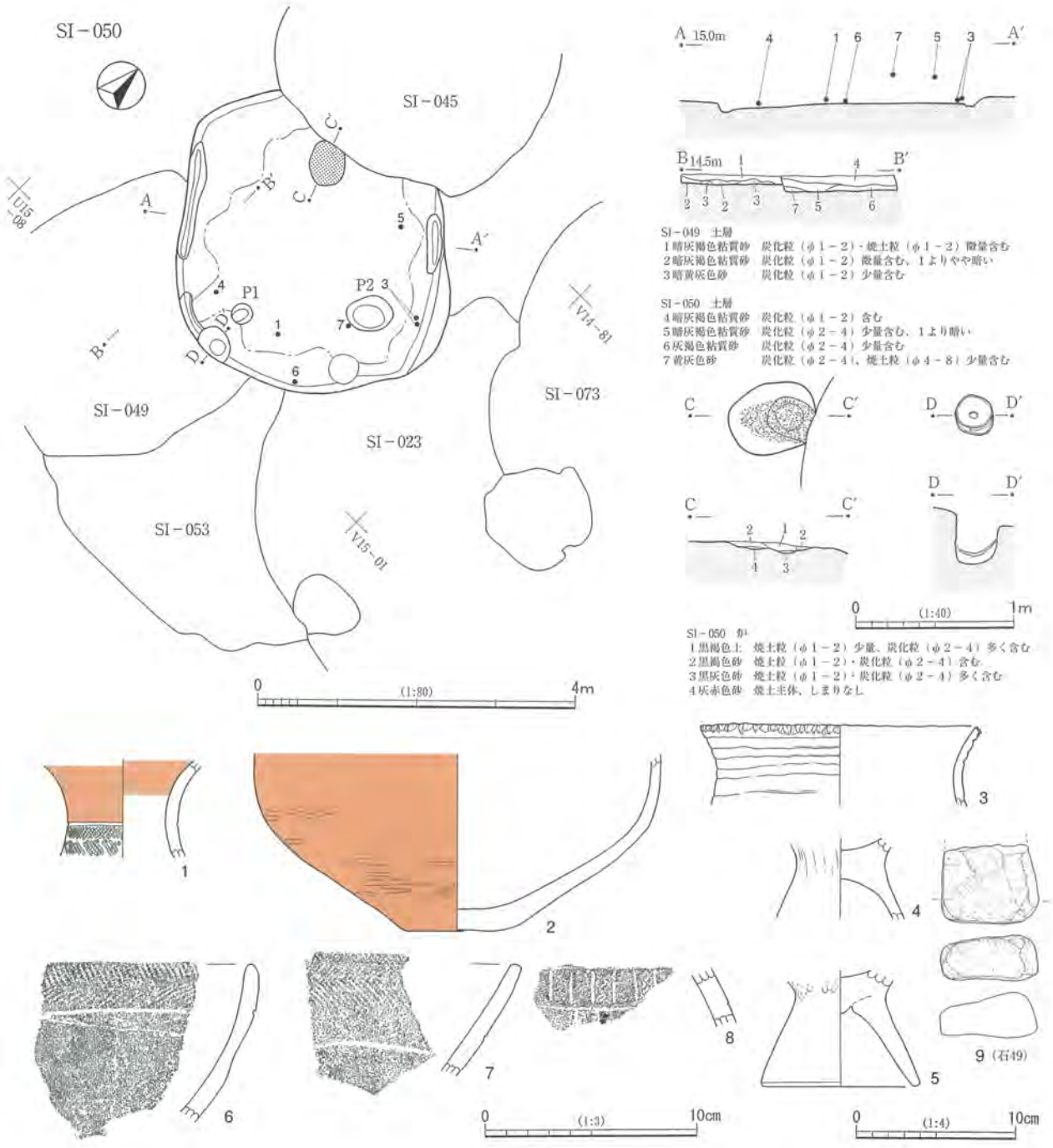


第31図　SI－048・049

跡に図示した。床面から出土し、位置を特定できる遺物が３点ある。台付甕脚部（１・２）と甕の肩部から胴部（３）で、肩部には粘土紐接合痕が残る。他に覆土中から壺の胴部破片（４・５）と砂岩の砥石（６）が出土している。

SI－050（第32図、図版16）

１号墳墳丘下の北西コーナー付近に位置する。北側はSI－045、東側にSI－066・023、南側にSI－049・053が重複する。SI－045・049は弥生時代後期、SI－023は弥生時代中期の竪穴住居で、切り合いによって本跡との前後関係が明らかであるが、SI－053との前後関係は微妙である。竪穴は最も深いところで18cmで、全体に削平を受けており特に北側が浅くなっている。北東の壁寄りに炉があり、主柱穴は南西の壁寄



第32図　SI－050

りに２基（P1・P2）検出されたが、北側には見当たらない。西コーナーの壁寄りに貯蔵穴（P3）があり、壺の底部（２）が嵌っていたかのような状態で出土している。炉は東側に拡張された形跡があり、新しく掘り込んだ炉床の一部はSI－045に切られている。

遺物（第32図、図版31・74）　出土位置を図示した遺物はすべて南西側から出土している。床面や貯蔵穴から出土した遺物を指標に、覆土上層から出土した台付甕脚台部（５）・鉢の口縁部（７）・装飾壺破片（８）・砥石（９）も本跡に伴うものと判断した。床面で出土した遺物には頸部に沈線区画の縄文帯をもつ長頸壺（１）、口頸部に多条の粘土紐接合痕をもつ甕（３）、台付甕脚部（４）、口縁部に羽状の縄文帯を

もつ鉢（6）があり、後期新段階に位置づけられよう。

SI－051（第33図）

1号墳墳丘下の北西部に位置する。北側はSI－050、東側にSI－023、南側にSI－053、西側にSI－049が重複し、竪穴部の輪郭は全く遺存していない。炉と主柱穴（P1～P4）によって存在が推定された例である。平面形は全くの推測であるが、周囲の重複住居の遺存状況から見てSI－019のような楕円形プランを想定した。また、本跡の遺物として取りあげられたものはわずかで、所属もはっきりしない。南端に炉石を置く炉の構造から弥生時代後期の住居跡と推定した。南の一角のみが遺存するSI－053は炉と柱穴が検出されていないため本跡の施設がこれに伴うのではないかと思われたが、SI－053は本跡よりかなり規模が大きく主軸が東に傾いており、本施設を当てはめると南西に偏ってしまう。やはり、別々の竪穴住居と考えるのが妥当であろう。

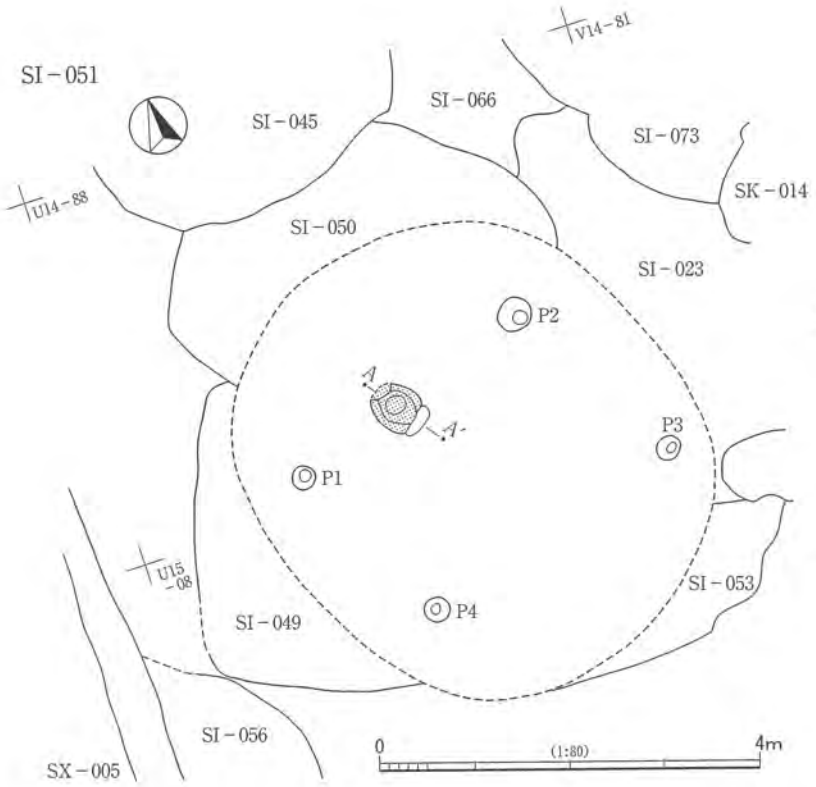
SI－052（第33図、図版31）

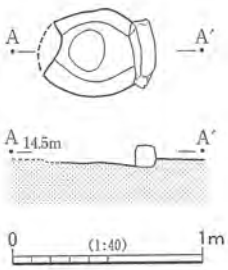
1号墳墳丘下の南東部に位置する。北側はSI－024、南側にSI－033・042が重複し、東側は調査区外にある。また、本跡にすっぽり嵌る形でSI－024が重複している。SI－024の項に示したように、土層断面図にはSI－004・024・042の覆土上に本住居の貼り床が記録されており、これらの中で本跡が最も新しいことが分かる。しかし、重複状況が複雑であったためSI－024が先行して掘り下げられ、本跡の施設は壁溝のみが記録された。柱穴については、SI－024の調査時にも検出された径30cm、深さ32cmのP1でが本跡に伴う可能性があるが、これに対する北西の柱穴が検出されていないため確証がない。また、遺構検出時に見つかっていた炉跡を本跡に伴うものと判断した。壁溝付近で出土した遺物を図示したが、鉢（1）・壺口頸部破片（3）ともSI－024との境で出土しており、所属は微妙である。

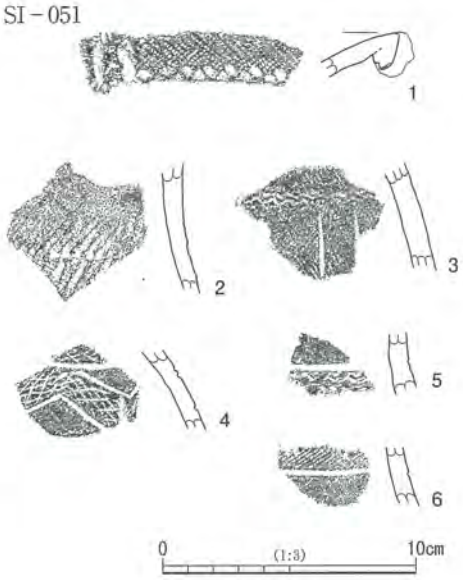
SI－053（第34図）

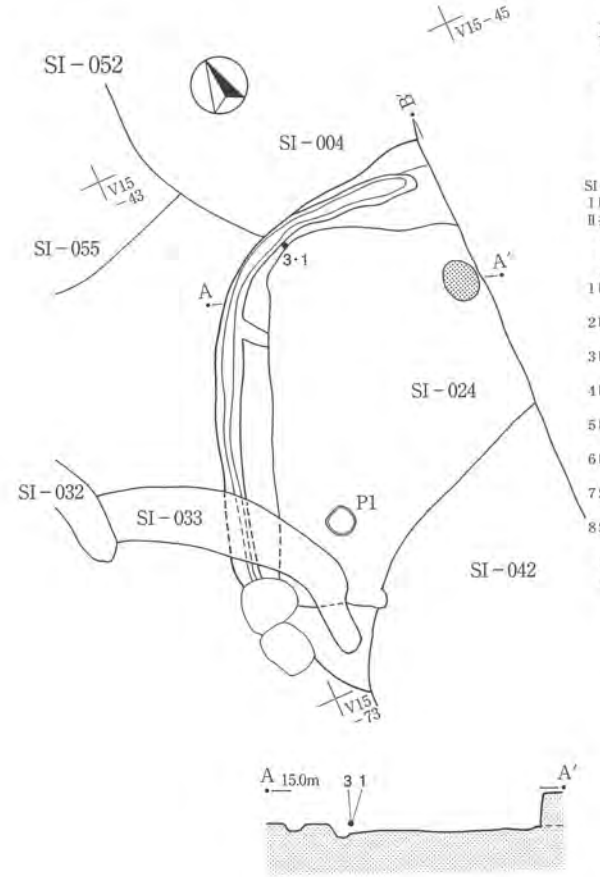
1号墳墳丘下の北西部に位置する。北側はSI－050、東側にSI－023・054、西側にSI－049が重複し、南側の一角と東側の壁溝のみが遺存する。SI－023・054が先行し、SI－049・050が本跡より新しいと考えられるが、SI－023が先に発掘されたため竪穴内東側の施設はほとんど残っていない。残存する壁溝から見ると、長軸6mを超える大型の楕円形住居であったと推定される。南壁寄りで検出された3基のピットはいずれも主柱穴とは考えられない位置にあり、貯蔵施設と入り口施設を構成するものであろう。ピット群の周辺には硬化面が残っている。

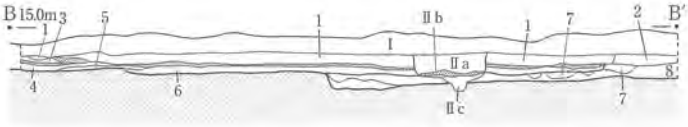
遺物（第34図、図版31・75）　出土位置が把握できた遺物のうち2～4・16は本跡に伴うと見られるが、8は古墳時代出現期の甕底部で混入品である。本跡の遺物は装飾壺類・鉢（4・9・10）・甕（13）・台付甕のミニチュア（7）がある。壺の装飾にはS字状結節文と縄文（1・15）、沈線文とS字状結節文（16～18）、沈線文と網目状撚糸文（14）の組み合わせが見られる。17・18では棒状浮文・円形浮文が貼付されている。壺口縁部はいずれも折り返し状口縁で、S字状結節文（2）・単節の縄文（11～13）が施され、下端には刻み文がある。



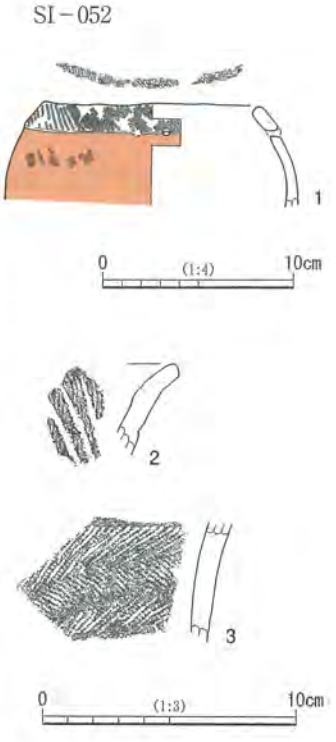




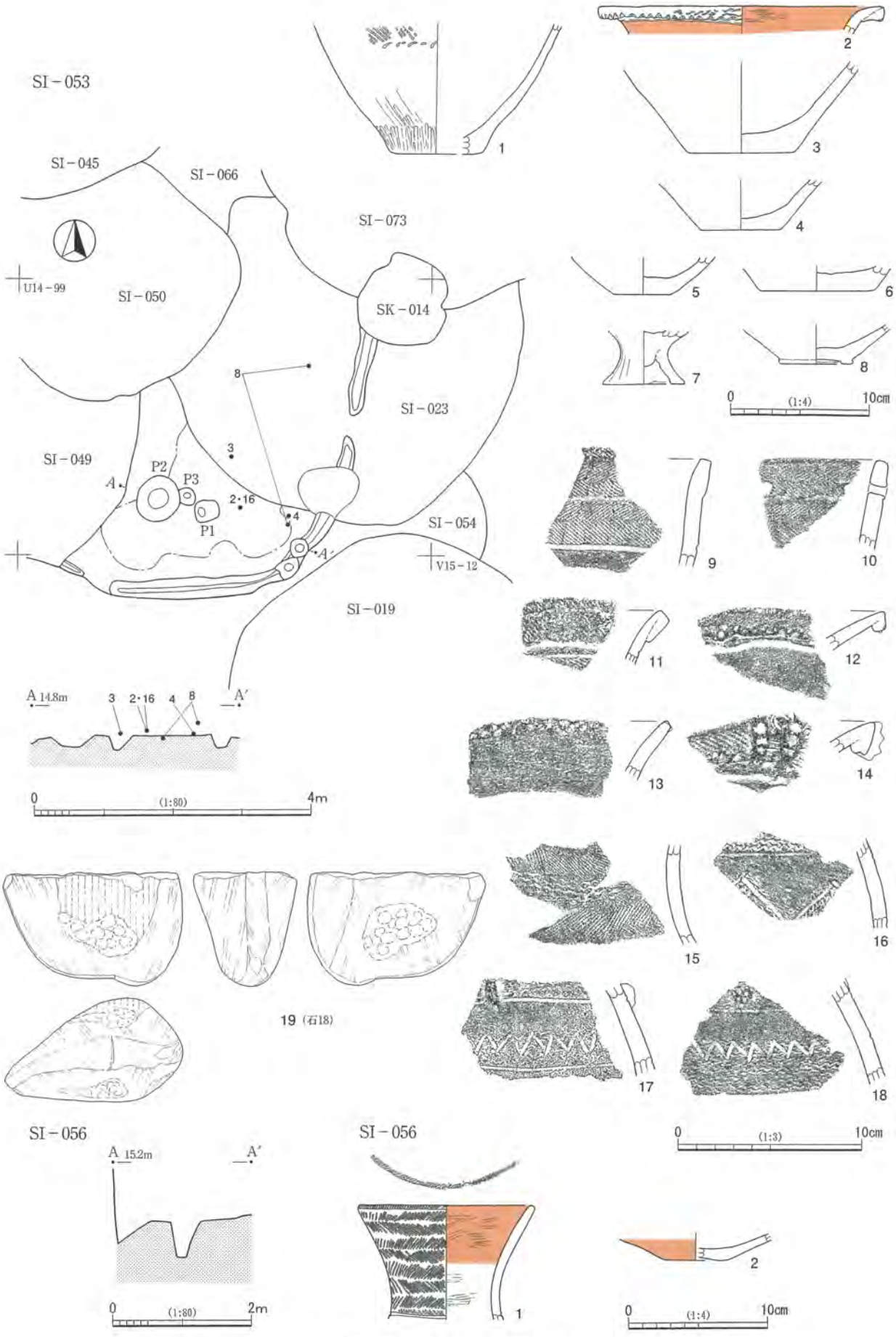




SI－052　土層
Ⅰ灰褐色砂質土　　耕作土
Ⅱ掘立柱ピット土層
　a灰褐色砂質土　炭化物（φ2－4）含む
　b灰褐色砂質土　炭化物（φ2－4）少量含む
　c灰褐色粘質土　炭化物（φ2－4）微量含む
1暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ2－6）少量含む
2暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ2－6）少量含む、1より黒い
3暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ2－4）含む、灰黄色砂多く含む
4暗灰褐色砂　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ2－4）微量、灰黄色砂少量含む
5暗灰黄色砂　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ2－4）少量含む
6暗灰褐色砂　焼土粒（φ2－10）・炭化粒（φ1－2）少量含む
7SI042覆土　焼土粒（φ1－2）僅量、炭化粒（φ1－2）少量含む、6より黒い
8SI042覆土　焼土粒（φ2－4）少量、炭化粒（φ1－2）含む、6より黒く7より灰
1、3（052覆土）、4・5（004覆土）、6（024覆土）。
7、8（042覆土）、網掛け部貼り床



第33図　SI－051・052



第34図　SI－053・056（1）

SI－054（第35図）

SI－053の南に重複して検出された大型住居跡である。SI－053のほかSI－019・023・049・050・056・083が複雑に絡んで重複し、南側の壁溝と両コーナーが辛うじて検出できたため存在が明らかになった住居跡である。SI－019との関連では、本跡の覆土を切ってSI－019が築かれている。また、SI－023より新しいことは分かるが、SI－053との前後関係は不明である。P4・P5以外のピットは、重複する住居跡群には伴わないものを本跡の柱穴として抽出した。P1～P4はかなり整然と配置された主柱穴と考えて良く、P5は入り口施設であろう。残存する壁溝や主柱穴と考えられるピットの配置から見ると、長軸７ｍを超える規模であったと推定され、SI－053より大型の住居になる。

遺構の重複状況や形態の特徴から見て、弥生時代後期の住居跡と判断した。口縁部に羽状縄文を施した鉢の口縁部と沈線文をもつ中期の壺の小片が出土している。

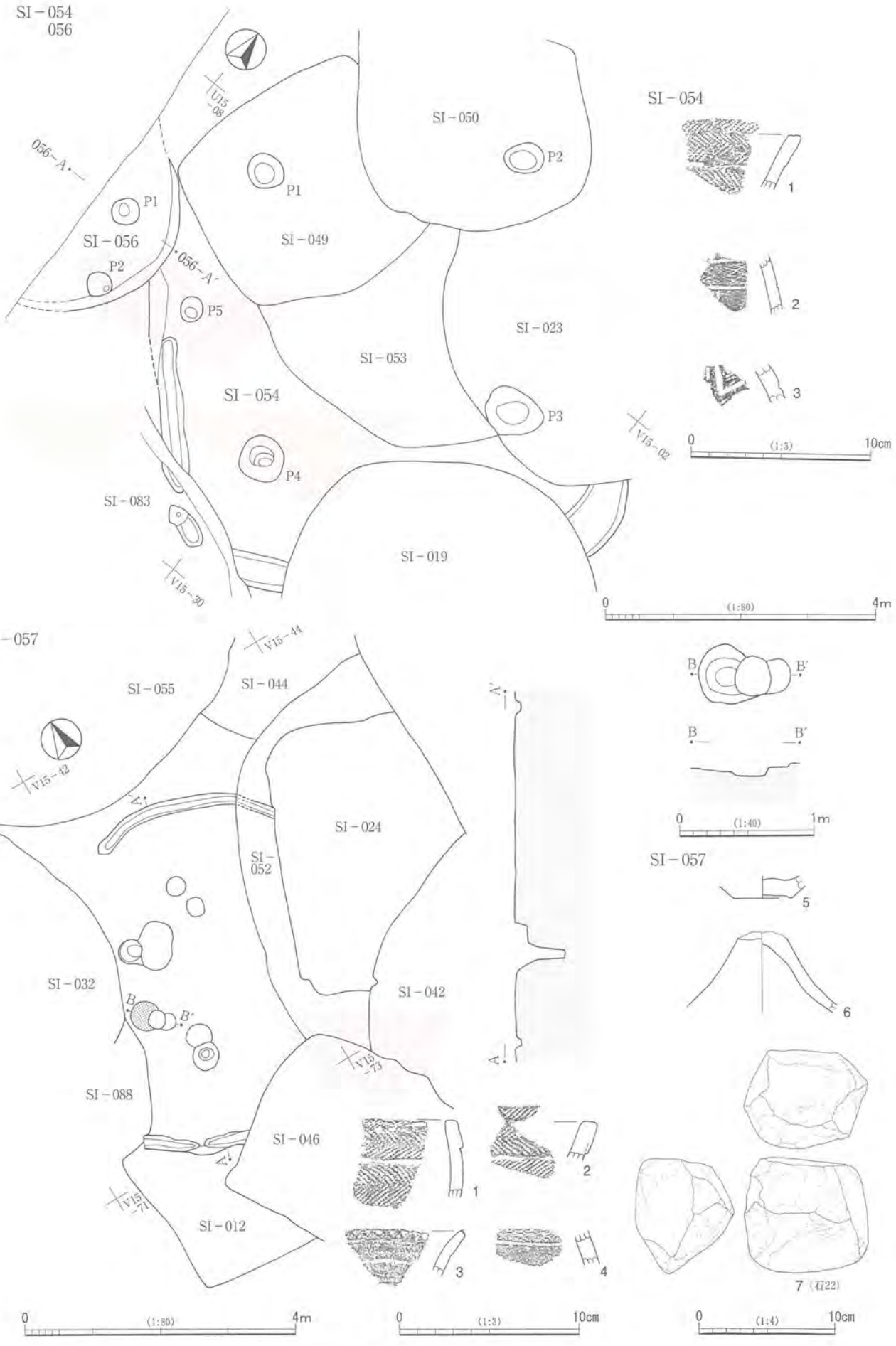
SI－057（第35図、図版31・75）

１号墳の墳丘下調査区の南東部に位置し、SI－052・024の西側に重複して検出された。南側にはSI－012・046、西側にSI－032・088が重複し、さらにSI－033の壁溝が横切っていた（全体図のみ表示）。炉や柱穴に絡むピットはSI－033に関連するものかも知れない。本跡はSI－052の床下で検出されたSI－024に切られており、壁溝の一部・炉・２基の柱穴のみが残存する。壁溝の形状を見ると、竪穴の平面形は円形であったと考えられる。遺物は断片的なものばかりである。壺底部（５）・高坏脚部（６）のほか鉢口縁部（１・２）・甕口縁（３）・壺胴部（４）の破片がある。また、凝灰岩の敲石（７）が１点出土している。

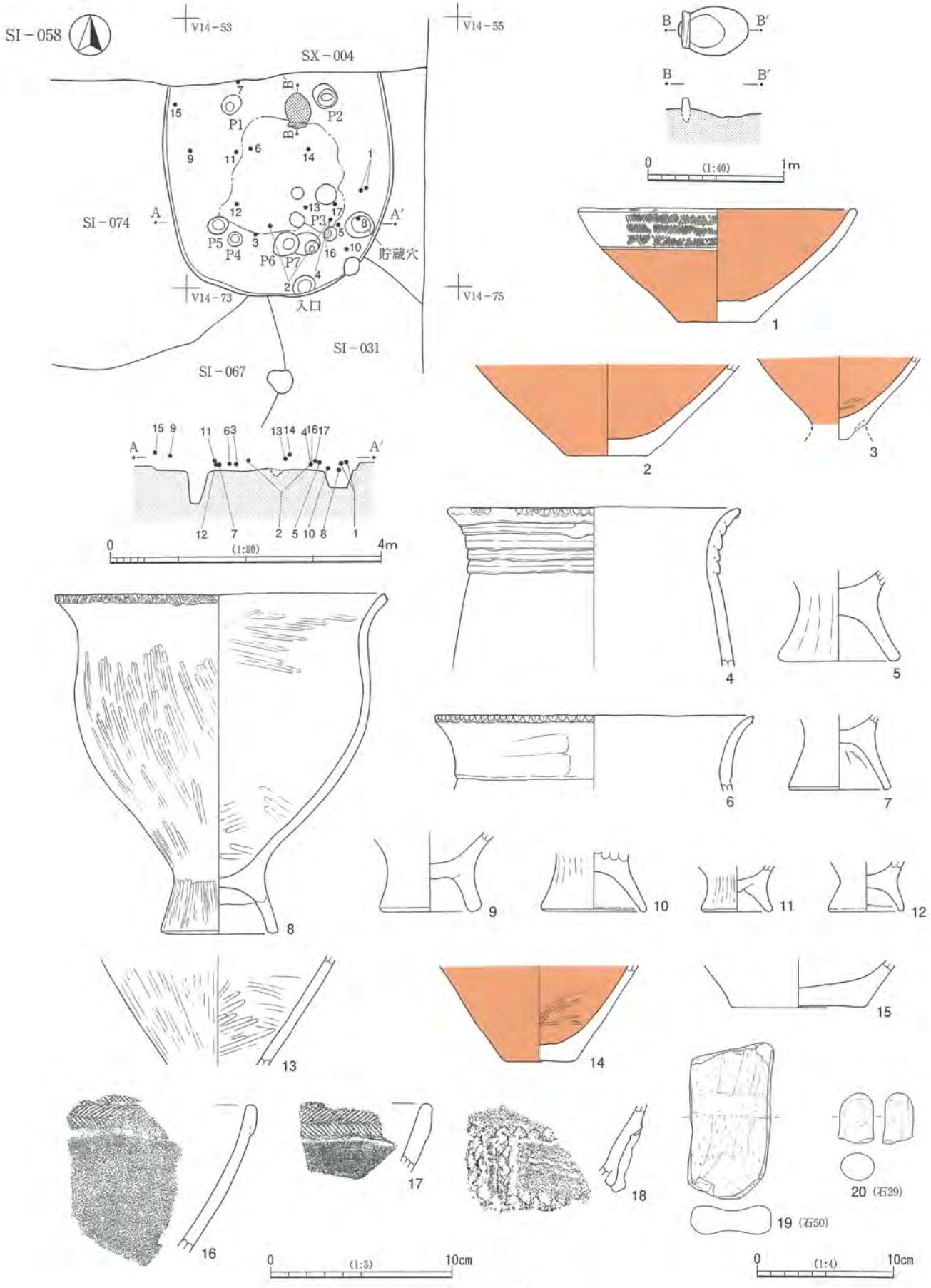
SI－058（第36図、図版16）

１号墳の墳丘下北縁に位置し、北側周溝（SX－004）に切られている。西側にSI－074、南側にはSI－031・067が重複する。SI－031は中期に遡ることが分かっており、その他の重複住居も本跡に先行して築かれたと考えられる。残存部の形状から見て楕円形の竪穴住居とみられ、北寄りに炉、中央部５か所に主柱穴（P1～P4・P7）、南東に円形の貯蔵穴、炉に対面する南壁際に入り口ピットがある。南西と南の柱穴は立て替えられている（P5・P6）。炉は南端に炉石を置く構造で、炉石には凝灰岩質砂岩が用いられている。また、炉と柱穴に囲まれた竪穴中央部には硬化面が確認された。

遺物（第36図、図版31・32・74）　遺物は竪穴内全域から出土し、重複する遺構からの混入品もかなり多い。ここでは床面から20cm以内の高さで出土した遺物を図化しているが、確実に伴う遺物はさらに限られると思われる。貯蔵穴から出土した台付甕（８）が最も確実性の高い遺物で、遺存も良い（90％）。この台付甕の口縁部は縄文原体の押捺によって波状を成し、胴部はやや膨らんだ洋梨形で、頸部に粘土紐の接合痕をもたない。また、わずかに内湾する低い脚台部をもつ。付近で出土した底径が小さく口径の比率の大きな鉢（１）も本跡に伴うと考えてよい遺物である。これらを指標ににある程度新旧の要素を含む土器群を表示したが、16～18は新しい遺構からの混入品である。鉢（１）は口縁部の文様帯が沈線で区画され、羽状の縄文３段で構成される幅広い文様帯をもつ。これに対して沈線区画がなく文様帯の幅が狭い16・17は明らかに後出の鉢である。また、18は口縁部に２段の文様帯をもつ装飾壺で、段部下端に刻み文と棒状浮文をもつSI－044の装飾壺５に類似するが、地模様にＳ字状結節文をもつ点が異なる。ほかに、流紋岩の砥石（19）と棒状の磨石（20）が出土している。



第35図　SI－054・056（2）・057


SI－058
V14－53
V14－55
SX－004
SI－074
SI－031
SI－067
V14－73
V14－75
入口
貯蔵穴
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
A
A′
B
B′
0 (1:40) 1m
0 (1:80) 4m
0 (1:3) 10cm
0 (1:4) 10cm
20 (石29)
19 (石50)

第36図　SI－058

SI－060・071（第37図）

1号墳北周溝（SX－004）の北5mに位置し、西側約1/4は調査区外にある。SD－018が北東コーナーから南西に横切って掘削され、本竪穴の床を掘り抜いている。調査時にはSD－018を境に北側がSI－060、南側をSI－071としていたが、平面形のつながりや床のレベルから見て同じ遺構と判断した。ただし、南側にめぐる壁溝が北側にはないなど不明な点もある。また、多くの攪乱坑があるのに加え、SI－078が重複しているため、竪穴内は極めて煩瑣な状況になっている。P1～P6が本跡に関わるピットと考えられるが、主柱穴と見られるのは深さ82.2cmのP4のみで、残りは支柱・貯蔵・入り口施設に用いられたものであろう。炉は北側の攪乱坑の辺りに設けられていたものと思われる。竪穴中央部でSD－018に切られたピットが1基検出されているが用途は不明である。

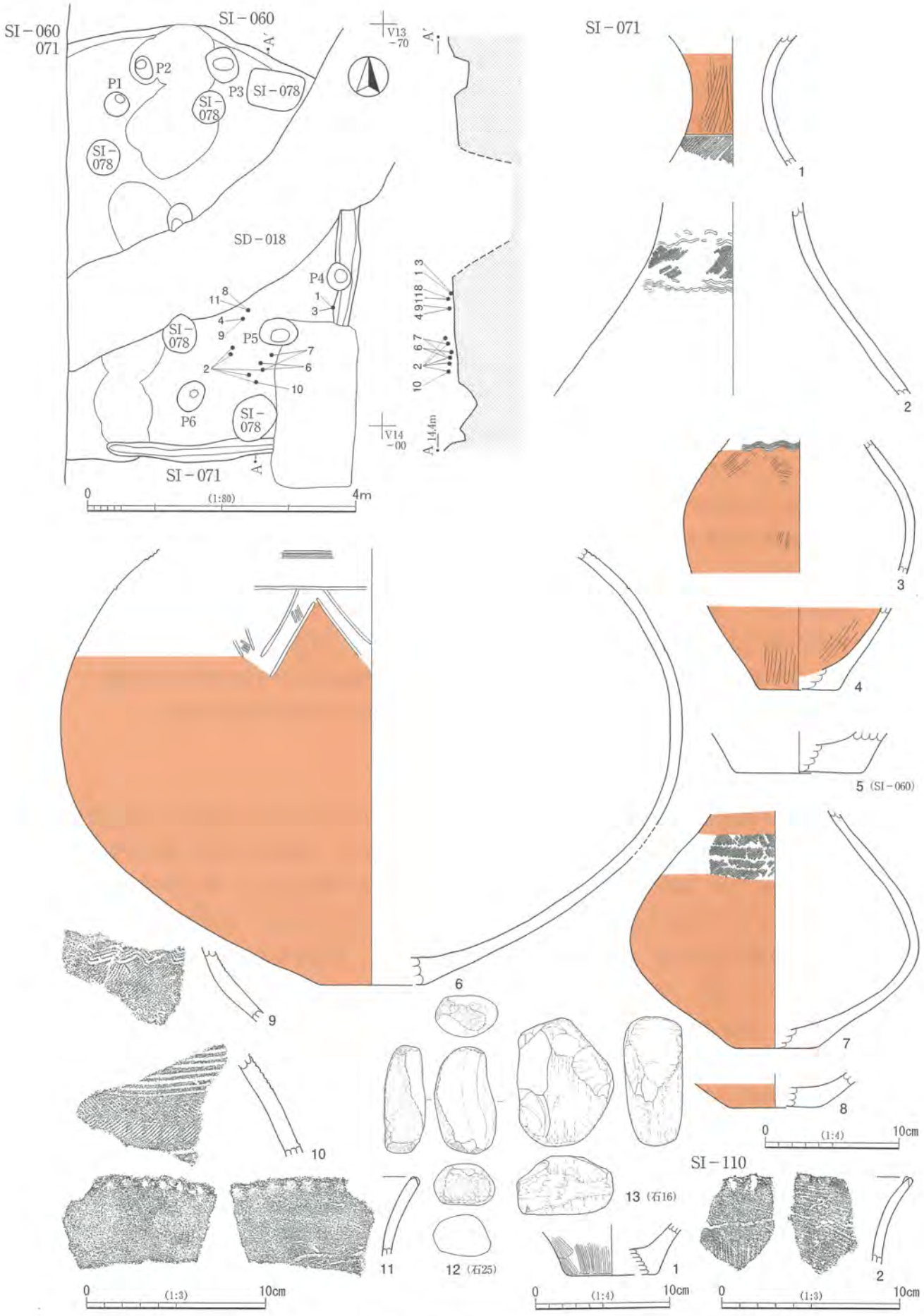
遺物（第37図、図版33・37・38・75） 北側（旧SI－060部分）にはまとまった遺物がなく、土器の小片のみである。図示に至ったのは甕底部1点（5）のみである。ほとんどの遺物は南半から出土し、遺存のよいものは南東に集中している。これらはすべて装飾壺（1～4、6～8）で、表面が摩滅している2を除くいて赤彩されている。いずれも長頸壺であるが、胴部の張らない3・4と胴部の張った6・7があり、文様構成にも新古の要素が見られる。頸部に櫛描波状文のある2、肩部に櫛描波状文をもち胴部の張らない3・4、沈線文と斜縄文をもつ細頸の1は中期後半古段階に遡ると考えられる。羽状縄文帯をもつ7は中期後半の新段階であろう。また、山形沈線文に縄文を充填した6はさらに新しい段階に見られる文様である。後掲のように、環濠出土の土器群は環濠が再度埋まりかけた段階で投棄された可能性が高く、後期前半の土器が主体であるが、中期後半古段階のものも含まれている。環濠の掘削が中期後半の古段階とすれば、本跡はその直前の住居となる。本住居は調査区内で唯一環濠と切り合う弥生時代の住居跡で、環濠と集落の関係を解く鍵を握るはずであるが、その前後関係を判断する資料は不充分である。

SI－066（第38図、図版35）

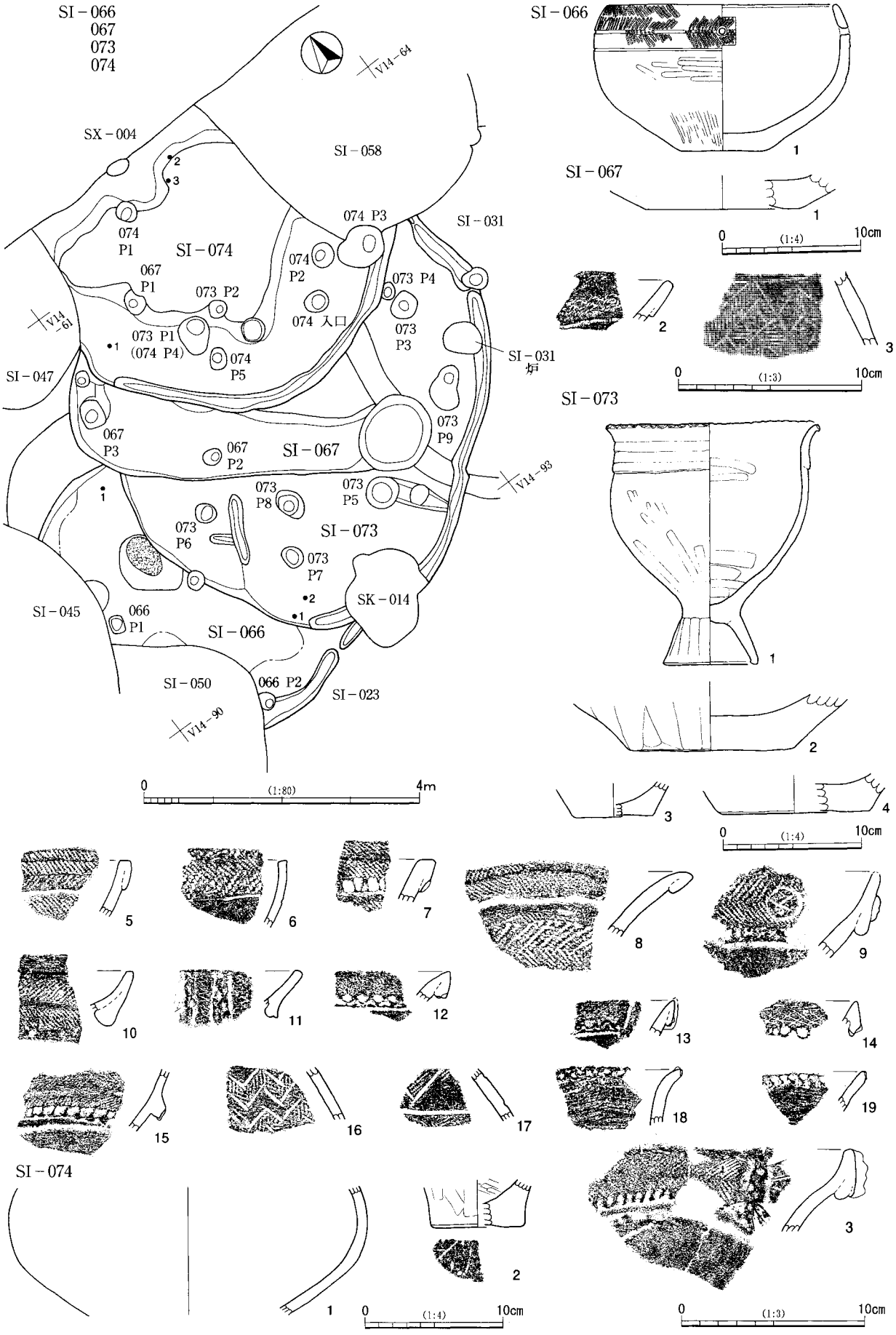
1号墳の墳丘下北縁近くに位置し、北側から東側はSI－067・073に切られ、西側にSI－045、南側にはSI－050が重複する。また、北西にはSK－017が重複して検出された。北側はわずかに壁の立ち上がりが残っている（1.5cm）が、南側は壁溝のみである。残存部の形状から推定すると、竪穴の平面形は円形である。中央部北寄りに大型の炉があり、40cmほど西側に主柱穴（P1）がある。これに対応する主柱穴はSI－073のP4の位置に想定され、再利用されている可能性がある。炉に対面する南壁際には入り口ピット（P2）が認められる。また、床の残存部にはかなり広範に硬化面が広がっている。本跡に伴うと判断できる遺物は少なく、図示できたのは北壁寄りで出土した鉢（1）のみである。口縁部が内湾する椀形の鉢で、口縁部は沈線によって区画され、3段の羽状縄文が充填されている。2段目と最下段の縄文帯間に沈線をもつのが特徴である。口縁部は1/4周ほど残存し、径5㎜×6㎜の小孔が1つ穿たれている。

SI－067（第38図、図版35）

上記のようにSI－066の北側に重複する竪穴住居である。SI－074が大きく重なるように重複し、さらに東側にはSI－031・073が絡んでおり、辛うじて南壁付近が残存する。南壁に沿って低い段があり、中央部側が高くなっている。主柱穴はSI－074の床下で検出されたP1のみが残存する。南壁中央部のP2は入り口ピットであろう。また、西コーナーのP3は支柱穴と考えられようか。遺物は砕片がわずかに出土している。



第37図　SI－060・071・110



第38図　SI－066・067・073・074

壺の底部（１）、口縁部（２）、胴部文様帯（３）を図示した。

SI－073（第38図）

SI－066の東側に重複する竪穴住居で、SI－067・074と重なるように重複し、さらに東側にはSI－031・058が絡んでいる。東から西にかけて楕円形の輪郭が残存し、長径6.2mほどの規模が推定できる。重複が激しいため竪穴内の施設はかなり錯綜しているが、以下のような配置が考えられる。主柱穴は４か所にあり、北東側のP1・P3は深く、それぞれ支柱（P2・P4）を伴っている。南西の２基（P5・P6）は比較的浅く単独で、その間にあるP7・P8は入り口施設を構成するピットであろう。P6を鉤の手に囲む根太痕も入り口施設に関連するものと思われる。また、南の壁際にも深い柱穴様のピットがあり、本跡の主柱穴である可能性が高い。これに対応する柱穴は検出されていないが、竪穴の規模から見て主柱穴は６本であったと推定される。

遺物（第38図、図版38）　本跡で最も遺存の良い遺物は、南西の壁際で出土した小型の台付甕（１）である。口縁部はヘラ状工具による押し引き風の押圧による波状口縁で、口頸部に４段の粘土紐接合痕があり、肩部に明瞭な段をもつ。脚台部は内湾気味の厚手のつくりで、分厚い粘土板による底部を積みあげて成形したため端部はややつぶれている。内外面ともヘラナデによる調整で、器表面はややざらついている。胴部全体が黒く変色しているが、明瞭な使用痕はなく、使用頻度は低いと思われる。他に大型の甕底部（２）があり、こちらが主な煮炊き具であろう。壺・鉢類は断片的な資料しか出土していない。鉢類は口縁端部に面をもち、単節の縄文帯を共通の主文様とする。壺の口縁部文様帯は、縄文帯に加えて網目状撚糸文があり、円形浮文・棒状浮文を貼付する例がある。また、口縁部下端に刺突文をもつ例が多い。壺胴部の文様には沈線区画の磨消縄文が見られる。

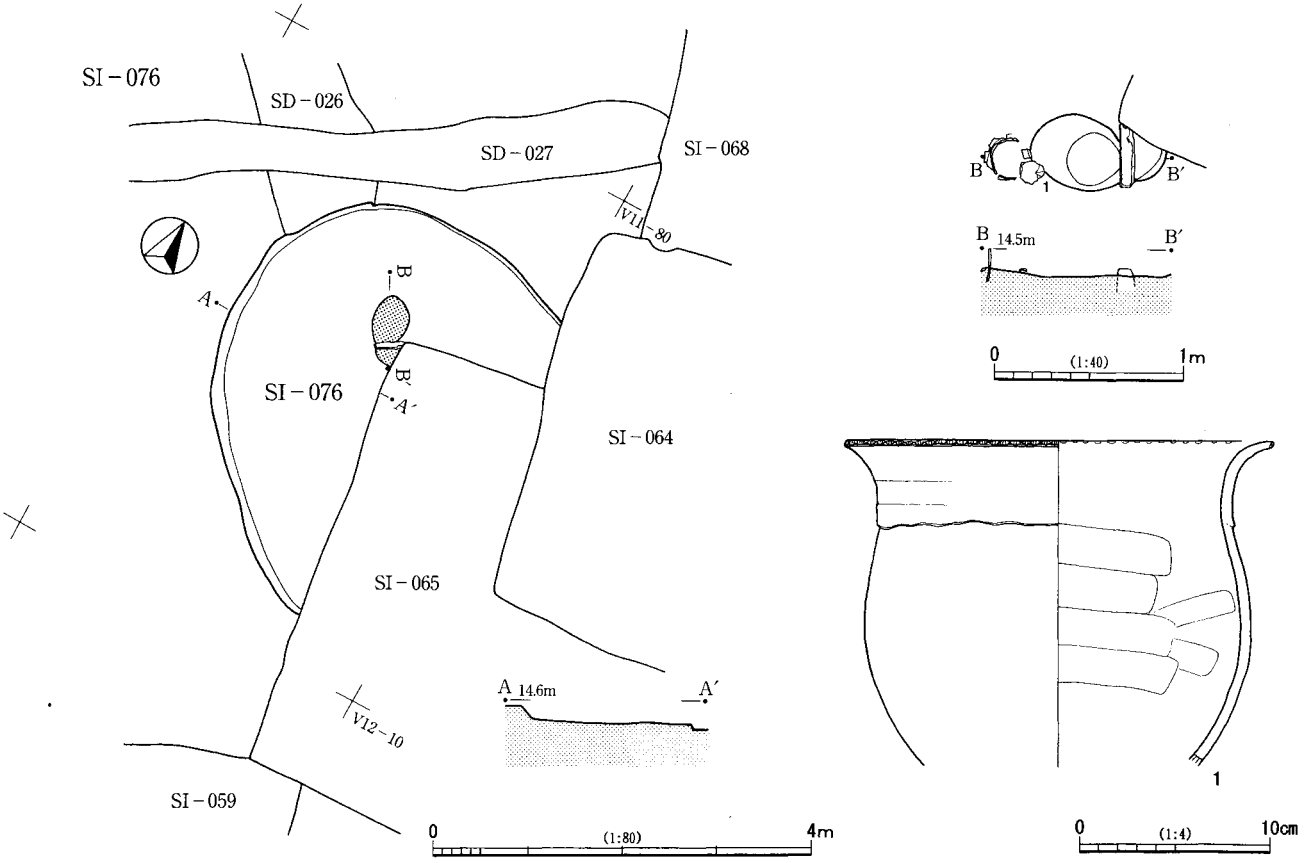
SI－074（第38図、図版38）

SI－067北側に重複する竪穴住居で、この１群では一番北側にあり、かつ最も新しい。北側約1/3はSX－004の掘削によって欠失している。主柱穴は北東の柱穴を除いて確認できる。南側の２穴は支柱穴を伴っている。炉は検出されていないが、南壁際に入り口ピットがあることからその対面辺りに炉が想定できる。竪穴中央部が一段高くなっているのは、硬化部を除いて掘り下げすぎた結果であろうか。

出土位置の分かる遺物は少ないが、装飾壺の口縁部（３）・胴部下半（１）・小型壺底部（２）を図示した。３は口縁部文様帯に羽状縄文と刺突文を用い、棒状浮文を貼付しており、強く内湾して立ち上がる。ソロバン玉形に膨らむ胴下半部（１）とともに後期後半に位置づけられる特徴である。

SI－076（第39図、図版17・39）

調査区中央部の西寄りに位置する。東側を古墳時代後期の住居跡SI－064・065に切られ、覆土上層にはSD－026がほぼ南北に縦走する。主柱穴は検出されていないが、北東寄りに炉石を伴う炉がある。炉石は火床部の南端に立てられ、その手前には浅い掘り込みが見られる。炉の北側で底部を欠く甕が据え置かれたような状態で出土した。甕の口縁部はヘラ状工具の押圧による波状口縁で、口頸部には粘土紐接合痕がある。胴部は球形化の傾向にあり、後期後半の特徴をもつといえる。ほかに図化できる遺物はなく、この１点によって本跡の時期を推定した。



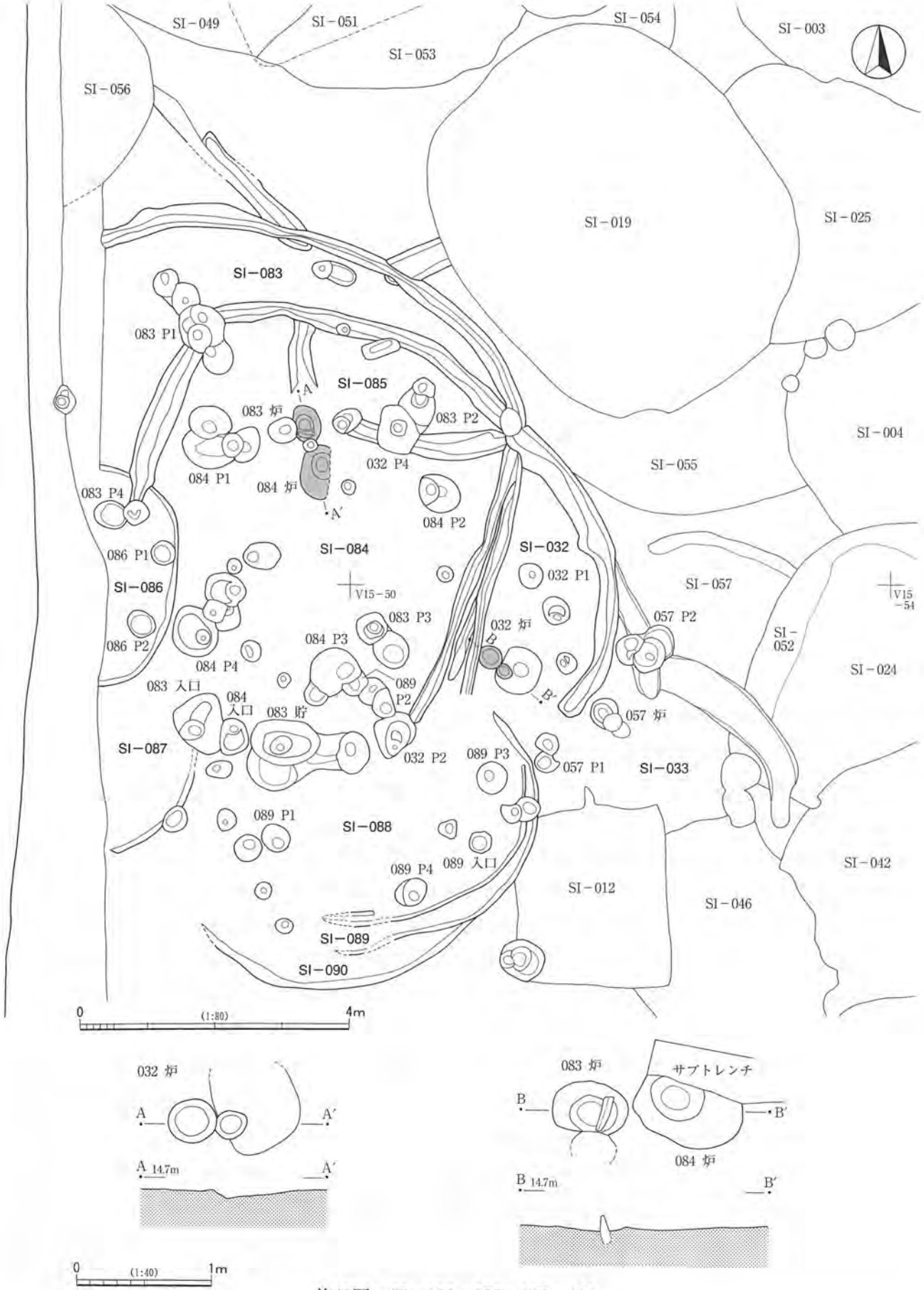
第39図　SI－076

SI－032・033・083～090（第40図、図版17）

1号墳の墳丘下西側に重複する竪穴住居群で、12m×8mの範囲に9棟が重複し、それらに絡む住居跡を含めると17棟が重複している。覆土の記録がなく、出土遺物もほとんどないため、平面図に示された切り合い状況と柱穴や炉の配置から個々の内容を推定した。

最も遺存の良いのはSI－084で壁溝の約2/3周が残り、主柱穴4基と炉も検出されている。主柱穴の位置からみて、長軸7.0m前後、幅5.4mの大型住居と推定される。主柱穴の深さは57.5cm～91.6cmで、本遺跡ではかなり深い柱穴である。いずれも小ピットが重複しており、建て替えや拡張が行われた可能性がある。北側の柱穴の間に炉が設けられており、長軸80cmにおよぶ大型の炉であった。炉の対面には多くのピットが錯綜しており、本跡の入り口施設を特定するのは困難であるが、長軸51cm、短軸38cmの楕円形のピットが該当すると考えられる。

次に内容が把握できるのは、SI－083である。SI－084の壁溝を切って主柱穴が掘削されており、より新しいことは確実である。主柱穴4基と炉が遺存しており、これらの配置から見ると隅丸方形の平面形が推定される。現状で東西軸長が約7mに及んでおり、SI－084よりさらに規模が大きいことが分かる。炉は南側に炉石を置くタイプで、北側の主柱よりやや内側に配置されている。長軸56cm、短軸38cmで、竪穴の規模の割りには小さい。入り口施設は炉の対面に位置する長軸86cm、短軸76cm、深さ50.5cmのピットが有力候補である。SI－084の入り口施設候補を切っている点でもその可能性が高い。また、東に隣接する横長楕円形のピットが長軸103cm、短軸66cm、深さ48.9cmの規模をもち、本竪穴の貯蔵穴ではないかと思わ



第40図　SI－032・033・083～090

れる。

その他の住居跡は輪郭の一部が残るものばかりで、竪穴内の施設を特定するのはさらに困難である。辛うじてSI－032・089の主柱穴と炉、あるいは入り口施設を推定することができる。SI－032は壁溝の1/4程度が検出されているが、SI－083・084との重複部が不明瞭で壁溝の行方も途絶えている。SI－032の柱穴と推定できるものは032P1～032P4の４基で、北側の２基が深く（71.8cm～86.8cm）、南側の２基が比較的浅い（31.9cm～40.0cm）。炉は南東側にあり、２基の小ピットを連ねている。配置だけを見ると入り口施設かと思われたが、焼土が検出されており、調査時に炉と認識されている。主柱穴と残存する壁溝から推定すると、長軸6.6m規模の楕円形の竪穴住居が復元できる。柱穴の切り合い（032P2と083P2）では083より新しいと考えられる。

SI－089は本住居跡群の南端に位置する３棟の重複住居に含まれている。いずれも南側の輪郭の一部しか残っていないため、これらの竪穴に該当すると思われる４基１組の主柱穴と入り口ピットを抽出した。これらの平面的な配置によってSI－089の施設とするのが最も妥当と判断した。主柱穴は深さ59.0cm～78.0cmの充分な規模をもっており、入り口ピットは南東の壁際に配置されている。これらの施設から推定される竪穴の規模は、長軸4.8m、短軸4.4m前後となり、ほぼ円形の平面プランが推定される。柱穴（089P2）がSI－084の柱穴（084P3）に切られていることから、この４棟の中では最も古く捉えることができる。

このほかの住居跡については、SI－085・086・087がSI－084に切られ比較的小規模であること、SI－088・090がSI－089よりも古い可能性が高いことを推定するにとどまる。これらの５棟にSI－089を加えた６棟については弥生時代中期に遡るのではないかと思われる。なお、SI－032の東側に壁溝の一部が残るSI－033は後期のSI－024・052を切っており、より新しい時期に築かれた竪穴と見られるが、西側のSI－032との重複部は途切れていて不明である。以上の切り合い状況をまとめると、085、（086・087）、（088・090→089）→083→084→032・033となる。

また、SI－032・033の上面で焼土塊と炭化物の分布が記録されている。さらに上層に住居跡が存在した可能性もあるが、それらの残留物が１号墳の墳丘築造に先立つ整地・祭祀行為に伴うことも考えられる。

３　環濠

本遺跡では２条の環濠が検出された。１条は調査区の北東隅から南東に向けて34.8mにわたって縦走するSD－016、他の１条は調査区南寄りのU13－97グリッドからV13－52グリッドに向けて北東方向に伸びるSD－018である。いずれも調査区外に伸びており、調査区で検出されたSD－018の直線距離は20.2mである。調査区の東側は滝川の河岸まで30m～60mの平坦面があり、流路の蛇行を考慮しても２条の溝が大きく東側へ張り出していたことは想定できる。2008（平成20）年度に滝川河川改修に伴う調査が行われ、本調査区と滝川の間の河川敷が発掘された。河川改修に伴う調査区で検出された溝の中に古墳時代以前と見られるものがあり、その位置はSD－016の北東延長上に合致する。その周辺は後世の遺構が営まれ、件の溝は８mを残して後世の遺構と重複し、削平されている。しかし、この溝の検出によってSD－016が本調査区からさらに13.4m北東に延びることが分かった。当時の河岸段丘が現在の中段面まで存在したとすれば、緩やかに段丘を回行してSD－018に至る環濠を復元することが可能である。また、双方から延びた環濠が河岸で途切れて、開口した可能性も考えられる。いずれにしても、調査区の西に広がる平坦面の規模をみると、少なくとも長径200mの環濠を想定することが可能である。

問題は、環濠と同時期の集落が環濠内にほとんど残っていないことである。これには古墳時代後期の集落設営に伴う削平も多少影響しているが、中世以降の大規模な造成と土地利用による影響が大きい。これは、１号墳墳丘下にひしめくように遺存した弥生時代の集落が１号墳の外側にはほとんど存在しないことによって明らかである。しかし、方形周溝墓は遺存しており、５棟の竪穴住居も遺存している。環濠存続時、あるいは廃絶直後の弥生時代の遺構がすべて削平されているとは言い難い。１号墳墳丘下は明らかに環濠の外側であり、後期の住居跡が主体であるが中期の例が４棟確認できる。これらの状況を見ると、次のような点が推定される。

（１）本調査区は環濠集落の外縁部に当たり、中期の集落の中心は西側に存在し、調査区は墓域となっていた。そして、後期の環濠廃絶後に居住域に変わった。ただし、環濠の外は中期も居住域であった。

（２）環濠内側の中期集落は後世に削平されてしまい、１号墳墳丘下の環濠外側の住居のみが残った。

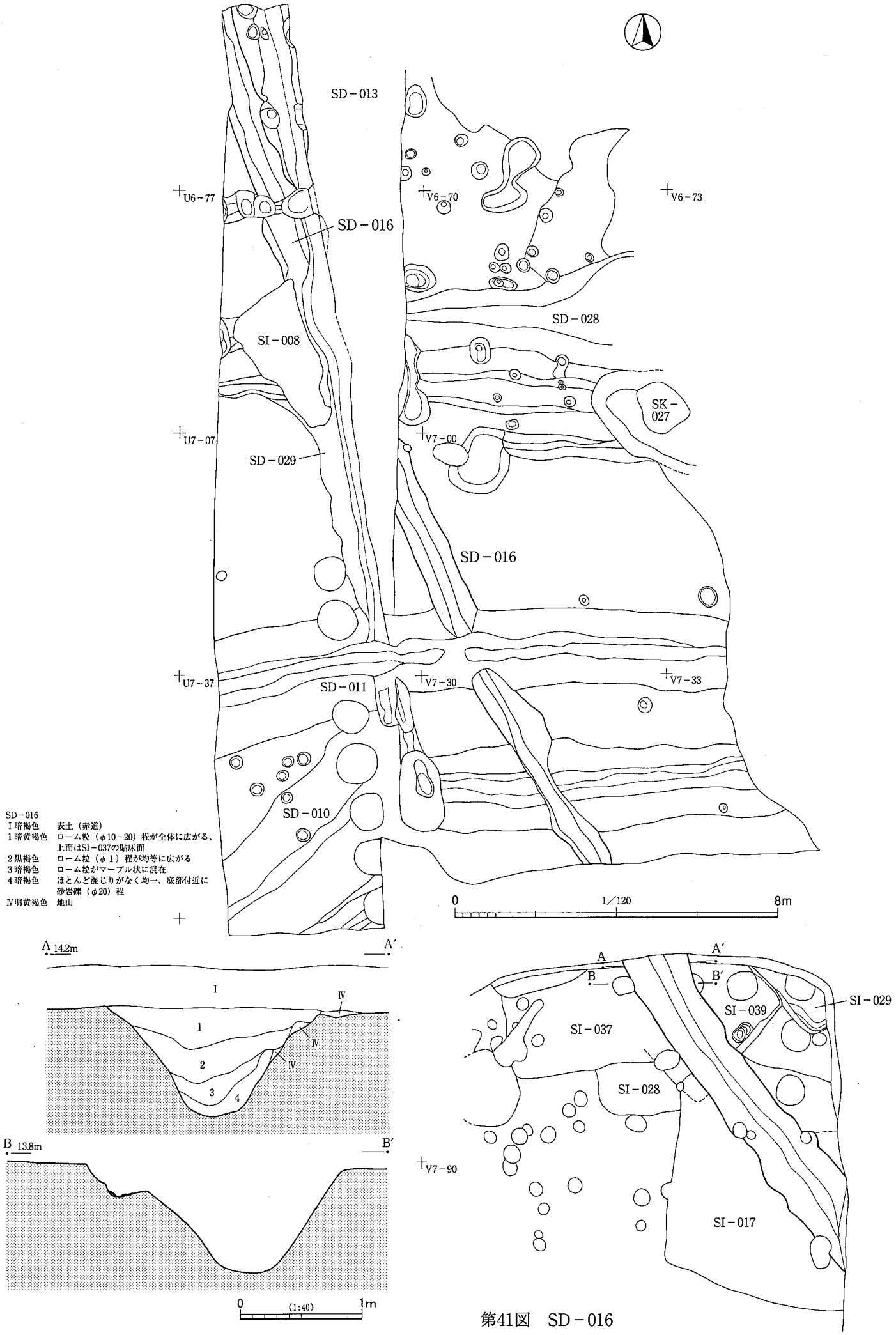
この場合、住群跡は環濠の内外に営まれていたことになり、環濠内には居住域と墓域が混在する。

県内の環濠集落の様相を見ると、環濠存続時も内外に間断なく居住域が営まれている例が多く、本遺跡の場合もその可能性を否定できない。しかし、環濠内に中期の方形周溝墓が遺存し、明らかに中期と分かる住居跡が存在しないことから、（１）のような状況を想定するのが妥当であると考える。

SD－016（第41図、図版７・８）

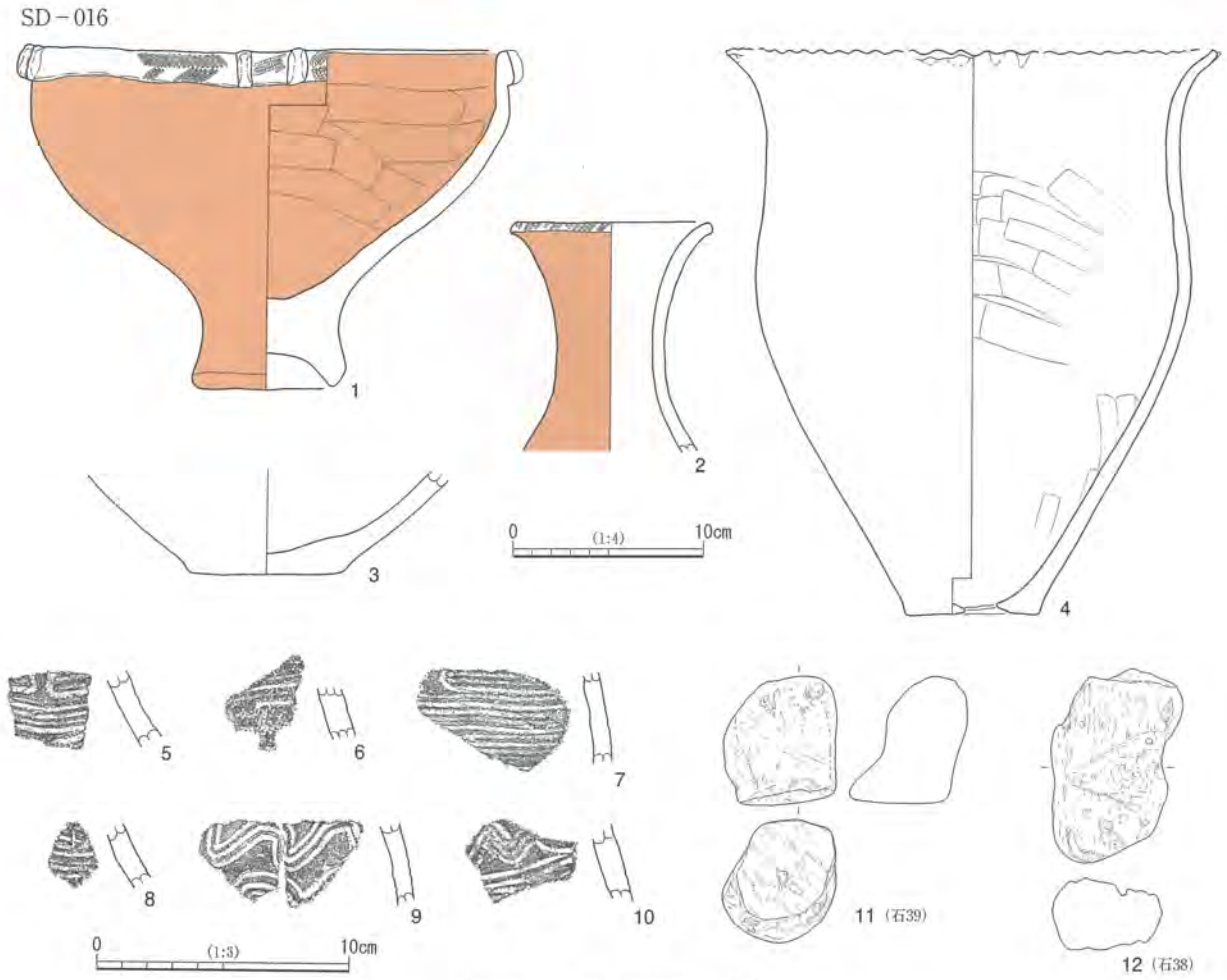
SD－016は縦横に走る後世の溝や竪穴住居等によって切られ、所々断絶している。また、調査区北端のＤ区と南に隣接するＣ区の間の現道は調査できなかったため2.6ｍにわたって未調査区が残った。Ｄ区は特に後世の溝が多く、SD－016の遺存は悪い。深さは最も深いところで37.8cm、南側の浅いところでは25.5cmになっている。Ｃ区に入ると中世遺構の削平が比較的浅かったと見え、古墳時代～古代の住居跡と共に弥生時代中期の方形周溝墓が遺存している。環濠の深さも76.5cm～88.9cmと深くなり、底面に向けて幅を狭める断面形の特徴が良く残っている。

遺物（第42図、図版54・55・61・77）出土位置を特定できる遺物はないが、この溝の時期を知る手がかりになる遺物が出土している。遺存の良いものに高坏（１）・壺（２）・甑（４）がある。高坏は極めて分厚いつくりで、脚が小さく「台付鉢」とも言うべき形態である。しかし、脚端部は再加工して面を整えており、本来の脚はもう少し高かったことが分かる。坏部は強く内湾し、幅の狭い折り返し状の口縁部には羽状縄文と２個一組４単位の短い棒状浮文が付く。甑も再加工して作られたものである。深鉢形の甕の底部を焼成後に削ってそぎ落とし、丁度中心部分に径1.7cmの孔を開けている。底部は砥石で磨ったように仕上げられ、穿孔部の周囲は極めて薄く作られている。外面は大部剥離しているが、火にかけた痕跡がなく、内面もきれいでヘラナデの跡が良く残っている。蒸し器として使用されたのではなく、濾過器として用いられたのではないだろうか。あえて類推するならば、酒などの特別な飲食物を漉したものと考えられる。２の壺口頸部は、口縁端部に狭い面を作り出して縄文を施した長頸壺である。なで肩で下ぶくれの器形が想定できる。これらの土器は中期の後半、君津市常代遺跡の第５期（宮ノ台式中段階）の特徴をもつといえる。この他に、大型壺の底部（３）、流水文系の沈線文をもつ壺の破片（５～８）、太い櫛描波状文をもつ壺（９・10）が出土しており、さらに１段階遡る（常代遺跡の第４期）時期から集落が営まれた可能性を示している。



SD－016
Ⅰ暗褐色　表土（赤道）
1暗黄褐色　ローム粒（φ10－20）程が全体に広がる、上面はSI－037の貼床面
2黒褐色　ローム粒（φ1）程が均等に広がる
3暗褐色　ローム粒がマーブル状に混在
4暗褐色　ほとんど混じりがなく均一、底部付近に砂岩礫（φ20）程
Ⅳ明黄褐色　地山

第41図　SD－016



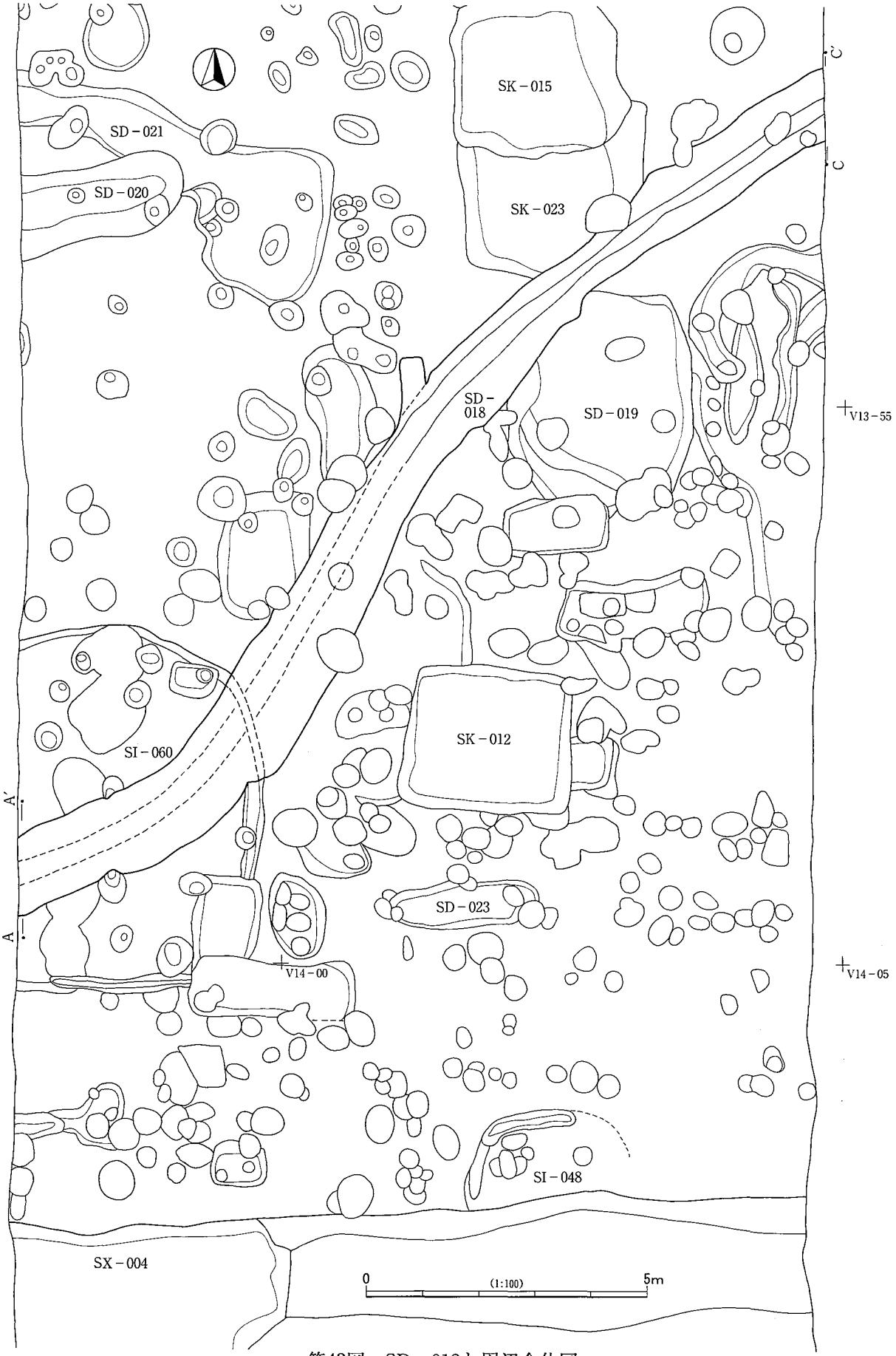
第42図　SD－016出土遺物

SD－018（第43～45図、図版３・９）

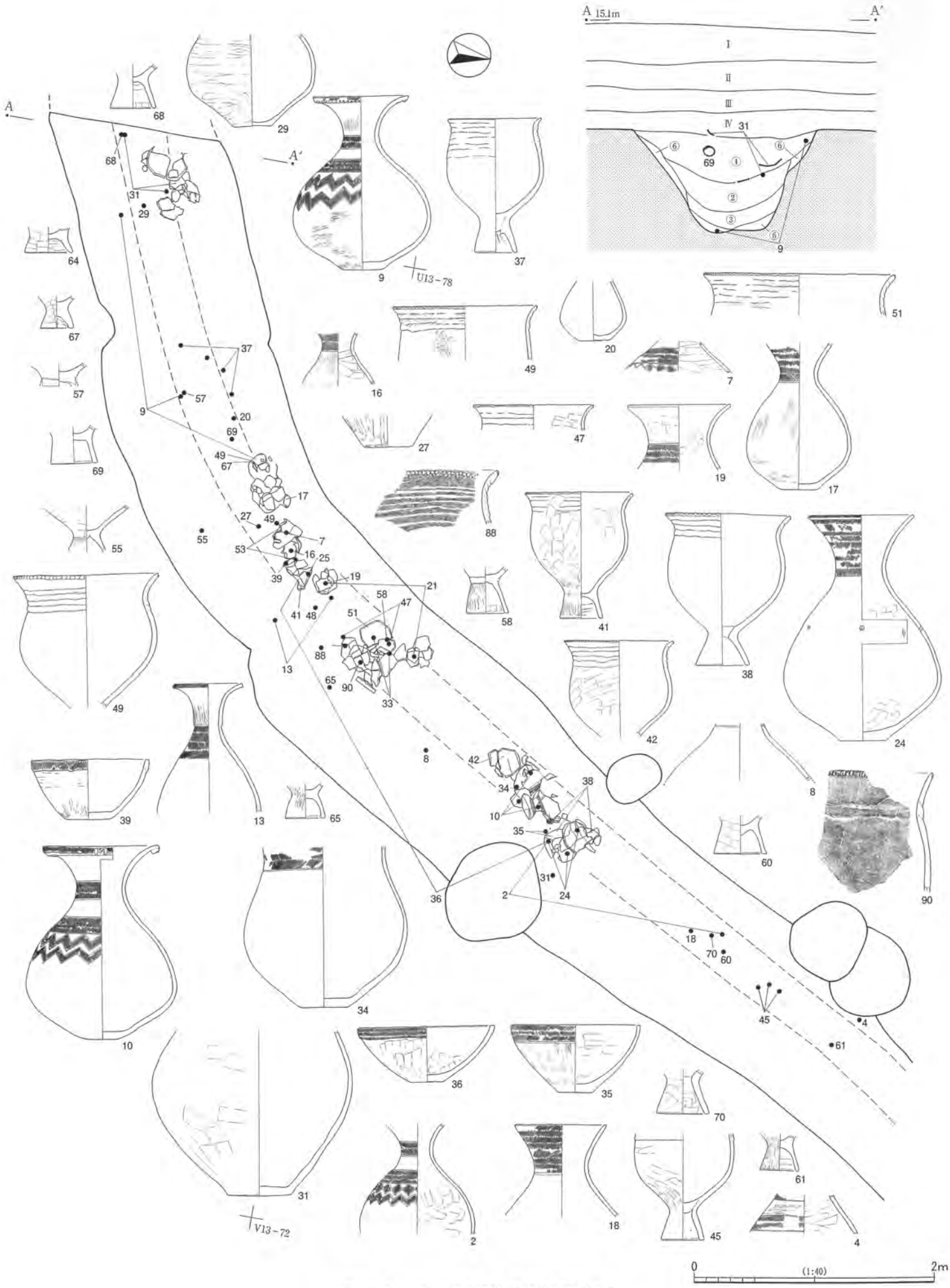
SD－018は中世以降の遺構が密集する区域にあり、それらを縫うようにして緩やかに蛇行している。中世以降に相当改変を受けたと考えられるが、溝の中からは夥しい量の土器群が出土した。溝の深さは北東端で72cm、中央部で52cm～73cm、南西端で86cmあり、断面は開口部の広いU字形に近い。出土層位を見ると、覆土には焼土粒と炭化粒を含む暗褐色～黒褐色の粘質砂が堆積し、ほとんどの遺物は覆土最上層から出土し、溝底面から45cm～60cm上の①層に集中している。また、溝の壁崩落層から出土した壺（11）以外は下層の土器片が最上層の土器と接合しているため、これらの土器は環濠がある程度埋まってから溝内に投棄、あるいは廃棄されたと考えてよいであろう。

北西端の土層観察によれば、④～⑥層を含む覆土が堆積して環濠がある程度埋没した段階で再掘削が行われ、その後堆積したのが①～③層であるという。また、②・③層が人為的に埋め戻されたことを裏付ける根拠が見当たらないため、自然堆積層と捉えられる。

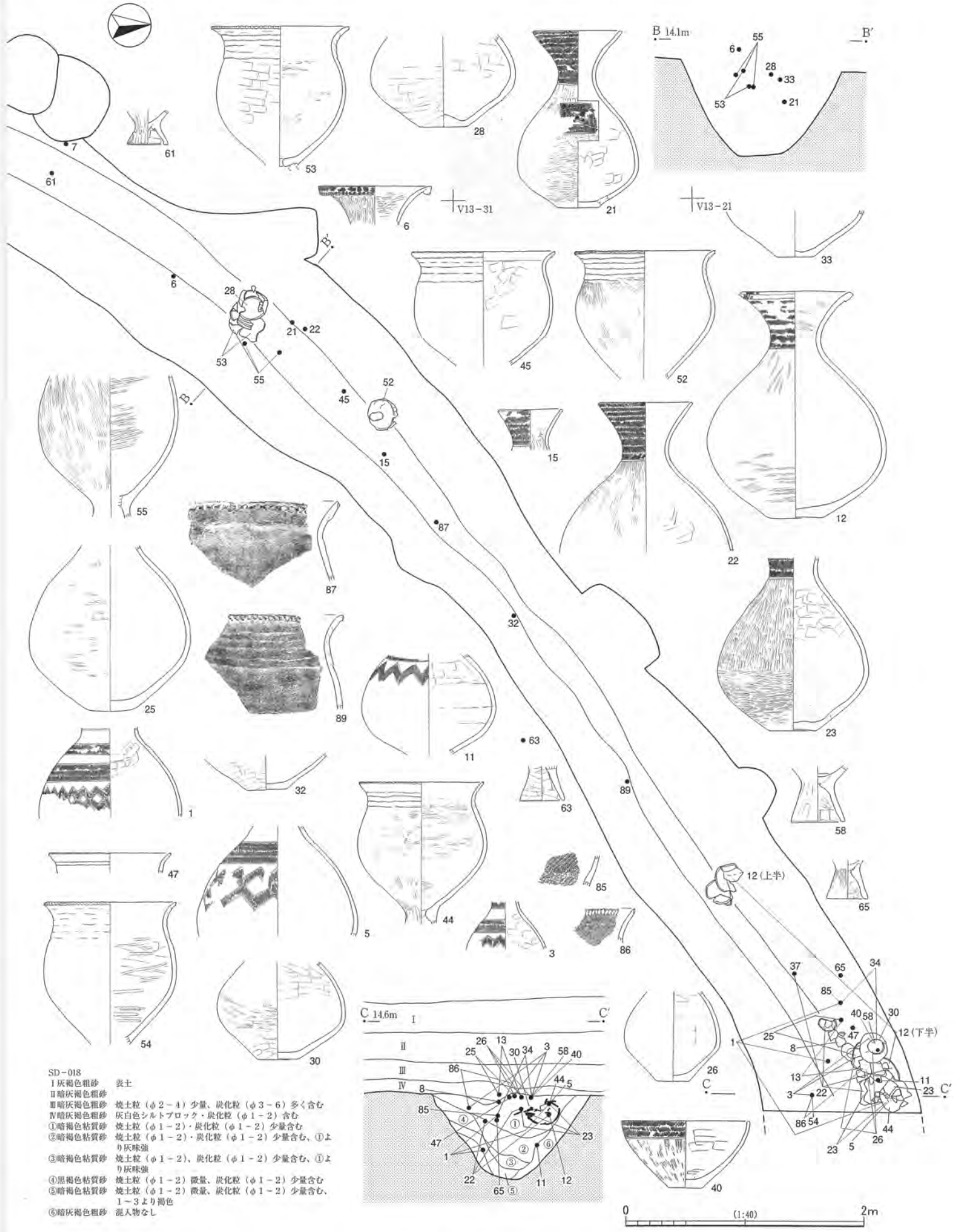
遺物（第46～51図、図版54～61・73・74・77・78）　土器は72点を図化し、さらに拓本を10点掲載した。壺は34点図示し、34の広口壺を除く33点が長頸壺である。長頸壺は、Ⅰ．沈線文区画文はなく縄文帯のみで文様が構成されるもの（12、17、24など）、Ⅱ．沈線文で区画された文様帯に縄文を充填するもの（９、10、21など）がある。



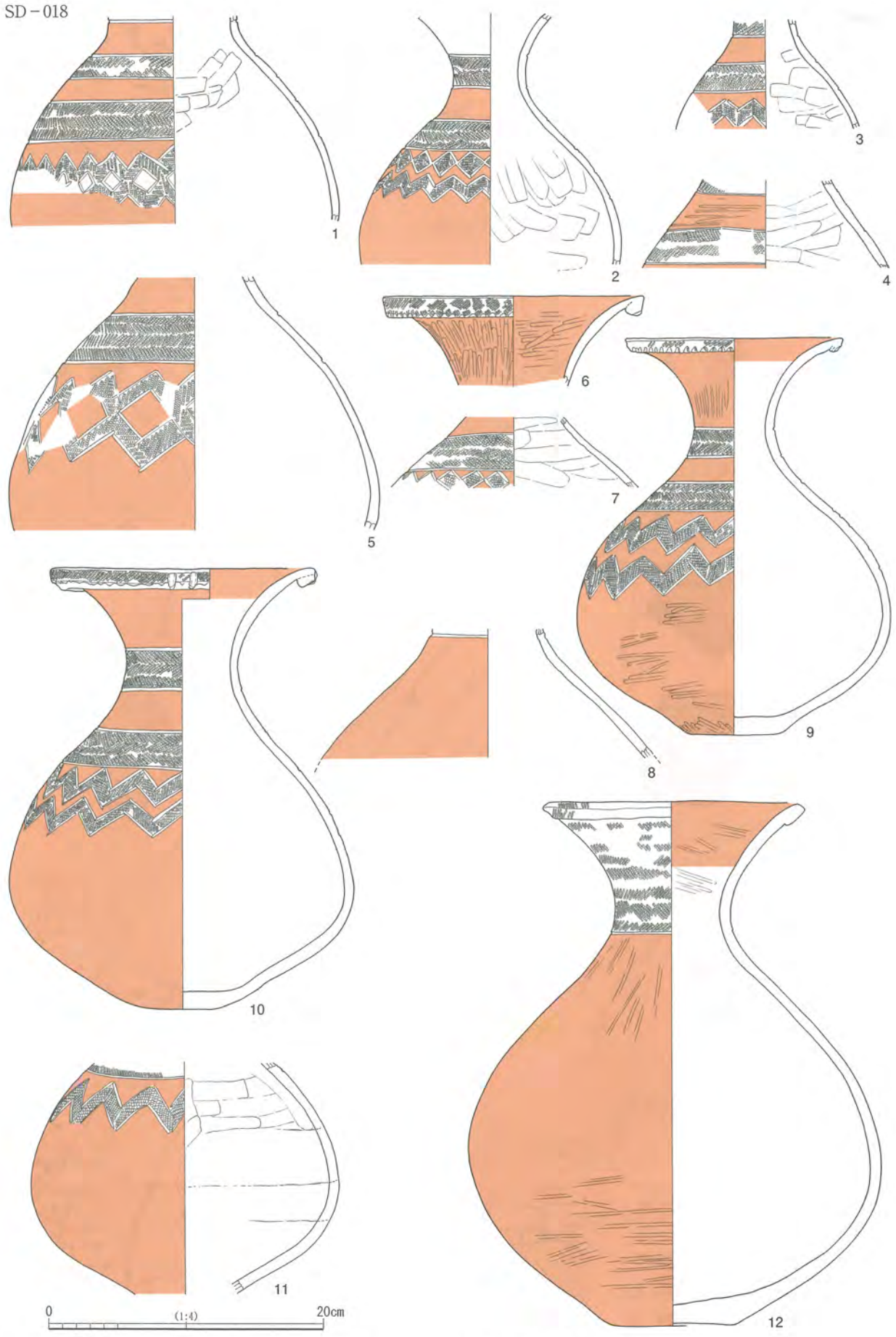
第43図　SD－018と周辺全体図



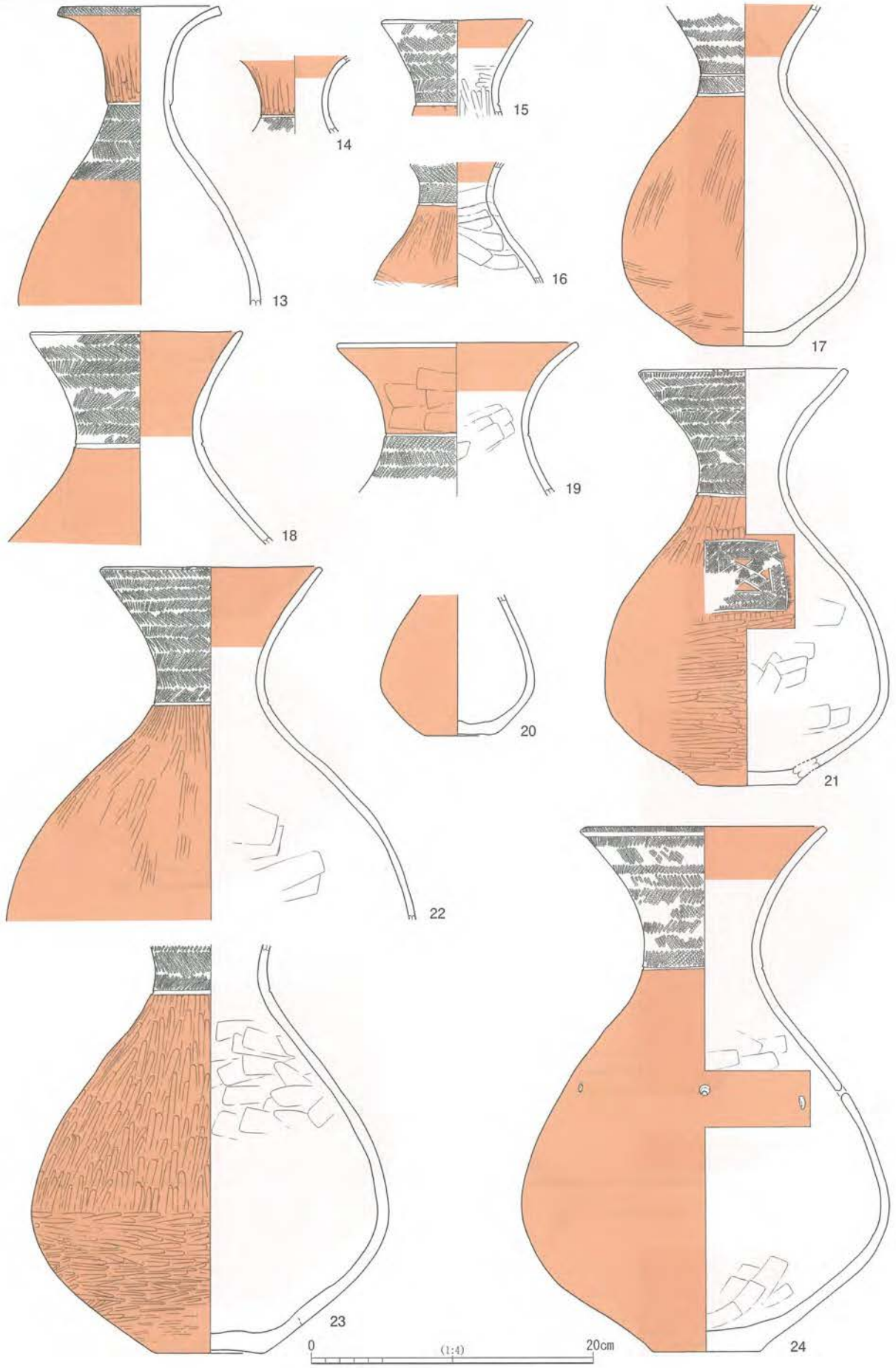
第44図　SD－018遺物出土状況（1）



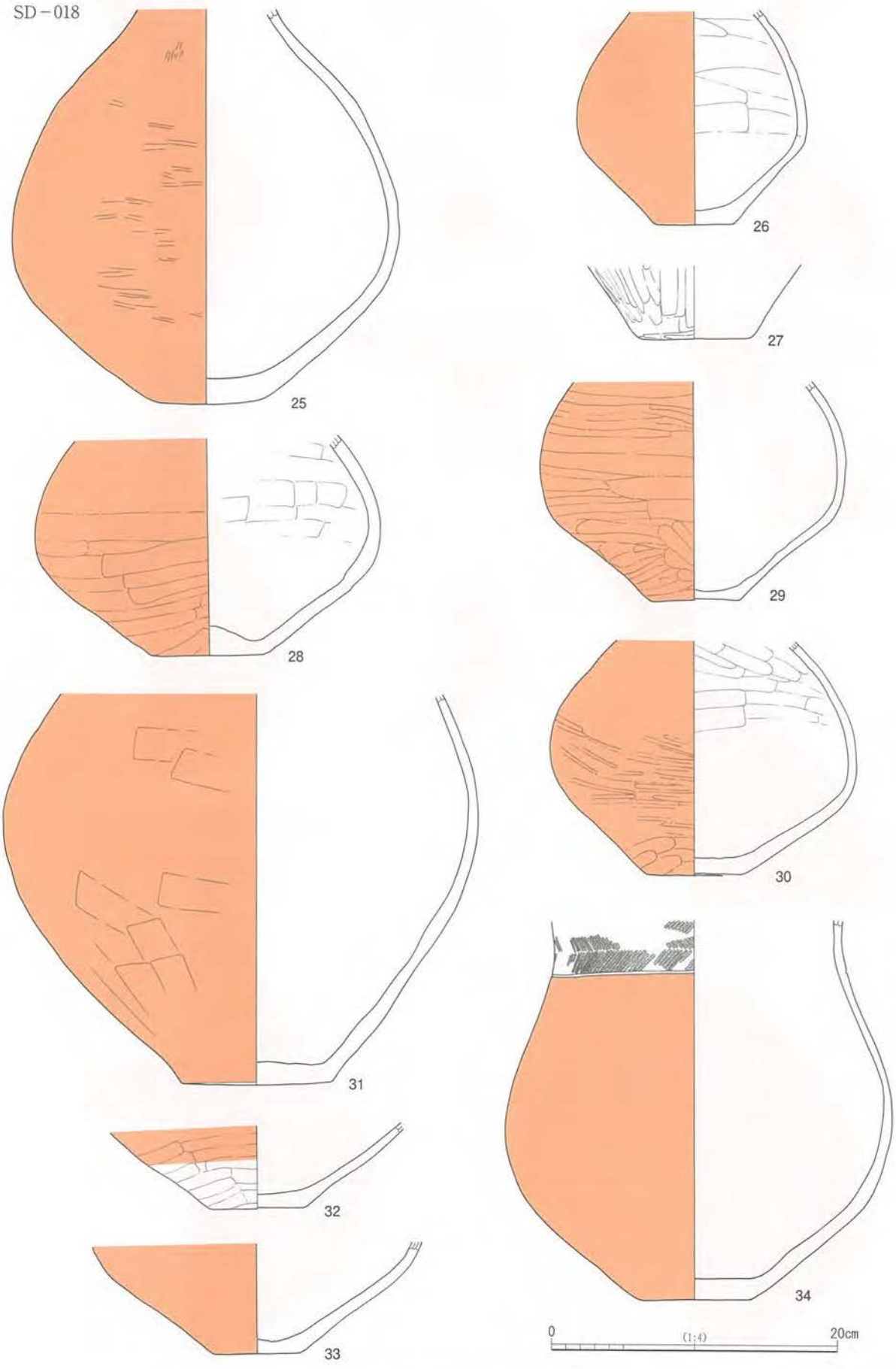
第45図　SD－018遺物出土状況（2）



第46図　SD－018出土遺物（1）

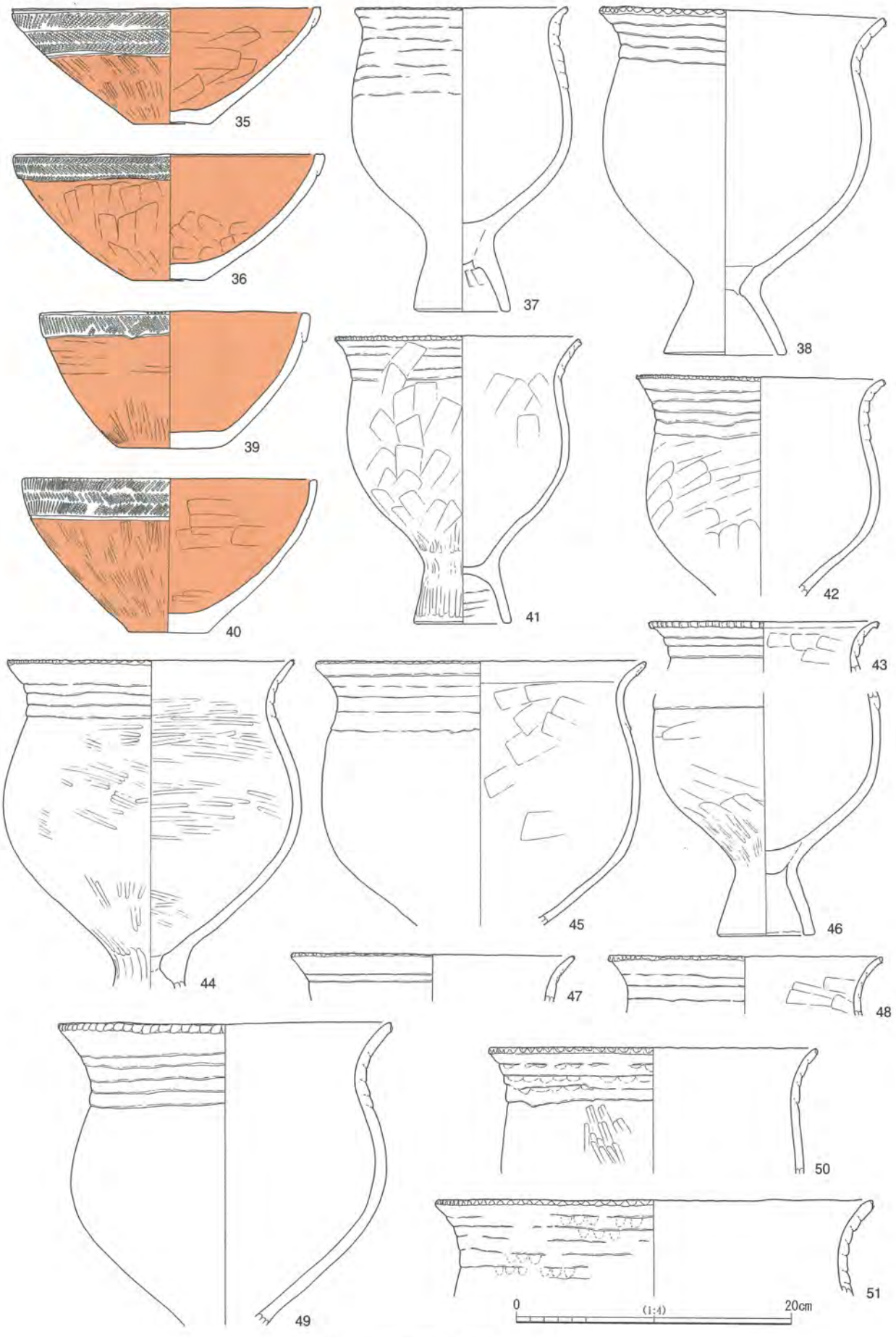


第47図　SD－018出土遺物（2）



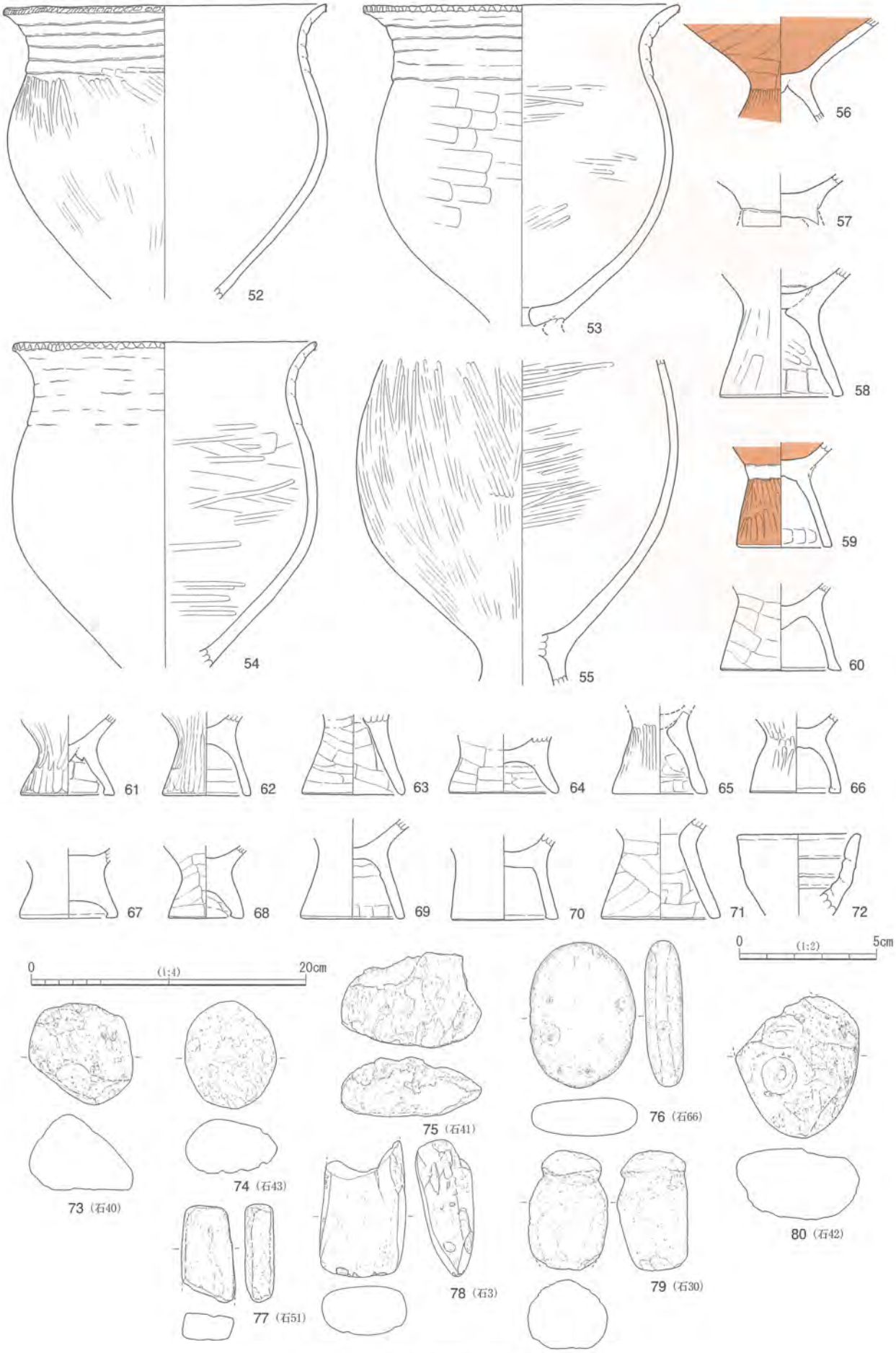
第48図　SD－018出土遺物（3）

SD－018



第49図　SD－018出土遺物（４）

SD－018



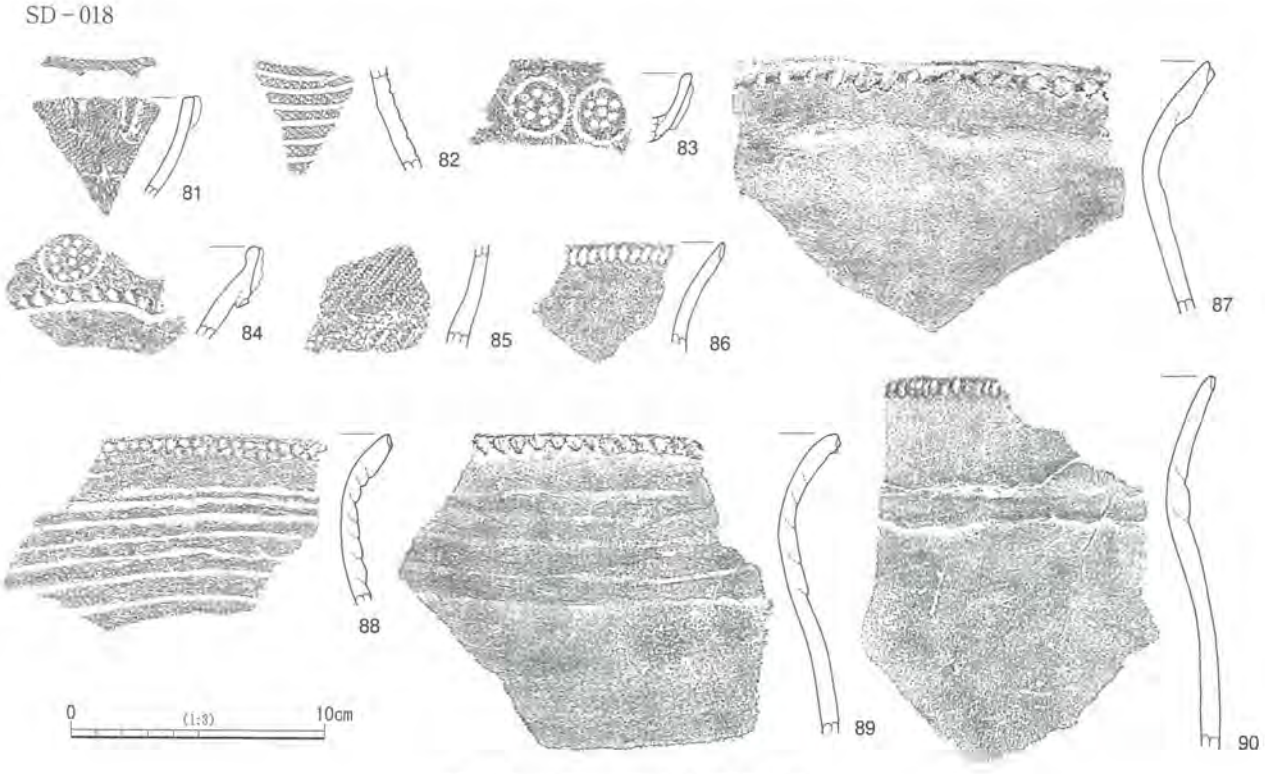
第50図　SD－018出土遺物（５）

さらに、Ⅰは口縁部～頸部に文様帯をもつもの（Ⅰ－a）、口縁部と肩部に文様をもつもの（Ⅰ－b）、口頸部に文様がなく肩部に文様をもつもの（Ⅰ－c）に分けられる。また、口頸部の文様帯は沈線によって区切られているが、13は沈線ではなく段が作り出されており、著しく撫で肩で細身の器形も含めて中期後半の特徴を残す例である。Ⅰ－aには口縁端部に面をもち、縄文が施される例（21、24など）、端部には明瞭な面がない例（18）、折り返し状の口縁部をもつ例（12）があり、6～10条の羽状縄文帯が施されている。なお、21のように肩部に沈線による方形区画の文様をもつ例、24のように胴上部に小孔（3か所）をもつ例もある。Ⅰ－bは13が該当し、肩部に4条の羽状縄文帯がある。Ⅰ－cは19が該当する。

Ⅱは口縁部・頸部・肩～胴上部に文様帯をもつ例で、1～7、9～11が該当する。口縁部は折り返し状で、縄文帯の下端に刻み文をもつ。頸部・肩部の文様帯は帯状の沈線区画に2～3条の縄文を施したものに限られるが、胴上部の文様には山形沈線文を様々に組み合わせて縄文を充填したバリエーションが作り出されている。なお、34は北関東起源の甕形装飾壺で、本遺跡では極めて希な例である。

全容の分かる鉢は4点あり、いずれも口縁部に縄文帯の装飾をもつ。折り返し状口縁のもの（35・36・39）と口縁下端に沈線を廻らすもの（40）がある。

甕は台付甕が圧倒的に多く、平底甕は全容の分かるものが1点もない。台付甕はいずれも口頸部に多条の粘土紐接合痕があり、口縁部は刻みによる波状口縁である。内外面とも調整はヘラナデ、あるいはミガキ仕上げである。底部は厚みのある粘土板、あるいはホゾ状の突起を作り出した円板を脚台にはめ込んで成形しており、38・44のように粘土板がすっぽり剥がれてしまった例も見られる。また、53は焼成後に底部の中央に小孔を開けて丁寧に調整を加えた例で、酒などの漉し器として用いられたものと思われる。56～59は高坏の底部から脚部と見られるものである。赤彩や脚接合部の粘土帯貼付痕によって台付甕の脚台と区別したが、遺存の悪いものには区別のつかないものがある。60～62、64～70は台付甕の脚台、63・



第51図　SD－018出土遺物（6）

71は器台の脚部である。72は分厚い手づくねの鉢である。

土器の他に、石器・石製品も出土している。砂岩製と見られる蛤刃石斧（78）、流紋岩製の石錘（79）のほか、砥石として使用された軽石（73～75・80）、流紋岩製の砥石（77）、砂岩製の砥石（76）がある。

4　土坑

SK－002（第52図、図版18・43）

C調査区の北端に位置する円形の土坑である。上部を中世以降の溝SD－008に切られている。長径1.9m、短径1.6mで、深さ1.642mまで掘り下げたが底面には達していない。砂地で壁が崩落し、危険なため底面の検出を断念している。覆土下層から壺の頸部（2）と底部（3）が出土し、おそらく同一個体であると思われる。また、覆土内には別の壺口縁部の破片（1）もあった。1の口縁部文様は2段の斜状縄文から成り、直立した口縁の端部にも縄文が施されている。これらはいずれも細長い頸部をもつ長頸壺で、中期後葉に位置づけられる。また、2段の縄文を羽状ではなく斜状に重ねる文様の特徴は中期後葉の中頃に遡る。

SK－005（第52図）

SK－002から25m南に位置する長径1.4mの円形土坑である。後世の削平に拠るものか、非常に浅く、壁の立ち上がりはわずかに13.6cmになっている。底面でハケ調整の甕（1・3）が出土している。1は胴下半、3は胴上部の破片と見られ、3には羽状条痕の一部が確認できる。他に覆土から刺突文をもつ甕口縁（2）、甕底部（4）が出土している。中期後葉古段階の土器であろう。

SK－006（第52図、図版18・43）

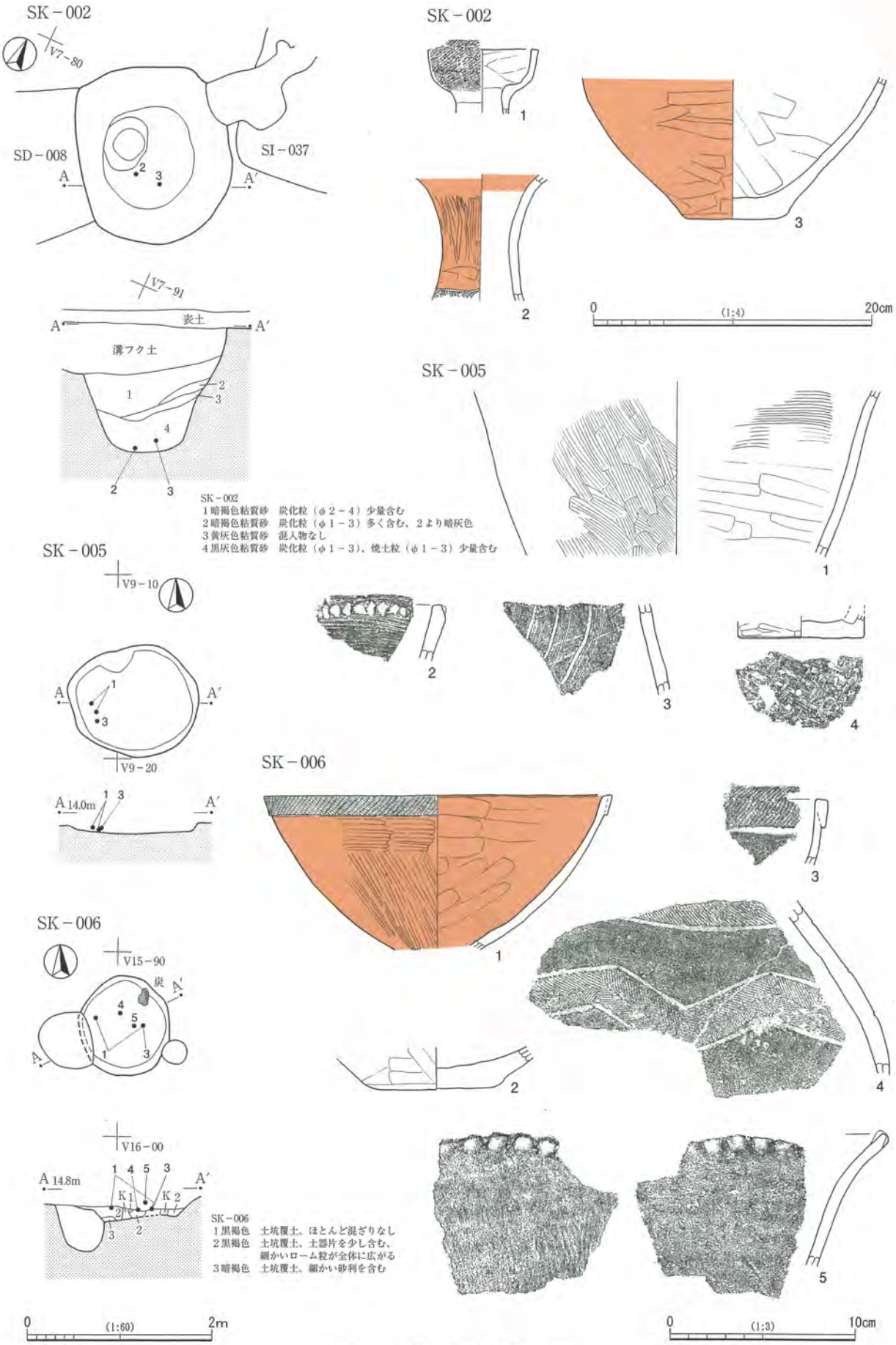
1号墳墳丘下の南西隅に位置する径1.1mの円形土坑である。弥生時代後期の住居SI－030ABと重複し、SI－030Bの壁際で検出されている。土層断面の記録では本土坑がSI－030Aの柱穴を切っている。出土した土器には中期後葉古段階の甕口縁部（5）、後期初頭の高坏坏部（1）・鉢口縁部（3）、後期前葉の壺肩部～胴部（4）があり、最も遺存の良い高坏坏部が伴うとすれば、SI－030Aを拡張したSI－030Bに関連した土坑である可能性が高い。

5　方形周溝墓

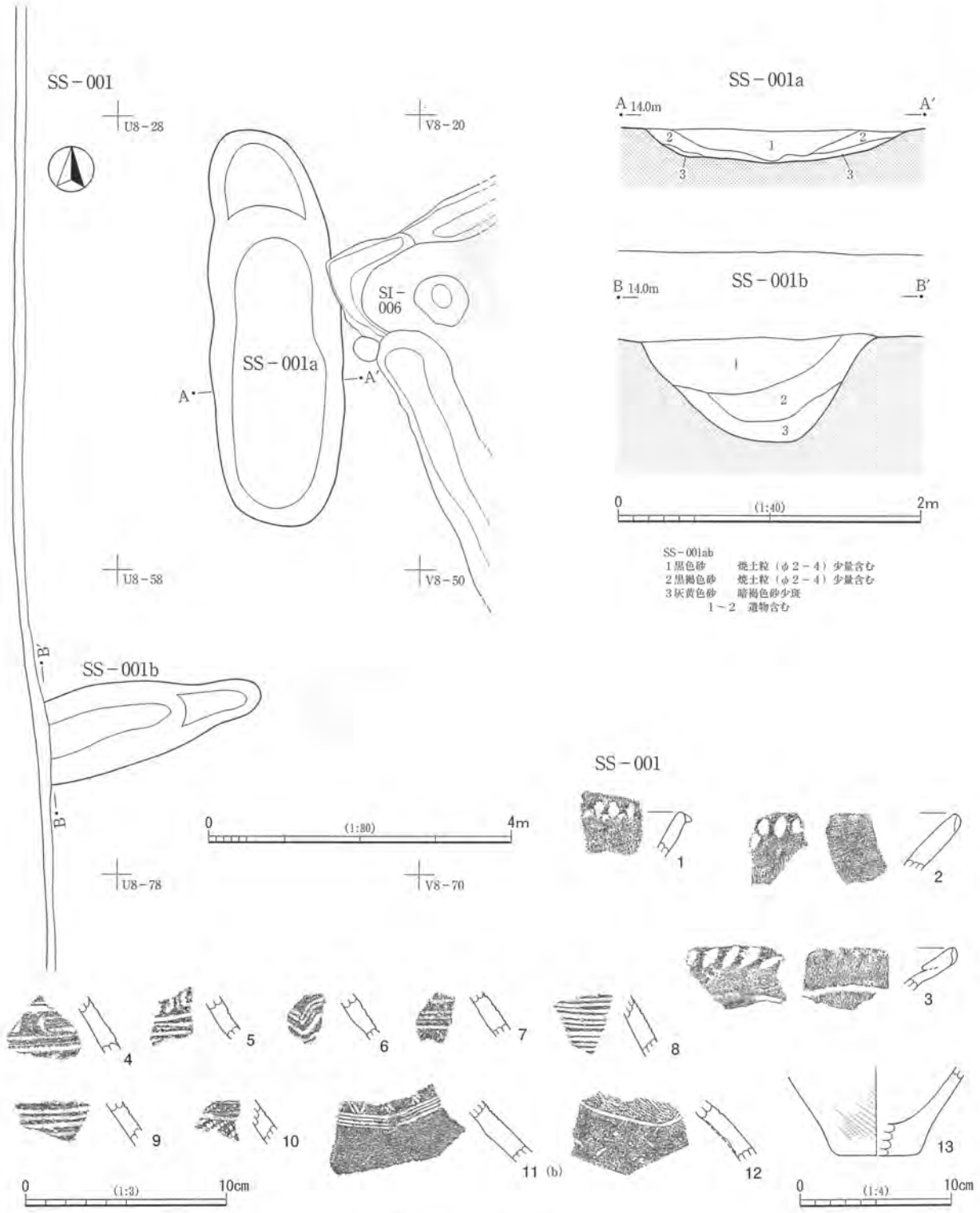
方形周溝墓は、北環濠SD－016の南西と南環濠SD－018の北側に分布する。その間の45mは中世以降の土地改変によって古代以前の遺構は削平されており、方形周溝墓群の分布も途切れている。

SS－001（第53図、図版44・45）

C調査区の北西端に位置する。東溝（a）と南溝（b）の東半分が検出され、西溝は調査区外にある。北溝は東側が調査区内にあると思われるが、削平されたものか遺存していない。東溝は長さ5.15m（検出面、以下同じ）、幅1.8mで北側に半円形のテラスをもつ。断面は浅い舟底形で、深さは23cmである。南溝は長さ2.85mが調査され、幅1.15mで東側にテラスをもつ。断面U字形の溝で、深さは79cmである。覆土から刺突文や刻み文のある甕口縁（1～3）、沈線文（4～9・11）、刺突文（10）、磨消し縄文（12）で飾られた壺肩部～胴部、甕底部（13）が出土した。13の表面は摩滅しているが、木口状工具の条痕、ある



第52図　SK－002・005・006



第53図　SS－001

いは粗いハケ調整が確認できる（以下貝殻条痕調整と区別するため粗いハケ調整とする）。中期中葉～後葉にかかる土器群である。

SS－002（第54・55図、図版44・45）

C調査区の南西端、U12－27～47に位置する。環状の溝SD－022、古墳時代後期の住居SI－041に切られ

ている。東溝の一部が検出され、他は西側の調査区外にある。現状の東溝は長さ6.8m、幅1.4mで、深さは42.4cmである。溝覆土から出土した４点の土器片を図示した。１は沈線による擬流水文、２は櫛歯による横線文・連続刺突文で飾られた壺、３は刻みによる波状口縁をもつ甕で外面にはハケ状工具による羽状文がある。４はハケ調整の甕底部である。これらの土器は中期中葉の新段階に位置づけられる。

SS－003（第54・55図、図版３・19・44・45・79）

SS－002の２m南東に隣接する。本遺跡では全容の分かる唯一の方形周溝墓で、墳丘はほとんど東西南北に沿って築かれている。古墳時代後期の住居群や後世の溝・土坑に重複しているため墳丘部は削平されているが、周溝は東溝の南半を除いて残っている。墳丘規模（周溝内側下端間）は南北9.2m、東西8.8mである。周溝は後世の削平によってかなり削り込まれているため、四隅が大きく途切れている。現状の計測値は表３に示した。北溝（ａ）以外は周溝内に一段低い掘り込みがあり、東溝（ｂ）は中央部北寄り、南溝（ｃ）は東西に２か所、西溝（ｄ）は南半に掘り込みが認められる。上総地域の例ではこのような掘り込みに埋葬が行われおり、本例もその可能性が高い。東溝出土の壺（１・２・12）は溝内の掘り込みに伴うと考えられる。１の頸部下端には斜縄文帯の一部が確認できる。また、２・12は粗いハケ調整である。

このほかに、溝出土土器には擬流水文をモチーフにした沈線文、沈線区画の帯縄文、刺突文、磨り消し縄文による結紐文をもつ壺が見られる。口縁部に擬流水文をもつ広口壺（３）は房総では極めて希有な出土例である。甕には口縁部に細かい刻みのあるハケ調整甕、押捺による波状口縁のハケ調整甕がある。これらは中期中葉新段階を中心とする土器群といえよう。また、18・19のような折返し状口縁に縄文を施した中期後葉に出現する壺の破片も含まれている。

SS－004（第54図）

SS－003西溝の1.5m南西に隣接する。北溝の東半と思われる周溝のみが検出され、西半は調査区外にある。これに組み合う東溝は削平されて痕跡がないが、南溝の可能性のある遺構（SD－020）が中世の遺構を切る溝として記録されている（第12図・129図）。舟底形の断面形態から見て、本周溝墓の南溝の可能性が高い。これを南溝と仮定すると、南北の墳丘規模は9.6mとなる。遺物は土器の小片のみである。

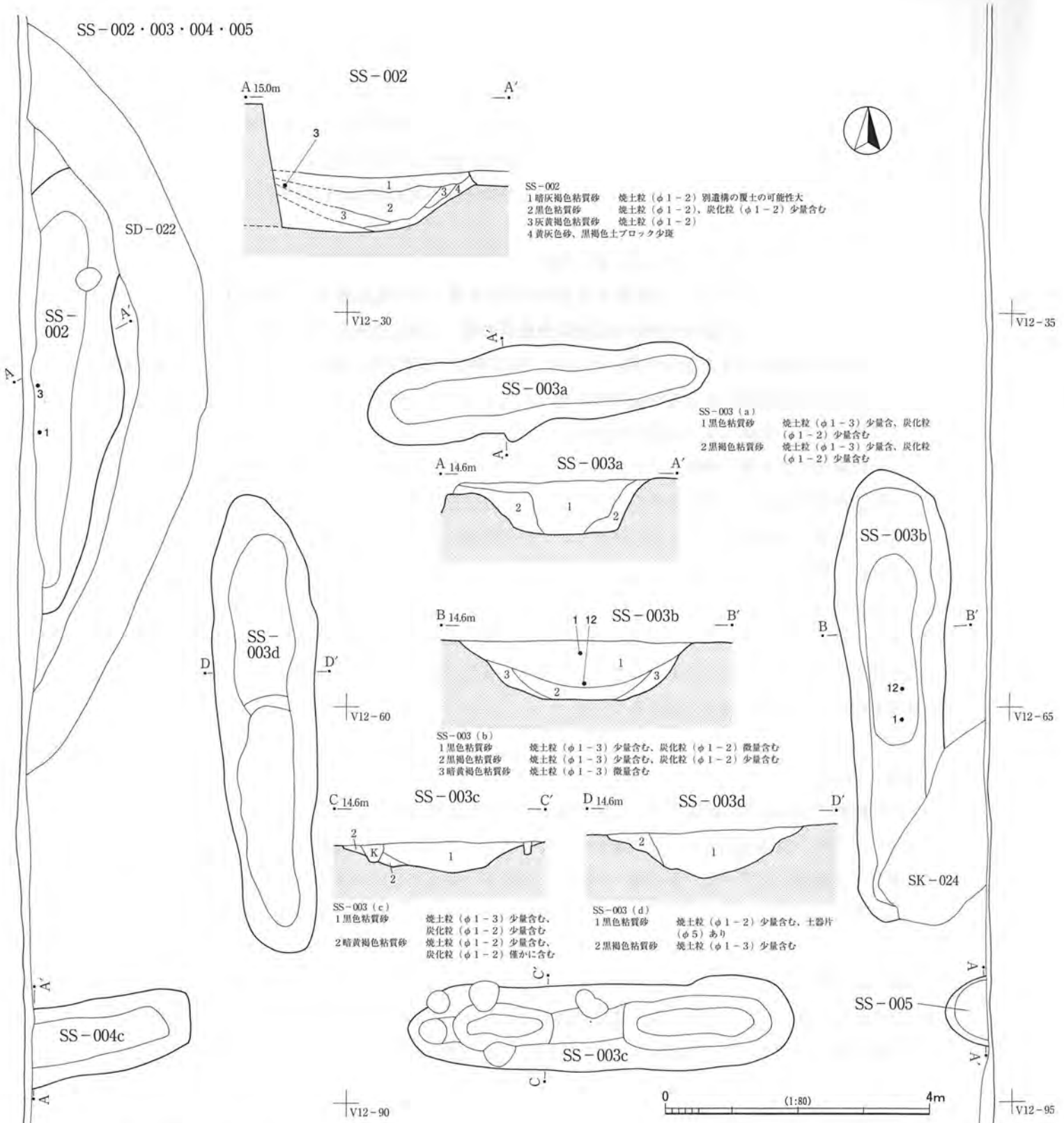
SS－005（第54図）

SS－003東溝の1.5m南東に隣接する。北溝の西端と思われる周溝の一部が検出され、大半は調査区外にある。西溝があったと推定される箇所は中世の土坑（SS－016・020）があり、既に消失していると考えられる。本跡に伴う遺物は出土していない。

SS－006（第55図、図版44）

SS－003から10mほど北側の調査区西端に位置し、西側は調査区外にある。北溝の東端と東溝の北半が検出されたが、東溝は古墳時代後期の住居SI－070、中世以降の溝SD－025などに切られ、南半を失っている。図示した壺はSI－070に混入していたものであるが、本跡に伴う遺物と判断した。頸部に羽状縄文が施されている点で、中期末葉に位置づけられる。

SS－002・003・004・005



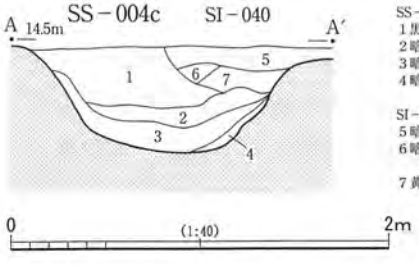
SS－002
1 暗灰褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）別遺構の覆土の可能性大
2 黒色粘質砂　焼土粒（φ1－2）、炭化粒（φ1－2）少量含む
3 灰黄褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）
4 黄灰色砂、黒褐色土ブロック少斑

SS－003（a）
1 黒色粘質砂　焼土粒（φ1－3）少量含、炭化粒（φ1－2）少量含む
2 黒褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）少量含、炭化粒（φ1－2）少量含む

SS－003（b）
1 黒色粘質砂　焼土粒（φ1－3）少量含む、炭化粒（φ1－2）微量含む
2 黒褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）少量含む、炭化粒（φ1－2）少量含む
3 暗黄褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）微量含む

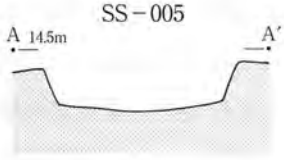
SS－003（c）
1 黒色粘質砂　焼土粒（φ1－3）少量含む、炭化粒（φ1－2）少量含む
2 暗黄褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）少量含む、炭化粒（φ1－2）僅かに含む

SS－003（d）
1 黒色粘質砂　焼土粒（φ1－2）少量含む、土器片（φ5）あり
2 黒褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）少量含む



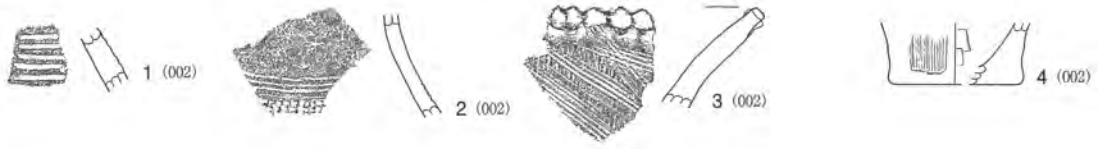
SS－004（c）
1 黒褐色粘質砂　焼土粒（φ2－3）少量含む
2 暗褐色粘質砂　焼土粒（φ2－3）少量含む
3 暗黄灰色粘質砂
4 暗黄灰色粘質砂　（3より明）

SI－040
5 暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）中量含む、炭化粒（φ1－2）少量含む
6 暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）微量含む、炭化粒（φ1～2）微量含む
周溝覆土
7 黄灰色砂、黒褐色砂少斑（貼床）

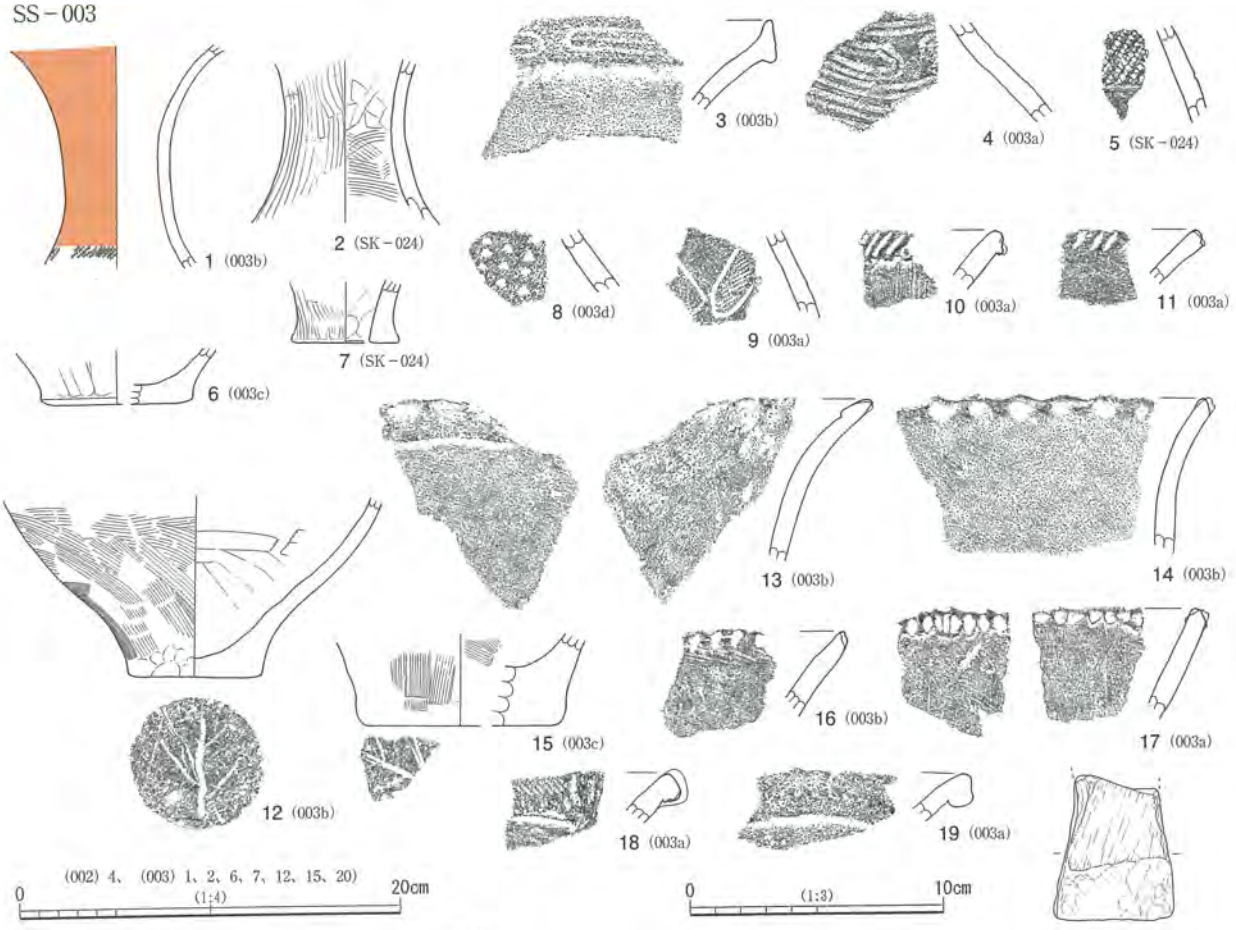


第54図　SS－002・003・004・005

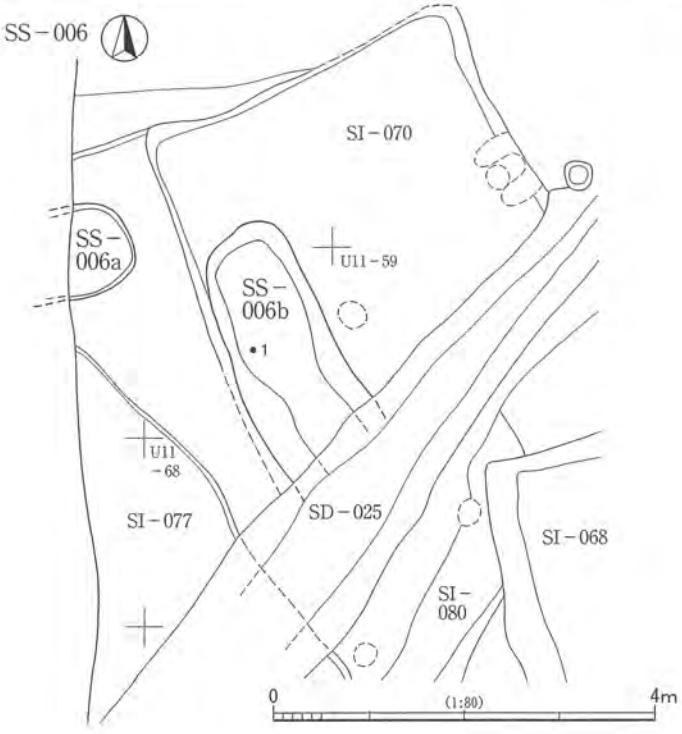
SS－002



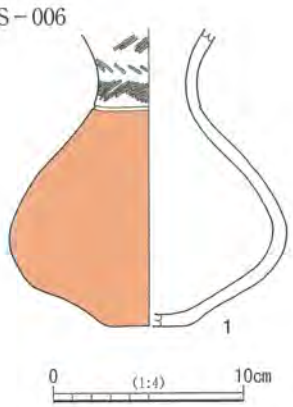
SS－003



SS－006



SS－006



第55図　SS－002・003・006

6　グリッド等出土遺物

B区出土遺物（第56～59図、図版62～66）

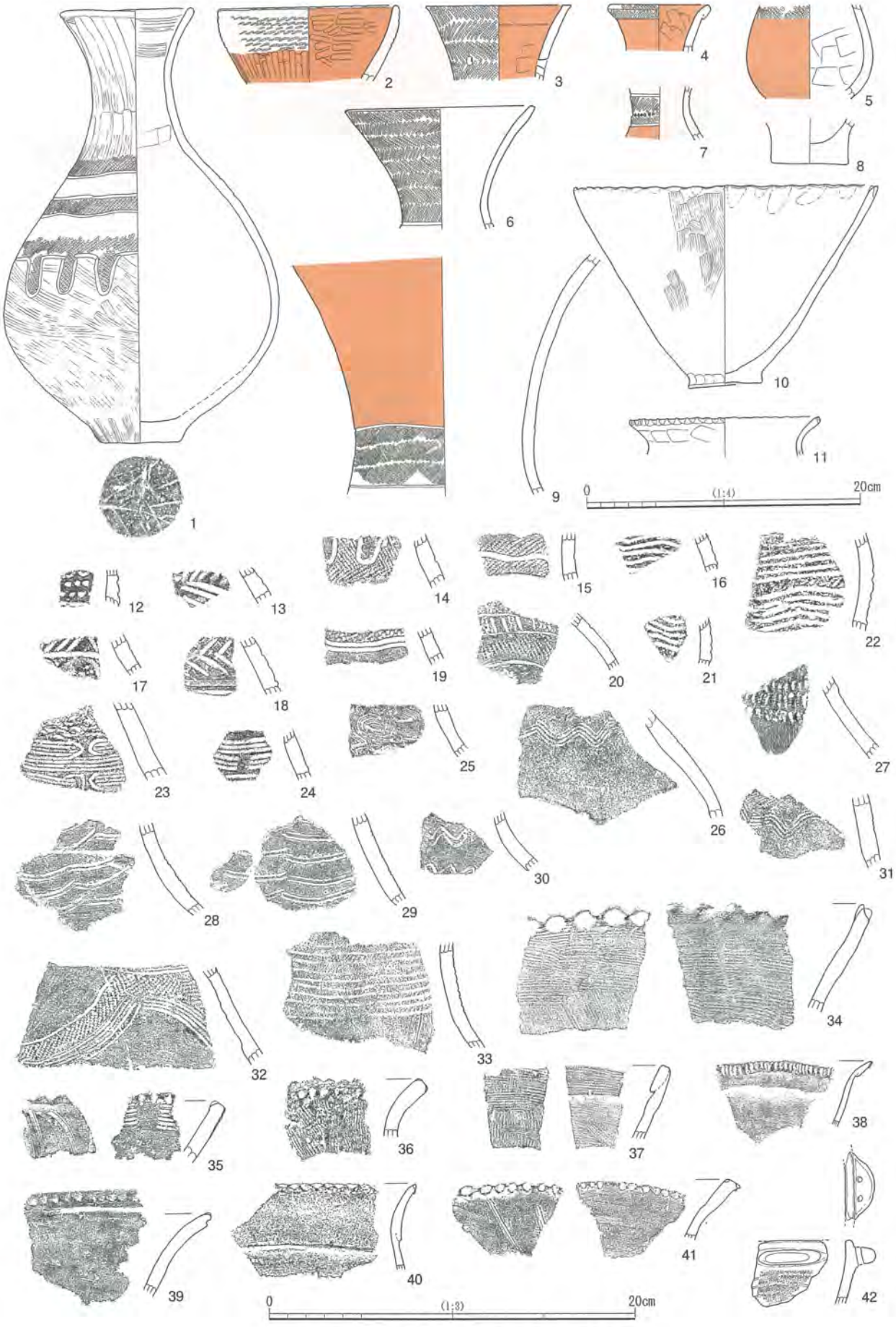
第56図では中期～後期初頭の土器を一括して掲載した。中期中葉古段階の壺には太い沈線文と刺突文、無節の縄文を地模様に横走する沈線文、磨消し縄文に沈線区画を加えた文様が見られる。中期中葉新段階の壺には擬流水文、磨消しの舌縄文、平行沈線文などが施されている。耳状の浮文を貼り付た42は浮文に２つの小孔があり口径から見て無頸壺であろう。内外面とも赤彩され、外面はかなり摩滅しているが条痕調整と思われる。中期後葉の壺には櫛描波状文、横走する細い沈線文がある。後期初頭の壺は羽状縄文帯や結節文帯で飾られる。甕は中期中葉～後葉を通じて波状口縁をもつ深鉢形が主体である。中期中葉には外面に木口状工具による羽状文をもち、口縁部内面に櫛目の押引き文のある例が見られる。後葉には口縁部の内側に粘土紐を貼り付ける例がある。後期になると、口縁部が大きく外反し、口縁部下端に粘土紐接合痕を意図的に残す例が出てくる。

第57～59図は後期の土器群である。壺類は口縁部に縄文帯をもつものが主体で、文様帯は次第に幅を広げ、粘土紐の貼付によって複雑な構造に変化している。最も多いのは折返し状口縁に縄文を配し、下端に刻みを加える形式である。棒状浮文の貼付は後期前葉から見られるが、文様帯の拡大に伴って浮文も大型化し、さらに刻みが加わっている。後期後葉には縄文帯に替わって網目状撚糸文を施文する例があり、円形浮文との組み合わせも見られる。肩部から胴部の出土例を見ると、後期前葉は沈線区画の帯文帯と山形文帯に縄文を充填したものが主体的で、後期中葉にＳ字状結節文と縄文帯の組み合わせが本格化している。後期後葉には沈線区画内に網目状撚糸文を配した例が多く、Ｓ字状結節文との組み合わせや沈線区画を欠いた網目状撚糸文帯もある。鉢類の口縁部文様帯も壺類と連動した変遷をたどることができる。

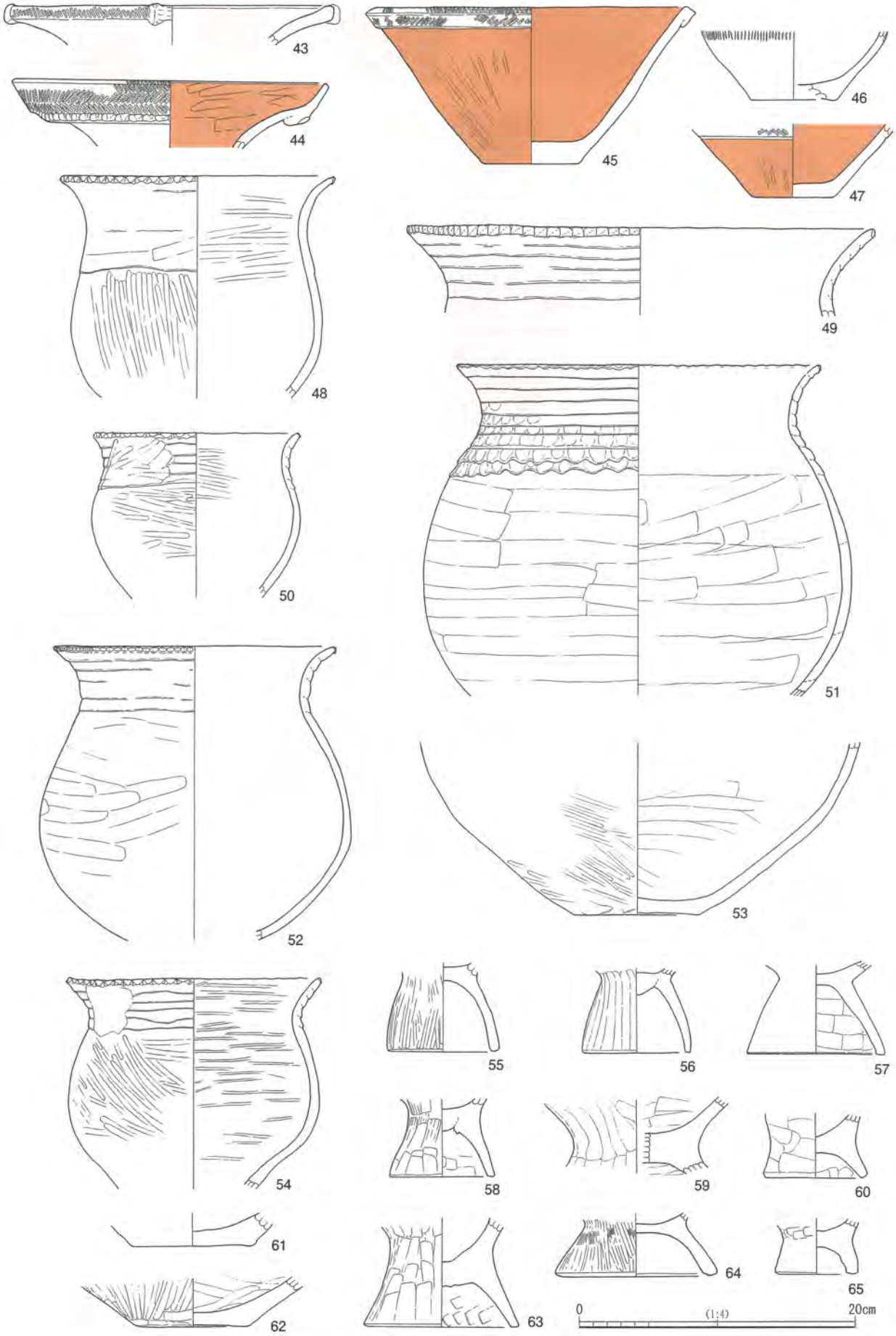
後期の甕類は口頸部が屈曲し、多条の粘土紐接合痕をもつものが主体となる。全容の残る例はほとんどないが、底部の残存状況を見ると平底が少なく台付甕の脚台が多い。これは住居跡や環濠出土の甕にも見られた傾向である。なお、後期後半には付加縄文を配した北関東系の甕（111～113）が若干入っている。

C・D区出土遺物（第60図、図版69・70）

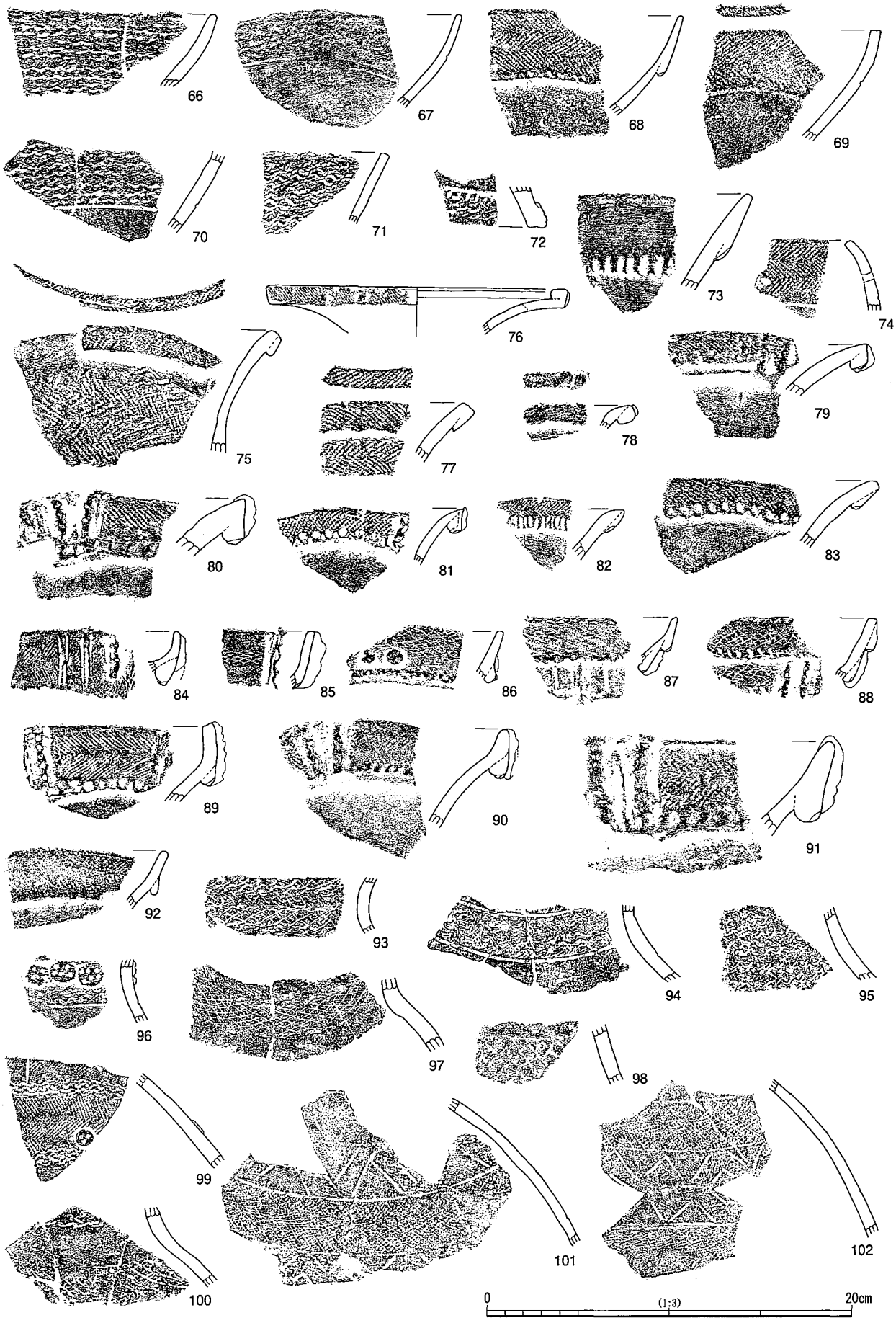
Ｃ・Ｄ区で出土したものを一括した。底部に小孔を穿った漉し器（１）のほか、後期の壺口縁部・肩部、底部、台付甕の脚台がある。甕口縁（11～13）は中期後葉のものといえよう。また、肩部に櫛描横線文と波状文を配した壺は、球形の胴部や雲母を混入しない緻密な胎土をもつことから古墳時代出現期の壺と捉えることができる。



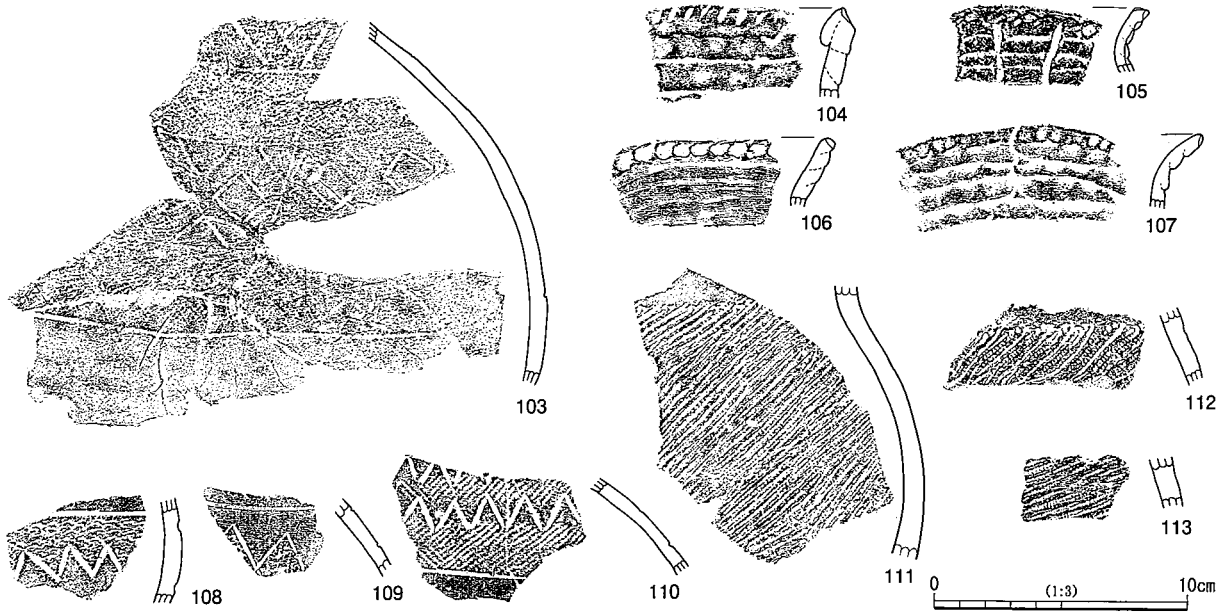
第56図　B区グリッド等出土遺物（1）



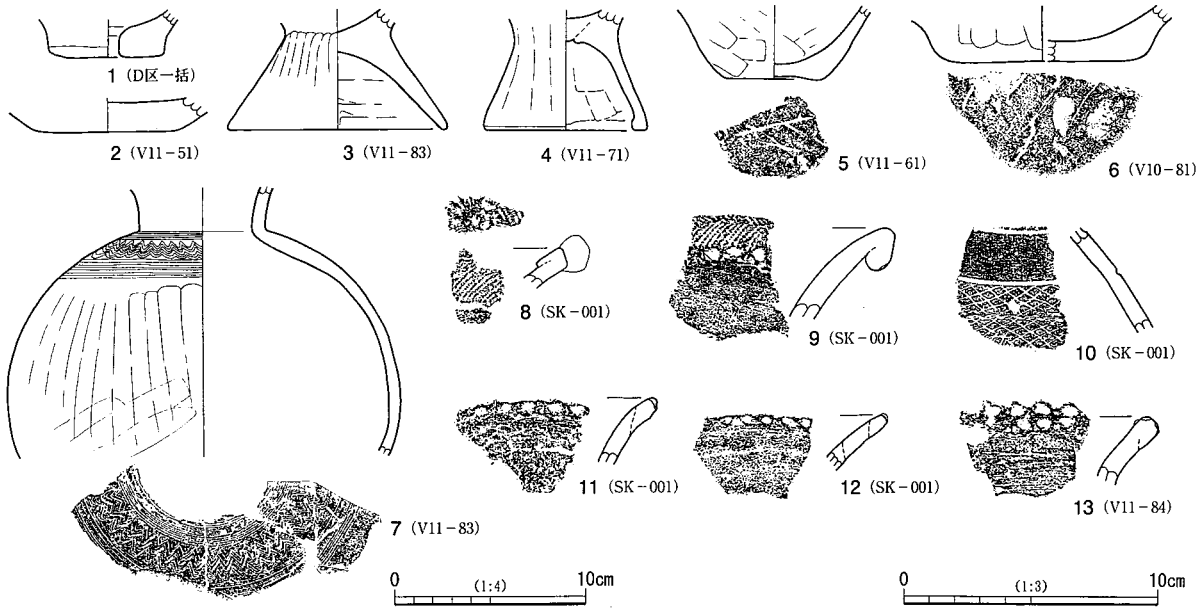
第57図　B区グリッド等出土遺物（2）



第58図　B区グリッド等出土遺物（3）



第59図　B区グリッド等出土遺物（4）



第60図　C・D区グリッド等出土遺物

第２節　古墳時代

古墳時代の遺構は２次調査区のほぼ全域で検出されたが、Ｂ区南端の出現期の方墳と墳丘下の竪穴住居１棟を除くと、後期の遺構に限られる。前期の遺物は散見されるが、中期の遺物は見当たらないため居住域を変えていると考えられる。

１　出現期の竪穴住居

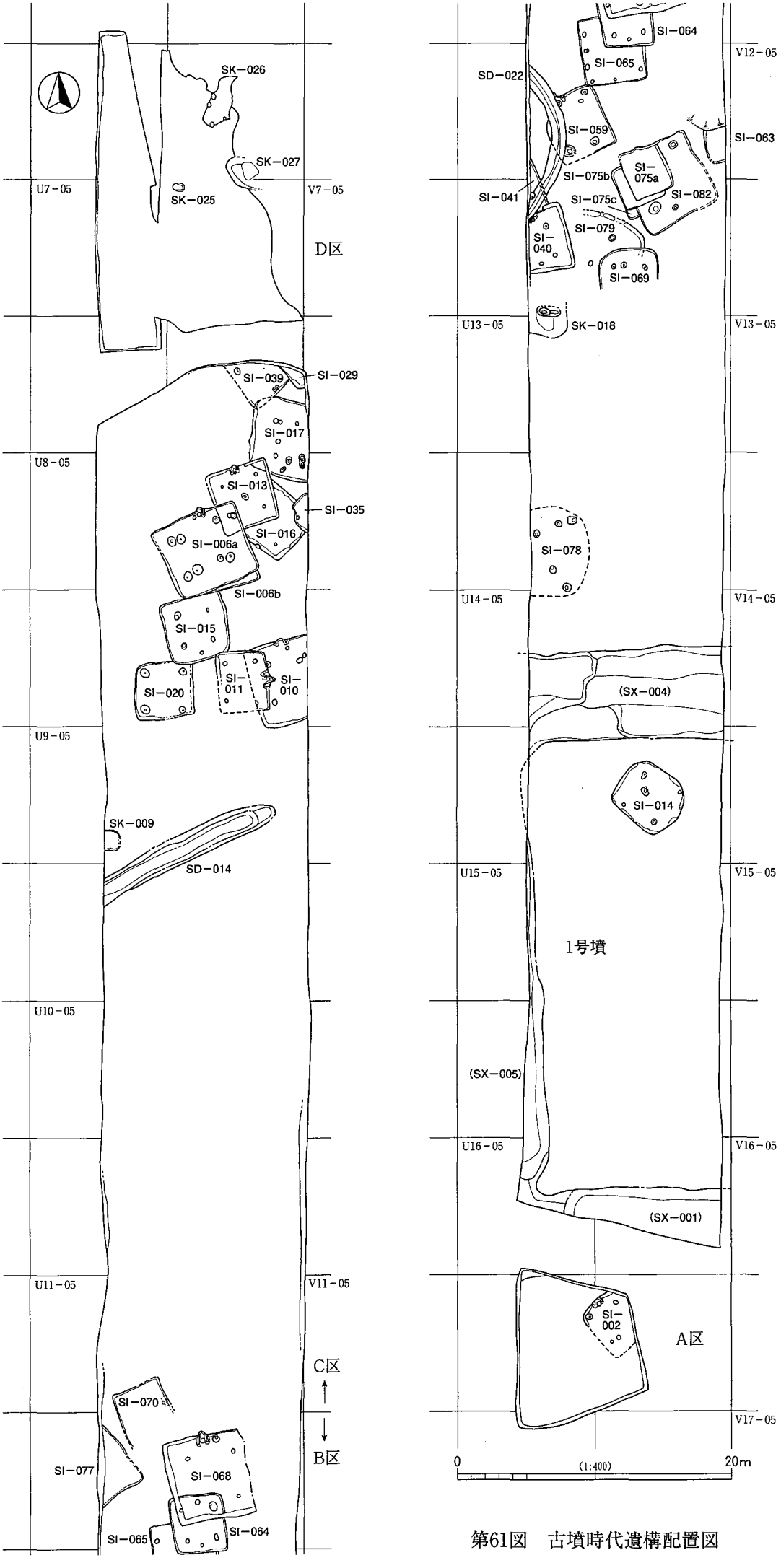
SI－014（第62図、図版14）

１号墳の墳丘下で検出され、北西の墳丘裾部に位置する。南東側がやや張り出した隅丸方形の竪穴住居で、SI－031・066・067・073・074を切って築かれている。壁溝は途切れながらほぼ全周している。主柱穴は竪穴の壁寄りに４基あり、特に南東の柱穴は壁溝に隣接して偏っている。炉跡は北東寄りに位置し、炉の周辺を含む主柱穴の内側には床の硬化面が広がる。１号墳の墳丘構築に先立つ整地によって削平されたためか、壁の立ち上がりはほとんど認められない。しかし、床面からは多量の土器が出土し、やや浮いて出土したものも含めると図化可能な遺物は47個体に及んだ。また、竪穴内には多量の焼土と炭化材が堆積し、炭化材は竪穴の周囲からも出土している。このような状況を見ると、本竪穴が墳丘構築の直前に廃棄され、焼き払われた可能性が想定できる。そこで、本跡出土遺物を１号墳の出土遺物と比較してみることにしたい。

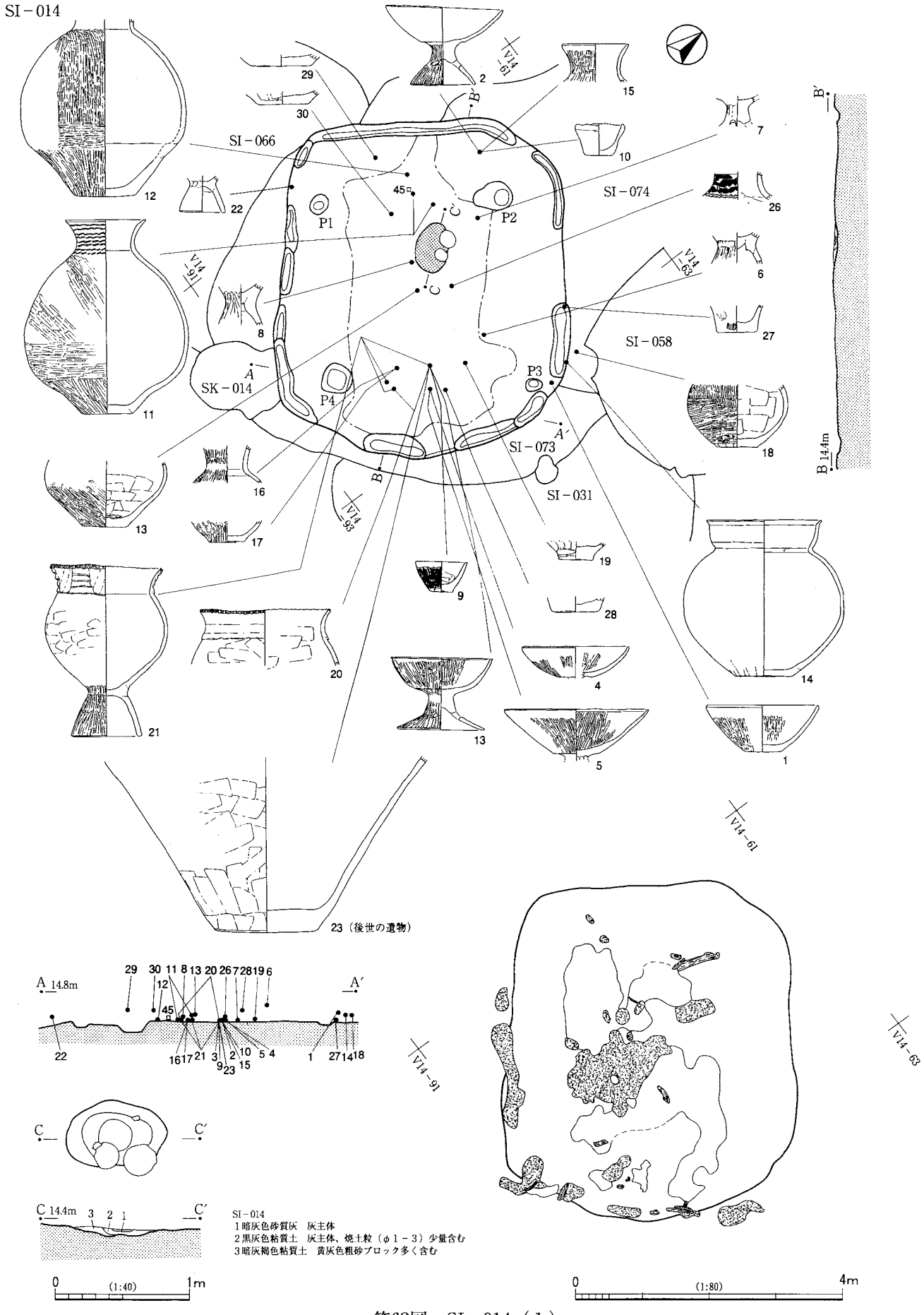
遺物（第63・64図、図版23・24・73・78・80）　遺物は竪穴内全域で出土し、北壁と南壁付近に土器が集中する傾向があり、壁際で完形品や完形に近い土器が出土している（１・２・10・14)。土器群の構成は、平底の鉢（１）・高坏（２～８）・鉢のミニチュア土器（９・10）・壺（11～13・15～19）・平底甕(14)・台付甕（20～22）である。他に中世の在地土器大甕底部（23)、弥生時代後期の土器片（24～43）が混入している。

鉢・高坏などの小型の土器群は、弥生後期の系譜とは形態を一新し、無文で薄手のつくりになっている。７・８の高坏脚部はつくりや雲母の多い胎土の特徴から弥生時代後期のものと見られるが、遺存状態から見て破損品を器台などに再利用した可能性がある。壺・甕類の特徴を挙げると、壺類がほとんど無文化していること、弥生時代後期以来の多状口縁の台付甕と共に平底の有段口縁甕が出土していること、ハケ調整のミニチュア土器が加わることなどがある。中～大型壺は頸の短い直口壺で、底部付近に明らかな分割成形痕があり、胴下半に最大径をもつ。口頸部の遺存する11では外面に８条のＳ字状結節文があり、頸部以下は無文である。また、小型壺はいずれも無文で、18は球形化した胴部をもつ。14の平底甕の口縁部は、緩やかに屈曲して高く立ち上がり、端部は短く外反する有段口縁である。その形状は緩やかな５の字状を象っており、在来の甕の系譜には見られない。山陰・北陸系統の有段口縁平底甕の影響を受けた製品と考えられる。台付甕（21）は口縁端部に刻みのある多条口縁をもち、やや球形化した無花果形の胴部に内湾気味の脚部が付く。多条口縁は粘土紐接合痕を縦断するナデつけが施され、脚部が比較的大きく高いのが特徴である。これらは弥生時代後期の台付甕と区別できる要素といえる。また、これらの土器群の胎土には弥生時代後期に見られた多量の雲母がほとんどなく、砂粒が小粒で少なくなっている。

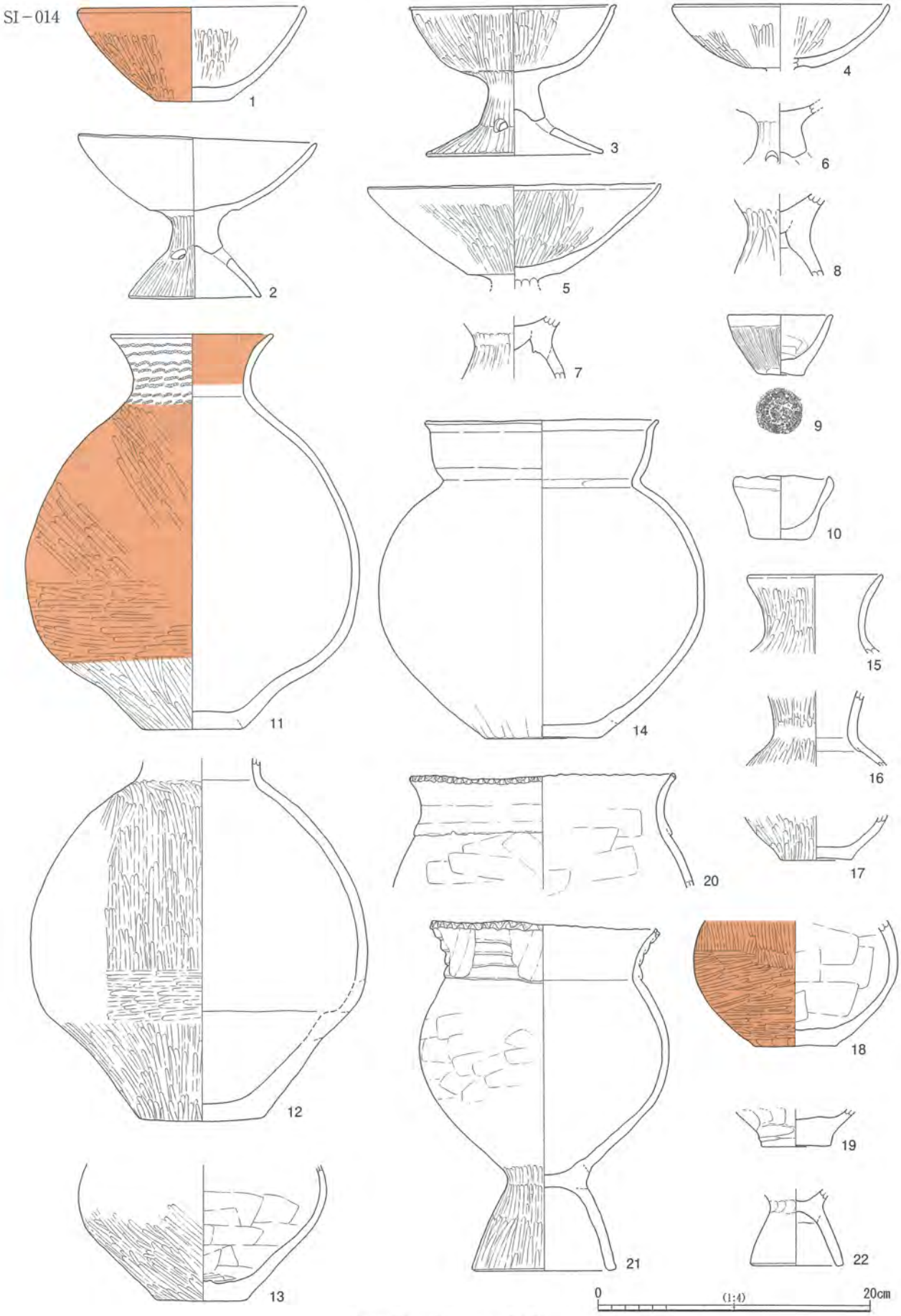
土器のほかには、覆土から出土した鉄製ヤリガンナ（44）・炉の付近で出土したガラス小玉（45）があり、いずれも本跡に伴う遺物と考えられる。また、覆土中からは抉入石斧（46）・砥石（47・48）も出土している。抉入石斧は前代の遺物であるが、ほぼ完形品であることから再利用された可能性もある。



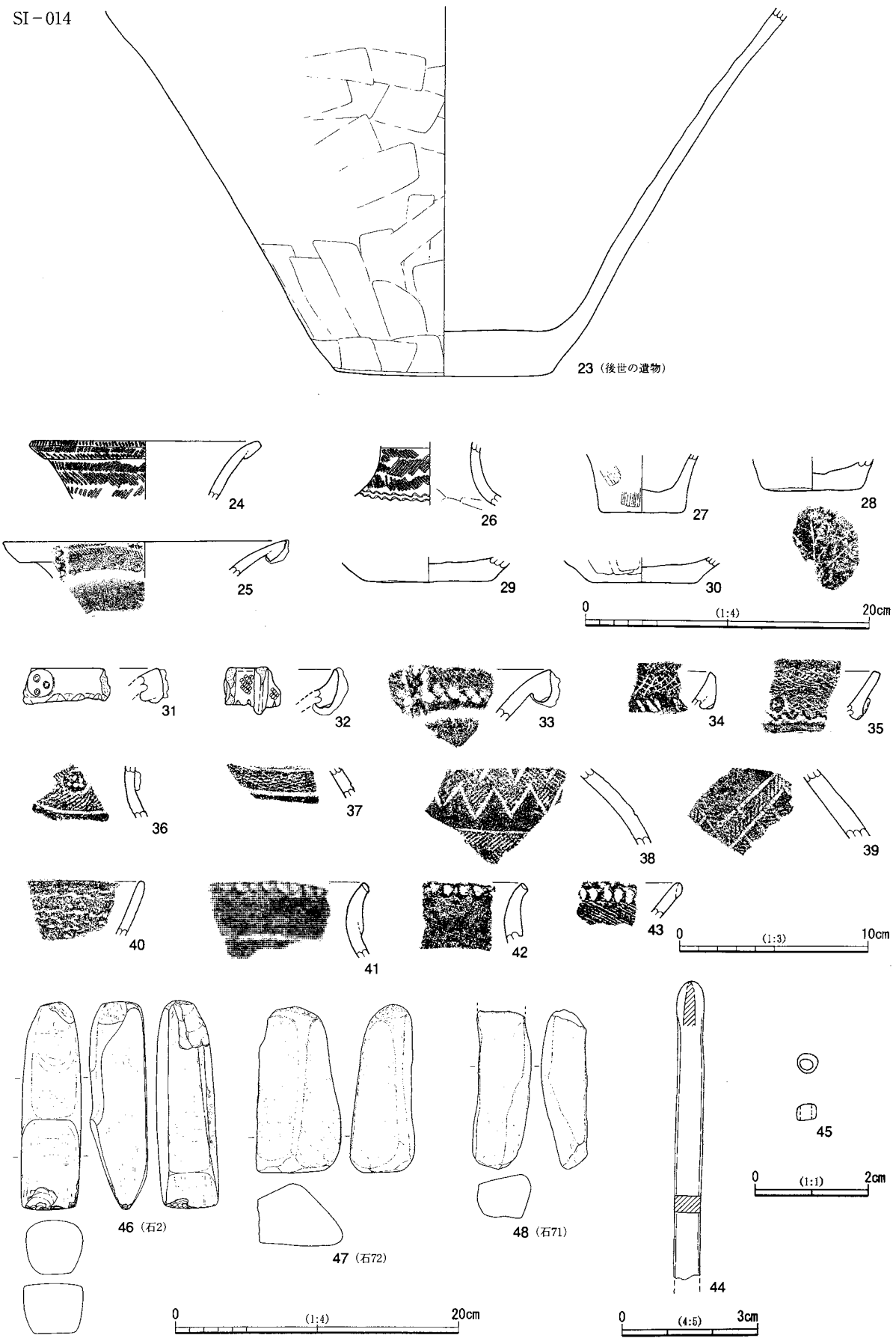
第61図　古墳時代遺構配置図


SI－014
SI－066
SI－074
SI－058
SI－073
SI－031
SK－014
P1
P2
P3
P4
V14－61
V14－91
V14－63
V14－93
B 14.4m
23（後世の遺物）
A 14.8m
C 14.4m
SI－014
1暗灰色砂質灰　灰主体
2黒灰色粘質土　灰主体、焼土粒（φ1－3）少量含む
3暗灰褐色粘質土　黄灰色粗砂ブロック多く含む
0 (1:40) 1m
0 (1:80) 4m

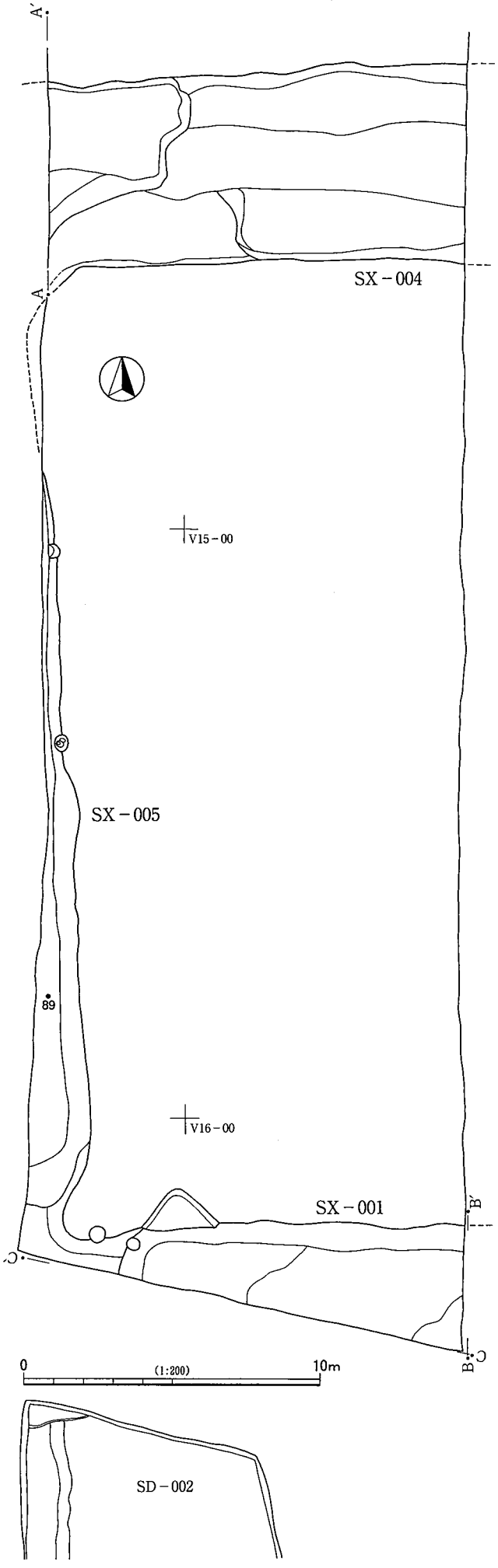
第62図　SI－014（1）



第63図　SI－014（2）


SI－014
23（後世の遺物）
24
25
26
27
28
29
30
0 (1:4) 20cm
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0 (1:3) 10cm
46（石2）
47（石72）
48（石71）
0 (1:4) 20cm
44
45
0 (4:5) 3cm
0 (1:1) 2cm

第64図　SI－014（3）



第65図　1号墳平面図（SX－001・004・005）

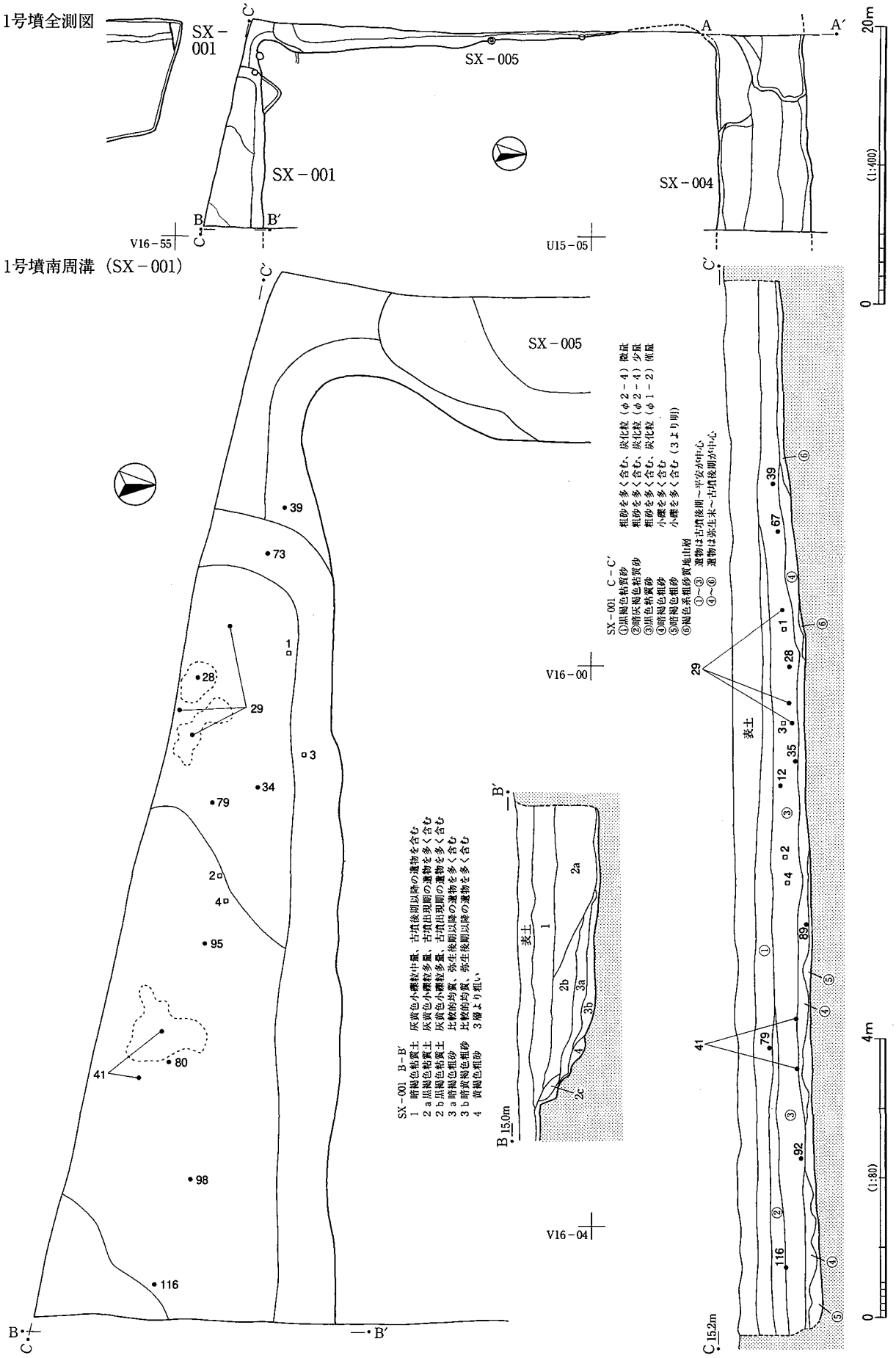
2　出現期の古墳

1号墳（第65・66図、図版4・10・11・17）

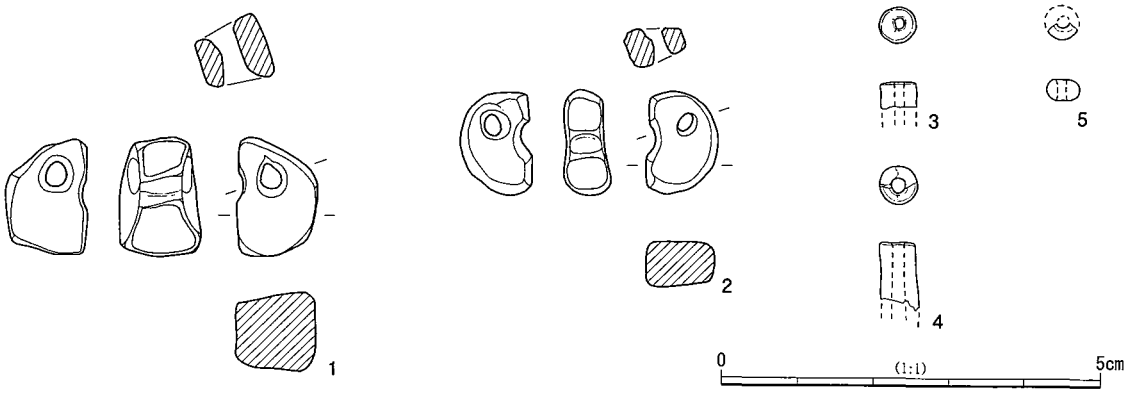
B区の南端に位置する方墳である。墳丘は既に削平されているが、3辺の周溝によってほぼ東西南北に沿って築かれた方形の墳丘をもつことが分かる。調査当初、北周溝（SX－004）と南周溝（SX－001）は2条の大溝と見えたが、南西のコーナーと西周溝（SX－005）の一部が辛うじて調査区内に検出されて方墳の周溝であることが明らかになった。南北の墳丘規模（墳丘側の周溝下端間）は34.2mである。東側の墳丘と周溝は調査区外にあるため全容は明らかではないが、調査区内で確認できる東西の墳丘は14.2mである。東側に流れる滝川の河岸までは現状で45m、最も近い段丘崖までは20m～24mの平坦面があり、少なくとも南北と同規模の墳丘が東側に続いていることは確かであろう。

周溝の内側では、墳丘構築前の住居群が少なくとも43棟確認された。ところが、南西のコーナー寄りに1棟だけ趣の異なる小規模な矩形の竪穴（SI－012）があり、重複する住居群を切って築かれていることが分かった。北壁の中央にはカマドの煙道跡と思われる切り込みがある。西と南には壁溝がめぐり、壁柱穴が検出された。遺物はわずかで、高坏脚部の一部が出土している。竪穴の形状や高坏脚部の特徴から見て奈良・平安時代の竪穴住居と考えられ、1号墳の墳丘削平後に構築されている可能性が高い。とすれば、1号墳の墳丘を取り崩すような大規模な土地改変が奈良・平安時代に行われたことになろう。この竪穴住居のみが調査区北側の同時期の竪穴住居群と離れて存在するのも、何らかの意味があると思われる。

後掲のように、本古墳から出土した土器群は前期初頭を遡り、出現期新段階に位置づけ



第66図　1号墳南周溝（SX－001）土層・遺物出土状況



第67図　1号墳南周溝 出土玉類

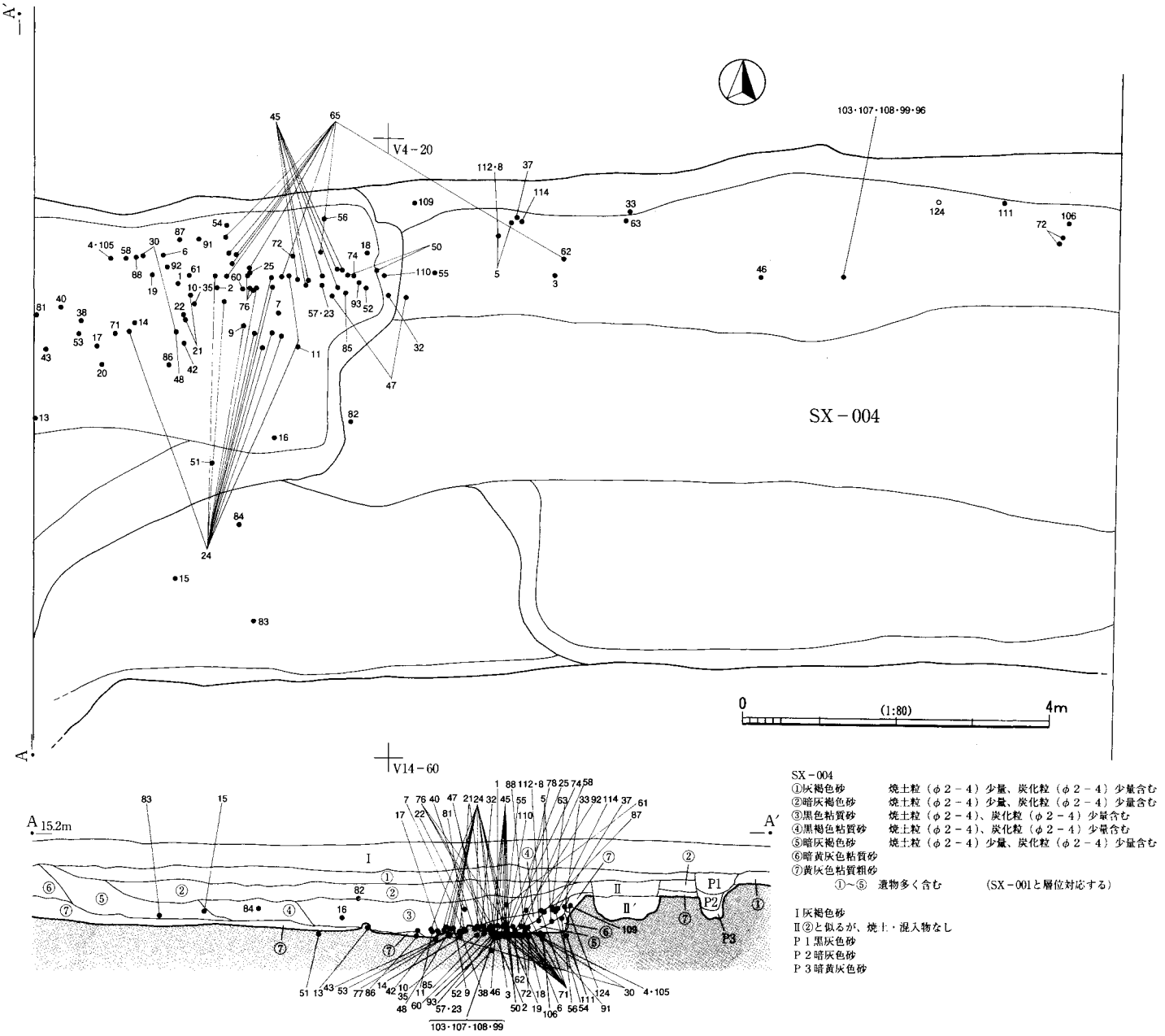
られると考えられ、この時期では房総最大の規模を有している。1辺34mを超える方墳の例は全国的に見ても極めて限られており、地域を代表する首長墓の墳形としては前方後方墳を採用している例が多い。隣接する宇戸台遺跡ではさらに古い前方後方墳（宇戸台2号墳）が存在していることを考えると、本古墳が前方後方墳である概念性は高い。仮に、東西の主丘部を南北と同規模に復元し、南北のどちらかに前方部を想定すると、南北の周溝の開放部はわずか6.3mとなり、宇戸台2号墳の短小な前方部（くびれ部幅2.8m/墳丘長9.4m）と比較しても狭すぎる。前方部は滝川に面した東側に想定するのが妥当であろう。

北周溝の幅は下端間で5.74m～6.14mで、深さは墳丘側で27.8cm～63.2cmと幅広く浅い周溝といえる。ただし、中央部は幅1.8m～2.8mにわたって20.0cm～27.2cm深く掘り込まれ、さらに北西コーナーは一段低く（11cm前後）掘り下げられている。中央部の掘り込みは後世のものではないかとの見方もあり、西端の土層では③層がそれを反映している可能性がある。遺物がほとんど出土していないことも関連するかも知れない。なお、土層断面の周溝北側に記録されている2基のピットはいずれも後世のものである。

南周溝の幅は東端で3.44mしか確認できないが北周溝と同規模であろう。南西コーナーは一段高く掘り残され、南周溝とは18.7cm、西周溝と15.3cmの段差がある。また、南周溝は中央部に向けて緩やかに下がっており、調査区東端は南西部より28.1cm低い。

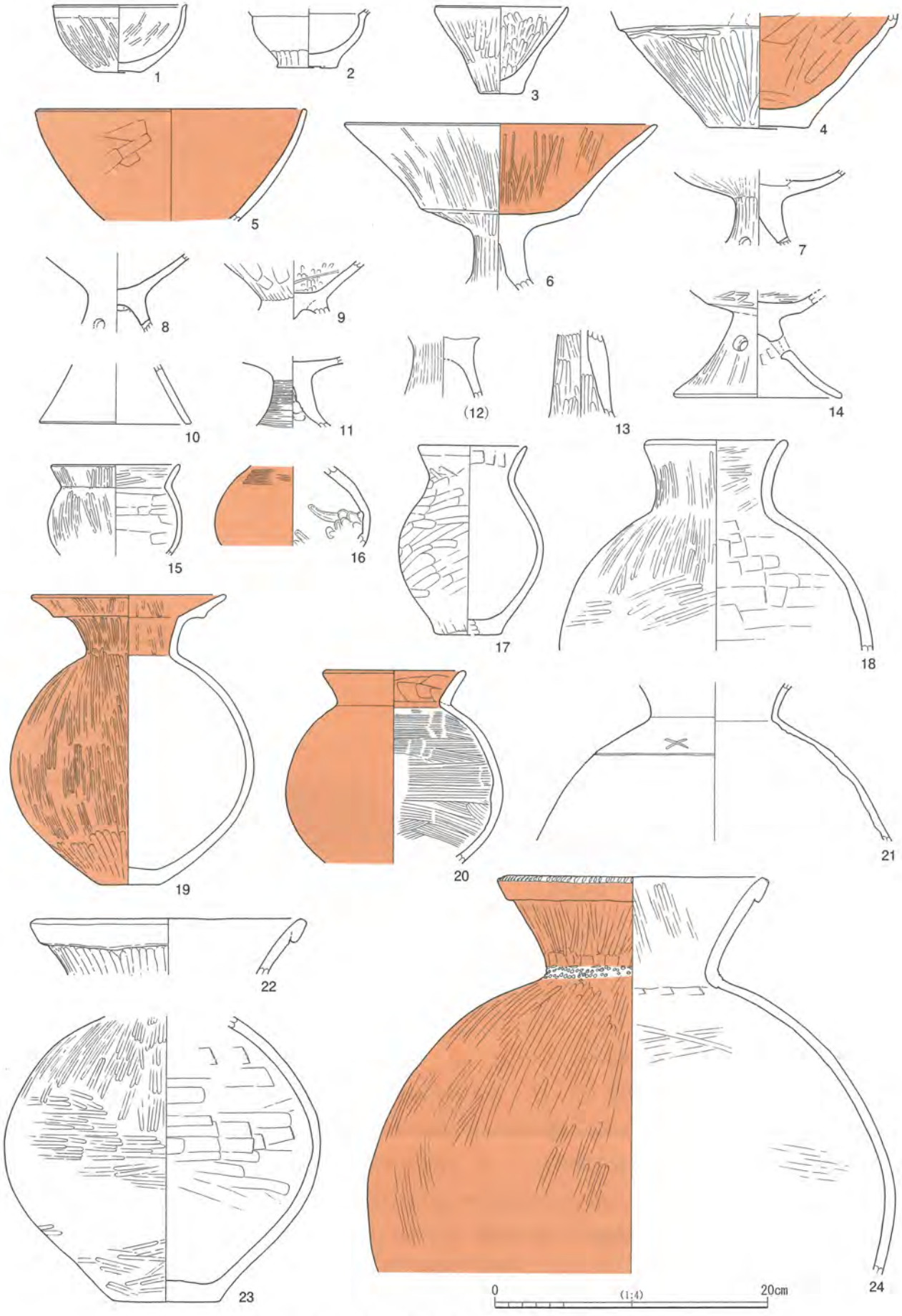
遺物出土状況（第66・68図）　南周溝の遺物は特に集中せず、全体に散在している。注目されるのは、玉類の出土状況である。すべて南西コーナー付近で出土し、28・29・41のような大型壺が伴出している。特に、41は器高49cmを超える大型品で、焼成後に底部を穿孔した古墳祭祀に特有の壺である。蛇紋岩の勾玉の形状は弥生時代後期の例に類するため、墳丘下の集落の遺物が混入した可能性も否定できないが、土製の管玉（3）・ガラス小玉（4）が共に出土していることからもこれらが本墳の埋葬、ないし葬送儀礼に用いられたことを示していると考えられる。玉類の出土層位は南側の10cm～20cm深い地点に投影しているため周溝から浮いているように見えるがほぼ周溝底で出土した。玉類の詳細は表12に記した。

北周溝の遺物は周溝の外縁部に分布し、特に北西コーナーに集中している。出土層位は周溝底、および覆土下層にほぼ限られ、土器群は周溝掘削直後か埋没する早い段階で周溝内にあったことが分かる。墳丘下の弥生時代後期の遺物（71～114）も覆土下層に混在しているが、むしろ墳丘下の遺物に周溝底から浮いて出土したものが目立つ。また、1号墳以後に営まれた古墳時代後期～奈良時代の遺物（115～124）も出土している。

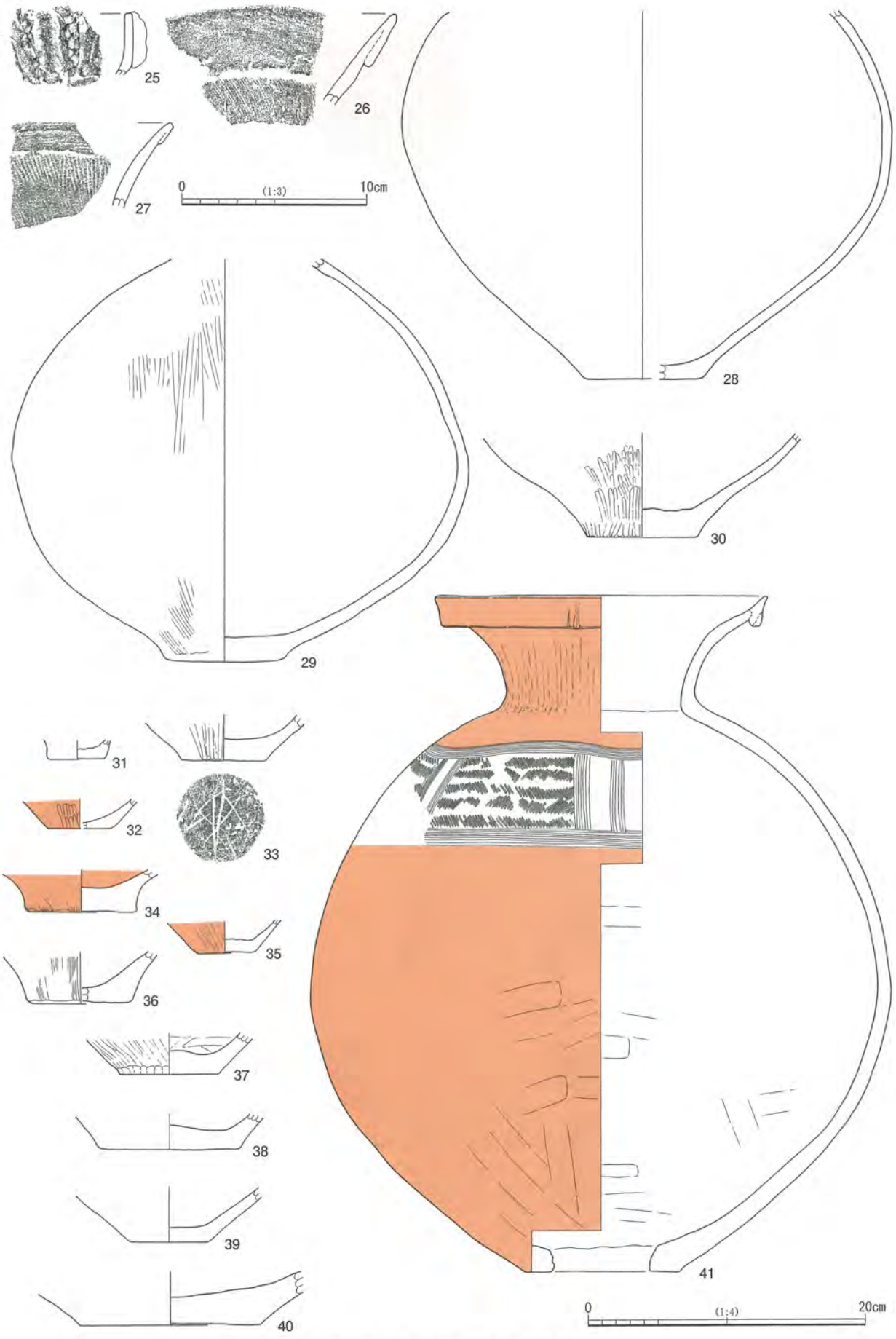


第68図　1号墳北周溝（SX－004）土層・遺物出土状況

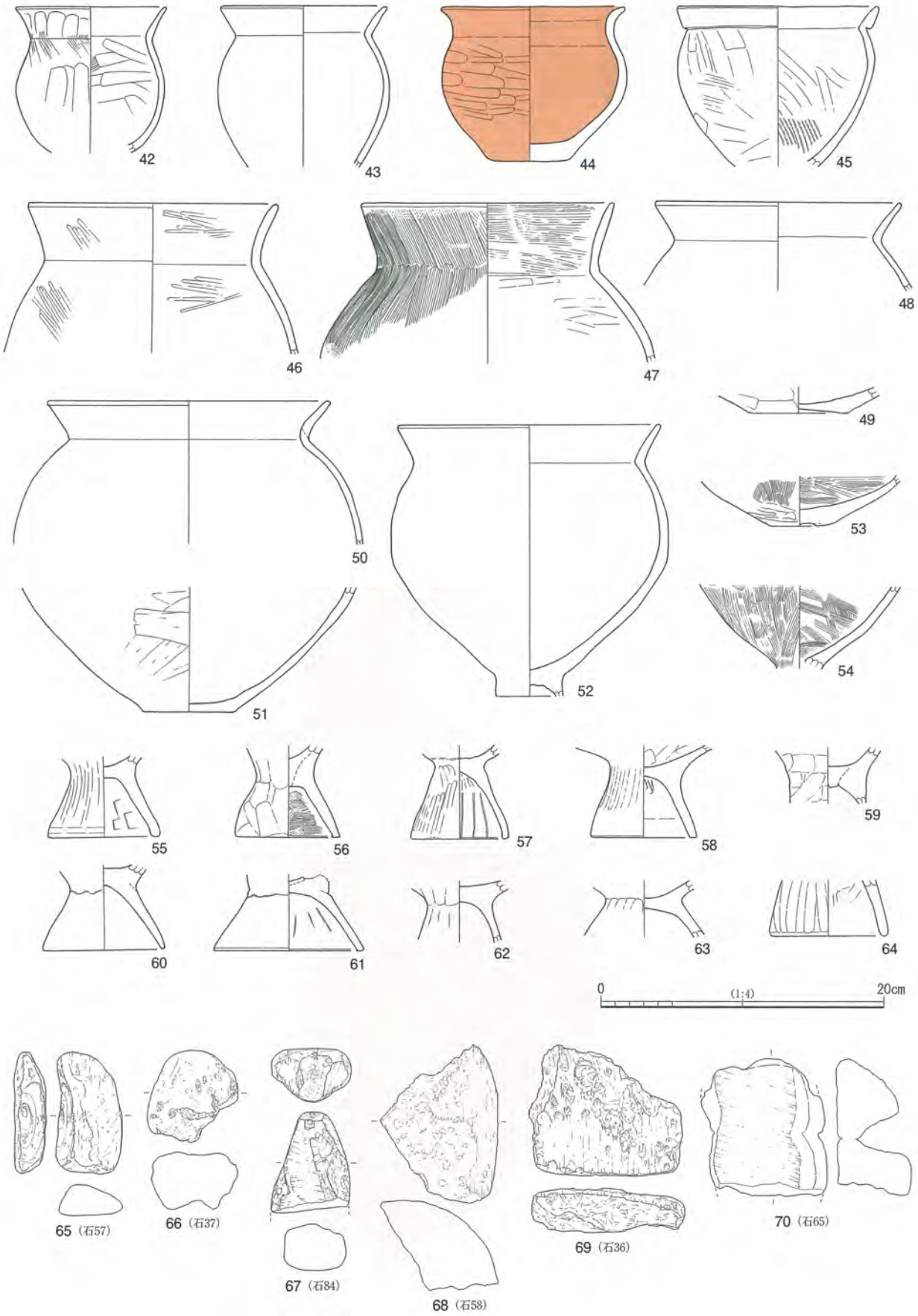
遺物（第67・69～73図、図版46～51・53・76～79）　1号墳に伴う土器の構成は、小型の鉢（1～3）・鉢（4）・高坏（5～14）・小型壺（15～17）・最大径25cm以下の中型壺（18～20・23）・大型壺（21・22・24～30・38～41）・小型甕（42～45）・甕（46～51・53）・台付甕（52・54～64）である。小型の鉢は三者三様であるが、いずれも丁寧に仕上げられている。鉢は弥生後期の形式を受け継いで口縁部に段をもつが、無文化している。高坏も前代から見られる鉢形の坏部に短い脚をもつ形式（5・8～10）と坏部下端に稜をもつ形式が見られ、後者には直線的に開く短脚（11・14）と柱状部をもつ長脚（6・13）がある。また、浅い皿状の坏部をもつ例（7）も見られる。脚部の調整は縦方向のヘラミガキが主体的であるが、11のように細かい横線を施した例があり、新形式の高坏が東海経由で伝播したことを示している。これらの高坏



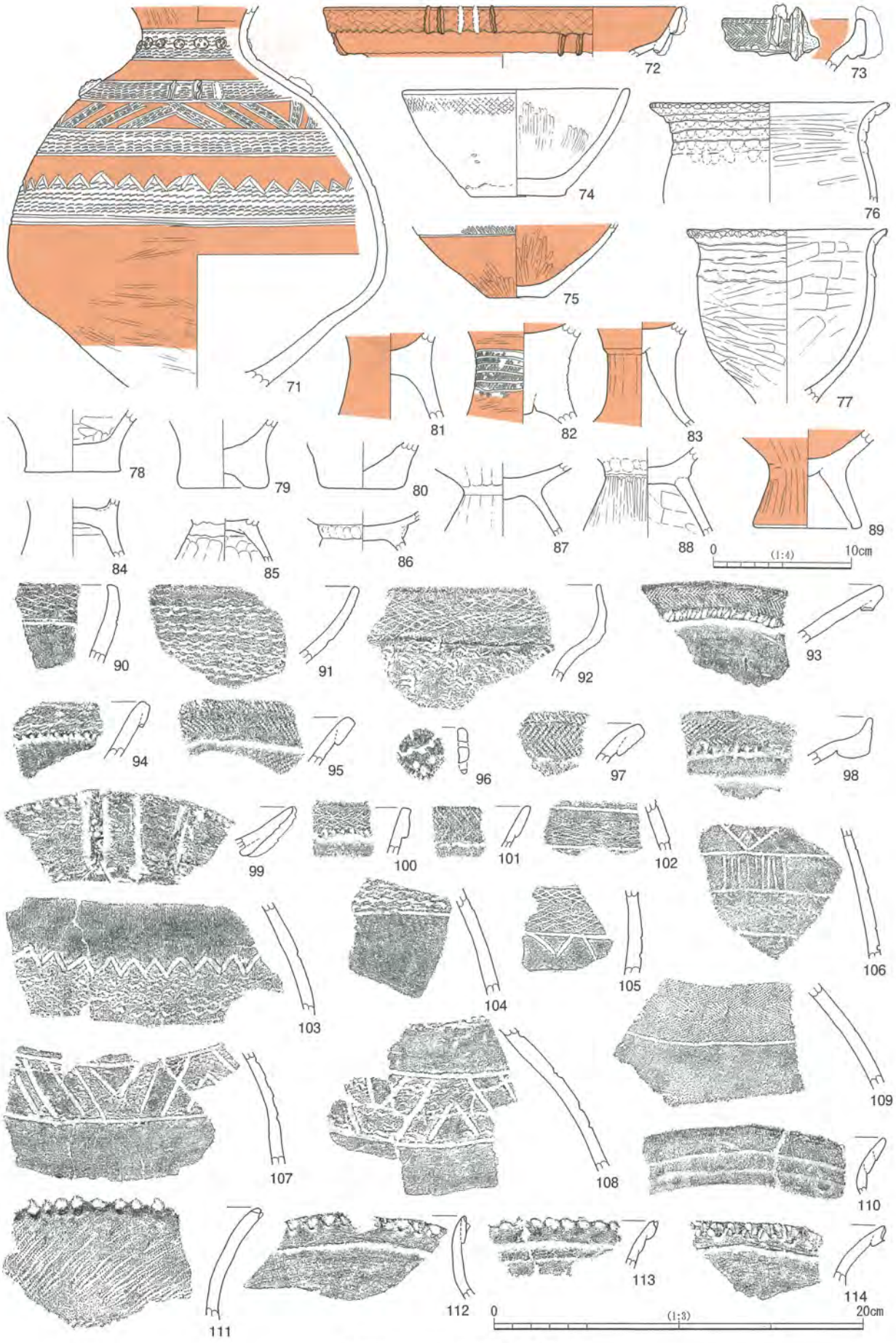
第69図　１号墳出土遺物（１）



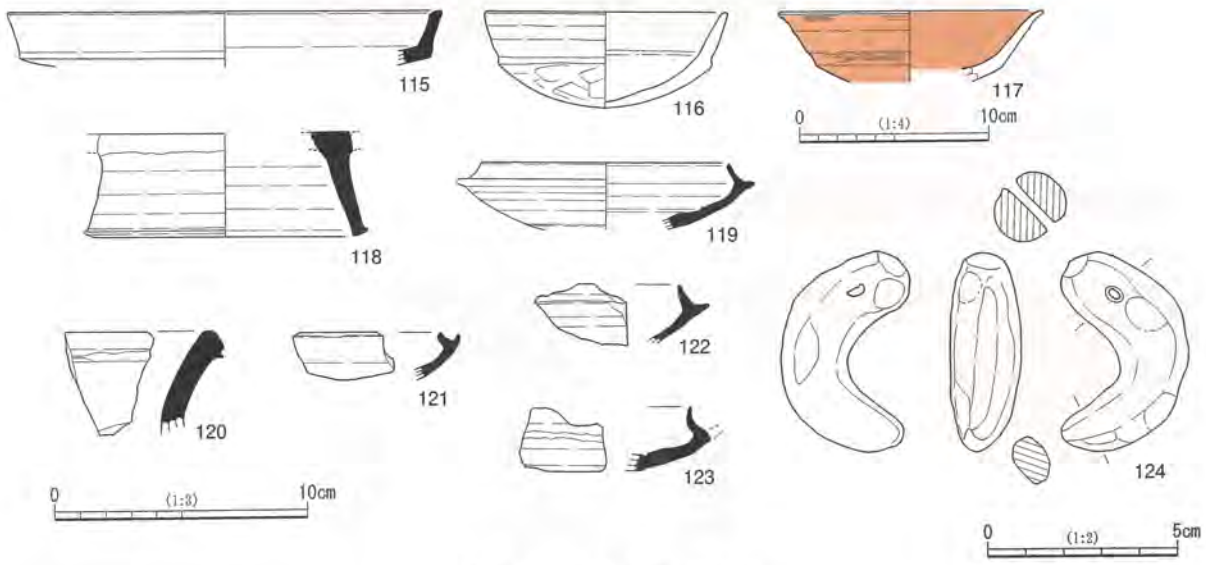
第70図　1号墳出土遺物（2）



第71図　1号墳出土遺物（3）



第72図　1号墳下層遺物



第73図　１号墳上層遺物

に共通する特徴は厚手のつくりで重量感があり、丁寧に仕上げられていることである。小型壺は、胴部が球形化した15・16と前代の小型壺が無紋化した長胴の17による２種がある。中型壺にも新旧の２種があり、18は17と同様前代からの形式が無文化したもの、19・20は新来の壺で、19が有段口縁壺、20は球形の胴部をもつ単口縁の壺である。これらも厚手で丁寧なつくりである。

大型壺は胴部最大径が26cm～42cmのものを一括した。口縁部は前代から存続する折返し状有段口縁で、口縁端部に刻み文をもつ例や棒状浮文を貼付する例もあるが、一様に無文化が進んでいる。頸部に文様をもつのは24に限られ、肩部～胴部に文様をもつ例も極端に少ない。この点で最大の壺41は口縁部と肩部に文様帯をもつ特異な例といえる。口縁部には棒状の線刻文（３～４本を１単位？）を配し、肩部には６～８本歯の櫛状工具による横線文とスリット文（２条８組）が描かれ、スリット間の区画に５段の羽状縄文が充填されている。櫛描横線文を用いた文様は在来の装飾壺にはなく、羽状縄文は弥生時代後期から多用された伝統的な文様であり、両者が融合した文様構成をもつといえる。また、唯一底部を穿孔した壺でもあり、本古墳出土土器群の中で特別な意味をもつことが窺える。口頸部の比率が小さく、やや縦長の偏球形の胴部は最大径を中程にもつ。底部の穿孔は焼成後に行われ、底部の内側を丁寧に穿孔している。穿孔部の大きさは6.8cm×8.4cmである。

甕類は平底甕、台付甕ともに在来のナデ調整・ミガキ仕上げとハケ調整・ヘラケズリ調整の例が併存し、新旧の技法による多様な甕が用いられていたといえよう。また、図示した甕はくの字状口縁のものが主体であるが、口頸部に多条の粘土紐接合痕をもつ甕も残存すると思われる。後者の例で器形復元が可能な資料は、いずれも弥生時代後期に遡るものであった。

これらの土器群は、墳丘下の住居SI－014から出土した土器群に近い内容と特徴をもっており、壺胴部の球形化やくの字状口縁甕の躍進などの新しい要素が加わっているが、住居SI－014には見られない折返し状口縁の鉢が残存しており、それほど大きな時期差はないと考えられる。これは、本古墳がSI－014の廃絶後まもなく築かれたことを物語るといえよう。

3　後期の竪穴住居

SI－002（第75図、図版12）

本調査区南端のA区で検出された唯一の竪穴住居である。北東部は調査区外にある。後世の削平によって南西と南東の壁は失われ、床の一部も削り込まれている。南の柱穴P2・P3によって長軸約4.2mの規模であることがわかった。カマドは北壁に位置し、西コーナーに貯蔵穴がある。東のP1は深さ12cmほどの浅いピットで、西には柱穴がないため主柱穴の配置は不明である。床の中央部に硬化面が残っている。覆土から出土した遺物に口径10cmに満たない小型の土師器坏があり、本跡に伴うと考えられる。

SI－006（第74図、図版13・21）

C区調査区の北東部に位置し、北西側にSI－013、東側にSI－016、南側にSI－015が重複し、本跡がそれらを切って築かれている。また、南東隅にはやや軸の異なる竪穴（006b）が存在し、複数の主柱穴の配置から見て、建て替え・拡張が行われたものと思われる。平面形はやや横長の方形で、P2・P5・P6・P7が建て替え後の主柱穴であろう。P1・P2・P4・P6が建て替え前の主柱穴となるが、006b南壁の向きとは整合していないため、西側への拡張と006bは関係がなく重複する別の竪穴と捉えるのが妥当であろう。カマドは北壁の東寄りに位置する。壁際には壁溝がめぐっており、西～南ではかなり幅が広がっている。主柱穴内側には硬化した床面が確認されている。遺物は、カマドの周辺と東側に集中している。また、P3の上面で坏と鉢が出土していることからP3は建て替え前の支柱穴であろう。出土位置を特定できる遺物は土師器坏５点・鉢１点・甕２点である。口径12cm前後の小型の坏（１～３）、平底の盤状坏（４）、長胴の甕（８）の存在によって、後期後半に位置づけられよう。

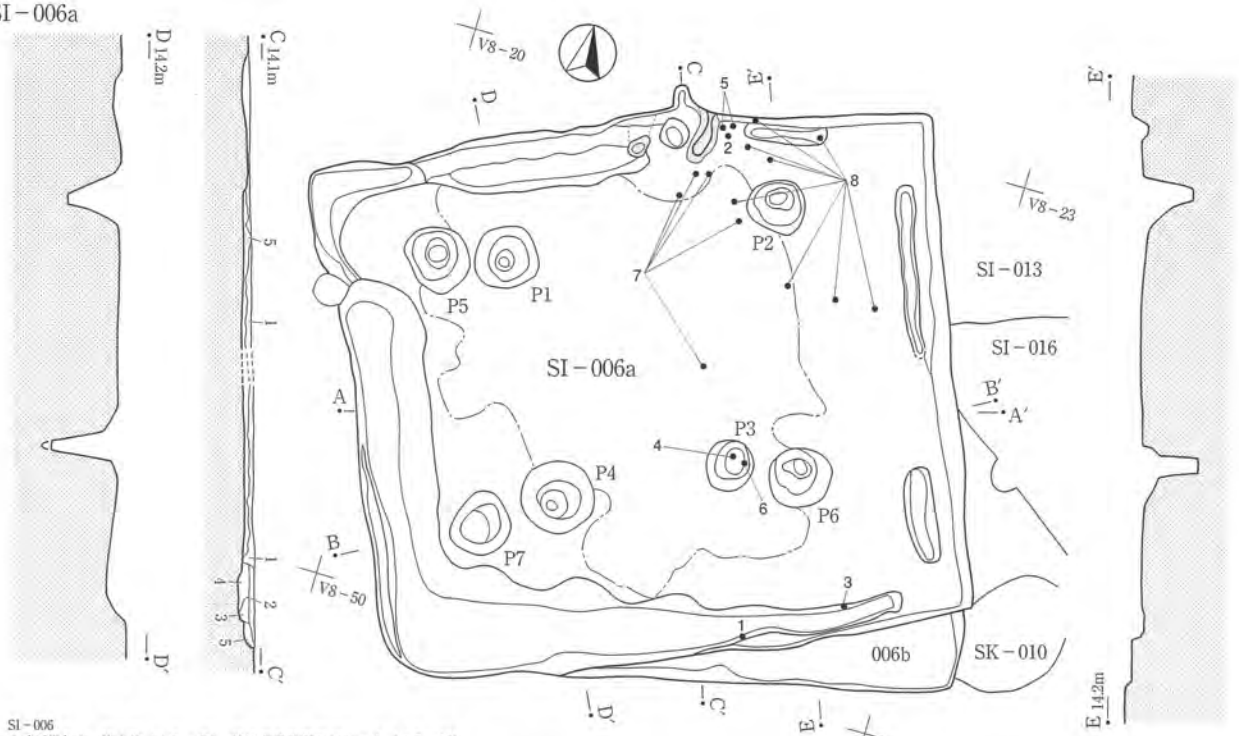
SI－010（第76図、図版13・22）

C区調査区の北東部に位置し、西側をSI－005・011、東側をSI－021・022に切られている。また、南東部は調査区外にあるため調査したのは全体の3/4であるが、１辺5.8mの方形竪穴住居であることが推定できる。カマドは北壁の中央部に位置し、袖の前面には小ピットが検出された。主柱穴は南東を除いて遺存し、北東には支柱穴（P5）が認められる。遺物はカマドの周辺に多く、図化した遺物のほとんどはこの辺りで出土し、鉢（３）・甑（４）・小型甕（５）・甕（６・７）がある。また、中央部の床硬化面で小型の坏が出土している。これらの土器と覆土から出土した蛇紋岩製の勾玉が本住居に伴う遺物と考えられる。なお、南の壁溝付近で出土した須恵器高台付坏の底部は重複するSI－021から混入した可能性がある。

SI－011（第75図、図版13・22）

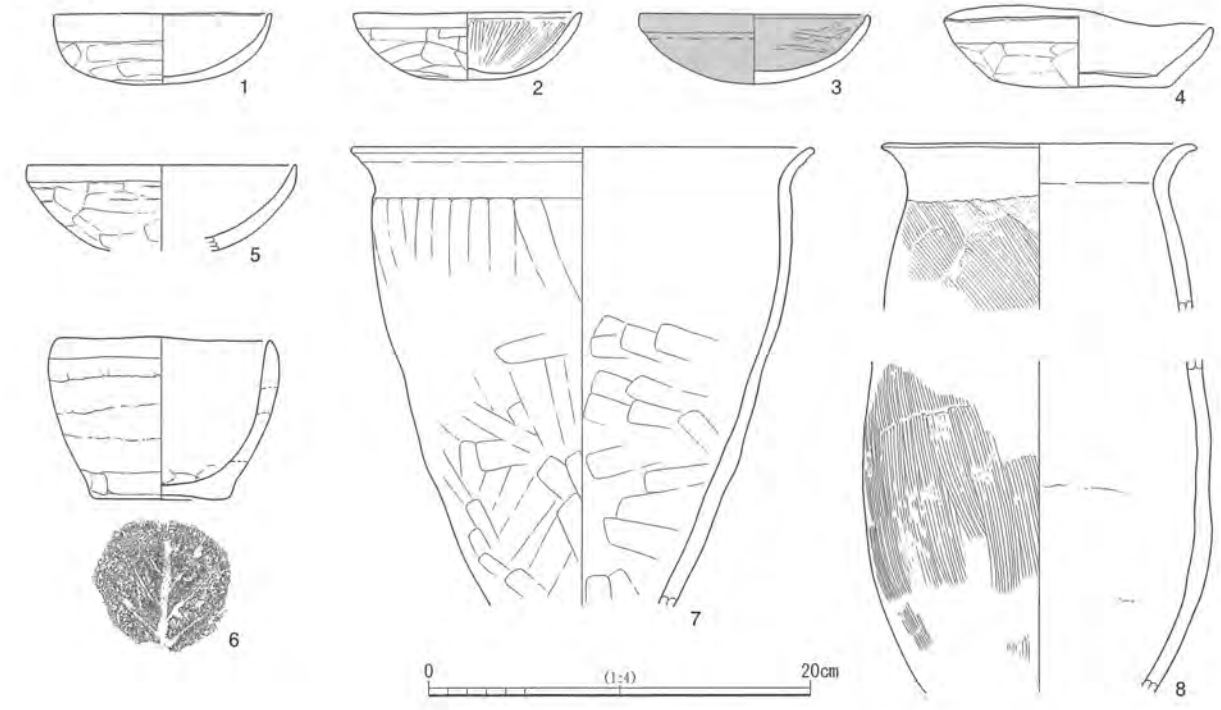
SI－006の５m南に位置する。北側にSI－015、東側SI－010、南側にSI－005が重複し、本跡は南側を大きくSI－005に切られている。南西部の壁は失われているが、SI－005の掘削深度が比較的浅かったため南側の床と柱穴は遺存した。本跡はやや横長の方形竪穴で、北壁の中央にカマド、四隅に４本の主柱穴が配置されている。主柱穴が中央より隅に片寄っているため、居住空間が広い。遺存の良い遺物はカマド内と北東の柱穴付近で出土した。土師器の甕・小型甕・手づくねのミニチュア土器が出土している。甕の底部は比較的大きく、底面には木葉痕がある。

SI－006a

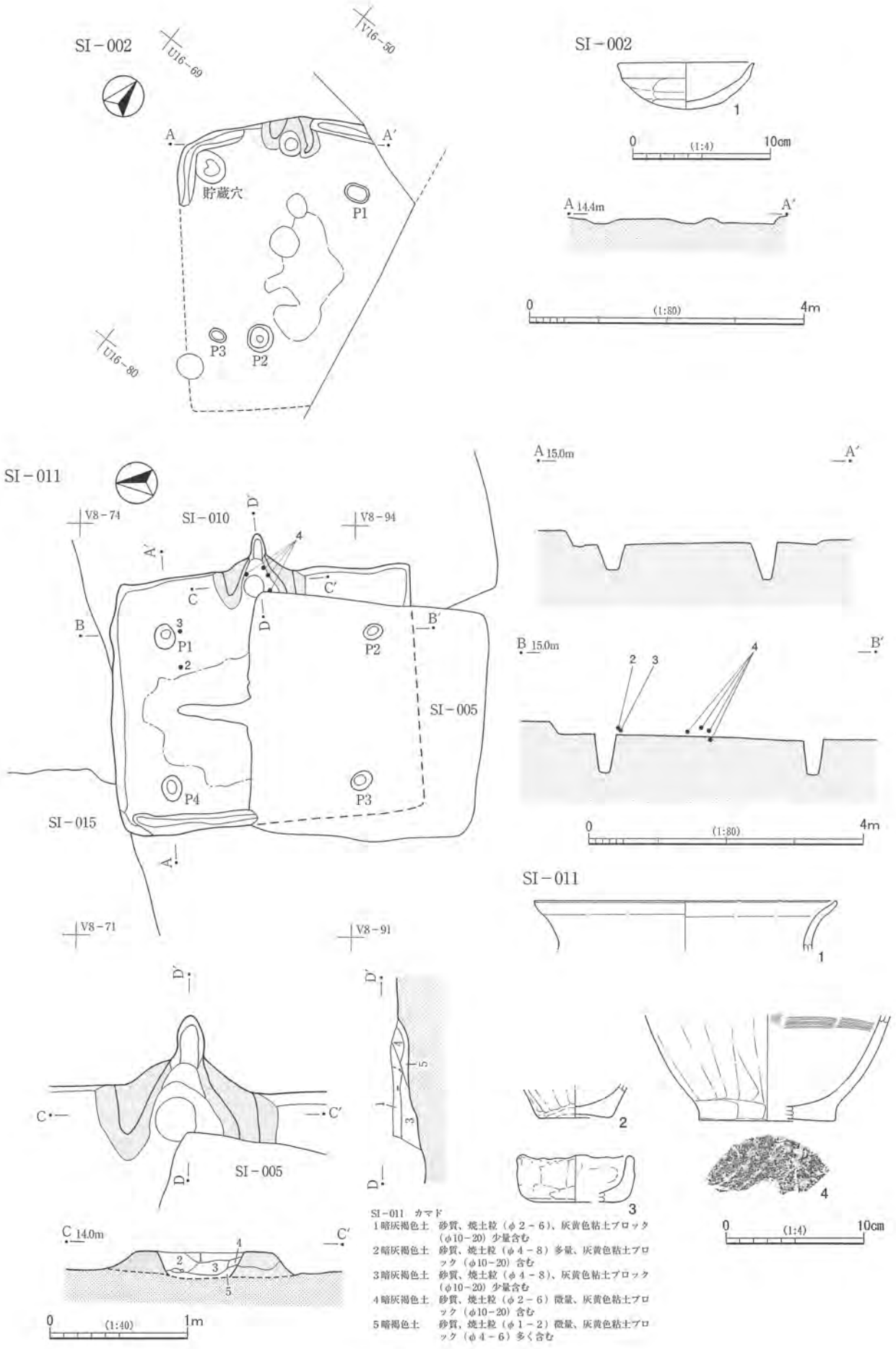


SI－006
1暗灰褐色土　焼土粒（φ1－2）、暗灰黄色粘質砂ブロック（φ5－10）少量含む
2暗灰褐色土　焼土粒（φ1－2）、炭化粒（φ1－2）少量含む、1より暗灰
3暗灰褐色土　焼土粒（φ1－2）少量、炭化粒（φ1－2）微量含む、1より暗く2より茶
4暗灰褐色土　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）含む、1より黒
5暗黄灰色粘質砂　灰褐色土ブロック（φ20～40）少量含む
＊4、5層上面に若干の酸化鉄付着層があることから、貼り床上面となる可能性がある。

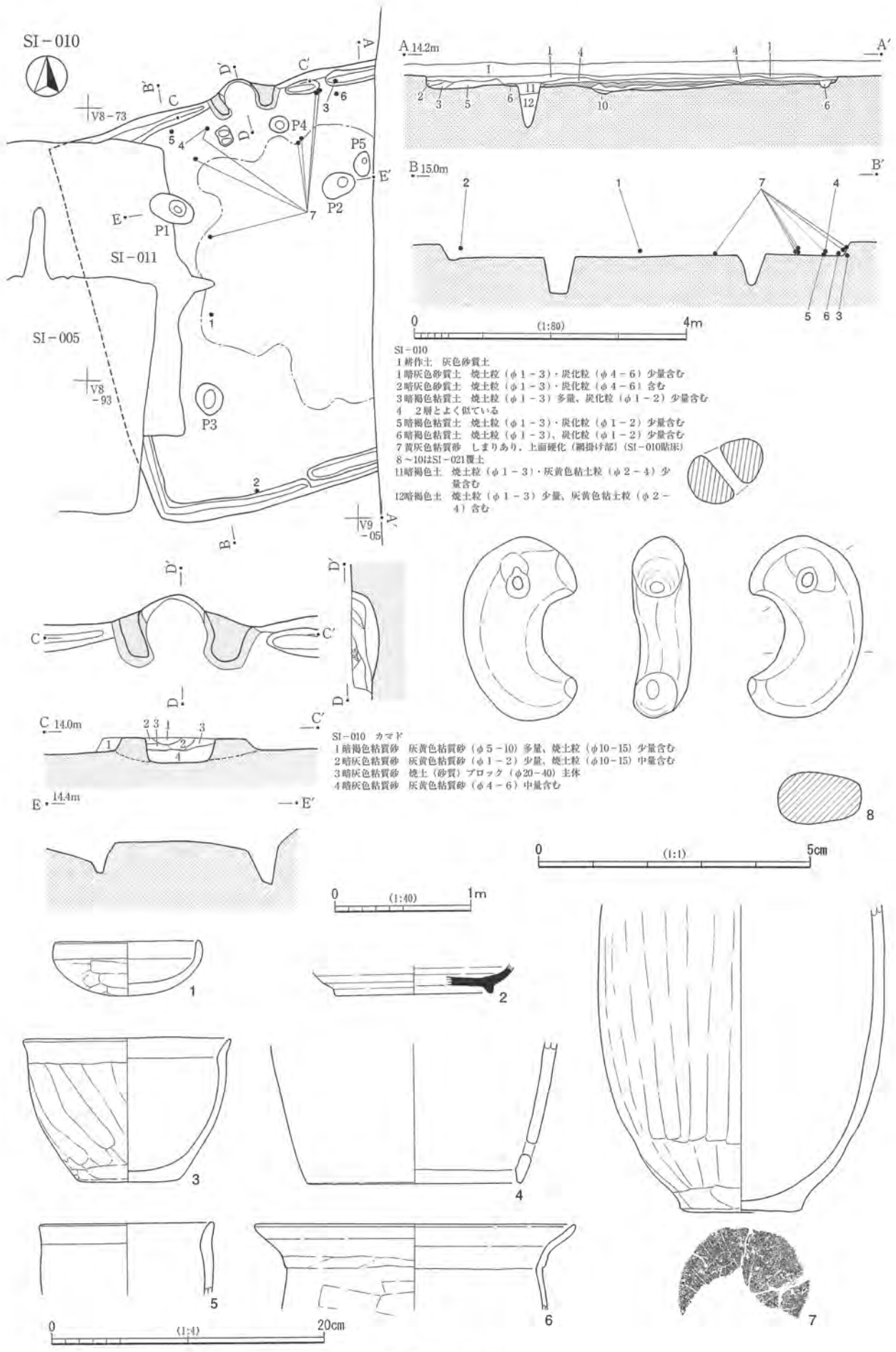
SI－006a



第74図　SI－006



第75図　SI－002・011


SI－010
SI－011
SI－005
P1
P2
P3
P4
P5
V8－73
V8－93
V9－05
A 14.2m
A′
B 15.0m
B′
0 (1:80) 4m
SI－010
Ⅰ耕作土　灰色砂質土
1暗灰色砂質土　焼土粒（φ1－3）・炭化粒（φ4－6）少量含む
2暗灰色砂質土　焼土粒（φ1－3）・炭化粒（φ4－6）含む
3暗褐色粘質土　焼土粒（φ1－3）多量、炭化粒（φ1－2）少量含む
4　2層とよく似ている
5暗褐色粘質土　焼土粒（φ1－3）・炭化粒（φ1－2）少量含む
6暗褐色粘質土　焼土粒（φ1－3）、炭化粒（φ1－2）少量含む
7黄灰色粘質砂　しまりあり、上面硬化（網掛け部）（SI－010貼床）
8～10はSI－021覆土
11暗褐色土　焼土粒（φ1－3）・灰黄色粘土粒（φ2－4）少量含む
12暗褐色土　焼土粒（φ1－3）少量、灰黄色粘土粒（φ2－4）含む
C 14.0m
C′
E 14.4m
E′
SI－010　カマド
1暗褐色粘質砂　灰黄色粘質砂（φ5－10）多量、焼土粒（φ10－15）少量含む
2暗灰色粘質砂　灰黄色粘質砂（φ1－2）少量、焼土粒（φ10－15）中量含む
3暗灰色粘質砂　焼土（砂質）ブロック（φ20－40）主体
4暗灰色粘質砂　灰黄色粘質砂（φ4－6）中量含む
0 (1:1) 5cm
0 (1:40) 1m
0 (1:4) 20cm

第76図　SI－010

SI－013（第77図、図版５・14）

SI－006の北東に重複する住居である。竪穴の南東部にSI－016、北東部にSI－017が重複し、本跡はSI－006に切られている。南西コーナーの土坑状の掘り込みは、SI－006の構築によって露出した床下の掘りかたと思われる。カマドを北壁の中央に置き、対角線上に主柱穴を配している。竪穴中央に位置するP5は、SI－016のカマドの焚き口かと思われたが、図を合成するとSI－016が極端に長軸の長い平面形になるため、本住居に伴うピットと考えるのが妥当であろう。

遺物（第77・78図、図版22）遺物は竪穴内のほぼ全域で出土し、遺存のよいものは北半に集中している。土師器の坏（１～５）・高坏脚部（14）・鉢（９）・壺（13）・甕（６・８・10～12・15）・甑（７）がある。坏は口縁部下端に稜線をもつ点は共通するが、それぞれ形態が異なる。口縁部が外方に開くものと内傾するものがあり、後者の３は著しく口縁部が高い。これらの坏類の形式や赤彩の高坏、ハケ目の残る壺（13）、強く外反する口縁部（６・８）をもつ甕類の特徴は後期中頃に溯るものであろう。

SI－015（第78図、図版５・14・23）

SI－006の南に重複する住居で、南西隅にSI－020、南東隅にSI－011が接している。SI－006・011に切られ、SI－020より後に築かれたようである。北壁はSI－006の掘削によって大きく失われているが、ほぼ中央にカマド焚き口の一部が残る。主柱穴を対角線上に４本配し、カマドに対面する南壁際の中央に入り口ピットがある。西側の柱穴より東側の床面が硬化している。壁の立ち上がりがほとんどなく、壁溝の幅が42cm～72cmもあり、主柱穴周辺も大きく掘り広げているため調査時に床を掘りすぎたのではないかと思われるが、幅の広い壁溝は千葉市城ノ台遺跡などにも見られる。覆土から土師器坏の破片と須恵器の坏蓋が出土した。後者は奈良時代の遺構からの混入品と考えられる。

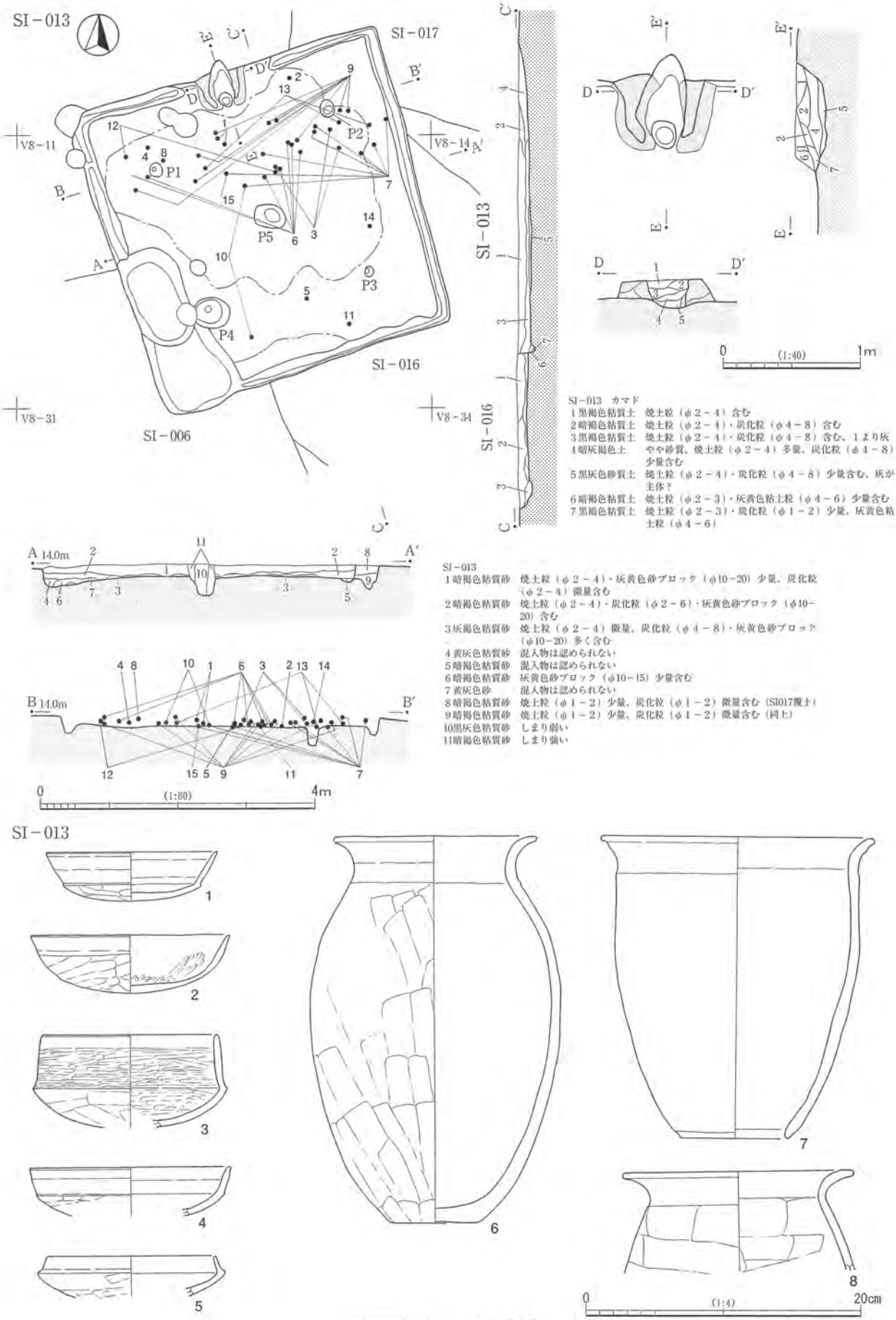
SI－016（第79図、図版75・78）

Ｃ区調査区の北東部に位置し、北西側をSI－013、東側をSI－035、南側をSI－006・009に切られている。北西の壁はSI－013の掘削によって失われているが、ほぼ方形の竪穴であることがわかる。主柱穴は南側の２か所に認められ、壁溝と重複している２基のピットも本跡に伴う可能性がある。出土位置を特定できる遺物は土製の勾玉１点（１）である。覆土から他に敲石（２）・砥石（３・４）が出土している。

SI－017（第80図、図版５・23）

Ｃ区調査区の北端部に位置し、東壁側は調査区外にある。北西側にSI－028・039、南西コーナーにSI－013が重複し、いずれも本住居より古い遺構である。また、床下には弥生時代の環濠SD－016が検出された。P1～P6が柱穴と見られ、竪穴の中央部に偏っている。南柱列のP4は貯蔵穴の可能性もある。南壁際の中央には入り口ピットが設けられている。カマドがあったと推定される北壁の中央部には丁度攪乱坑があり、カマドの有無を確認できない。また、西壁の南寄りに外に張り出した小ピットがあり、ここにカマドが設置されていた可能性もある。

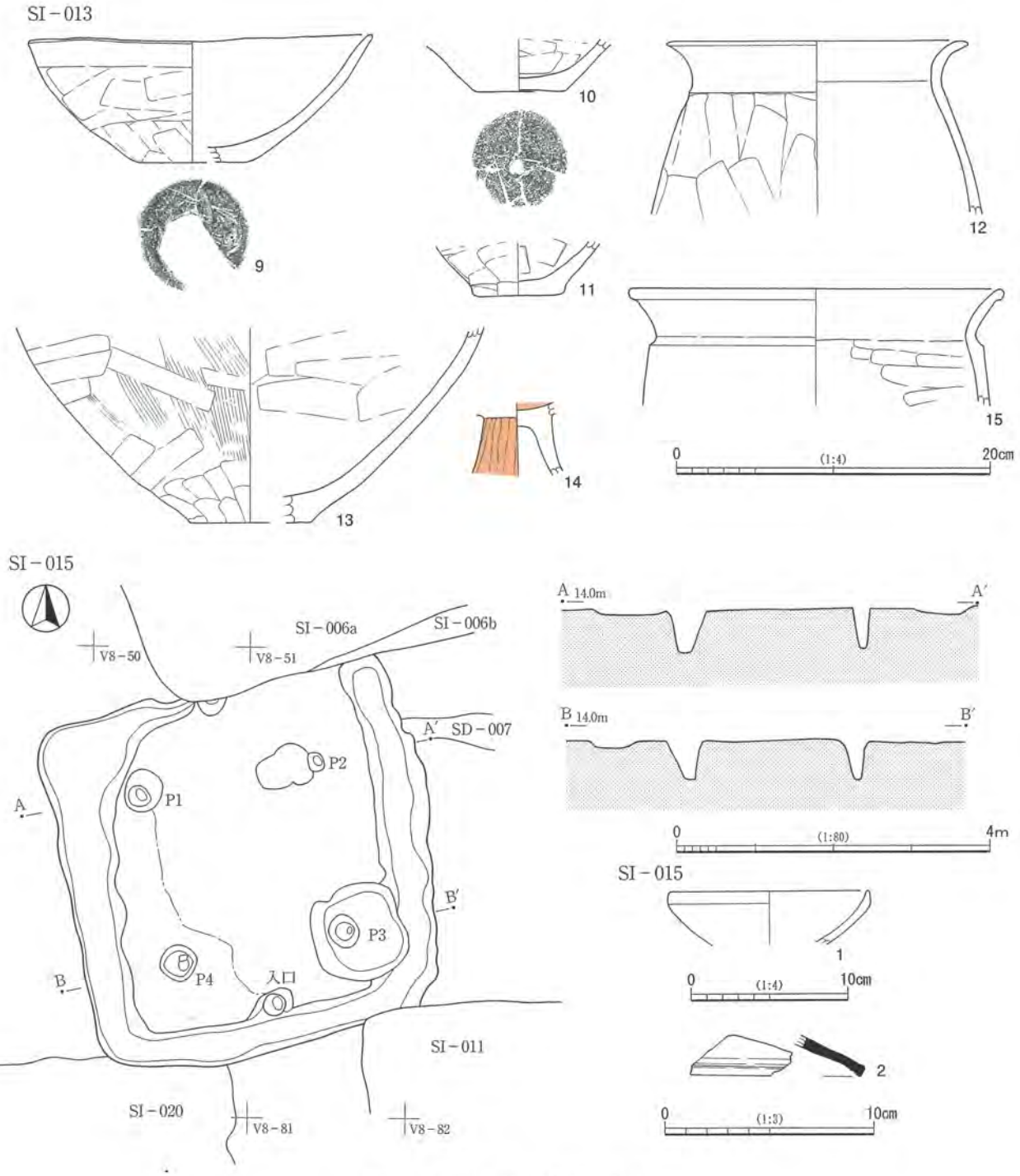
遺物は南西部に多く、土師器坏３点と須恵器甕の破片を図示した。小振りの有段口縁の坏（１・２）と大きな平底をもつ赤彩の盤状坏（３）があり、古墳時代終末期の土器群といえるであろう。



SI－013　カマド
1黒褐色粘質土　焼土粒（φ2－4）含む
2暗褐色粘質土　焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ4－8）含む
3黒褐色粘質土　焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ4－8）含む、1より灰やや砂質、焼土粒（φ2－4）多量、炭化粒（φ4－8）少量含む
4暗灰褐色土
5黒灰色砂質土　焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ4－8）少量含む、灰が主体？
6暗褐色粘質土　焼土粒（φ2－3）・灰黄色粘土粒（φ4－6）少量含む
7黒褐色粘質土　焼土粒（φ2－3）・炭化粒（φ1－2）少量、灰黄色粘土粒（φ4－6）

SI－013
1暗褐色粘質砂　焼土粒（φ2－4）・灰黄色砂ブロック（φ10－20）少量、炭化粒（φ2－4）微量含む
2暗褐色粘質砂　焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ2－6）・灰黄色砂ブロック（φ10－20）含む
3灰褐色粘質砂　焼土粒（φ2－4）微量、炭化粒（φ4－8）・灰黄色砂ブロック（φ10－20）多く含む
4黄灰色粘質砂　混入物は認められない
5暗褐色粘質砂　混入物は認められない
6暗褐色粘質砂　灰黄色砂ブロック（φ10－15）少量含む
7黄灰色砂　混入物は認められない
8暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）少量、炭化粒（φ1－2）微量含む（SI017覆土）
9暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）少量、炭化粒（φ1－2）微量含む（同上）
10黒灰色粘質砂　しまり弱い
11暗褐色粘質砂　しまり強い

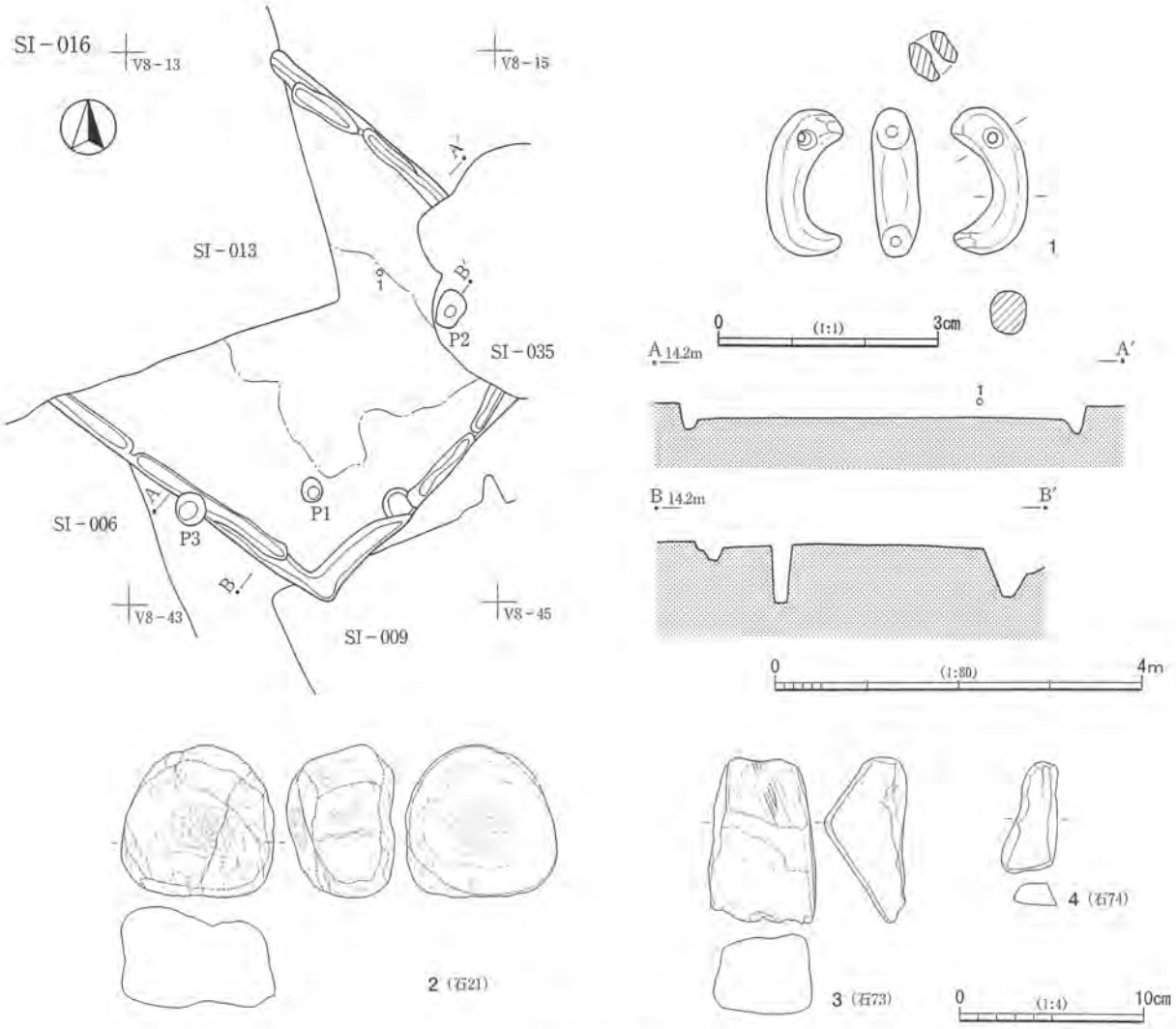
第77図　SI－013（1）



第78図　SI－013（2）・015

SI－020（第81図、図版26）

C区調査区の北端部に位置し、SI－015の南西隅に重複する住居である。後世のピットが2基掘り込まれている他に切り合う遺構はないが、全体に削平されているため壁の立ち上がりはほとんど残っていない。また、壁溝が全体に幅広いのは掘りかたまで掘り下げられているからであろう。従って、床面は既に遺存していないといえる。四隅に主柱穴が配され、北壁の中央にカマドの焚き口跡が残る。柱の掘りかたが大きく抉られているのは、柱が抜き取られたためであろう。甕の口縁部～肩部と底部の破片が出土したほか、土師器甕の胴部を加工したと思われる円板形土製品が1点出土した。



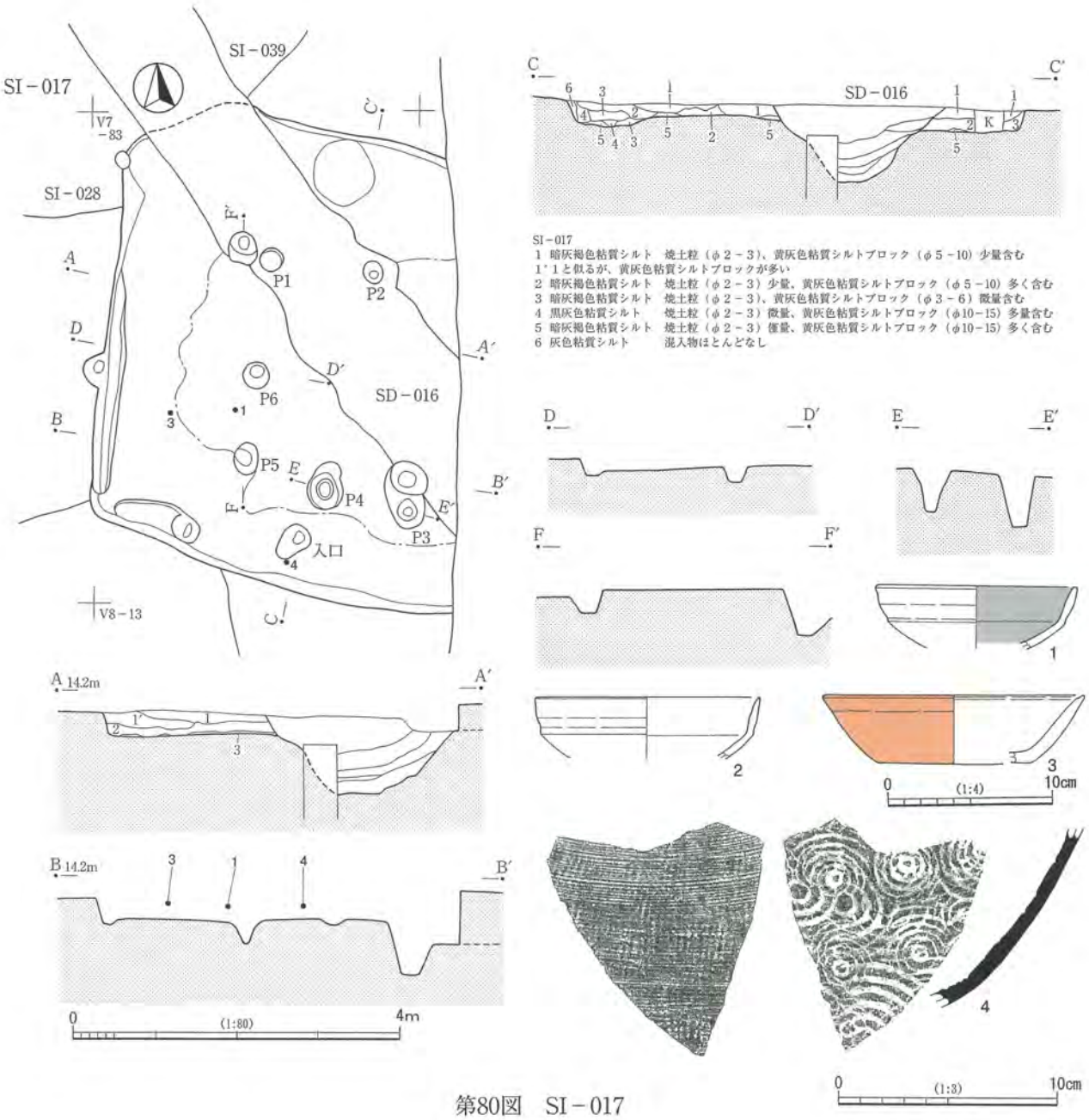
第79図　SI－016

SI－028・029・039（第81図、図版15・26・76）

3棟の竪穴住居が調査区北部のV7－73グリッド周辺から重複して検出されている。いずれも古墳時代後期の遺構と考えられ、3遺構のなかではSI－029が最も新しく、SI－028が一番古い。

SI－028は弥生時代のSD－016を切り、SI－039以外にも古墳時代後期のSI－017、奈良時代のSI－037に切られている。平面形は隅丸方形の形状であり、弥生時代後期の竪穴住居である。南北軸の長さは2.70mであり、深さは15cm前後である。西壁と南壁際に周溝と考えられる溝がみられる。奈良時代の遺物が覆土中から出土しているが、SI－037からの流れ込みの遺物と考えられる。

SI－029は調査区の北東隅から検出されたため、遺構の大部分が調査区外となっている。床面には攪乱が入る。平面形は方形であり、確認面から床面までの深さは24.5cmである。南西隅に周溝がみられる。覆土から出土した遺物を2点図示した。1は在地産の土師器甕の底部であり、外面にはヘラケズリが施されている。2は石皿であり、混入品あるいは再利用されたものと考えられる。砂岩製で最大長は149.2mm、重さは849.3gである。

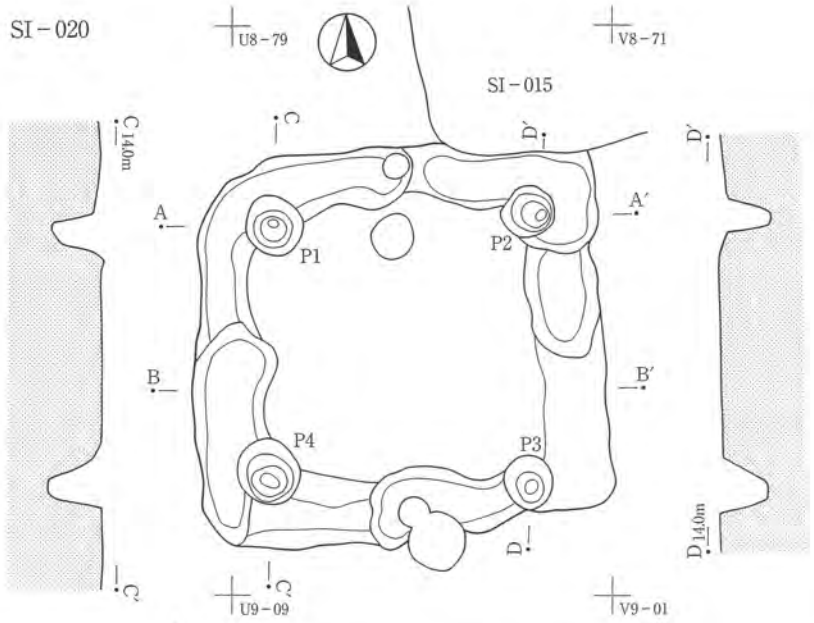


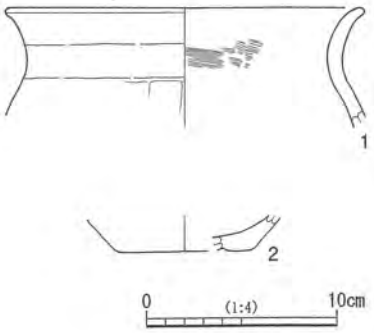
第80図　SI－017

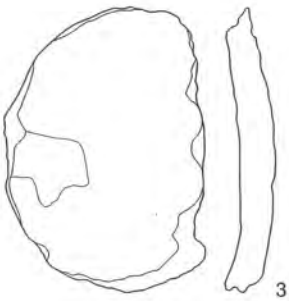
SI－039はSI－028のほかに弥生時代のSD－016を切り、古墳時代後期のSI－017と重複する。方形で規模は東西方向が3.4m以上と考えられる。確認面から床面までの深さは17.6cmであり、南壁と西壁の一部の周溝がみられ、南壁際に出入り口ピットが存在する。楕円形を呈し、規模は長軸37.0cm、短軸30.0cm、深さは39.3cmである。

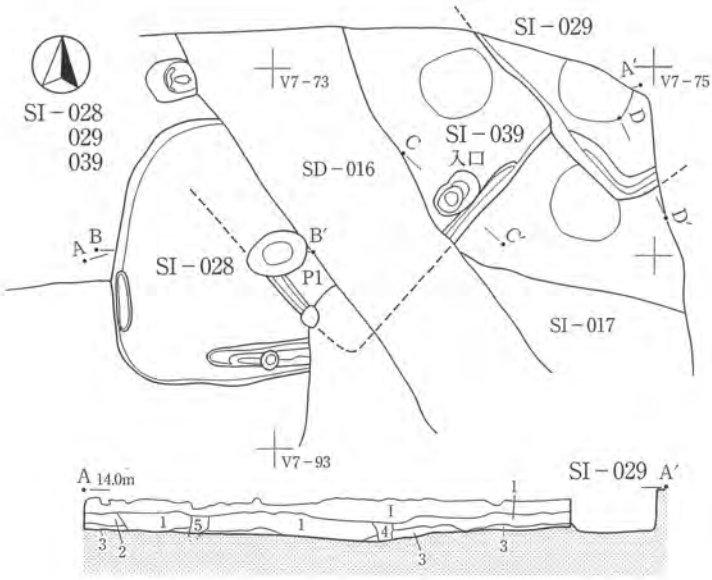
SI－035（第82図、図版28）

C区調査区の北端部に位置し、東壁側は調査区外にある。SI－016の東隅を切って築かれている。南北（短軸か）2.8mほどの浅く小規模な遺構で、土坑の可能性もある。西側中央部の張り出しをカマドの痕跡と見て住居跡とした。竪穴内の溝状の落ち込みや段は床下の掘りかたであろうか。土師器坏２点と高坏の脚部が１点出土している。

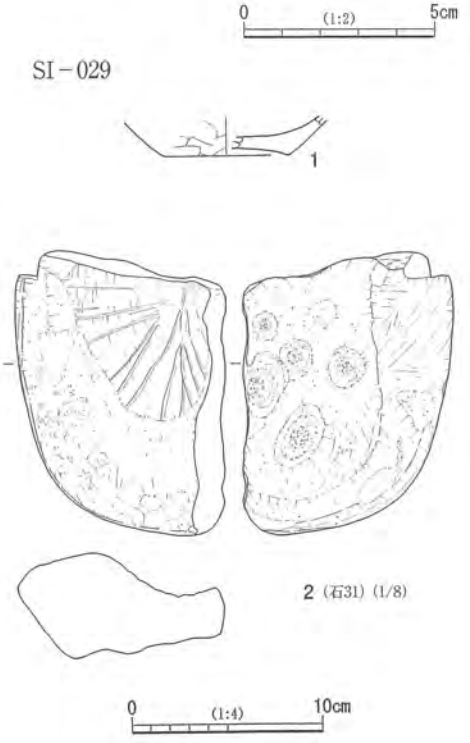


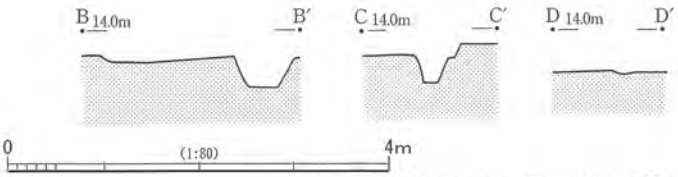




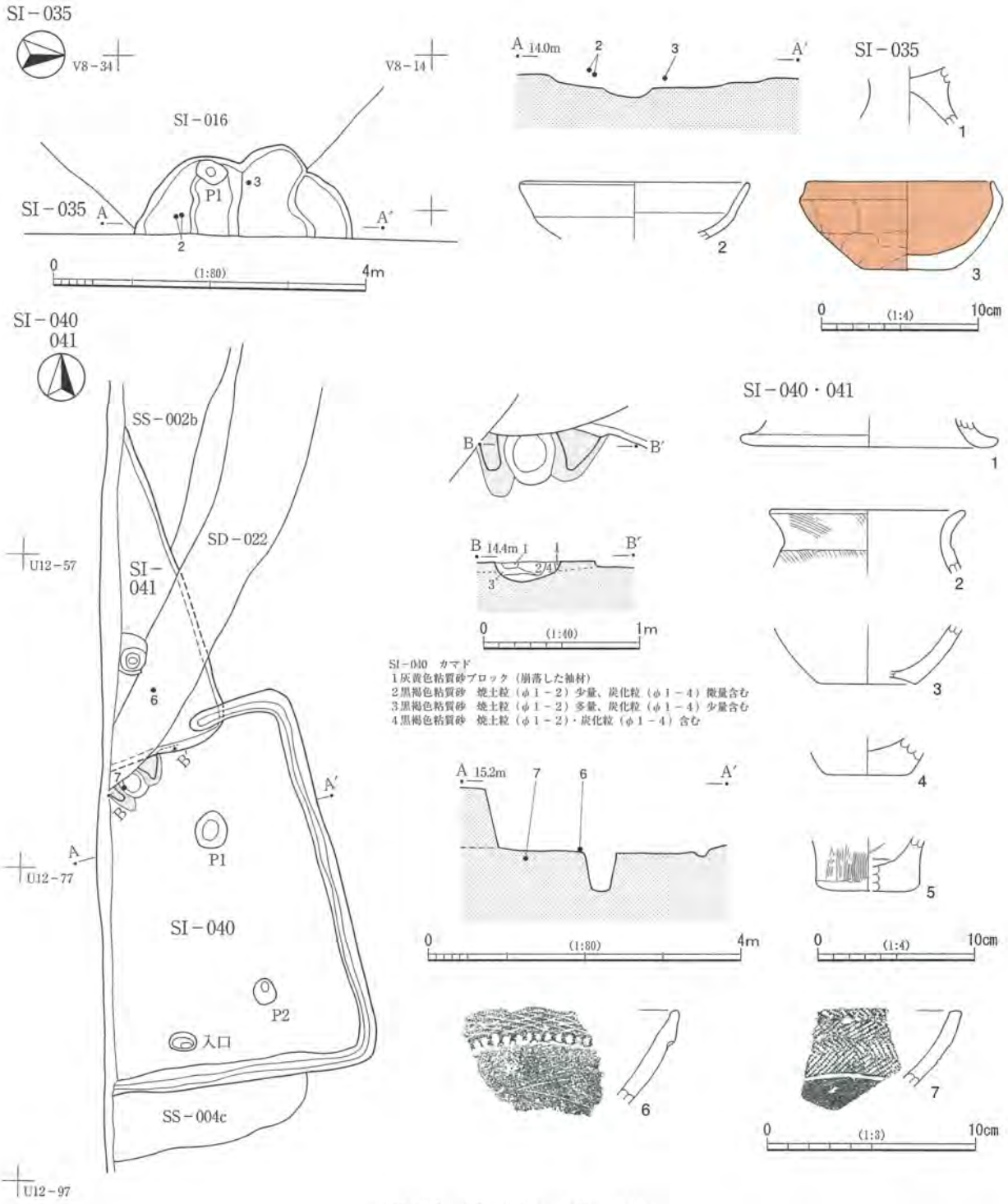


SI－028・029・039　土層
Ⅰ表土
1 黒褐色粘質土　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）微量，灰黄色粒子（φ1－6）少量含む
2 黒褐色粘質土　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）微量，灰黄色粒子（φ1－6）含む
3 暗褐色粘質土　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）微量，灰黄色粒子（φ1－6）含む
4 黒色粘質土　灰黄色粒子（φ2－6）含む
5 暗灰色砂　やや粘質，混入物なし





第81図　SI－020・028・029・039



第82図　SI－035・040・041

SI－040・041（第82図、図版15）

２棟の竪穴住居と溝SD－022がB区北部の西端で重複して検出されている。いずれも古墳時代後期の遺構と捉えられているが、SD－022は後世の溝である可能性が高い。SI－041の南壁がSI－040のカマドを切っていることから、SI－041の方が新しいと考えられる。SI－041はそのほとんどが調査区外にあるため、南東部と柱穴１基しか確認できない。高坏脚部の裾部破片が本跡に伴うと見られる唯一の遺物である。長

脚の大型高坏が推定できる。

SI－040はカマドのほか、東側の柱穴２基と南壁際の入り口ピットが検出された。遺物は少なく、ハケ調整の小型甕と甕底部が本跡の遺物である。４～７は弥生時代の遺構からの混入品である。

SI－059（第83図、図版17・32・33）

SI－041の北東に隣接する竪穴住居で、やはりSD－022に切られ、下層には方形周溝墓SS－002が重複する。西側はほとんど遺存していないが、辛うじて壁の一部が残っており、南北4.7m・東西4.3mの規模であることが分かった。カマドは北壁のやや西寄りにあり、焚き口に２本の支脚が立てられたまま残っていた。北東の隅に方形の貯蔵穴がある。主柱穴は北西を除く３か所に遺存した。壁溝は北側と東側で検出されたが、南側と西側には見られない。竪穴中央部の床硬化面で遺物が出土し、大型の鉢（１）・坏（２）・甕（３・５）が出土した。５の甕は９割方遺存し、非常に厚手で重い。なお、４の甕底部は弥生時代の遺物であろう。

SI－063（第84図、図版33）

Ｂ区の北部の東端に位置する方形の竪穴住居で、東側は調査区外にある。北側は後世の攪乱によって失われているため、北東に向けて延びている可能性がある。また、南西隅には方形周溝墓SS－003が重複する。現状の竪穴内には柱穴・カマドなどの施設はなく、住居跡かどうか疑問が残る。遺物は遺構内の全域で出土し、小規模な区域の割に遺物の量が多い。出土した土器には土師器坏４点、鉢２点、壺１点、甕４点、甑１点があり、土器の組み合わせは通有の住居跡出土土器と変わらない。深い丸底の坏や口縁部下端に段をもつ広口壺が存在し、甕・甑が細かいハケ調整であることから後期前半の土器群と捉えられる。

SI－064（第85図、図版17・33・80）

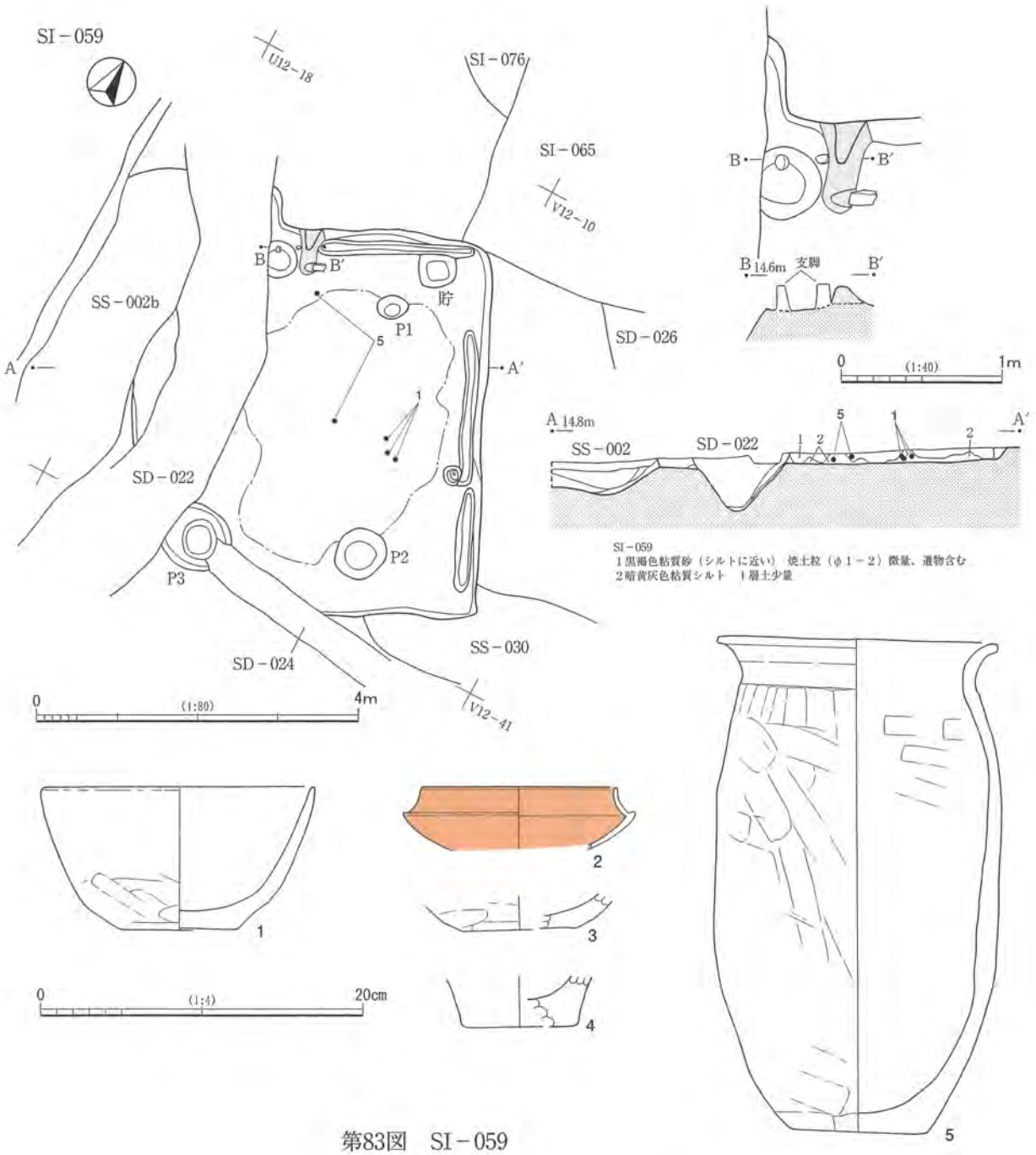
Ｂ区の北部の中央に位置する方形の竪穴遺構で、SI－065・068を切って築かれている。北壁にカマドがあったと思われるが、SI－068の発掘時に失われたようである。竪穴内には４本の支柱穴と入り口ピットがあり、主柱穴の内側の床が硬化している。

覆土内からは土器類・鉄製品・管玉が出土した。土器は断片的なものが多く、土師器坏１点、小型甕１点、甕底部３点、須恵器壺１点が図化に及んだ。須恵器壺（６）の外面にはカキ目が見られる。このうち出土地点がわかるのは小型甕のみである。鉄製品は小型のヤリガンナ２点（７・８）で、大きさや形態が極めて良く似ている。管玉（９）は碧玉製で、長さ6.0㎜、径2.6㎜の小型品である。穿孔は両側から行われている。

SI－065（第85・86図，図版17）

SI－064の南西に重複し、SD－026が竪穴内を南東から北西に向けて縦断している。竪穴の中央部には主柱穴がなく、西壁際に４本、南東隅に２本の柱穴が並ぶ。また、南壁際の中央部には入り口ピットがある。SI－064の掘削によって北東部が大きく失われたため、北壁にあったと推定されるカマドは遺存していない。竪穴の中央部には床硬化面が広がっている。

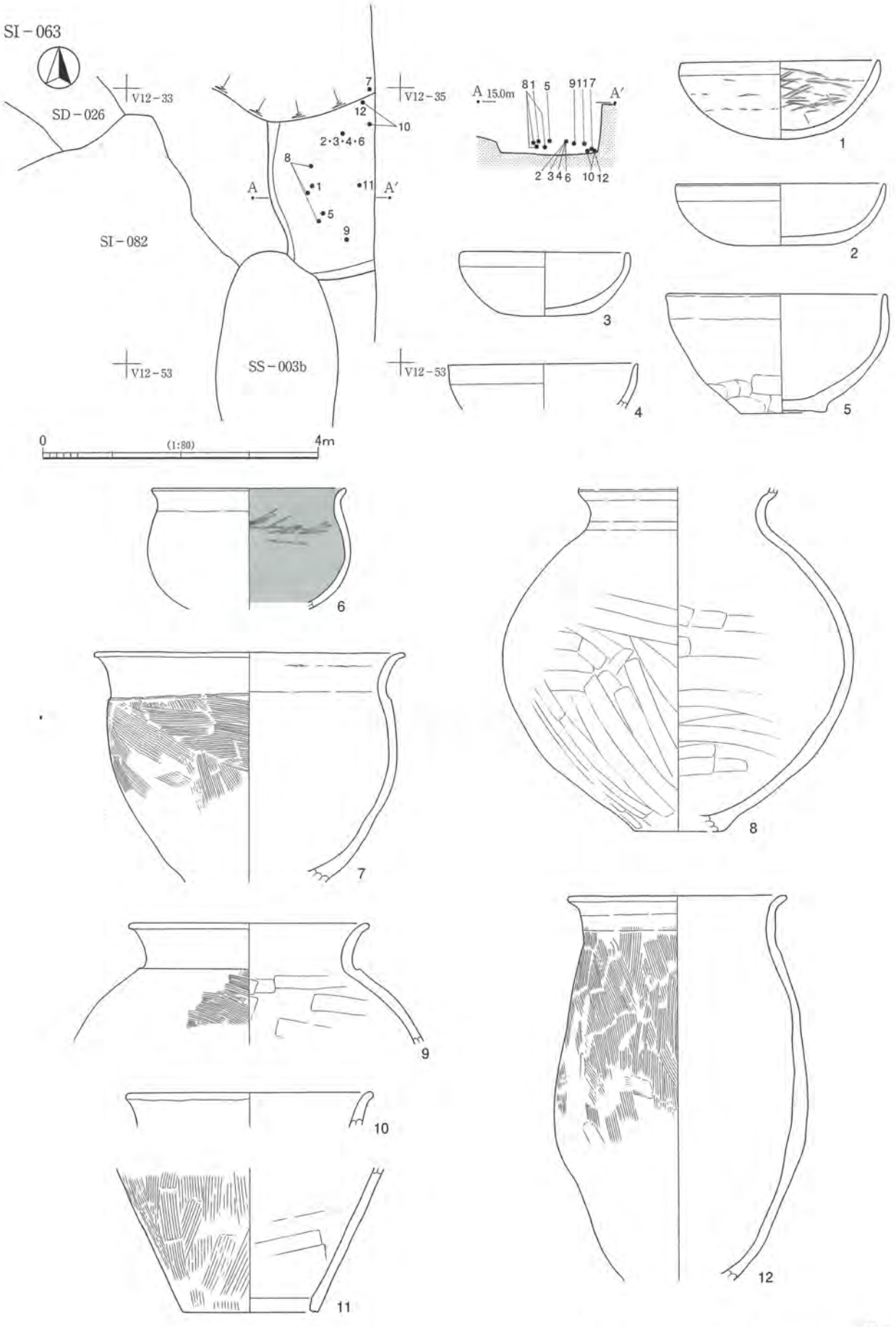
竪穴内にはあたかも詰め込まれたかのように、夥しい量の土器が出土した。それらの分布状況を見ると、



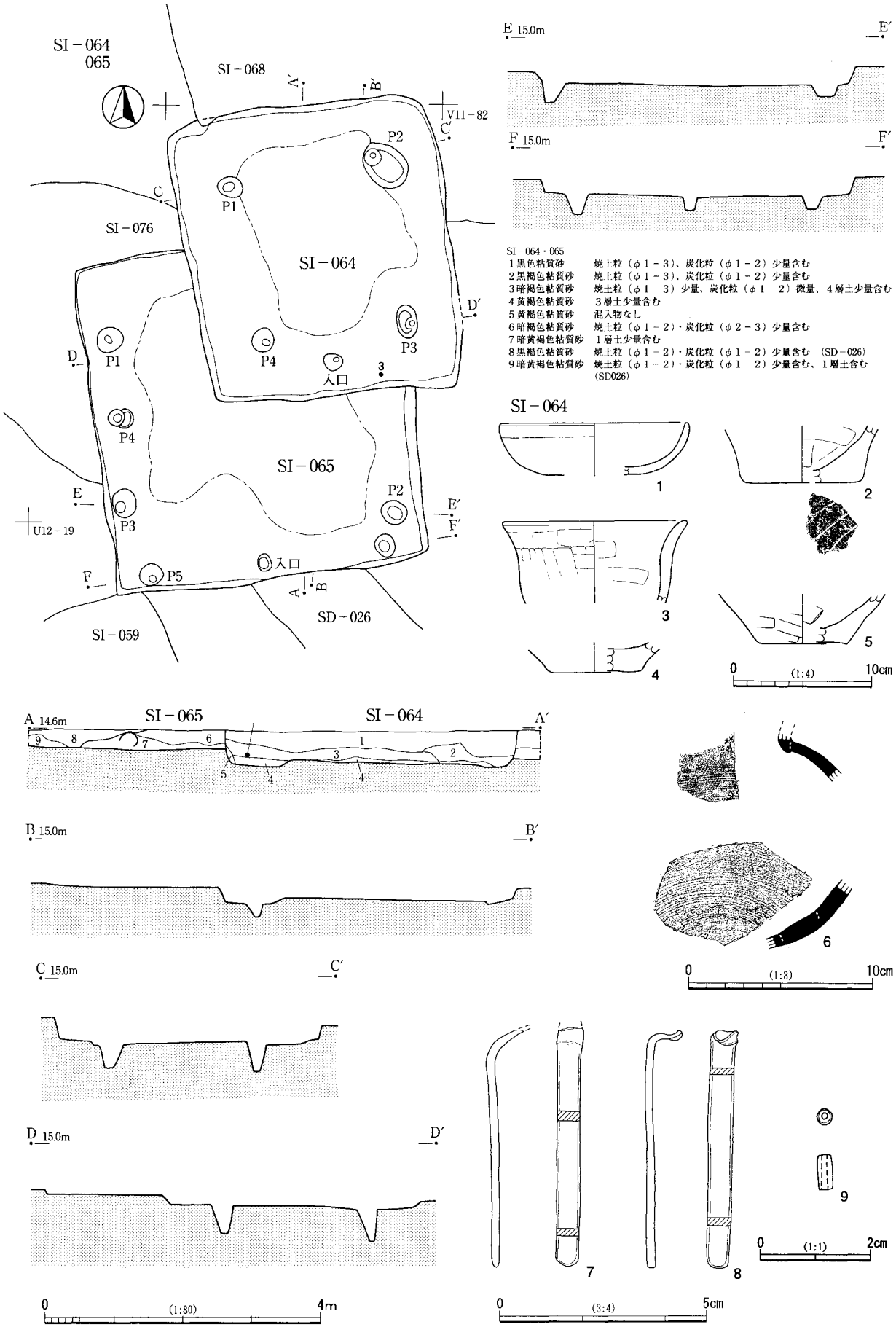
第83図　SI－059

竪穴周縁部が少し埋まった後に入ったことがわかる。覆土は焼土粒・炭化粒を少量含んだ土砂で自然に堆積したものと見られるため、土器群は本跡廃絶後しばらくして一括投棄された可能性がある。

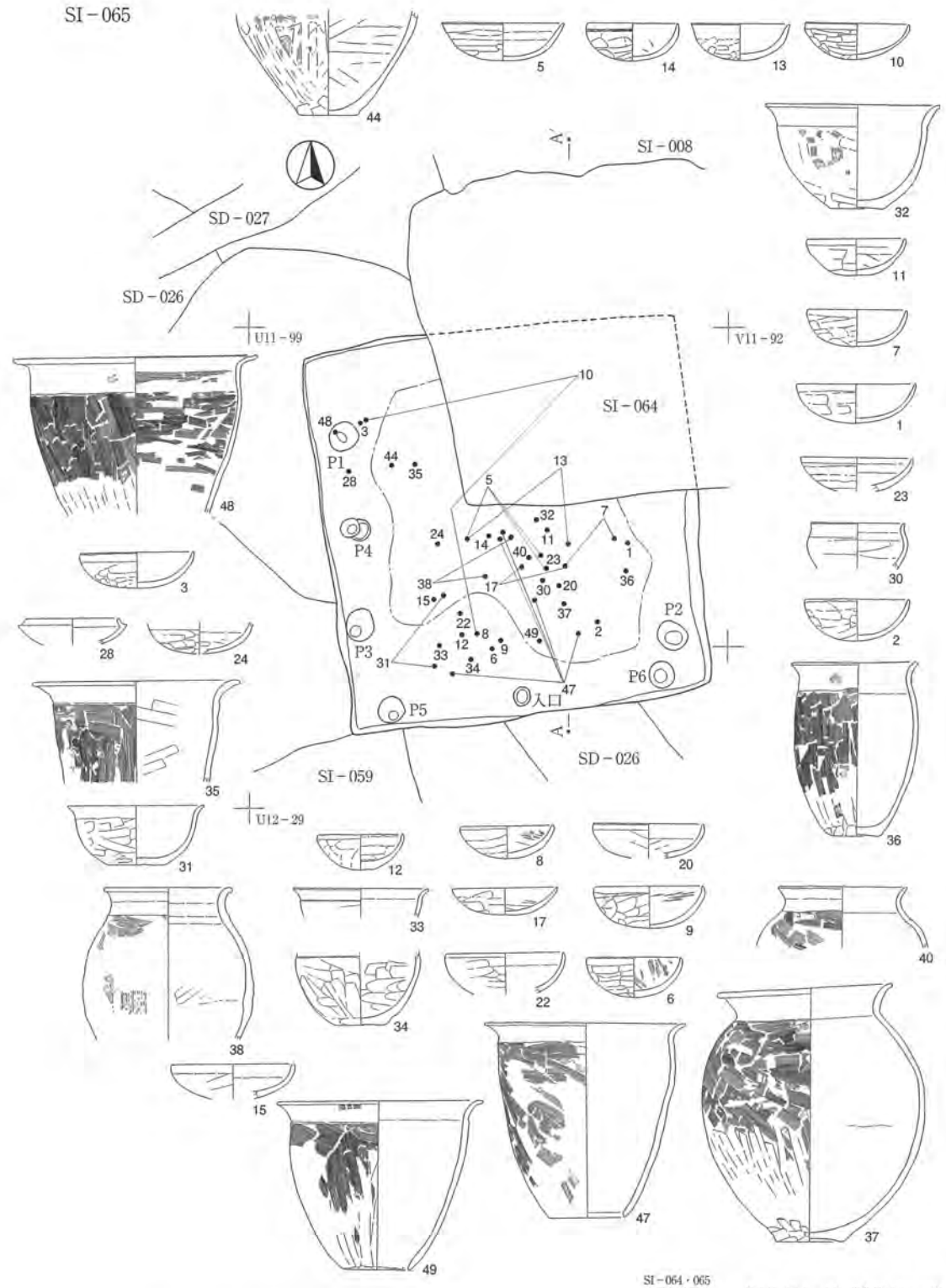
遺物（第87・88図、図版33～36）土師器坏が25点（1～24・28）、鉢7点（26・27・30～34）、高坏2点（25・29）、甕11点（36～46）、甑4点（35・47～49）を図示した。坏はやや内湾する丸底のものが主体であるが、口縁部が外方に開いた例（5・13）や口縁部が強く内傾する例（28）が若干見られる。口径は10.6cm（12）～14.6cm（22）まで幅があり、楕円形で浅い盤状のもの（17）もある。鉢は内傾する口縁部下に明瞭な稜がある形式（26・27）と外方に開く形式（31～33）があり、ヘラケズリ調整である。高坏は坏部下端が屈折して稜をもつ形式で、脚部は短脚のものが出土している。これらの坏・高坏・鉢は、いず

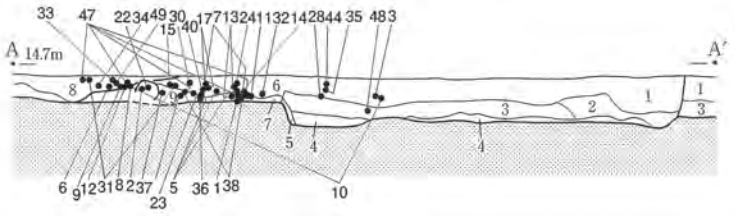

SI－063
SD－026
V12－33
V12－35
V12－53
V12－53
SI－082
SS－003b
A
A′
A 15.0m
0
(1:80)
4m
0
(1:4)
20cm

第84図　SI－063



第85図　SI－064・065（1）



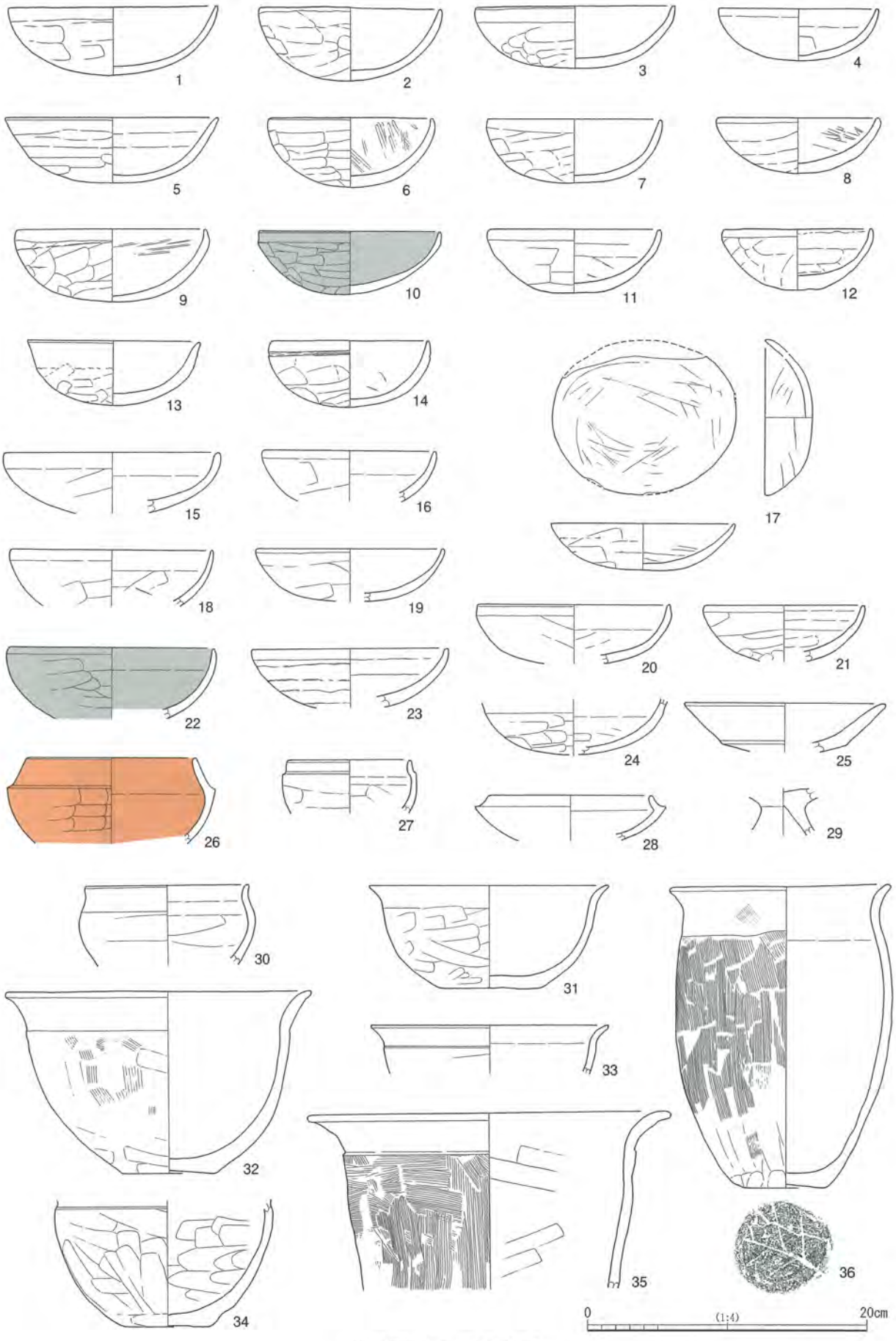


SI－064・065
1 黒色粘質砂　焼土粒（φ1－3）、炭化粒（φ1－2）少量含む
2 黒褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）、炭化粒（φ1－2）少量含む
3 暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－3）少量、炭化粒（φ1－2）微量、4層土少量含む
4 黄褐色粘質砂　3層土少量含む
5 黄褐色粘質砂　混入物なし
6 暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）、炭化粒（φ2－3）少量含む
7 暗黄褐色粘質砂　1層土少量含む
8 黒褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）、炭化粒（φ1－2）少量含む（SD－026）
9 暗黄褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）、炭化粒（φ1－2）少量含む、1層土含む（SD026）

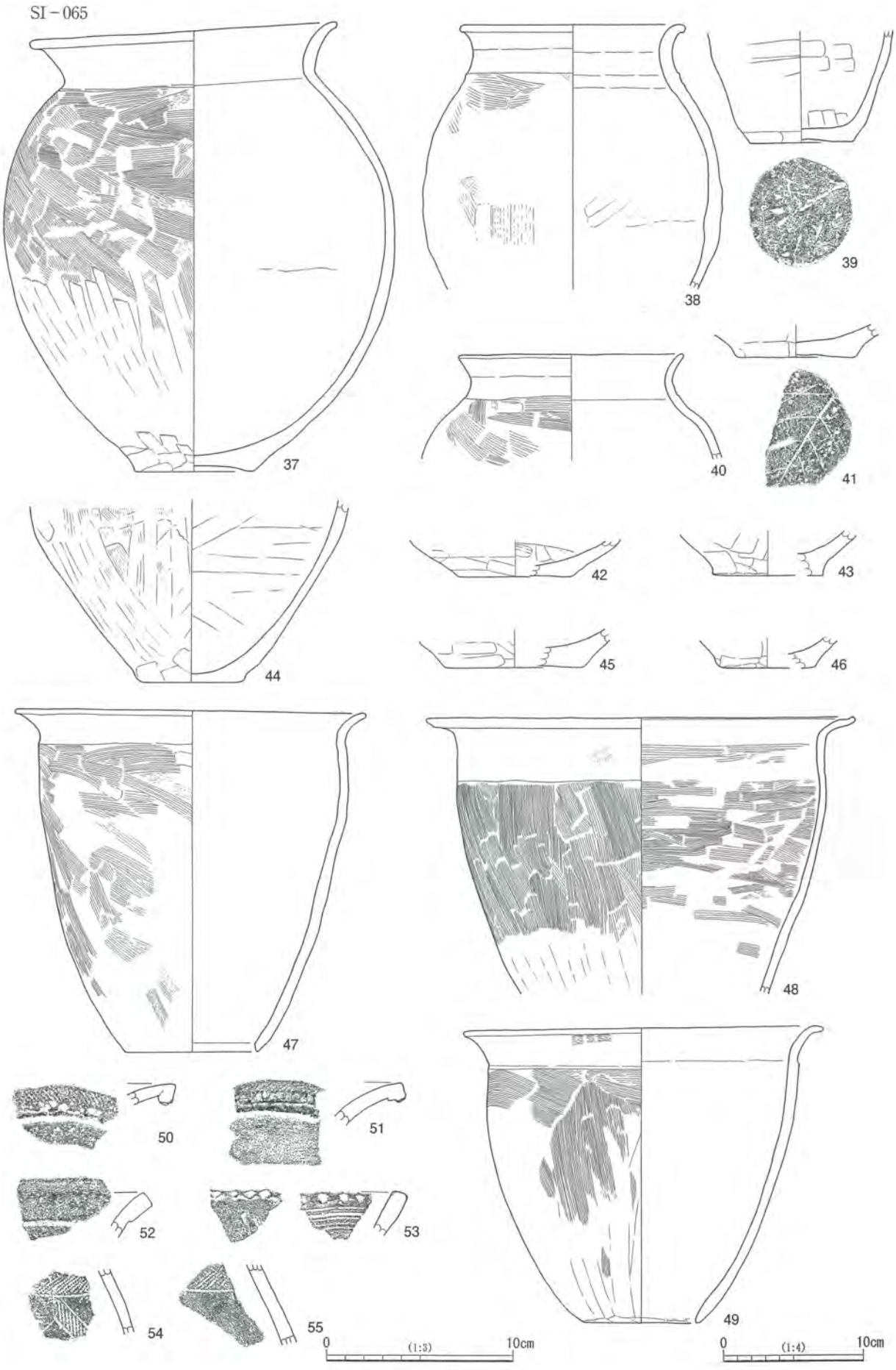
0　(1:80)　4m

第86図　SI－065（2）

SI－065



第87図　SI－065（3）


SI－065
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0
(1:3)
10cm
0
(1:4)
10cm

第88図　SI－065（4）

れも赤彩されていない。甕には寸胴のもの（36・39）と胴部の張るもの（37・38・40・44）があり、ハケ調整で胴下半～底部をヘラケズリしたものが多い。甑は口縁部が大きく開く形式で、底部も比較的大きい。甕と同様にハケ調整とヘラケズリを併用している。後期中頃の土器群と考えられる。

SI－068（第89・90図、図版17・37）

SI－064の北側に重複し、土層の観察ではSI－064に切られているが、本住居を先に発掘したためかSI－064のカマド等は遺存していない。床面は本跡の方が若干高いため重複部の床は失われているが、柱穴はすべて遺存した。カマドを北壁の中央に配し、東の袖脇に円形の貯蔵穴がある。東壁は後世の削平によって失われている。遺物はカマド・貯蔵穴内とその周辺部を中心に分布する。鉢（７）は支脚と共にカマド内で出土した。貯蔵穴では坏２点（１・２）と完形の小型甕（８）が出土した。カマド周辺には甕類が多く、甑もカマド袖付近で出土している。12の甕底部には焼成後の穿孔が見られる。坏の半数以上は赤彩され、丸底の有段口縁坏２種が主要な形式である。甕・甑は胴部に張りのある形態で、ヘラケズリ調整によって仕上げられている。これらの特徴によって、土器群は後期中頃に位置づけられる。

SI－069（第90図、図版37）

Ｂ区北部の住居跡群の南端に位置し、北西に重複する古墳時代後期のSI－079を切って築かれている。後世の削平によって南半が失われ、竪穴内には南側の主柱穴のみが残る。壁溝がめぐり、北西コーナーには焼土塊が見られる。本遺跡では、カマドを北側に設けるのが通例であるが、北壁にその痕跡はない。覆土から口径15cmと推定される平底で大型の土師器坏が出土した。後期後葉～末葉の土器と推定される。

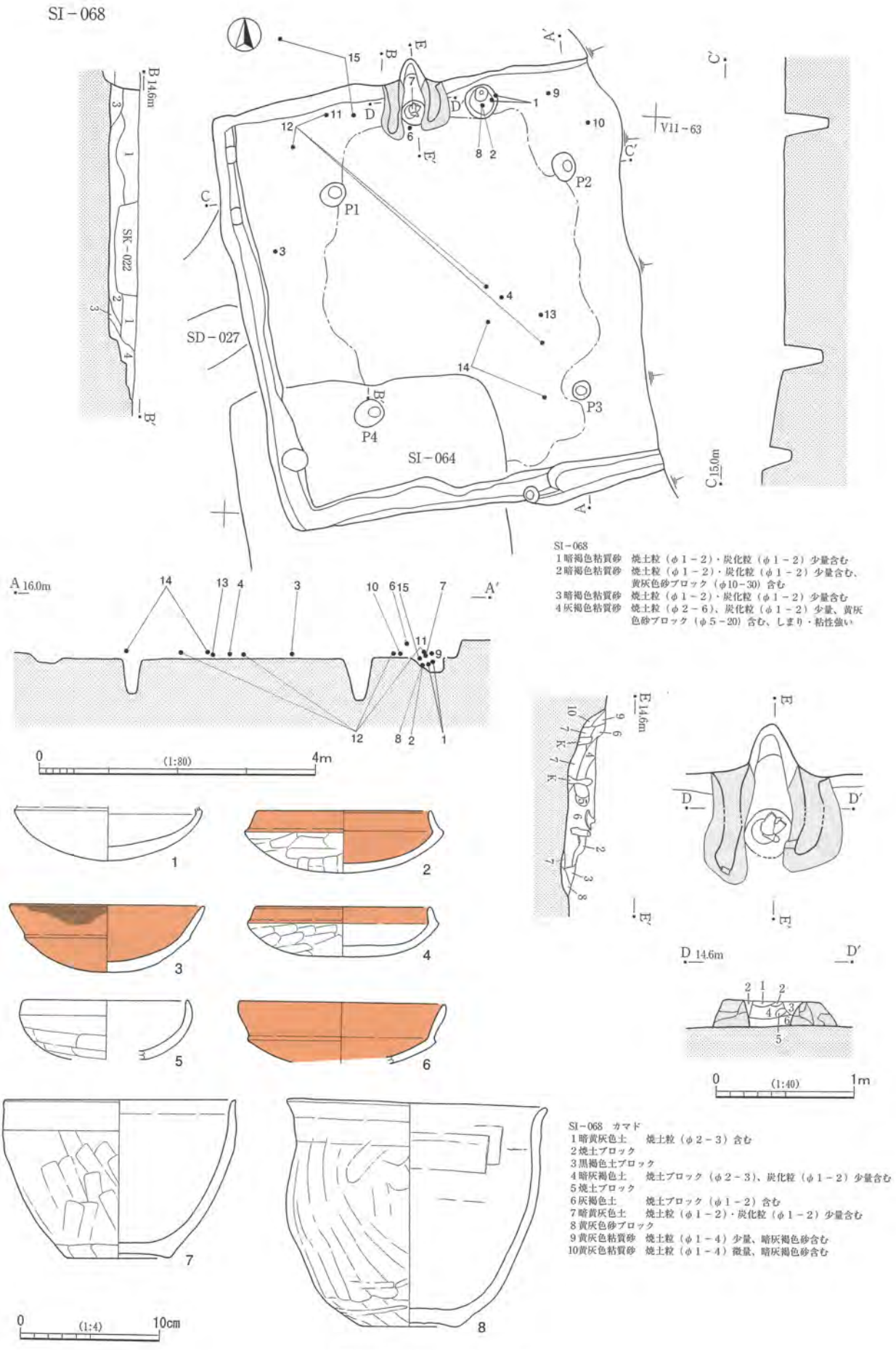
SI－070（第91図、図版37）

Ｂ区北部の住居跡群の北西端に位置し、後世の溝SD－025の掘削によって東側を失っている。また、南東には弥生時代後期の住居と思われるSI－080があり、床下には貼り床が確認された。北壁の中央にカマド焚き口部の掘り込みが残っているが、袖は既に消失していた。竪穴内に柱穴はないため、外部に施設をもつ構造であったと考えられる。遺物の量は多くないが、土師器壺（４）、甕（２・３）、須恵器坏（５）が本跡に伴うである。ハケ調整の長胴甕（２・３）は後期の安房地域に独特の形式で、上総以北ではヘラケズリ調整に変換している器種である。なお、１の壺底部は他とは明らかに質感が異なる弥生時代の壺で、SI－080からの混入品と思われる。

SI－077（第91図、図版39）

SI－070の南に隣接する竪穴で、西半は調査区外にある。また、東コーナー付近はSD－025の掘削によって失われ、床下にはSI－080が重複する。竪穴住居に通有の施設は全く検出されていない。竪穴の深さは27cmほどあり、多くの遺物が出土した。

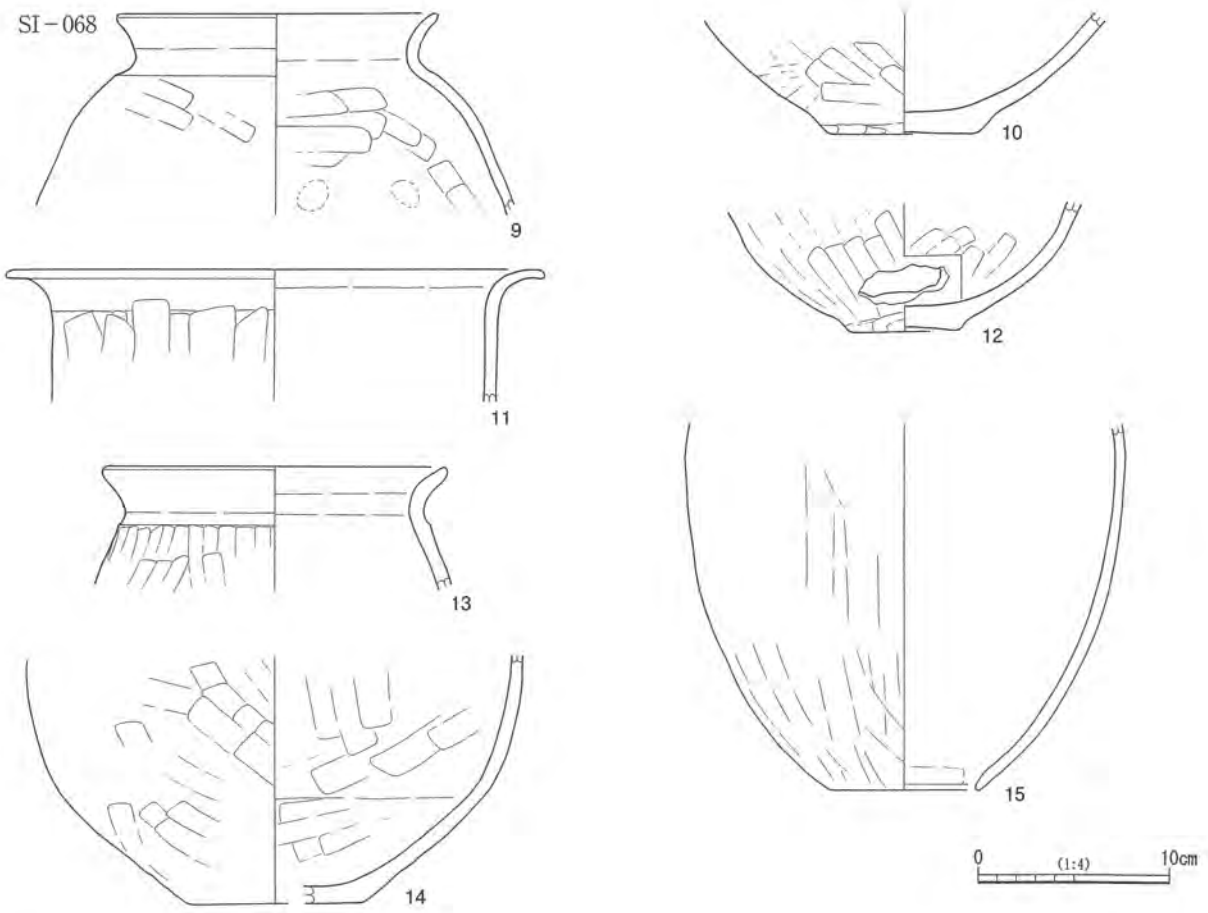
出土した土器には、須恵器坏２点（１・２）、土師器坏（３～７）、高坏（８～10）、須恵器壺（11・12）、小型甕（13）、小型壺（14）がある。これらを見ると、明らかに時期差があり、後期前葉～末葉の土器が混在している。後期前葉の土器には土師器坏（４・７）、後期中葉の土器には坏（５）、高坏（９・10）、小型甕（13）、小型壺（14）、後期後葉の土器には須恵器坏（１・２）、土師器坏（６）、高坏（８）、後期

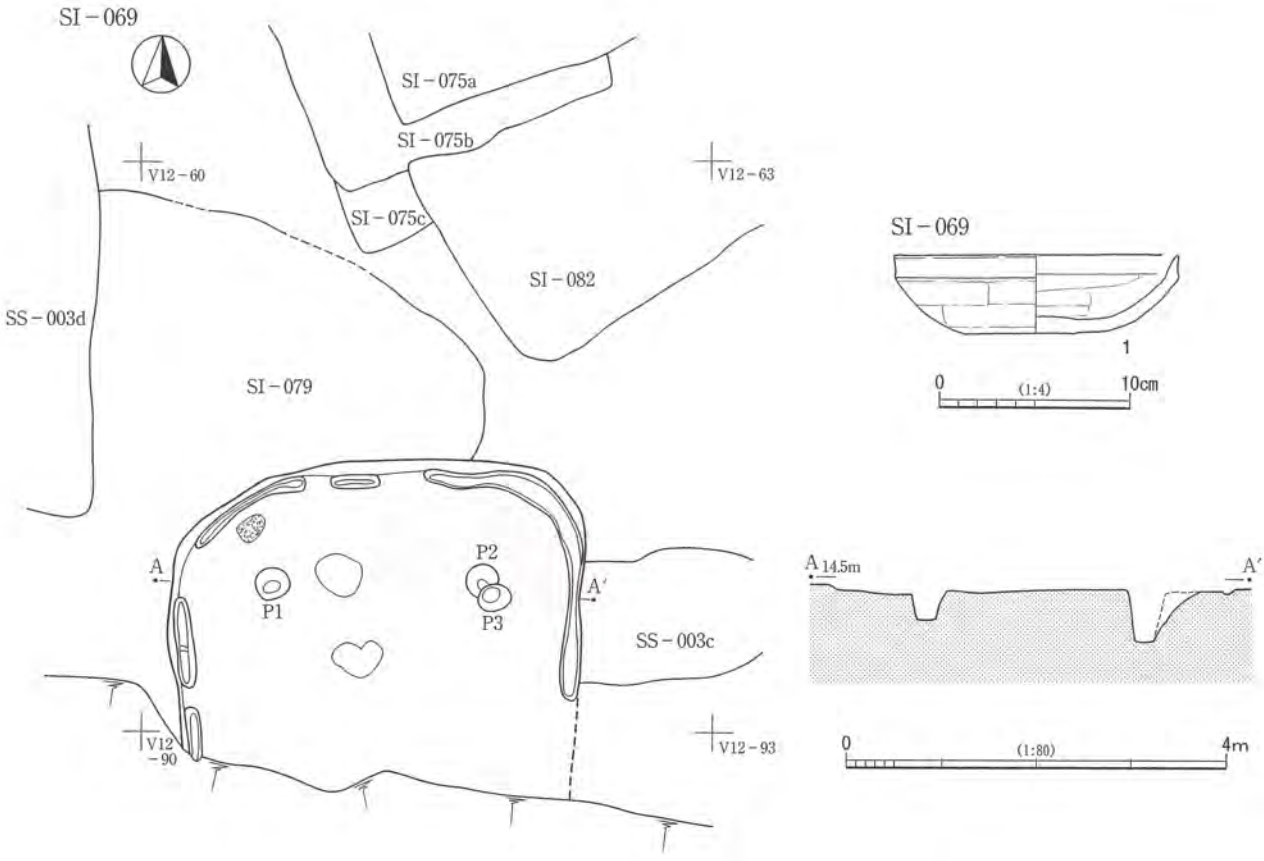


SI－068
1暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）少量含む
2暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）少量含む、黄灰色砂ブロック（φ10－30）含む
3暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）少量含む
4灰褐色粘質砂　焼土粒（φ2－6）、炭化粒（φ1－2）少量、黄灰色砂ブロック（φ5－20）含む、しまり・粘性強い

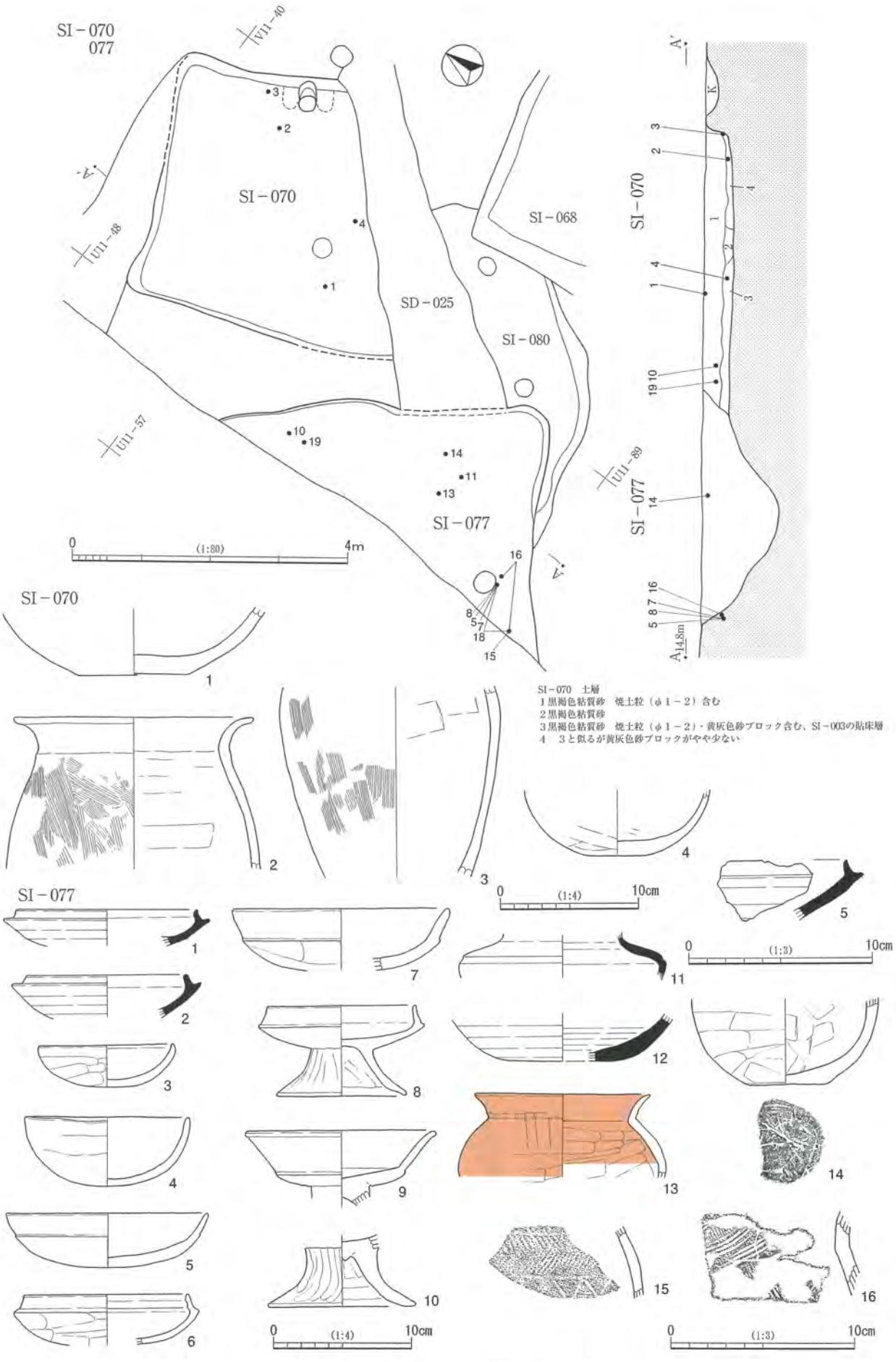
SI－068　カマド
1暗黄灰色土　焼土粒（φ2－3）含む
2焼土ブロック
3黒褐色土ブロック
4暗灰褐色土　焼土ブロック（φ2－3）、炭化粒（φ1－2）少量含む
5焼土ブロック
6灰褐色土　焼土ブロック（φ1－2）含む
7暗黄灰色土　焼土粒（φ1－2）・炭化粒（φ1－2）少量含む
8黄灰色砂ブロック
9黄灰色粘質砂　焼土粒（φ1－4）少量、暗灰褐色砂含む
10黄灰色粘質砂　焼土粒（φ1－4）微量、暗灰褐色砂含む

第89図　SI－068（1）





第90図　SI－068（2）・069



第91図 SI－070・077

末葉には土師器坏（3）、須恵器壺（11・12）が挙げられる。なお、15・16は弥生時代の遺構からの混入品である。

こうした土器の構成から考えられるのは、本竪穴に長期にわたって土器が投棄、あるいは遺棄されたことである。本竪穴に何ら施設がなく、生活痕が希薄であることもこのような状況を想定すると頷ける。土師器坏3・4のように完形品も含まれていることから、特定の目的があって本竪穴に土器が置かれたのであろう。

SI－078（第92図、図版17・40・80）

B区南端の1号墳北周溝（SX－004）の北5mに位置し、西側約1/4は調査区外にある。竪穴はSD－018を境に北側がSI－060、南側をSI－071とされた弥生時代の住居跡として捉えられた。ところが、柱穴の上面で古墳時代後期の甕が2個体、ほぼ完形で出土したことからこの時期の住居が絡んでいることが分かった。また、長方形の貯蔵穴も弥生時代にはほとんど例がなく、本跡に伴うものであろう。攪乱坑も多く、竪穴内は極めて煩瑣な状況になっている。P1～P4が本跡に関わるピットと考えられ、P1・P2・P4が主柱穴、P3はもう1基の貯蔵穴か入り口施設の可能性が高い。竪穴の壁・床・カマドは遺存していない。

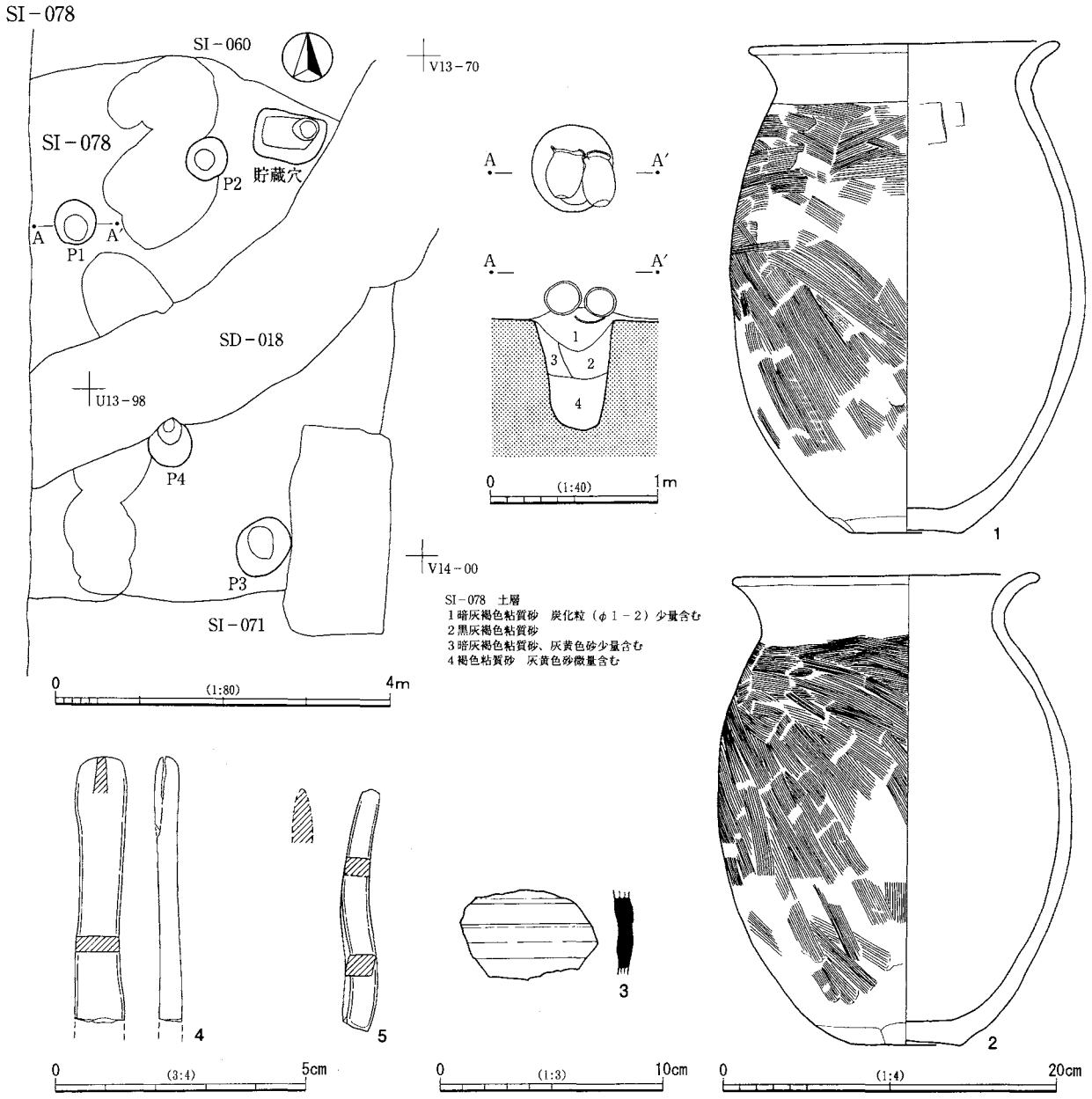
P1で出土した甕は、大きさ・形態が非常に良く似たハケ調整の甕である。口縁部が大きく外反し、卵形の胴部をもつ特徴から、後期前半に位置づけられる。ほかに、須恵器壺の胴部破片、鉄製の鏃が2点出土しており、いずれも本跡に伴うと考えられる。

SI－075abc・082（第93図）

B区北部の住居跡群の南東部に位置し、相前後する4棟の竪穴住居が重複している。また、後世の溝SD－024、026が縦横に走り、下層には弥生時代の方形周溝墓SS－003が重複する。本住居群は、当初全体を1棟（SI－075）として調査され、貯蔵穴を含む大半の領域がSI－075として記録された。その後、北西部の一角のみをSI－075aとて貯蔵穴のある一回り大きい竪穴部をSI－082に変更し、西側に重複する2棟の小規模な竪穴をSI－075bcとした。このため遺物の帰属が錯綜しているが、出土した土器群はほぼ同時期のものと見られ、SI－075aとSI－082はやはり同一の住居ではないかと思われる。なお、SI－075bcはこれらに先行すると捉えられている。

カマドの痕跡はSI－075aの北壁中央部にあり、SI－082のものとするとかなり西に偏っている。いずれの竪穴にも明確な主柱穴がなく、SI－082の柱穴としたP1も長径が1mを超える深さ19.8cmの浅いピットで、これに組み合う柱穴がないため第2の貯蔵穴かも知れない。明確な施設は北東の貯蔵穴と南壁寄りの入り口ピットのみである。

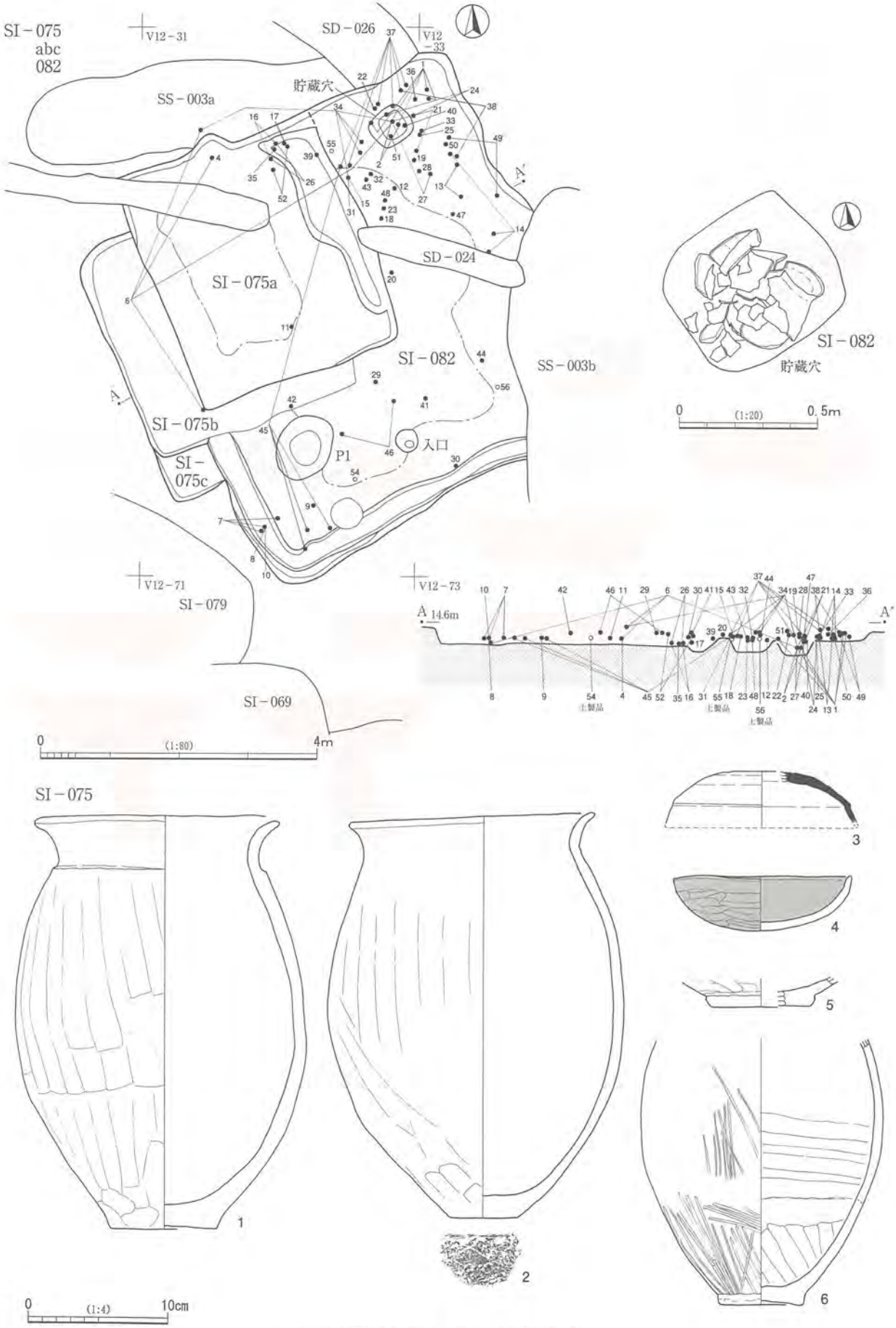
遺物（第93～95図、図版38～41・75・79）　第93図には、SI－075aの遺物として取りあげられたものを示した。1・2は北東の貯蔵穴内に並んで出土した土師器甕である。2個体とも80％が遺存し、使用時のまま出土した可能性がある。6の甕はカマド跡・SI－075b・貯蔵穴内の破片が接合したものである。須恵器坏蓋（3）、カマド跡から出土した土師器坏（4）は第94図の坏類と同時期のものといえる。これらも含めた本遺構群出土土器は、後期初頭～中葉まで時期の幅が見られるものの、概ね後期前葉に位置づけられる。須恵器蓋坏ではほぼ完形の坏蓋（7）が指標となる資料である。口径14.2cm、天井部のほぼ全面にヘラケズリがおよび、口縁部との境には稜をもつ。しかし、後期初頭の坏蓋に見られる口縁端部内面の面



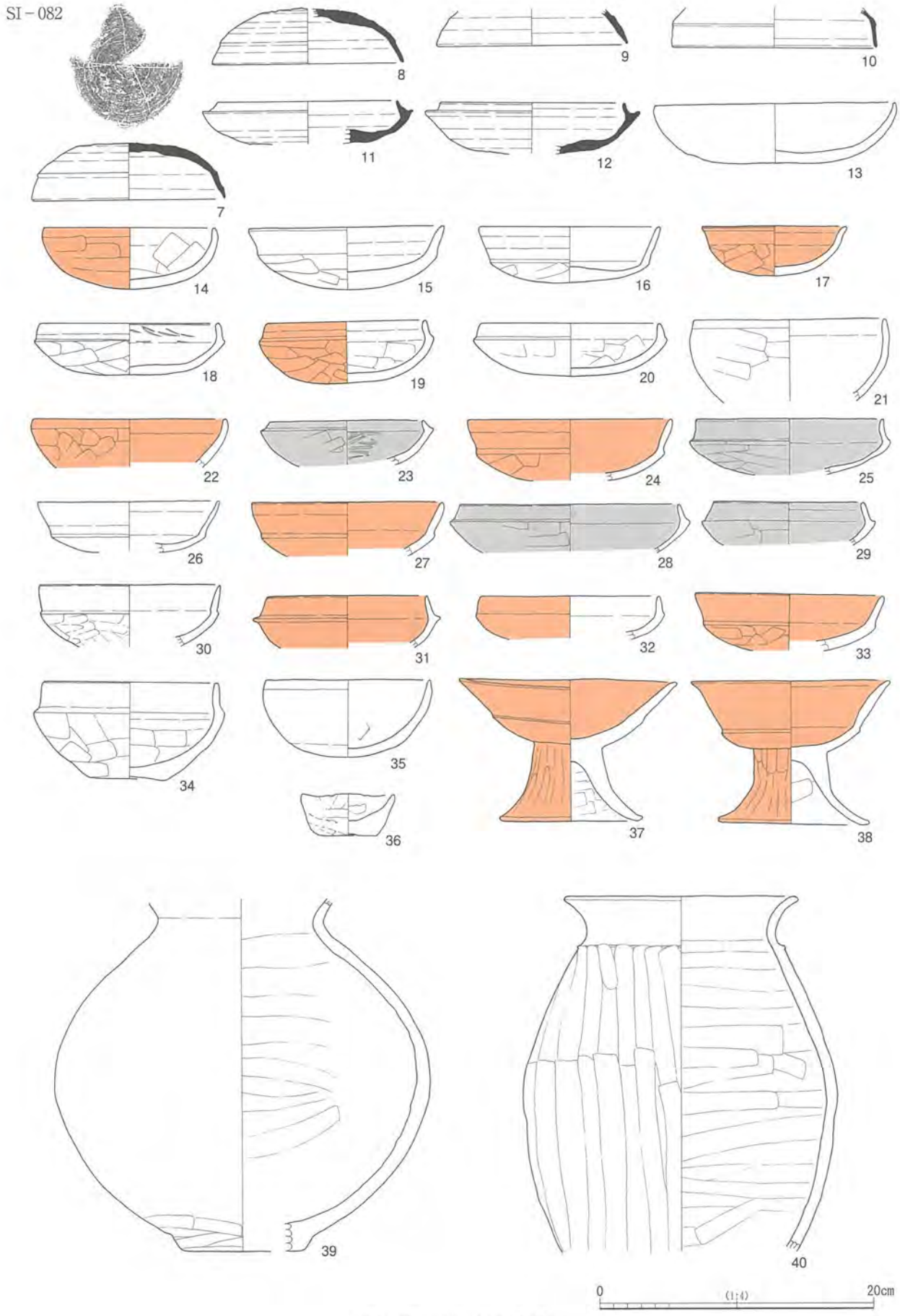
第92図　SI－078

取りがなくなっているため、後期前葉でも中葉に近い時期の製品であろう。10の坏蓋は口縁端部内面の面取りを残す薄手の良品で、７より古い型式であり、ほかの須恵器蓋坏とは出自が異なるようである。土師器坏類は、有段口縁の様々な形式が見られ、大型で浅いもの（13）、口縁部の内湾するもの（14）や椀形の深い形式（21・35）もある。それぞれの形式に大小の類別もあり、多種多様な坏類が見られる。また、坏22点のうち約1/3の９点が赤彩され、４点に黒色処理が見られ、やはり後期前葉から中葉にかかる特徴をもつといえる。赤彩の高坏２点は短脚で、坏部の底部には明瞭な段がある。ほかに、小型の鉢（34）、手づくねのミニチュア土器（36）、球形の胴部をもつ壺（39）、単孔の甑（52）、甕がある。甕には、前掲の１・２のような卵形の胴部をもつもの、やや長胴のもの（40）、球形の胴部をもつもの（41）、広口のもの（42・44）がある。

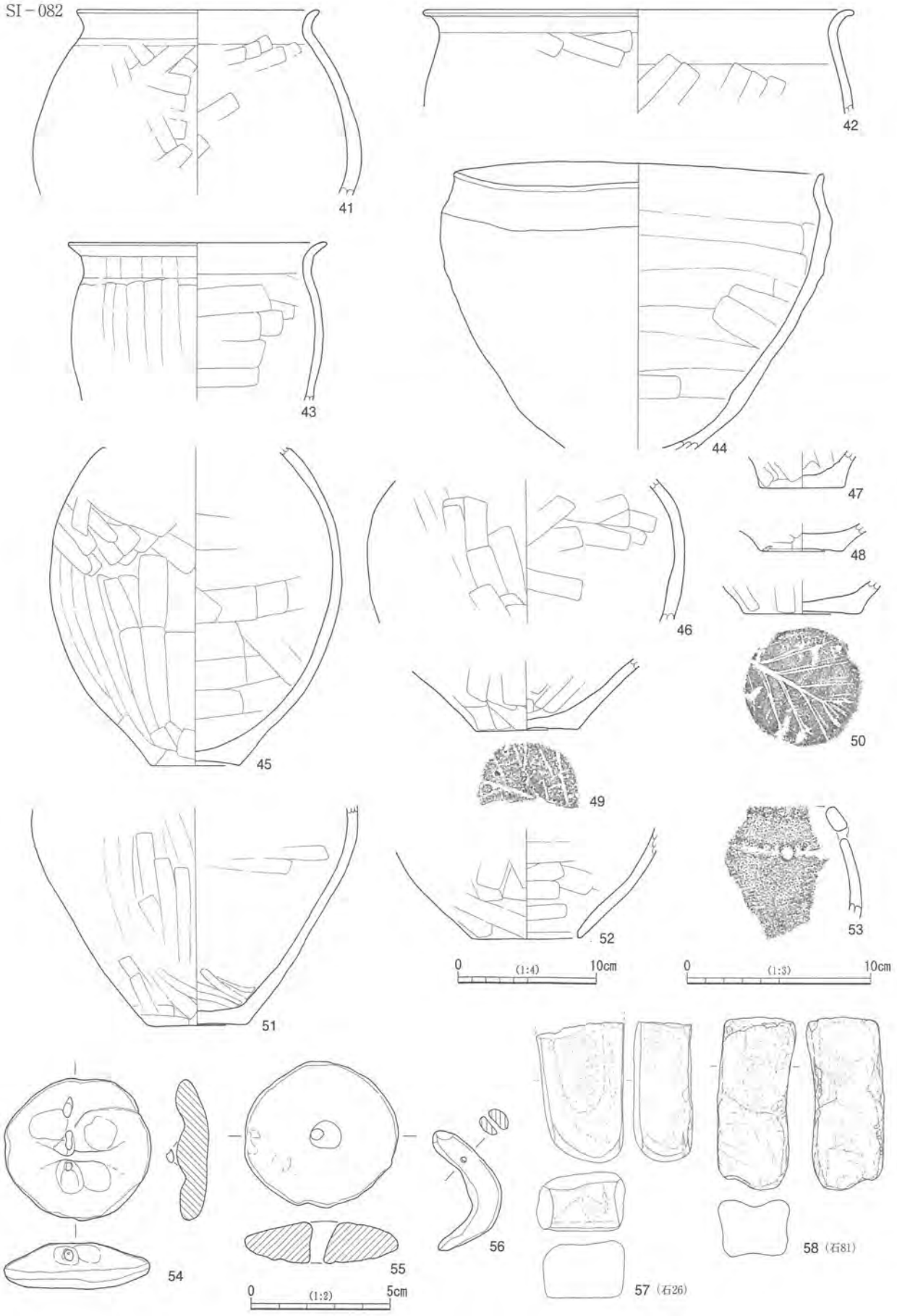
このほかに、鏡形土製品（54）、土製紡錘車（55）、土製勾玉（56）、砂岩の敲石（57・58）が出土した。



第93図　SI－075abc・082（1）


SI－082
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
(1:4)
20cm

第94図　SI－082（２）


SI－082
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57（石26）
58（石81）
0 (1:4) 10cm
0 (1:3) 10cm
0 (1:2) 5cm

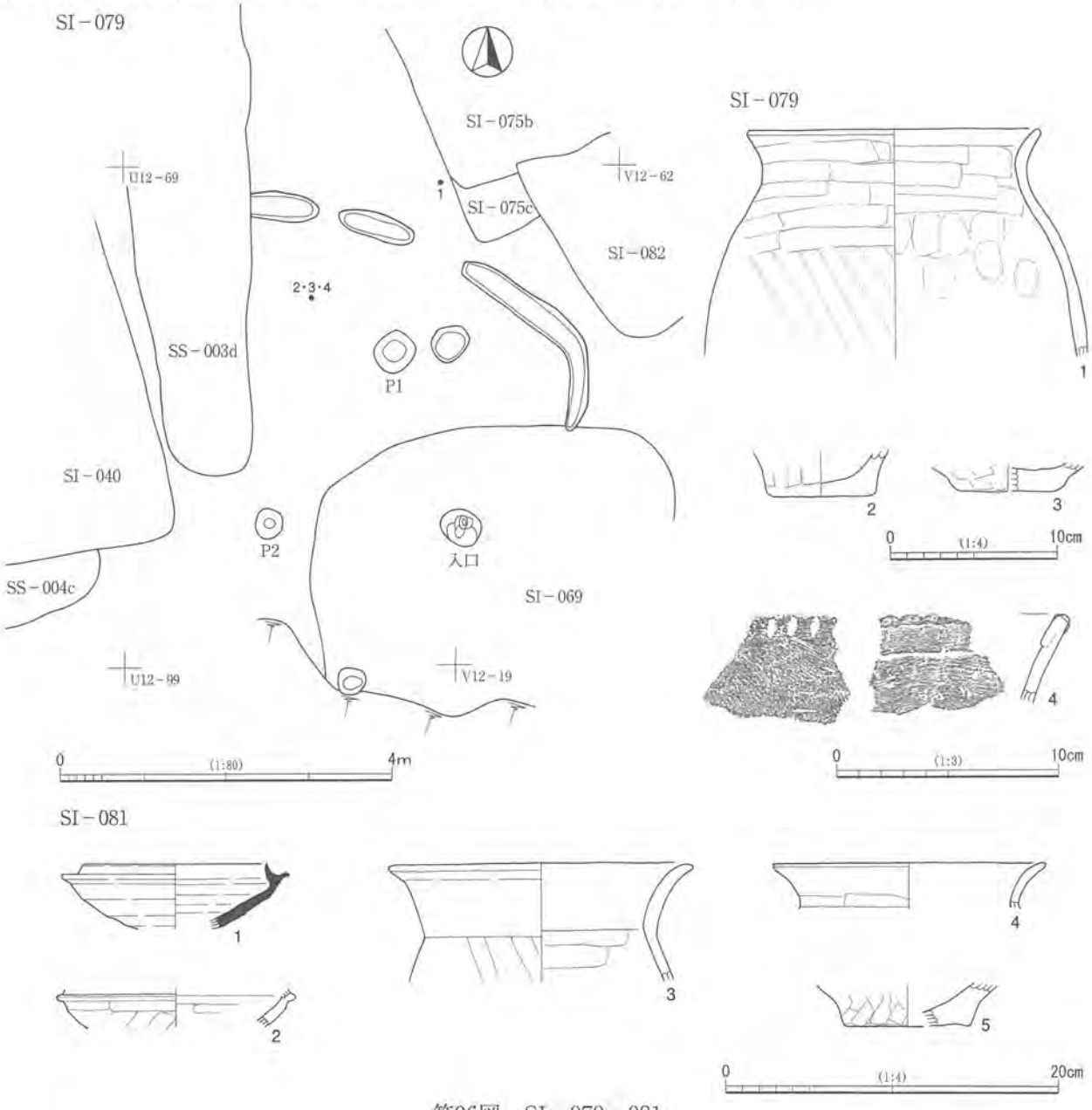
第95図　SI－082（3）

SI－079（第96図、図版39）

B区北部の住居跡群の南東部に位置し、SI－075・082の南西に隣接する。削平を受けて壁の立ち上がりは消失しており、壁溝の存在によって判明した住居である。柱穴２基（P1・P2）と入り口ピットが遺存した。入り口ピットは東壁際に位置している。本跡に伴う遺物はヘラケズリ調整の甕（１）である。南東には本跡を切ってSI－069が重複しており、後期後葉～末葉の土師器坏を出土している。

SI－081（第96図、図版39）

遺構の記録はないが、SI－081出土品として取りあげられた遺物がある。須恵器坏１点、土師器坏１点、甕３点が図化に及んだ。須恵器坏は推定口径11.2cmの小型化したもので、受け部をもつ型式としては最終段階に近い例である。後期後葉～末葉の住居跡がもう１棟存在したと考えられる。



第96図　SI－079・081

4　土坑

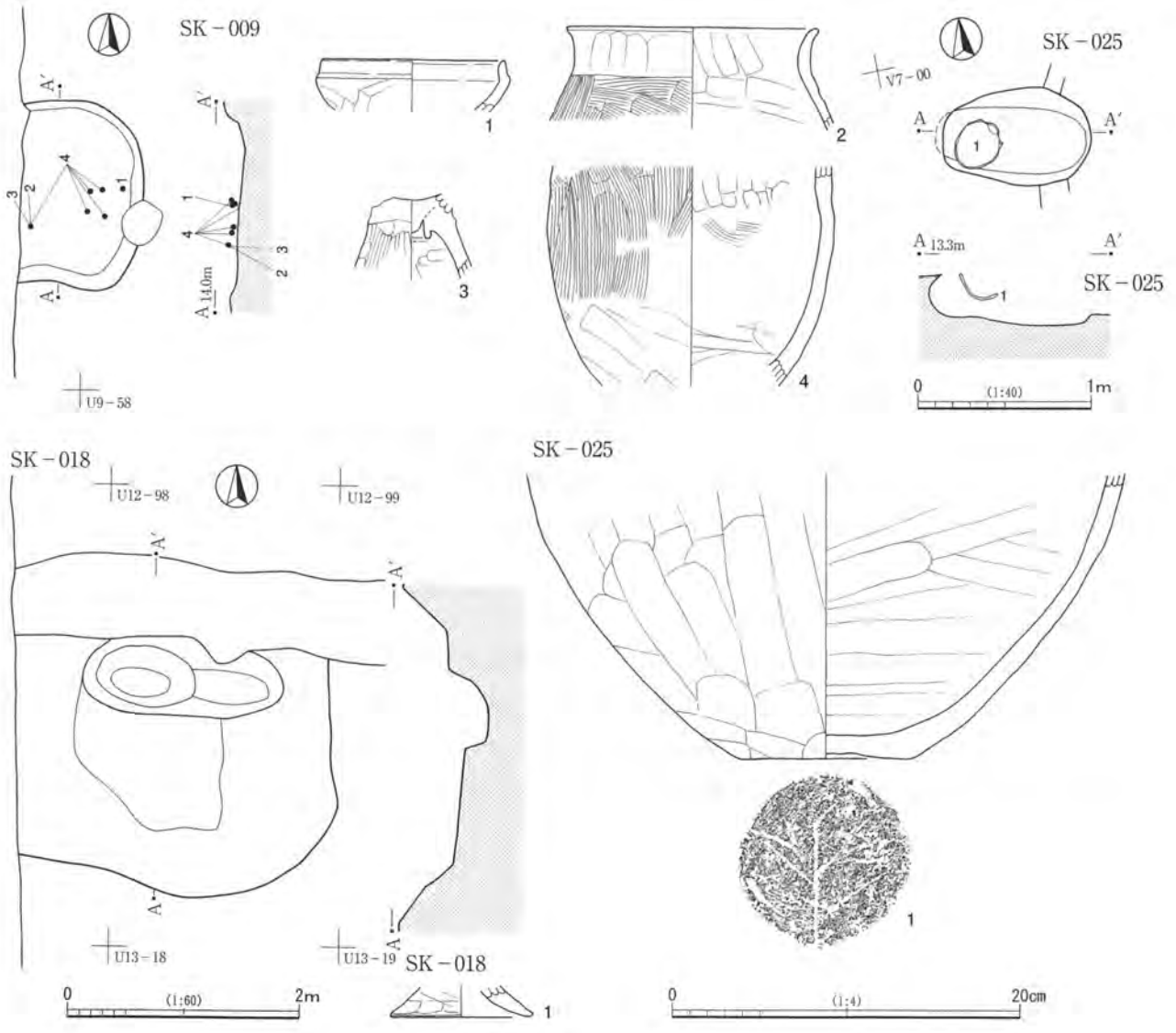
SK－009（第97図、図版43）

C区中央部の西端に位置し、西側は調査区外にある。現状から見ると、隅丸長方形になると思われる。性格は不明であるが、底面から小型の土師器坏・高坏脚部・ハケ調整の甕が出土した。後期後葉の土器群といえる。

SK－018（第97図）

B区北部の西端に位置し、西側は調査区外にある。北側はSD－019によって切られており、全体の形状・性格ともに不明である。底面を掘り込むピットがあり、覆土から高坏脚部の破片が出土した。高坏脚部は小型で、短脚の裾部と推定される。

SK－025（第97図、図版43）



第97図　SK－009・018・025

D区中央部に位置する小型の土坑である。長軸を東西に置いた楕円形の土坑で、西側の壁はややオーバーハングしている。覆土から木葉痕をもつ甕の胴下半が出土した。墓坑の可能性がある。

SK－026（第98図、図版18・43・44・75）

D区北東端に位置する不整形の掘り込みである。性格は分からないが、土器を中心とする多くの遺物が出土した。土師器坏８点、小型甕２点、甕４点、灰釉陶器椀１点、須恵器広口壺破片１点、砂岩の磨石１点を図示している。これらの遺物は後期前葉から後葉の土器が主体であるが、平安時代の灰釉陶器椀を含んでいる。遺構の状況から見ると生活廃品の投棄場所かと思われたが、土器類には完形品も含まれ、半数は70％以上遺存していることから単なる投棄場所ではないと考えられる。集落のはずれにあり、川に面した台地の縁辺に位置することからも何らかの行為を目的とした廃棄が行われた遺構であろう。

SK－027（第98図）

SD－028を挟んでSK－026の南に位置する土坑である。個別の遺構の記録はなく詳細は不明であるが、遺物が出土している。土師器の坏と甕底部があり、坏は後期後葉に位置づけられる。

5　グリッド等出土遺物

B区出土遺物（第99図、図版67・68）

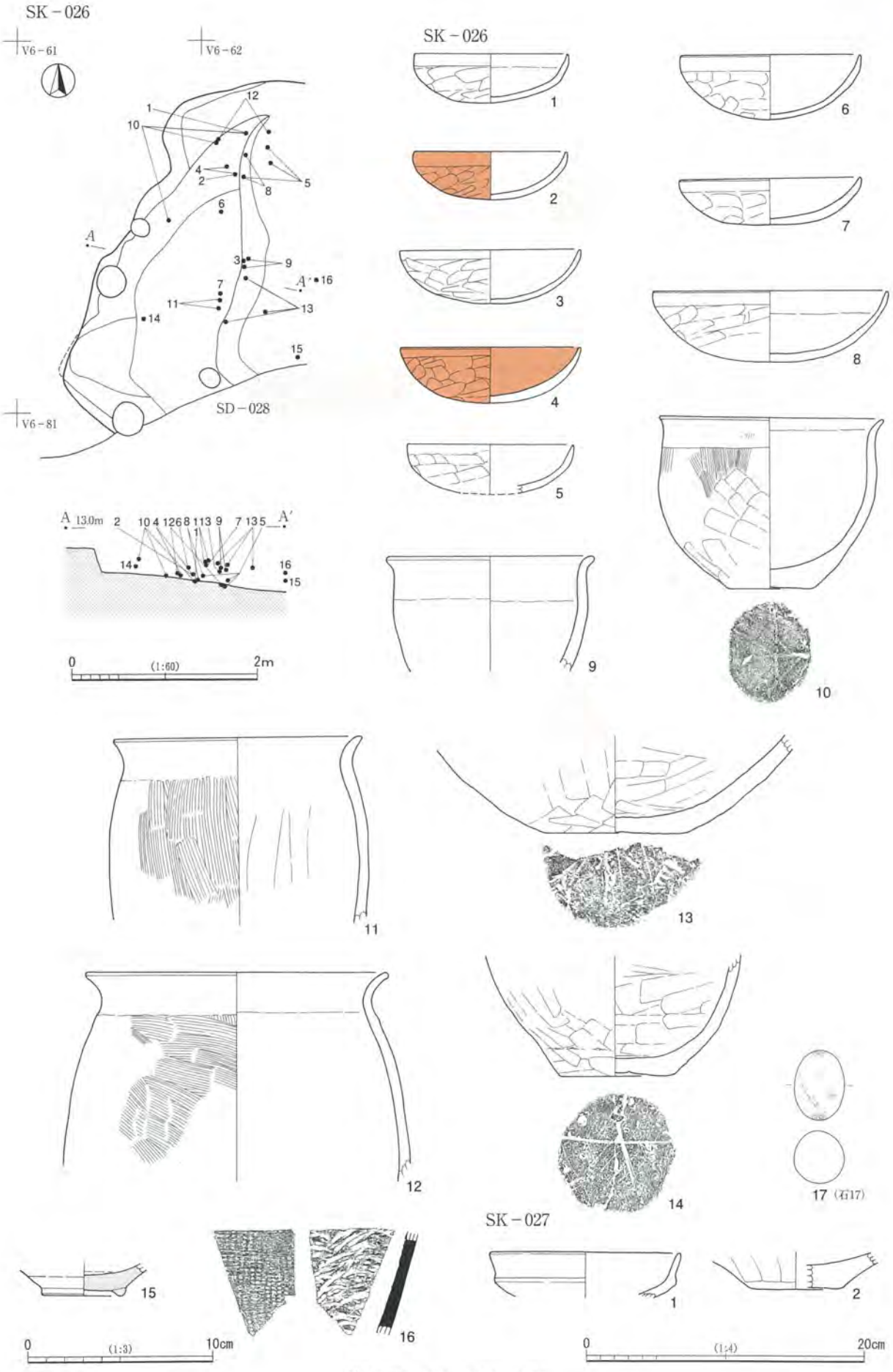
B区のグリッド・トレンチで取り上げられた遺構に伴わない遺物を一括した。出現期～前期・後期～終末期の遺物があり、中期の遺物が見られないのは集落の動向を反映している。

１～16は 出現期～前期の土器群である。断片的な資料が多く、時期を特定できるものは限られている。１の鉢は極めて薄手の作りで、前期古段階に位置づけられる。３は裾部が大きく開く特徴的な高坏脚部で出現期新段階のものであろう。

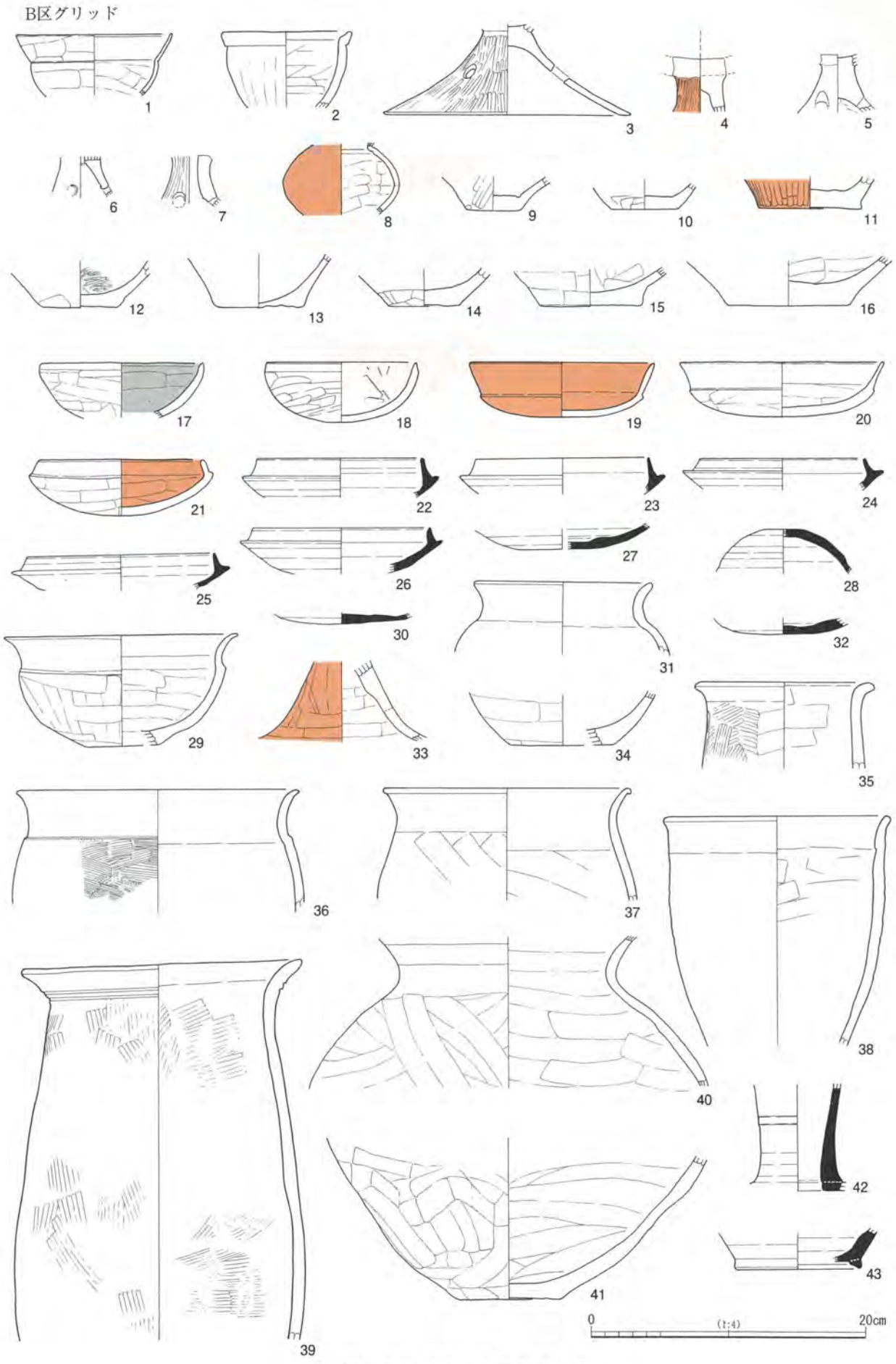
17～43は後期～終末期の土器群である。土師器坏は後期前葉～中葉のもの、須恵器蓋・坏は後葉のもの（22～26）と終末期のもの（28・32）がある。大型の鉢と高坏脚部は後期後葉に位置づけられる。甕・甑は後期全般にわたるものが出土している。特に厚手で寸胴な35・39は安房地域に特徴的な甕類で、39はかなり長胴の器形になると思われる。42・43は終末期に見られる須恵器長頸壺である。

C・D区出土遺物（第100図、図版69・70）

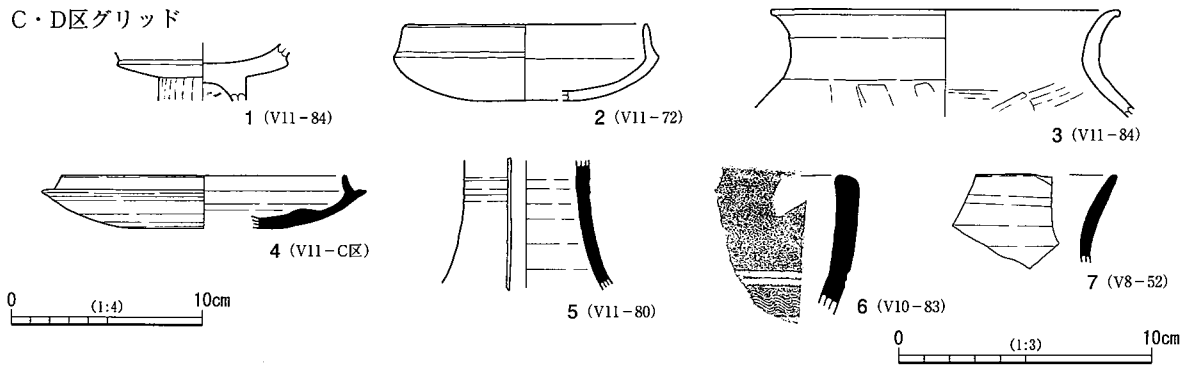
C・D区で出土した遺構に伴わない遺物である。土師器高坏（１）は坏部が外反する短脚の形式で、後期中葉のものであろう。坏（２）は後期後葉に見られる形式、甕（３）は後葉以降のものである。須恵器坏（４）は口径が大きく浅い形態で、長脚の須恵器高坏（５）と共に後期後葉に位置づけられる。厚手の須恵器口縁部破片（６）には沈線文と櫛描波状文があり、大型広口壺の口縁部である。薄手の須恵器口縁は終末期の壺の口縁部であろう。



第98図　SK－026・027



第99図　B区グリッド等出土遺物



第100図　C・D区グリッド等出土遺物

第3節　奈良・平安時代

奈良・平安時代の竪穴住居と考えられるのは以下の14棟である。調査区南部のV15－50に位置するSI－012を除いて遺跡の北部に偏在している。V9－00～V11－00にかけては古墳時代後期以前の遺構もほとんどなく、中世以降に大きく改変されていると考えられるためこの区域に奈良平安時代の集落が存在した可能性はある。しかし、V11－50～V15－00には弥生時代中期から古墳時代後期の遺構があるにもかかわらず当該期の遺構がないため、SI－012と北部の住居群の間には集落以外の区域があったものと思われる。

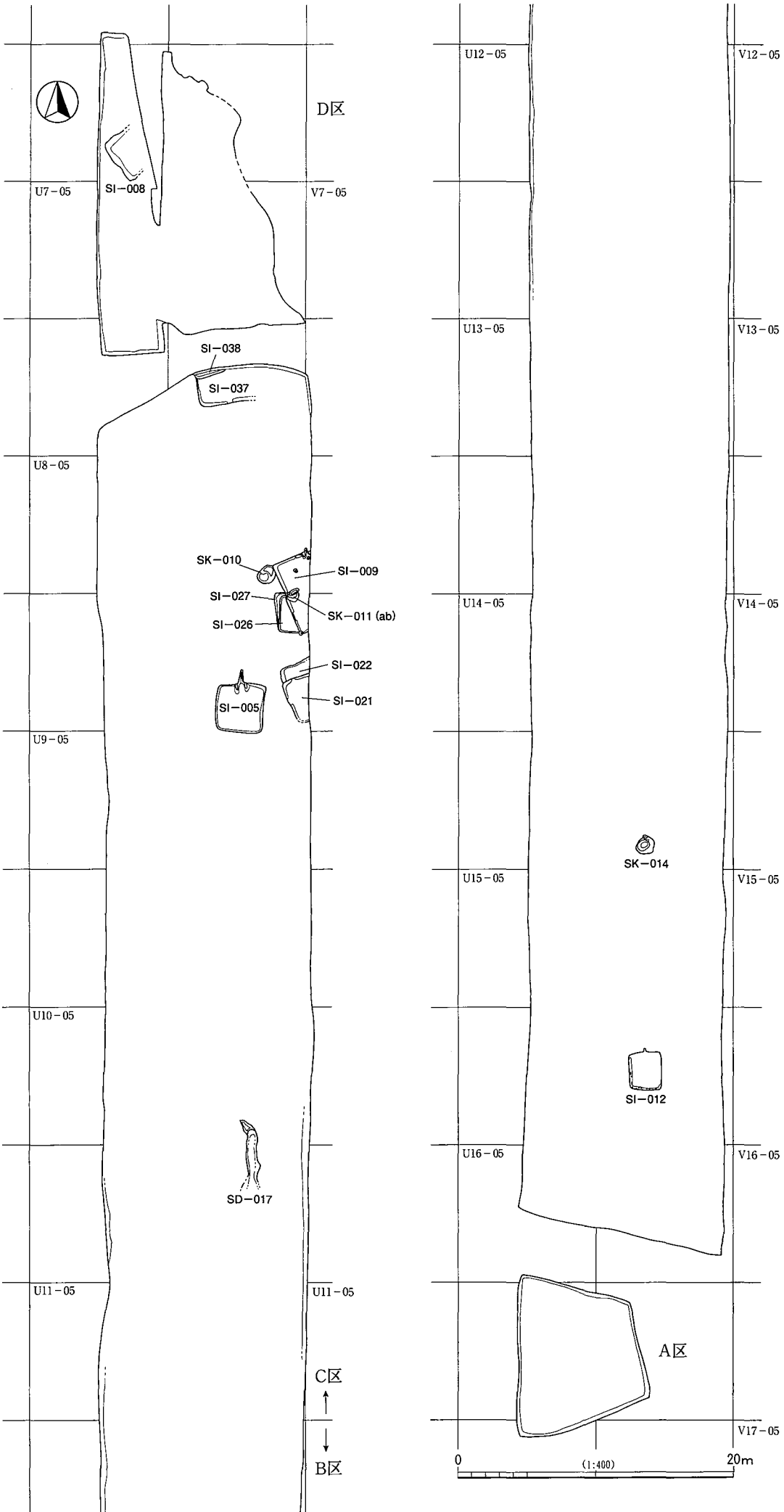
1　竪穴住居

SI－005（第102図、図版5・12）

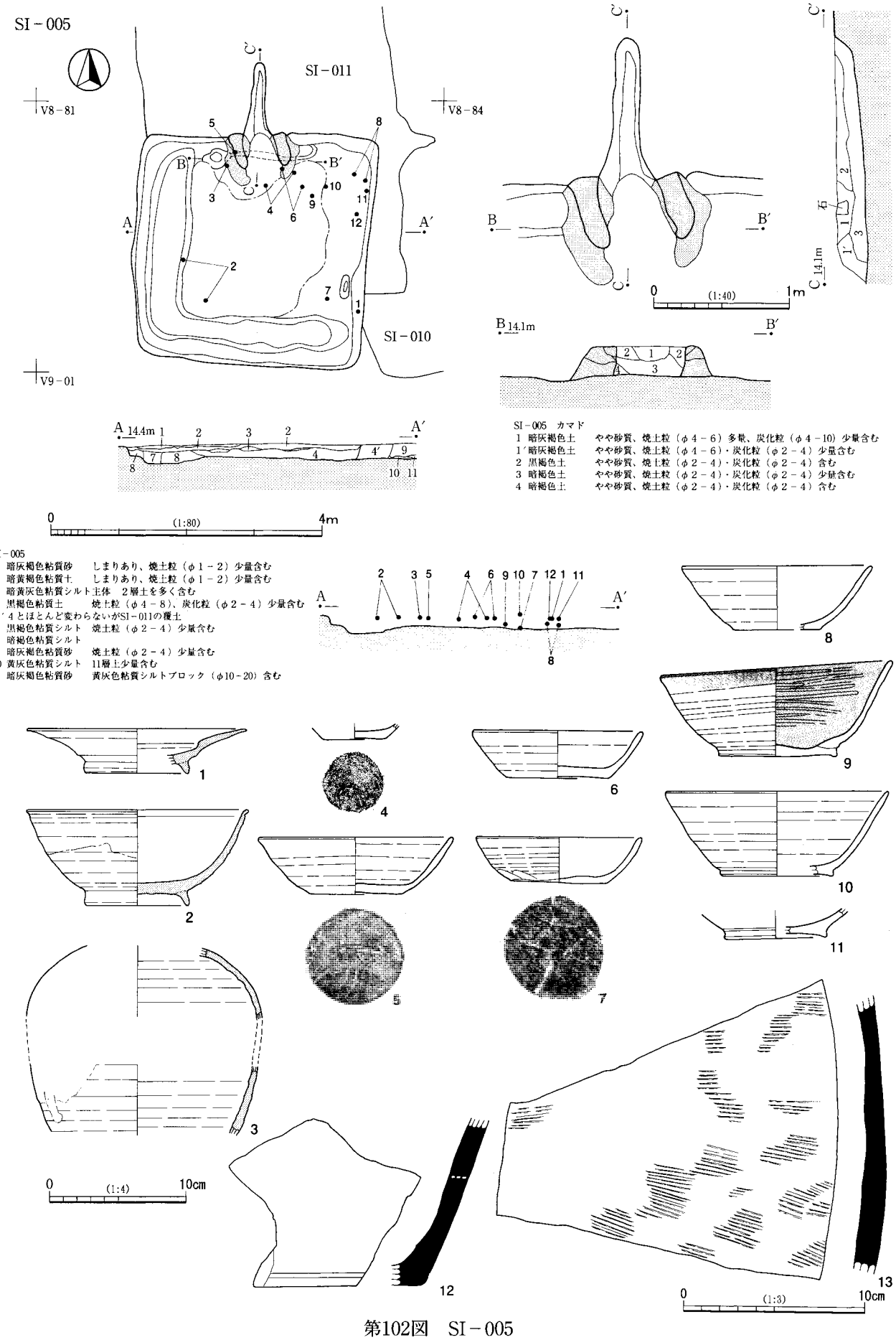
本遺跡唯一の平安時代の竪穴住居であり、V8－82グリッドにみられ、SI－010・011を切って存在する。形状は方形で、主軸と幅ともに3.30mである。深さは25cm程度である。ほぼ完存する。床面には硬化面があり、西壁際と南壁際には幅50cm～60cmの溝がみられる。主柱穴はみられず、小さな窪みがカマド左脇と東壁沿いの2か所に存在する。主軸方位はN－4°－Eである。カマドは北壁の中央にあり、袖は暗褐色土と灰白色粘土で構築されており、煙道の長さは1.0mと長い。遺物はカマドに近い部分から集中して出土しており、床面からやや浮いた状態で検出されている。

遺物（第102図、図版21）　1・2は灰釉陶器であり、両者とも胎土に黒色の吹き出し釉がみられ、極めて薄い灰釉が施されている。1は段皿で復元口径は15.8cmであり、外面には灰釉が認められない。2は高台付椀であり、底部外面の中央には回転糸切り痕が残存する。復元口径は16.2cmである。3は灰釉陶器瓶の胴部であり、胴部外面は回転ヘラケズリがなされ、オリーブ灰の灰釉か比較的厚く施されている。4～8はロクロ土師器坏であり、4は底径が4.5cmと小型で、底部には全面に回転糸切り痕がみられる。5は底部外面に手持ちヘラケズリがなされる。復元口径は14.2cmである。7はほぼ完形であり、口径が12.2cm、底径が7.0cmである。底部は糸切り後に手持ちヘラケズリが施される。6は復元口径12.4cmで、底径は7.5cmであり、底部にはヘラケズリが施される。8は復元口径14.0cmで底径は6.4cm、器高は4.7cmであり、ほかの坏よりも口径に比べて底径が小さい。

9～11はロクロ土師器高台付椀であり、いずれも高台をロクロの回転を利用してつまみ出す独特な技法でつくられている。9は口径17.0cm、高台径7.0cmで、内面に横方向のミガキがなされ、炭素吸着による黒



第101図　奈良・平安時代遺構配置図


SI－005
SI－011
SI－010
V8－81
V8－84
V9－01
A 14.4m
B 14.1m
C 14.1m
0 (1:80) 4m
0 (1:40) 1m
SI－005 カマド
1 暗灰褐色土 やや砂質、焼土粒（φ4－6）多量、炭化粒（φ4－10）少量含む
1′暗灰褐色土 やや砂質、焼土粒（φ4－6）・炭化粒（φ2－4）少量含む
2 黒褐色土 やや砂質、焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ2－4）含む
3 暗褐色土 やや砂質、焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ2－4）少量含む
4 暗褐色土 やや砂質、焼土粒（φ2－4）・炭化粒（φ2－4）含む
SI－005
1 暗灰褐色粘質砂 しまりあり、焼土粒（φ1－2）少量含む
2 暗黄褐色粘質土 しまりあり、焼土粒（φ1－2）少量含む
3 暗黄灰色粘質シルト主体 2層土を多く含む
4 黒褐色粘質土 焼土粒（φ4－8）、炭化粒（φ2－4）少量含む
4′4とほとんど変わらないがSI－011の覆土
7 黒褐色粘質シルト 焼土粒（φ2－4）少量含む
8 暗褐色粘質シルト
9 暗灰褐色粘質砂 焼土粒（φ2－4）少量含む
10 黄灰色粘質シルト 11層土少量含む
11 暗灰褐色粘質砂 黄灰色粘質シルトブロック（φ10－20）含む
0 (1:4) 10cm
0 (1:3) 10cm

第102図　SI－005

色処理が施される。10は復元口径16.4cmで復元高台径は8.2cm である。11の高台径は7.2cmである。

12・13は須恵器甕であり、12の底部外面下端には一条の沈線がみられ、内面には荒いナデがなされる。13は大甕の胴部破片で、外面には平行叩きの痕跡がみられ、内面は無文の当て具痕及び荒い横方向のナデがみられる。

SI－008（第103図）

調査区最北端の U6－88グリッドにあり、SD－012・016・028と重複し、一部が調査区外にかかる。奈良時代前半の遺構であり、形状は方形で、規模は南北が2.95mで、確認面からの深さは29cmである。周溝がみられ、壁の立ち上がりは緩やかである。硬化面と主柱穴は認められなかった。遺物はやや浮いた状態で出土した。

遺物（第103図、図版21） １・２は東海地域産の須恵器であり、１は蓋で天井部外面にはオリーブ灰色の自然釉が付着する。２は高台付坏であり、復元口径は14.7cm、高台径は10.1cmである。高台は貼り付け高台である。

３は瀬戸灰釉平碗で、混入品である。内面及び口縁部外面状本に厚く灰釉が施されている。内面にはトチンの痕跡がみられる。４は在地産の土師器甕であり、復元口径は27.5cmである。胴部外面の一部に横方向のヘラケズリがみられる。５は須恵器坏の口縁部片である。６は在地産の土師器甕の破片である。外面にヘラナデがなされる。７は小破片で判別しにくいが須恵器の平瓶の把手部分である。

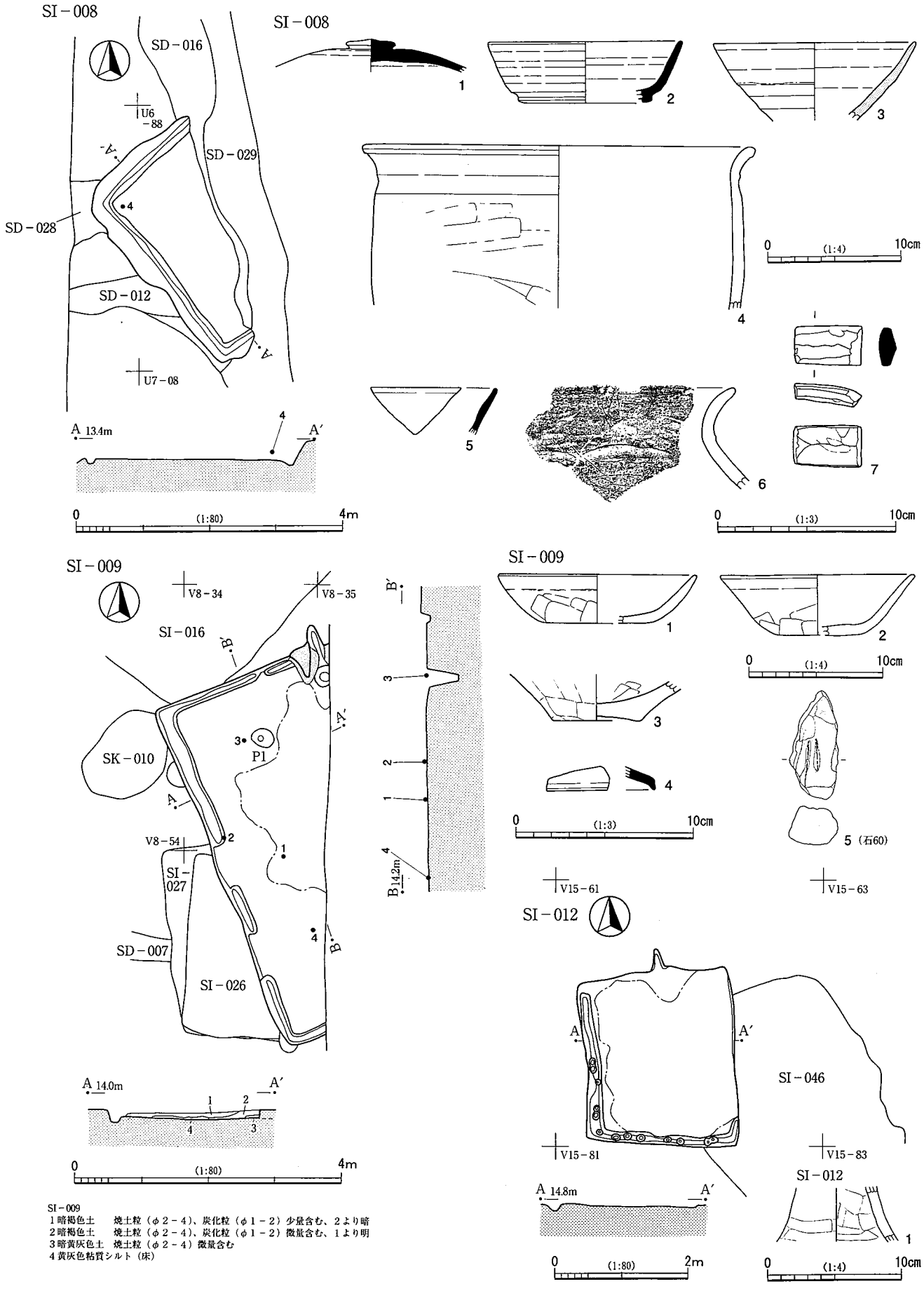
SI－009（第103図）

V8－55グリッド付近にあり、大半が調査区外に伸びる。古墳時代のSI－016と奈良時代のSI－026・027、SK－010を切って存在する。形状は方形であり、規模は主軸方向が5.4mであり、深さは13cmである。主軸方位はN－24°－Wである。床面中央部には硬化面があり、周囲には極めて浅い周溝が途切れながらみられる。主柱穴が１基検出されており、深さは46.6cmである。カマドは北壁の中央部にあり、円形で直径33cmの火床面がみられる。遺物は床面からやや浮いた状態で検出されている。

遺物（第103図、図版22・76） １・２は土師器坏であり、１は復元口径が15.8cm、器高が3.7cmで外面に僅かに手持ちヘラケズリの痕跡と粘土紐接合痕がみられる。２は口径が14.6cmで、器高が4.6cmであり、摩耗が著しい。３は在地産の土師器甕であり、底部外面はナデがなされ、胴部外面には横方向のヘラケズリがなされる。４は須恵器蓋の口縁部片である。５は凝灰岩製の砥石であり、最大長は82.1mm、最大幅36.4mm、重量は58.2ｇである。

SI－012（第103図、図版14）

調査区南端のV15－71グリッド周辺にあり、弥生時代後期のSI－033・046・088・089を切ってみられ、１号墳の墳丘削平後に構築されている可能性が高い。また、この竪穴住居のみがほかの同時期の竪穴住居と離れて存在する。遺存状態は良好であり、形状は方形で規模は主軸が2.60m、幅が2.25mで、深さは17cmである。床面にはほぼ全面に硬化面がみられ、周溝が西壁と南壁沿いにみられる。周溝内には13個の小ピットが存在する。主柱穴はみられず、北壁中央には煙道部と考えられる部分があるが、カマドの袖等は検出することができなかった。遺物は僅かである。



SI－009
1暗褐色土　焼土粒（φ2－4）、炭化粒（φ1－2）少量含む、2より暗
2暗褐色土　焼土粒（φ2－4）、炭化粒（φ1－2）微量含む、1より明
3暗黄灰色土　焼土粒（φ2－4）微量含む
4黄灰色粘質シルト（床）

第103図　SI－008・009・012

遺物（第103図）　1は土師器高坏の脚部であり、内外面に横方向のヘラケズリがなされる。

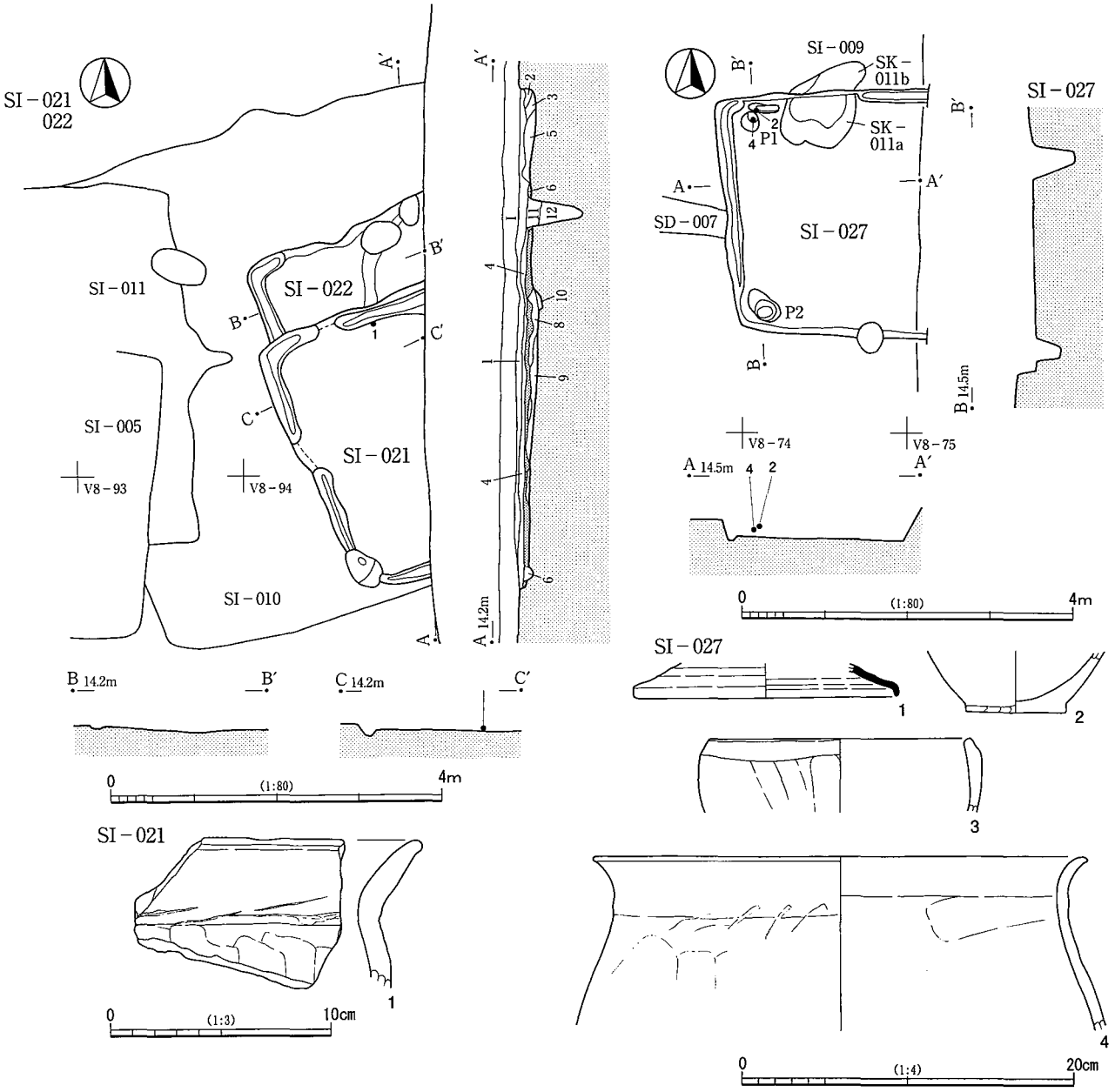
SI－021・22（第104図）

V8－84グリッドに所在し、SI－021はSI－022を切って存在し、両遺構は古墳時代後期のSI－010を切る（土層説明は第76図参照）。調査区外の東側に遺構が伸びる。

SI－021の長軸幅は3.25mであり、幅は調査区外に遺構が伸びるため不明である。深さは21cmである。硬化面及び主柱穴は認められないが、周溝は途切れるものの西・北・南壁に沿ってみられる。周溝の幅は10cm～20cmであり、深さは5cm前後である。遺物は僅かしか検出できなかった。

SI－021遺物（第104図）　1は床面から検出された灰色小石を多く含む在地産の土師器甕の口縁部片である。外面には縦方向のヘラナデがなされる。

SI－022はSI－021に大半を切られており、不明な点が多い。平面形は方形で、規模はSI－021と同程度と推定される。深さは5cm前後と浅い。硬化面及び主柱穴は検出されず、西壁際と北西隅に周溝があり、



第104図　SI－021・022・027

床面には攪乱がみられる。周溝の幅は19cm前後で、深さは２cm～３cmである。実測できる遺物は認められなかった。

SI－026（第105図、図版14・15）

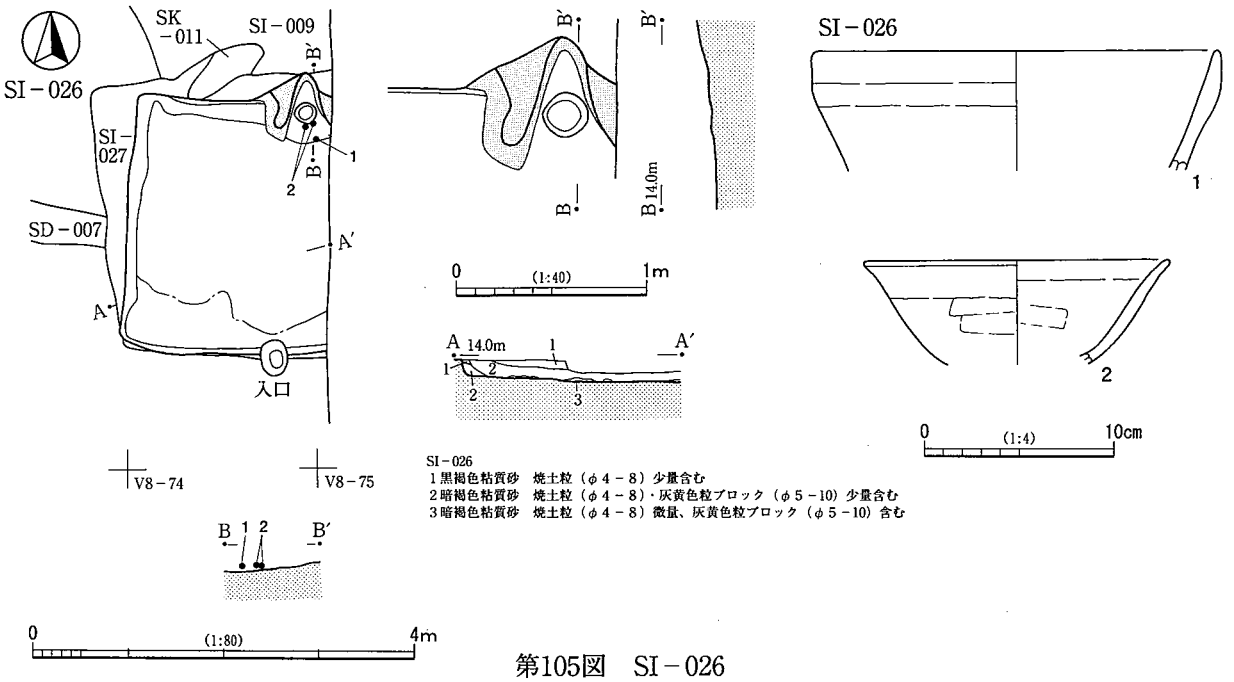
V8－54グリッドにあり、SI－009の床面の下から大半が検出されており、SI－026はSI－027を切り、SK－011a・ｂに切られる。調査区外の東側に遺構の1/4程度がかかる。平面形は方形で主軸長は2.60mであり、深さは22cmである。床面には硬化面があるが、主柱穴は認められない。南壁際には硬化面がみられなかった。覆土には焼土粒が僅かに含まれる。カマドは北壁中央にあり、左袖はしっかり残っているが、右袖は判然としない。火床部はほとんど焼けておらず、灰も残存していなかった。南壁中央に柱穴が１本みられ、規模は33cm×23cmで、深さは39cmである。

遺物（第105図、図版26）　１は在地産の土師器鉢であり、復元口径は21.6cmである。２は在地産の土師器高坏の坏部であり、復元口径は16.2cmである。

SI－027（第104図）

V8－54グリッドにあり、SI－026とSI－009及びSK－011a・ｂに切られ、SD－007と重複する。調査区外の東側に遺構の1/4程度がかかる。平面形は方形で南北の長さは2.60mであり、重複しているSI－026と同様の規模を有する。確認面から床面までの深さは20cmである。主柱穴が北西隅と南西隅から検出されており、深さは32cmと50.9cmである。北壁及び西壁沿いに周溝がある。カマドは検出できなかったが、北壁にかかるSK－011a・ｂによって壊されているか、東壁に存在するかのどちらかであると考えられる。
遺物は床面からやや浮いて出土している。

遺物（第104図、図版26・27）１は須恵器蓋であり、天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。２は在地産の土師器甕であり、摩耗が著しい。３は灰色小石を多く含む在地産の土師器鉢であり、復元口径は15.8cmで、外面に縦方向のヘラケズリが施されている。４は復元口径30.0cmの大型の在地産土師器甕で



第105図　SI－026

あり、胴部外面にはヘラナデがなされている。

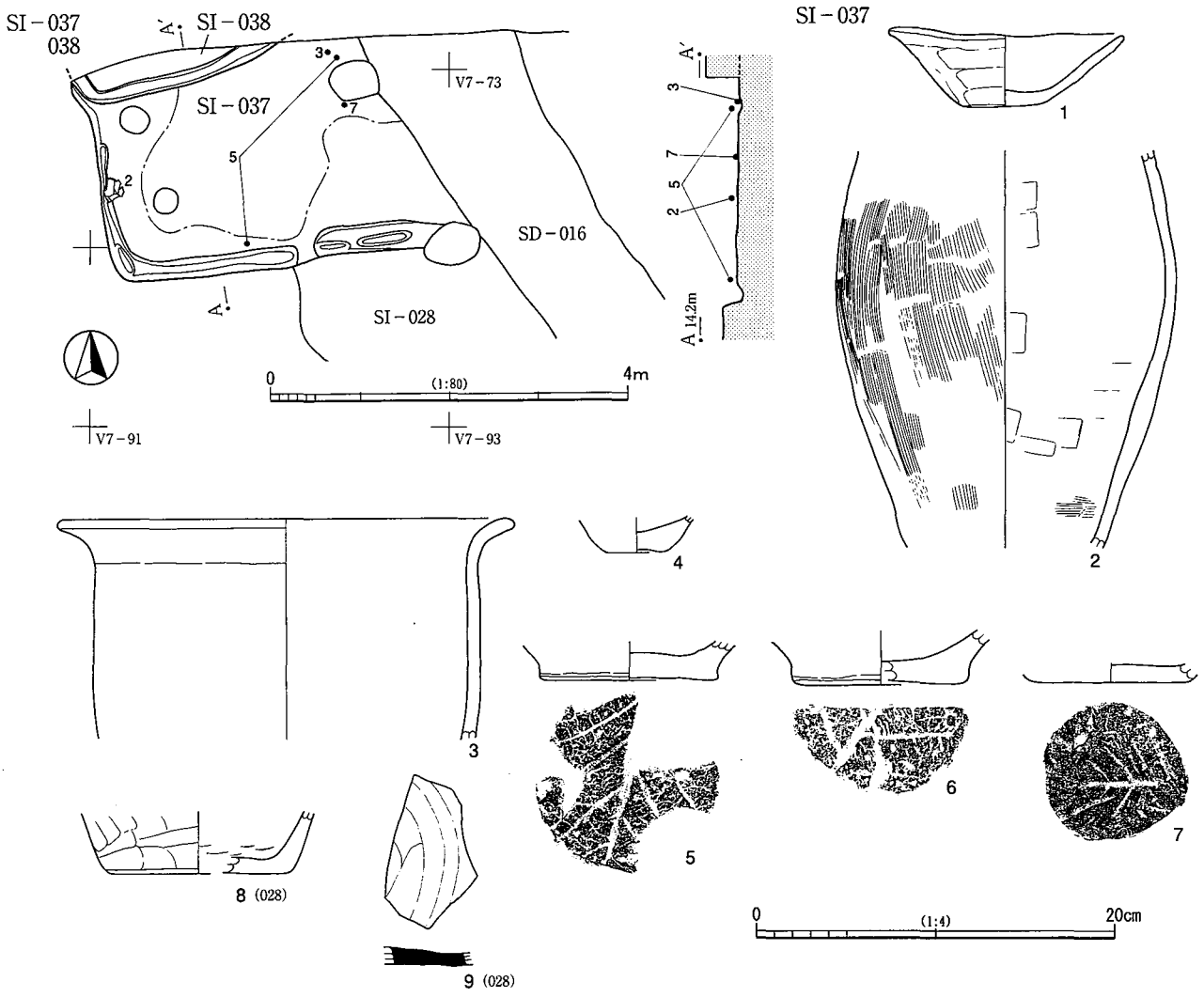
SI－037・038（第106図）

調査区北端のV7－71グリッド周辺にあり、SI－038はSI－037を切っている。両遺構ともに遺構の大半が調査区外の北側ある。

SI－037は弥生時代のSD－016、SK－002、古墳時代後期のSI－028・039を切っている。形状は方形を呈すると考えられ、確認面から床面までの深さは17.2cmである。床面には硬化面があり、東壁・南壁沿いに周溝がある。南壁側の周溝は一部が途切れており、東側部分は幅が30cm前後あり、広くなっている。周溝の深さは２cm～８cmである。遺物は床面近くから出土している。

SI－037遺物（第106図、図版26・28）　１は粗雑なつくりの土師器坏である。２は在地産の土師器甕であり、胴部外面はほぼ全面にハケが入り、内面はハケ及びヘラナデがなされている。３も在地産の土師器甕であり、復元口径は25.6cmである。４は壺の底部である。５～７は在地産の土師器甕の底部であり、いずれも底部外面に木葉痕がみられる。

８・９は弥生時代の竪穴住居の可能性のあるSI－028から出土した遺物であるが、SI－028は本遺構と重複し、本遺構の遺物が流れ込んだものと判断できるので、ここで述べることにする。８は土師器甕の底部



第106図　SI－037・038

であり、外面はヘラケズリ、内面にはヘラナデがなされる。9は須恵器蓋片であり、天井部外面には回転ヘラケズリが施されている。

SI－038は南壁際の一部分の調査であり、遺物の検出も皆無であり不明な点が多いが、SI－037を切っていることから、奈良・平安時代の遺構と考えられる。平面形は方形と考えられ、確認面から床面までは18cm前後である。周溝が南壁際と南西隅際にみられ、幅は15cm前後で、深さは3cm前後である。

2　土坑

奈良・平安時代の土坑は3基の検出である。

SK－010（第107図）

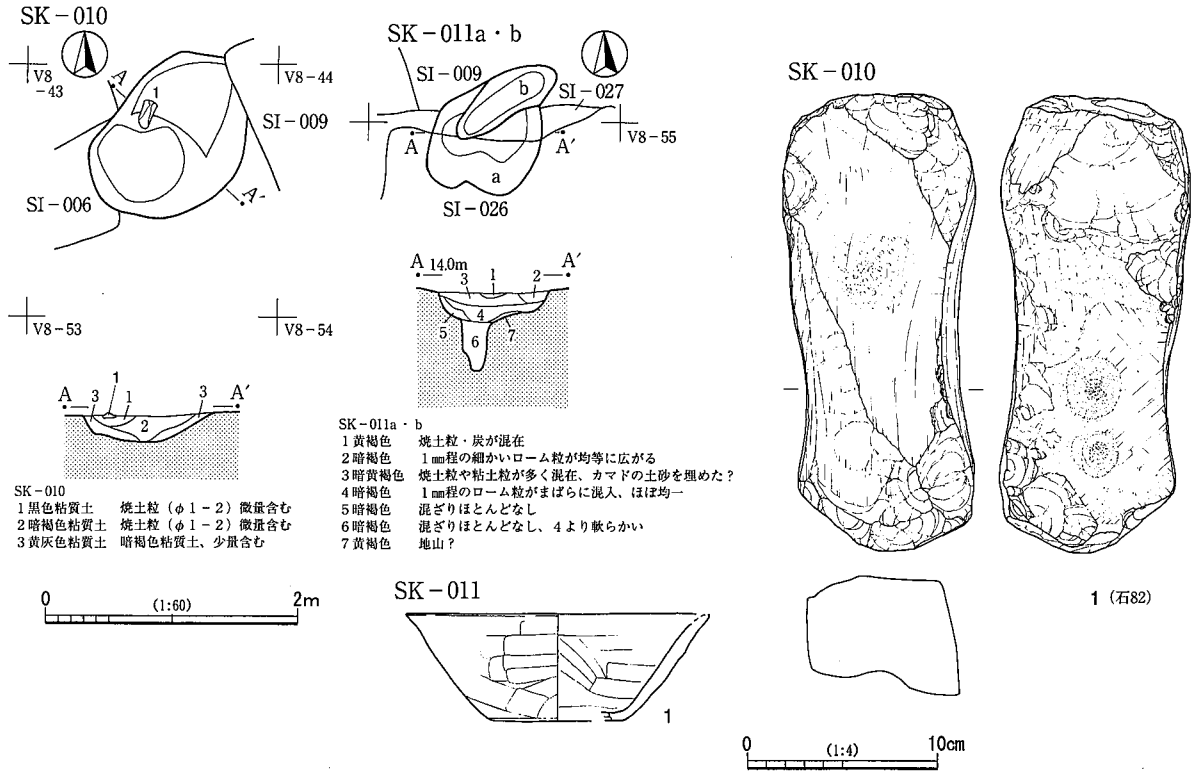
V8－43グリッドにみられ、古墳時代のSI－006a・bを切り、奈良時代のSI－009に切られて存在する。形状は楕円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.05m、深さは22.9cmである。底面には段差がみられる。

遺物（第107図、図版79）　1は砂岩製の砥石である。覆土上層からの出土である。使用面はほぼ全面にみられる。最大長は240mm、最大幅100.8mm、重量は2,480.0gである。

SK－011a・b（第107図）

V8－54グリッドに位置し、SI－026・027を切っている。aがbを切っており、aは不整円形で、長軸0.87m、短軸0.80m、深さ16.0cmである。覆土に焼土粒や粘土粒が多く含まれる層があり、竪穴住居跡のカマドの構築土が混入しているものと考えられる。bは長楕円形で、長軸0.94m、短軸0.35mで、深さは64.8cmである。

遺物（第107図）　1は土師器椀であり、外面には横方向のヘラケズリがなされる。

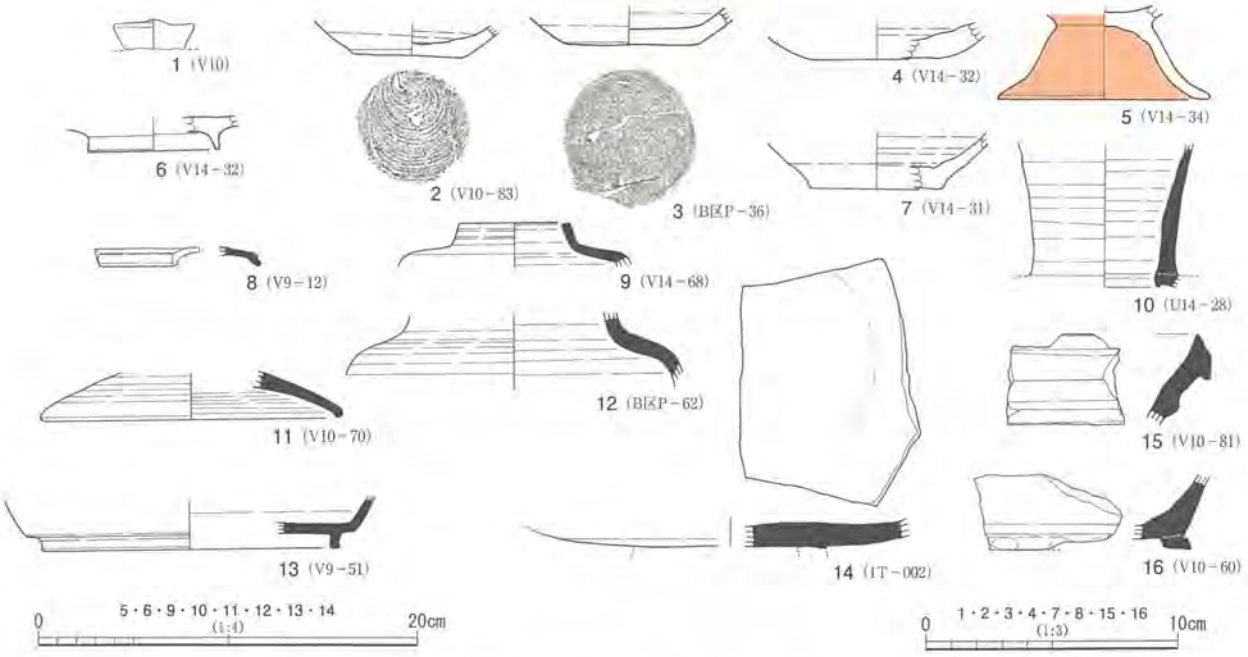


第107図　SK－010・011b

3　グリッド出土遺物（第108図、図版70）

1はロクロ土師器蓋の鈕である。2・3はロクロ土師器小皿であり、底部外面には回転糸切り痕が顕著に残る。4はロクロ土師器坏である。5は土師器高坏の脚部である。内外面に赤色塗彩が施される。6はロクロ土師器高台付坏であり、高台は貼り付けられている。7はロクロ土師器坏で、底部に回転糸切り痕がみられる。内面のロクロ目が顕著である。

8～16は須恵器であり、8は蓋の口縁部片であり、外面には自然釉が付着する。9・12は短頸壺である。10は長頸壺の頸部であり、内面には降灰釉が付着する。11は蓋であり、天井部外面に回転ヘラケズリが施される。13は端正なつくりの高台付盤であり、底部回転ヘラケズリ後に高台が貼り付けられている。14は高盤の底部と考えられ、回転ヘラケズリ後に脚部を貼り付けた痕跡がみられる。内面には自然釉が付着する。15・16は壺の破片である。16には高台が貼り付けられている。



第108図　グリッド等出土遺物

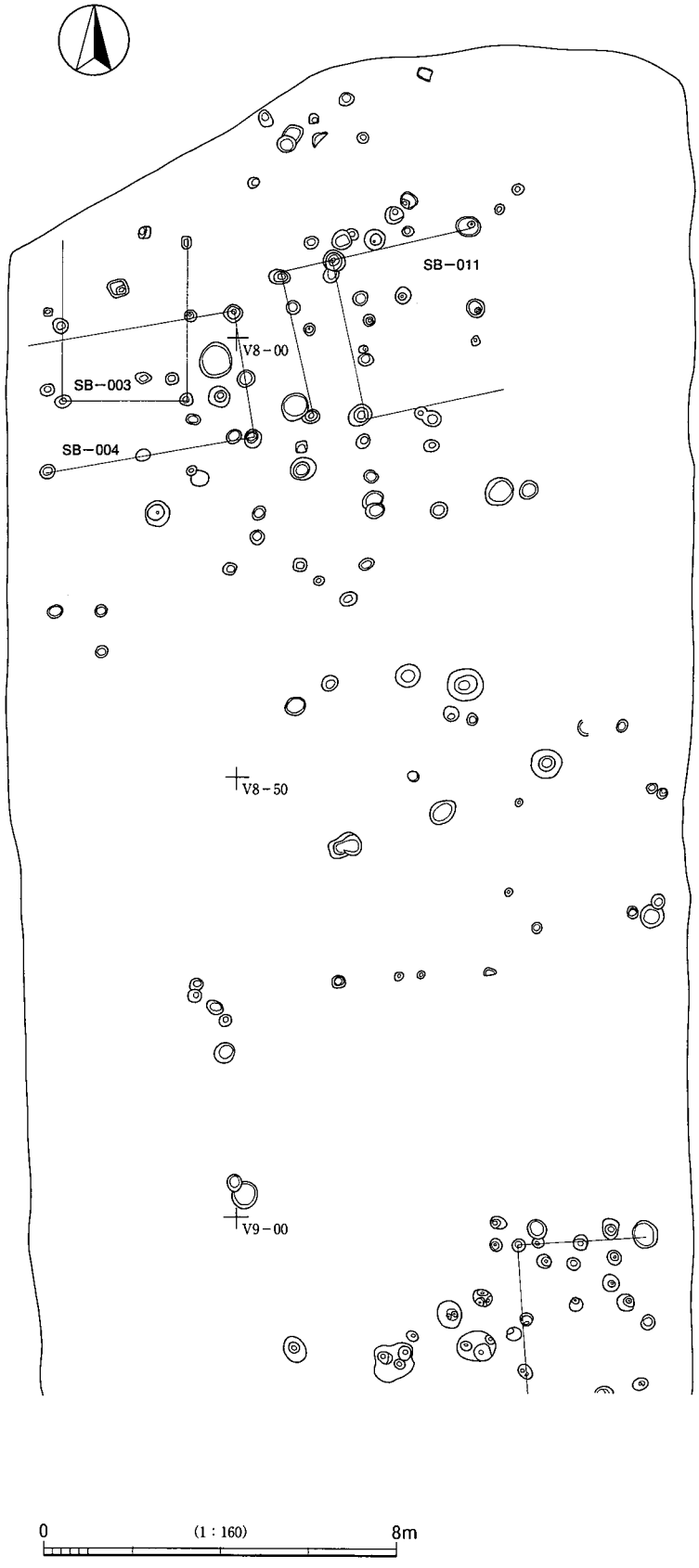
第4節　中世

萱野遺跡が大きく姿を変えたのは古代末～中世であったと思われる。前掲のように、1号墳の墳丘部には古代の竪穴と推定される遺構（SI－012）があり、その頃には墳丘が削平されていた可能性が高く、墳丘の北側には古代以降の土坑やピットが密集する。また、C区の南半は縦横に走る溝や掘立柱建物群・ピット群のみが分布し、古代以前の遺構が全く存在しない区域である。さらに、北端のD区でも奈良時代以前の遺構を切る複数の溝が検出された。これらの遺構からは中世の遺物が出土しており、中世を中心とする遺構群であると考えられる。

1　掘立柱建物群（第109・110・111図）

掘立柱建物は、U7－89～V8－10に分布する北側の3棟と、V9－03～V10－64から成る南側の9棟があ

第109図　中世以降遺構配置図



第110図　掘立柱建物群配置図（1）

る。いずれも、柱穴が小規模で浅いものも多く、建物全体の柱穴が残る例はSB－001・005の2棟に限られる。周囲から中世陶磁器が出土したことから当該期の建物と判断した。

北側の3棟のうち、SB－004・011は東西に長い建物で、主軸の向きをほぼ同じくする。これに対し、SB－003は南北に長い建物で、主軸の向きが約80°異なっている。また、SB－011の西側には柱間の小さい柱列があり、庇などの施設があったようである。

南側の9棟は概ね3つのグループに分けられる。SB－007・008・009の3棟は東西建物で、梁の向きがほぼ磁北に近い。SB－001・010・012の3棟は建物の向きがやや西に傾く。これらの建物と重複するSB－002・005とSB－006の3棟はやや東に傾いている。

SB－001（第112図、図版19）

3間（6.4m）×1間（4.2m）の東西棟建物である。桁行きの柱間は西端が2.5m、中央が2.0m、東端が1.9mである。棟持ち柱の位置に後から見つかったピットがあり、東のピットには板石が置かれていた。北の桁筋からの柱間は西が1.5m～1.6m、東が1.8mでズレを生じているが、東西棟の建物であった可能性がある。また、北西隅とその東隣、および南東隅の柱穴には補助的な柱穴が伴っている。柱掘りかたの径は40cm～52cm、深さ（P3を除く）は35.7cm～65.8cmである。

SB－002（第112図）

２間（4.2m）以上×１間（3.9m）の東西棟建物である。東側は調査区外に延びると見られる。桁行きの柱間は西端が2.4m、中央部が1.8mで、南側の柱穴２基はSB－008と同じものを利用していると推定される。また、北側の柱穴はSB－008の北西柱と重複しているが、両者の前後関係は不明である。西側の中央部に小ピット（P6）があり、棟持ち柱の柱穴と思われる。柱掘りかた（P6を除く）の径は36cm～46cm、深さは10.5cm～87.0cmである。南側柱P4の東１mに深さ87.9cmのピットがあり、北側の対面に浅いくぼみが図化されているがこれらの詳細は不明である。

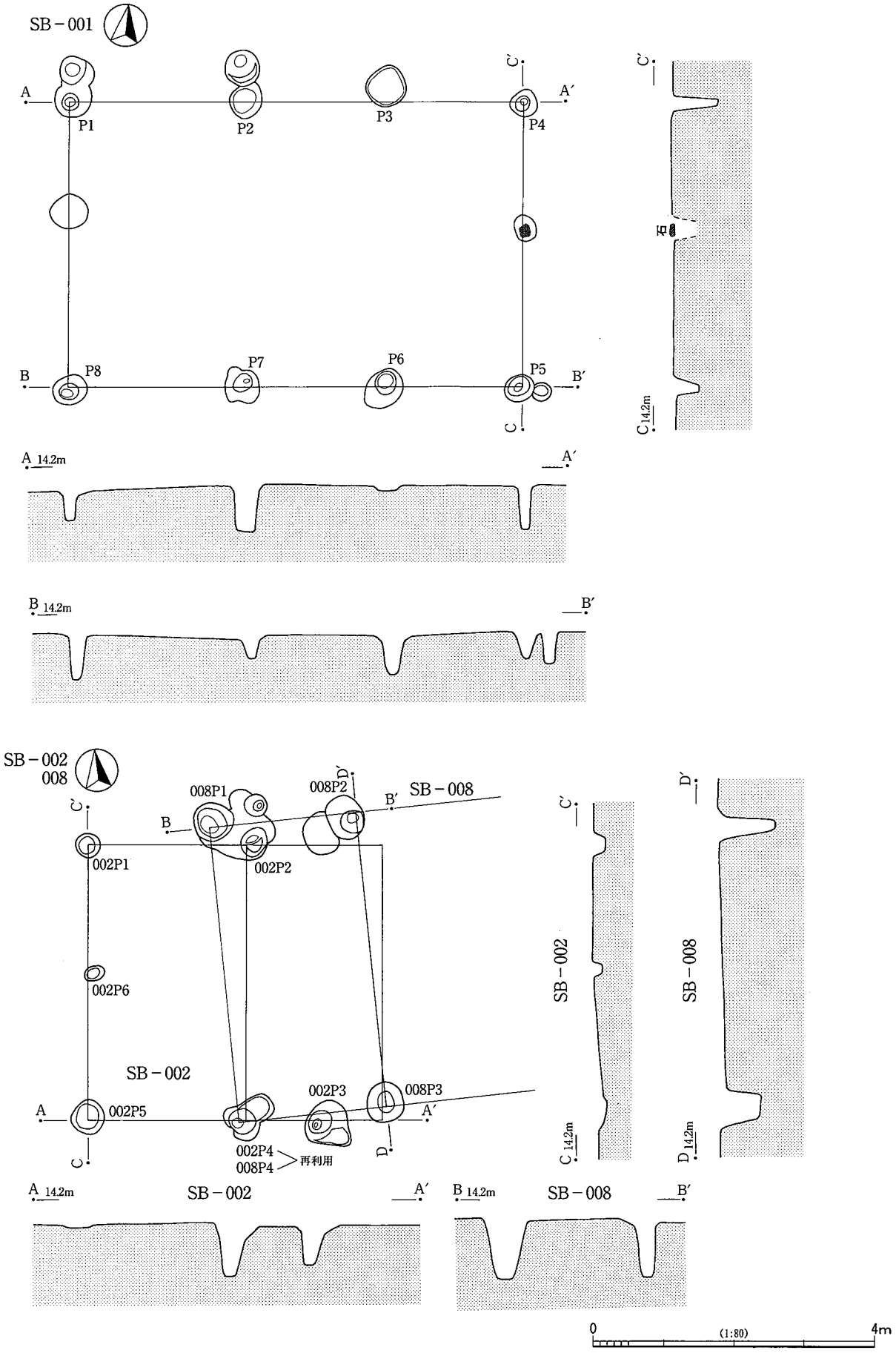
SB－003（第113図）

２間（3.6m）以上×１間（2.85m）の南北建物である。北側に延びる可能性があるが、調査区内ではそれに対応する柱穴は見つかっていない。西側の柱間は1.8m、東側の柱間は南端から2.0m、1.6mとなっている。柱掘りかたの径は28cm～38cm、深さは27.9cm～55.9cmである。

SB－004（第113図）

２間（4.8m）以上×１間（2.85m）の東西棟建物である。西側に延びる可能性があるが、調査区内ではそれに対応する柱穴は見つかっていない。また、北側柱は北東

第111図　掘立柱建物群配置図（２）



第112図　SB－001・002・008

隅のみが残る。東梁筋の中央に棟持ち柱と見られる柱穴がある。南側の柱間は西から2.2m、2.6mとなっている。柱掘りかたの径は30cm～48cm、深さは7.2cm～36.8cmである。

SB－005（第113図）

3間（5.8m）×1間（3.4m）の東西建物で、北西隅の柱穴を欠く。桁筋の柱間は南北とも西から2.0m、1.8m、2.0mとなっている。北側の2か所に重複する柱穴があり、補助的な柱穴と考えられる。柱掘りかたの径は28cm～40cm、深さは15.5cm～49.6cmである。

SB－006（第114図）

2間（5.0m）以上×1間（3.8m）の東西棟建物で、東側の中央に棟持ち柱の柱穴がある。側柱の内側に柱筋の異なる柱列が廻っており、束柱と見られる。建物本体の柱穴はP12～P21が相当し、北東・南東隅柱と北側柱は2基の柱穴から成る。また、P14は深さ64.5cmのしっかりした掘り込みをもつ柱穴で、北側柱を構成するものと思われるが、これに対応する南側柱はない。桁筋の柱間は北側が2.8m、南側が西から2.2m、2.8mとなっている。柱掘りかたの径は38cm～72cm、深さは11.1cm～96.0cmである。

束柱は南東隅の柱穴（P7）を除いてそれぞれ2基の柱穴が組み合う。配置からみて、建て替えというより2基で1組の柱列と考えられる。2基の柱穴は浅深の組み合わせと両方とも深い組み合わせがあり、P3では石が出土している。桁筋の柱間は北側が2.8m等間、南側が西から1.8m、2.5mとなっている。柱掘りかたの径は34cm～53cm、深さは14.7cm～86.9cmである。束柱の規模は建物本体と比べて遜色がなく、加重に耐えられる床を支えていたのではないかと思われる。

SB－007（第114図）

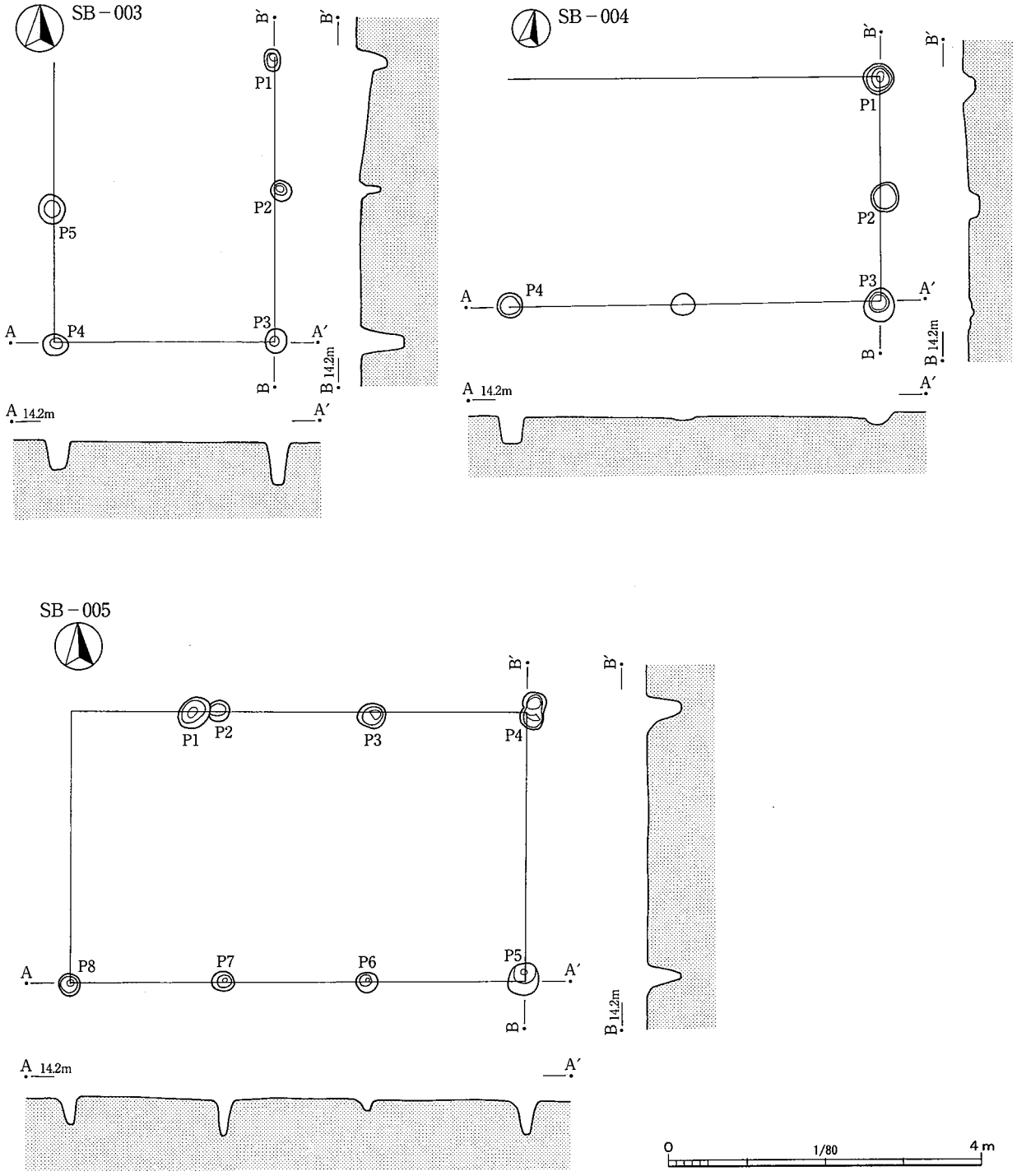
2間（3.9m）×2間（4.2m）の総柱建物である。3間（5.6m）×2間（4.2m）の東西棟の総柱建物の可能性もあるが、北東隅柱と東側柱を欠き、南東隅柱（P9）が深さ9cmの貧弱な柱穴であるため、前者の可能性が高い。P6・P12はいずれもしっかりした掘り込みのある柱穴で、棟持ち柱として充分である。北東隅柱と南西隅柱以外は2～3基の掘りかたがあり、抜き取り痕も見られることから、建て替えが行われたものと思われる。柱間は南北側が西から2.1m、1.8m、東西側が北から2.2m、2.0mとなっている。柱掘りかたの径は34cm～62cm、深さは（P9を除く）15.8cm～96.0cmである。束柱（P13・14）はいずれも浅い（11.4cm～11.8cm）。

SB－008（第112図）

1間（2.1m）以上×1間（4.2m）の東西建物である。東側は調査区外に延びると見られる。上記のように、南側の柱穴2基はSB－002と同じものを利用し、北西隅の柱穴はSB－002の北側柱と重複している。柱掘りかたの径は45cm～56cm、深さは56.7cm～88.0cmである。

SB－009（第115図）

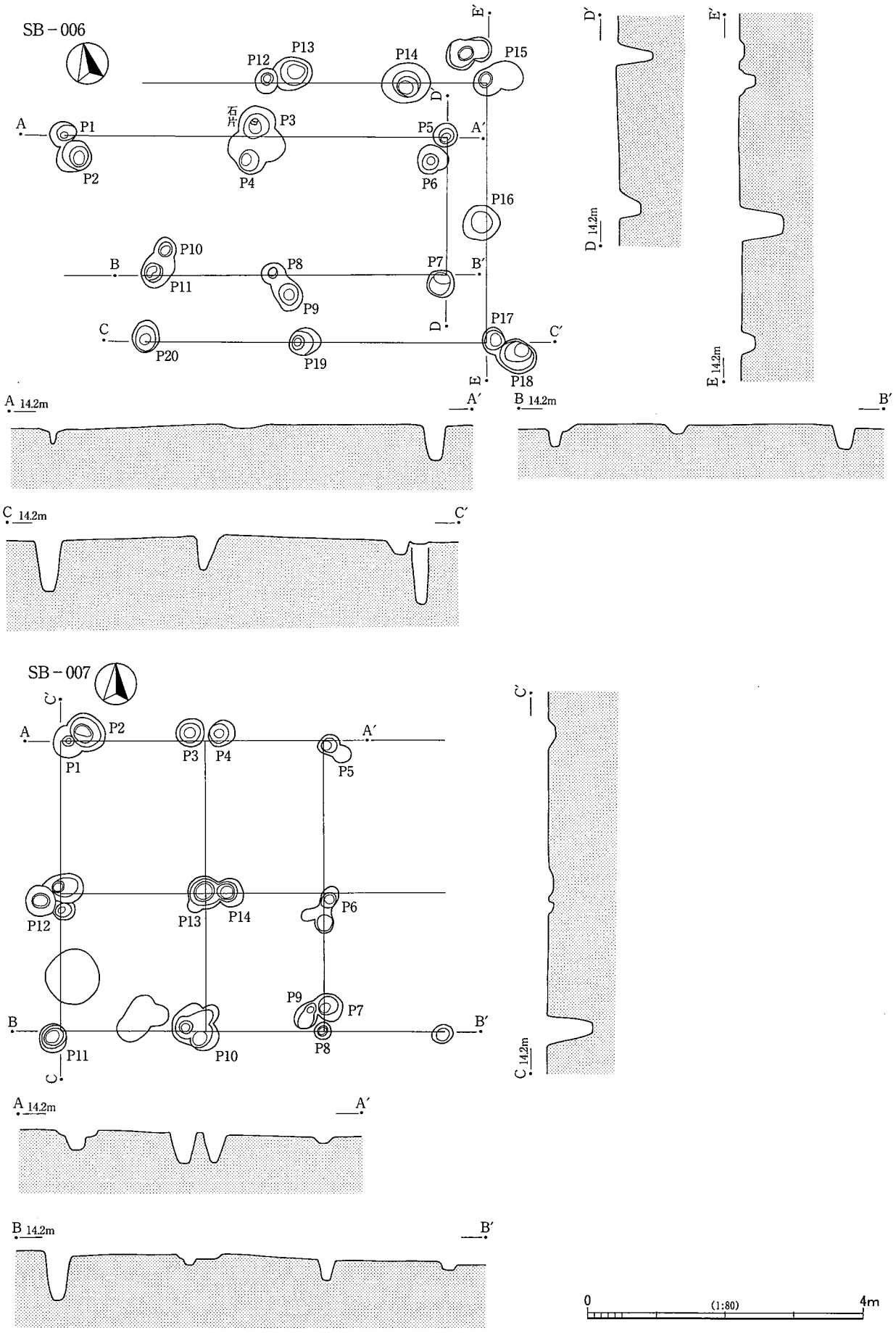
2間（6.0m）以上×1間（2.7m）の東西建物を想定しているが、南西の隅柱以外は不明瞭で、南と東の側柱も見つかっていないため、建物かどうか疑問が残る。北側のP10は側柱ではなく、補助的なもので



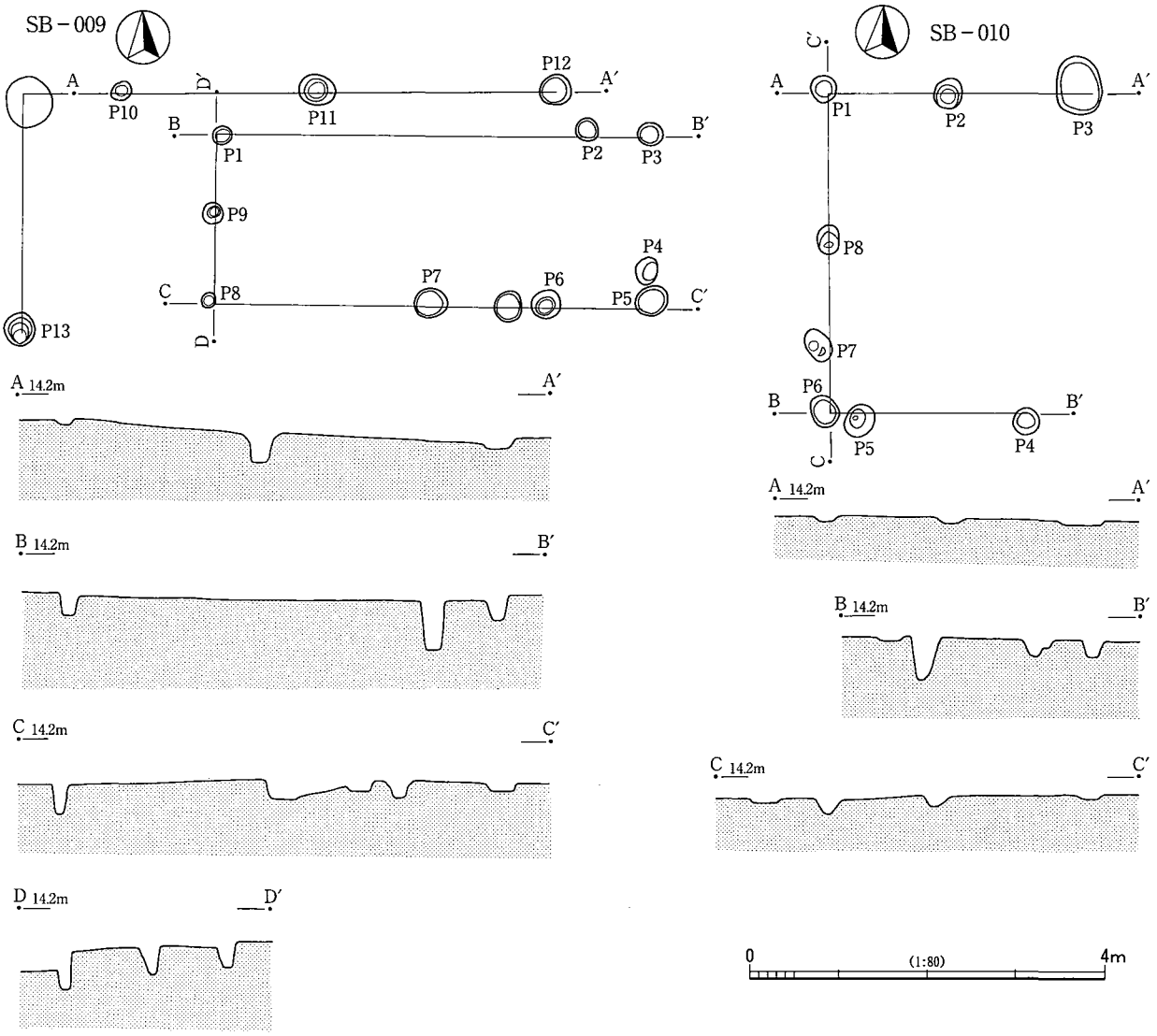
第113図　SB－003・004・005

あろう。内側には東西4.8m・南北1.9mにわたって束柱様のピットが方形に並んでいる。

建物の柱間は北側が西から2.2m、2.7m、西側が2.7mである。柱掘りかたの径は34cm～42cm、深さは10.3cm～33.5cmである。内側の柱列の柱間は、南側が西から2.4m、1.2m、1.2m、西側が北から0.9m、1.0mとなっている。柱掘りかたの径は15cm～40cm、深さは9.5cm～60.2cmである。



第114図　SB－006・007



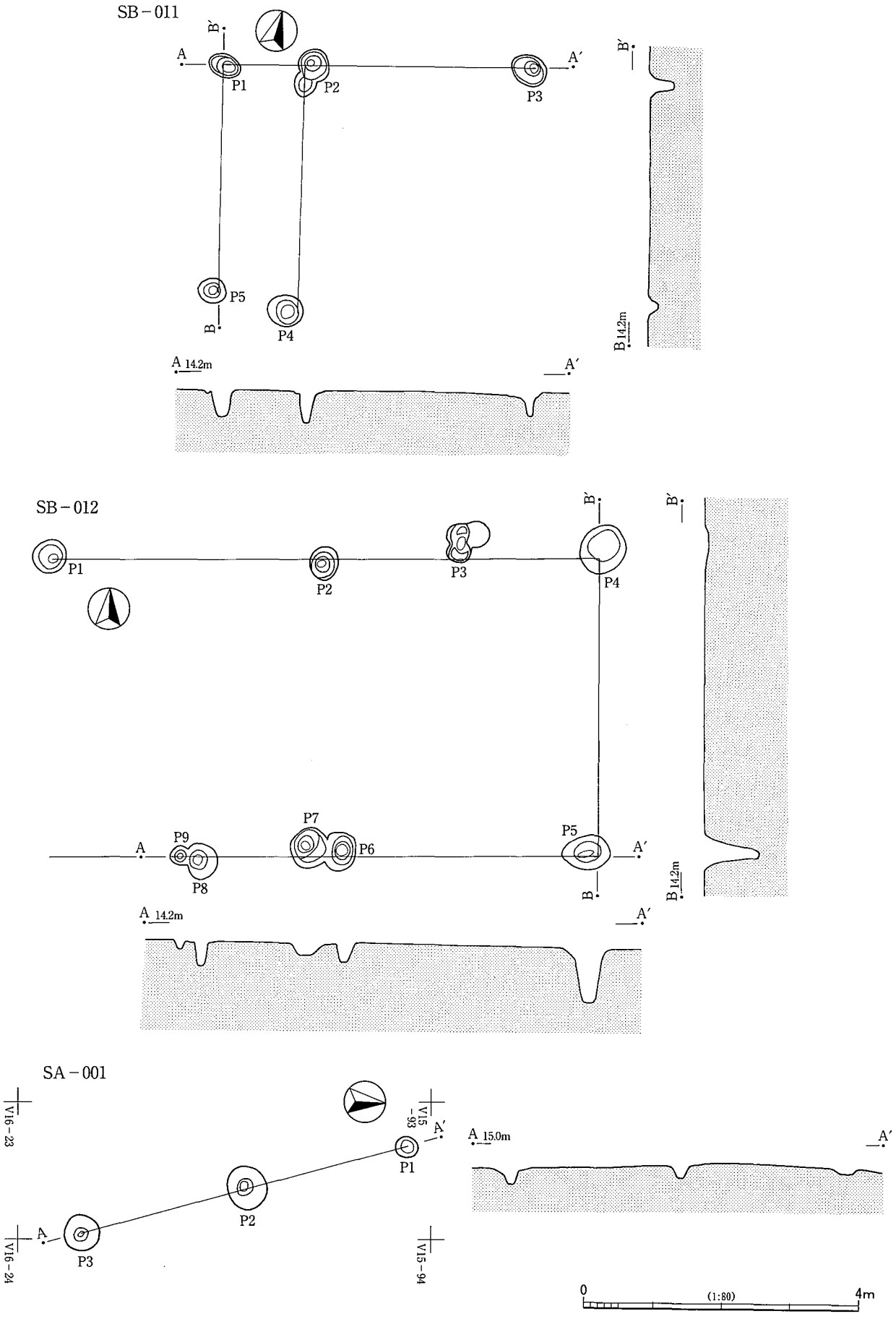
第115図　SB－009・010

SB－010（第115図）

２間（2.8m）以上×２間（3.6m）の東西棟建物を想定しているが、付近には多数のピットがあり、本跡の柱穴と同規模のものも多い。東側は調査区外に延びると見られる。東側の柱間は1.8m等間、北側は1.4m等間であるが、南側の柱間が2.2mで柱筋は通らない。南東隅の柱には補助的な柱が伴い、棟持ち柱との間にも柱穴がある。柱掘りかたの径は32cm～52cm、深さは4.0cm～49.5cmである。深さ４cm～５cmの浅い柱穴が半数を占めており、軽便な施設だったと思われる。

SB－011（第116図）

１間（3.3m）以上×１間（3.6m）の建物で、東側に延びると思われるが、後世に削平されたため検証できない。1.2m西側に本跡に伴う柱列があり、庇状の施設をもつ東西建物が想定できる。北西隅の柱には補助的な柱が伴っている。柱掘りかたの径は42cm～54cm、深さは14.5cm～50.8cmである。



第116図　SB－011・012、SA－001

SB－012（第116図）

４間（8.0m）×１間（4.4m）の東西建物で、南西の隅柱を欠く。側柱の柱穴も抜ける箇所があり、北側ではP1とP2の間、南側ではP5とP6の間にもう１基入る。北側の柱間は2.0m等間と想定され、南側は東から3.8m（1.9m、1.9m）、4.2m（2.1m、2.1m）である。また、北側、南側とも補助的な柱を伴う例がある。柱掘りかたの径は35cm～70cm、深さは5.3cm～80.9cmである。

以上のように、建物群の配置には一定のまとまりが見られるが、全体に建物の企画性は希薄である。また、総柱建物はSB－007のみで、ほかは側柱建物である。建物群の周辺では日常什器などの生活用品がほとんど出土していないこと、鉄滓を出土した遺構が集中することなどから、これらの建物は工房や小規模な倉庫ではなかったかと推定している。

２　ピット群（第109～111・116図、図版19）

上記の建物と推定した柱穴群のほかにも多くのピット群が分布している。D区ではU6－67からU7－48にかけてSH－002として捉えられた14基のピット群がある。C区ではV9－02からV9－54、SD－003とSX－003に囲まれたU10－39からV10－14にピット群が集中している。特に、SD－003とSX－003に囲まれた方形の区画は特定の施設が存在した可能性がある。B区ではU13－08からV14－22にかけて土坑群と共に多くのピットが検出されている。これらの中には小規模な墓坑が混在したこともあり得る。A区ではU16－69からV16－70にSH－001のピット群が古墳時代後期の住居を切って掘り込まれている。これらのピット群は建物として捉えることができなかったが、小規模な建物を構成する柱穴が存在した可能性は高い。

一方、１号墳の墳丘部南端では柵列として捉えられたピット群（SA－001）がある。古代の竪穴（SI－012）とともに、33m四方の大型墳丘を削平した後に築かれた遺構のひとつである。周辺には墳丘下の竪穴住居には伴わないピットが数多く見られ、竪穴の柱穴と分離することが困難であった例も少なくない。これらもまた、古代以降の施設を構成した柱穴群であったと思われる。

C区ピット群では貿易陶磁器の青磁蓮弁文坏（第119図－2）、B区ピット群では常滑の甕や瀬戸美濃の平碗（第119図－6）・盤類が出土している。

３　土坑

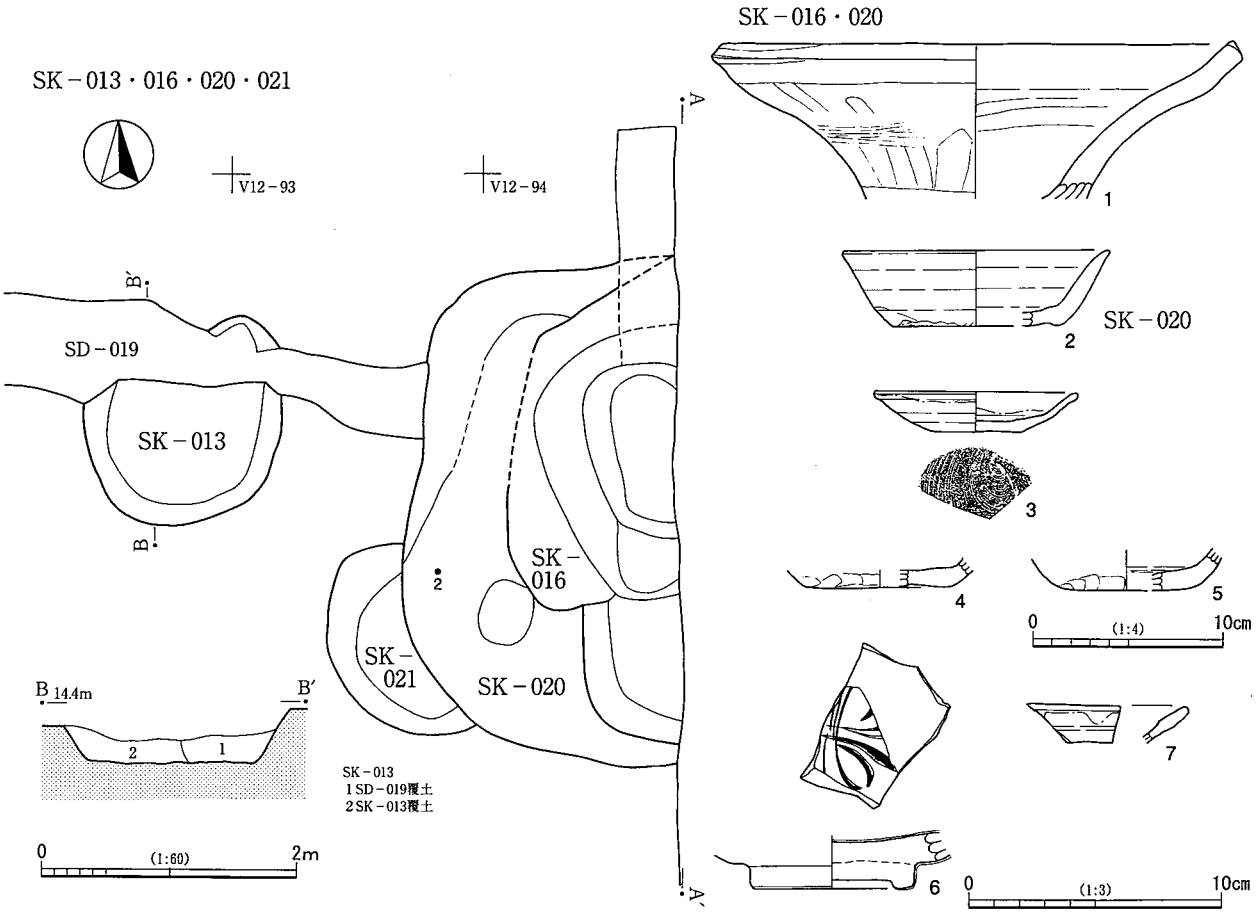
SK－013（第117図）

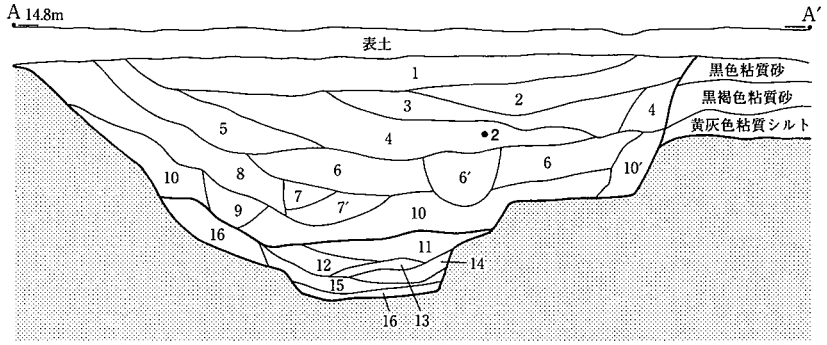
B区中ほどのV12－92～V13－03グリッドに位置する楕円形の土坑で、北側はSD－019に切られる。遺物は出土していないが、周囲には中世の土坑群が分布していることから中世の土坑と判断した。長軸1.84mの規模から見て、墓坑の可能性もある。

SK－016・020・021（第117図、図版43・44）

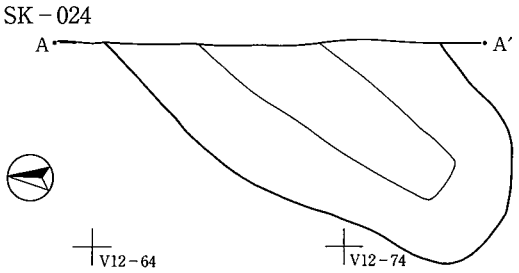
B区中ほどのV12－93～V13－14グリッドに重複する３基の土坑である。SK－013の東に隣接し、SD－019と重複しているが前後関係は明らかではない。３基の土坑は、SK－016が最も新しく、次いでSK－020、SK－021の順に古い。

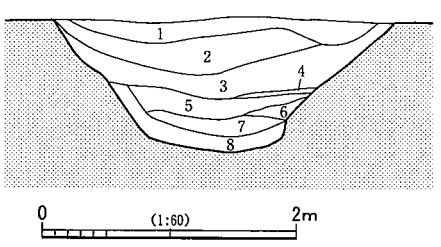
SK－016からは中世の陶磁器が出土し、貿易陶磁器も含まれている。１は常滑の片口鉢、３・７は瀬戸



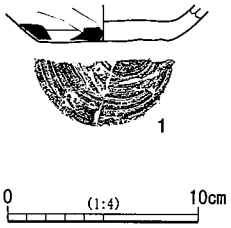


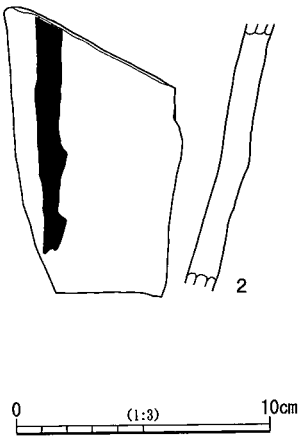
SK－016
1 黒褐色粘質砂　白色発砲スコリア（φ5－15）少量、焼土粒（φ2－3）微量含む
2 暗褐色粘質砂　白色発砲スコリア（φ5－15）少量、焼土粒（φ2－3）微量含む
3 暗褐色粘質砂　白色発砲スコリア（φ5－15）少量、焼土粒（φ2－3）微量含む
　2より明
4 暗褐色粘質砂　白色発砲スコリア（φ5－15）少量、焼土粒（φ2－3）微量含む
　3より明
5 暗灰褐色粘質砂
6 暗灰色粘質砂　炭化物（φ5－20）多量、焼土粒（φ4－8）少量含む
6′暗灰色粘質砂　6より炭化物少ない
7 暗黄褐色粘質シルト　暗褐色粘質土含む
7′暗黄褐色粘質シルト　暗褐色粘質土少量含む
8 暗灰褐色粘質砂
9 暗灰褐色粘質砂　8より明
10 暗灰褐色粘質砂　8より暗
10′暗灰褐色粘質砂　10より黄
11 灰褐色粘質砂　炭化粒（φ10－15）少量含む
12 暗黄灰色粘質シルト　炭化粒（φ10－15）少量含む
13 黄灰色粘質シルト　炭化粒（φ10－15）少量含む
14 灰色粘質粗砂　炭化粒（φ10－15）少量含む
15 灰色粘質粗砂　炭化粒（φ10－15）少量含む
16 黄灰色粘質シルト　炭化粒（φ10－15）少量含む





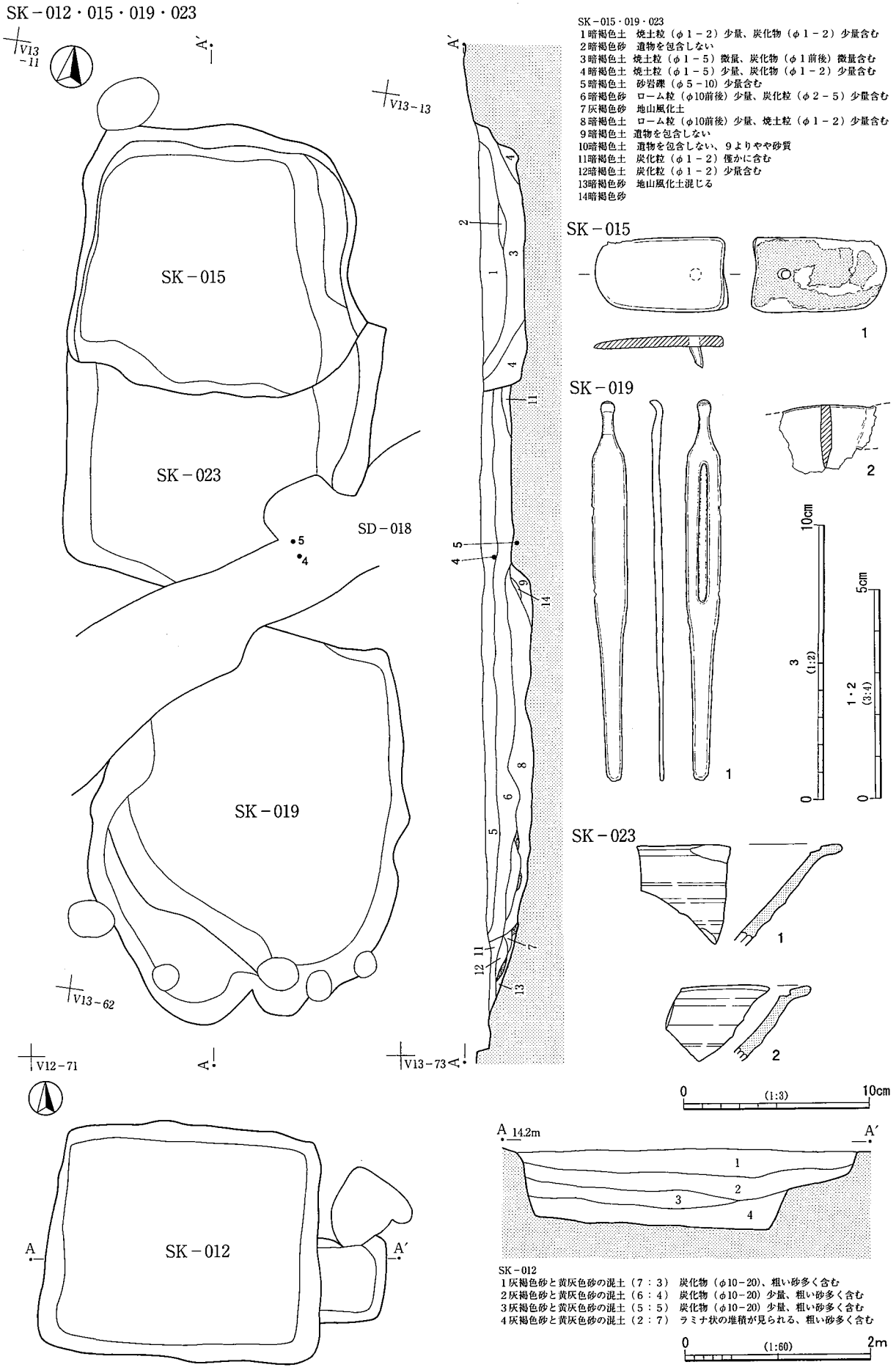
SK－024
1 暗灰褐色粘質土　焼土粒（φ1－2）少量含む
2 暗褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）少量含む
3 黒褐色粘質砂　焼土粒（φ1－2）少量含む
4 黄灰色砂　黒灰色砂少量含む
5 黒灰色粘質砂　焼土粒（φ1－2）微量含む
6 黄灰色粗砂
7 黄灰色砂　黒灰色砂少量含む
8 暗灰色砂





0 (1:60) 2m

第117図　SK－013・016・020・021・024



第118図　SK－012・015・019・023

美濃の縁釉小皿、４・５は在地土器のカワラケである。６が貿易陶磁器で見込みに線劃文のある青磁碗である。

SK－020からは在地土器のカワラケが出土した。

SK－012（第118図、図版18）

Ｖ13－71～Ｖ13－82グリッドに位置する地下式坑である。東側に方形の入り口部があり、土坑に向けて緩やかに下がる。現状では天井部の有無は明らかではないが、入り口部をもつことから天井部、あるいは上屋が存在した可能性が高い。覆土の堆積状況には天井が崩落した形跡がないため、後者のような構造であったと思われる。土坑底面の規模は長軸3.80m、短軸2.55m、深さ1.01mである。本土坑に伴う遺物はない。

SK－015・019・023（第118図、図版44・80）

Ｖ13－11～Ｖ13－53グリッドに位置する３基の土坑である。SK－015はSK－023を切って掘削されたことが土層の観察によって記録されている。SK－023とSK－019の間には弥生時代の環濠SD－018が重複する。両土坑の切り合いはないようである。

SK－015では鉄製の帯先金具（1）と用途不明の板状鉄製品（２）が出土している。帯先金具には鉄鋲が装着され、裏側には布が付着する。SK－019の出土遺物には銅製の耳かきがある。SK－023からは瀬戸美濃の折縁深皿の口縁部が２点出土した。

SK－024（第117図、図版18）

Ｖ12－64グリッドに位置する長楕円形の土坑で、東側は調査区外にある。１は瀬戸美濃の折縁中皿であり、底部には回転糸切り痕がみられる。２は常滑の甕の胴部片であり、外面には自然釉が付着する。

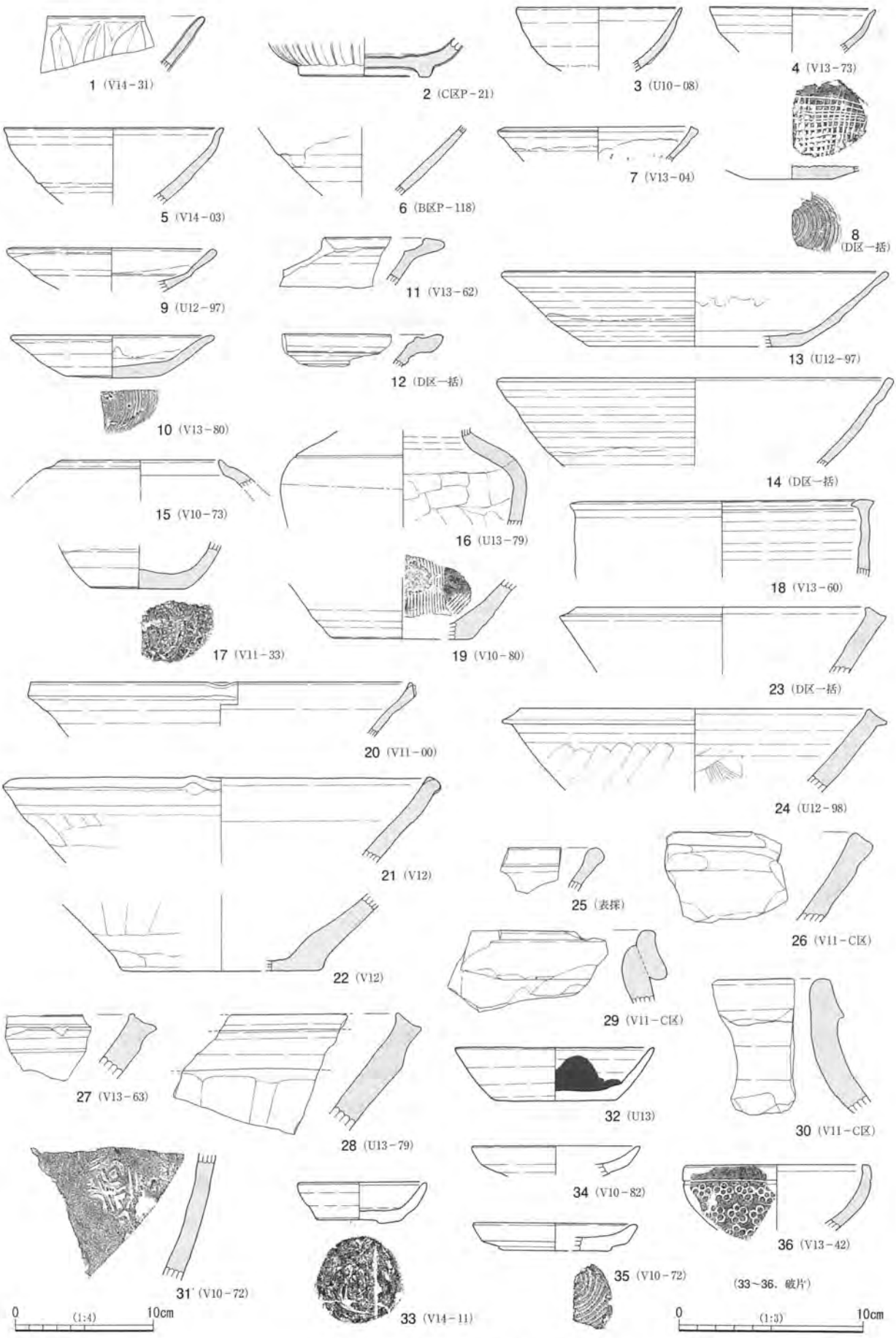
４　グリッド等出土遺物

遺構に伴わない中世の遺物を一括して報告する。これらは、表土除去から遺構検出の段階で出土したものである。

陶磁器（第119図、図版71・72）

１・２は中国から輸入された貿易陶磁器で、いずれも青磁である。１は龍泉窯系の縞蓮弁文碗、２はやや時代の下った蓮弁文坏である。３～14は瀬戸美濃の製品である。３・４ は天目茶碗で古瀬戸後期様式Ⅰ期、およびⅢ期の製品である。５・６は灰釉平碗で古瀬戸後期様式のⅢ期・Ⅱ期に比定される。７・８は卸皿で、やはり古瀬戸後期様式の製品である。９・10は後期様式Ⅲ期の縁釉小皿、11・12は後期様式Ⅰ期の折縁深皿である。13・14は直縁大皿で、それぞれ後期様式のⅡ期・Ⅲ期の製品である。

15は渥美の短頸壺で、外面に自然釉がかかる。16は常滑の壺で、３型式に位置づけられる。17～20は瀬戸美濃の製品である。17の小壺は古瀬戸後期様式Ⅲ期～Ⅳ期古段階に位置づけられ、鉄釉がかかる。18は後期様式Ⅲ期の筒形容器で、灰釉がかかる。19は後期様式Ⅳ期の擂鉢で、内外面に重ね焼きの痕が残る。20の擂鉢は大窯１期の製品と見られ、錆釉がかかる。21～28は常滑の片口鉢である。23・24・26・27はⅡ類９型式、25はⅠ類５型式、28はⅡ類10型式に分類される。なお、21は砥石に転用されている。29・30は

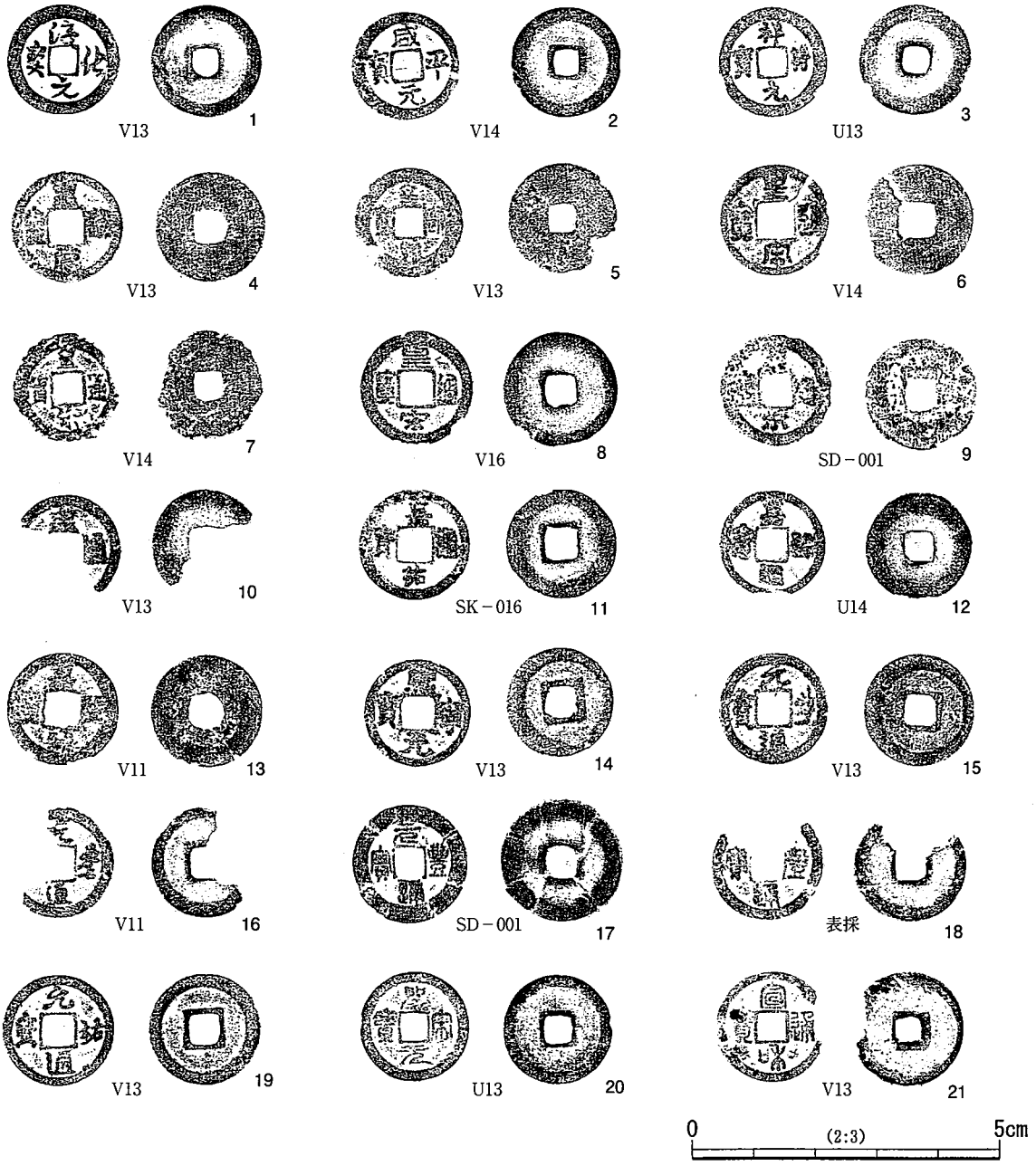


第119図　グリッド等出土遺物

常滑の甕であるが、口縁部の形態が大きく異なる。29は6b型式、30は９型式に分類される。31は渥美の甕の胴部破片で、外面に押印文がある。32～35は在地土器のカワラケ坏（32）と小皿（33～35）である。36は瓦質土器の香炉で、外面に梅花のスタンプ文が見られる。個々の詳細は表１・表４・表５に示した。

出土銭貨（第120図、図版80）

銭貨は23点出土した。破損が著しい２点を除いて21点の拓影図を示した。すべて北宋銭で、初鋳年990年の淳化元宝～初鋳1119年の宣和通宝にわたる。銭種・書体・初鋳年・計測値等は表７に示した。



第120図　出土銭

第５節　その他の遺構と遺物

１　溝・道状遺構（第109図）

萱野遺跡２次調査区では、ほぼ全域で溝が検出されている。溝の中からは縄文時代～中近世にわたる遺物が出土しており、時期や性格を特定できるものは極めて少ない。古墳時代や古代の溝も中世以降に溝、あるいは道として再利用された可能性がある。一方、古代末～中世にそれ以前の遺構を削平するような大規模な土地改変が行われたことは確かであり、その時の区画は現在まで姿をとどめている。調査区北側のＣ区・Ｄ区、南側のＡ区・Ｂ区を分ける東西方向の現道は、遺跡内で検出された多くの溝に平行しているのである。

東西に走る溝は11条あり、SD－011・028、SD－010・012、SD－019・024は南北にそれぞれ約10mの間隔で掘削されており、何らかの施設を区画していた可能性がある。SD－024は13mにわたって途切れており、出入り口として開口していた可能性が高い。また、SD－003は北西で直角に曲がって方形の区画を形成し、区画内の掘立柱建物群との有機的な関連が推定できる例である。さらに大溝SX－003は約110m南の萱野１号墳南周溝と組み合って１町（60間）の区画を形成していた可能性がある。南周溝が現道と一致するのは偶然ではないであろう。一方、SD－001・002のように南北に掘削された溝もまた、真北を意識した区画かも知れない。このほか、SD－004・005のように大きく屈曲する溝、SD－026・029などの斜めに調査区を縦断する溝は、排水路や道として使われたものを含むであろう。

SX－003（第121・122図、図版６・７・52・53・79）

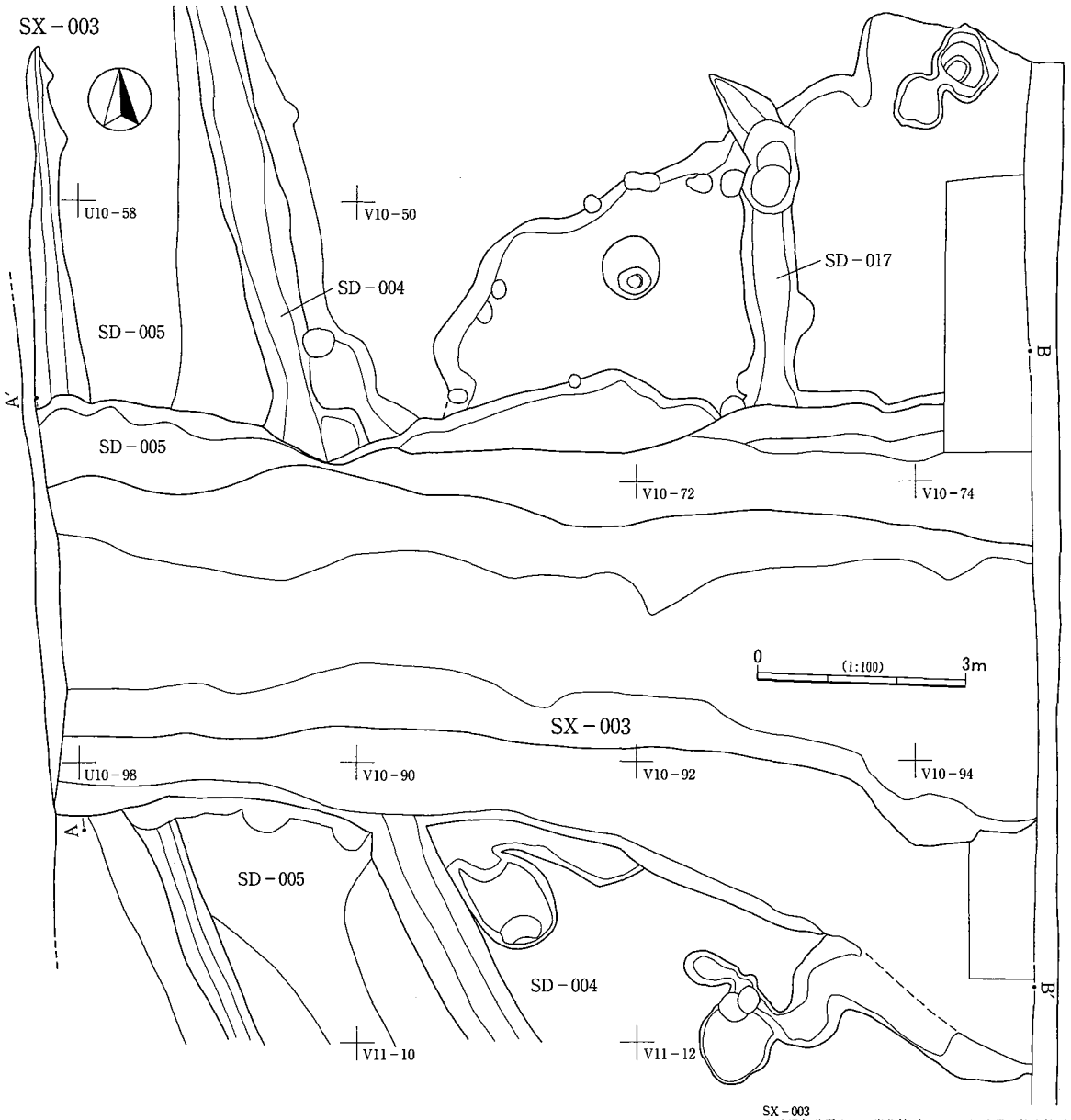
本調査区の中央部を東西に横断する溝で、U10－67～V11－14に位置する。検出面の幅が7.6mにおよぶ大溝で、階段状に上方が広がっていることから何度か掘り直される度に拡張されたものと思われる。東端は1.63mで底面に達し、上端で7.1mの幅は底面で3.6mに減じている。西端は砂層の壁が崩落するため底面まで掘りきれていないが、1.7m掘り下げたところで幅は5.9mから2.1mに減じている。堆積土が薄く幾重にも重なり、炭化物を多量に含む土とシルト質の粘性の強い土が交互に堆積する状況は、使用期間が長いこと示しているといえよう。覆土からは縄文中期～中世の遺物が出土している。最も新しい遺物は渥美の甕片４点である。小片のため図示していないが鎌倉時代に本溝の使用年代を求めることができる。

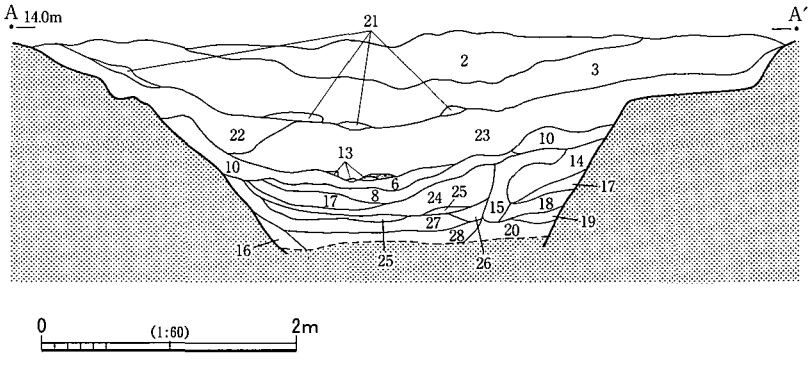
SD－001・002（第123図）

Ａ区の西端に位置する南北方向の溝２条である。２m間隔で平行する幅50cm前後、深さ14cm～15cmの溝で、道の側溝ではないかと思われる。SD－002の南端には東西方向の溝が重複しているがSD－002との関連は不明である。

SD－003（第124・131図、図版６）

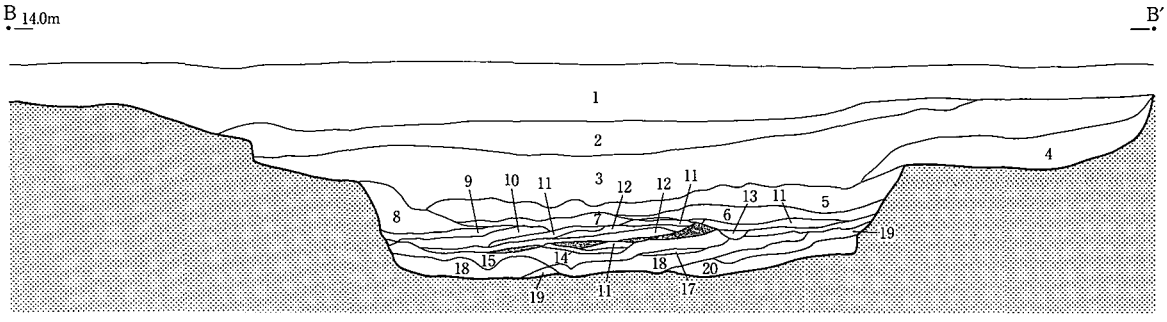
Ｃ区中央部に位置し、東から西に向かった後、北西で直角に曲がり南下する。東西方向の溝は両側に幅を広げて拡張している。南北方向の溝の南端には弥生土器の破片が出土した土坑SK－001が重複する。南側には掘立柱建物群があり、これらを囲む区画溝ではないかと考えられる。東西建物のSB－007・012と組み合う可能性があるが、関連を示す資料は得られなかった。



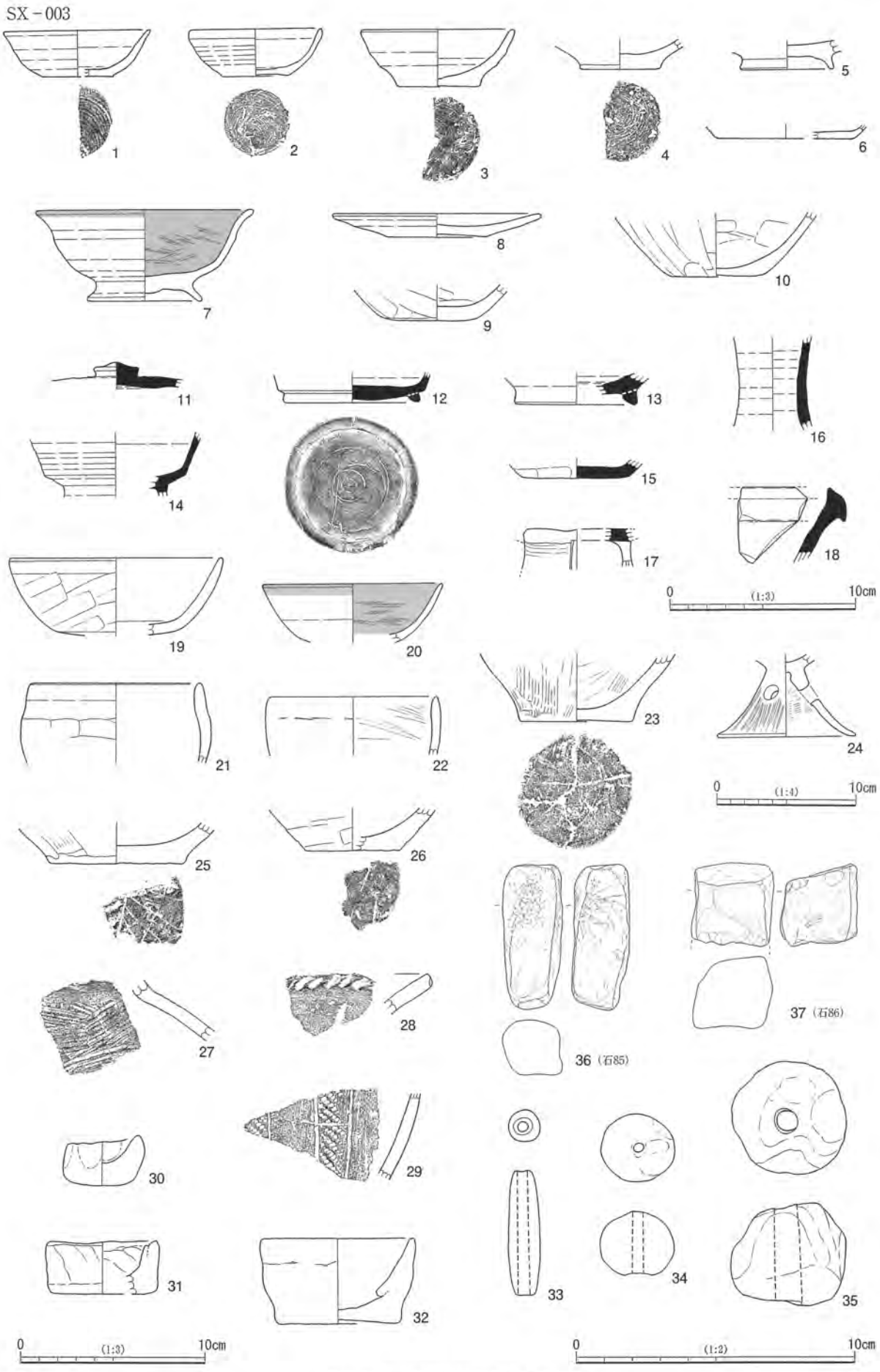


SX－003

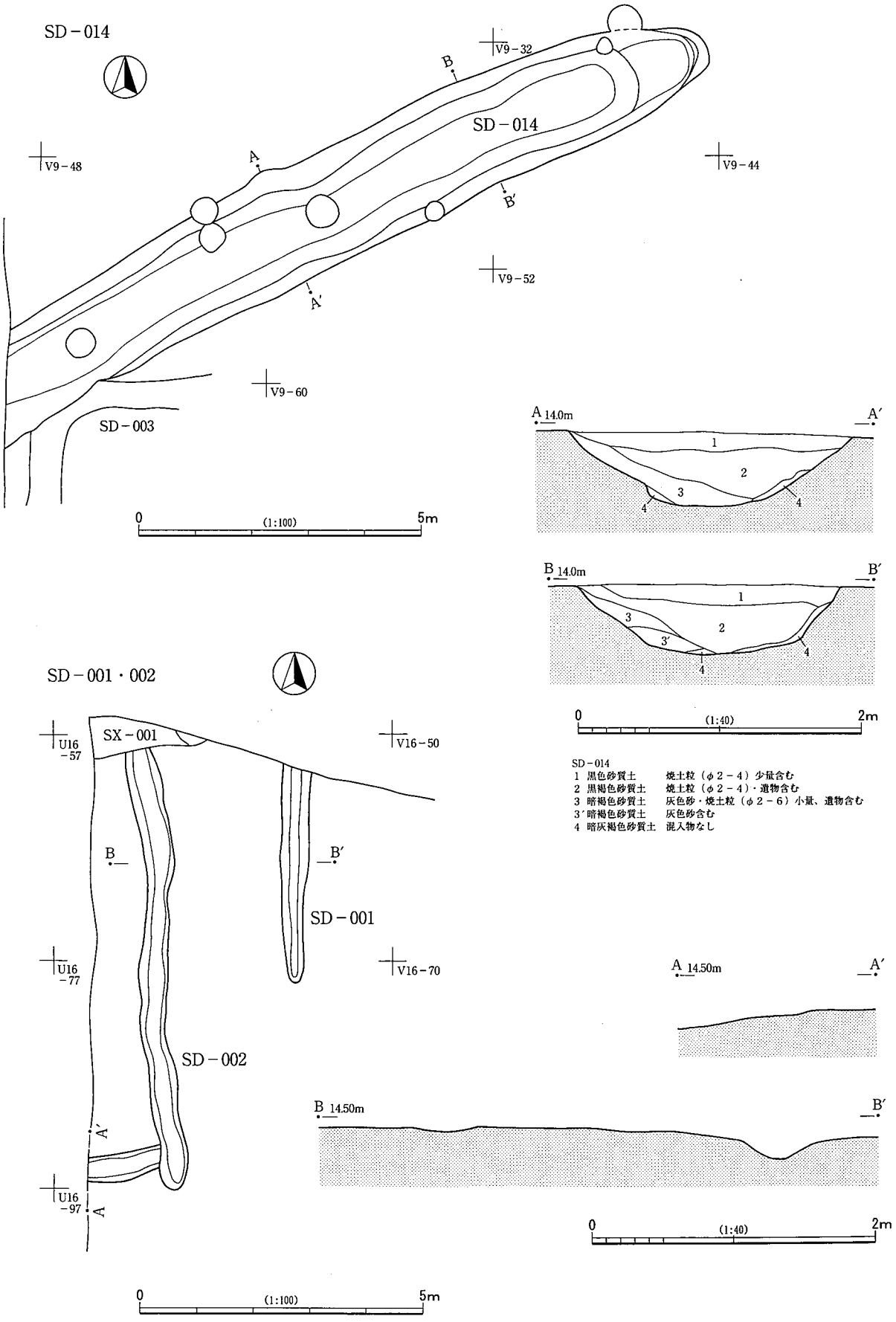
SX－003
1 暗褐色砂質土　炭化粒（φ2－3）少量、焼土粒（φ1－2）微量、小石（φ5－30）中程度、発砲スコリア（φ10－30）少量含む
2 暗褐色粘質土　炭化粒（φ2－3）少量、焼土粒（φ1－2）微量、発砲スコリア（φ10－30）少量、白色粘質砂粒（φ5－10）中程度含む
3 暗褐色粘質土　炭化粒（φ2－3）少量、焼土粒（φ1－2）微量、小石（φ5－30）を多量に含む
4 暗褐色粘質土　2層に類似するが小石が少ない
5 黒褐色粘質土　4層に類似するが小石を含まない
6 暗褐色粘質砂　炭化粒（φ1－2）多量に含む
7 暗灰色粘質土　炭化粒（φ1－2）中程度含む
8 暗灰色粘質砂　炭化粒（φ1－2）微量含む
9 灰褐色粘質砂　炭化粒（φ1－2）少量含む
10 黒灰色粘質砂　粘性強く、炭化粒（φ1－4）を含む
11 黄灰色粗砂　混入物は認められない
12 灰黄色粘質砂　炭化粒（φ1－4）を中程度、焼土粒（φ1－2）を少量含む
13 灰黄色粘質シルト　混入物は認められない
14 暗灰褐色粘質砂　炭化粒（φ1－2）少量含む
15 灰褐色粘質砂　炭化粒（φ1－2）多量、焼土粒（φ1－2）を中程度含む
16 灰黄色粘質砂　炭化粒（φ1－2）僅かに含む
17 灰褐色粘質粗砂　粘性強く、炭化粒（φ1－2）を少量含む
18 暗灰色粘質粗砂　炭化粒（φ1－2）を中程度含む
19 暗灰色粘質砂　遺物以外の混入物なし
20 暗灰色粘質粗砂　シルト分多い
21 黄灰色粘質砂
22 黒褐色粘質土　炭化粒（φ1－2）中程度、焼土粒（φ1－2）微量、白色粘質砂粒（φ5－10）少量含む
23 黒褐色粘質土　22層も類似するが、やや暗い
24 暗灰色粘質土　暗灰色粗砂ブロック（φ5－10）少量含む
25 暗灰色粘質土　暗灰色粗砂ブロック（φ10－20）多量に含む
26 暗灰色粘質土
27 黒灰色粘質シルト　粘性かなり強い
28 黒灰色粘質シルト　粘性かなり強く、27層より黒味強い



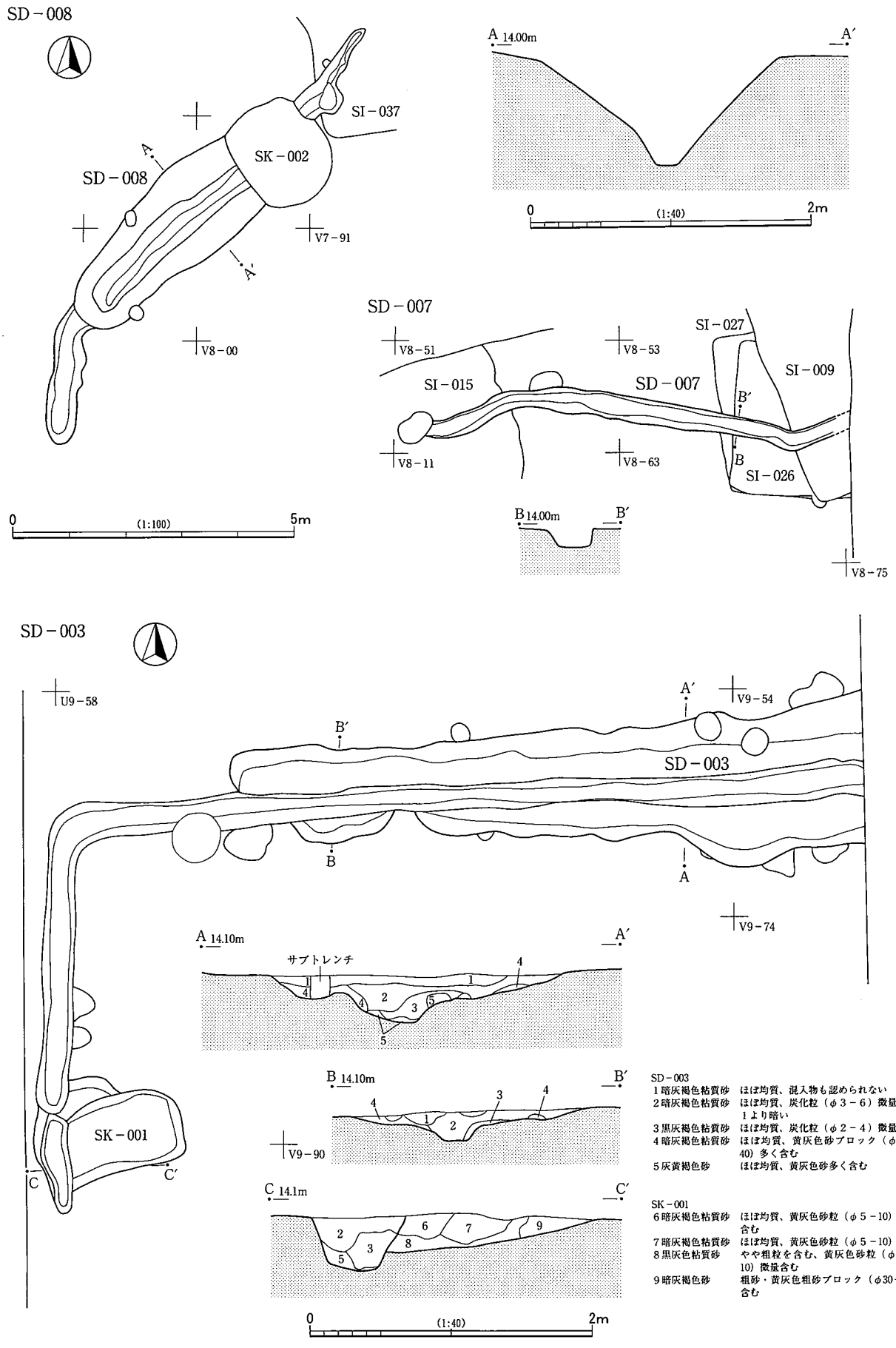
第121図　SX－003



第122図　SX－003出土遺物



第123図　SD－001・002・014



第124図　SD－003・007・008

SD－004・005・006（第125・126図、図版６・７・18）

SD－004・005は、Ｃ区の南西からSX－003を縦断して南東に向かい、東に曲がる２条の溝である。2.5ｍ～3.2ｍの間隔を保って並走しているため、道の側溝と考えられる。２条とも肩部が崩れて上端が広がり、中央部を掘り直した跡がある。SD－006はSD－005から分岐して南東に向かう溝である。SD－005からは常滑の甕底部（１）が出土している。

SD－007（第124・131図）

Ｃ区北部に位置し、東から西に向かう溝でやや蛇行している。断面は箱形で、上端幅45㎝、底面幅30㎝、深さ17.8㎝の小規模な溝である。覆土からロクロ土師器坏（11）が出土している。

SD－008（第124・131図、図版18）

Ｃ区の北西隅に位置し、南西から北東に向かう溝である。北東に弥生中期の土坑SK－002が重複している。両端に細い溝が伸びているが、一連のものかどうかわからない。断面は大きく開いたV字形で、計測値は上端幅1.7ｍ、底面幅0.5ｍ、深さ87.9㎝である。覆土から弥生時代後期の鉢底部（13）が出土しているが、本溝の年代を示すものではない。

SD－010・011・012・013・028・030（第127・131図、図版19・53）

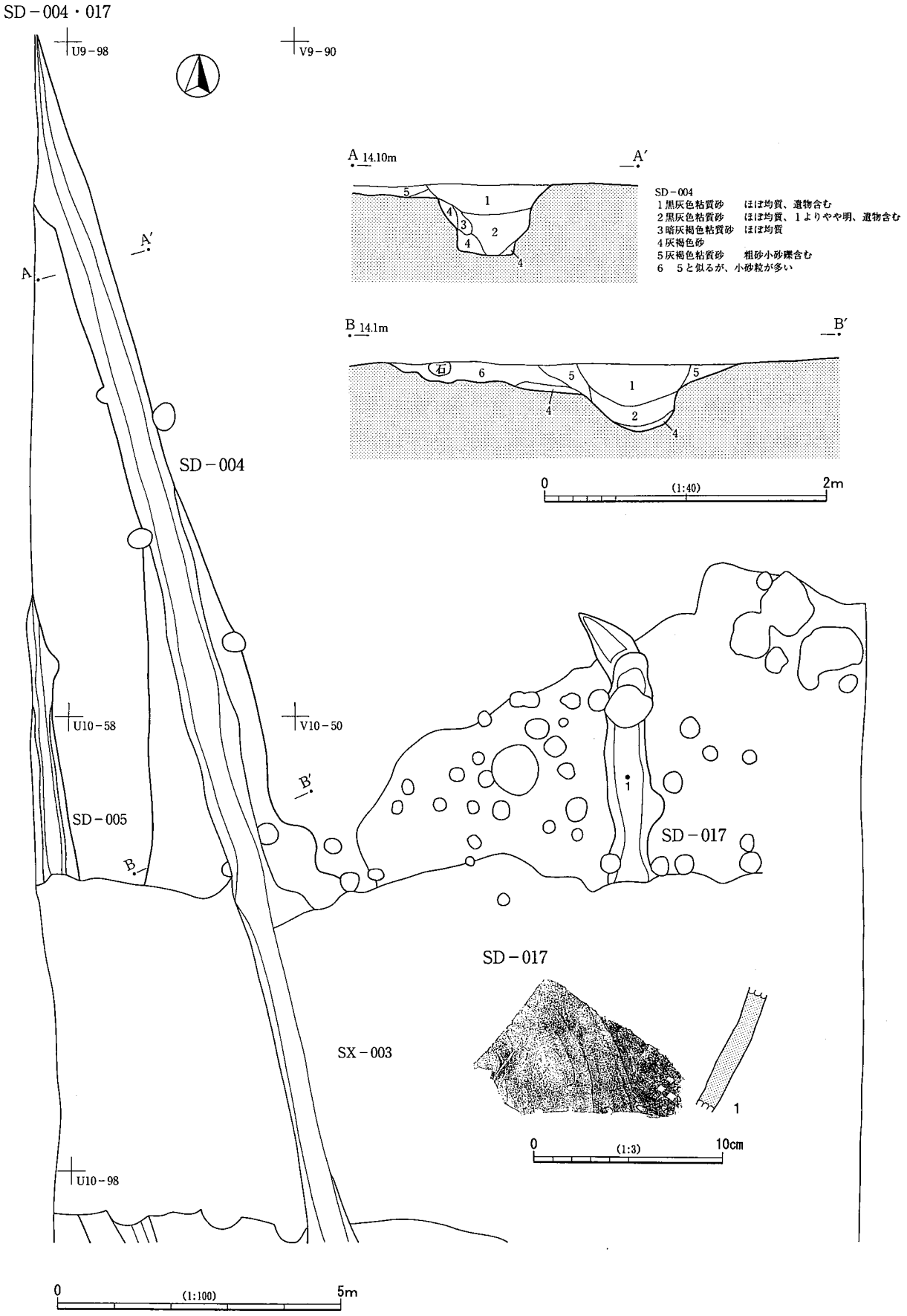
Ｄ区で検出された東西方向の６条の溝である。前掲のように、SD－011・028、SD－010・012がそれぞれ約10ｍの間隔で並走しており、何らかの施設を区画していた可能性がある。SD－011・028は深く、SD－010・012は浅い溝の組み合わせである。SD－011の土層には酸化鉄の沈着層が２枚確認されることから、帯水していた時期があると思われる。後者は道跡の可能性が高い。SD－013は、SD－028の2.5ｍ北側に並走する溝で、内部にピット列が掘り込まれている。柵などの施設であろう。SD－030はSD－012の１ｍ南に並走する浅い溝で、西端は土坑状の落ち込みになっている。SD－010・011には埋没と掘削を繰り返して次第に幅を広げた跡が残る。SD－011からは常滑６ｂ型式の甕口縁（１）と胴部破片（２）が出土し、鎌倉時代には使用されていたことがわかる。SD－012では須恵器大型広口壺の頸部（10）と土師器甕口縁部（15）・甕底部２点（17・18）が出土した。また、SD－028ではカワラケ坏（７）と須恵器壺（８）・甕（９）の胴部破片が出土している。

SD－014（第123・131図、図版６・19）

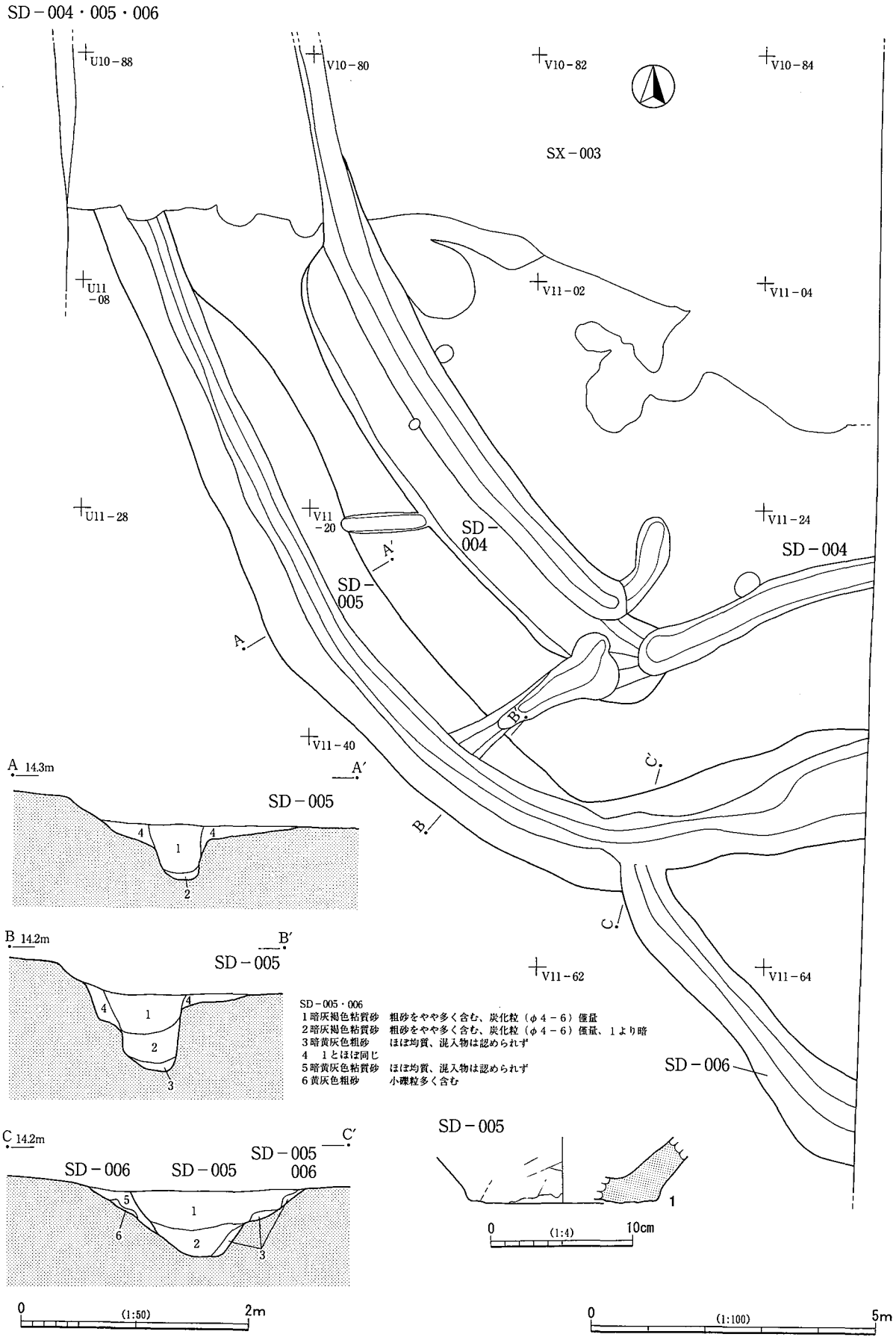
Ｃ区中央部の西端から北東に向かう溝である。幅は1.7ｍ～2.1ｍ、深さは52.9㎝である。方形の区画溝SD－004を切っている。覆土から古墳時代後期の須恵器壺口縁部（５）と土師器甕底部（19）が出土しているが、本溝の年代を示すものではない。検出状況によって中世以降の溝と考えられる。

SD－017（第125図）

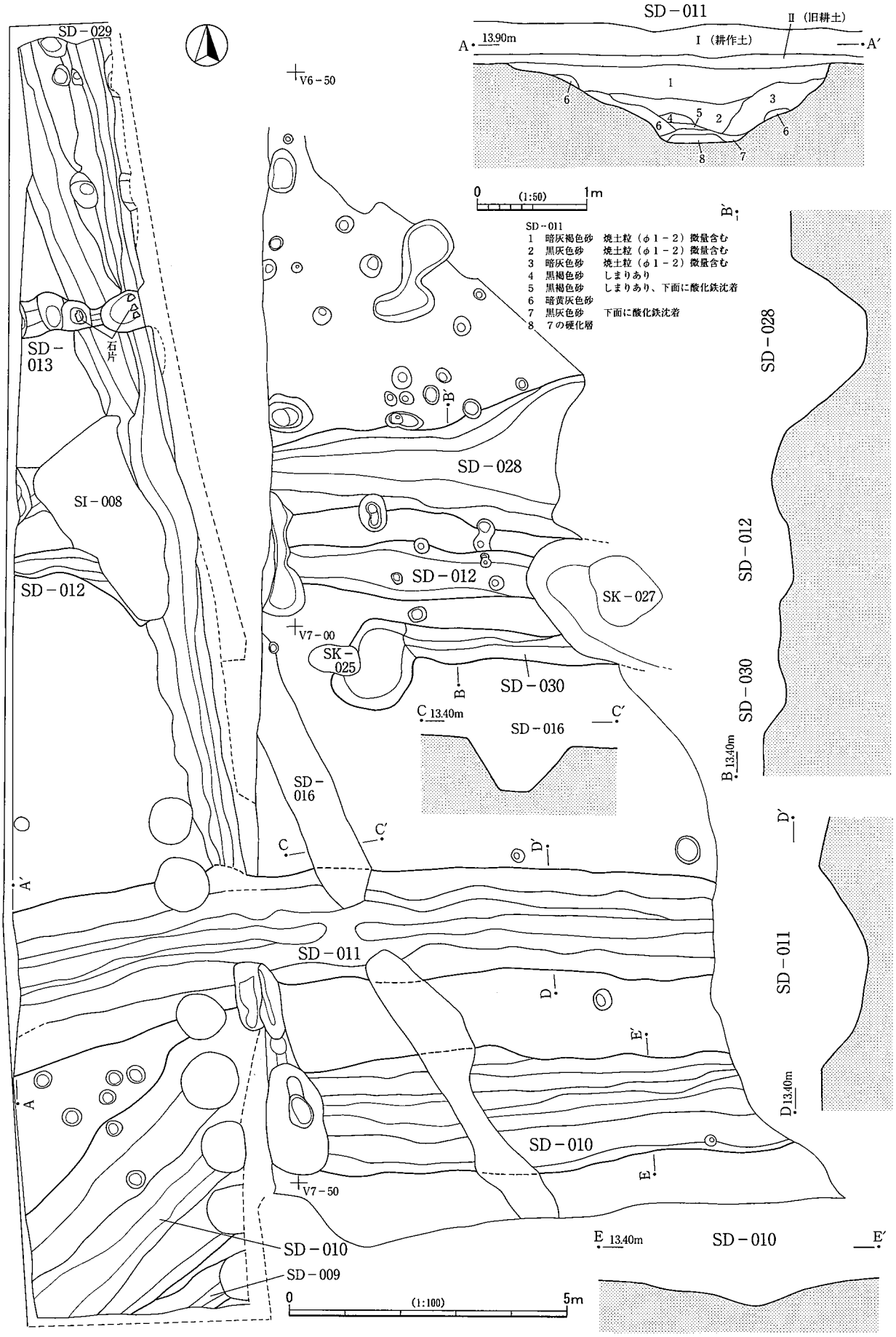
SD－004・005の東６ｍにほぼ並行する長さ５ｍの溝である。南側はSX－003と合流して吸収され、北端は立ち上がって途切れている。周囲は浅い落ち込みになっており、多数のピットが分布するが、本溝との関係は不明である。溝内で常滑の甕破片（１）が出土した。



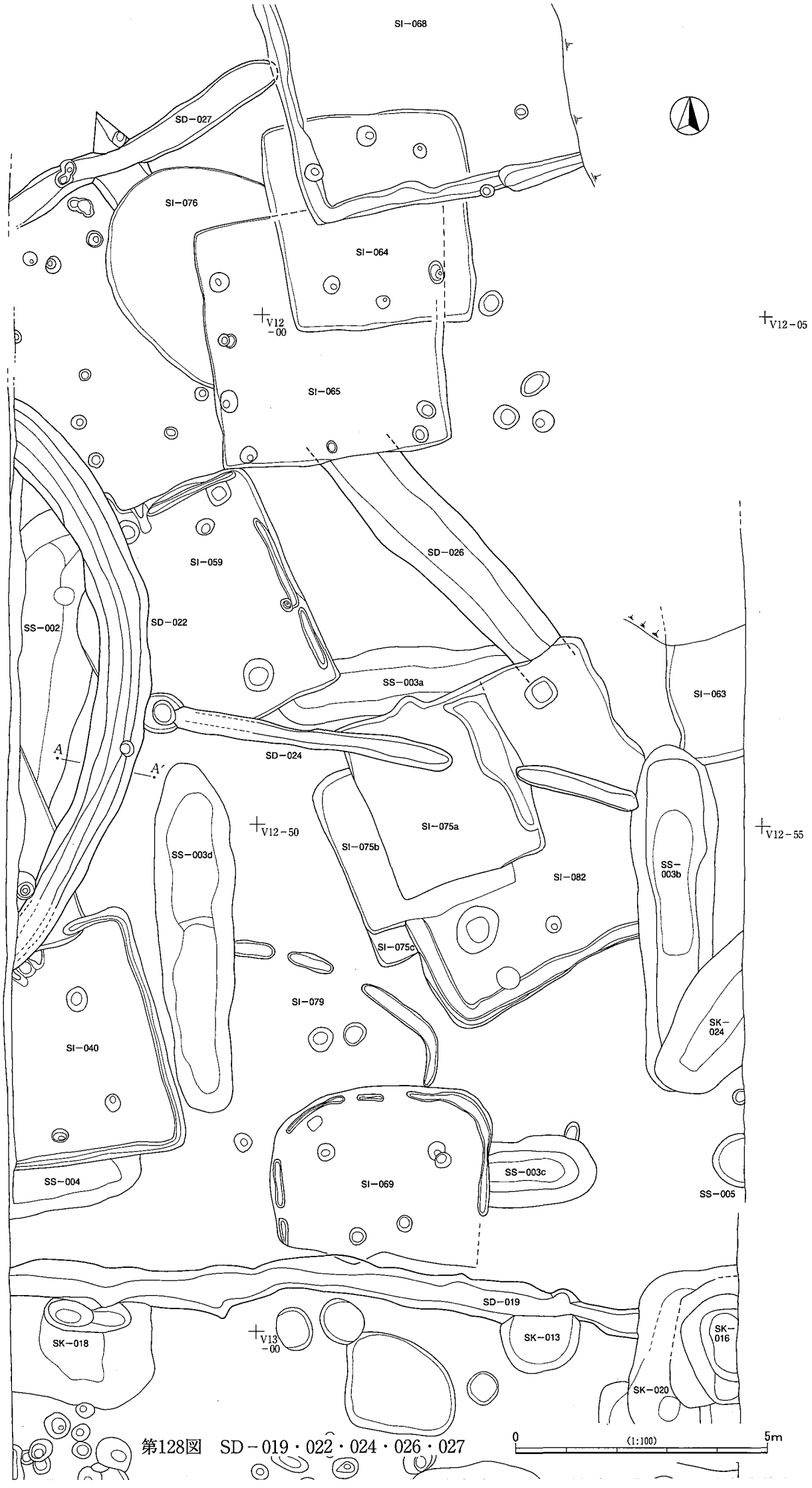
第125図　SD－004（1）・017



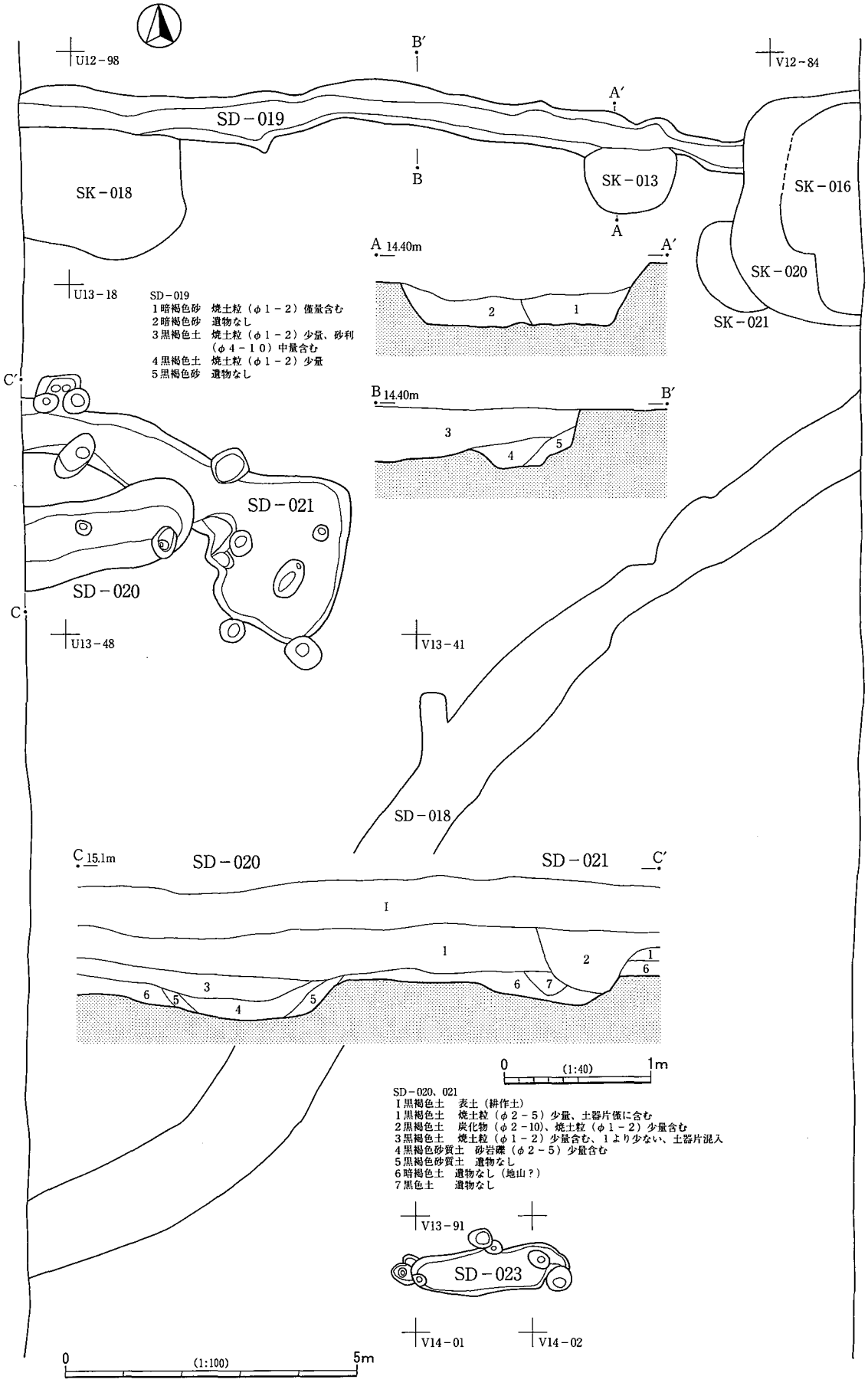
第126図　SD－004（2）・005・006



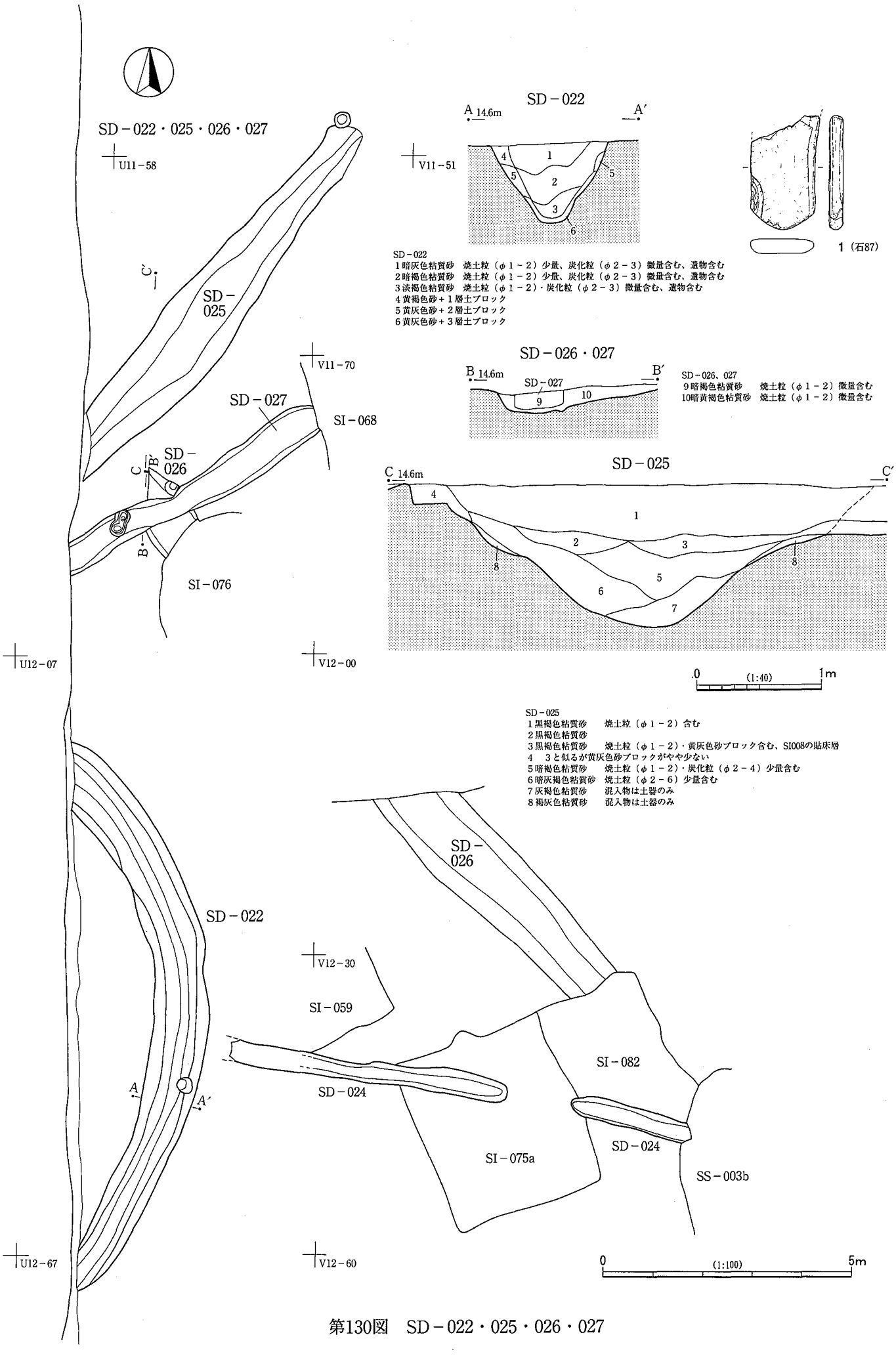
第127図　SD－010・011・012・013・028・030



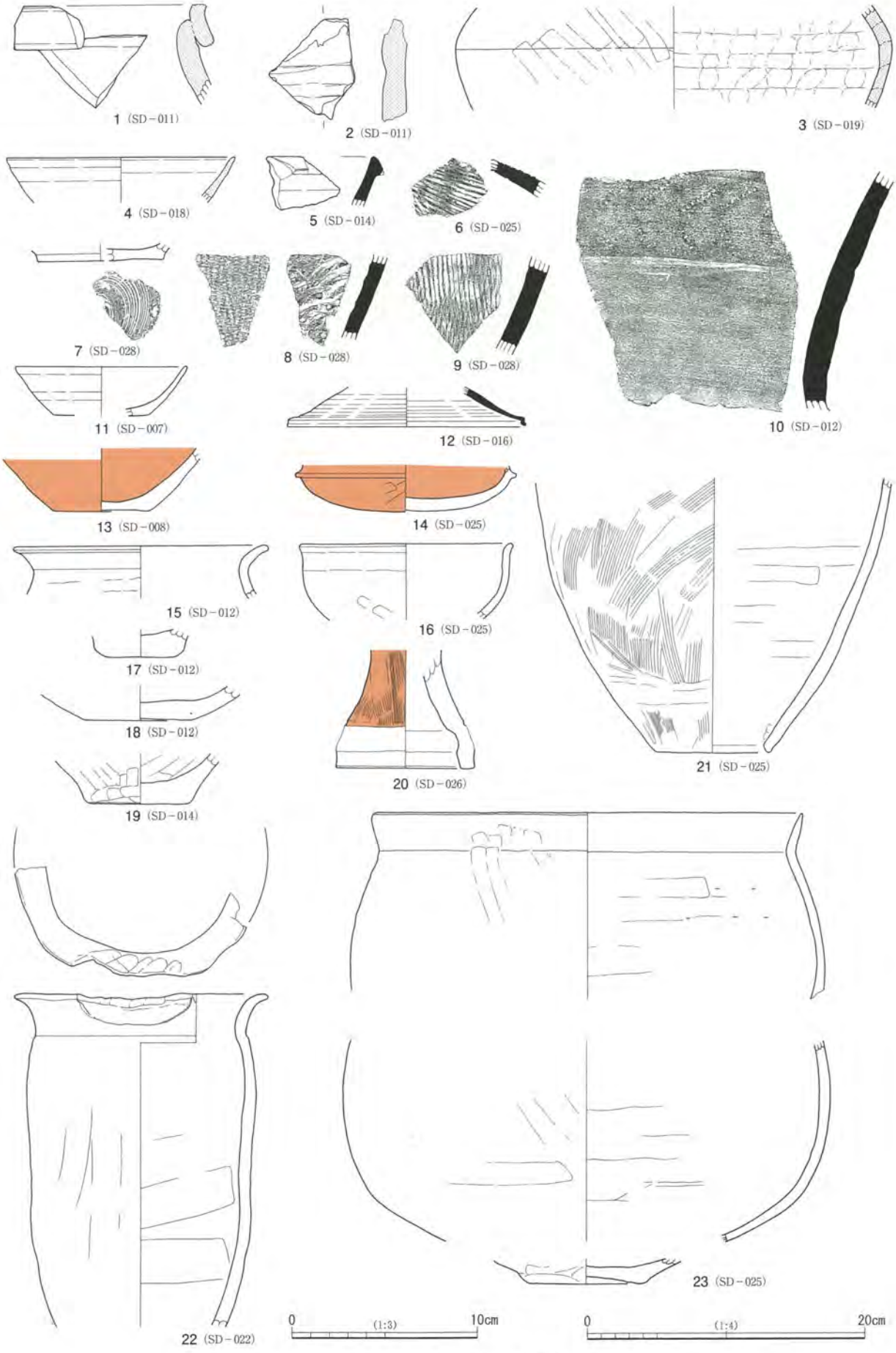
第128図　SD－019・022・024・026・027



第129図　SD－019・020・021・023



第130図　SD－022・025・026・027



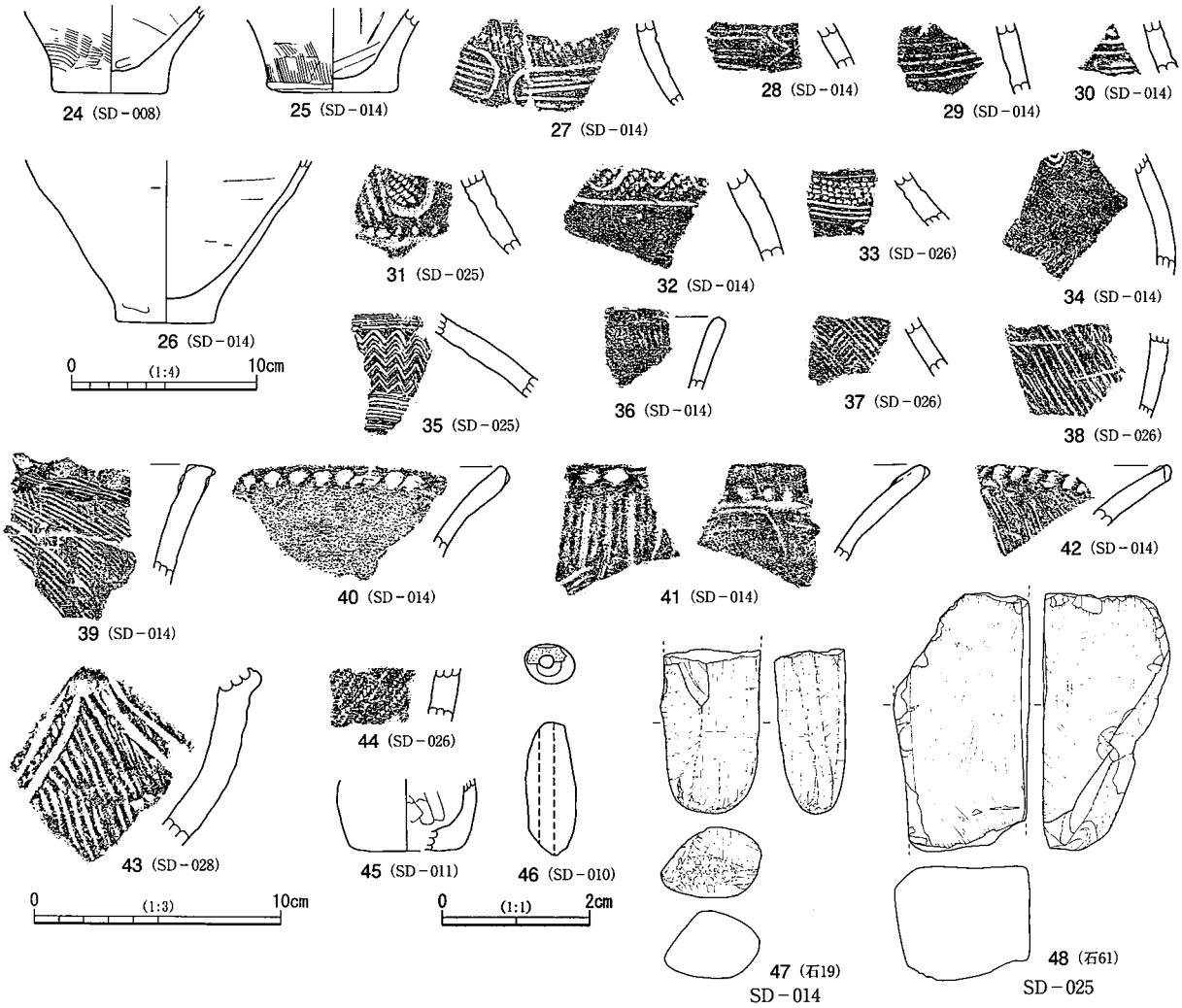
第131図　溝出土遺物（1）

SD－019・022・024・025・026・027（第128～131図、図版19）

Ｂ区で検出された６条の溝である。弥生時代中期の方形周溝墓・古墳時代後期の住居・土坑群が複雑に絡み合う地区を縫うように掘削された溝群である。SD－019・024は約10mの間隔で東西に並走し、SD－024には1.3mの開口部がある。何らかの施設の区画であろうか。SD－019では常滑広口壺の胴部破片（３）が出土している。

SD－022は環状の溝で、復元すると内側で径11.2mの規模をもつことから、当初は小円墳ではないかと考えた。しかし、古墳時代後期後半から終末期の住居群を切って掘削されているためより新しい時期の溝と判断するに至った。溝内から出土した口縁部の歪んだ土師器長胴甕（22）は、重複する住居SI－059に類似品が出土しており、SI－059に伴う遺物であろう。

SD－026・027は調査区内を斜行する溝で、SD－027が026を切っている。SD－026では古墳時代終末期の土師器高坏脚部（20）が出土している。SD－027の北側にはSD－025がほぼ並走して北西方向に向かう。SD－025からは須恵器甕肩部破片（６）、古墳時代後期の土師器坏（14）・甑（21）・大型甕（23）、古代の土師器坏または椀（16）が出土している。



第132図　溝出土遺物（２）

SD－020・021・023（第129図）

Ｂ区の中央部に位置し、土坑群とピット群の間に掘削された溝状遺構である。SD－020は東西方向の溝で西側は調査区外に伸びているが、東端はSD－021を掘り込んで立ち上がっている。SD－021は東側が長方形に広がった浅い溝状遺構で、12基の小ピットが絡んでいるが、一連の遺構かどうか分からない。SD－023は長さ2.7m、幅80cmの土坑状の遺構で、東西に主軸を置く。７基の小ピットが絡んでいるが性格は不明である。いずれも遺物は出土していない。

その他の溝出土遺物（第132図、図版53・75・76）

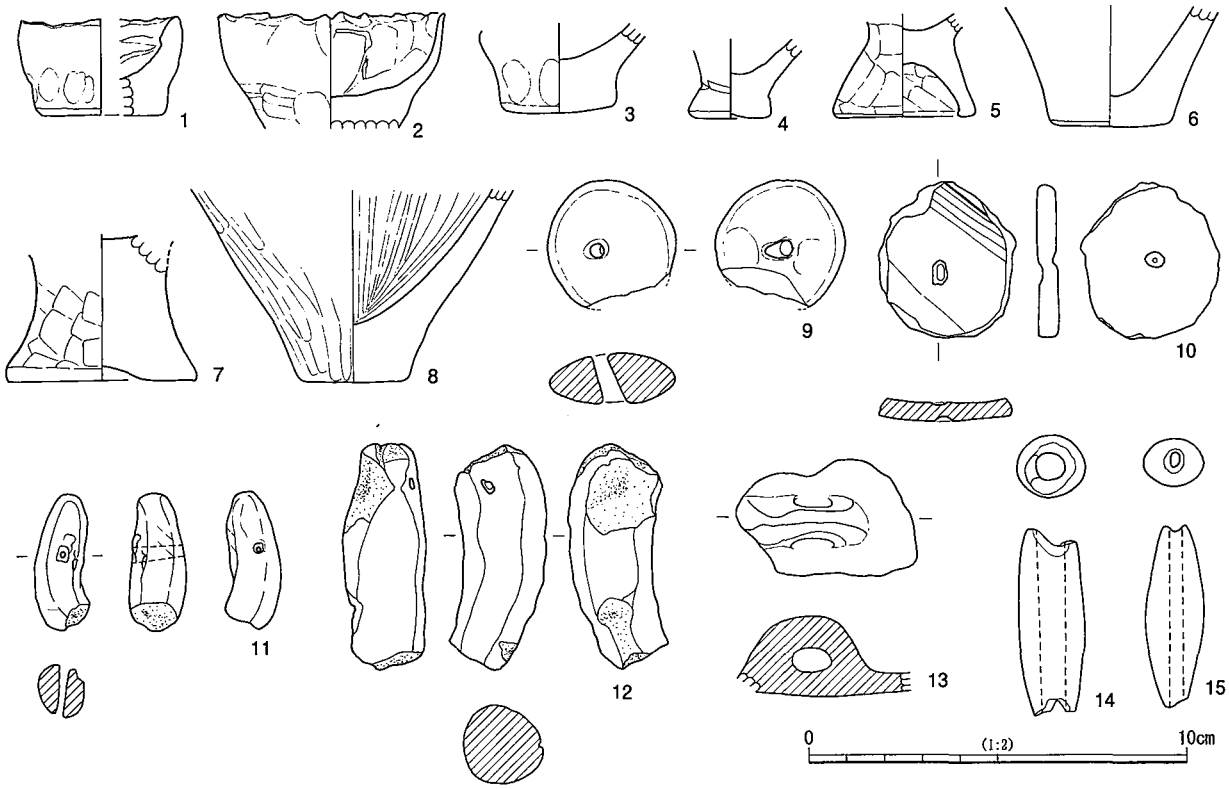
以上のほか、溝からは縄文時代中期の深鉢口縁部（43）、弥生時代中期後葉の壺（24～34・36・37）・甕（38～42）、古墳時代出現期の壺（35）、手づくね土器（45）、管状土錘（46）、ハンレイ岩の敲石（47）、凝灰岩の砥石（48）が出土している。

２　土製品・玉類・金属製品

ここでは遺構に伴わない土製品・玉類・金属製品を一括して報告する。計測値・材質等の詳細は表８・12・13に記載した。

土製品（第133図、図版69）

１～８は手づくねのミニチュア土器で、１・３は小型鉢形、８は鉢形、２・５・７は高坏形（台付鉢）、４・６は甕形である。９は紡錘車形であるが、孔が斜めに開けられており、実用に供したかどうか疑問である。10は円板形で両面から中央に孔を開けようとした痕がある。11は勾玉形、12はその未製品である。



第133図　グリッド等出土土製品

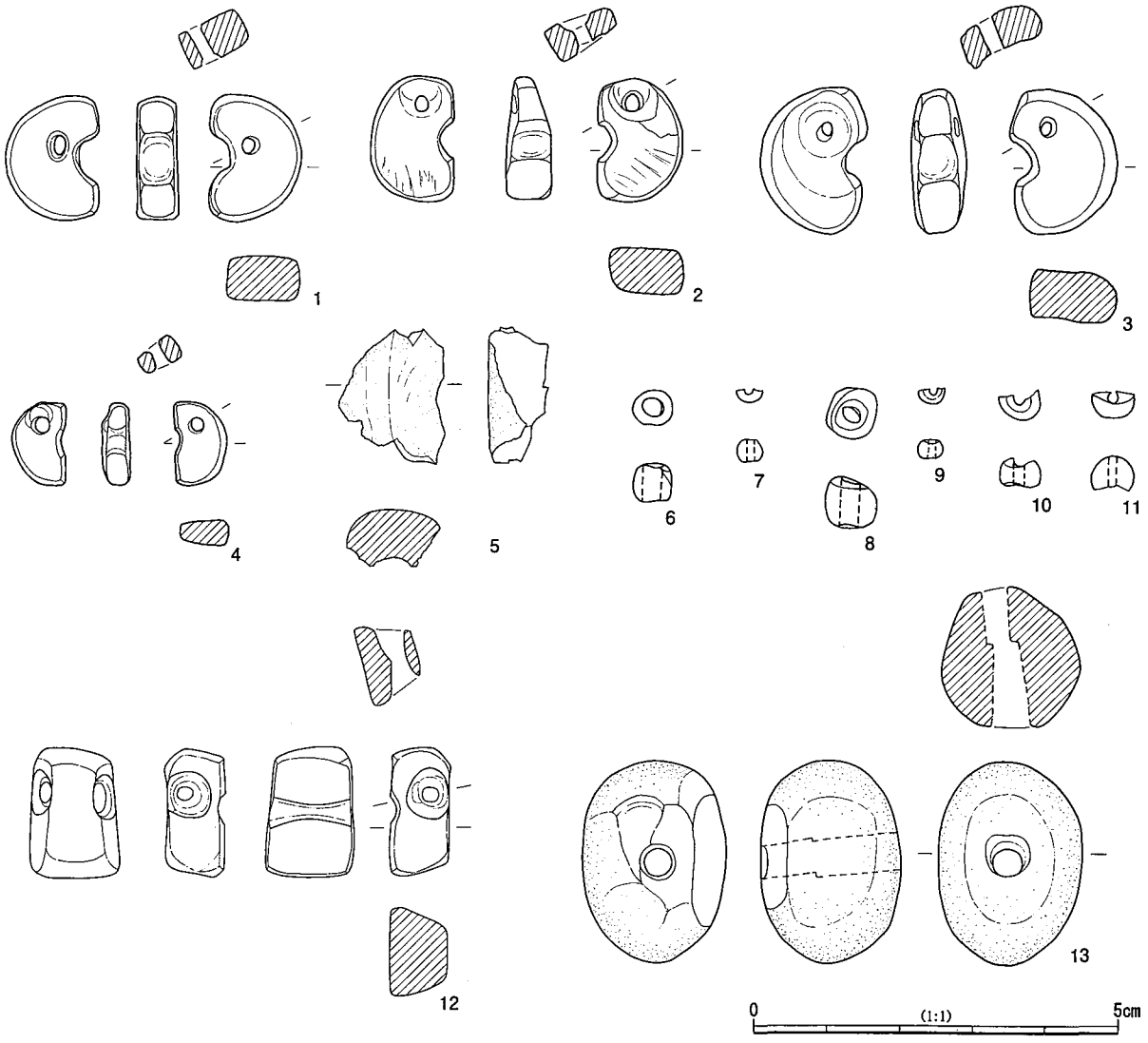
13は鏡形の紐部分、14・15は管状土錘である。手づくねのミニチュア土器は弥生後期～古墳前期、９～13の土製模造品は古墳時代後期の祭祀に用いられるものである。

玉類（第134図、巻頭図版２）

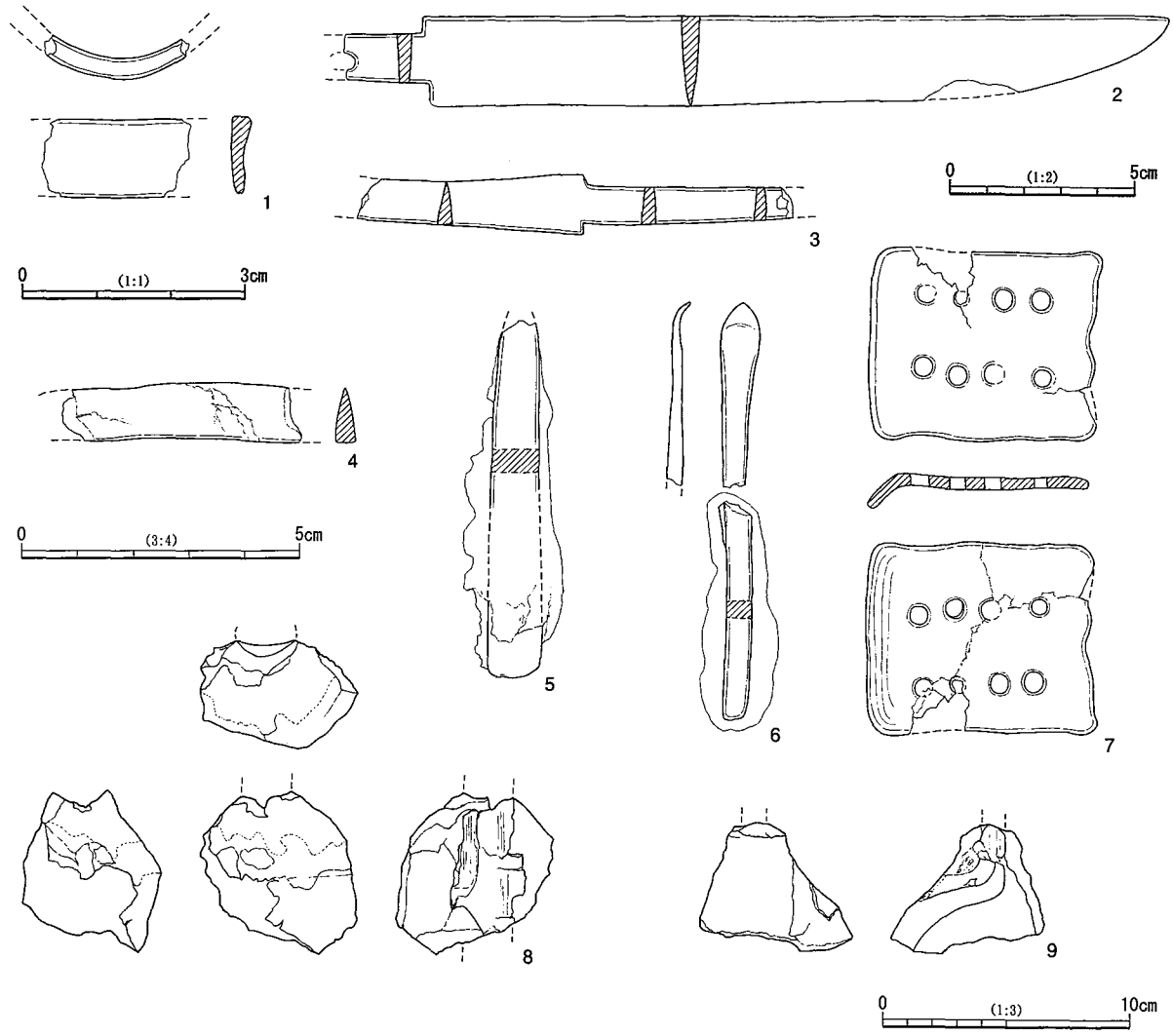
１～４は蛇紋岩製の勾玉で、いずれも黒の斑入りである。５は碧玉製品で、両側から穿孔を試みた痕がある。大型管玉の未製品であろうか。５～11はガラス小玉である。大粒の６・８は藍色で、側面を押さえて整形した痕が見える。中粒の10・11はにぶ青緑、小粒の７は青、９は明るい青緑である。12は蛇紋岩製、13は滑石製の垂飾で穿孔は両側から行われている。これらはすべてＢ区から出土しており、特に１号墳の墳丘下で出土したものが多い。弥生時代中期～後期の集落と方形周溝墓に伴うものと考えられる。

金属製品（第135図、図版80）

１は板状の銅釧破片で、１号墳墳丘下から出土している。弥生時代後期の住居に伴っていたものであろう。２は鉄製の小刀、３・４は刀子である。２・３はSD－003の内側で検出された掘立柱建物群の周辺で



第134図　グリッド等出土玉類



第135図　グリッド等出土金属製品

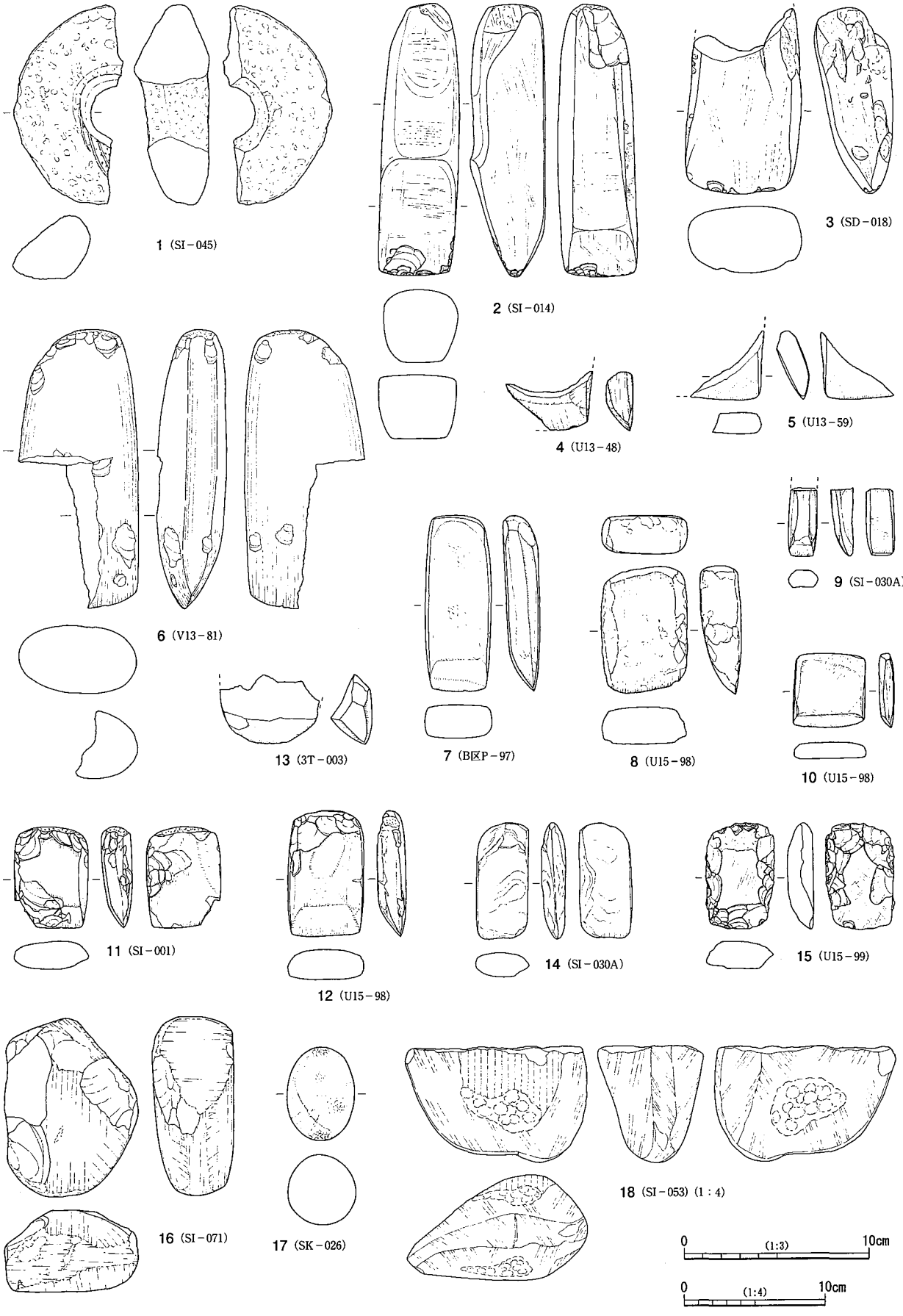
出土しており、これらの遺構に関連する人々の持ち物であろう。５は鉄製のタガネ状工具、６はヤリガンナである。７は８孔の綴じ孔をもつ方形の鉄製金具で、１端が折れ曲がっている。用途は特定できない。８はフイゴの羽口、９は溶着した土器でトリベに用いられたものであろう。５～８もSD－003南側の建物群周辺～中世の大溝SX－003の間で出土しており、鍛冶工房が存在したことを示す遺物である。

３　石器・石製品

萱野遺跡では多量の石器・石製品が出土した。計測した石製品は368点に及ぶ。このうち325点は砥石である。また、軽石のほか、流紋岩を用いた製品が22点あり、その出自が注目された。県立中央博物館地学研究科の高橋直樹氏に鑑定を依頼したところ、伊豆新島の流紋岩との教示を得た。他の石材の一部についても高橋氏に鑑定をお願いし、それを基に表15を作成した。

石製品・石斧・磨石類（第136図、図版73・75）

１～15は弥生時代の石器・石製品である。既に各項で報告したものも含んでいるが、より図を大きくして掲載している。



第136図　石製品・石斧・磨石類

SI－045で出土した環状石斧の石材は多孔質の玄武岩で、中央の孔は両側から穿孔され、内側に明瞭な稜がある。孔の周囲に突帯はなく、横から見ると低いソロバン玉状に見える。県内の出土例の多くは安山岩などの比較的固く緻密な石材で作られており、本例のように多孔質の石材を用いた例は見当たらない。ほぼ半分に割れており、伴出した土器は後期のものであった。

２～14は大陸系磨製石斧である。３・６・13は両刃の石斧で、３・６は太型蛤刃石斧に分類できる。片刃の石斧には、抉入柱状片刃石斧（２）・柱状片刃石斧（７）・扁平片刃石斧（４・５・８・10・11・12・14）・小型柱状片刃石斧（９）がある。15の打製石斧も扁平片刃石斧の再加工品と見られる。両刃の石斧はマサカリのような用途に、片刃の石斧は木材を加工する鉋や鑿のような道具として用いられたものである。住居から出土したのは２の抉入柱状片刃石斧と11の扁平片刃石斧である。11は弥生時代中期の住居の遺物である。２は古墳時代出現期の住居から出土したが、出土地点が特定できないため重複する弥生時代後期の住居に伴うと考えられる。

16～18は磨石類である。16は弥生時代中期の住居、18は弥生時代後期の住居、17は古墳時代後期の土坑から出土した。

敲石・石錘・石皿（第137図、図版75・76）

19～24は敲石として使用された石器である。このうち、22・24・26は磨石や砥石としても使っている。出土した住居は弥生時代中期（23・25）、弥生時代後期（22・24・29）、古墳時代後期（21・26）にわたる。

30は流紋岩製の石錘で、環濠から出土した。31・32は縄文時代の石皿を砥石や台石に再利用したものである。31は奈良・平安時代の住居、32は弥生時代中期の住居から出土した。32の石皿には海蝕孔のある凝灰岩質砂岩が用いられ、凹石・台石・砥石と様々な用途に使われている。

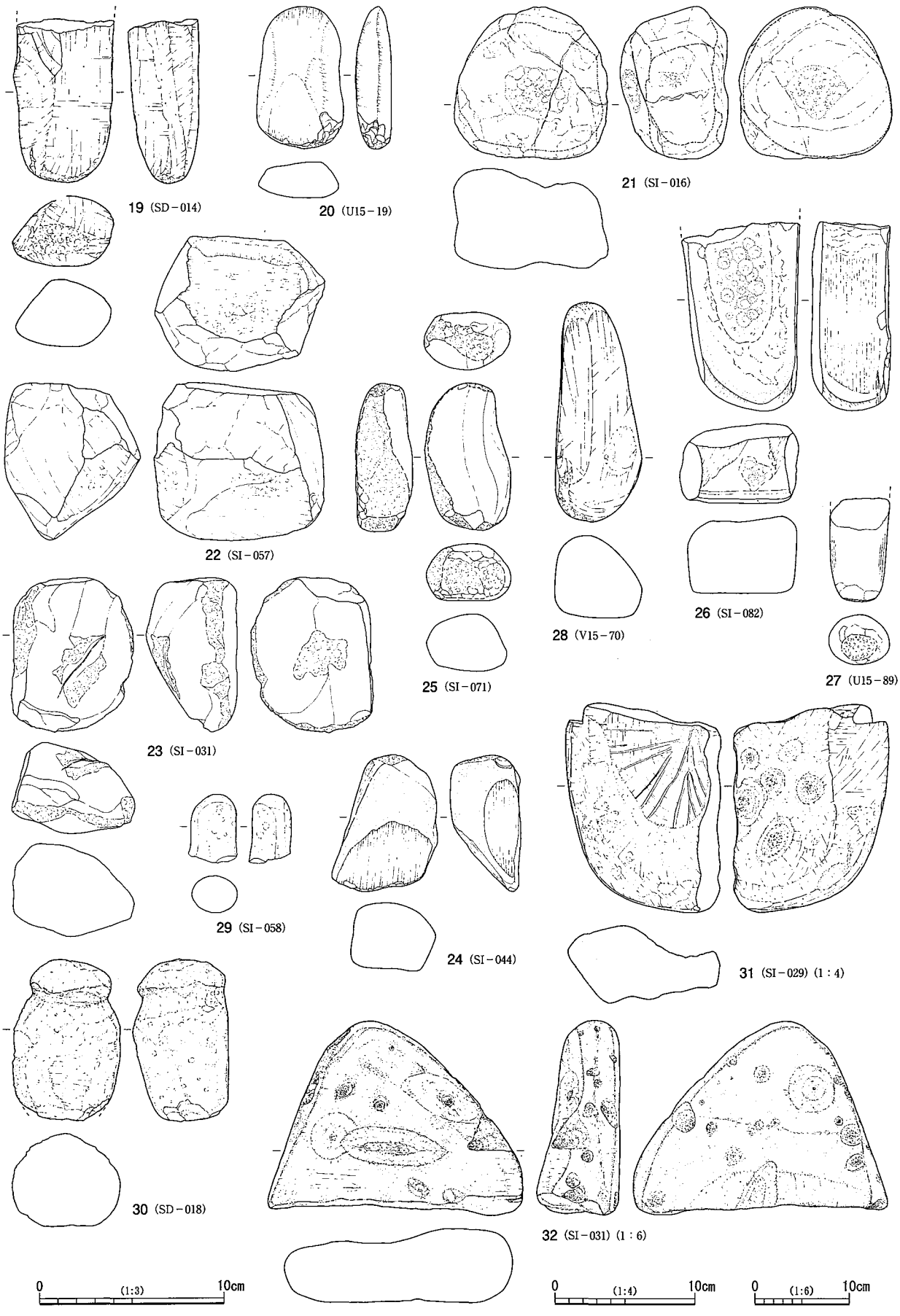
磨石・砥石類（第138図～141図、図版76・77・78・79）

33～48は砥石として用いられた軽石である。磨面が平坦なもの、窪むもの、曲面のものがあり、用途によって使い分けているようである。極めて柔らかい石材であるため、木製品の仕上げなどに用いられたのであろうか。住居出土例は弥生時代中期１点（33）と後期２点（34・35）である。環濠からは６点（38～40、41～43）出土している。

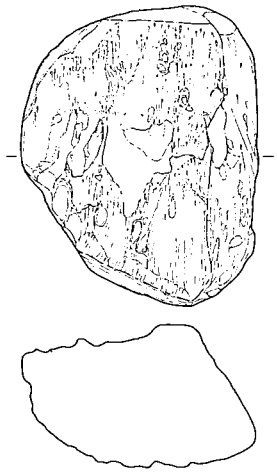
46～56は流紋岩の砥石類である。50や52には研いだ工具の幅が残っている。住居出土例は弥生時代中期２点（46・47）と後期３点（48～50）で、環濠出土例が１点（51）ある。57・58は安山岩の砥石で、環濠と１号墳周溝から出土した。59～63は凝灰岩の砥石である。59は弥生時代後期の住居、60は奈良・平安時代の住居から出土した。65・66は凝灰質砂岩の砥石・磨石で、１号墳周溝・環濠から出土した。

67～89・91は砂岩の砥石類である。弥生時代後期の住居から出土した75は、片側が刃部のように加工されており、穂摘み具として使用された可能性がある。奈良・平安時代の土坑から出土した82は、長さ24cm、重量2.48kgの大型品で台石としても使用されている。また、大溝SX－003から出土した85は敲石としても使用された。90・92はホルンフェルスの砥石類で、92は敲石としても使用された痕がある。

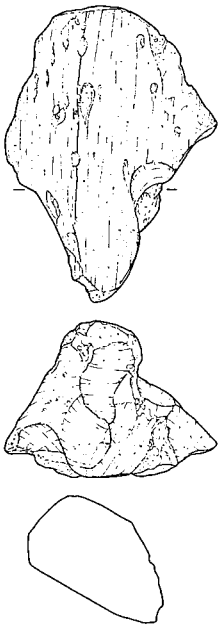
住居から出土した砥石類を挙げると、軽石と流紋岩は弥生時代の例に限られ、砂岩の砥石類15点のうち、10点は弥生時代（中期４点・後期６点）、２点は古墳時代出現期の住居から出土しており、いずれも古墳時代後期以降の例を圧倒しているのは興味深い。



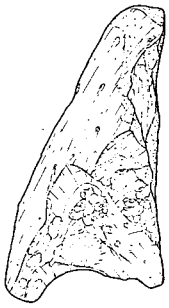
第137図　敲石・石錘・石皿

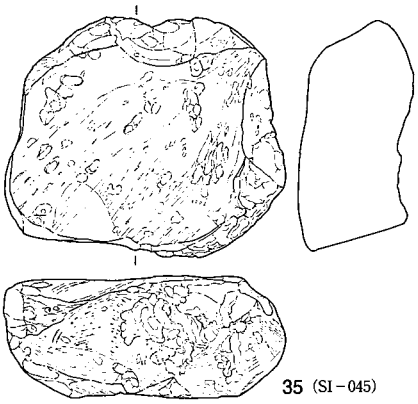


33 (SI－007)

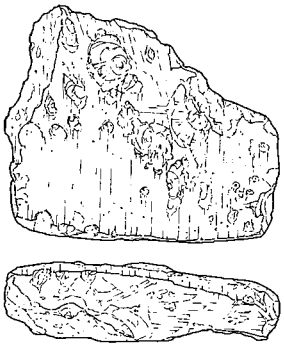


34 (SI－044)

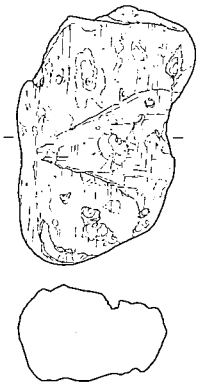




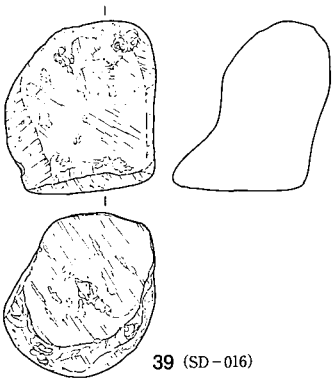
35 (SI－045)



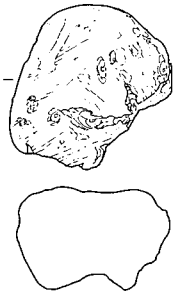
36 (SX－004)



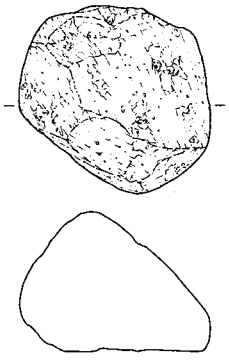
38 (SD－016)



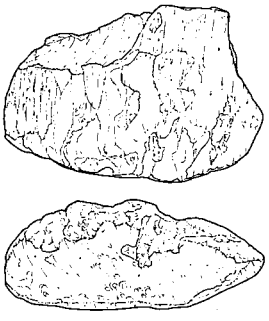
39 (SD－016)



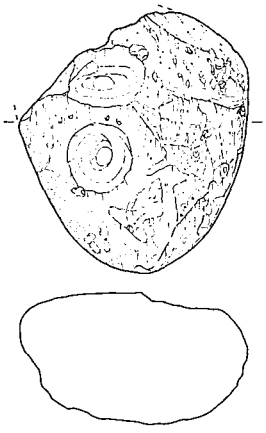
37 (SX－004)



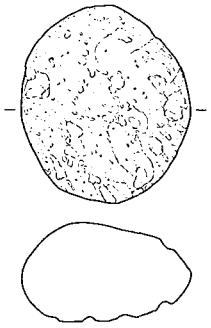
40 (SD－018)



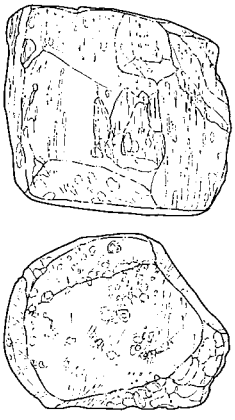
41 (SD－018)



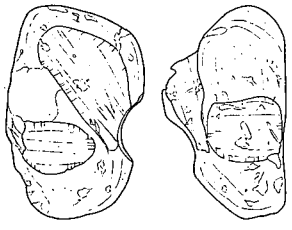
42 (SD－018)



43 (SD－018)



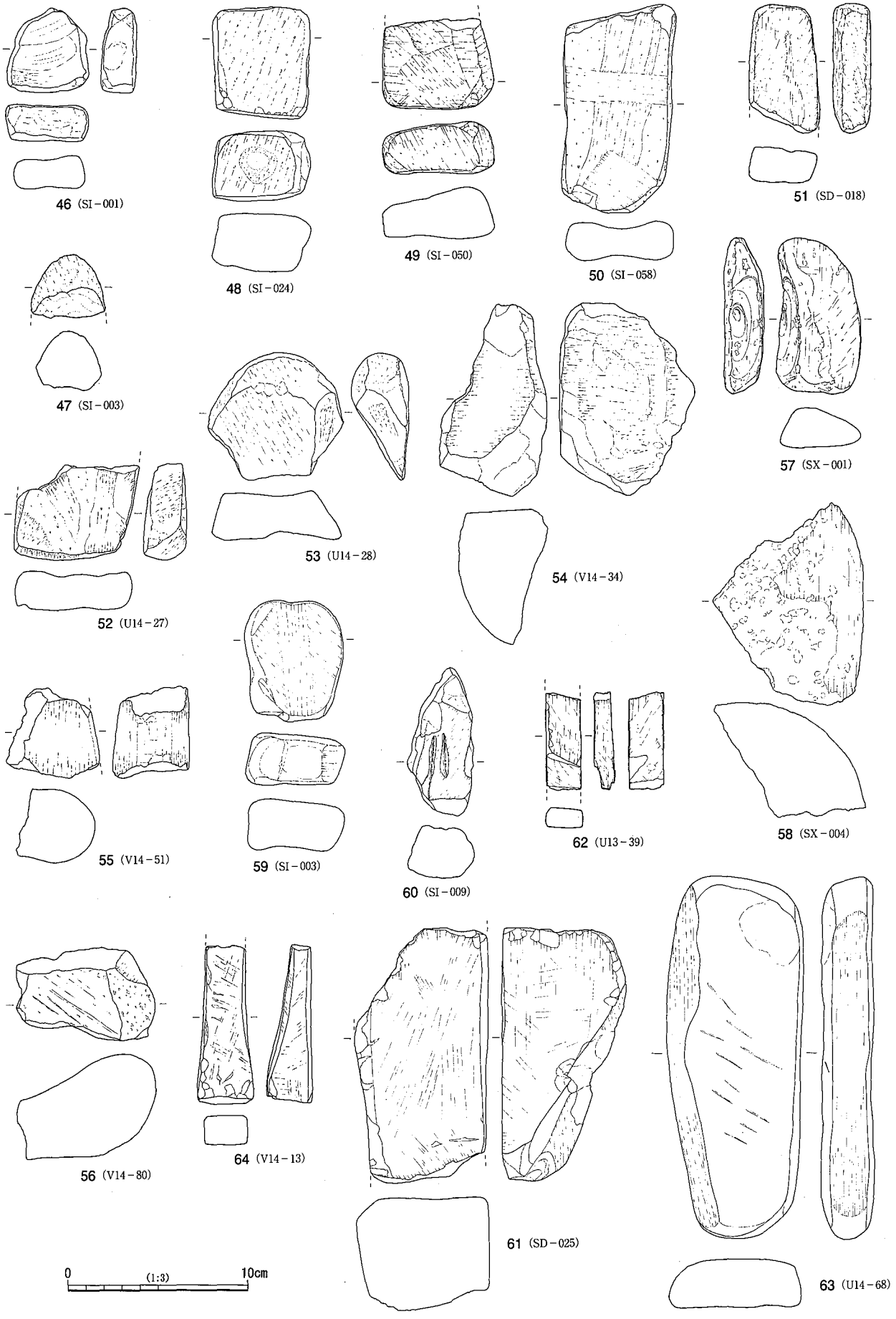
45 (V15－40・50)



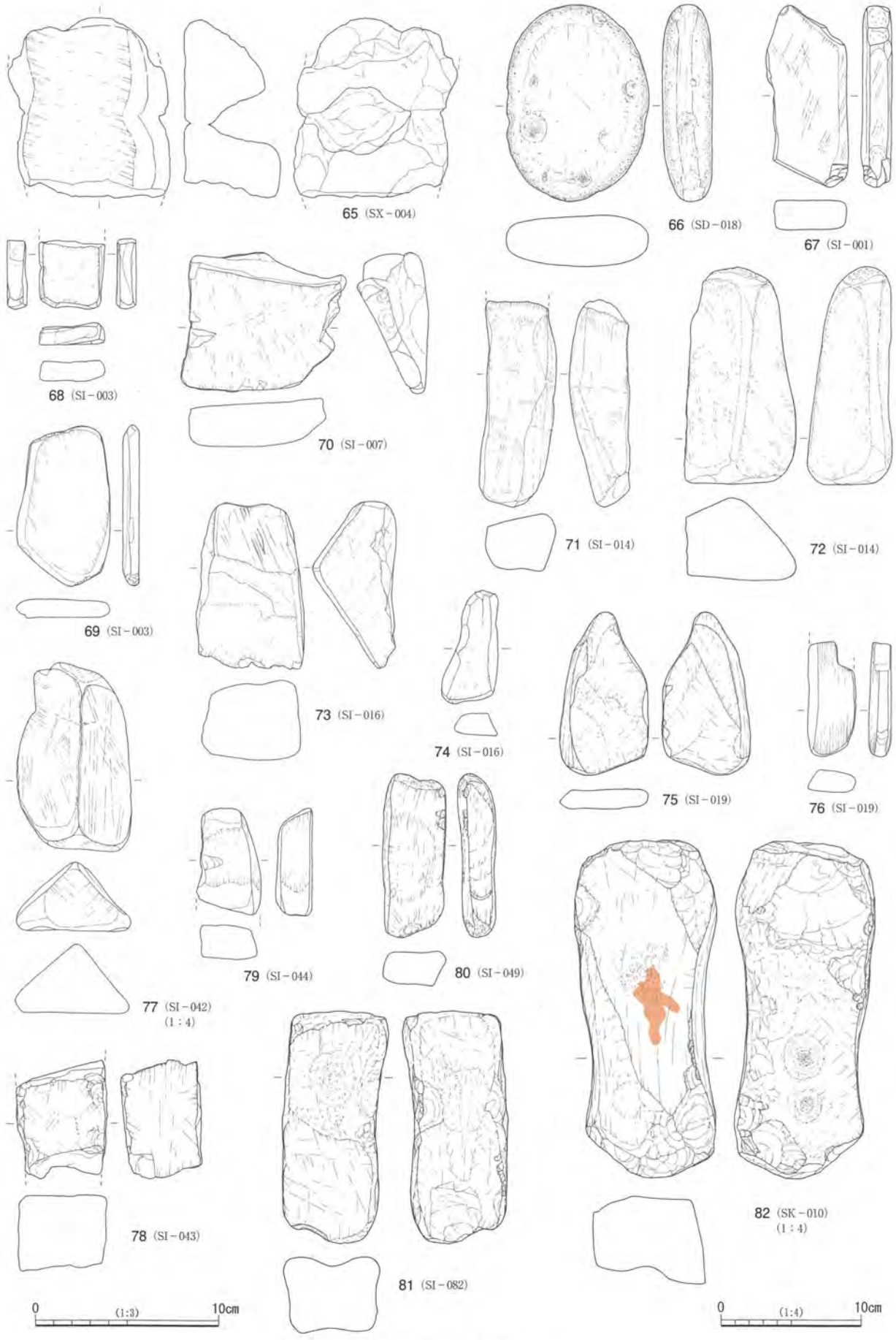
44 (U14－23)

0 (1:3) 10cm

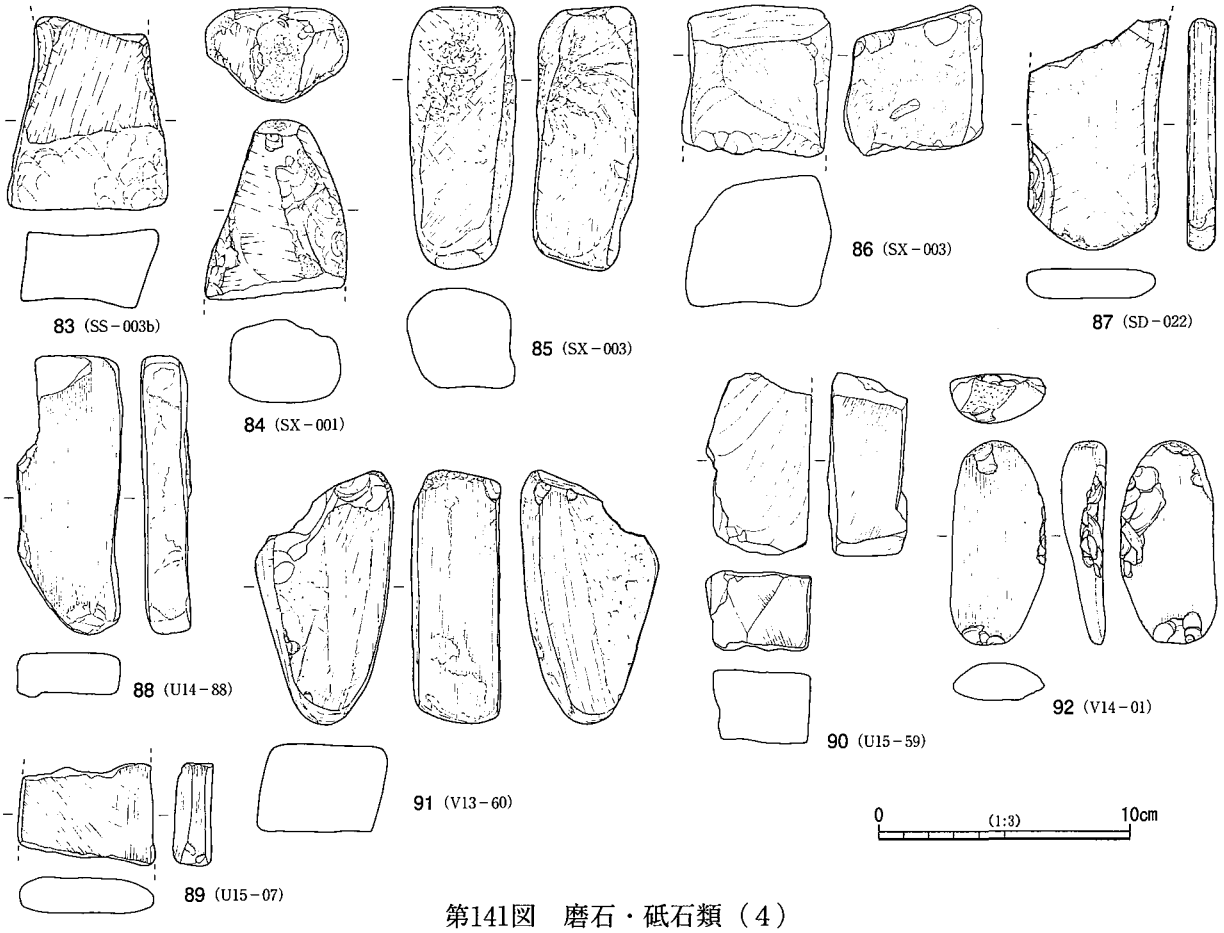
第138図　磨石・砥石類（1）



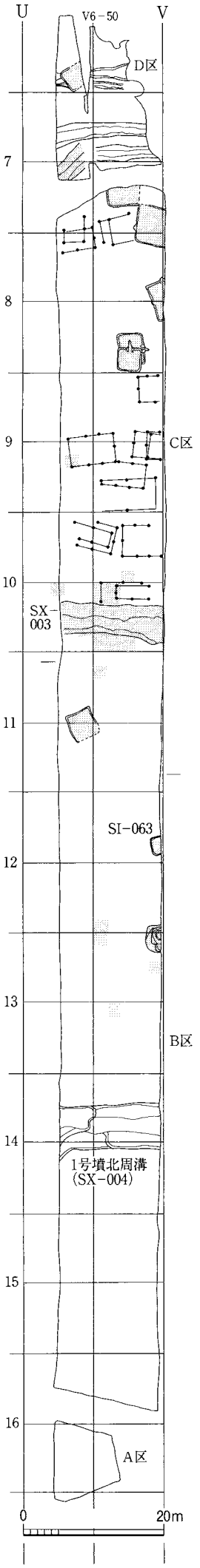
第139図　磨石・砥石類（２）



第140図　磨石・砥石類（3）



第141図　磨石・砥石類（４）



第142図　鍛冶関連遺物分布図

4　鍛冶関連遺物（第135図・142～145図）

遺跡内で出土した鍛冶関連遺物は45点である。その詳細は表10に記載したが、ここではそれらの分布状況を確認し、検出された遺構に関連づけたい。なお、第142図には鍛冶関連遺物と鉄製品を出土した遺構・地点を示している（網かけ部）。

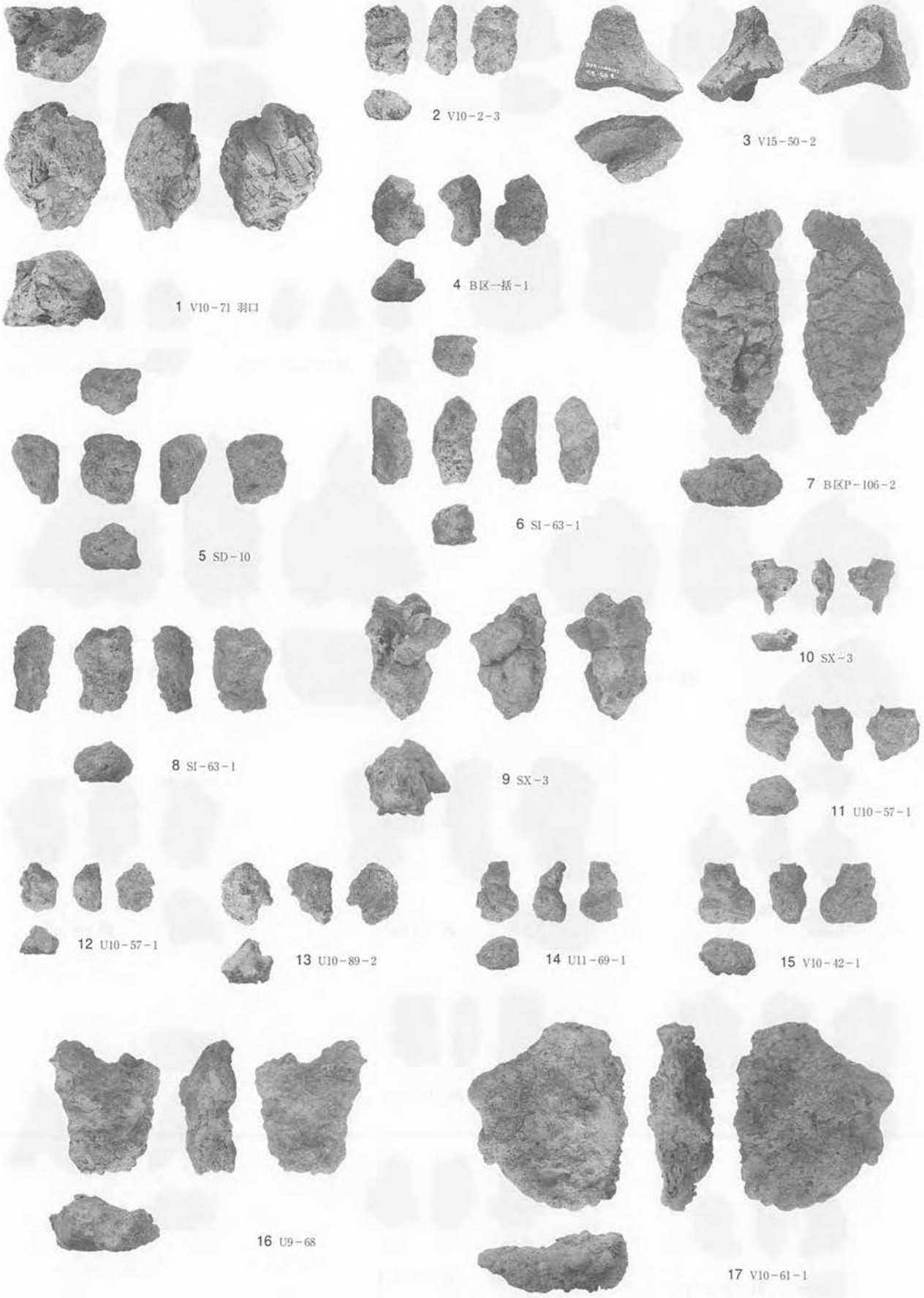
遺物の量は4,500㎡の遺跡の規模にしては少ない。その内訳を見ると、羽口・炉壁などの鍛冶炉に関連する遺物が５点、トリベと見られる被熱土器が１点、椀形の炉底滓が９点、鉄滓が28点（うち含鉄鉄滓は５点）、鉄塊系遺物１点、板状の鉄製品１点である。

羽口・炉壁等は大溝SX－003内とその南側、および１号墳の内外で出土している。椀形の炉底滓は大溝SX－003の南に集中して出土した。鉄滓の出土地点を見ると、やはりSX－003の周辺に集中していることが分かる。竪穴住居では唯一SI－063で椀形の炉底滓と鉄滓が出土している。SI－063は竪穴内部に何ら施設がなく、６世紀前半から７世紀前半の遺物が混在する特殊な竪穴であった。この遺構を工房と判断する根拠は希薄で、むしろ様々な遺物が投棄された遺構とするのが妥当であろう。

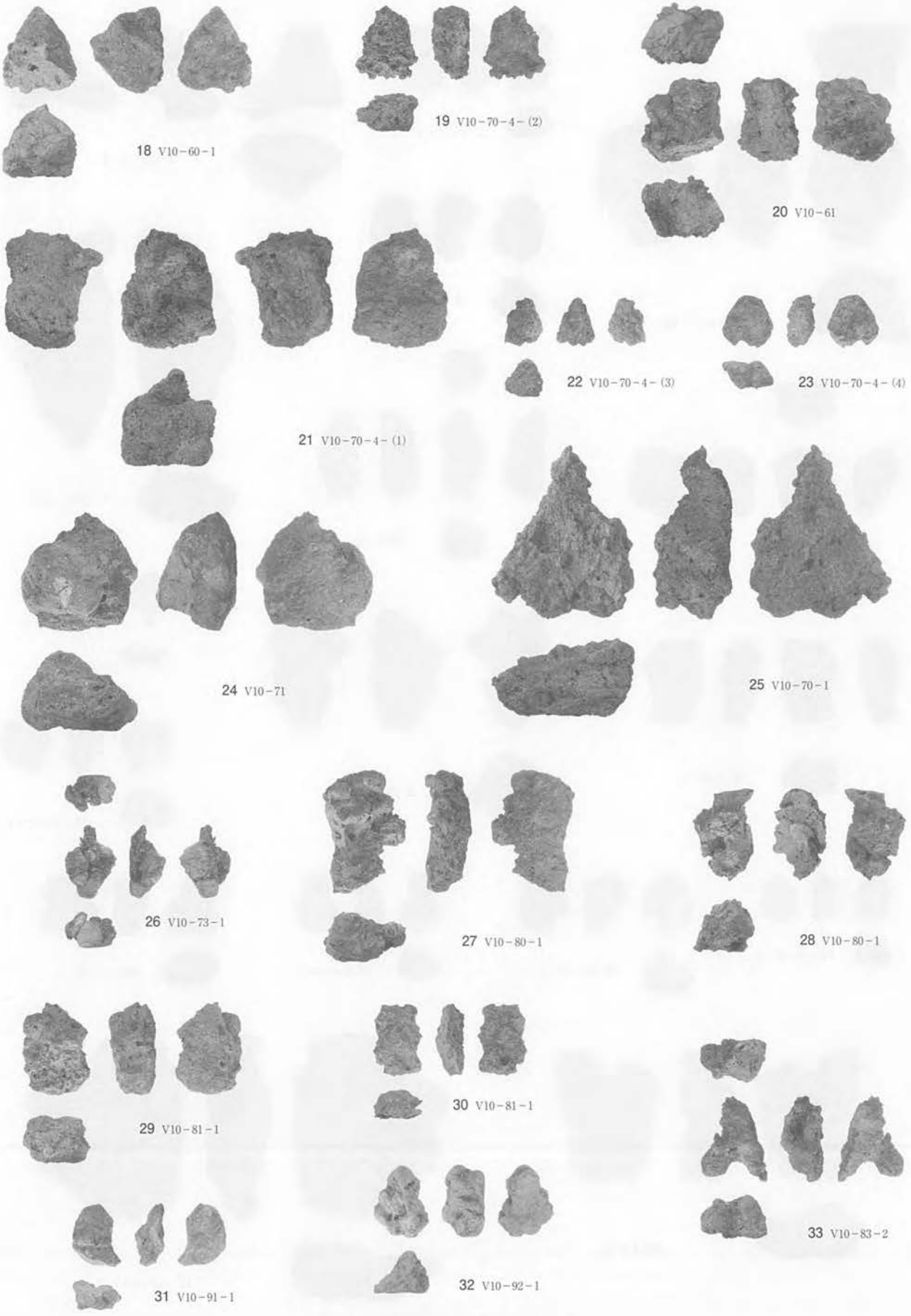
鍛冶関連遺物を最も有機的に結びつけることができるのは、SX－003とその北側にある掘立柱建物群とピット群である。おそらく、区域には様々な工房があり、その中に鍛冶関連の施設も存在したことが想定される。SX－003はそこから出る廃棄物の捨て場でもあったと思われる。

このように見ると、Ｌ字状のSD－003とSX－003で囲まれた方形区画（第109図参照）の性格がより鮮明になってくる。羽口や鉄滓等の量からすれば鍛冶工房は小規模で、修理や小型品の再生などが中心であったと思われるが、鋳造の板状鉄製品も出土していることから鋳造施設も備えていたことがわかる。

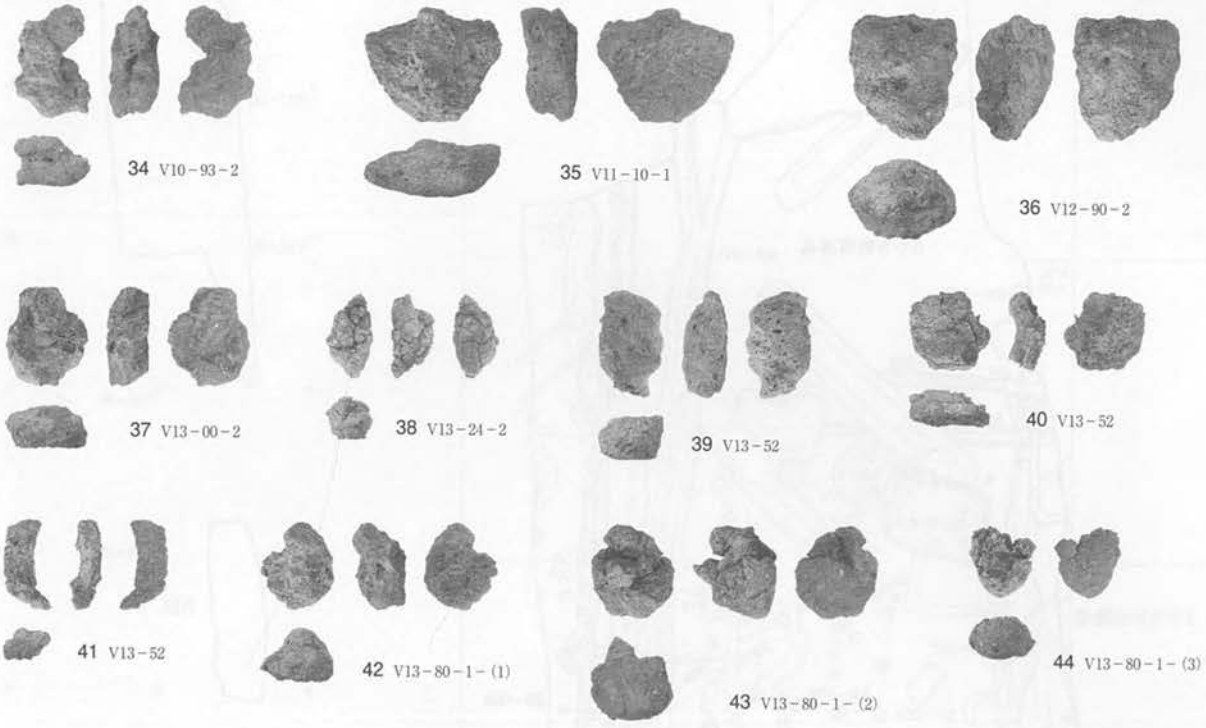
第１章第３図の萱野遺跡周辺地積図に拠れば、遺跡は「舘ノ原」と「美濃輪・吉野」に所在し、その地境がSX－003に相当する。上記の方形区画は「舘ノ原」側に位置している。第５章では中世陶磁器の出土密度によって、本遺跡が城館・寺院・街道などに付随する集落であることに触れた。今回の調査区には館の中心施設は存在していないが、その付属施設があったとすれば、本遺構群のような形態を想定しても良いであろう。調査区内に広く認められた東西方向の溝も遺跡全体が明らかになればそれぞれ意味をもつ区画になるかも知れない。



第143図　鍛冶関連遺物（1）



第144図　鍛冶関連遺物（2）



第145図　鍛冶関連遺物（3）

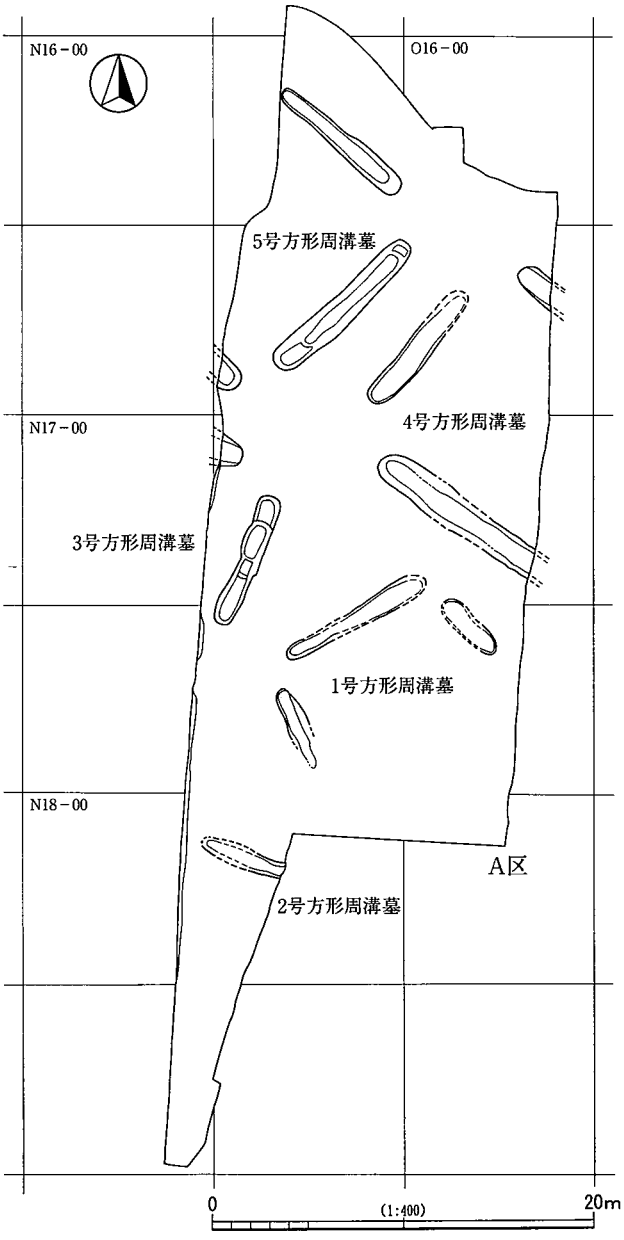
第146図　宇戸台遺跡全体図

第４章　宇戸台遺跡

第１節　弥生時代

１　方形周溝墓

本遺跡では、Ａ区で弥生時代中期の方形周溝墓が５基検出された。いずれも周溝の四隅が切れるタイプで、墳丘は後世に削平されて残っていない。限られた範囲の調査であるため全容の分かる例はないが、１例を除いて周溝内から土器が出土し、時期を知る手がかりとなった。調査区内に同時期の竪穴住居は見当たらないため、集落と区別された墓域であったと思われる。



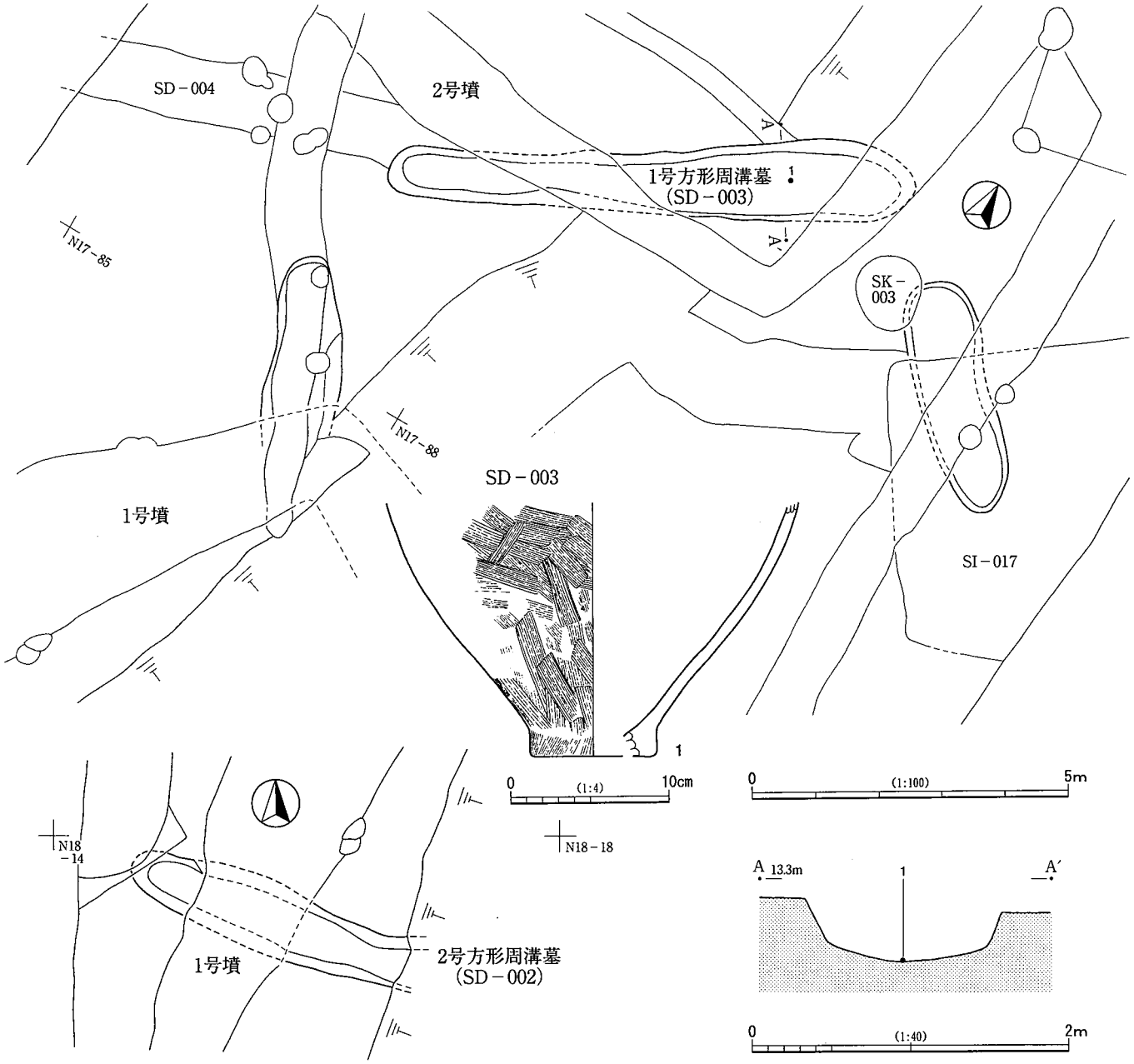
第147図　弥生時代遺構配置図

１号方形周溝墓（SD－003）（第148図、図版87・90）

Ａ区のやや南寄りに位置する。墳丘部の主軸を北から西へ約30°振って築かれており、北側周溝と東西の周溝の一部が検出された。東周溝は北端を残して古墳時代後期の竪穴住居SI－017に切られ、一部が床下に残存する。西周溝は後世の掘削によって南半を失っている。また、北周溝は２号墳の周溝と重複するため東端と中央部西寄りを消失している。

墳丘の規模は東西の残存部で9.4ｍである。周溝の規模は北周溝で長さ8.4ｍと推定され、残存部の最大幅は1.25ｍである。周溝の深さは削平状況によって異なるが、北周溝で24.3cm～35.3cm、東周溝で9.5cm～25.3cm、西周溝で35.5cm～43.4cmである。周溝の断面は船底形で、中央部がやや深い。

遺物（第148図、図版90）北周溝から壺の胴下半～底部が１点出土している。外面ハケ調整で、底部が小さくすぼまる特徴的な形態をもつ長頸壺である。胴部最大径は中位からやや上部にあると見られ、中期中頃から後半の古段階にかけて見られる直口壺と推定される。胎土には大粒の黄橙色粘土粒を含み、ハケは細かく当たりが浅い。



第148図　１号（SD－003）・２号（SD－002）方形周溝墓

２号方形周溝墓（SD－002）（第148図、図版86）

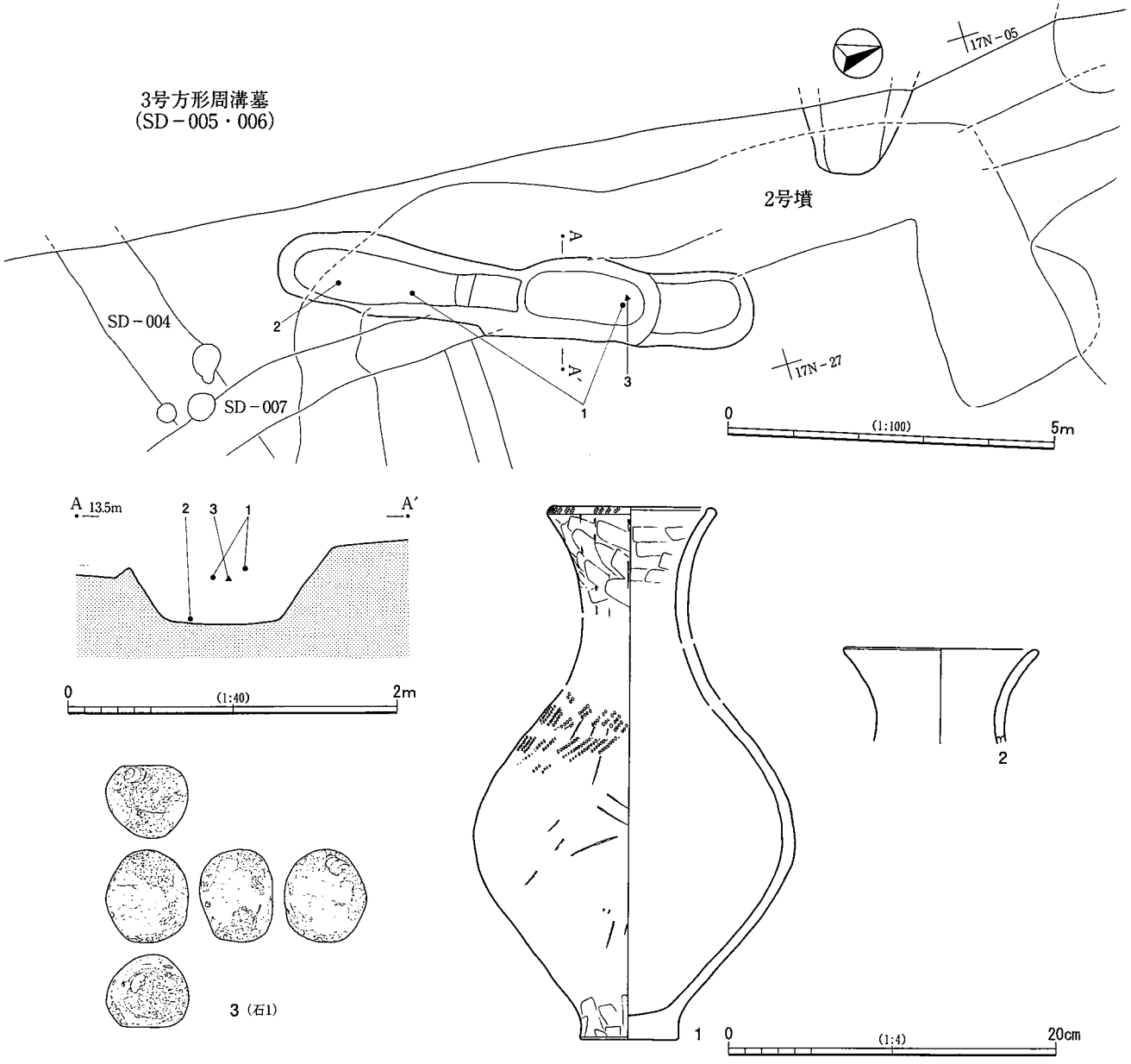
１号方形周溝墓の南西６ｍに位置し、１号墳（SD－001）と重複する。西側は調査区外に入り、東側は削平されて一段低くなっており、北周溝のみが検出された。南溝は周囲の状況から見て深く削平された形跡はないが、１号墳の構築時に削平されたものであろうか、遺存していない。

北溝は現状の長さが4.5ｍで、さらに東側に伸びているが、東端は削平されて明らかではない。また、１号墳の周溝と重複する部分は掘削されて消失している。周溝残存部の最大幅は93cm、深さは25.4cm～30.7cmで、中央部の方が深い。遺物は出土していない。

３号方形周溝墓（SD－005a・006a）（第149図、図版87・90）

１号方形周溝墓の北西約４ｍに位置し、２号墳（SD－005・006・008・009）・SD－007と重複する。大部分が西側の調査区外にあり、北周溝の端部と東周溝が検出された。東周溝はほぼ全域が２号墳と重複しているが、下部は削平を免れて遺存する。中央北寄りに土壙状の掘り込みがあり、その南側には70cmほどのテラスがあって、さらに階段状に６cm下がっている。土壙状の掘り込みは底面の長さ1.85m、幅75cmで成人伸展葬が可能な規模である。断面は底面がほぼ水平な逆台形で、掘り込みの深さは周溝底面から15.0cmである。東周溝残存部の全長は7.24m、幅1.07m～1.26mである。深さは２号墳周溝外の南端部で56.2cm、墳丘下の北端部で31.0cmである。北周溝は東端部の1.65mが調査され、端部は２号墳周溝に切られて立ち上がりがなくなっている。残存部の最大幅は1.5m、深さは14.3cmである。

遺物（第149図、図版90）　東周溝から長頸壺が２点出土している。１は頸部の一部を欠くほかは80%～90%遺存し、全容が分かる資料である。土壙状の掘り込みと周溝南部から出土した破片が接合し、底面か



第149図　３号方形周溝墓（SD－005・006）

ら30cmほど浮いて出土している。口縁端部に狭い面をもつ直口壺で、胴部最大径は中位にある。口縁端部と肩部に単節の縄文と見られる施文があるが、当たりが弱く摩滅しているため不明瞭である。また、肩部の文様帯には施文後に横方向の指ナデを加えており、痕跡が窪んでいることからかなり強くなでたことが分かる。外面調整は全体に板状工具によるナデで、口頸部と底部にはヘラナデが加えられている。内面はナデ調整であるが、やはり口頸部にはヘラナデが見られる。胎土には多くの砂粒と共に雲母と白色針状物が含まれている。

2は周溝の南端付近で出土した壺口頸部で、4/5周が遺存する。著しく摩滅し、文様の有無や調整は不明である。1に類似した長頸壺と見られる。ほかに、土壙状の掘り込みから凝灰岩の敲石が1点出土した。壺1の近くで出土しているため本跡に伴う可能性がある。

4号方形周溝墓（SD－010）（第150・151図、図版88・90～92）

1号方形周溝墓の北東約3mに位置し、2号墳や奈良・平安時代の住居跡（SI－018）、掘立柱建物跡（SB－005・006）などと重複する。東半が調査区外にあり、全体を調査するには至らなかった。墳丘の向きは、1号方形周溝墓と比較するため、全体が調査区内にある溝を北周溝とすると、N－52°－Wで、1号方形周溝墓（N－30°－W）とは向きを異にしている。東西の墳丘規模は周溝上端間で10.5m、南北の墳丘は現状の西溝が長さ10mに及ぶことから少なくとも13mを超えるため、南北に長い墳丘といえる。

北周溝は西端が検出されており、SD－010と重複する東端部がSD－010の中に納まると見られるため長さは7.5m前後と推定した。東西周溝との間はおよそ3mずつ途切れている。北周溝の最大幅は1.4m、深さは中央の最深部で73.6cmである。西周溝は長さ9.9mが調査され、現状の南端が浅くなっていないためさらに1m～2m南に伸びると見られる。中央部の幅は1.90m、深さは68.7cmである。東周溝は北端部の2.65mが調査区内で検出された。周辺の削平が著しく、北端の立ち上がりはなくなっており、調査区壁際でも深さは18.7cmにとどまる。周溝の断面形は底面がほぼ平らな逆台形である。

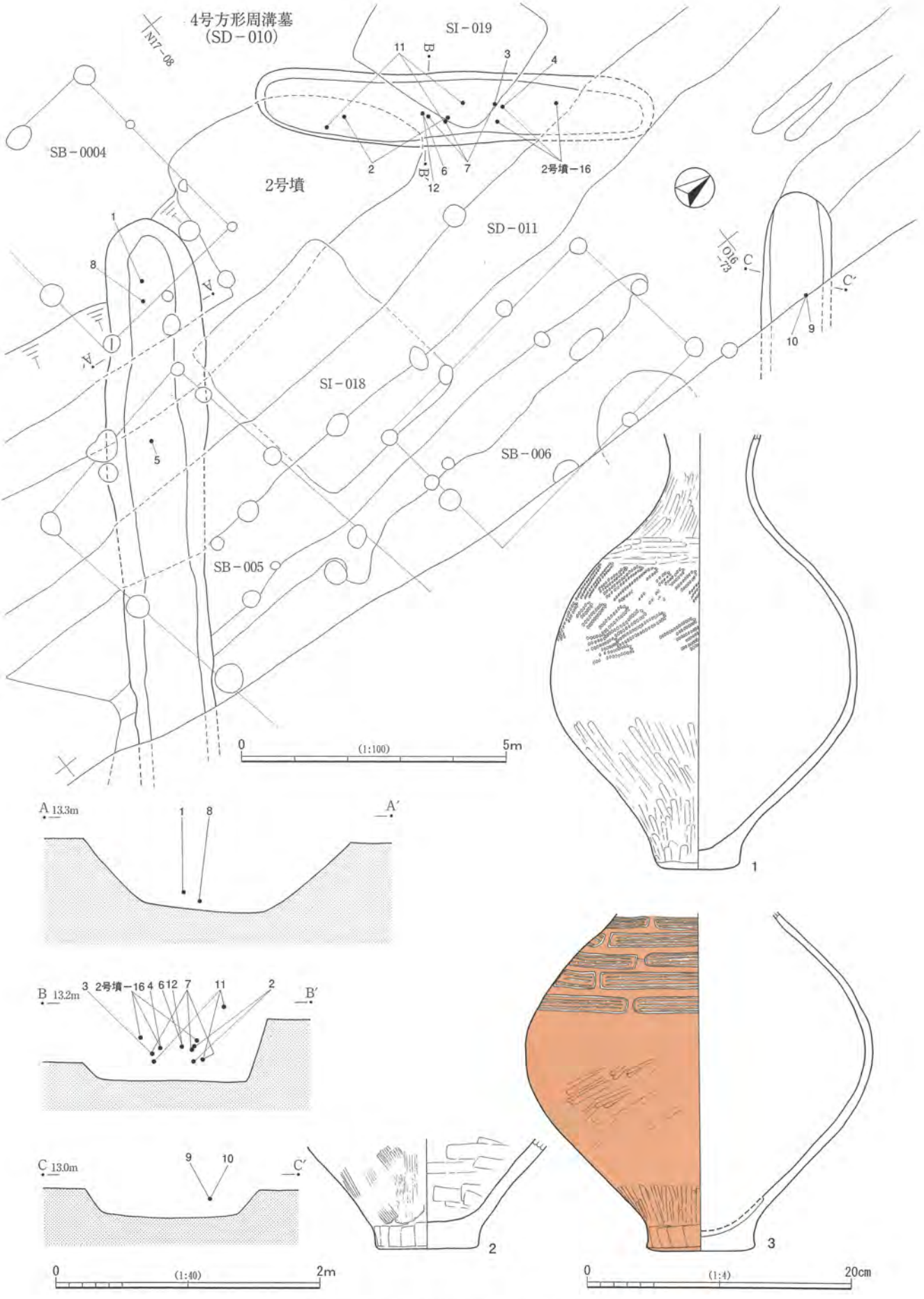
遺物（第150・151図、図版90～92） 調査したすべての周溝から遺物が出土している。西周溝では肩部に縄文の装飾のある長頸壺（1）、ハケ調整の長頸壺（5）、ハケ調整の小型鉢（8）が出土している。鉢は棒状工具の刻みによる波状口縁をもち、底部が大きく厚手のつくりである。北周溝からは肩部に櫛描流水文をもつ長頸壺（3）、ハケ調整の長頸壺（2・4・6）、ミガキ調整の壺（7）、深鉢形の大型甕（11・12）が出土した。東周溝では大小の深鉢形の甕（9・10）が出土している。

器種・量ともに本遺跡の方形周溝墓では最もまとまった資料である。これらの土器群は君津市常代遺跡で出土した土器群に類例を求めることができ、常代第4期（宮ノ台式古段階）に比定できる。

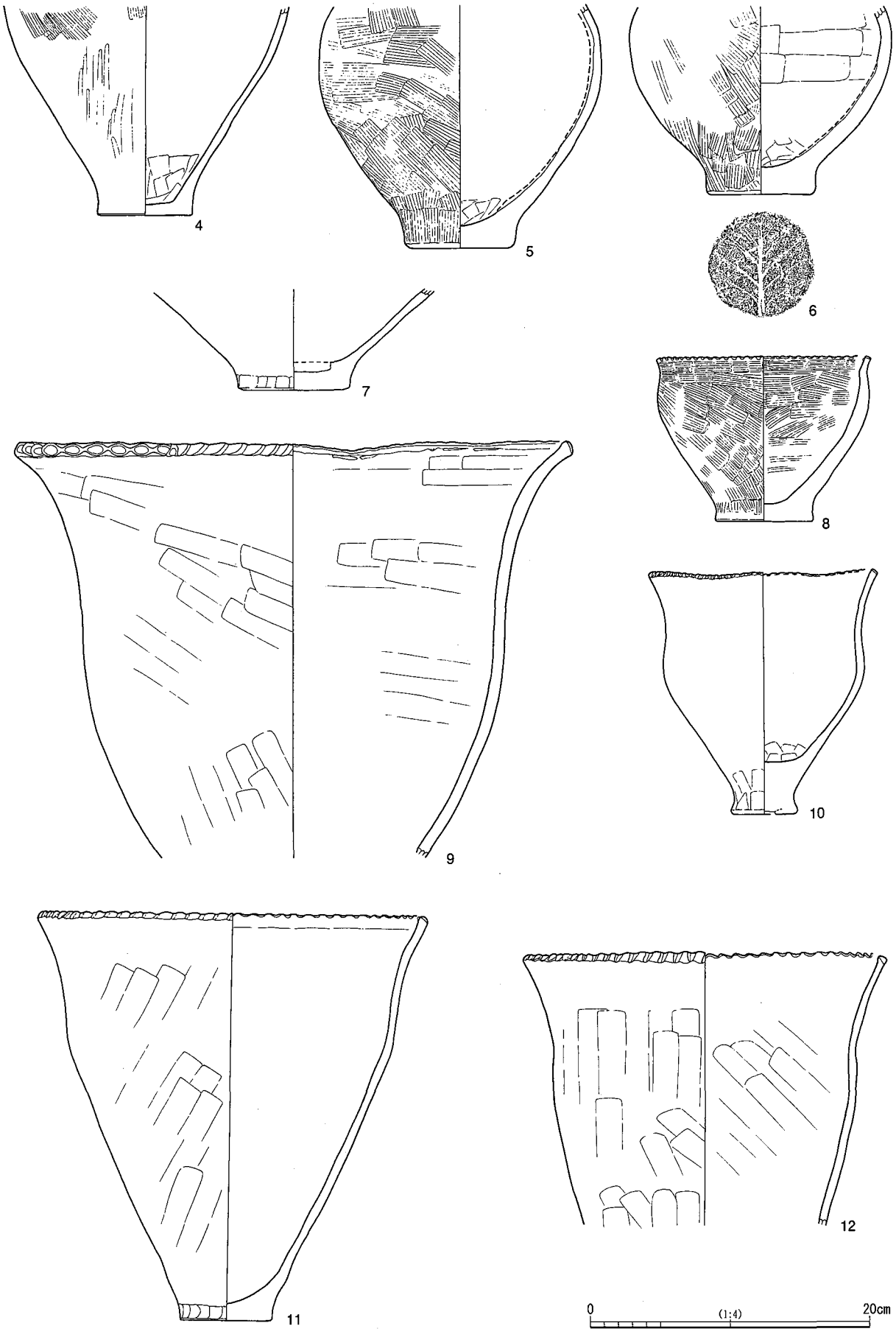
5号方形周溝墓（SD－014）（第152図、図版88・93）

4号方形周溝墓の北西約3mに隣接し、奈良時代の住居跡（SI－016）、中世の井戸（SE－001）、中世以降の溝（SD－007）などと重複する。北西部が調査区外にあり、全体を調査するには至らなかった。墳丘の向きは、磁北に対してほぼ45°に交差しているが、調査区北側の北東に面する溝を北周溝として報告することにする。北周溝と東周溝がほぼ完掘され、南周溝は東端部のみが調査区内にある。

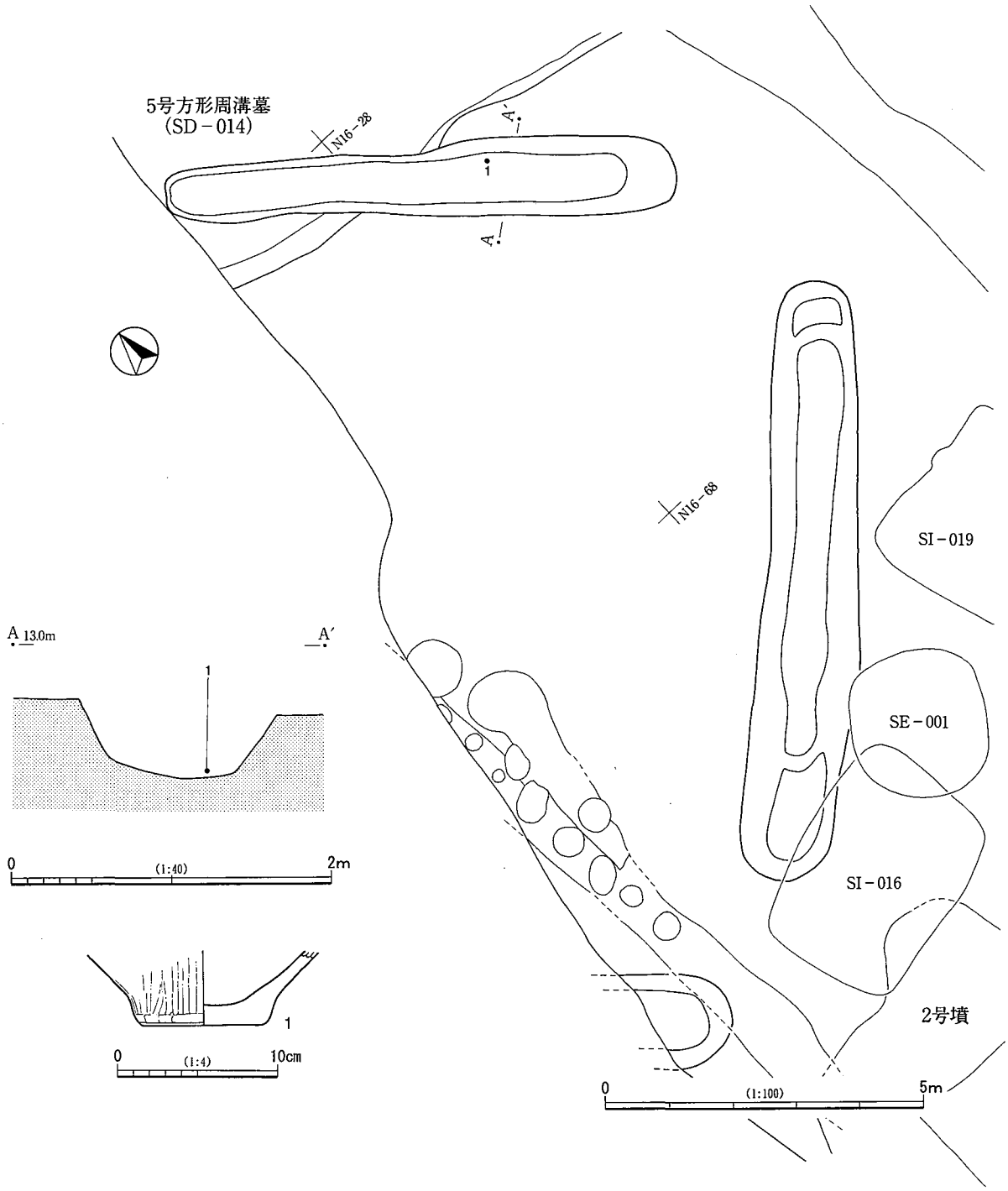
北周溝は北半が中世以降の整地によってかなり削平されているが、底面付近が遺存した。現状の長さは6.1m、最大幅は1.25m、深さは中央で50.5cm、東端部で55.1cmである。東周溝の長さは現状で9.55mあり、



第150図　4号方形周溝墓（SD－010）（1）



第151図　4号方形周溝墓（2）



第152図　5号方形周溝墓（SD－014）

最大幅は1.7m、深さは北部50.2cm・中央部68.7cm・南部85.6cmである。両端に階段状のテラスがあり、北側は10cm、南側は15cmほど底面より高くなっている。一段低い溝中央部の幅は45cm～55cmとかなり狭くなっている。南周溝は東端の1.2mほどを調査したのみであるが、東周溝との間が1.9m途切れていることが明らかになった。なお、北周溝と東周溝のコーナーは2.5m途切れている。

遺物（第152図、図版93）　北周溝から壺の底部が出土している。外面をヘラミガキし、底部周縁にヘラケズリ調整を施している。長頸壺の底部であろう。

第２節　古墳時代

１　古墳

Ａ区で２基の古墳が検出された。いずれも主丘部が方形で、１基は短い前方部をもつ前方後方墳であることが分かった。２基の周溝からは古墳時代出現期～前期古段階の土器が出土している。本遺跡の調査区内には古墳時代後期の住居群が営まれているが、前期に遡る例はなく、これらの古墳が築かれた時期の集落は別の地点にあるものと思われる。

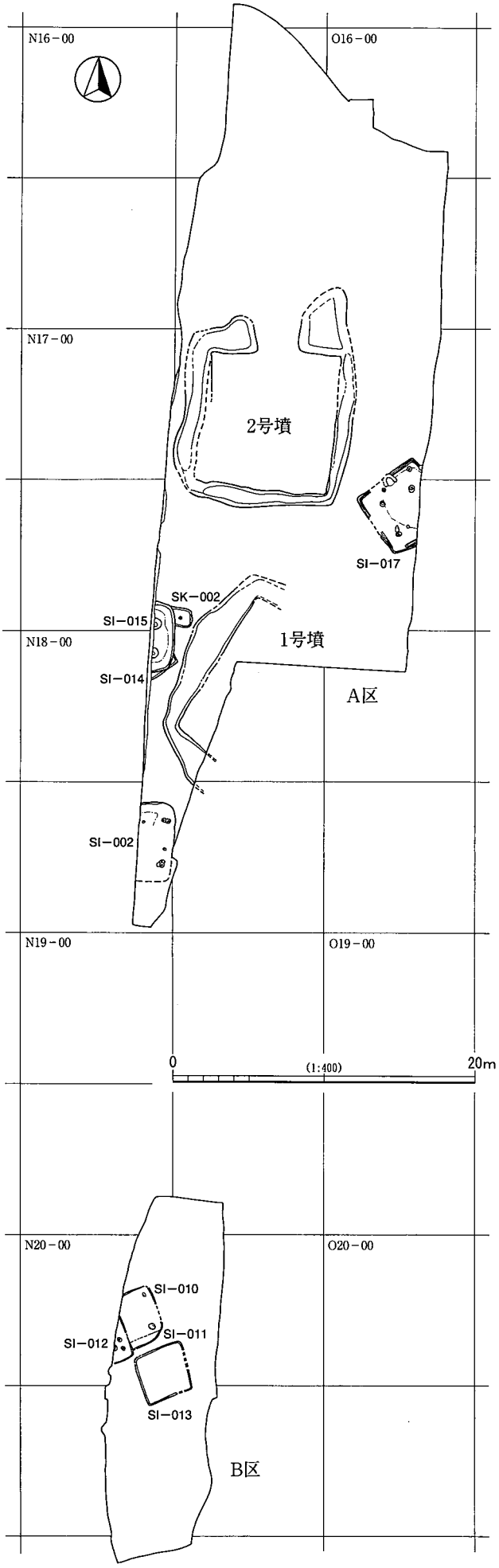
本調査区には弥生時代中期の方形周溝墓が５基検出されており、やはり同時期の竪穴住居は見当たらなかった。この頃からこの地が、集落とは区別された墓域であったのであろう。

１号墳（SD－001）（第154図、図版86・92・93）

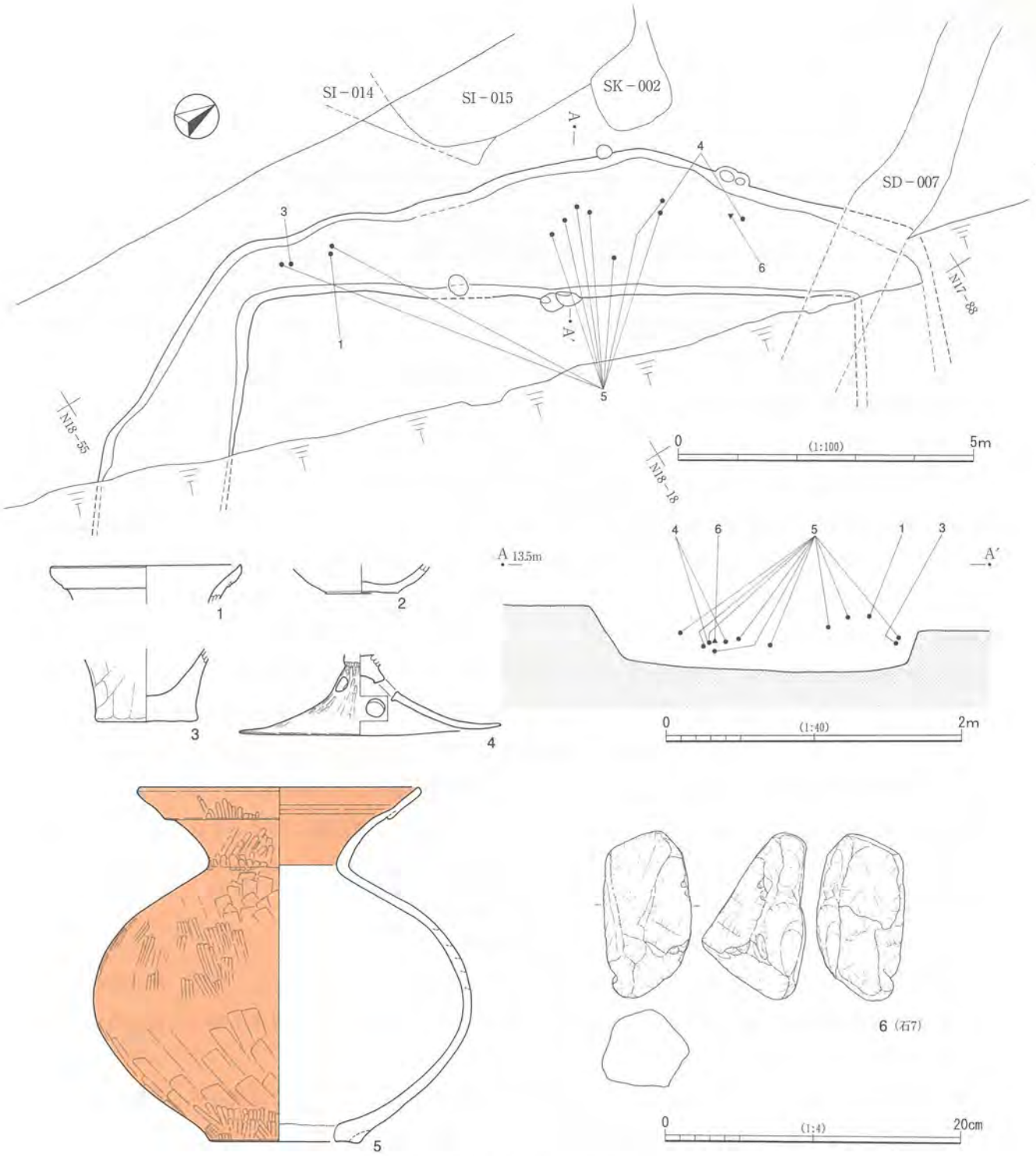
Ａ区のやや南寄りに位置する。この辺りは東側が大きく削平されて一段低くなっているため、遺構が存在しないことが確認され、１号墳の南東部は本調査区から省かれた。西側の墳丘裾部と周溝が遺存するが、墳丘部は削平されて平坦になっている。西側の墳丘１辺は10.5m～10.7mで、墳丘の主軸は北から東へ約30°振って築かれている。西側周溝と南北の周溝の一部が検出された。北周溝は北隅を中世以降の溝SD－007に切られ、一部が底面下に残存する。南周溝は後世の掘削によって東側を大きく失っている。また、北周溝も中世以降の改変と削平によってその大半を消失している。

墳丘の規模は西側の残存部で9.4mである。周溝の規模は北周溝で長さ8.4mと推定され、残存部の最大幅は1.25mである。周溝の深さは削平状況によって異なるが、北周溝で24.3cm～35.3cm、東周溝で9.5cm～25.3cm、西周溝で35.5cm～43.4cmである。周溝の断面は船底形で、中央部がやや深い。

また、隣接する２号墳が北側に前方部をもつこ



第153図　古墳時代遺構配置図



第154図　1号墳（SD－001）

とから、本墳の北側にも前方部が存在した可能性がある。

遺物（第154図、図版92・93）　西周溝では底部穿孔の有段口縁壺（5）が出土している。周溝の中央部にまとまって出土し、全体の約80％が遺存している。口縁部は幅の広い折り返し状の有段口縁で、内面はわずかに屈曲して弱い段が作り出されている。頸は短く太く、胴部は横長の楕円球状で最大径が中位にある。底部は1/8周ほどしか遺存しないが、割れ口の状態から焼成後に穿孔されたことがわかる。

ほかに西周溝から中型の折り返し口縁壺の口縁（1）、薄手の小型壺底部（2）、高坏脚部（4）が出土している。高坏脚部は脚部の90％が遺存し、坏接合部が極めて細く、裾部が大きく開く形態的特徴を良く残している。裾部は薄くかなり華奢なつくりである。なお、3の壺底部は弥生時代中期に遡るもので、重複する2号方形周溝墓から混入したものであろう。

底部穿孔の有段口縁壺と高坏脚部の特徴によって本墳は前期初頭に位置づけられる。

2号墳（SD－005b・006b・008・009）（第155～157図、図版87・88・92・93）

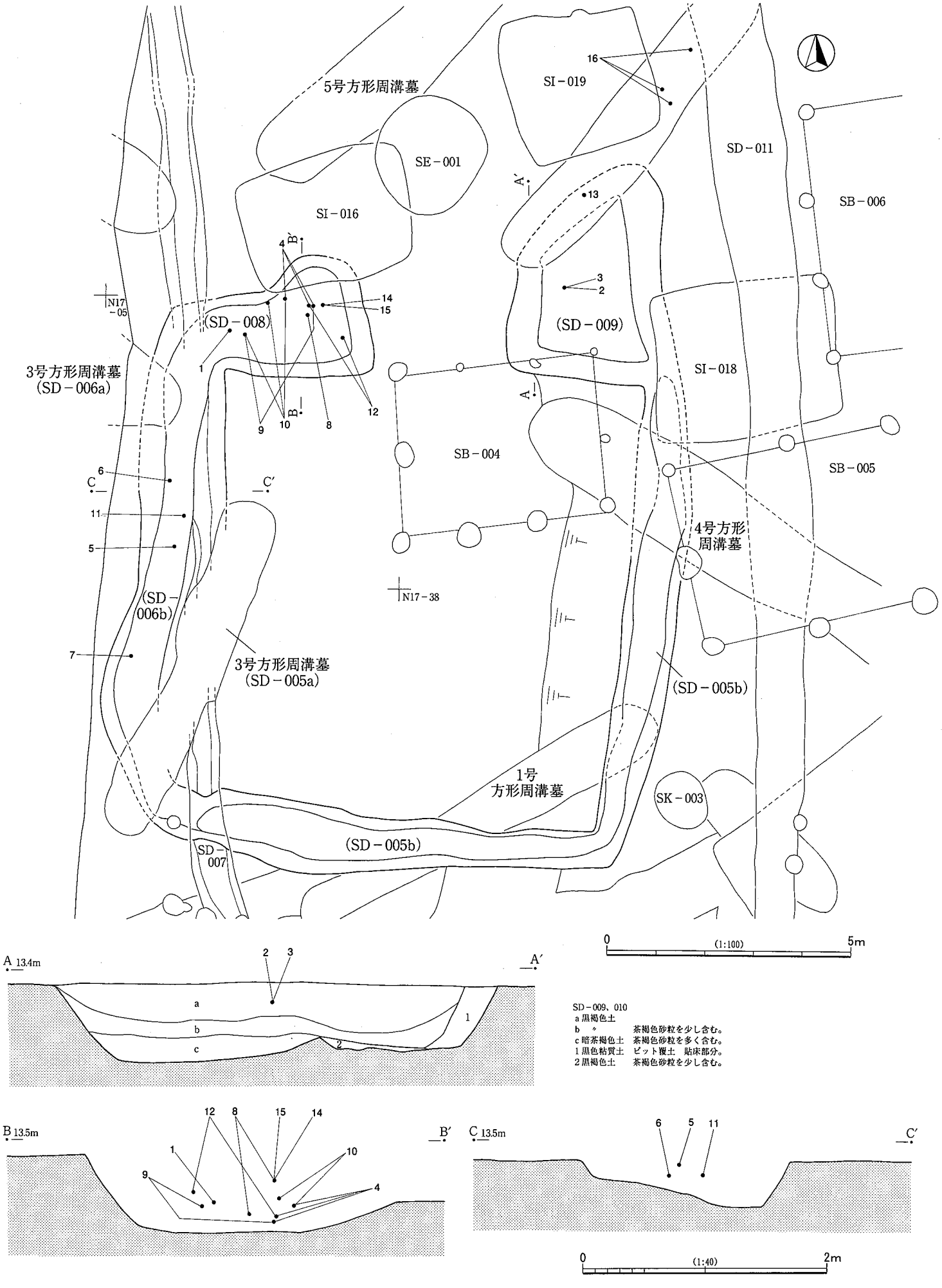
短小な前方部をもつ前方後方墳である。1号墳の北4mに位置し新旧様々な遺構と重複するが、全体が調査区内にあり、周溝のほぼ全容が調査された。墳丘は後世の削平を受けており、旧表土層も確認されていない。墳丘の主軸はN－6°－Eである。後方部の墳丘規模は南北9.4m、東西9.0mで、南北にやや長い。前方部は両角が他の遺構と重複するため不明な部分もあるが、周溝は左右非対称で前方部前面にめぐっていないことは明らかである。前方部の両側線が直線的にのびている箇所を墳丘部と見ると、前方部長は2.4m、墳丘全長は11.8mとなる。前方部西側の周溝は奈良時代の竪穴住居（SI－016）に切られているが、掘削が底面に及んでいなかったため端部が突出する形態を捉えることができた。東側の周溝は墳丘に沿って屈曲せず、ほぼ直線的に北へ伸びている。前方部の角への取り付き部は4号方形周溝墓と重複し、その調査中に本墳の周溝が掘削されてしまったため、この部分の形態は残存部から推定した。くびれ部の幅は2.80m、前方部幅は現状で3.30mである。

後方部の周溝は隅角が狭く中央部がやや広くなるが、全体にほぼ一定の幅でめぐっている。遺存の良い南周溝の中央部の幅が1.5m、南東隅角の幅が65cm、東周溝中央部の幅は1.1mである。深さは西周溝中央部で33.3cm、南周溝中央の最深部が58.0cm、東周溝最深部が42.5cmで、南西隅は低いブリッジ状になっており、南周溝中央部より13.9cm浅い。また、南東隅も東周溝中央部より14.6cm浅くなっている。前方部の周溝幅は西側が約2mであるのに対し、東側は3mあり、東西とも先端部に向けてすぼまる。前方部西周溝の深さは北西隅角で43.6cm、くびれ部で57.3cm、最深部で63.9cm、先端部で49.8cmである。東周溝の深さはくびれ部で61.9cm、最深部で64.7cm、先端部付近で45.2cmである。

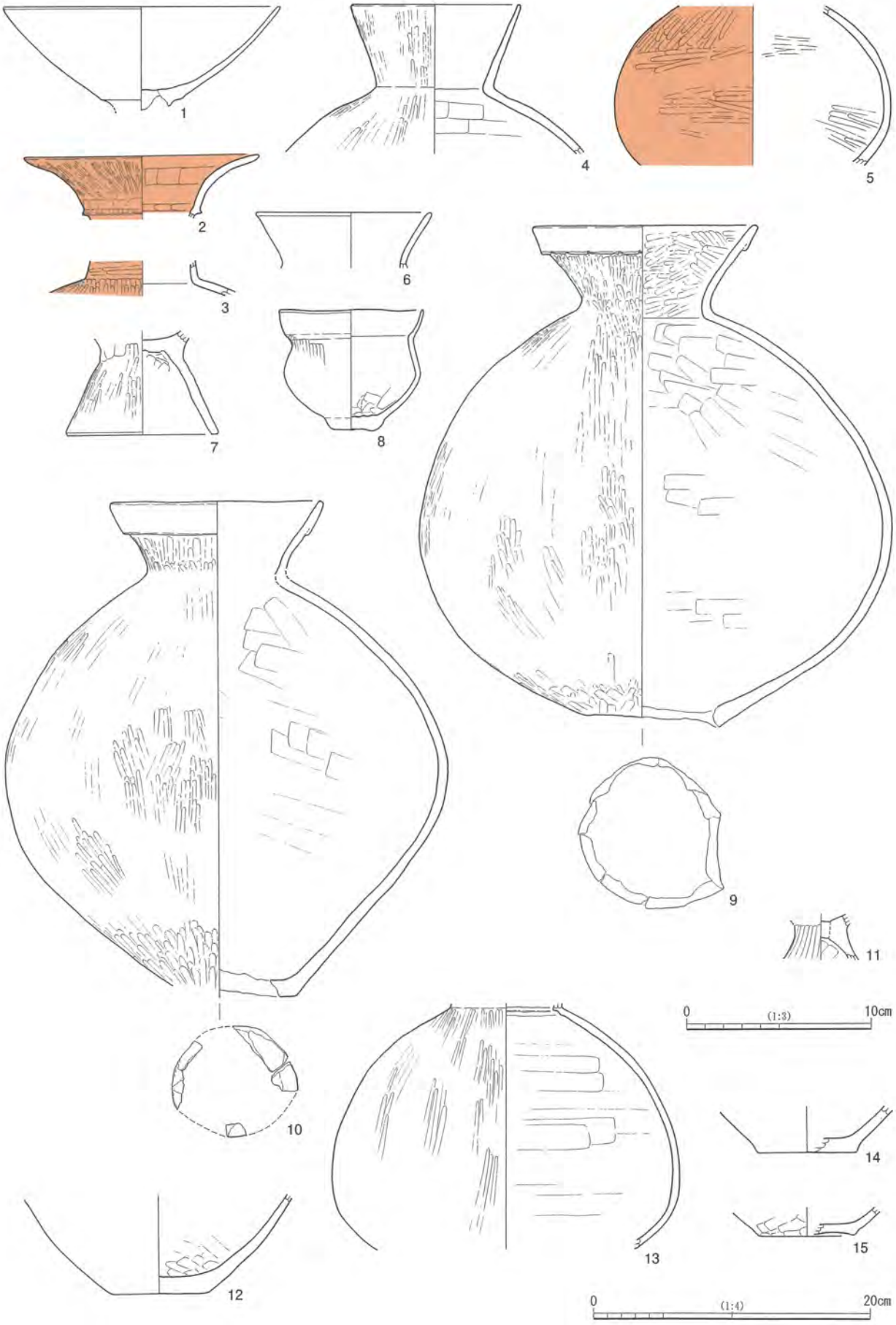
墳丘・周溝内に埋葬施設と考えられる遺構は検出されなかった。

遺物（第156・157図、図版92・93） 周溝内からかなり多量の土器が出土した。特に、後方部の西周溝中央部と前方部の周溝に遺存の良い土器が集中している。出土層位は現状の覆土下層～上層に及んでおり、周溝底から8cm～40cm浮いている。

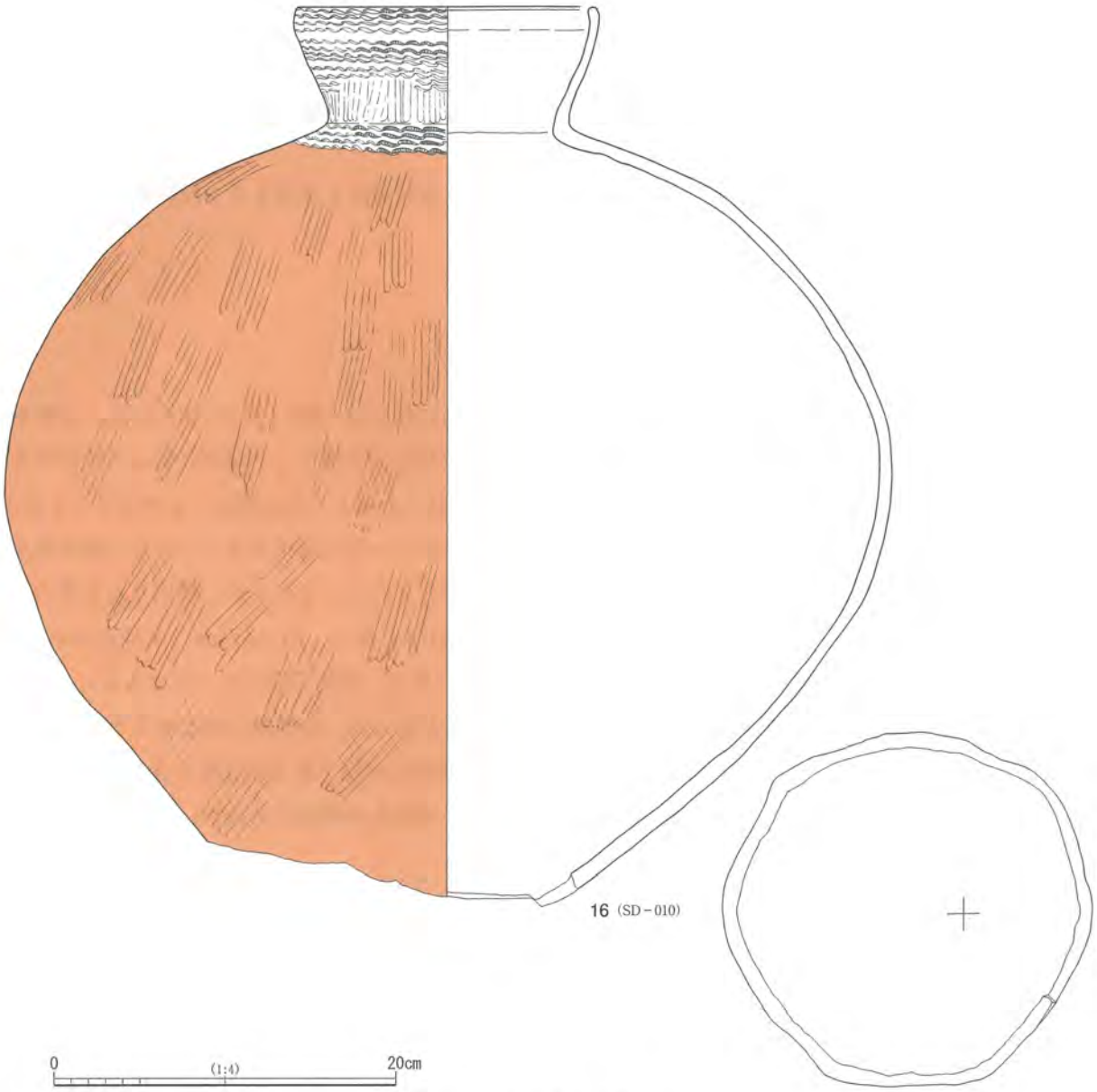
焼成後に底部を穿孔した大型壺が前方部の周溝や周辺部で出土し、西周溝では折り返し口縁の壺2個体（9・10）、東周溝の先端部付近ではS字状結節文の装飾のある単口縁の壺（16）が出土した。壺16は東周溝北側に重複する弥生時代中期の4号方形周溝墓の覆土上層で出土したが（第150図参照）、本古墳以外に帰属する可能性のある遺構は見当たらない。これらの底部穿孔壺は、いずれもまとまって出土している割りには細かく割れており、全体に脆く表面は摩滅した部分が少なくない。9・10は口縁部の形態・質感が良く似ているが、胴部最大径は10がほぼ中位にあるのに対し、9は下半にある。底部の穿孔は9がより広範に及んでいる。9のように胴部下半に最大径をもつ壺は、西周溝（4）と前方部東周溝（13）でも出土しており、最大径を下半にもつ形態が主体であるといえる。一方、東周溝の北側で出土した大型壺（16）は口縁部と肩部に4条1組のS字状結節文を施し、明らかに胴部の中位に最大径をもつ。胴部最大径は



第155図　2号墳（SD－005・006・008・009）



第156図　２号墳出土遺物（１）



第157図　２号墳出土遺物（２）

51.9cmで、底部穿孔後の器高（52.0cm）と拮抗する。全体の大きさの割りに口頸部が小さく、口径17.5cm、頸部径14.1cm、高さ7.0cmである。底部は大きく穿孔され、径は20cmに及ぶ。器形・施文に古い要素を残すが、大きく底部を穿孔する点は新しい要素といえる。

高坏は直線的に開いて下端に稜をもつ薄手の坏部（１）が前方部西周溝で出土し、後方部西周溝で柱状部をほとんど作らずに開く脚部（11）が出土している。いずれもヘラミガキ仕上げである。

甕は台付甕脚台（７）、小型甕（８）、薄手の平底甕底部（15）がある。全容の分かる小型甕は、やや内湾気味に直立する口縁部の下端に弱い稜が作り出され、小型の底部には輪台状の成形痕が見られる。外面はかなり摩滅しているが肩部にハケ調整が確認できる。胴部下半から底部内面をヘラケズリし、全体に薄手で華奢なつくりである。山陰・北陸系の甕か鉢を模したミニチュア土器とも見られる。また、前方部東周溝から出土した２・３は同じ場所から出土し、調整や質感も似るため同一個体と考えられる。当初は山

陰・北陸系の壺結合器台である可能性も考えたが、頚部の取り付き傾斜や口径から見て有段口縁の壺と判断した。頚部が直立し、口縁端部が丸く仕上げられる有段口縁壺は他の土器群より後出の特徴と見られる。両者に接合面がなく、頚部以下は断片的な資料であるため確証はないが、胎土が他とは明らかに異なる点から搬入品の可能性が高い。

これらの土器群の特徴は、古墳時代出現期新段階のなかでも萱野遺跡１号墳より１段階新しく位置づけられる。

２　竪穴住居

SI－002（第158図、図版83）〈N18－54グリッド〉

A区南端部に位置し、西側は調査区外に伸び、奈良時代の竪穴住居SI－001・003に切られる。方形を呈すると考えられるが、重複を受けており、斜面部に近いため不明な点が多い。南北は3.65mの残存であり、東西は2.3mの範囲の調査である。SI－001の部分に本遺構の主柱穴と考えられるP2a・bがあることから、東西の幅は５m前後と推定される。東壁は削平されており、床面の一部に削平が及んでいる。確認面から床面までの最深部の深さは11cmである。この竪穴住居は建て替えされたと考えられ、検出した２基の主柱穴にはそれぞれ新旧のものがある。新しい主柱穴P1aは深さ40.1cmと深く、P1bは24cm、主柱穴P2aの深さは20.4cm、P2bは19.5cmである。P3・４は深さが14.5cmと7.2cmであり、性格不明のピットである。

長軸の方位はN－3°－Eである。床面中央部分には硬化面が見られ、北壁側に焼土がまとまって見られた。焼土の堆積の厚さは6.5cmである。覆土は１層のみで、黒褐色で焼土粒と炭化粒を含む層である。

遺物は土師器の小破片のみであり、実測できるものはなく、時期も不明瞭であるが、土器片から古墳時代後期の遺構と判断される。

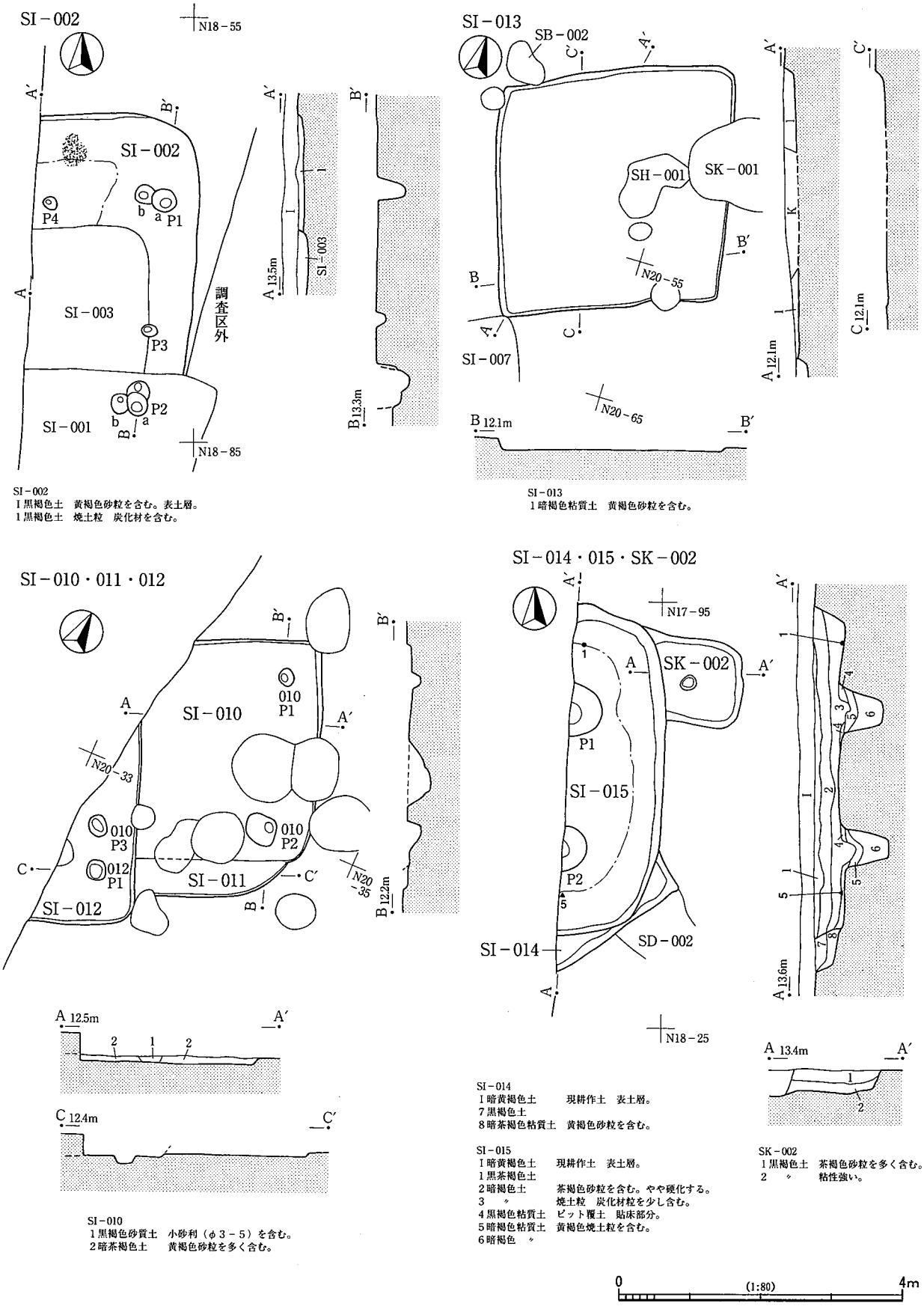
SI－010・011・012（第158図、図版84）〈N20－33グリッド周辺〉

B区北半部に見られ、SI－010・011・012の３棟の竪穴住居が切り合って存在する。削平が著しく、いずれも確認面から床面までの深さが浅いものとなっている。これらの住居は古代の掘立柱建物跡SB－002に切られる。SI－012にSI－010が切られ、SI－010がSI－011を切っている。SI－010は奈良・平安時代の遺物が出土したSH－003・004に切られており、SI－011もSH－004に切られている。

最も新しいSI－012の大半は調査区外に伸びており規模は不明な点が多いが、南東隅を検出しており、方形を呈する可能性が高い。軸方位はN－20°－W前後と考えられる。確認面から床面までの最深部の深さは11.1cmである。主柱穴は部分的な調査のためP1のみの検出であり、深さは12.6cmである。床面には硬化面は見られなかった。遺物は検出することができなかった。

SI－010は方形を呈すると考えられ、規模は南北が3.12mで、東西は重複のため不明である。ただし、SI－012内にSI－010の主柱穴と考えられるP3が存在することから、東西方向のおおよその規模は3.7m前後と推定され、横長の竪穴住居であった可能性が認められる。主軸方位はN－22°－W前後である。床面はほぼ平坦であり、硬化面は認められなかった。主柱穴は３本を検出し、P1は深さ13.2cm、P2は18.7cm、P3は14.5cmである。カマドは検出することができなかった。西カマドの可能性が考えられる。覆土の主体は暗茶褐色土で、黄褐色砂粒を多く含む土層である。

SI－011は重複により大部分が壊されており、僅かな箇所の検出のため不明な点が多い。主柱穴は検出



SI－002
1黒褐色土　黄褐色砂粒を含む。表土層。
1黒褐色土　焼土粒　炭化材を含む。

SI－013
1暗褐色粘質土　黄褐色砂粒を含む。

SI－010
1黒褐色砂質土　小砂利（φ3－5）を含む。
2暗茶褐色土　黄褐色砂粒を多く含む。

SI－014
1暗黄褐色土　現耕作土　表土層。
7黒褐色土
8暗茶褐色粘質土　黄褐色砂粒を含む。

SI－015
1暗黄褐色土　現耕作土　表土層。
1黒茶褐色土
2暗褐色土　茶褐色砂粒を含む。やや硬化する。
3　〃　焼土粒　炭化材粒を少し含む。
4黒褐色粘質土　ピット覆土　貼床部分。
5暗褐色粘質土　黄褐色焼土粒を含む。
6暗褐色　〃

SK－002
1黒褐色土　茶褐色砂粒を多く含む。
2　〃　粘性強い。

第158図　SI－002・010・011・012・013・014・015、SK－002

されず、残存部の軸方位はＮ－69°－Ｅである。残存部の長軸長は2.13ｍである。確認面から床面までの深さは7.8㎝である。遺物は検出できなかった。床面には硬化面は見られず、平坦である。

これらの３棟の竪穴住居跡については、周辺の状況から勘案して、古墳時代後期の竪穴住居である可能性が高い。

SI－013（第158図、図版84）〈N20－44グリッド周辺〉

Ｂ区中央部に見られる。歪んだ方形を呈し、規模は長軸3.47ｍ、短軸3.35ｍである。主軸方位はＮ－19°－Ｗであり、前述のSI－012とほぼ同様の方位をとる。SB－002とSK－001及びSH－001に切られ、SI－007に切られる。カマド及び主柱穴は検出されず、不明な点が多い竪穴住居である。床面はほぼ平坦であり、中央部に攪乱が入る。確認面から床面までの深さは20.6㎝である。壁は床面から直線的に立ち上がっており、覆土は暗褐色の粘質土で黄褐色砂粒を含む。

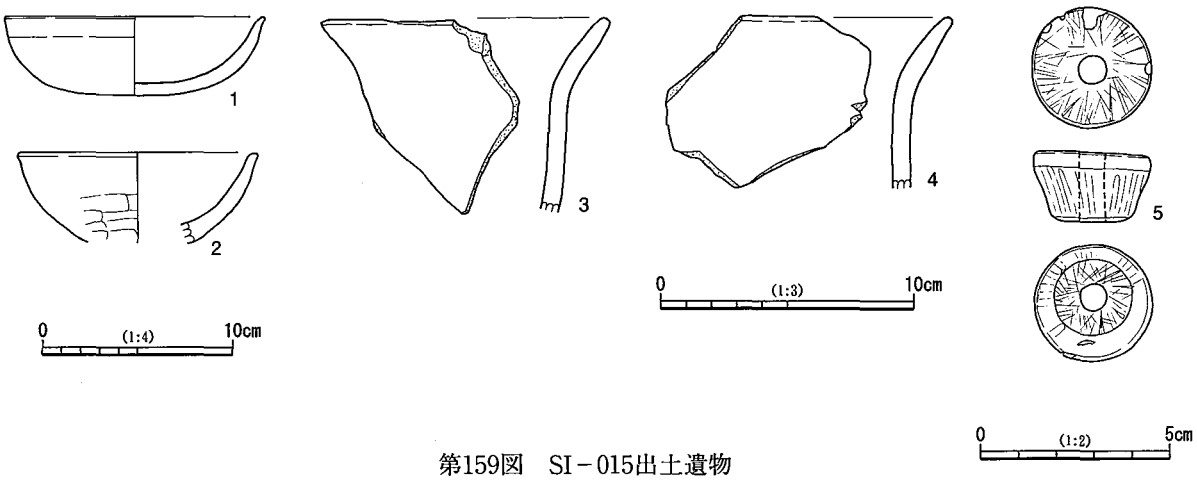
遺物は古墳時代後期の土師器坏・甕の細片が僅かに出土しているのみであり、実測できる遺物は検出することができなかった。

SI－014・015・SK－002（第158・159図、図版84・86・90・94）〈N17－94グリッド周辺〉

Ａ区南半部で検出された遺構群である。

SI－014はSI－015に切られ、２号方形周溝墓（SD－002）を切っている。遺構の大半は調査区外の西側に伸び、東南隅部がかろうじて検出され、方形の竪穴住居であることがわかる。軸方位はＮ－55°－Ｅである。残存の最大長は2.06ｍである。確認面から床面までの深さは31㎝であり、壁は直線的に立ち上がる。床面は中央部に向かってなだらかに傾斜する。覆土は上層が黒褐色土で、下層は暗茶褐色土であり、下層に黄褐色砂粒を含む。遺物は検出できなかったが、重複関係から６世紀代の竪穴住居跡と判断しておきたい。

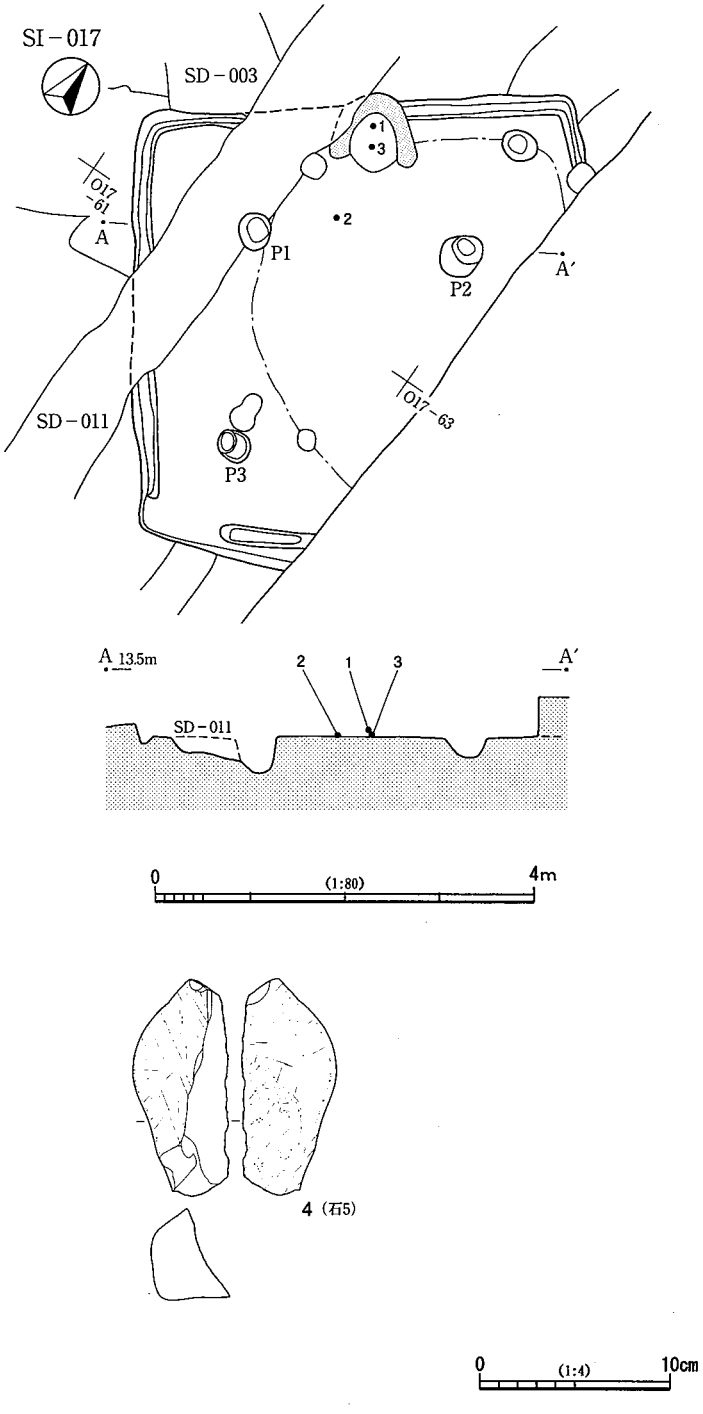
SI－015はSI－014・SK－002及び２号方形周溝墓を切って存在し、遺構の過半は調査区外西側に伸びる。遺構の長さは4.68ｍである。床面から確認面までの深さは42.8㎝で、本遺跡のなかでは、掘り込みが深い竪穴住居跡である。カマドは検出されていないが、おそらく調査区外にあるものと思われる。長軸の方位はＮ－２°－Ｅである。床面には硬化面があり、中央部が若干高くなっている。壁は直線的に立ち上がる。

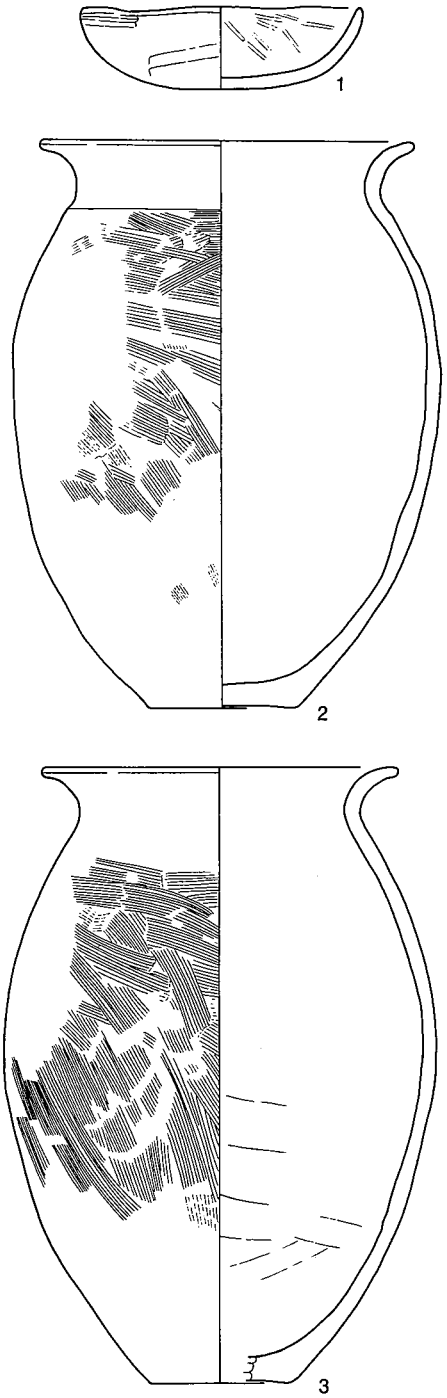


第159図　SI－015出土遺物

主柱穴は２基を検出しており、開口部の径はP1が75cm、P2が66cm、深さはP1が58cm、P2は68.4cmで、本遺跡の竪穴住居跡のなかで規模が最も大きい柱穴である。覆土はレンズ状堆積を示し、主体となる層は暗褐色土で茶褐色砂粒を含んでいる。

遺物（第159図、図版90・94） SI－015で５個体を検出した。１は土師器坏であり、床面直上から出土した。口径は13.8cmであり、口縁部は外反する。底部は丸底ではあるが、平坦に近い形状となっている。外面は摩耗が著しく、口縁部の一部に横方向のナデの痕跡が認められるほかは調整等は不明である。内面には横方向のナデがなされる。２は丸底の土師器坏である。口径は復元で12.6cmであり、外面には横方向





第160図　SI－017

のヘラケズリが顕著に残る。内面は横方向のナデがなされる。胎土に白色針状物質が見られる。３・４は土師器甕であり、両者ともに最大径が口縁部にあり、古墳時代でもより後出する形態を示している。

５は滑石製の紡錘車で、上面と下面に細かな放射状の線刻が顕著に認められる。上面・側面を僅かに欠損するが、割れ面が新しいので、廃棄時は完形であったと考えられる。床面から僅かに浮いた状態で検出した。なお、古墳時代の土坑についてはSI－015と重複する１基のみなので、ここで述べることにしたい。

SK－002（第158図、図版84・86）　N17－95グリッドに所在し、SI－015に1/3程度を切られている。隅丸方形を呈し、長軸の残存長は1.30mで、短軸は1.25mである。確認面からの深さは35.2cmで、底面は平坦であるが、立ち上がり部に浅い段が見られ、中央部に深さ３cmの浅い窪みが存在する。主軸方位はＮ－82°－Ｗである。覆土は黒褐色土である。遺物は検出できなかったが、重複関係及び覆土の状況から、古墳時代の土坑と判断した。

SI－017（第160図、図版85・87・90・94）〈N20－44グリッド周辺〉

Ｂ区中央部にあり、遺構の東側は調査区外に伸びる。SD－011に切られ、１号方形周溝墓（SD－003）を切る。規模は主軸が4.78m、短軸が4.76mで、方形に近い形状を示すが、南壁のみややいびつとなっている。主柱穴を３基検出し、P1は40.4cm、P2は33.1cm、P3は19.9cmの深さである。床面は南側に向かってやや傾き硬化面が存在する。周溝は南西隅を除いて廻る。周溝の幅は20cm前後であり、深さは５cm～10cmである。住居内北東隅には、略円形で規模が36.0cm×30.0cmで深さ23cmの小型の貯蔵穴の可能性があるピットが検出されている。

カマドは北壁中央に見られ、左袖の一部がSD－011によって破壊されている。

遺物（第160図、図版90・94）　１は丸底の土師器坏であり、カマド前面の床面直上から出土した。口径は14.7cmで、器高は4.3cmである。底部外面には手持ちヘラケズリが施され、口縁部外面及び内面に横及び斜め方向のミガキがなされる。胎土に白色針状物質を僅かに含む。内外面に黒斑が認められる。

２・３は土師器甕である。いずれもカマド内から出土した。２は口径が19.8cm、器高29.8cm、底径7.8cmであり、３は口径が18.8cm、器高32.3cm、底径7.4cmで、大きさ形状ともに類似している。口縁部よりも胴部に最大径があり、外面は横及び斜方向のハケ調整がなされ、ヘラナデが施されている。内面にはヘラナデがなされる。両者ともに灰色小石が多く含まれ、在地産の甕と考えられる。

４は、砥石である。砂岩製で最大長11.43cm、最大幅5.02cm、重量は229.8ｇである。

第３節　奈良・平安時代

当該期の遺構は竪穴住居跡11棟、掘立柱建物跡６棟、土坑５基、ピット34基を検出した。

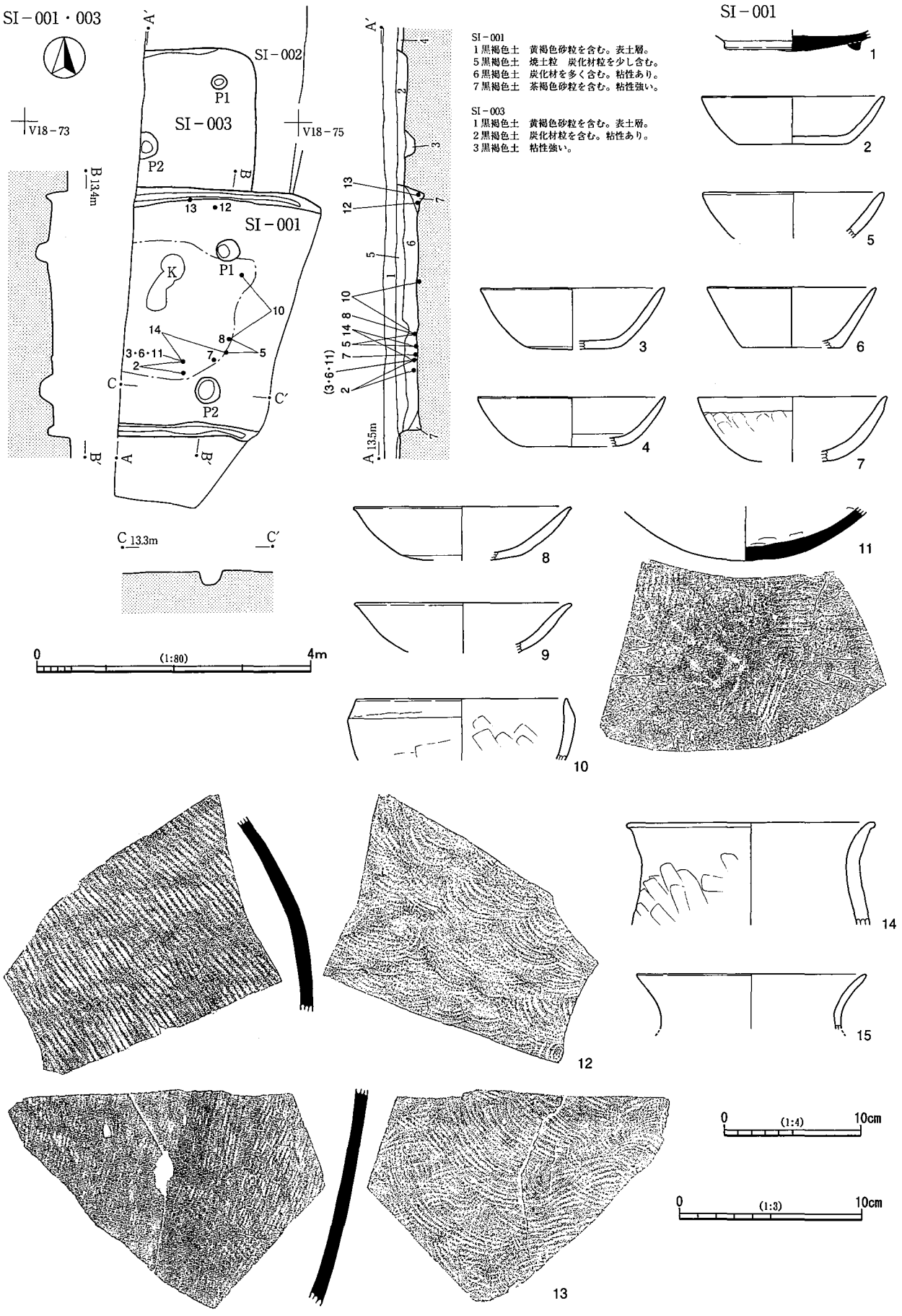
１　竪穴住居

SI－001・003（第162図、図版83・89）〈N18－74グリッド周辺〉

Ａ区南端部に位置し、３棟の竪穴住居跡が切り合っており、古墳時代の遺構と考えられるSI－002をSI－003が切り、さらにそれらをSI－001が切って存在する。

SI－001は、西側は調査区外まで伸び、東側は削平により不明となっている。南北の２面の壁が残存しており、南北の長さは3.65mで、軸方位はＮ－３°－Ｅである。カマドは検出しておらず、西壁若しくは

第161図　奈良・平安時代遺構配置図



第162図　SI－001・003

東壁にあるものと考えられる。住居跡中央部に硬化面があり、床面には凹凸が見られる。確認面から床面までの深さは34cmであり、ほかの２棟よりも深い。周溝が北・南壁沿いに見られ、幅は15cm～20cmで、深さは６cm～10cmである。主柱穴は２基を検出し、P1の深さは19.1cm、P2は20.5cmである。覆土は黒褐色土であり、上層には焼土・炭化粒が少量含まれ、下層は炭化材を多く含み、粘性のある層である。遺物は床面直上及び床面よりも若干浮いた状態で出土した。

SI－003は、南側は切り合いで不明となっており、西側は調査区外に伸び、遺構は北東隅を中心とした部分の検出となっている。軸方位はほぼ真北である。確認面から床面までの深さは最も深いところで14cmであるが、東部はほとんどSI－002とレベルが変わらず不明瞭となっている。床面には硬化面は見られず、ピットを２基検出した。北東隅にあるP1は深さ5.9cmの浅いものである。調査区外に伸びるP2は深さ20cmであるが、位置的に主柱穴とは考えられない。覆土は黒褐色土で、炭化粒を含む。

遺物は、小破片のみで実測できるものはなかったが、SI－001出土遺物の中に７世紀末～８世紀初頭とそれ以降の遺物が混在していることから、おそらく本遺構は７世紀末頃の竪穴住居と考えられる。

遺物（第162図、図版89） SI－001の遺物を15点図示した。１は須恵器の高台付坏であり、高台よりも底部が僅かに突出する形状を示し、７世紀末～８世紀初頭の時期の遺物である。ほかの土師器坏よりも時期的に古い遺物であり、おそらくはSI－003の遺物が混入したものと考えられる。底部は回転ヘラケズリが施された後に高台が貼り付けられている。底部内面は摩滅し、僅かに墨の痕跡と考えられる黒色部分が見られ、転用硯の可能性が認められる。

２～９は土師器坏であり、２は復元口径13.2cm、復元底部径8.2cm、器高3.6cmであり、底部は平底である。摩耗が著しく、底部外面に手持ちヘラケズリの痕跡が僅かに見られる。３は復元口径13.4cm、復元底径7.0cm、器高4.5cmであり、２よりも丸底気味の底部を有する。摩耗が著しく、調整技法は不明である。４は復元口径13.6cm、復元底径7.6cm、器高3.6cmであり、内外面とも摩耗が著しい。５は復元口径13.4cmで、内外面摩耗のため調整は不明である。６は復元口径12.3cmの小型の坏であり、底部は直線的に立ち上がっている。胎土に白色針状物資を含む。７は丸底気味の形態で、外面に指頭圧痕が見られ、内外面に横方向のナデが施されている。白色針状物質を含む。８・９は口縁部が開き気味の形状で、８は復元口径が16.0cm、９は15.8cmである。両者とも調整は摩耗のため不明である。

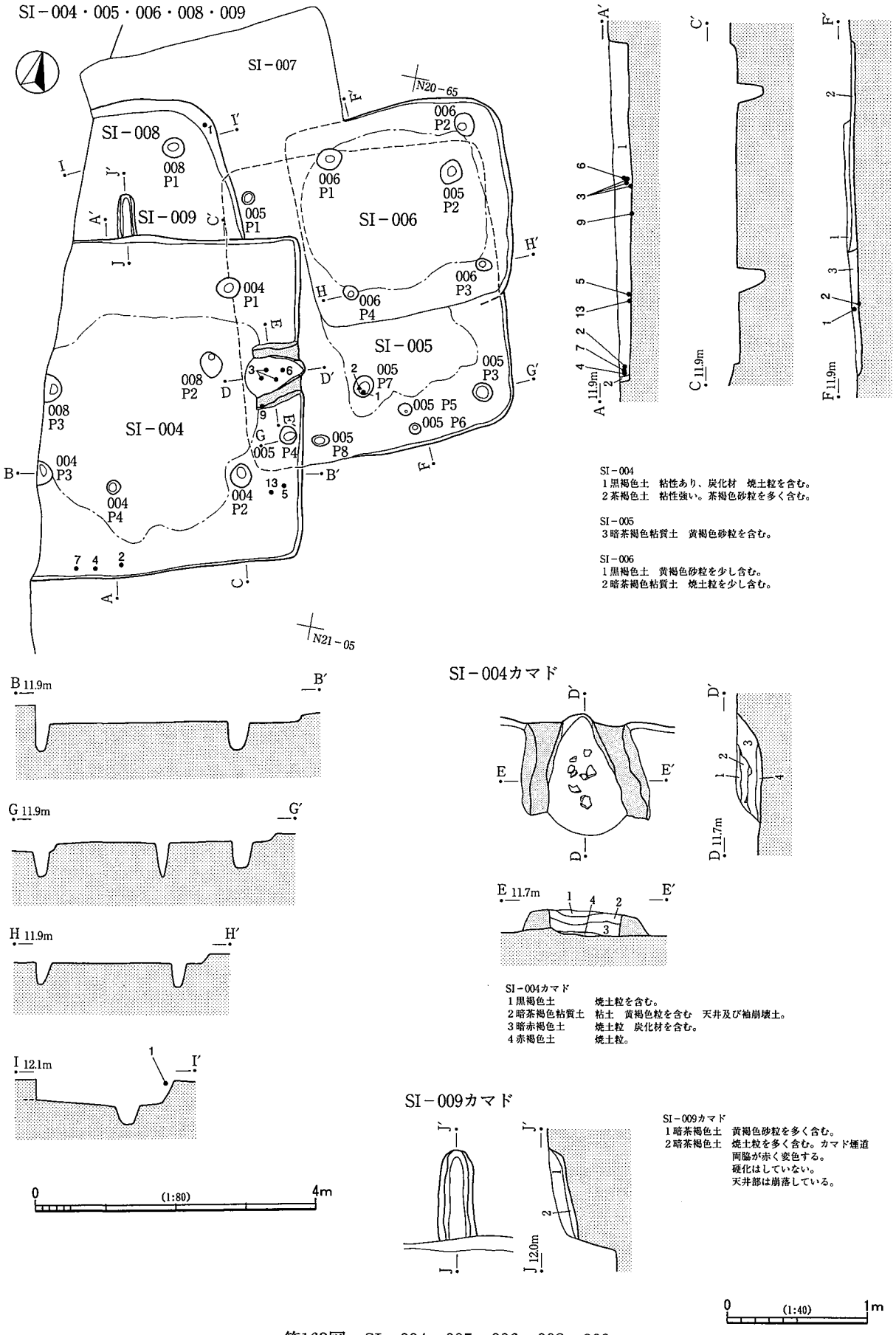
10は土師器鉢であり、復元口径15.4cmで、口縁部外面に粘土紐接合痕が見られ、外面には横方向の手持ちヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。

11は須恵器甕の底部片であり、外面には平行叩きが施され内面にはヘラケズリ及びヘラナデを施している。12・13は須恵器甕の胴部破片であり、外面には平行叩きがなされ、内面には細かな同心円文当て具痕が見られる。両者とも東海地域産の須恵器と考えられる。11～13はSI－003からの混入品の可能性が高い。

14・15は土師器甕で、14の口縁部径は復元で18.0cmである。口縁部と胴部の径がほぼ同じ大きさであり、古めの甕の形態に近い遺物である。胴部には斜方向のヘラケズリがなされる。15は、復元口径16.8cmの武蔵型甕の口縁部である。内外面に横方向のナデがなされる。

SI－004・005・006・008・009（第163・164・179図、図版83・89・94）〈N20－74グリッド周辺〉

Ｂ区南端に位置し、SI－004～SI－009まで６棟の竪穴住居跡が切り合う。竪穴住居跡の切り合い関係はSI－006が最も新しく、新しい順にSI－005、SI－004、SI－009、SI－008、SI－007となる。なお、すべて



SI－004カマド

SI－004カマド
1黒褐色土　焼土粒を含む。
2暗茶褐色粘質土　粘土　黄褐色粒を含む　天井及び袖崩壊土。
3暗赤褐色土　焼土粒　炭化材を含む。
4赤褐色土　焼土粒。

SI－009カマド

SI－009カマド
1暗茶褐色土　黄褐色砂粒を多く含む。
2暗茶褐色土　焼土粒を多く含む。カマド煙道両脇が赤く変色する。硬化はしていない。天井部は崩落している。

0　(1:40)　1m

第163図　SI－004・005・006・008・009

当該期の遺構であるが重複が著しいのでSI－007については別図で示し、時期が新しい住居跡順に説明することにしたい。

SI－006　SI－005・007を切って存在する。方形を呈するが、一部重複により不明瞭な箇所がある。規模は推定で3.0m四方である。確認面から床面までの深さは遺存度が良い箇所で17.3cmである。主軸方位はN－22°－Wである。床面には硬化面が見られ、主柱穴は４本がほぼ並行して検出され、深さはP1が35.2cm、P2は33.5cm、P3は33.8cm、P4 31.0cmであり、ほぼ同様な深さである。カマドは検出することができなかった。覆土は上層が黒褐色土で、黄褐色砂粒を少量含み、下層は暗茶褐色粘質土で、焼土粒を少し含む層である。

遺物は平安時代の土師器甕細片のみの出土であり、実測できる遺物は見られなかった。

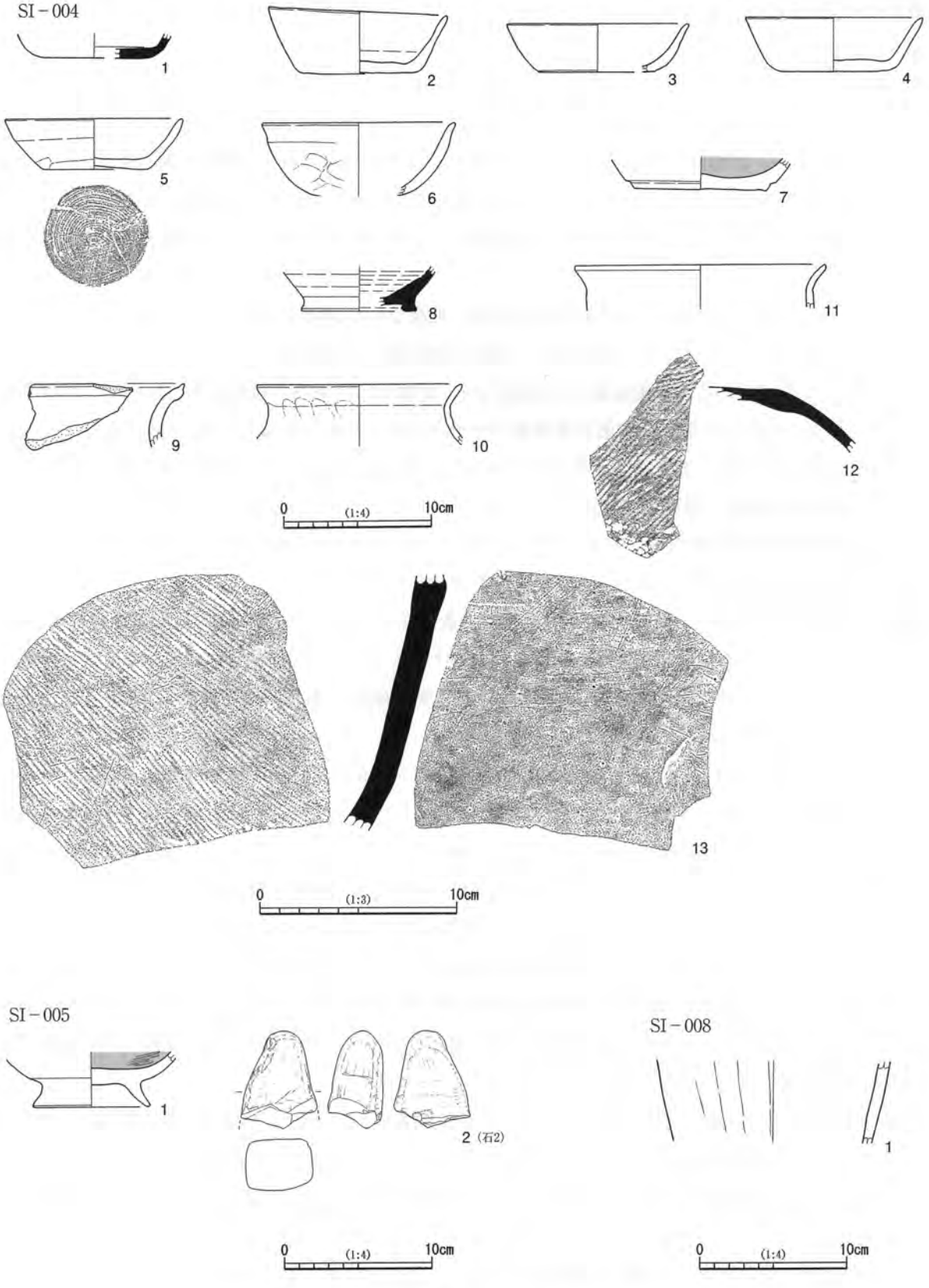
SI－005　SI－006に切られ、SI－004・007・008・009を切って存在する。方形を呈するが、一部重複により不明瞭な区域がある。規模は推定で長軸4.4m、短軸3.9mである。確認面から床面までの深さは遺存度が良い箇所で12.4cmであり、床面は南東側がやや下がる。主軸方位はN－18°－Wである。中央部の床面には硬化面が見られ、主柱穴は４本がほぼ並行して検出され、深さはP1が22.3cm、P2は56.2cm、P3は37.4cm、P4 26.6cmである。南壁際中央部に出入り口ピットと考えられる２基のピットが見られる。P5の規模は18.5cm×17.0cmで深さ47.7cmであり、P6は16.5cm×16.5cmで深さ37.0cmである。このほかに２基のピットが見られる。覆土は暗茶褐色粘質土で、焼土粒を少量含む。

遺物（第164図、図版89・94）　SI－005の遺物出土量は僅かである。１はロクロ土師器高台付椀であり、復元高台径は8.0cmで、高台を貼り付けた後に強いヨコナデを行っている。内面には丁寧なミガキが施され、炭素吸着による黒色処理がなされている。２は凝灰岩製の砥石であり、残存の最大長は6.62cm、最大幅5.19cm、重量88.1ｇである。

SI－004　SI－005に切られ、SI－007・008・009を切って存在する。住居跡の西側は調査区外に伸びており、東壁にあるカマドは上面をSI－005に切られて残存していた。平面形は方形を呈すると考えられ、南北は4.86mで、東西は4.6m前後と推定される。主軸方位はN－78°－Eである。確認面から床面までの深さは40.2cmである。床面は若干の凹凸が見られるが、ほぼ平坦であり、住居跡中央部に硬化面が認められる。主柱穴は３本を検出しており、P1は深さが37.0cm、P2は38.1cm、P3は38.2cmであり、ほぼ一定である。P2とP3の間にP4が見られるが、これは深さが10.8cmと浅く、性格不明のピットである。カマドは東壁の中央部にあり、構築材には粘土及び軟質の泥岩が使用されていた。泥岩は両袖の先端部に見られた。カマド内には土器片が多く分布し、底面付近は焼土層となっていた。主体となる住居跡の覆土は粘性のある黒褐色土で、炭化材、焼土粒を含む土である。

遺物（第164図、図版89）　SI－004からは比較的多くの遺物が出土し、床面直上及び覆土中位からの出土が見られる。１は須恵器坏であり、復元底径が7.4cmであり、底部外面に回転ヘラケズリが施される。

２～５はロクロ土師器坏である。２は厚手で、重量感がある。口径は12.4cm、底径7.6cm、器高4.5cmであり、調整は摩滅により不明である。３は復元口径12.4cm、底径8.0cm、器高3.3cmで、口縁部の内外面にヨコナデが顕著に見られる。底部には手持ちヘラケズリが施される。４はほぼ完形であり、底部が厚手で重量感がある。口径12.0cm、底径7.0cm、器高3.7cmで調整は摩耗のため不明である。５は口径12.0cm、底径6.7cm、器高3.7cmで、底部回転糸切り後に底部の外周部分の一部と下端に手持ちヘラケズリが施される。６は土師器椀であり、外面に手持ちヘラケズリの痕跡が僅かに残存する。７はロクロ土師器椀で、高台は



第164図　SI－004・005・008出土遺物

削り出し高台であり、内面にはミガキ後に炭素吸着による黒色処理が施されている。

8は須恵器の長頸壺の底部であり、底部回転ヘラケズリ後に高台を貼り付けている。内外面の一部に自然釉が付着する。9～11は土師器甕の口縁部であり、10は頸部に指頭圧痕が見られ、11は口縁部がつまみ出されており、胎土に白色針状物質が入る。

12・13は須恵器甕片である。12は肩部の破片であり、外面は平行叩きで、内面は横方向のナデがなされており、見えにくくなってはいるが細かな同心円文当て具の痕跡が残存する。13は大型の甕の胴部片であり、厚手で気泡が入り、器壁が膨張している箇所が見られる。外面は平行叩きであり、内面には無文の当て具が使用され、ヘラケズリがなされた部分もある。黒色の吹き出し釉が顕著に見られる。

SI－009　SI－004に切られ、SI－008を切って存在する。本遺構はSI－004に遺構のほとんどを切られており、カマドの煙道部分のみの残存であり、SI－004の南壁に見られる。覆土は焼土粒を多く含んでおり、内面の両脇が赤く変色するが、硬化面は認められなかった。カマドの軸方位はN－13°－Wである。

遺物は検出できなかった。

SI－008　SI－005・004・009に切られ、SI－007を切っている。遺構の半分は調査区外に伸びており、規模は不明な点が多いが、SI－004内から本遺構の主柱穴と考えられるP2・P3を検出しており、南北方向の規模は4.6m前後と推定できる。床面は平坦であり、硬化面は認められなかった。確認面から床面までの深さは33.8cmである。主柱穴の深さはP1が17.9cm、P2は19.3cm、P3は31.3cmである。遺物の出土は僅かであり、1個体のみの実測である。

遺物（第164図）　1は土師器甕の胴部片であり、外面には幅の広い縦方向のヘラケズリが施されている。胎土に灰色小石を含み、在地産の甕と考えられる。

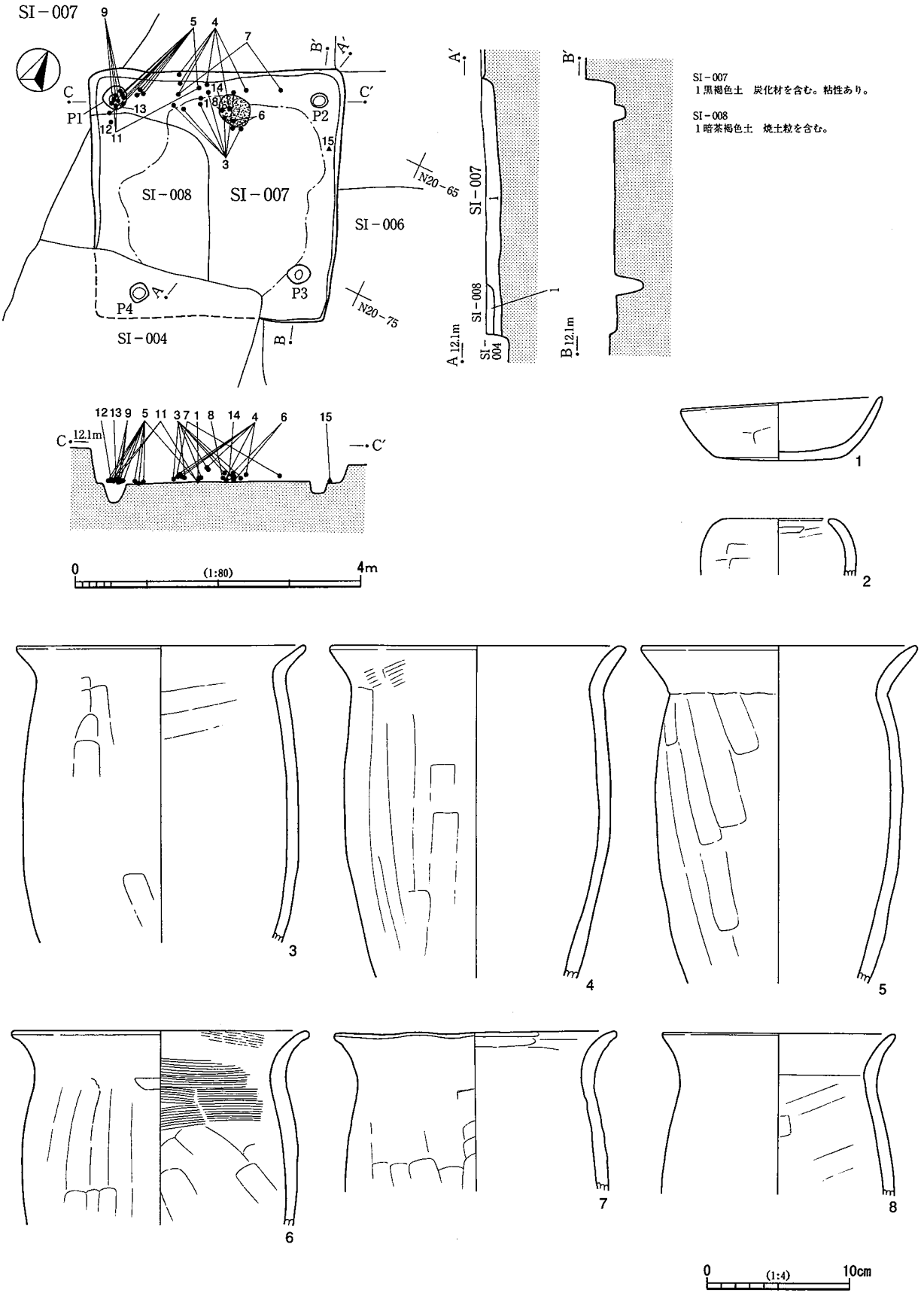
SI－007（第165・166図、図版84・89・94）〈N20－63グリッド周辺〉

SI－005・006・008・009に切られて存在するが、確認面から床面までの深さが43.4cmあり、本遺跡の竪穴住居跡の中でも掘り込みが深い遺構であったため、床面はSI－004に切られた部分以外は残存していた。規模は3.56m×3.59mで、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN－24°－Wである。床面中央には硬化面が見られ、主柱穴は四隅に近い位置にある。主柱穴の深さはP1が26.4cm、P2は15.9cm、P3は38.5cm、P4が37.6cmであり、差がある。床面はほぼ平坦である。

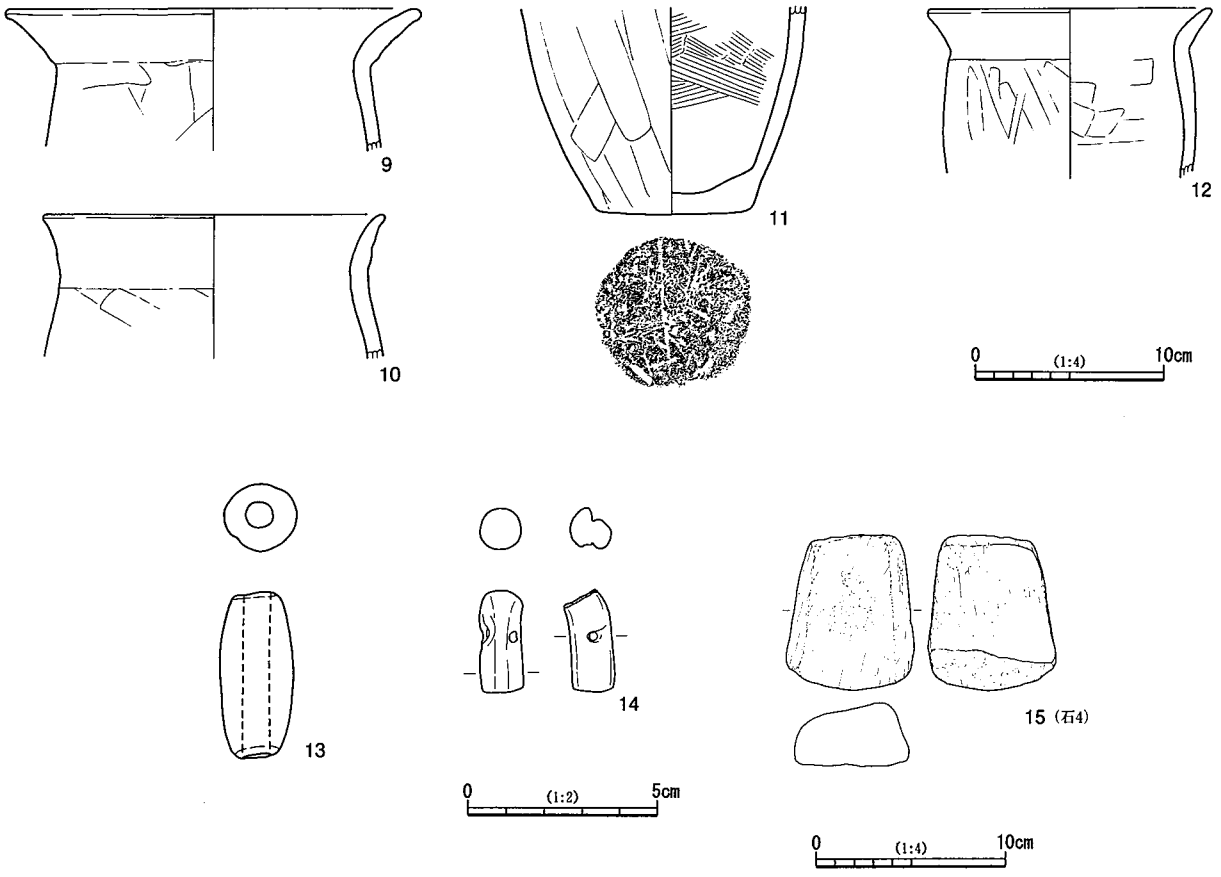
北壁沿いの中央に強く火を受けた面が認められる。構築材等は見られなかったが、おそらくこの部分にカマドが構築されていたものと考えられる。覆土は黒褐色土で、炭化材を含む層である。遺物はカマド火床面と考えられる周囲と、主柱穴P1からまとまって出土した。

遺物（第165・166図、図版89・94）　1は土師器坏であり、復元口径は14.0cmであり、底径は8.0cm、器高は4.1cmである。摩滅が著しいが、外面に横方向の手持ちヘラケズリの痕跡が僅かに残る。2は土師器無頸壺であり、外面には手持ちヘラケズリ、内面にはヘラナデが見られる。

3～12は土師器甕であり、口縁部に最大径を有するものが多い。3～7・9・11・12の胎土には灰色小石があり、在地産と考えられる。3・4はほぼ復元口径が同じであるが、3は口縁部が短いタイプの甕であり、外面には縦方向のヘラケズリがなされ、内面にはヘラナデが施される。4は外面胴部下半に縦方向のヘラケズリ、上半にはヘラナデがなされ、口縁部外面の一部には荒いハケが施されている。5は胴部に幅の広い縦方向のヘラケズリがなされる。6は胴部外面に縦方向のヘラケズリ、内面の胴部は斜方向のヘ



第165図　SI－007（1）



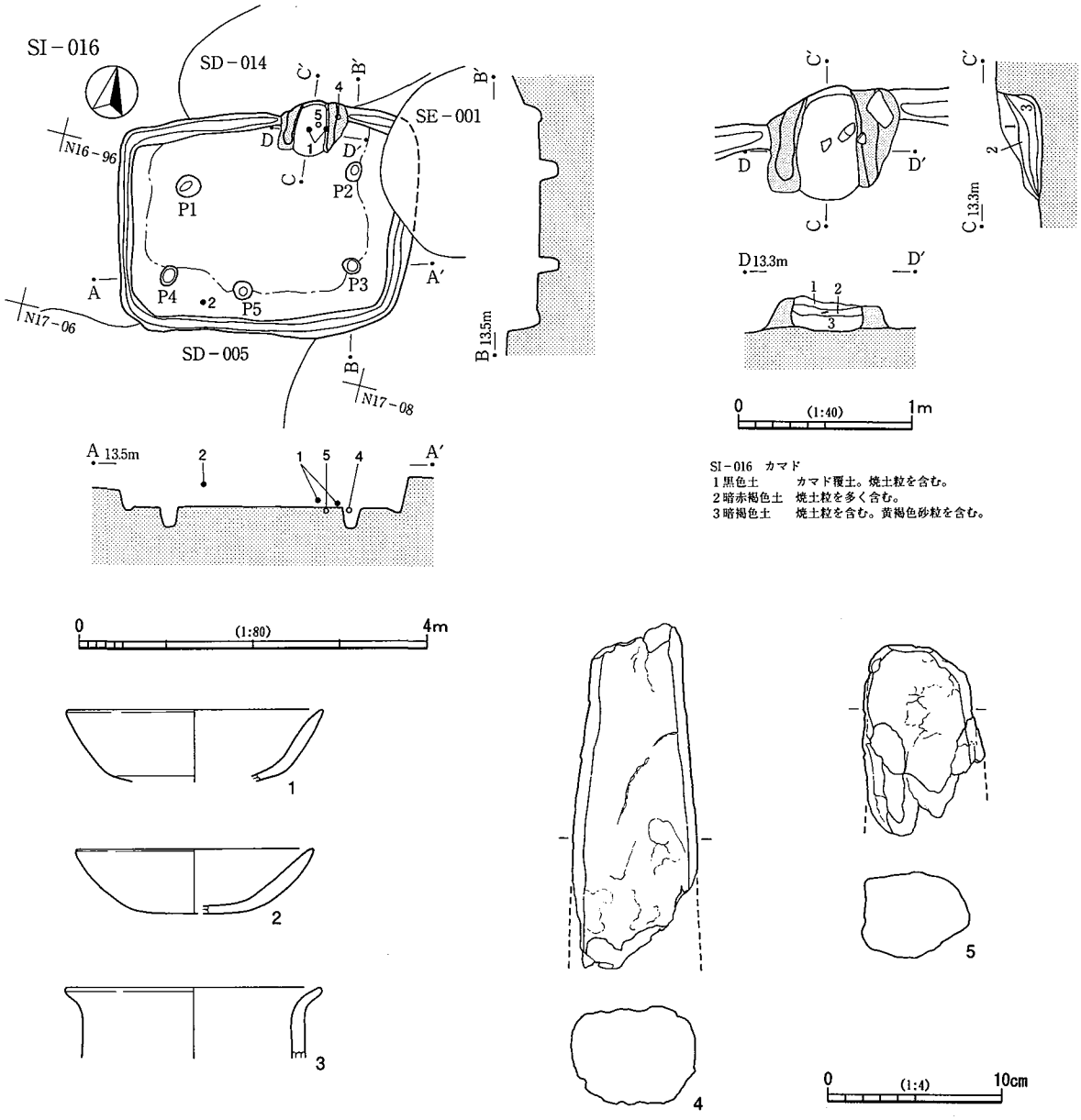
第166図　SI－007（２）

ラナデ、頚部には横方向のハケがなされる。７は胴部外面に縦方向のヘラケズリがなされ、上半部にはヘラナデがなされる。８は復元口径16.8cmで、若干口径が小さい甕であり、口径と胴部最大径がほぼ同じ大きさである。内面にはヘラナデがなされる。外面の調整は摩耗により不明である。９は口縁部が大きく開く形態であり、頚部外面に横方向のヘラケズリを強く入れている。10は口縁部よりも胴部に最大径を有し、胴部外面はヘラナデがなされ、口縁部は横方向のナデが顕著に見られる。11の底部外面には木葉痕があり、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面には荒い横方向のハケがなされ、底部内面には荒いナデが見られる。12は復元口径が15.1cmの小型の甕であり、胴部外面には縦方向の細かなヘラナデがなされ、内面は横方向のヘラナデが施される。

13は土錘であり、最大長は4.4cm、最大幅1.8cmで、孔径は0.65cm、重量10.80ｇである。14は不明土製品であり、断面形は円形で両側面に窪みを有する。最大長は2.7cmで、最大幅1.15cm、重量3.86ｇである。15は砂岩製の砥石であり、裏面には黒色の油煙が付着する。最大長8.23cm、最大幅6.79cm、重量351.8ｇである。

SI－016（第167図、図版84・85・90・94）〈N16－97グリッド〉

Ａ区北半部に所在し、中世の井戸SE－001に切られ、１号墳（SD－005b・006b・008・009）の周溝と５号方形周溝墓（SD－014）を切って存在する。平面形は横長の方形であり、規模は2.57ｍ×3.40ｍである。北壁にカマドがあり、主軸方位はＮ－13°－Ｗである。確認面から床面までの深さは36.8cmであり、遺存

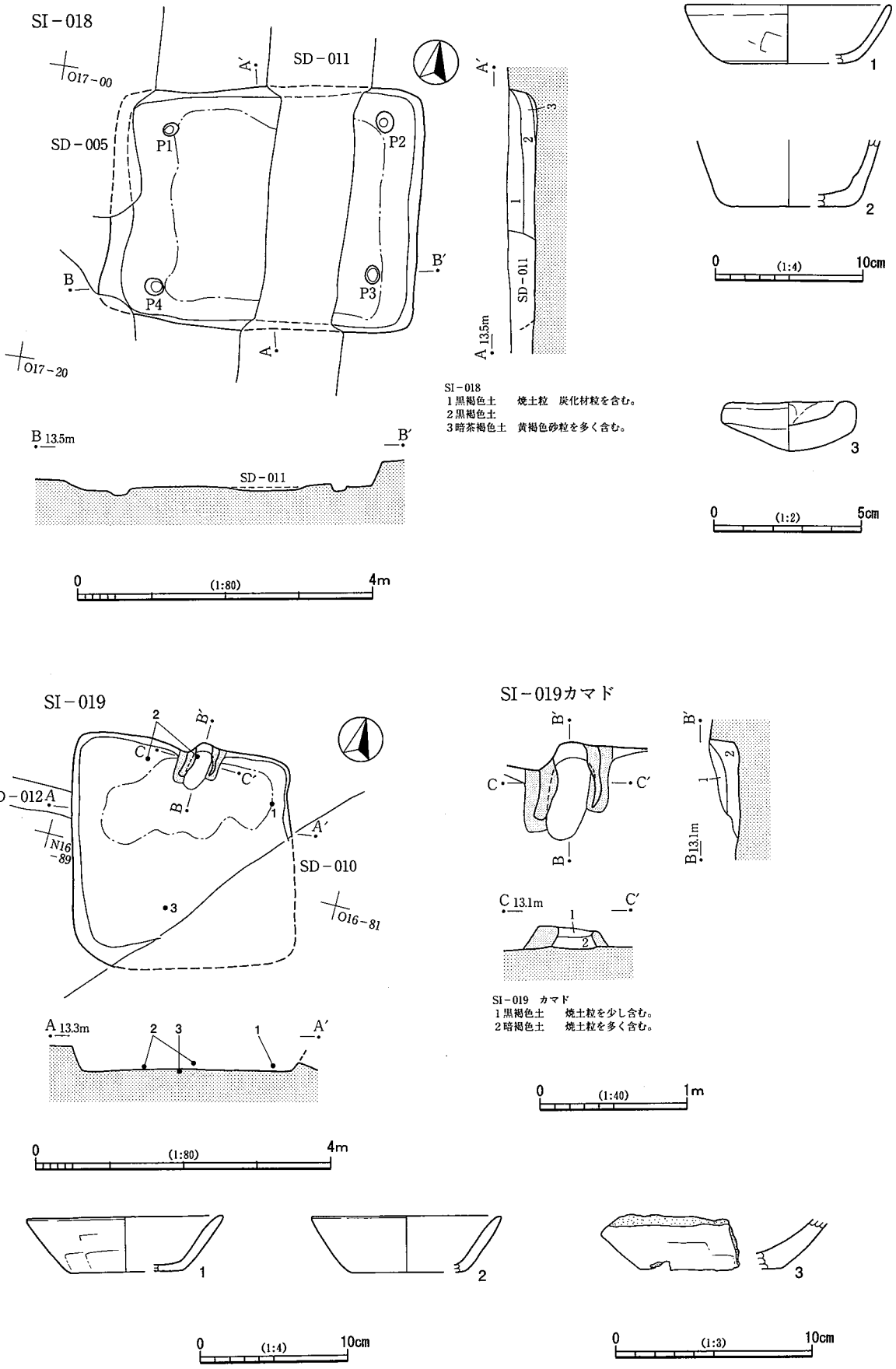


第167図 SI－016

状態は良好である。周溝が全周するが、幅は15cm～27cmで深さは２cm～５cmの浅いものである。床面にはカマドを囲むように硬化面が見られる。主柱穴は４基があり、北西部のP1のみが住居中心に寄っている。P1の深さは24.3cm、P2は22.0cm、P3が24.0cm、P4は22.2cmであり、ほぼ均等な深さである。出入り口ピットが南壁の中央西寄りから20cm程度離れて見られ、深さは24.6cmである。

カマドは北壁中央のやや東寄りにあり、奥壁は直線的に立ち上がる。両袖の内側は被熱痕が顕著であった。カマド内からは土製支脚、土師器坏が出土した。

遺物（第167図、図版90・94） １・２は土師器坏であり、１は復元口径14.6cm、底径9.8cmであり、丸底気味の底部を有する。内外面の調整は摩耗により不明である。胎土に灰色小石を含む。２は復元口径13.7cm、底径7.1cm、器高3.7cmで、１よりもやや小振りである。底部は丸味を有する。胎土に灰色小石を含み、１・２は在地産のものである可能性が認められる。３は、復元口径が14.6cmの小型の土師器甕である。口



第168図　SI－018・019

縁部に最大径があり、胴部は直線的である。４・５は土製支脚であり、４は下部が全体の1/5程欠損するが、遺存状態は良好であり、四面に面取りがきれいに施され、上半には被熱痕が見られる。５については1/3程度の残存であり、上面の一部に被熱痕が見られる。

SI－018（第168図、図版85・90）〈O17－01グリッド〉

Ａ区北半部にあり、SI－016から５ｍ程離れて見られる。２号墳（SD－005・006・008・009）と４号方形周溝墓（SD－010）を切り、中世のSD－011と平安時代の掘立柱建物跡SB－006によって切られる。SD－011は住居跡中央を切っており、本遺構のカマドはこの遺構によって壊されているものと考えられる。

形状は横長の方形を呈し、規模は3.37ｍ×4.29ｍである。主軸方位はＮ－4°－Ｗである。確認面から床面までの深さは38㎝であり、壁は西壁以外は直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦であり、中央部には硬化面がある。主柱穴は４本がほぼ並行に見られ、深さはP1が11.3㎝、P2は8.2㎝、P3が8.3㎝、P4は7.5㎝であり、他の竪穴住居と比較して浅いものとなっている。遺物は覆土一括の取り上げである。

遺物（第168図、図版90）　１は土師器坏で、復元口径13.8㎝、底径10.0㎝、器高4.0㎝である。外面には斜方向のヘラケズリがなされる。２は土師器甕の底部であり、復元底径は7.0㎝である。胎土に灰色小石を多量に含む在地産の土器である。調整は摩耗により不明である。３はミニチュアの坏であり、内面には指頭痕が見られる。

SI－019（第168図、図版85・90）〈N16－79グリッド〉

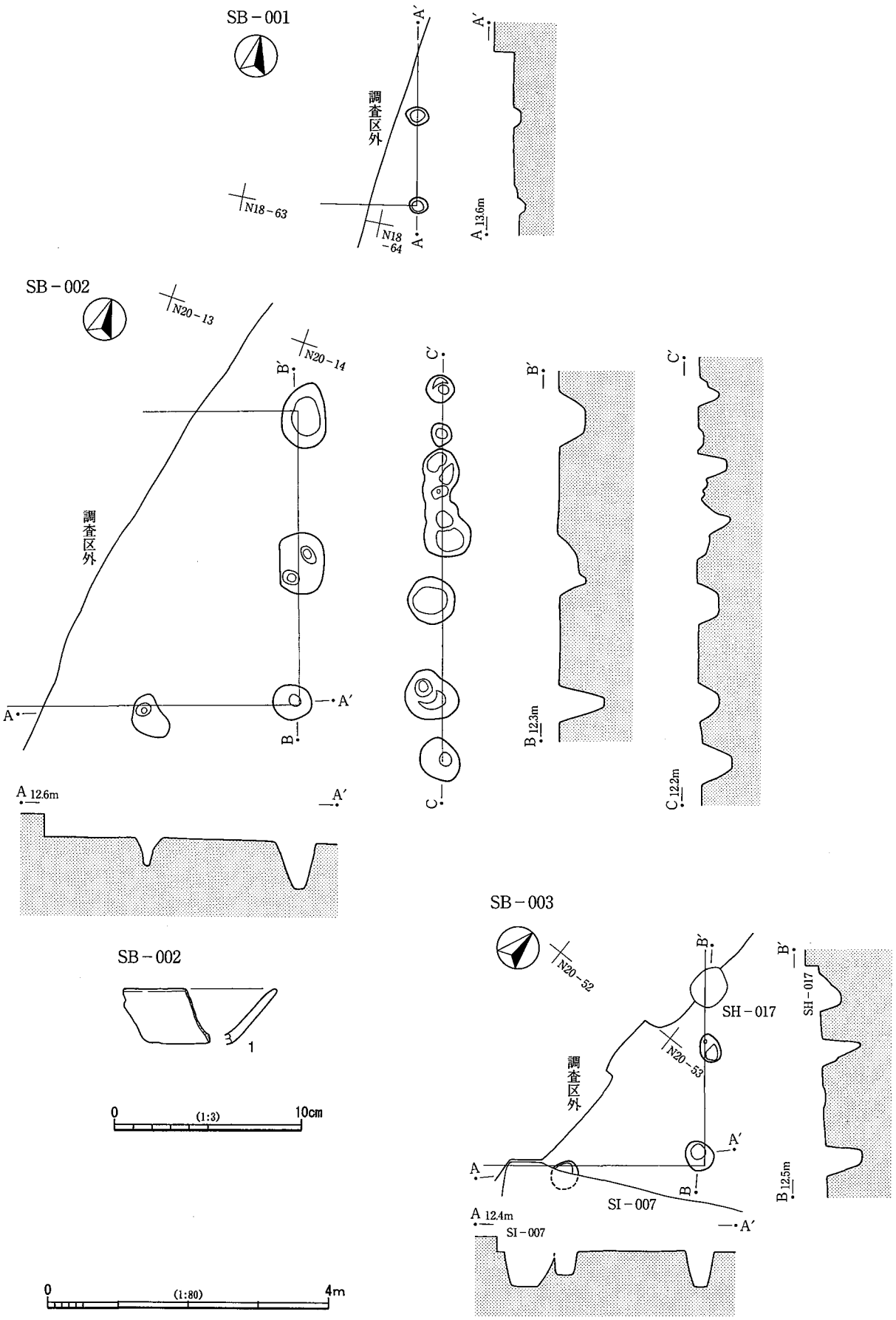
Ａ区北半にあり、SI－018の北西３ｍの距離にある。５号方形周溝墓（SD－014）を切って存在する。形状は方形であるが北西隅がやや突出しており、規模は3.14ｍ×3.04ｍである。主軸方位はＮ－15°－Ｗであり、北壁の中央部にカマドを有する。床面から確認面までの深さは43.2㎝と深い。硬化面はカマドの周囲に見られ、床面は南に向かって僅かに傾斜する。主柱穴は検出することができなかった。

カマドもややいびつな形状であり、やや西に傾いた状態で構築されている。両袖はオーバーハングしており、内側は焼けていた。左袖部のほうが残りが良く、覆土下面には焼土が多く存在したが、火床面には僅かに被熱の痕跡が見られたのみであった。奥壁は緩やかに立ち上がった後に直立する。遺物はカマド内及びその西側と、南壁近くから出土しており、床面近くからの出土である。

遺物（第168図、図版90）　１・２は土師器坏であり、１は復元口径13.2㎝で、底径7.8㎝、器高3.7㎝であり、外面に強い手持ちヘラケズリが入る。灰色小石が含まれ、在地産の土器と考えられる。２は復元口径12.8㎝で、内外面の調整は摩耗のため不明である。３は土師器甕の底部破片である。外面には横方向のヘラケズリが施される。

２　掘立柱建物

掘立柱建物跡は６棟を検出した。掘立柱建物跡は３か所に分かれて分布し、Ａ区北半部に２棟、Ａ区南半部に１棟、Ｂ区中央部に２棟が見られる。なお、その周辺からは、ほかにも多くの柱穴を検出したが、建物跡と認識することができなかった。単独の柱穴でも、覆土から遺物が出土している場合にはSHとし、遺構として認識した。SHについては別に触れることにしたい。



第169図　SB－001・002・003

SB－001（第169図）〈N18－54グリッド〉

A区南半部にあり、大部分が調査区外に伸びる掘立柱建物跡である。古墳時代のSI－002を切って存在する。1間分のみの検出であり、柱穴の規模は27cm～36cmであり、柱間は1.2mと非常に小さい。柱穴の確認面から底面までの深さは8.7cmと12.3cmで浅いが、この区域は上面がかなり削平されており、竪穴住居跡も床面近くの検出であることを考えれば、もとは数十cmの深さはあったものと考えられる。主軸方位はN－11°－Wである。遺物は灰釉陶器と考えられる細片が出土した。

SB－002（第169図、図版85）〈N20－23グリッド〉

B区中央部に所在し、古墳時代のSI－010・011・012・013を切り、SH－003と重複する。建物跡は調査区外の西側に伸びる。規模については南北方向は2間で東西方向は2間若しくは2間以上の建物跡と考えられるが、柱間がいずれも2.1m（7尺）であり、東西棟か南北棟の区別ができない。方位はN－19°－Wである。柱掘り方の規模は、91cm×62cmの大型のものから58cm×52cmの小型のものまでがあり、深さについても37cm～65cmと差異が大きい。遺物は土師器坏細片と薄手の土師器甕細片が出土した。

なお、SB－002から2m東側に離れた箇所に、同軸で柱列が見られる。掘り方が重複して不明瞭なうえに、不規則であり、不明な点が多い。SB－002のための目隠し塀の可能性も考えられる。

遺物（第169図） 実測できた遺物は1個体のみである。1は8世紀後半の土師器坏の口縁部片であり、内外面とも摩耗のため調整は不明である。

SB－003（第169図）〈N20－53グリッド〉

B区中央に見られ、SB－002の南に位置する。SB－002と重複する可能性がある。SI－007と重複するが、新旧関係は不明である。主軸はN－37.5°－Wにあり、南北棟の建物で桁行柱間は1.8m、梁行は2.0mである。柱掘り方は楕円形で、長軸40cm～45cm、短軸30cm～40cmで小型のものであるが、深さは33cm～54cmと深い。遺物は土師器坏・甕の細片が出土したのみであり、実測できる遺物は検出できなかった。時期的には、古墳時代後期から奈良時代前半の遺物である。

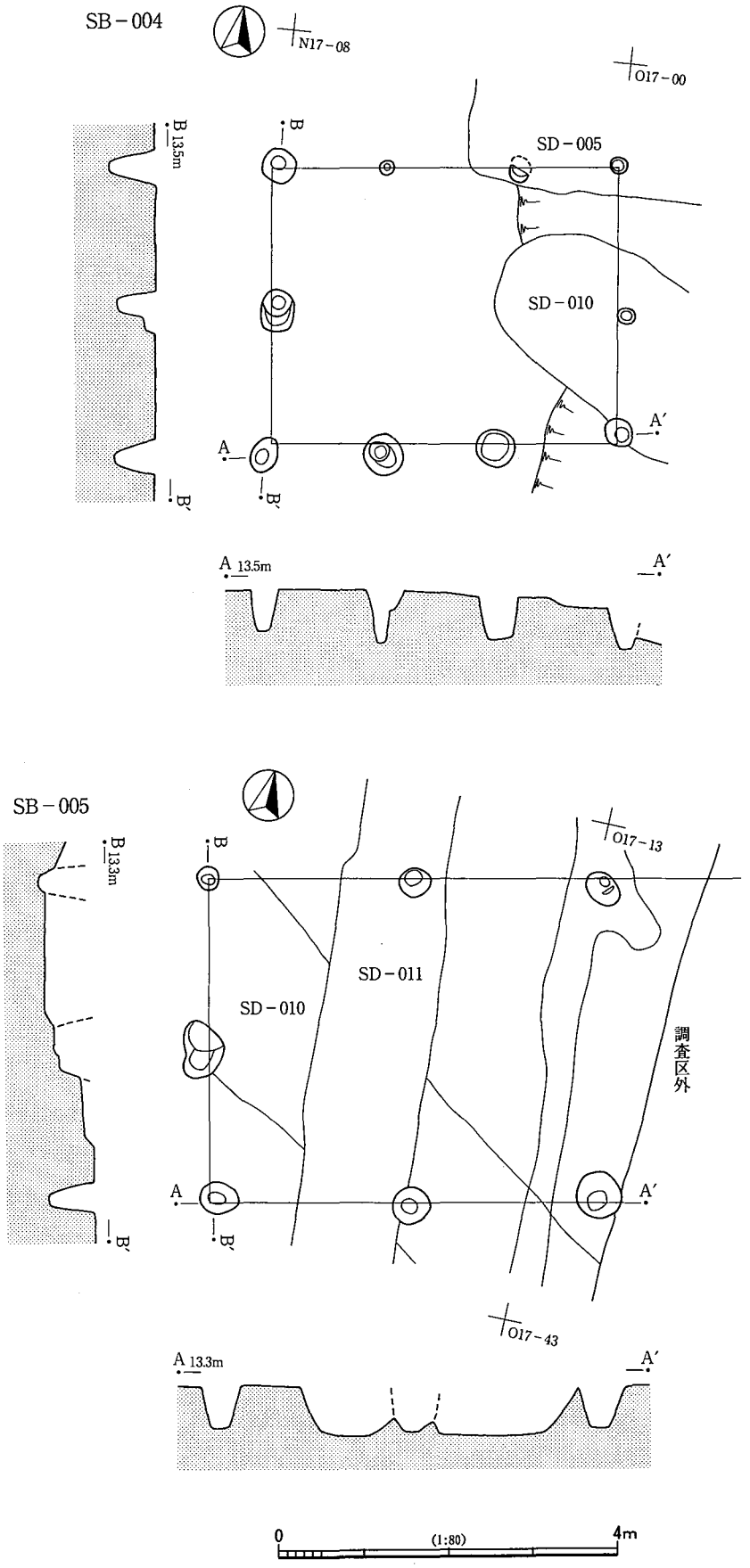
SB－004（第170図、図版85）〈N17－18グリッド〉

A区北半部に位置し、4号方形周溝墓（SD－010）と2号墳（SD－005b・006b・008・009）の周溝を切って存在する。2間×3間の東西棟の建物で、桁行4.1m、梁行3.3mの規模を有する。主軸方位はN－6.5°－Wである。柱掘り方は重複や削平等により、遺存状態が悪い箇所が見られるが、おおよその掘り方の規模は、40cm～50cmであり、深さは44cm～62cmである。

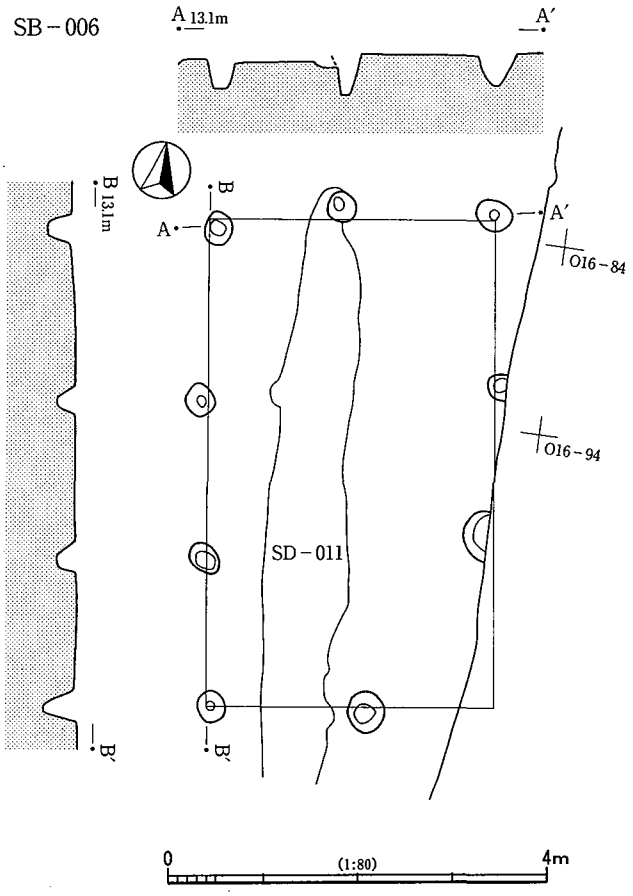
遺物は実測できるものは出土せず、奈良時代の土師器細片のみであった。

SB－005（第170図、図版85）〈O17－21グリッド〉

A区北半部にあり、SB－004の東1mほどの距離に見られる。中世のSD－011に切られ、4号方形周溝墓（SD－010）を切り、SI－018と重複する。東側は調査区外に伸びており不明な点が多いが、おそらくは2間×3間の東西棟の建物であると考えられる。梁行は3.8mである。軸方位はN－10°－Wである。柱掘り方は重複により削られた部分もあり、かなり小さくなっている箇所も存在する。それらを除外した規



第170図　SB－004・005



第171図　SB－006

模は40cm～60cmであり、深さは34cm～51cmである。遺物は奈良時代の土師器の細片が出土したのみである。

SB－006（第171図、図版86）〈O16－92グリッド〉

A区北半部にあり、SB－005の北1.5mほどの距離に見られる。中世のSD－011に切られ、SI－018と重複する。2間×3間の南北棟の建物であり、規模は桁行が5.2m、梁行は3.0mである。梁間が不揃いである。軸方位はN－7.5°－Wである。柱掘り方の規模は33cm～54cmであり、深さは35cm～45cmである。遺物は出土していない。

3　土坑

土坑は5基を検出している。

SK－001（第172図）〈N20－35グリッド〉

B区中央部にあり、古墳時代のSI－013を切っている。形状は長方形を呈し、規模は1.73m×1.31mで、確認面からの深さは25.4cmである。底面は僅かに凹凸が見られる。主軸方位はN－75°－Eである。覆土は黒褐色粘質土で、炭化材や焼土粒が見られた。薄手の土師器甕の細片が出土しており、遺構の時期は平安時代と考えられる。

SK－003（第172図、図版86）〈O17－50グリッド〉

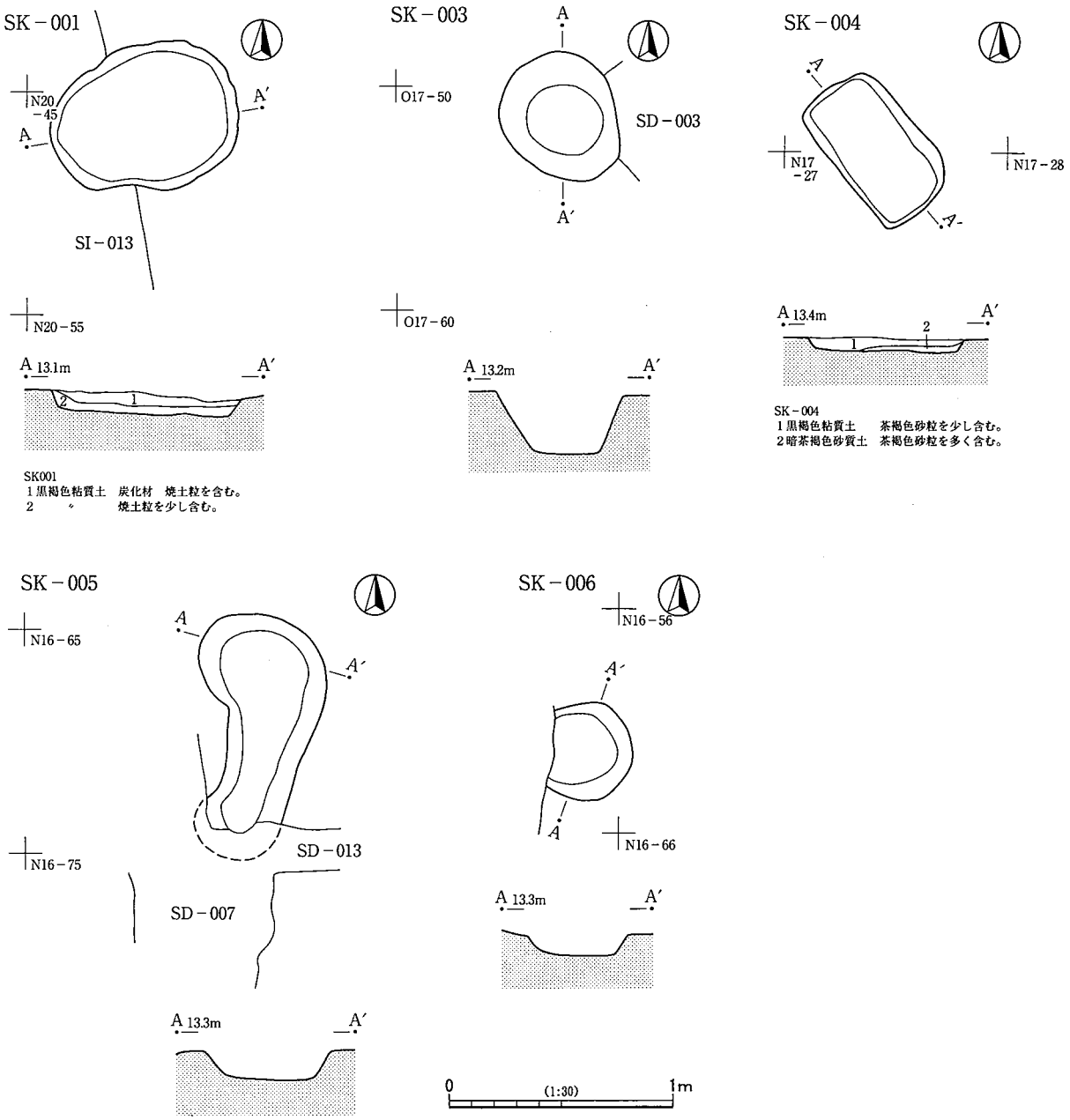
A区北半部中央にあり、SD－013と重複して存在する。略円形の形状で、規模は1.20m×1.04mで、確認面からの深さは57.7cmである。底面は平坦であり、断面形は逆台形状を呈する。軸方位はN－30°－Wである。遺物は古墳時代後期～平安時代の土師器坏・甕の細片が含まれており、本遺構の時期は平安時代と考えられる。

SK－004（第172図）〈N17－17グリッド〉

A区北半部中央にあり、形状は長方形で規模は1.40m×0.80mである。確認面からの深さは12.1cmである。底面は平坦である。覆土上層は黒褐色粘質土で、下層は暗茶褐色砂質土である。遺物は出土していない。

SK－005（第172図）〈N16－66グリッド〉

A区北部に見られ、形状は不整形であり、南側はSD－013と重複する。長軸の残存長は2.0mで、短軸は1.17mである。確認面からの深さは28cmである。遺物は出土していない。



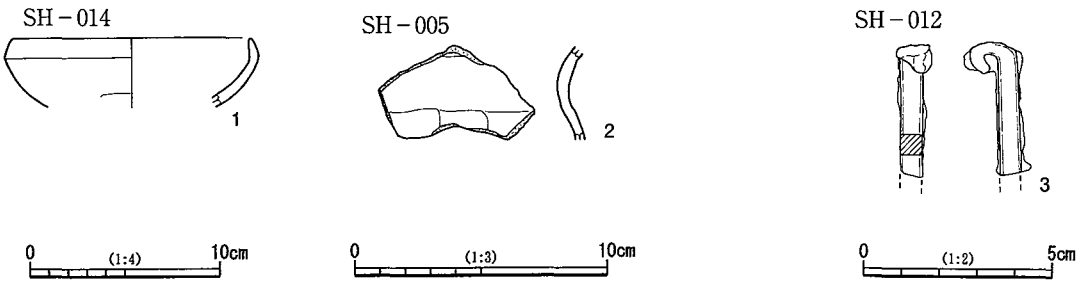
第172図　SK－001・003・004・005・006

SK－006（第172図）〈N16－55グリッド〉

A区北部にあり、SK－005の北に見られる。西側は調査区外に伸びる。形状は、円形を呈すると考えられ、規模は0.9m前後である。確認面からの深さは22.9cmであり、断面形は皿形を呈する。遺物は出土していない。

4　ピット群

ピットについては、掘立柱建物の柱掘り方の可能性があるものや、単独のものがあると考えられるが、具体的な性格が不明である。ここでは、遺物が出土したピットのみを遺構として取り上げた。



第173図　SH－005・012・014出土遺物

これらのピットから出土した遺物は大半が奈良・平安時代の所産のものであるので、奈良・平安時代の項目で一括して説明する。なお、中世の遺物はピットからは検出できなかった。また、ピット形態も中世の柱穴の特徴である四角い形状の柱穴は検出されず、中世の時期のピットと積極的に認識できるものは認められなかった。

ピットについては第161図・表３を参照していただきたい。ピットは発掘調査時にSH－001～SH－045まで番号を付与したが、重複や遺物が自然遺物であったことなどから、SH－002・006～008・019・029・042・043の８基を欠番とした。

（１）弥生時代の所産の遺物が出土したピット（第161図）

Ａ区の南半部に２基が認められる。SH－020はＮ18－44グリッド、SH－021はＮ18－34グリッドに所在する。両者とも弥生時代の壺の細片が出土している。両遺構の距離は３ｍ程度と接近しており、関連する遺構である可能性が考えられる。

（２）古墳時代の遺物が出土したピット（第161・173図）

確実に古墳時代の所産と考えられるピットは、Ｂ区のＮ20－34グリッドにあるSH－014の１基のみである。土師器坏が出土している。

なお、このほかに土師器細片のみが出土した遺構については、古墳時時代の所産の可能性も考えられるが、時期が特定される遺物の大半が奈良・平安時代のものであることを勘案するならば、古墳時代のピットは存在したとしても僅かな基数であると認識できる。また、このSH－014についても古墳時代後期のSI－013の脇に存在し、そこからの流れ込んだ土器の可能性も認められる。

遺物（第173図）　１はSH－014から出土した丸底の土師器坏である。内外面ともに摩滅しており、外面に僅かに横方向の手持ちヘラケズリが認められる。

（３）奈良・平安時代のピット

全部で34基が見られ、Ａ区の北西部と中央部、Ｂ区の中央部に多く分布し、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が認められるものも存在する。

Ａ区北西部Ｎ16－75グリッドを中心とするピット群（第161図）　SH－033～SH－040の８基が、調査区西壁際に北から南に分布し、大部分が円形を呈する。これらの長軸の長さは42cm～65cm、短軸は32cm～54.5cmであり、深さは9.1cm～42.4cmまでのものがある。ピットの浅いものについては上面をSD－007に壊されているのが要因であり、深さ自体は本遺跡の掘立柱建物跡の柱掘り方の規模と比較しても遜色がない。掘立柱建物跡の柱掘り方の一部になる可能性が高いピット群である。

なお、この群の南側には、SH－032・041・044・045が見られるが、SH－032は単独出土で性格は不明

である。O17－31グリッドのSH－041及びO17－03グリッドのSH－044とN17－07グリッドのSH－45には周囲に時期不明のピットやそれぞれ、SB－005、SB－006、SB－004が見られ、掘立柱建物跡の柱掘り方の可能性が認められる。SH－041の規模は50cm×38cmで、深さは12.5cmである。SH－044の規模は31.5cm×30cmで、深さは20cmである。SH－45の規模は34cm×31.5cmで、深さは40cmである。

A区中央部N17－65グリッドを中心とするピット群（第161図） SH－023・024・026～028・30・31の7基が見られる。これらの規模は長軸33.5cm～68cm、短軸26.5cm～63cmで、深さは23.1cm～53.6cmである。A区北西部のピット群よりも大きさに差がある。なお、すぐ南東には多くの時期不明のピット群があるが、掘立柱建物跡として認識することができなかった。

また、この群よりも南にはSH－022・025が存在するが、両者についても性格は不明である。

B区中央部N20－34グリッドを中心とするピット群（第161・173図、図版94） SH－001・003～005・009～013・015～018の13基が見られる。SB－002・003の周囲に分布しており、時期不明のピット群も存在することから、掘立柱建物跡の柱掘り方になる可能性が高いものが含まれる。SH－012とSH－013が重複するなど、2棟以上の掘立柱建物の存在を予見させるが、調査した部分の面積が少ないため不明な点が多い。これらピットの規模は、重複及び及び柱抜き取りにより1ｍを超す遺構が見られ、長軸幅は40.5cm～105.5cm、短軸幅は28.5cm～86.5cmである。掘り方の大きさは40cm～50cm台が中心であり、ほかの区域のピットよりも大型のものが多い。深さは、ほかの遺構と重複して浅くなっているものを除くと26.4cm～56.5cmであり、付近で検出したSB－002・003の規模と遜色がない。遺物は実測できる個体としては、SH－005からは土師器甕片が出土し、SH－012から鉄製品が出土した。

遺物（第173図、図版94） 2は、SH－005出土の土師器武蔵型甕の「コ」の字状頸部片であり、9世紀代の遺物である。外面には横方向のヘラケズリがなされる。3は、SH－012出土の鉄鏃片であり、端部は折り曲げられている。現在長は35.95㎜、最大幅5.85㎜、最大厚は5.54㎜で、重量は4.12ｇである。

第4節　中世以降

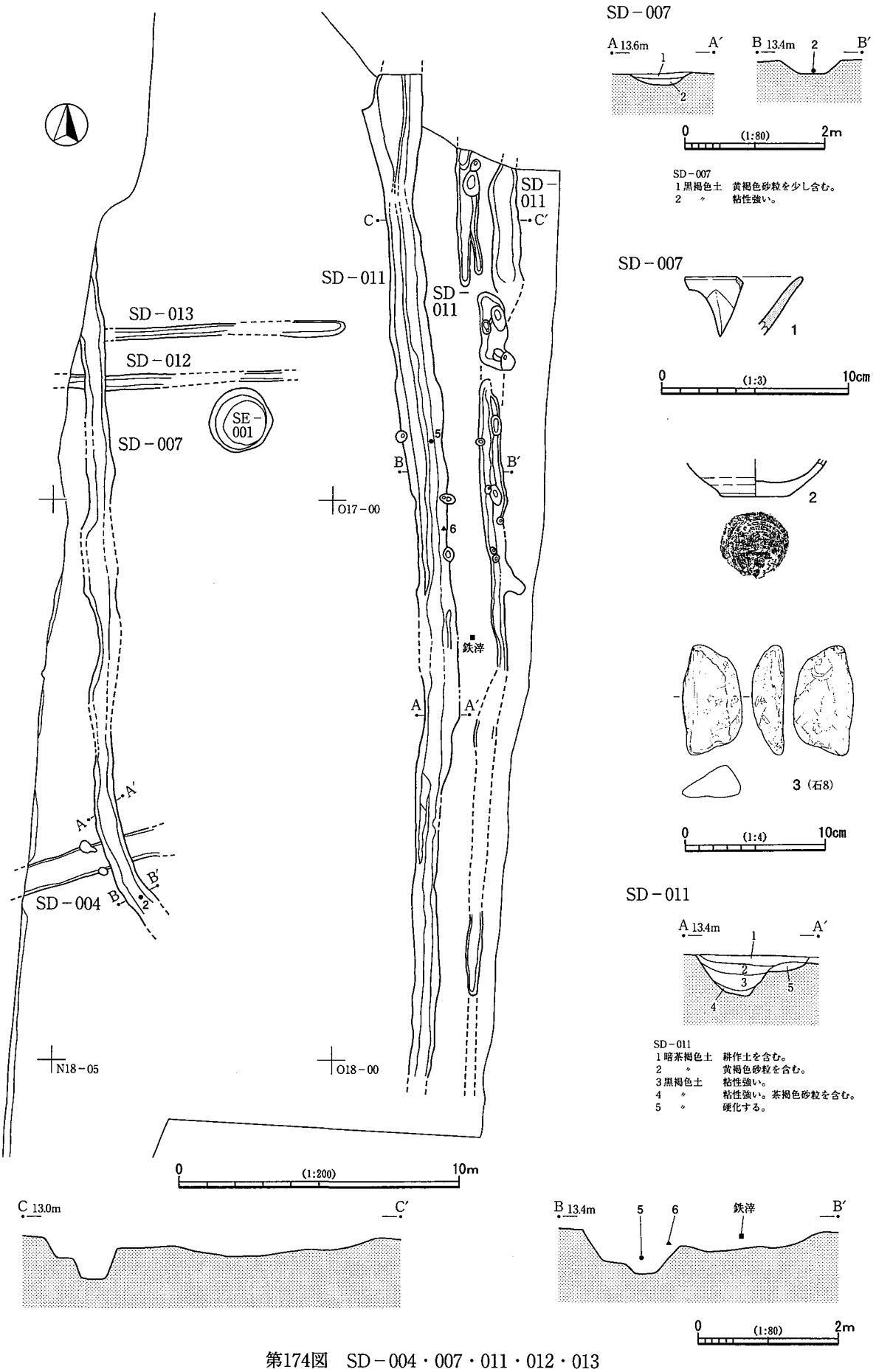
中世の遺構は道路状遺構SD－011と溝跡SD－007、井戸SE－001を検出した。このほかに時期が不明確な溝跡がさらに3条見られる。

1　溝・道跡

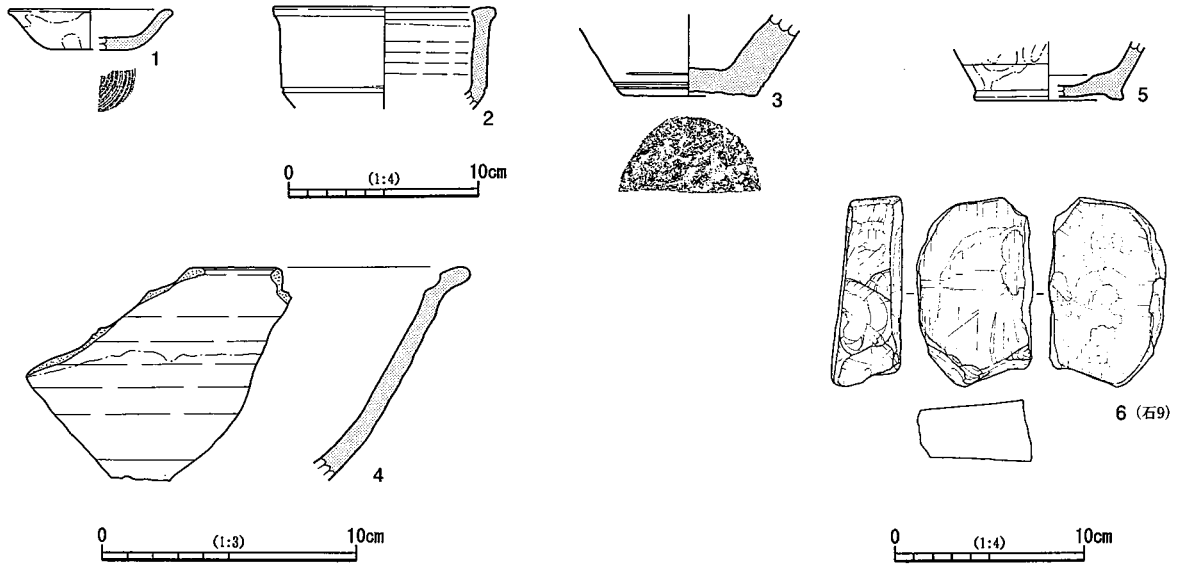
SD－007（第174図、図版87・93・94）

A区北半部の西側際にかけて見られる溝であり、北側は調査区外に伸び、南側は削平のため不明となっている。主軸方位はN－10°－W前後である。北側は直線的に伸びるが、南側は若干弧状となっており、SD－011に接続する可能性も認められる。1号方形周溝墓（SD－003）・3号方形周溝墓（SD－006）・5号方形周溝墓（SD－014）、1号墳（SD－001）の周溝、2号墳（SD－005b・006b・008・009）の周溝、柱穴SH－028・030・033～039を切る。残存部の長さは23.6ｍで、最大幅は1.15ｍであり、深さは20cm前後である。

遺物（第174図、図版93・94） 1は龍泉窯系の青磁碗の口縁部破片であり、鎬蓮弁が見られる。形式はⅠ－5ｂ類と考えられる。2は土師器坏であり、底部外面には回転糸切り痕が顕著に残る。流れ込みの遺物である。3は砂岩製の砥石であり、最大長は7.87cm、最大幅4.29cm、重量76.4ｇである。表裏には研ぎ



第174図　SD－004・007・011・012・013



第175図　SD－011出土遺物

面が見られるが、３面の側面には見られない。

SD－011（第174・175図、図版86・87・93・94）

Ａ区の北半部の東側際に沿って見られ、調査区外の南北に伸びる。１号・４号方形周溝墓、奈良・平安時代のSI－017・018、SB－005・006を切る。幾度か掘り返されているものと考えられ、溝は２条～５条になっており、硬化面が認められる部分も存在するので道路跡と考えられる遺構である。確認面から底面までの深さは深い部分で30cm前後である。確認できた範囲の総延長は35.8mであり、最大幅は4.7mであるが、何度も掘り返されているので、全体の幅は掴みにくい。主軸方位はＮ－２°－Ｗである。土層からみる限り、西側の溝が新しいと考えられる。

遺物（第175図、図版93・94）　１は瀬戸美濃の折縁小皿で、口縁部外面と内面全面に灰釉と考えられる釉薬が施されている。古瀬戸後期様式Ⅰ期の時期のものである。２は瀬戸美濃の灰釉筒型香炉であり、外面の上半と内面の口縁部付近に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅰ期の遺物である。３は渥美の壺の底部であり、底部よりも胴部下半部のほうが厚く、底部外面には圧痕が見られる。底部外面のみこみ部には荒いナデがなされ、胴部下端部外面には線状のヘラケズリが施される。

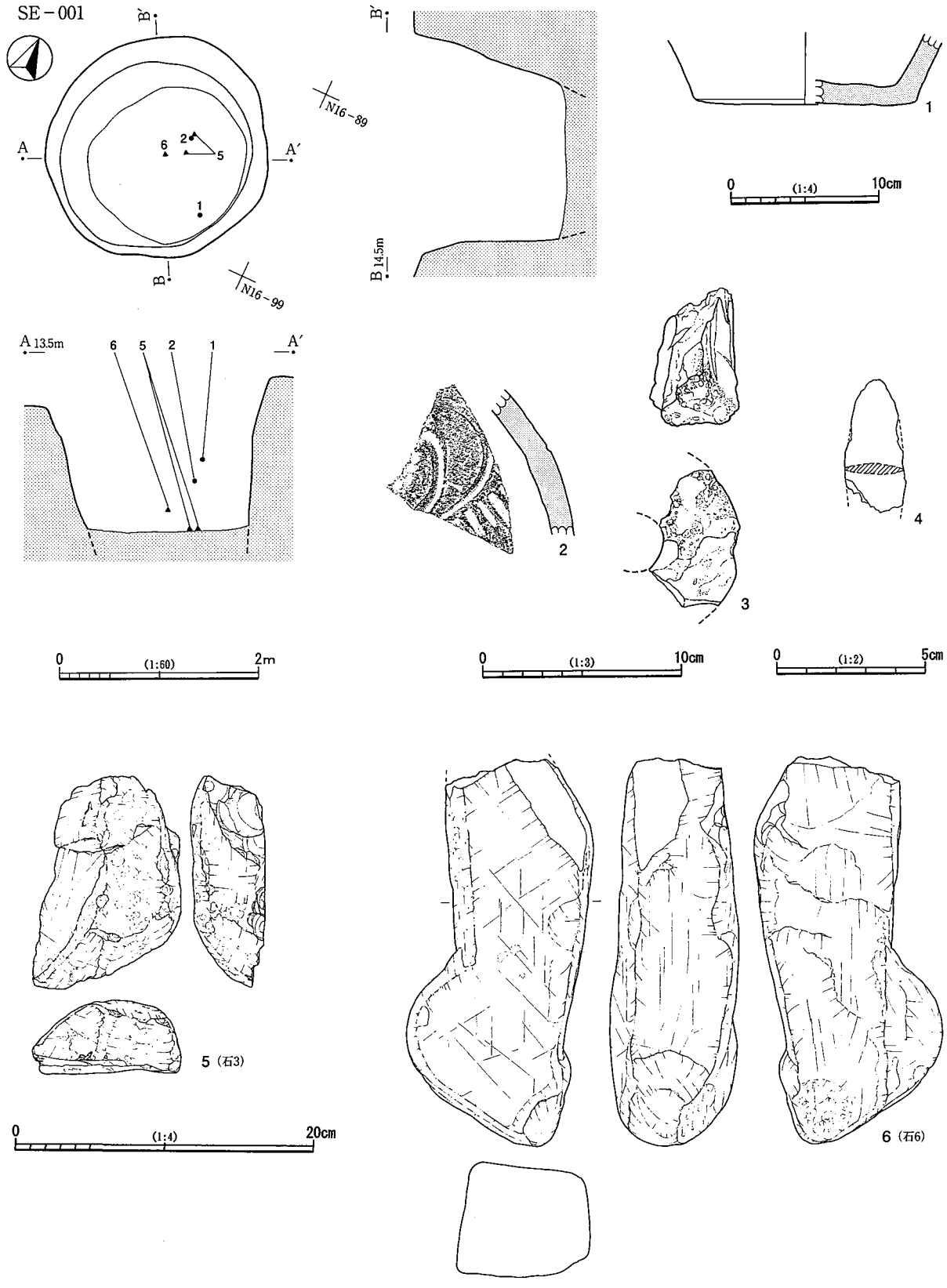
４は瀬戸美濃の灰釉折縁深皿であり、口縁部外面上半と内面に灰釉が施されており、外面には回転ヘラケズリが下半部になされ、ヨコナデが顕著に見られる。古瀬戸後期様式Ⅰ期の遺物でである。

５は灰釉陶器長頸壺の底部であり、流れ込みの遺物である。回転ヘラケズリ後に高台を貼り付けており、外面には上部から流れた灰釉が見られ、底部内面の中央部には自然釉が見られる。

６は砂岩製の砥石であり、研ぎ面が割れ面以外のほぼ全面に見られる。最大長は10.02cm、最大幅6.12cm、最大厚3.77cm、重量315.7ｇである。

時期が不明確な溝跡は、SD－004・012・013（第174図）の３条である。

SD－004はＡ区中央部にあり、１号方形周溝墓（SD－003）と２号古墳の周溝と重複する。幅は1.0m～1.1mで深さは10cm程度の浅い溝である。主軸方位はＮ－75°－Ｅである。覆土からは、古墳時代の土師器


SE－001
B′
A
A′
B
N16－89
N16－99
6
2
5
1
B 14.5m
A 13.5m
0 (1:60) 2m
0 (1:3) 10cm
0 (1:4) 10cm
0 (1:2) 5cm
0 (1:4) 20cm
5 (石3)
6 (石6)

第176図　SE－001

甕片が出土しているが、付近の住居からの混入の可能性が高い。

SD－012・013はA区北半部にあり、ほぼ並行して見られ、主軸方位はN－79°－Eである。SD－012は4号方形周溝墓（SD－014）、SI－019、SD－007と重複する。幅は0.4m～0.55mで深さは10cm前後の浅い溝である。覆土内からは平安時代の土師器片が少量出土している。SD－013は5号方形周溝墓（SD－014）、SK－005、SD－007と重複し、幅が0.35m～0.5mで深さは12cm前後である。奈良時代～平安時代の土師器片が僅かに出土しているが、周辺の遺構からの混入も考えられる。両者は地境の溝の可能性も残り、時期の決定はできない。

2　井戸

SE－001（第176図、図版86・93・94）〈N16－88グリッド〉

中世の井戸と考えられる遺構である。A区北部にあり、SI－016と5号方形周溝墓（SD－014）を切る。平面形は円形であり、規模は2.32m×2.23mである。深さ1.5mまでは調査を行ったが、それ以下の部分については危険なため調査を断念した。

断面形は、下面はほぼ直線的で、開口部から55cm下のところで中場を有し、やや開いて開口部に至る。なお、周囲にはピット群が存在するが、遺物の見られるピットの大半が奈良・平安時代のものであり、中世の時期のピットと確定できるものはなかった。

遺物（第176図、図版93・94）　1は常滑の甕の底部であり、復元底径は15.0cmである。底部外面には砂目が見られ、底部内面には自然釉が付着する。2は渥美の刻画文壺の胴部片であり、破片なので判然としないが、外面には袈裟襷文・蓮弁文と考えられる文様が見られる。内面には横方向の荒いナデがなされる。

3は羽口片である。先端部は溶解し、発泡が見られ、外面は灰色となっており、かなり使用されていたことがわかる。羽口の内径は3cm前後である。なお、実測はしていないが本遺構からは鉄滓が出土している（第178図）。

4は鉄製の鎗の穂先と考えられ、現在長は44.7mm、最大幅19.85mm、最大厚3.51mm、重量10.75gである。錆び膨れのため変形しており、断面形状は復元して点線で掲載している。5・6は砥石であり、5は凝灰岩製で一部を欠損する。表面にはいずれも研ぎ面があるが、平坦な裏面には見られない。最大長14.29cm、最大幅9.82cm、最大厚5.03cmである。6は砂岩製で一部を欠損する。欠損面以外の面には研ぎ面が認められる。

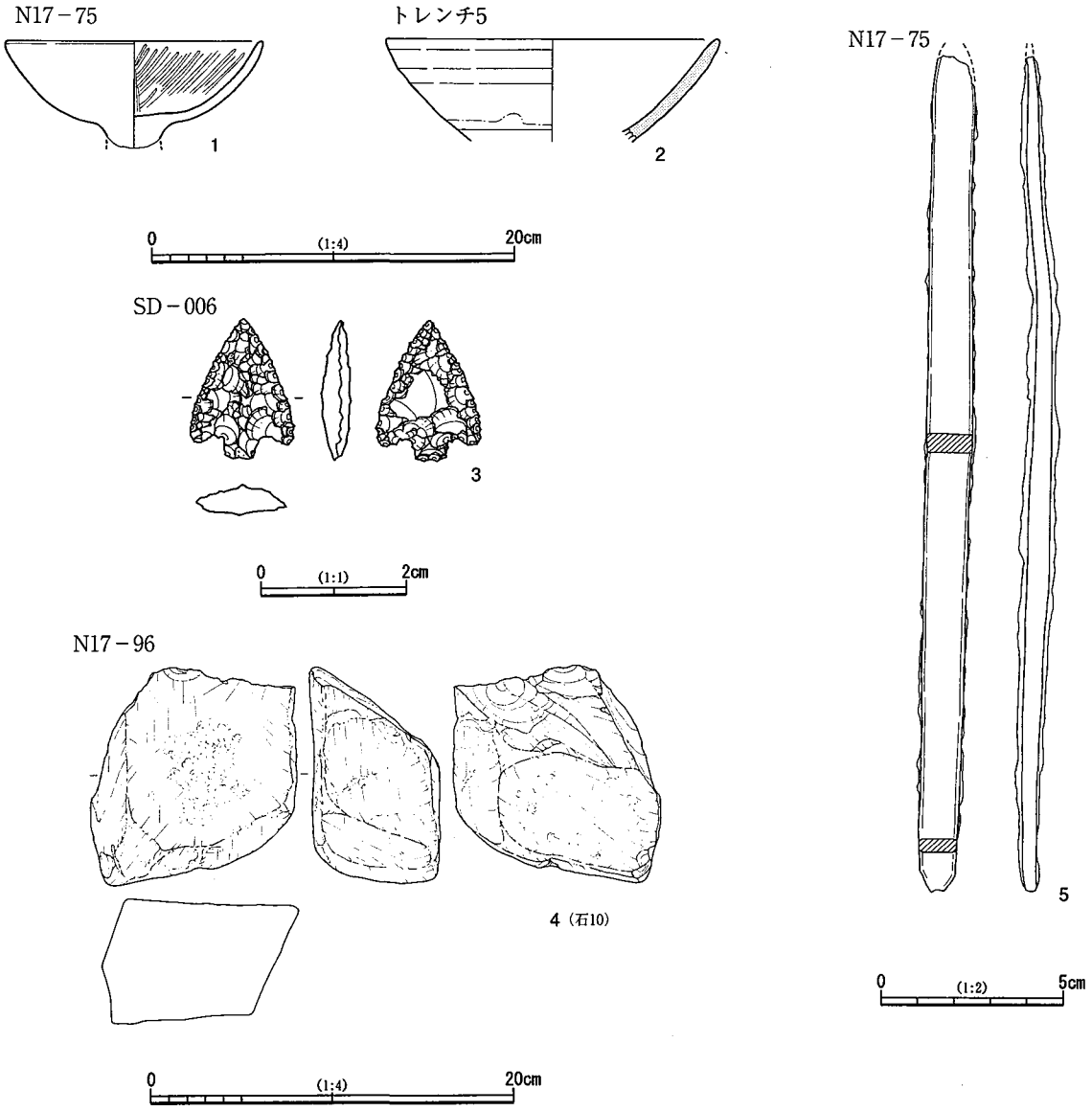
本遺構からは自然礫18個が出土している。重さは4kg超のものもあり、総重量で19.558kgである。これらは井戸の廃絶に伴って投げ込まれたものと考えられる。

第5節　その他の遺物

1　トレンチ・グリッド等出土遺物（第177図、図版93・94）

1はN17－75グリッド出土の土師器高坏の坏部である。古墳時代後期の時期の遺物であり、復元口径は14.0cmで、坏部の内面には縦方向のミガキが施される。2はトレンチ出土の瀬戸美濃の灰釉平碗であり、復元口径は18.4cmで、外面下半に回転ヘラケズリがなされ、内面～外面上半に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅰ期の時期と考えられる。

3はSD－006出土の縄文時代後期後半～晩期にかけての黒曜石製の石鏃であり、押圧剥離技法によって



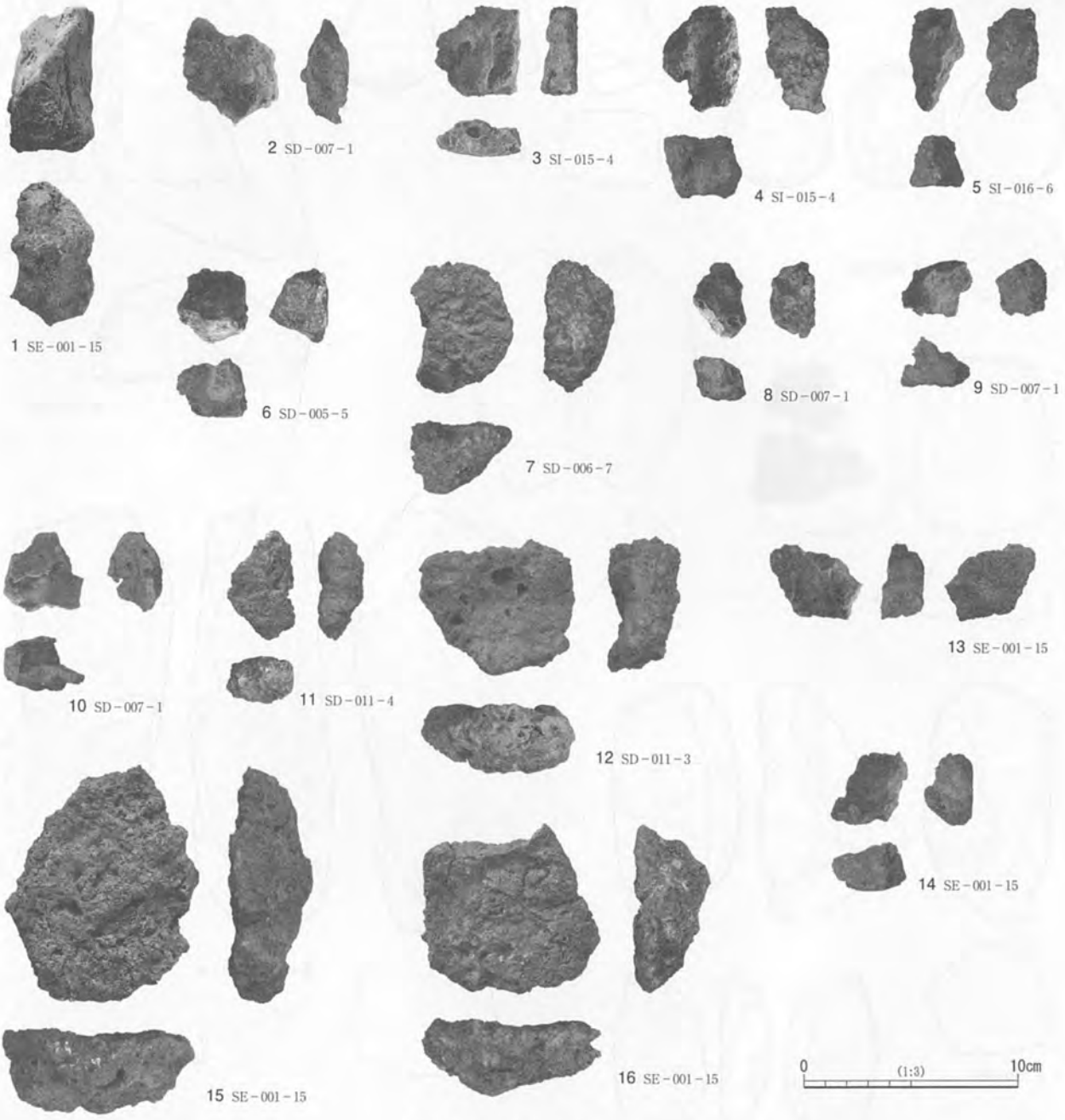
第177図　トレンチ・グリッド等出土遺物

つくられている。最大長19.3㎜の小型品であり、最大幅は14.4㎜、最大厚4.0㎜、重量は0.76ｇである。４はＮ17－96グリッド出土の砂岩製砥石であり、破面以外には研ぎ面が見られ、部分的に敲打面及び鉄分が付着した面が見られる。鉄床石として使用された可能性も考えられる。最大長は119.8㎜、最大幅114.2㎜、重量は1,178.7ｇである。

５はＮ17－75グリッド出土の鉄製の鑿である。先端部が欠損するほかはほぼ完形に近い状態であり、遺存度が良い。中央の断面形は厚さ5.0㎜の長方形で、先端部に向かって厚さが薄くなり、欠損部付近では２㎜程度の厚さとなる。最大長230.05㎜、最大幅12.50㎜、重量68.27ｇである。

２　鍛冶関連遺物

本遺跡からは、鍛冶関連遺物としては羽口と鉄滓・炉壁が少量出土している。ここでまとめて報告するが、実測図を省略し、実物の1/3の大きさの写真を掲載して説明する（第178図）。また、このほかに３㎝

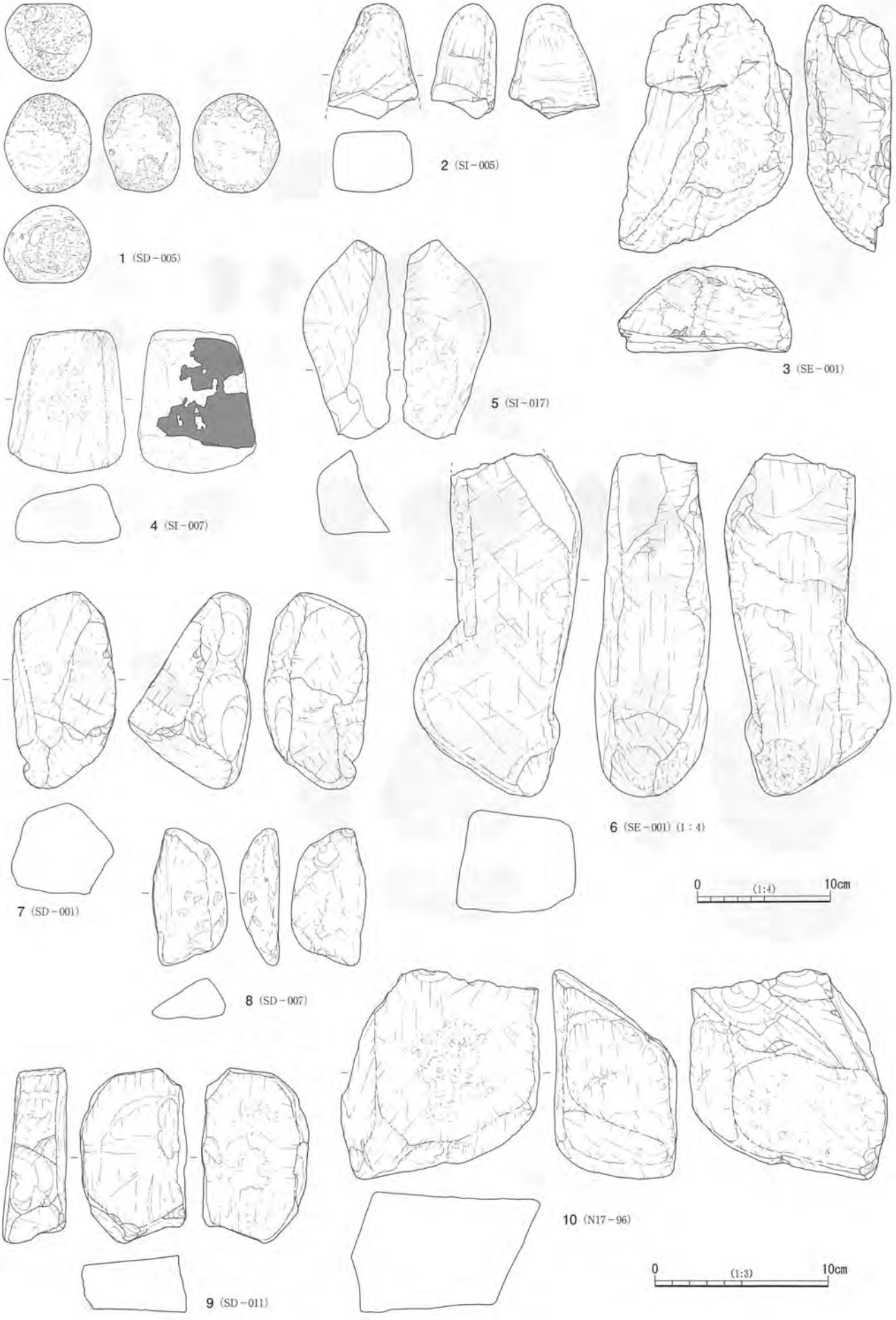


第178図　鍛冶関連遺物

以下の鉄滓片が５個体出土している。

鉄滓については、特種金属探知機による検査を実施し、メタル度[1)]を測定した。１・２は鞴の羽口片であり、１についてはSE－001の記載箇所（221頁）で触れているので参照されたい。２はSD－007出土で、先端部の小破片であり、羽口の内径は小破片で不明である。外面には溶解のため発泡している部分が見られる。３・４はSI－015出土であり、３は炉壁で鍛冶炉の底面と考えられる。４は鉄滓であり、一部に炉壁片が付着する。重量感がある。５はSI－016出土の鉄滓である。全面に破面が見られる。

６はSD－005出土の椀形滓の破片であり、底面に炉壁が僅かに見られる。７はSD－006出土の含鉄椀形鍛冶滓で、メタル度はH（○）である。3/5程度の残存であり、大きさは6.2cmと小型であるが、厚さは3.7


1 (SD－005)
2 (SI－005)
3 (SE－001)
4 (SI－007)
5 (SI－017)
6 (SE－001) (1：4)
7 (SD－001)
8 (SD－007)
9 (SD－011)
10 (N17－96)
0 (1:4) 10cm
0 (1:3) 10cm

第179図　敲石・砥石

cmであり、鍛冶炉は深めの炉形であったと考えられる。８～10はSD－007出土で、８・９は椀形滓片であり、10は表面が滑らかで厚さが薄い部分で５mmの鉄滓である。磁力はみられない。11・12はSD－011出土であり、11は椀形滓である。12は全体の半分程度の残存の含鉄椀形鍛冶滓であり、メタル度はH（○）である。

13～16はSE－001出土である。13は椀形鍛冶滓である。14～16は含鉄椀形鍛冶滓であり、メタル度はいずれもH（○）である。15・16の上面には錆化面が見られる。15は全体の半分程度の残存と考えられる。

註１　メタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を、非破壊で推定するために調整した特殊金属探知機を使用した判定法のことを指す。感度は三段階〔H：high（○）、M：middle（◎）、L：low（●）〕に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。

特殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。

穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題－鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について－」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム　鉄関連遺物分析評価研究グループ　2005

第5章　まとめ

第1節　弥生時代

弥生時代の主な調査成果には、萱野遺跡2次調査区の環濠と集落、萱野・宇戸台遺跡の方形周溝墓群が挙げられる。従来、安房地域の中期の遺構としては仮家塚遺跡の方形周溝墓群（6基）が唯一の調査例であった。長須賀条里制遺跡では堰として利用された旧河道から多量の土器や木製品が出土し、集落が存在することは想定されていたが、実際に集落が調査されたのは萱野遺跡が初めてである。しかも、環濠を伴うことが判明し、環濠分布図を塗り替えることになった。これによって、土器や石器などの生活用具だけではなく、集落形態や墓制を伴う西日本の弥生中期文化が安房地域に波及していたことが明らかになったといえよう。後期の遺構についても、周辺では仮家塚に隣接する宝珠院遺跡で住居跡が1棟、安房国分寺跡で合口壺棺が1基検出されたほかは調査例がなく、住居跡44棟以上から成る萱野遺跡の集落は画期的な調査例となった。

1　環濠（第181図）

環濠を構成する2条の溝が検出された。1条は調査区の北東隅から南東に向けて縦走するSD－016、他の1条は調査区南寄りから北東方向に伸びるSD－018である。いずれも調査区外に伸びており、東側には滝川の河岸まで30m～60mの平坦面があるため、2条の溝が大きく東側へ張り出していたことが想定できる。2008（平成20）年度に滝川河川改修に伴う調査が行われ、本調査区と滝川の間の河川敷が発掘された。河川改修に伴う調査区で検出された溝の中に古墳時代以前と見られるものがあり、その位置はSD－016の北東延長上に合致する。周辺には後世の遺構があり、溝は8mを残して後世の遺構と重複して削平されている。しかし、この溝の検出によってSD－016が本調査区からさらに13.4m北東に延びることが分かった。当時の河岸段丘が現在の中段面に位置したとすれば、緩やかに段丘を回行してSD－018に至る環濠を復元することができる。また、双方から延びた環濠が河岸で途切れて開口していたことも考えられる。調査区の西に広がる平坦面の規模をみると、少なくとも長径200mの環濠を想定することが可能である。

環濠の掘削時期については、北側のからSD－016出土した土器に弥生中期後葉の古段階（常代第4期）に遡るものがあり、その頃に環濠の掘削と集落の形成が始まったことがわかる。一方、南側のSD－018で出土した多量の土器群は、中期末葉（常代第6期）～後期中葉（常代Ⅱ期）にわたり、後期前葉（常代Ⅰ期）を主体としている。これらの土器は環濠を再掘削した後の覆土上層で出土し、環濠の廃絶に伴って溝内に遺棄されたものと考えられる。土器群には赤彩された多量の壺が含まれており、この時期の竪穴住居にほとんど壺が出土していないことは無関係ではないと思われる。

一方、環濠内には中期の住居跡はなく、後期の住居跡が3～4棟見られるが、いずれも廃絶後のものと思われる。環濠存続期の住居跡は、むしろ環濠の外にある。これには中世以降の大規模な造成と土地利用が大きく影響しており、1号墳墳丘下にひしめくように遺存した弥生時代の集落が1号墳の外側にはほとんど存在しないことによって明らかである。しかし、方形周溝墓は遺存しており、わずかに竪穴住居も遺存する。環濠存続時、あるいは廃絶直後の弥生時代の遺構がすべて削平されているとは言い難い。1号墳

墳丘下は明らかに環濠の外側であり、後期の住居跡が主体であるが中期の例も６棟（２棟は炉のみ）確認できる。これらの状況から、本調査区は環濠集落外縁部の墓域に当たり、中期の集落の中心は西側に存在すると考えられる。ただし、環濠の外は中期も居住域であったといえる。県内の環濠集落には内外に間断なく居住域が営まれている例が多く、本遺跡の場合もその可能性が高い。

房総では、ほかに24遺跡で弥生時代の環濠集落が調査されており、本例は25番目の調査例である。

2　方形周溝墓（第181図）

方形周溝墓は、萱野遺跡で６基、宇戸台遺跡で５基検出された。萱野遺跡では方形周溝墓の分布が南北に分かれており、後世の土地利用によって相当数が削平されたものと思われる。現状の分布密度から推定すると、調査区内に24基～25基が群在したであろう。宇戸台遺跡も部分的な調査であるためさらに相当数が未発見であると思われる。いずれも周溝の四隅が切れるタイプである。墳丘規模は宇戸台遺跡の方がやや大きく、墳丘辺長9.6m～12.5m、萱野遺跡の例（SS－003）は墳丘辺長9.2mである。墳丘は後世に削平されてしまったため埋葬施設は残っていない。しかし、１例を除いて周溝内から土器が出土し、時期を知る手がかりとなった。萱野遺跡の土器群は弥生時代中期中葉～中期末葉にわたり、宇戸台遺跡の例は中期中葉～中期後葉古段階に集中する。いずれも切り合う例がなく、限られた期間に築かれたことが窺える。また、両遺跡とも方形周溝墓の周囲には同時期の竪穴住居は見当たらないため、集落と墓域が明確に区別されていたことがわかる。萱野遺跡では環濠がその境界になっていたものと思われる。

3　集落（第180図）

弥生時代の集落は、萱野遺跡の２次調査区で検出された。上記のように調査区の北側は墓域であったこと、後世に大規模な削平を受けたことによってそのほとんどは萱野１号墳の墳丘下で見つかっている。調査した竪穴住居51棟のうち、47棟が１号墳の墳丘下に所在する。墳丘下の住居群は弥生時代中期～後期後半にわたって間断なく築かれ、同じ場所で建て替えられた例も少なくない。従って、重複する住居が多く、遺物の帰属が不明な例も多い。しかし、重層的に切り合う住居の遺物群によって墳丘下に封じ込められた弥生時代後期の集落変遷を抽出することが可能である。

変遷の検討に当たっては、住居の重複状況の把握を基本に、本遺跡では台付甕の出土率が高いため、台付甕の変遷を基軸に据えた。さらに、１号墳の墳丘下で最も新しいSI－014出土土器を下限資料の指標とした。このようにして弥生時代後期初頭から古墳時代出現期古段階にわたるⅠ～Ⅵ期の変遷を示した。

Ⅰ期（後期初頭）に挙げたのはSI－047である。楕円形の竪穴の南縁に入口施設と貯蔵穴があり、本跡では確認できないが、炉の南端に炉石を置いた例がある。台付甕は小振りで厚みがあり、口縁部が外方に開いた深鉢形の甕に脚台が付く。筒状に成形された脚台も分厚く重い。口縁には押圧による刻みが施され、肩部に粘土紐接合痕（以下接合痕）がある。幅の狭い折り返し状口縁に縄文を施した鉢と壺が伴う。

Ⅱ期（後期前葉の新段階）のSI－058も楕円形の竪穴の南縁に入口施設と貯蔵穴がある。北の主柱穴間に炉が配置され、南端に障壁のように炉石を立てる。台付甕は口縁部が緩やかに外反し、胴部にややふくらみをもつが、底部は直線的にすぼまっている。低く、比較的大きな脚台が付く。内外面を磨いて仕上げ、口縁には縄文原体の押捺による刻みを施している。頸部に多条の粘土紐を立体的に配したり、頸部下端に接合痕をもつ台付甕がある。鉢は直線的に開く形態で、口縁部を沈線で区画し、羽状縄文が充填されてい

る。SI－024に重複するSI－042が同時期の住居である。

Ⅲ期（後期中葉）のSI－024は方形、あるいは長方形の竪穴住居である。類例にSI－046（長方形）、SI－049（方形）があり、SI－046の炉には炉石が伴っている。また、楕円形か円形のSI－044には内部に方形の区画があり、この時期は方形の施設を嗜好する傾向があったと言えよう。台付甕には大型と小型があり、頸部に３条ないし４条の明瞭な接合痕をもつ。小型の例では接合部に指による押圧が加えられている。口縁の刻みはいずれも棒状工具の押圧による。磨き仕上げの例とナデ仕上げの例がある。鉢はⅡ期と同様、外方に開く形態で沈線区画の口縁部に羽状の縄文帯をもつが、口縁部がやや内湾するようになる（SI－044）。

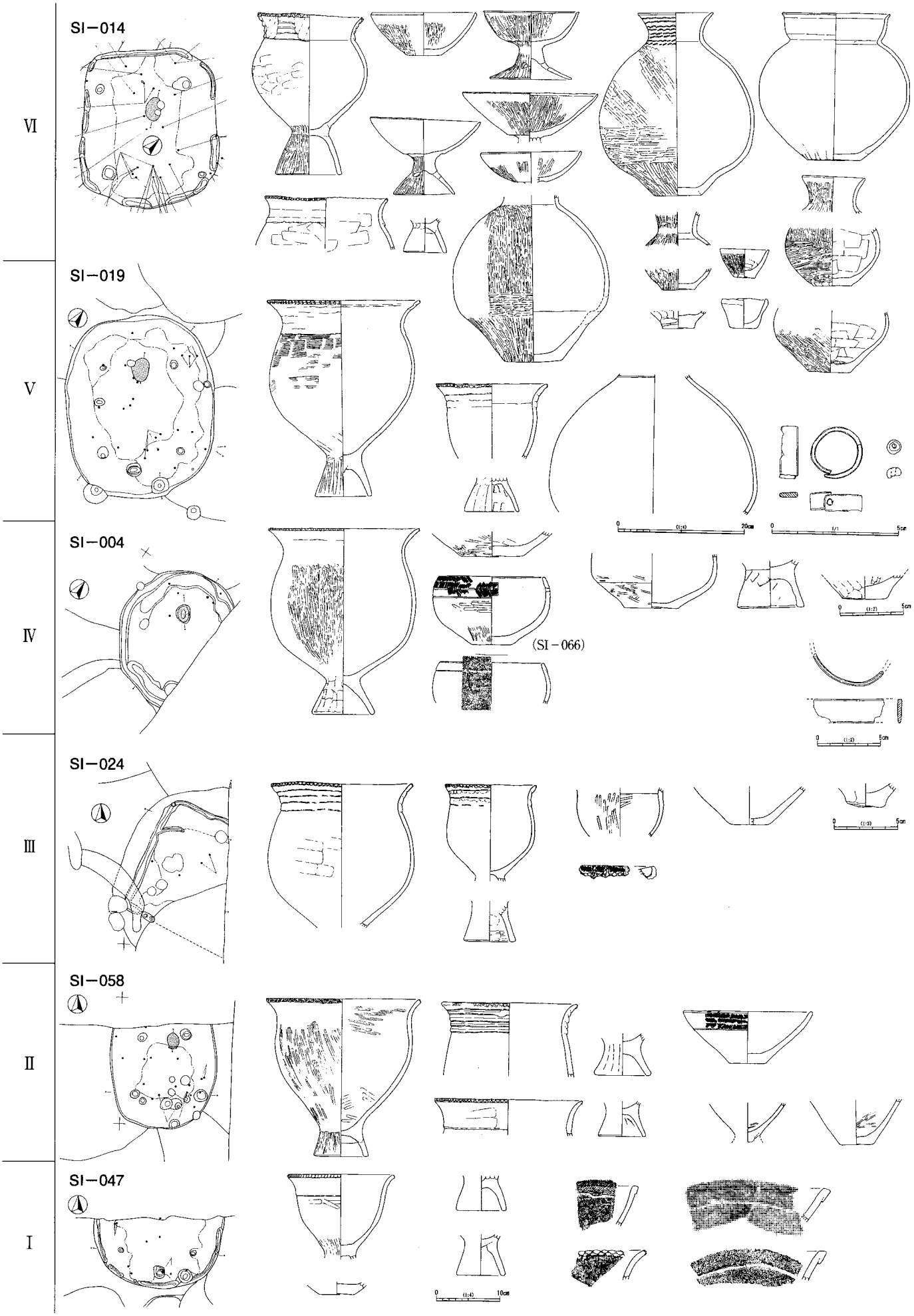
Ⅳ期（後期後葉の古段階）の例はSI－024を切って築かれたSI－004である。ほぼ円形の平面プランをもち、竪穴内には柱穴がない。同様の平面プランをもつSI－003（SI－044を切る）、SI－045、SI－066では柱穴がないか、あるいは極めて浅いという点が共通し、出土した土器からも同時期の竪穴と考えられる。これらの住居の炉には炉石が置かれていない。SI－024の台付甕は口縁部の外反が明瞭になり、胴部の球形化と脚接合部のくびれが特徴である。本例は頚部の接合痕をほとんど残さないが、多条の接合痕をもつ例も並存する。口縁の刻みは棒状工具の押圧による。肩部～底部は磨き仕上げ、脚台部はヘラナデ仕上げである。鉢は口縁部に縄文帯をもつ点は変わらないが、全体に内湾する形態になる。また、SI－066の口縁部沈線区画では小孔（蓋の綴じ孔）の位置にもう１条の沈線があり、沈線区画も画一的ではなくなるようである。なお、折り返し状口縁に縄文を施した鉢はこの時期にも見られる。一方、SI－003・SI－004で板状の銅釧（青銅製の腕輪）が出土している点は注目すべきである。

Ⅴ期（後期後葉の新段階）に挙げたのは、SI－019である。整った楕円形の平面プランをもち、炉に対面した南側に入口施設と貯蔵穴を配置している。炉には板状の石が置かれているが、炉の北東隅にあり、Ⅱ・Ⅲ期の例に比べて小さい。用途が異なるものと思われる。台付甕は口縁部の外反度が増し、胴部の張りの少ない無花果形が現れる。頚部の多条接合痕はナデ消していて明瞭ではなく、肩から胴部上半に横方向のハケ調整が見られる。一方、小型の台付甕は口縁部の屈曲が弱く接合痕の明瞭なものが残存し、同時期のSI－073にもある。また、Ⅵ期のSI－014に見られるような、底部付近で屈折する下ぶくれの壺胴部が出土している。

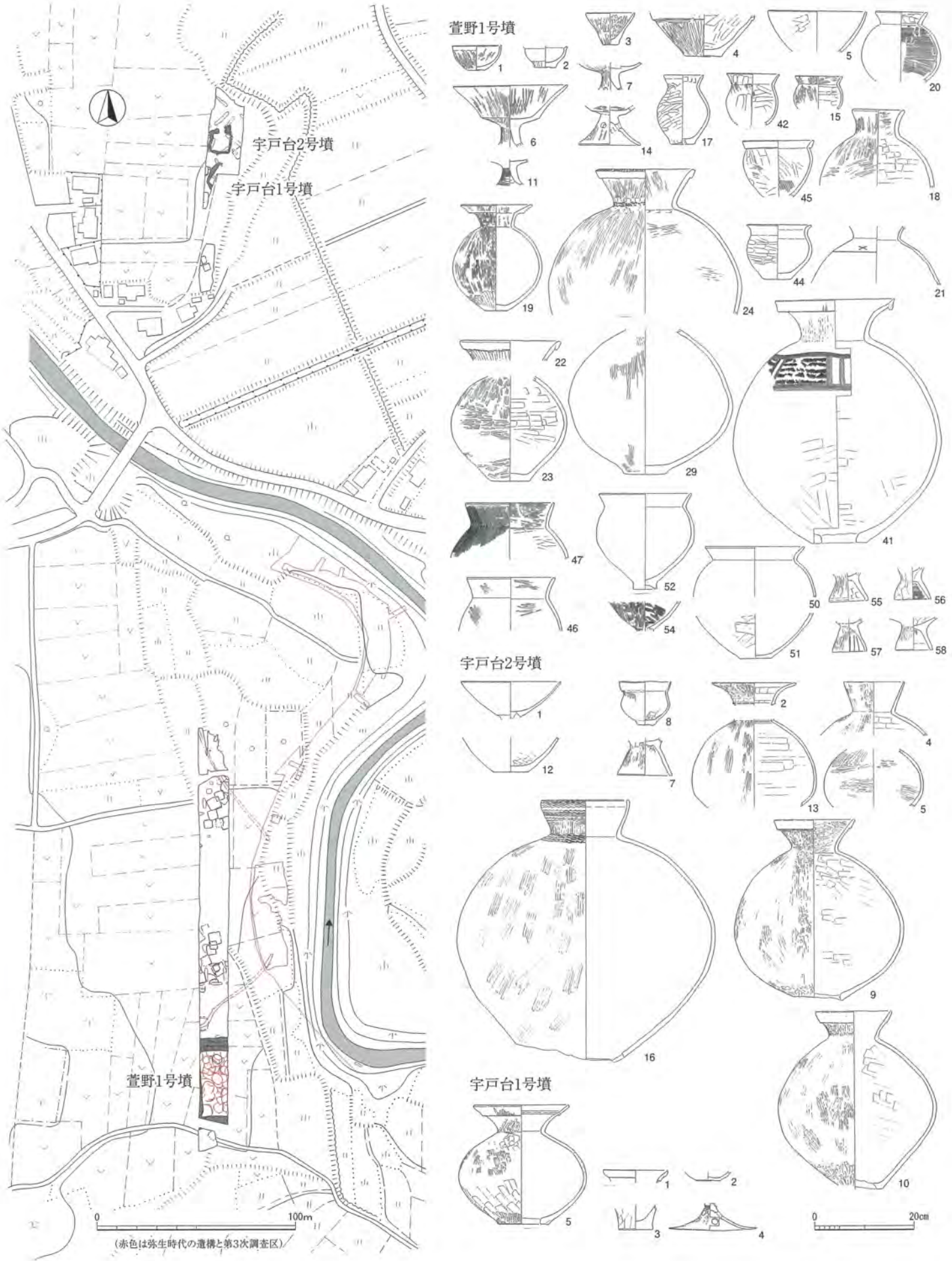
土器のほかに、SI－019では青銅製の指輪とガラス玉が出土した。青銅製品はⅣ期・Ⅴ期に特徴的な遺物と考えられ、SI－066・SI－073に重複する中期のSI－023で出土した青銅製指輪片は、SI－066かSI－073に伴うものであろう。

Ⅵ期（古墳時代出現期古段階）のSI－014は萱野１号墳の墳丘下で唯一古墳時代に入る住居跡である。平面形はやや南側がふくらんだ隅丸長方形で、四隅に主柱穴を配している。炉の位置は以前の例に比べて北側柱列より内側に入っている。貯蔵穴・入口施設は見当たらない。竪穴内では多量の焼土と炭化材が出土し、完形品や完形に近い多くの土器が出土したため１号墳の築造に先立つ儀礼が行われた施設かと思われたが、炉には灰の堆積が認められ、一定期間生活したことを示している。おそらく、築造の直前まで使われ、廃絶に当たって土器類を用いた所作を行ったものと推測する。遺存が良いのはその後まもなく墳丘の盛土によって覆われたためであろう。

出土した土器の構成は、平底の鉢・高坏・鉢のミニチュア土器・壺・平底甕・台付甕である。鉢・高坏などの小型の土器群は、弥生後期の系譜とは形態を一新し、無文で薄手のつくりになっている。壺・甕類



第180図　弥生後期～古墳出現期の集落出土土器



第181図　出現期～前期の古墳出土土器

の特徴を挙げると、壺類がほとんど無文化していること、弥生時代後期以来の多条口縁の台付甕と共に平底の有段口縁甕が出土していること、ハケ調整のミニチュア土器が加わっていることなどがある。中～大型壺は頸の短い直口壺で、底部付近に明らかな分割成形痕があり、胴下半に最大径をもつ。口頸部にS字状結節文をもつ例もあるが、頸部以下は無文である。また、小型壺はいずれも無文で球形化した胴部をもつ。平底甕の有段口縁は緩やかな5の字状を象っており、在来の甕の系譜にはない平底甕である。山陰・北陸系統の有段口縁平底甕の影響を受けた製品と見られる。台付甕は明瞭な多条接合痕をもつ前代の系譜を引くものであるが、接合痕を縦断するナデつけが施される。脚部が内湾気味で大きく高いのは弥生時代後期の台付甕と区別できる要素といえる。また、これらの土器群の胎土には弥生時代後期に見られた多量の雲母がほとんどなく、砂粒は小粒で少なくなっている。土器のほかに鉄製ヤリガンナ・ガラス小玉が伴う。

このように、1号墳墳丘下の弥生時代後期の集落をⅠ～Ⅴ期、1号墳築造直前の段階を加えてⅥ期に分けた。各期で取り上げた住居はその間の代表的な例で、前後に重複して存続する住居があるのは言うまでもない。上記のⅠ期は紀元前後、Ⅱ期は1世紀前半、Ⅲ期は1世紀後半、Ⅳ期は2世紀前半、Ⅴ期は2世紀後半、Ⅵ期は2世紀末葉～3世紀初頭に比定している。Ⅵ期が『後漢書』に見える倭国大乱の終息期(188年前後) 以後の新たな時代に属することと齟齬がないと思われる。

第2節　古墳時代

安房地域は古墳と一般集落の調査例が極めて少ない地域である。萱野遺跡・宇戸台遺跡で発掘された古墳群と集落は、まとまった調査例として安房地域の古墳時代像に新たな視点を加えることになったといえる。特に、出現期～前期の古墳群は本地域初めての大型方墳・前方後方墳の調査例であり、周溝出土土器によって変遷を追うことができる。また、両遺跡の調査区内には古墳時代後期の住居群が営まれているが中期・前期に遡る例はなく、これらの時期の集落は別の地点にあるものと思われる。

1　古墳（第181図）

古墳は萱野遺跡に1基、宇戸台遺跡に2基が所在する。2つの遺跡は滝川を挟んで立地し、地名が異なるため古墳にも別名を付した。しかし、古墳の規模や変遷を見るとこれらが密接な関わりをもっていたことが窺える。

萱野1号墳は墳丘辺長34.2mの主丘部もつ大型方墳、あるいは前方後方墳である。墳丘は既に失われていたが、墳丘下には弥生中期から墳丘築造直前までの住居跡がそのまま遺存しているため、かなり高い墳丘であったと思われる。墳丘が削平されたのは古代末から中世と考えられ、長期にわたって墳丘が存在していたことがわかる。周溝から出土した土器群は鉢・高坏・壺・甕から成る小型土器群と鉢・高坏・壺・甕（台付甕を含む）で構成される。これらの器種の個々の特徴については既に述べたが、弥生時代後期に系譜のある折り返し状口縁の鉢（4）、内湾する深い高坏坏部（5）、坏部下端に明瞭な稜線をもつ高坏（6・14)、横線文をもつ高坏脚部（11)、寸胴な小型壺（17）などは本土器群の時期を示す例といえる。一方、壺は古墳祭祀に最も深く関わる器種で、本土器群には単口縁の壺と様々な有段口縁の壺が用いられている。有段口縁壺は、頸部が直立して内面に明瞭な段部をもつ例はなく、いずれも頸部が外反する広口系の有段口縁壺である。これらには、頸部と口縁部がそれぞれ外反し2段構成になっているもの（A類）

と、口縁内面に段（屈曲部）をもたない広口系で口縁外面に粘土紐添付などの造作を加えて段部を形成したもの（B類）があり、B類は折り返し状口縁が主体である。A類の19は口縁部が大きく外反するが、頸部に比べて短い形態で、大きさの割に重量感のあるつくりである。無文の例としては最も古い一群に位置づけられる。B類の41は有文の大型壺で、焼成後に底部を穿孔している。穿孔は底部の内側を丁寧に打ち欠いたもので、穿孔部を整えた痕が見られる。

これらの土器群は前掲の墳丘下SI－014住居出土土器に後続する、出現期新段階（3世紀前葉）に位置づけられる。墳丘辺長34.2m、墳丘対角長48.4m（円丘の規模）というこの時期では突出した規模の方墳は房総全域を見渡しても例がなく、主丘部の規模では市原市神門4号墳（全長48.8mの前方後円墳、主丘部径30m～34m）を凌駕する。これに神門4号墳と同様の前方部（長さ14m）が付くとすれば、全長は62.4mとなる。神門古墳群は東京湾東岸の該期を代表する首長墓であるが、萱野1号墳の規模と立地からすれば東京湾の入り口を傘下に治めた首長墓に相当するといえよう。

宇戸台遺跡の2基は、萱野1号墳の領域内に形成された古墳群のひとつと考えられる。いずれも主丘部が方形で、宇戸台2号墳は短い前方部をもつ前方後方墳であることがわかった。宇戸台1号墳も前方部をもつ可能性がある。2基の周溝からは出現期末葉～前期前半の土器が出土している。

2号墳は主丘部の長さが9.0m～9.4mで前方部を含めた墳丘全長が11.8mである。1号墳は主丘部の長さが10.7mで、2基の規模は萱野1号墳と格段の差がある。2号墳の土器群は、高坏・小型甕・台付甕・壺で構成される。高坏の坏部（1）は浅く薄手のつくりで、小型甕（8）も華奢である。壺は単口縁の壺2種と有段口縁壺2種がある。単口縁の大型壺（16）は口頸部にS字状結節文帯をもつため、復元前は前代の土器の再利用かと思われたが、球形化した胴部の形態や焼成後の大胆な底部穿孔によって本墳に伴うことがわかった。無文の単口縁壺（4）はくの字状に伸びる口縁部や肩の張る形態的特徴が明らかに萱野1号墳例より新しい。有段口縁壺A類（2）・B類の2点（9・10）とも口縁部が発達し、B類の底部穿孔は壺16と同様に大振りである。これらの特徴によって2号墳の土器は出現期末葉～前期前半の古段階にかかる3世紀中葉に位置づけられよう。この頃、東京湾東岸には全長34m・31mの前方後方墳、木更津市高部30・32号墳が築かれ、以後前期前半にわたって主な首長墓に前方後方墳を築く時代が続く。

1号墳の遺物は少なく、有段口縁壺2点と壺底部、高坏脚部各1点のみである。全体のわかる有段口縁壺（5）は、幅の広い折り返し状口縁をもち、内面はわずかに屈曲して弱い段が作り出されているが、B類に分けられる例である。頸は短く太く、胴部は横長の楕円球状で最大径が中位にある。焼成後に底部を穿孔したものであるが、一見焼成前の穿孔かと見えるような調整が行われている。高坏脚部（4）は、坏接合部が極めて細く、裾部が大きく開く形態的特徴を良く残している。裾部が薄く華奢なつくりであることも特徴である。このように、宇戸台1号墳の土器は2号墳の土器群よりさらに1段階新しく、前期前半中頃（3世紀後葉）の土器群といえる。

以上のように、萱野1号墳と宇戸台1号墳・2号墳の調査は、今まで断片的な資料しかなかった安房地域の出現期～前期古墳について、解明の糸口を示したといえる。限られた調査範囲であったため、宇戸台2号墳を除く2基の墳形・規模については推定の域を出ない。また、いずれも埋葬施設が遺存しなかったため副葬品は全く不明である。今回の調査区では前期後半の古墳は見つかっていないが、宇戸台遺跡の北に隣接する宝珠院遺跡には中期の円墳群が分布し、南東の峯古墳でも中期の副葬品と推定される玉類が出土している。おそらく、滝川および平群川流域の平野部には出現期から中期にわたる古墳群が連綿と築か

れ、いくつかの支群を形成しているものと思われる。

萱野１号墳は、出現期新段階の古墳としては房総にとどまらず東日本最大級の方墳（墳丘辺長34.2m）、あるいは前方後方墳（墳丘長62.4m）である。仮に前方後方墳であるとすれば、静岡県沼津市辻畑古墳（墳丘長62m）・長野県松本市弘法山古墳（63m）・滋賀県高月町山畑大森古墳（63m）が出現期新段階～前期初頭の類例として挙げられる。前期前半の古段階には栃木県那珂川町駒形大塚古墳（63m）・福島県会津若松市堂ヶ作山古墳（82m）がある。

従来、古墳時代の東海道は、相模湾から三浦半島を経て東京湾を房総半島に渡海するルートのみが注目されてきた。萱野１号墳の存在は、房総半島南端の館山湾がもう一つの渡海ルートの拠点であったことを示していると言えるであろう。館山平野の位置を見れば、東京湾入口の海上圏は言うまでもなく、相模灘に臨む水域を掌握した首長が存在した可能性があり、萱野１号墳の被葬者はその最初の候補者といえる。遺跡内で伊豆新島産出の流紋岩が多用されているのも、当時の海上圏を知る上で興味深い。また、今回の出土土器は東京湾東岸の上総の土器群と親近性が強く、相模との関連を積極的に裏付ける根拠は見いだせなかったが、鴨川市根方上ノ芝条里遺跡の前期方墳出土土器などの太平洋側の出土例も含めて相模との関連が注目される。

２　集落

萱野遺跡（第61図・表３）

萱野遺跡の遺構は竪穴住居跡28棟と土坑４基がある。１号墳墳丘下の竪穴住居１棟（SI－014）を除くと、後期～終末期の遺構に限られる。出現期～前期の遺物は散見されるが、中期の遺物は見当たらないため中期には居住域を変えていると考えられる。後期の遺物は２次調査区のほぼ全域で検出されたが、集落は古代末～中世の土地利用と改変によって南北に分断されている。遺構の重複や後世の削平によってカマドを失った住居が多く、カマドが遺存する住居は９棟（SI－002・006・010・011・013・040・059・068・070）に限られる。東にカマドをもつ例はSI－011・070の２棟である。

最も古い住居と判断できるのはSI－082（075aと同一）で、陶邑TK10型式～MT85型式に並行する須恵器蓋坏や赤彩の土師器坏・高坏によって６世紀前半代に位置づけられる。これよりやや新しい６世紀中葉の遺構にはSI－013・059・068があり、SI－068・082は１辺６m前後の比較的大型の住居である。６世紀後半代の住居と推定できるのはSI－011・020・035・040・059・070・078・079である。まとまった資料を出土した例はなく、SI－078の柱穴から出土した卵形のハケ調整甕、SI－070の丸味の強い底部をもつ壺とハケ調整甕によって判断した。東カマドの２棟はこの時期に入る。７世紀前半代とみられる例が最も多く、SI－002・006・010・011・015・063・065・069・077がある。大小の土師器坏・平底の土師器坏・寸胴のハケ調整甕・深鉢形の甑を出土したSI－006、大小の深い土師器丸底坏・大型の鉢・寸胴のハケ調整の甕の存在するSI－065を指標とした。なお、SI－063・077は６世紀前半～７世紀前半の遺物を投棄した特殊な遺構である。この時期ではSI－006・010が１辺６m前後の規模をもち、１辺4.5m前後の平均的な規模の住居群にあって目立つ存在である。７世紀中葉～後半の住居にはSI－017・064・069がある。この中ではSI－017が１辺5.4mの規模をもって他と区別できる。３棟に共通して平底の土師器坏が出土している。SI－017では赤彩の盤状坏・深い土師器坏が出土した。

このように、萱野遺跡の後期集落は６世紀前半から７世紀後半にわたって継続し、各時期に核となるよ

うな大型住居が存在している。

宇戸台遺跡（第153図・表３）

宇戸台遺跡の遺構は竪穴住居跡８棟（SI－002・010～015・017）と土坑１基がある。第153図をみてもわかるとおり、住居はＡ区の中央～Ｂ区の中央にかけて分布し、古墳時代でも重複する箇所が見られる。カマドは北カマドが１棟（SI－017）見られたのみで、ほかの７棟については、重複等により不明である。ただし、SI－013のように東カマドの可能性を示す遺構や、SI－002のように北カマドの存在が考えられる遺構もあり、基本的には奈良・平安時代と同様に北カマドを主体とし、東カマドが僅かに見られるといった状態であると考えられる。

遺物の出土が少なく、竪穴住居の変遷は不明瞭な点が多いが、最も古い竪穴住居はSI－017であり、土師器甕は胴が張り、口径よりも胴部の径が大きいものが見られ、土師器坏も丸底で比較的大きいものであることから６世紀後半段階と考えられる。古墳の築造時期が３世紀中頃なので、約300年を経て集落が形成されるようになったことがわかる。古墳時代の竪穴住居が前方後方墳・方墳の墳丘内に入り込んでいないので、墳丘の高まりがある程度残されていた可能性も認められる。しかし、奈良・平安時代には前方後方墳の墳丘区域に掘立柱建物が進出するようになるので、墳丘はこの時期には削平されたものと考えられる。

このほかに古墳時代の竪穴住居で時期が明確に判断できるのはSI－015である。小型の丸底の土師器坏と胴部よりも口縁部の径が大きい土師器甕が共伴しており、７世紀後半の遺構と判断できる。SI－015はSI－014を切っており、ほかの竪穴住居でも３棟が重なっているところもあるので時期差を想定できる。宇戸台遺跡の集落は６世紀後半から連続ないし断続的に奈良・平安時代に続いていたものと考えられる。

第３節　奈良・平安時代

１　萱野遺跡集落

当該期の遺構は竪穴住居跡10棟（SI－005・008・009・012・021・022・026・027・037・038）であり、掘立柱建物跡は検出できなかった。このうち奈良時代の竪穴住居は9棟であり、北半部でも北寄りに８棟が集中して見られ、１棟が南端部に存在する。集落の主体は北半部にあると考えられる。竪穴住居のカマドの向きはカマドの存在が確認できる２棟は北カマドである。

SI－008が最も年代的に遡る遺構であり、８世紀前半の第１四半世紀の遺物が出土している。次に古い遺物から年代が判断できる遺構はSI－009であり、口径15cm前後の平底の土師器坏が検出されており、８世紀中葉の時期に比定できる。SI－027も同時期と考えられる。なお、SI－026はこのSI－009に切られており、奈良時代と考えられる土師器の小片が出土しているので、SI－026については８世紀前半代の可能性も考えられる。萱野遺跡では奈良時代については、ほぼ途切れることがなく続いていたと認識できる。

平安時代の竪穴住居跡は北半部に所在するSI－005のみであり、９世紀後半～10世紀前半の時期の遺物が含まれる遺構である。カマドは北カマドであり、萱野遺跡で検出できたカマドはすべて北カマドである。

2　宇戸台遺跡集落

当該期の遺構は竪穴住居跡11棟、掘立柱建物跡６棟、土坑５基、ピット34基を検出している（第161図）。竪穴住居は３か所に分かれて分布し、Ａ区北半部に３棟、Ａ区南端部に２棟、Ｂ区南半部に５棟が見られ、それぞれの群に付属するように掘立柱建物が分布する。掘立柱建物跡は側柱建物であり、柱間も短く、柱掘り方も通有の大きさである。路線部分の発掘のため調査面積が狭く不明確ではあるが、おそらく掘立柱建物群は竪穴住居群に伴うものと考えられる。

竪穴住居のカマドの向きは古墳時代の状況と同様に重複や調査区外に遺構が伸びるため、11棟中４棟で判明したにすぎないが、北カマドは３棟（SI－009・016・019）でいずれも奈良時代のものである。東カマドは平安時代の１棟（SI－004）に見られる。

奈良時代の所産の住居は８棟（SI－001・003・007・008・009・016・018・019）で、SI－001が最も年代的に遡る遺構と考えられる。同竪穴住居を切るSI－003内から、SI－001からの混入品と考えられる７世紀末～８世紀第１四半世紀前半の高台よりも底部が突出する須恵器高台付坏が出土している。SI－001は奈良時代の早い時期の遺構と認識できる。その次に古い竪穴住居としては、８世紀中葉を中心とする時期と考えられるSI－007・016がある。８世紀後半の所産の竪穴住居はSI－003・018・019である。遺物は検出されていないが、重複関係からSI－008・009もこの時期の範疇と考えられる。奈良・平安時代の住居11棟中、５棟が８世紀後半に集中する。

平安時代の所産と考えられる竪穴住居は３棟（SI－004～SI－006）であり、Ｂ区南端部に３棟とも重複して見られる。

SI－004にはロクロ土師器坏の底部に回転糸切り離し後に外周を手持ちヘラケズリするものがあり、形状等から９世紀初頭前後と考えられる。SI－005は９世紀後半～10世紀初頭のロクロ土師器高台付椀があり、SI－006はSI－005を切っているため、さらに時期が新しい遺構である。

平安時代の集落の範囲については路線幅の調査なので確証がないのが現状であるが、対岸の萱野遺跡２次調査区の奈良・平安時代の竪穴住居の分布についても北側に見られることを勘案するならば、河川の蛇行部分の周囲を主体に平安時代には集落が展開していたものと予想される。

3　萱野・宇戸台遺跡出土の古代の土師器甕について

８世紀～10世紀までの土器が出土したが、土師器甕については、古墳時代後期から続く在地の甕（第160図２・３）が、８世紀後半（第168図２）まで存続することが確認できた。

甕は粗雑なつくりであり、胎土に多量の灰色の小石を含み、胴部外面の調整はナデ、ヘラナデを基本とし、弱いヘラケズリを施しているものが見られ、部分的にハケやハケ目状（木口状）の痕跡が残るものが見られる。底部外面に木葉痕が残存するものがある。器肉を削り込む作業をあまり行っておらず、他地域の土器と比較して厚手であるという特徴を有する。

この甕については安房地域の土師器甕の主体となる甕の可能性を以前に指摘した[2)]。館山市加賀名遺跡[3)]、白浜町沢辺遺跡[4)]、白浜町青木松山遺跡[5)]、鴨川市東条地区遺跡群[6)]等から同種の甕が出土しており、注目されるところであった。古代における安房地域の中心域である国府・国分寺の周辺に立地する萱野遺跡及び宇戸台遺跡でも、今回少なくとも６世紀後半～８世紀代にわたって両遺跡の主体的な甕であったと認識することができたことは大きな成果である。この甕を安房地域に主体的に分布する「安房型甕」

として認識し、今後は積極的に評価することにしたい。

なお、甕の形態については古墳時代後期には胴が丸く、口縁部よりも胴部に最大径を有するものが多いが奈良時代に至るとしだいに口縁部が胴部よりも大きくなり、口縁部が開き、胴部が直線的になる傾向が窺える。本地域の甕は同じ安房地域の鴨川市出土の東条遺跡群の甕と比較すると、ほぼ同様であるが、若干胴部のヘラケズリ調整が丁寧である。

なお、この安房型甕は８世紀代までは盛行するが、９世紀代には上総地域の甕や武蔵型甕の流入が顕著となり、頽勢に向かう。

第４節　中世

１　萱野遺跡（第109図）

萱野遺跡には、溝跡28条・掘立柱建物12棟・土坑９基・ピット群２群のほか、まとまりを捉えきれなかった多数のピット・小土坑群がある。東西に走る溝は11条あり、SX－003のような大溝からSD－019・024のような小規模な溝まで規模は様々である。SD－011・028、SD－010・012、SD－019・024は南北にそれぞれ約10mの間隔で掘削されており、何らかの施設を区画していた可能性がある。SD－024は1.3mにわたって途切れており、出入り口として開口していた可能性が高い。また、SD－003は北西で直角に曲がって方形の区画を形成し、区画内の掘立柱建物群との有機的な関連が推定できる例である。さらに大溝SX－003は約110m南の萱野１号墳南周溝と組み合って１町（60間）の区画を形成していた可能性がある。一方、SD－001・002のように南北に掘削された溝もまた、真北を意識した区画かも知れない。このほか、大きく屈曲する溝、斜めに調査区を縦断する溝などは、排水路や道として使われたものを含むであろう。

掘立柱建物群は小規模で企画性が希薄であることから、工房か資材置き場のような施設と推定した。土坑群の中には地下式坑（SK－012）や副葬品をもつ墓坑（SK－015・019）もあるが、そのほとんどは用途が不明である。ピット群もまた性格を特定できないものが大半を占め、小規模な墓坑・建物の柱穴・柵列などを含むと思われる。

これらの遺構に伴う遺物を見ると、南北朝～室町時代前半の遺物が目立つ。SK－016で龍泉窯系の劃花文のある青磁碗・常滑８型式の片口鉢・古瀬戸後期様式Ⅲ期の縁釉小皿、SK－023では古瀬戸後期様式Ⅲ期の折縁深皿、SK－024では古瀬戸後期様式Ⅰ～Ⅱ期の折縁中皿など、古瀬戸後期様式前期の遺物が出土している。また、遺跡内で出土している陶磁器には、渥美短頸壺（第119図－15）・常滑２～３型式の三筋文壺（同16）・常滑５型式の片口鉢（同25）・常滑６ｂ型式の甕（第131図－１、第119図－29）などさらに古い段階の鎌倉時代の遺物も多い。

萱野遺跡周辺地積図（第３図）に拠れば、遺跡は「舘ノ原」と「美濃輪・吉野」に所在し、その地境がSX－003に相当する。上記の方形区画は「舘ノ原」側に位置している。下記のように、中世陶磁器の出土密度によっても、本遺跡が城館・寺院・街道などに付随する集落であることが推定される。今回の調査区には館の中心施設と考えられる遺構は存在していないが、その付属施設があったとすれば本遺構群のような形態を想定して良いであろう。東西方向の溝群も遺跡全体が明らかになればそれぞれ意味をもつ区画になるかも知れない。滝川河川改修に伴って調査された萱野遺跡第３次調査区の成果によって明らかになる事も多いであろう。

中世陶磁器からみた萱野遺跡

（1）全体の組成について

全体で265片の中世陶磁器が出土しており、遺構に伴う例は上記の2遺構のほかSK－020、SD－005・011・012・019・028、SX－003があり、24点が出土している。あとはトレンチおよびグリッド内からの出土品と混入品、並びに表面採集した遺物である。

まず、全体的に土器が少ないことが挙げられる。県内における城館の調査事例では20%以上になるものが多いが、本遺跡では5%と極端に少なく、集落跡である山谷遺跡の10%程度に近い。土器のほとんどはカワラケが占め、鍋や擂鉢を含まない点も特異である。

渥美産陶器が一定量含まれることは、常滑産陶器の型式グラフに反映されない陶器消費のピークが、中世前期にあったことを暗示している。常滑の型式グラフから推察すると、13世紀後半ころまで渥美製品が伝世され、なかなか常滑に置き換わらない状況が想定できる。

（2）器種組成について

特殊調度や茶・花・香など、高級嗜好品や威信財としての組成比率は、上総国分僧寺の方形館に匹敵する点が特筆される。中世の上総国分僧寺は、鎌倉幕府により国衙機構を通じて復興の梃入れがあったと思われる重要寺院である。これに類するということは、萱野遺跡の調査区を含む一帯も地域編成秩序の核に近いのかもしれない。あるいは安房国衙における陶磁器消費の影響を示す可能性もあり、興味深い。

ただし、カワラケの比率は、上総国分僧寺跡が20%に対してわずか5%に止まる点で、都市的、あるいは権力拠点としての積極的な評価は控えざるを得ない。

（3）瀬戸・美濃、常滑、貿易陶磁について

房総の生活遺跡では、一般に古瀬戸後期様式IV期に搬入のピークがあるが、萱野ではその直前にピークがあり、後IV期には搬入量が激減している。大窯製品も若干認められることから、遺跡の完全な廃絶を示すものとは断定できないが、常滑8・9型式期のピークも瀬戸・美濃のピークに併行すると思われることから、遺跡を取り巻く消費のありかたに大きな画期を認めて良いと思われる。

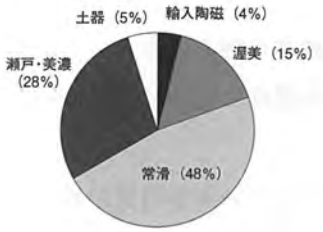
貿易陶磁はすべて龍泉窯系青磁で、優品も若干含むが、威信財と呼ぶべき個体はない。劃花文碗や鎬蓮弁文碗が主体であることから、中世前期の消費ピークに含まれる可能性が高い。

（4）まとめ

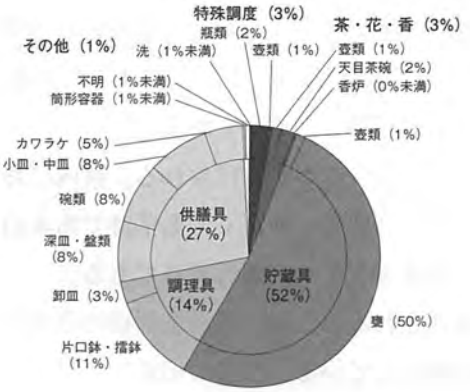
萱野遺跡では、渥美産陶器がある程度見出せることや貿易陶磁の年代から、中世前期において遺跡一帯で一定規模の消費活動が行われた可能性が高い。中世前期の消費活動がどの段階まで継続するのか明確でないが、常滑製品は7型式期が断絶するので、鎌倉末から南北朝初期頃をもって一旦閉塞に向かったのではないだろうか。ただし瓶子など、古瀬戸中期様式に集中する特殊調度品が認められるので、第1回遺物消費ピークの最終段階は特殊な様相と言える。

古瀬戸後期様式前半期に第2回目の消費ピークがあり、後期様式IV期に激減することから、調査区を含む一帯、あるいは付近で、14世紀後半頃から消費活動が再開され、急成長を見て15世紀中ごろに閉塞に向かった可能性がある。第2回ピークの消費主体が集落なのか、領主館なのか明言は困難であるが、祖母懐茶壺や天目茶碗の消費など、比較的裕福な階層を思わせる遺物も認められる。しかし中世後期のカワラケが認められない点が異色とも言え、遺跡の性質を考える上で問題点となろう。房総では一般に、古瀬戸後期様式IV期に大規模な消費ピークを迎えている。集落などの移動を原因の一つと考えた場合、当遺跡

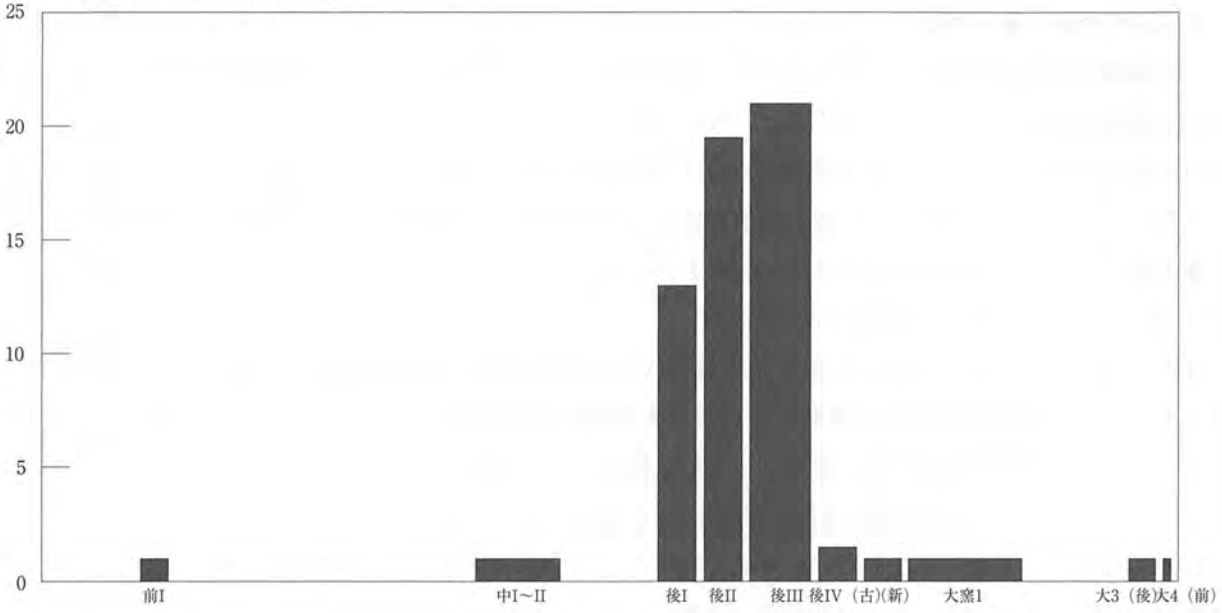
中世陶磁器組成（265点）



中世器種組成（265点）

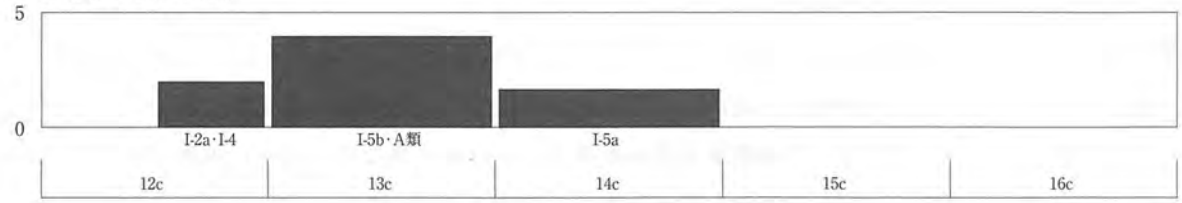


瀬戸・美濃系陶器の型式（61点）



常滑産陶器の型式（13点）

貿易陶磁の型式（9点）



第182図　萱野遺跡中世陶磁器組成・型式グラフ

はその前段階に位置付けられる点でも興味深い。

なお、萱野遺跡は遺物密度から考えると、本調査面積4,500㎡に対して256点が出土しており、100㎡につき約5.9点の検出であり、城館・寺院・街道などに付随する集落（３点～10点）[7] 並みの出土量を示している。

２　宇戸台遺跡

宇戸台遺跡からは、道路状遺構１条と溝跡１条、井戸１基を検出したのみであった。ただし、これらの遺構はいずれも年代的には中世でも比較的古い段階の遺構であると認識される。SE－001からは渥美の刻画文壺片が出土し、鎌倉時代の時期の井戸であると考えられる。SD－007からは龍泉窯系の青磁碗片、SD－011からは古瀬戸後期様式Ⅰ期の折縁深皿や折縁小皿が出土しており、13～14世紀代の遺構と考えられる。

僅か３遺構ながら、まとまった年代に収斂されることはこれらの遺構はなんらかの有機的つながりがあると解釈できるであろう。

中世陶磁器からみた宇戸台遺跡

本遺跡では、遺物量が少ないため、その組成比から詳細を推測することは困難である。しかしここでは、萱野遺跡との違いを探る目論見から、あくまでも傾向として、留意点を述べることにしたい。

全体で38点の中世陶磁器が出土しているが、遺構内出土は上記の３遺構のみで、あとはトレンチ及びグリッド内からの出土並びに表面採集した遺物である。なお、トレンチ５から６点出土しているが、トレンチ５内にはSD－011があるので、おそらくSD－011に伴う遺物であろう。

全体の組成（第183図）については、土師質土器が２点と極端に少ないことが目に付く点である。そして萱野遺跡よりも瀬戸美濃が多く、渥美産陶器が少ないことが指摘できる。全体として渥美産陶器及び古瀬戸後期様式Ⅰ期の瀬戸美濃が多く見られることから、14世紀後半に消費活動の比重が大きいことがわかる。

器種は、碗・皿類が中心であり、鉢類は片口鉢のみで、擂鉢が全く認められないことが特徴である。擂鉢は瀬戸美濃、在地土器ともに古瀬戸後期様式Ⅳ期併行期以降に搬入される傾向が強いので、それ以前に消費のピークが終わっていた可能性が指摘できる。

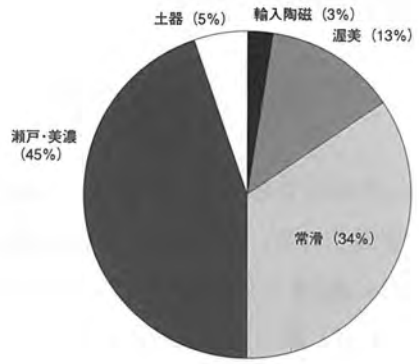
なお、筒型香炉等が出土し、龍泉窯系青磁碗片も検出しているので、僅かに高級嗜好品が認められる。

全体数が少なく、データとして信頼度は薄いが、中世の前期は萱野遺跡よりもやや消費活動が弱いと考えられるものの、全体的には萱野遺跡と宇戸台遺跡を含めたエリアの消費傾向は、ほぼ同じと認識できる。

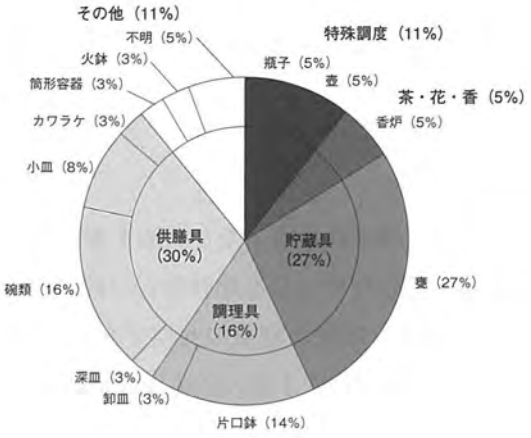
県内の遺跡では後期Ⅳ期に消費活動が活発になるのに対して、両遺跡とも古瀬戸後期様式Ⅳ期には消費が低迷しており、ほかの遺跡とは様相が異なることが特徴として挙げられる。

なお、宇戸台遺跡は遺物密度から考えると本調査面積1,300㎡に対して38点が出土しており、100㎡につき約2.92点の検出であり、農村集落遺跡（２点～３点）[7] 並みの出土量を示している。

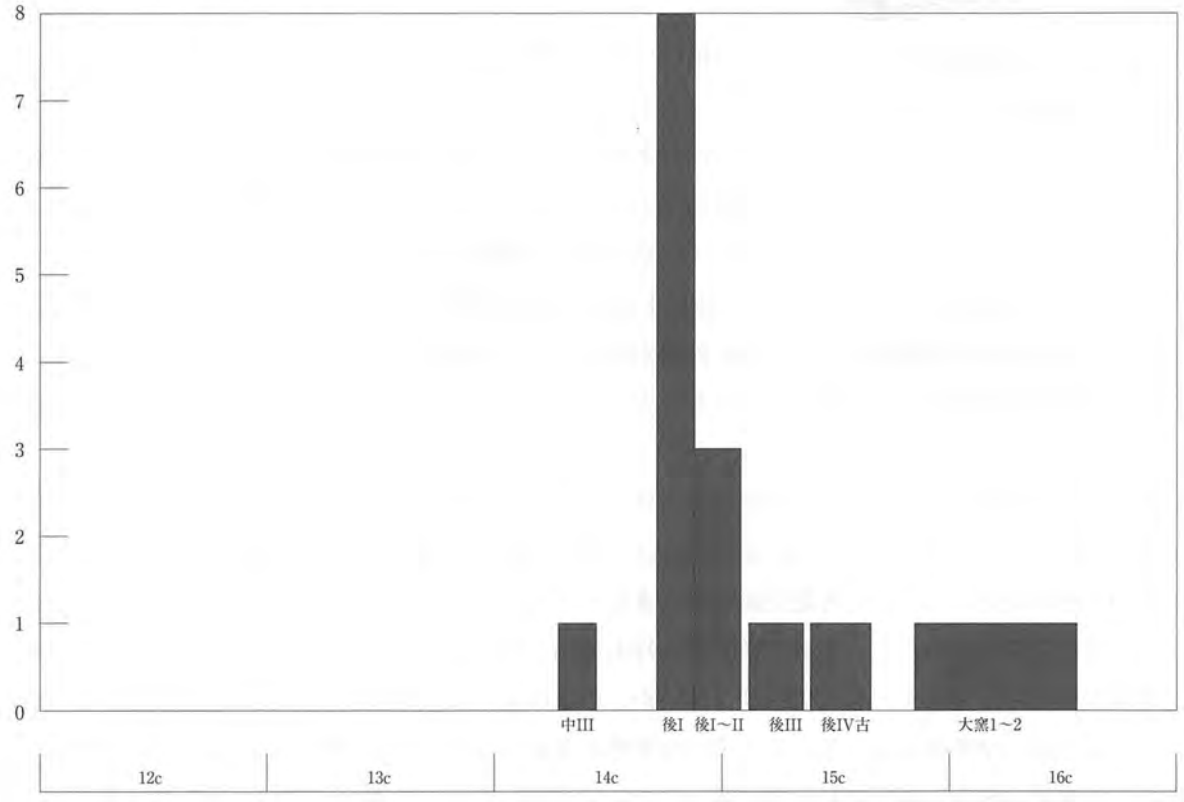
中世陶磁器組成（38点）



中世器種組成（37点）



瀬戸・美濃系陶器の型式（15点）



第183図　宇戸台遺跡中世陶磁器組成・型式グラフ

註１　表１および２の中世陶磁器の総量一覧は、表の作成にあたって藤澤良祐氏と櫻井敦史氏に遺物を実見していただき、ご指導とご教示を得て作成した。

２　小林信一「安房の土器　－鴨川市中原条里跡・根方上ノ芝条里跡出土土器を中心として－」『國學院大學考古学資料館紀要』第19輯　2003

３　杉江　敬『千葉県館山市加賀名遺跡』財団法人総南文化財センター　1999

４　神野　信ほか「沢辺遺跡」『千葉県安房群白浜町　青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書　－地域開発関連整備（秩序整形）白浜中央地区埋蔵文化財業務－』財団法人総南文化財センター　2003

５　神野　信ほか「青木松山遺跡」『千葉県安房群白浜町　青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書　－地域開発関連整備（秩序整形）白浜中央地区埋蔵文化財業務－』財団法人総南文化財センター　2003

６　野中　徹・杉山春信・杉山奈津子・高梨俊夫『千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書－ほ場整備事業（大区画）東条地区に伴う埋蔵文化財調査－中原条里跡　根方上ノ芝条里跡　西郷氏館跡』鹿野川市教育委員会・鴨川　市遺跡調査会　2000

７　井上哲朗「（解説）千葉県内中世遺跡出土陶磁器類の組成について」『平成16年度　千葉県房総のむら企画展図録』千葉県立房総のむら　2004

引用・参考文献

１．甲斐博幸ほか『常代遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター　1996

２．千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史　資料編　考古２（弥生・古墳時代）』千葉県　2003

３．大村　直ほか『市原市根田代遺跡』財団法人市原市文化財センター　2005

表1　萱野遺跡中世陶磁器総量一覧

調査	遺構	遺物番号	産地等	器　種	型式	点数	備　考
2次	U13－69	2	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ－4類	1	
1次	SD007	1			Ⅰ－5a類	1	
2次	V11－C区	1			Ⅰ－5a類	1	
2次	V14－31	2			Ⅰ－5b類	1	第119図1
2次	不明	1			Ⅰ－5類	1	
2次	SK016	1			Ⅰ－2a類	1	第117図6
2次	V13－68	2			A類	1	
2次	V11－C区	1			A類	1	
2次	D区一括	1			—	1	
2次	表採	2			—	1	
2次	C区P021	1		坏か	元・明	1	第119図2
					貿易陶磁　総計	11	
2次	V10－73 V10－91 V10－93	1	渥美	短頸壺	12c	1	第119図15
2次	V10－80	1		壺	12c	1	
2次	U13－05	1			12c	1	
2次	V10－82	1		甕	12c	1	
2次	D区一括	1			12c	1	
1次	SD001	1			—	1	
2次	SD019	1			—	1	
2次	SK016	1			—	1	
2次	SK026	35			—	1	
2次	SX003	5			—	3	
2次	SX003	6			—	1	
2次	U13－47	2			—	1	
2次	U14－29	2			—	1	
2次	V10－60	2			—	1	
2次	V10－63	1			—	1	
2次	V10－70	1			—	1	
2次	V10－70	3			—	1	
2次	V10－71	1			—	2	
2次	V10－72	1			—	2	
2次	V10－73	1			—	1	
2次	V10－80	1			—	2	
2次	V10－81	1			—	1	
2次	V10－83	1			—	2	
2次	V10－91	1			—	1	
2次	V10－92	1			—	1	
2次	V10－93	1			—	1	
2次	V10－93	2			—	1	
2次	V11－24	1			—	1	
2次	V12－84	2			—	1	
2次	V13－02	3			—	1	
2次	B区北サブ	1			—	1	
2次	D区一括	1			—	3	
2次	V10－80	2		片口鉢	—	1	
					渥美産陶器　総計	41	
2次	SI082	62	常滑	三筋文壺	2～3型式	1	渥美の可能性あり
2次	U13－79	2			3型式	1	第119図28

調査	遺構	遺物番号	産地等	器　種	型式	点数	備　考
2次	表採	1	常滑	片口鉢Ⅰ類	5型式	1	第119図25
1次	SD007	1			—	1	
2次	V10－83	2			—	1	
2次	V12－61 V12－94	1 2		片口鉢Ⅱ類	8型式	1	第119図21
2次	SK016	1			8型式	1	第117図1
2次	U12－98	2			9型式	1	
2次	V11－C区				9型式	1	第119図26
2次	V13－63				9型式	1	第119図27
2次	D区一括	1			9型式	1	第119図23
2次	U13－79	2			10型式	1	第119図28
1次	SD001	1			—	1	
2次	SD005	2			—	1	第126図1
2次	SD012	1			—	2	
2次	V10－60	2			—	1	
2次	V10－91	1			—	1	
2次	V11－00	1			—	2	
2次	V11－C区	1			—	1	
2次	V12－92	2			—	1	第119図22
2次	V13－62	3			—	1	
2次	V13－42	2			—	1	
2次	V13－73	2			—	1	
2次	V13－04	2			—	1	
2次	SD011	1		甕	6b型式	1	第131図1
2次	V11－C区	1			6b型式	1	第119図29
2次	V11－C区	1			9型式	1	第119図30
2次	SK018	1			—	1	
2次	SK018	2			—	1	
2次	SD005	2			—	1	
2次	SD011	1			—	1	第131図2
2次	SD019	2・3・6・7			—	1	第131図3
2次	SK024	1			—	1	第117図2
2次	SD017	2			—	1	
2次	SD018	1			—	4	
2次	SI069	1			—	1	
2次	1T002				—	1	
2次	SS001(b)	1			—	1	
2次	U9－68	1			—	1	
2次	U9－90	1			—	1	
2次	U10－38	1			—	1	
2次	U10－57	1			—	2	
2次	U10－58	1			—	1	
2次	U10－79	1			—	2	
2次	U10－89	1			—	2	
2次	U10－89	2			—	1	
2次	U10－89	6			—	2	
2次	U12－98	1			—	1	
2次	U12－98	2			—	1	
2次	U12－99	2			—	1	
2次	U13－29	2			—	1	
2次	V10－04	1			—	1	
2次	V10－60	2			—	3	

調査	遺構	遺物番号	産地等	器　種	型式	点数	備　考
2次	V10－60 V12－92 V13－04 V13－34 V13－34 SD019 B区P80	2 2 2 3 5 4 1			—	1	
2次	V10－73	1			—	1	
2次	V11－00	1			—	1	
2次	V11－10	1			—	1	
2次	V11－24	1			—	2	
2次	V11－33	1			—	2	
2次	V11－C区	1			—	12	
2次	V12－9□	2			—	1	
2次	V12－92	2			—	1	
2次	V13－03	2			—	1	
2次	V13－10	2			—	1	
2次	V13－14	2			—	1	
2次	V13－22	2			—	1	
2次	V13－24	2			—	2	
2次	V13－33	3			—	2	
2次	V13－34	2	常滑	甕	—	3	
2次	V13－40	2			—	1	
2次	V13－41	2			—	2	
2次	V13－43	2			—	1	
2次	V13－44	2			—	1	
2次	V13－52	3			—	2	
2次	V13－62	3			—	1	
2次	V13－70	2			—	1	
2次	V13－71	2			—	1	
2次	V13－80	2			—	2	
2次	V13－80	2			—	1	
2次	V13－90	2			—	1	
2次	V14－32	3			—	1	
2次	B区P67	1			—	1	
2次	B区P107	1			—	1	
2次	B区P113	1			—	1	
2次	B区北サブ	1			—	1	
2次	D区一括	1			—	1	
2次	D区一括				—	6	
2次	表採	1			—	1	
2次	表採	2			—	1	
			常滑産陶器　総計			125	

2次	V13－22	1	瀬戸・美濃系	瓶子Ⅱ類	中Ⅰ～Ⅱ	1	
2次	SS001(b)	1			古瀬戸中期	1	
2次	U13－08	2			古瀬戸中期	1	
2次	U14－07	2			古瀬戸中期	1	
2次	V13－42	1			古瀬戸中期	1	
1次	SD001	1		洗	前Ⅰ	1	
2次	V10－91	1		祖母懐茶壺	古瀬戸後期	1	
2次	U10－08	1		天目茶碗	後Ⅰ	1	第119図3
2次	V13－70	2			後Ⅰ	1	
2次	U10－79	1			後Ⅲ	1	

調査	遺構	遺物番号	産地等	器　種	型式	点数	備　考
2次	V13－73	2	瀬戸・美濃系	天目茶碗	後Ⅲ	1	第119図4
2次	U13－79 V13－01 V13－60 V13－64 V13－91	2 1 2 1 2		筒形容器	後Ⅲ	1	第119図18
2次	V12－04	2		壺	古瀬戸後期	1	
2次	V11－33	1		小壺	後Ⅲ～Ⅳ(古)	1	第119図17
2次	SD018	1		卸皿	後Ⅰ	1	
2次	V10－60	2			後Ⅰ～Ⅱ	1	
2次	V13－04	3			後Ⅱ	1	第119図7
2次	V13－34	2			後Ⅱ	1	第119図7と同一個体の可能性あり
2次	U13－28 V13－70	2 3			後Ⅲ	1	
2次	U14－08	3			古瀬戸後期	1	
2次	D区一括	1			古瀬戸後期	1	第119図8
2次	V10－80 V10－91	1 1		擂鉢	後Ⅳ(新)	1	第119図19
2次	V11－00	1			大窯1	1	第119図20
2次	D区一括	1			大窯3(後)	1	
2次	D区一括				大窯4(前)	1	
2次	V13－42	3		折縁深皿	後Ⅰ	1	第119図11と同一個体の可能性あり
2次	V13－62	3			後Ⅰ	1	第119図11
2次	V14－13	2			後Ⅱ	1	
2次	SK023	2			後Ⅲ	1	第118図2
2次	SK023	3			後Ⅲ	1	第118図1
2次	D区一括	2			後Ⅲ	1	第119図12
2次	SK018	1		直縁大皿	後Ⅱ	1	2点接合
2次	U12－08	2			後Ⅱ	1	第119図13と同一個体の可能性あり
2次	U12－97	1			後Ⅱ	1	第119図13
2次	U12－97	2			後Ⅱ	1	第119図13と同一個体の可能性あり
2次	U12－98	2			後Ⅱ	1	第119図13と同一個体の可能性あり
2次	U12－97 U12－98	2			後Ⅱ	1	第119図13と同一個体の可能性あり
2次	D区一括	1			後Ⅱ	1	第119図14
2次	D区一括	1		盤類	後Ⅰ～Ⅱ	1	
2次	D区一括				後Ⅰ～Ⅱ	1	
2次	D区	1			後Ⅰ～Ⅱ	1	
2次	V12－94	2			後Ⅰ～Ⅱ	1	
2次	V13－63	3			後Ⅰ～Ⅲ	1	
2次	SI008	2			後Ⅰ～Ⅲ	1	
2次	B区P73	1			後Ⅰ～Ⅲ	1	
2次	V14－03	1		平碗	後Ⅰ	1	第119図5
2次	V13－24	2			後Ⅰ	1	
2次	B区P123 B区P118 SD018 SD025 SK016 V13－40 V13－42	1 1 1 1 1 2 3			後Ⅱ	1	第119図6
2次	SI008	2			後Ⅱ	1	第103図3

調査	遺構	遺物番号	産地等	器　種	型式	点数	備　考
2次	U13－98	2	瀬戸・美濃系	平碗	後Ⅱ	1	
2次	U14－08	1			後Ⅱ	1	
2次	V13－52 V13－62 V13－64 V13－92 V14－03 V14－12 V14－12	3 3 2 2 1 2 3			後Ⅲ	1	
2次	1T001一括				後Ⅱ～Ⅲ	1	
2次	1T002T層				後Ⅲ	1	
2次	SS003(b)	1		直縁中皿	後Ⅰ	1	
2次	U15－17	1		直縁中皿か	後Ⅰ～Ⅱ	1	
2次	SK024	1		折縁中皿	後Ⅰ～Ⅱ	1	第117図1
2次	V13－70	2		折縁小皿	後Ⅰ	1	
2次	V14－13	2		縁釉小皿	後Ⅰ	1	
2次	V14－64	2			後Ⅱ	1	
2次	V13－93	2			後Ⅱ	1	
2次	SK016	1			後Ⅲ	2	第117図3・7
2次	SD018	1			後Ⅲ	1	
2次	U12－97 U13－78 V13－14	2 2 2			後Ⅲ	1	第119図9
2次	V10－70	4			後Ⅲ	1	
2次	V13－22	2			後Ⅲ	1	同一個体の可能性あり
2次	V13－42	2			後Ⅲ	1	
2次	V13－44	2			後Ⅲ	1	
2次	V13－72	3			後Ⅲ	1	
2次	V13－80	2			後Ⅲ	1	第119図10
2次	V13か				後Ⅲ	1	
1次	SD001	1			後Ⅲ～Ⅳ	1	
2次	D区一括				後Ⅳ(古)	1	
2次	V13－13			不明	古瀬戸後期	1	
					瀬戸・美濃系陶器　総計	75	
2次	SK016	1	在地土器　カワラケ	R種坏	—	1	第117図4
2次	SK020	2			—	1	第117図2
2次	SD028	1			—	1	第131図7
2次	SI017	3		R種中皿	—	1	
2次	SK016	1			—	1	第117図5
2次	V10－82	2		R種小皿	12c	1	
2次	V10－73	1			12c～13c前	1	
2次	V10－82	2			12c～13c前	1	第119図34
2次	V10－72	2			12c～13c	1	第119図35
1次	SD002	2			—	1	灯明皿 第10図9
2次	U13－37	1			—	1	第119図32
2次	V14－11	2			—	1	第119図33
2次	V13－42	3	瓦質土器	香炉	—	1	第119図36
					土器類　総計	13	
					中世陶磁器　総計	265	

表2　宇戸台遺跡中世陶磁器総量一覧

遺構番号	遺物番号	産地等	器種	型式	点数	備考
SD－007	1	龍泉窯系青磁	碗	Ⅰ－5b類	1	第174図1
				貿易陶磁　総計	1	
SD－011	5	渥美	壺	—	1	第175図3
SE－001	5			12c	1	第176図2
SD－011	4		甕	—	1	
SD－007	1		壺か甕		1	
SD－011	3		片口鉢	12c	1	
				渥美産陶器　総計	5	
SD－011	3	常滑	片口鉢I類	2型式	1	転用砥石
SE－001	4		片口鉢II類	—	1	
SD－007	1			—	1	
表採	1			—	1	転用砥石
SE－001	3		甕	—	1	第176図1
表採	1			—	5	
トレンチ5	1			—	1	
SD－010	25			—	1	
17N－75	1			—	1	
				常滑産陶器　総計	13	
SD－011	3	瀬戸・美濃系	瓶子	後Ⅰ～Ⅱ	2	
SD－011			筒形香炉	後Ⅰ	1	第175図2　SI－018 4から移動
トレンチ5	1			大窯1～2	1	
SE－001	15		筒形容器	後Ⅰ～Ⅱ	1	
トレンチ5	1		卸皿	中Ⅲ	1	
SD－011	3		折縁深皿	後Ⅰ	1	第175図4
トレンチ5	1		平碗	後Ⅰ	1	第177図2
SD－011 トレンチ5	3 1			後Ⅰ	1	第177図2と同一個体の可能性あり
SD－007	1			後Ⅰ	2	
トレンチ5	1			後Ⅲ	1	
SD－011			折縁小皿	後Ⅰ	1	第175図1　SI－018 4から移動
SD－007	1			後Ⅰ	1	第175図1と同一個体か
不明			縁釉小皿	後Ⅳ(古)	1	
表採	1		不明	不明	2	
				瀬戸・美濃系陶器　総計	17	
SE－001	11	土師質土器　カワラケ	R種(白)	—	1	小片
SD－011	3	土師質土器	火鉢	—	1	外来土器か
				土器類　総計	2	
				中世陶磁器　総計	38	

表3－1　萱野遺跡（2）遺構一覧

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置 1	グリッド位置 2	遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	遺構標高(m)	規模(m) 長軸長(最大幅)	規模(m) 短軸長(最小幅)	規模(m) 深さ(壁高)	主柱	柱穴の深さ(cm) P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12	入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	備考(遺物)
SI001		竪穴住居跡	V15－81	V16－03	北隅欠く	円形	N－44°－W	北西	47.430	4.80	4.60	0.046	4	36.8	32.8	51.9	47.0			南東	22.0×19.0×38.9	－	－	弥生中期	炉石あり	
SI002		竪穴住居跡	U16－69	V16－50	南欠損	方形	N－46°－W	北西	47.377	－	2.70＋	0.068	2＋	11.9	37.8	35.3				－	－	北西	38.0×32.0×6.3	古墳後期	－	
SI003		竪穴住居跡	V14－94	V15－14	東側を欠く	楕円形	N－35°－W	北	47.377	5.30	4.26	0.361	5＋	5.0－	8.1	80.4	59.2	63.6		－	－	－	－	弥生後期	炭、焼土、立替えP1·2は新、P3·4·5は古	
SI004		竪穴住居跡	V15－23	V15－44	東側を欠く	楕円形	N－38°－W	北西	47.368	4.36＋	3.70＋	0.092	—							－	－	－	－	弥生後期	炭分布	
SI005		竪穴住居跡	V08－81	V8－93	西、南壁に溝	方形	N－04°－E	北	47.357	3.30	3.30	0.248	—							－	－	－	－	奈良・平安	—	灰釉土器、内黒土器
SI006	a	竪穴住居跡	U08－29	V8－43	完存	方形	—	北	47.350	6.00	5.20	0.190	4	55.6 11.9	55.8	28.7	70.4	85.0	60.6	－	－	－	－	古墳後期	SI－006bの建替え	
SI006	b	竪穴住居跡	V08－41	V8－43	—	方形	N－22°－W	—	—	—	—	—	—							－	－	－	－	古墳後期	—	
SI007		竪穴住居跡	V16－04	V16－14	西側のみ残存	楕円？	—	—	47.375	—	—	—	—							－	－	－	－	弥生中期	—	
SI008		竪穴住居跡	U06－87	U6－98	東側を欠く	方形	—	—	47.390	2.95	1.50＋	0.290	—							－	－	－	－	奈良平安	—	
SI009		竪穴住居跡	V08－33	V8－64	西側のみ残存	方形	N－24°－W	北西	47.440	5.40	2.75＋	0.136	1＋	46.6						－	－	－	－	奈良平安	—	
SI010		竪穴住居跡	V08－63	V9－03	東側を欠く	方形	N－18°－W	北	47.418	5.80	3.40＋	0.212	3＋	43.9	51.5	50.4	10.7	64.2		－	－	－	－	古墳後期	—	
SI011		竪穴住居跡	V08－71	V8－93	東側を欠く	方形	N－04°－W	東	47.443	4.15	3.50	0.195	4	57.4	22.0	19.4	41.1			－	－	－	－	古墳後期	—	
SI012		竪穴住居跡	V15－61	V15－72	完存	方形	N－02°－W	北	47.430	2.60	2.25	0.017	—							－	－	－	－	奈良・平安	SX－001の墳丘削平後か	
SI013		竪穴住居跡	V08－01	V8－24	完存	方形	N－21°－W	北	47.458	4.50	4.30	0.311	4	49.6	25.3	43.8	51.2	34.5		－	－	－	－	古墳後期	—	
SI014		竪穴住居跡	V14－61	V14－82	完存	隅丸方形	N－52°－W	北西	47.444	4.85	4.10	0.021	4	49.5	59.1	24.2	15.8			－	－	－	－	古墳出現期	炭、焼土	
SI015		竪穴住居跡	U08－59	V8－72	北側の一部を欠く	方形	N－15°－W	北	47.298	4.60	4.35	0.017	4	54.5	53.2	50.0	48.2			南	32.0×28.0×15.8		－	古墳後期	—	
SI016		竪穴住居跡	V08－13	V8－34	西壁を欠く	方形	N－52°－W	—	47.327	3.35＋	4.35	0.157	2＋	63.4	32.3	35.3	1.5			－	—	－	—	古墳後期	—	
SI017		竪穴住居跡	V07－88	V8－15	東壁を欠く	方形	N－81°－W	—	47.404	4.40＋	5.40	0.369	4	53.1 34.1	48.0 31.4	68.6	51.5	29.5	17.9	南	49.0×34.0×26.2	－	—	古墳後期	SI－013·028·039、SD－016と重複	
SI018		竪穴住居跡	V15－83	V16－04	東側を欠く	隅丸方形	—	—	47.382	4.65	2.90＋	0.078	—							－	—	－	—	弥生後期	—	
SI019		竪穴住居跡	V15－01	V15－33	完存	隅丸方形	N－37°－W	北西	47.484	5.50	4.60	0.358	4	59.2	79.9	63.9	83.3			南東	46.5×42.5×20.9	南東	62.0×40.0×33.0	弥生後期	炭、焼土	銅製指輪
SI020		竪穴住居跡	U08－78	V8－90	完存	方形	N－02°－W	—	47.498	4.05	4.00	0.019	4	53.1	55.8	48.9	58.8			－	—	－	—	古墳後期	北壁に竈か？	
SI021		竪穴住居跡	V08－74	V8－94	1／4残存	方形	—	—	47.480	3.25	2.00	0.021	—							－	—	－	—	奈良・平安	SI－010·022と重複	
SI022		竪穴住居跡	V08－74	V8－84	1／4残存	方形	—	—	47.490	2.10＋	0.90＋	0.054	—							－	—	－	—	奈良・平安	SI－010·021と重複	
SI023		竪穴住居跡	V14－90	V15－02	北側を欠く	円形	N－68°－W	—	47.370	4.15＋	3.55＋	0.134	2＋	13.8	10.6					南東	26.5×24.0×25.3	—	—	弥生中期	—	
SI024		竪穴住居跡	V15－43	V15－64	北西側の一部残存	方形	N－71°－W	—	47.464	2.60＋	3.75＋	0.023	—	29.3	56.8					－	—	－	—	弥生後期	SI－052と重複	
SI025		竪穴住居跡	V15－12	V15－33	北側を欠く	円形	N	北	47.515	3.90	3.00＋	0.198	1＋	16.8						－	—	－	—	弥生後期	—	
SI026		竪穴住居跡	V08－54	V8－64	東側を欠く	方形	N－06°－E	北	47.524	2.60	2.00＋	0.049	—							南	33.0×23.0×39.0	—	—	奈良・平安	SI－027と重複、南壁中央に柱穴1	
SI027		竪穴住居跡	V08－44	V8－63	東側は調査区外へ続く	方形	N	(北)	47.568	2.60	2.45＋	0.206	2＋	32.0	50.9					－	—	－	—	奈良・平安	SI－026と重複	
SI028		竪穴住居跡	V07－82	V7－83	北壁、東壁を欠く、壁溝は南側と西側の一部に残存	隅丸方形？	N－01°－E	—	47.590	2.70	2.20＋	0.155	—							－	—	－	—	弥生後期	SI－037·039と重複、P59は炉か？	SI－037の遺物が混入
SI029		竪穴住居跡	V07－64	V7－74	南西壁の一部が残存	—	—	—	47.556	—	—	0.245	—							－	—	－	—	古墳後期	SI－039と重複、壁溝あり	
SI030	A	竪穴住居跡	U15－89	V16－60	西側は調査区外へ続く	隅丸方形	N－10°－W	—	47.566	6.05	4.50＋	0.058	4	45.0	58.4	39.3	54.0	39.2		－	—	—	—	弥生後期(古)	浅く壁の検出できない部分がある、炉跡は未検出	
SI030	B	竪穴住居跡	U15－88	V16－10	西側は調査区外へ続く	隅丸方形	N－72°－E	—	—	5.25＋	6.60	0.051	3＋	58.0	33.7	63.0	55.1	58.5		—	—	—	—	弥生後期(新)	浅く壁の未検出部あり、壁柱穴が巡る、炉は未検出	
SI031		竪穴住居跡	V14－72	V14－93	東半はSI003・044に切られる	円形？	N－43°－E	北	47.572	5.20	2.85＋	0.022	2＋	51.8	15.0	10.6	19.2	38.0	51.7	—	—	—	—	弥生中期	—	
SI032		竪穴住居跡	V15－41	V15－52	北東の一部が残存	—	N－44°－W	南東	47.593	6.40	5.80	0.029	4	40.0	86.8	71.8	31.9			—	—	—	—	弥生後期	周溝のみ	東側の周溝の一部を検出、柱穴、炉跡は未確認
SI033		竪穴住居跡	V15－52	V15－63	北東の一部が残存	—	—	—	47.594	—	—	—	—							—	—	—	—	弥生後期	周溝のみ	東側の周溝の一部を検出、柱穴、炉跡は未検出
SI034		竪穴住居跡	U14－58	U14－78	西側の大半は調査区外	—	—	—	47.552	—	—	0.220	1＋	47.2						—	—	—	—	弥生後期	壁溝あり	
SI035		竪穴住居跡	V08－14	V8－25	東側の大半は調査区外	—	—	—	47.581	—	—	0.152	—	35.6						—	—	—	—	古墳後期	—	遺構の成果くは不明、竪穴状遺構か？
SI036		竪穴住居跡	U07－99	V8－00	完存	隅丸方形	N－85°－W	—	47.610	2.55	2.50	0.048	4	29.4	17.8	14.9	28.5			—	—	—	—	弥生後期	—	小竪穴、ほぼ全形遺存する
SI037		竪穴住居跡	V07－61	V7－82	東、北側を欠く	方形	—	—	47.599	3.70＋	2.45＋	0.172	—							—	—	—	—	奈良・平安	SI－028·038、SD－016と重複	東側にSD016が走る、炉跡未検出、周溝が巡る
SI038		竪穴住居跡	V07－60	V7－71	北側は未調査	方形	—	—	47.624	—	—	0.008	—							—	—	—	—	奈良・平安	SI－028·037、SD－016と重複、壁溝が巡る	

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置 1	グリッド位置 2	遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	遺構標高(m)	規模(m) 長軸長(最大幅)	規模(m) 短軸長(最小幅)	規模(m) 深さ(壁高)	主柱	柱穴の深さ(cm) P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12	入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	備考(遺物)
SI039		竪穴住居跡	V07－63	V7－74	南、北東の一部のみ残存	方形？	—	—	47.635	—	—	0.176	—	34.9						南東	37.0×30.0×39.3	—	—	古墳後期	SI－028·029·037と重複	
SI040		竪穴住居跡	U12－58	U12－99	西側を欠損	方形	N－15°－W	北	47.610	4.75＋	3.15＋	0.015	2＋	51.3	70.9					南	35.0×26.0×21.3	—	—	古墳後期	SI－041と重複	
SI041		竪穴住居跡	U12－47	U12－68	東南隅のみ残存	方形	—	—	47.610	3.45＋	1.15＋	0.095	1＋	19.3						—	—	—	—	古墳後期	SI－040と重複	
SI042		竪穴住居跡	V15－63	V15－94	西側半分残存	楕円形	N－50°－W	北西	47.567	2.95＋	3.70＋	0.165	2＋	56.5	19.2					—	—	—	—	弥生後期	覆土中の硬化面は後世の遺構か？炉の南側に石を配する	
SI043		竪穴住居跡	V14－94	V15－14	東側を欠く	楕円形	—	—	47.574	3.65	1.25＋	0.158	—							—	—	—	—	弥生後期	柱穴、炉跡は未検出	
SI044		竪穴住居跡	V14－74	V14－94	東、南側を欠く	楕円形？	N	—	47.612	3.25＋	2.05＋	0.199	1＋	20.3	20.7					—	—	—	—	弥生後期	柱穴２本検出、硬化面あり	多量の遺物が出土
SI045		竪穴住居跡	U14－68	V14－80	ほぼ全形	円形	N－13°－W	—	47.610	3.35	3.25	0.223	—							—	—	—	—	弥生後期	炭出土、炉の南側に石を配置する	
SI046		竪穴住居跡	V15－62	V15－83	南東隅の一部を欠く	方形	N－34°－W	北西	47.549	3.55	2.70	0.085	—	45.4	43.2					—	—	—	—	弥生後期	炉の南側に石を配置する	
SI047		竪穴住居跡	U14－59	V14－61	北側を欠く	楕円形	N－04°－E	—	47.566	2.15＋	3.85	0.204	2＋	50.8	59.8					南	33.0×32.0×28.4	南東	43.0×43.0×33.8	弥生後期	壁溝が巡る	
SI048		竪穴住居跡	V14－11	V14－22	東、南側を欠く	楕円形	N－71°－W	—	47.667	2.10＋	1.95＋	0.104	—							—	—	—	—	弥生後期	周溝が巡る、硬化面あり	
SI049		竪穴住居跡	U14－98	U15－09	北壁を欠く	方形	N－17°－W	中央北寄り	47.644	3.05	2.90	0.080	3＋	47.8	44.9	46.1	26.5			南西	47.5×38.0×58.3	—	—	弥生後期	SI－050·051·053と重複	土器片あり
SI050		竪穴住居跡	U14－88	V14－90	北側を欠く	不正円形	N－40°－W	北東	47.637	3.60＋	3.05	0.180	2＋	41.6	22.8	36.7				—	—	—	—	弥生後期	中央部に硬化面	
SI051		竪穴住居跡	U14－99	—	炉跡、柱穴のみ	方形？	N－23°－W	北西	47.626	3.80±	3.45±	—	4	41.0	14.1	25.3	38.5			—	—	—	—	弥生後期	炉跡には石が設置	
SI052		竪穴住居跡	V15－24	V15－44	東、南側欠く	楕円形	N－18°－E	北東	47.613	3.80＋	3.30＋	0.060	—							—	—	—	—	弥生後期	壁溝あり、床は２段構築か？	
SI053		竪穴住居跡	U14－99	V15－10	北、西側を欠く	隅丸方形？	N－07°－E	—	47.604	3.65＋	4.40＋	0.085	1＋	23.0	14.6	7.0				—	—	—	—	弥生後期	周溝で範囲確認、炉跡未検出	
SI054		竪穴住居跡	U15－08	V15－20	２／３残存	隅丸方形	N－45°－W	—	47.600	5.35＋	6.55	0.127	4	26.5	22.8	31.2	51.5	32.2		—	—	—	—	弥生後期	炉跡未検出、周溝あり	
SI055		竪穴住居跡	V15－20	V15－43	南部分のみ残存	円形	N－62°－E	—	47.648	5.60±	4.65±	0.010	4	13.4	8.1	21.4	39.7			—	—	—	—	弥生後期	周溝、柱穴残存	
SI056		竪穴住居跡	U15－07	U15－28	約1/3残存,西側をSX005に切られ、調査区外につづく	—	N－59°－W	—	47.621	1.15＋	1.50＋	—	1＋	53.4	45.5					—	—	—	—	弥生後期	SI－049·051と重複	
SI057		竪穴住居跡	V15－42	V15－63	東、西側を欠く	円形	N－85°－E	北西	47.620	5.40±	5.25±	0.090	2＋	73.0	30.5					—	—	—	—	弥生後期	—	
SI058		竪穴住居跡	V14－52	V14－73	北壁を欠く	楕円形	N－05°－W	北	47.640	3.25＋	3.25	0.082	4	48.3 19.7	46.1	52.8	44.5	44.1	30.6	南	36.0×30.0×17.1	南東	40.0×38.0×22.2	弥生後期	中央部硬化面、炉の南側に石を配置	
SI059		竪穴住居跡	U12－18	V12－30	西側の一部を欠く	方形	N－25°－W	北西	47.640	4.70	4.30＋	0.161	3＋	78.0	35.5	26.4	17.7			—	—	北西	45.5×42.0×32.9	古墳後期	SD024と重複、カマド約半分残存	
SI060		竪穴住居跡	U13－77	U13－88	西側調査区外	方形	N	—	47.660	6.20	4.35＋	0.087	3＋	58.2	56.1	63.3	41.1	82.2	36.8	—	—	—	—	弥生中期	SI－071·078と同一	
SI061		竪穴住居跡	V14－74	—	炉のみ	—	—	—	47.456	—	—	—	—							—	—	—	—	弥生中期	炉のみ	
SI062		竪穴住居跡	V14－74	—	炉のみ	—	—	—	47.678	—	—	—	—							—	—	—	—	弥生中期	炉のみ	
SI063		竪穴住居跡	V12－34	V12－44	南西隅残存	方形	—	—	47.518	2.30＋	1.45＋	0.206	—							—	—	—	—	古墳後期	柱跡、炉跡、周溝なし	
SI064		竪穴住居跡	V11－80	V12－01	完存	方形	N－85°－W	—	47.650	4.10	3.60	0.372	4	37.5	45.6	49.7	34.5			南	27.0×25.0×19.9	—	—	古墳後期	SI065と重複、カマドなし、床面に段あり	
SI065		竪穴住居跡	U11－99	V12－11	北東隅SI064に切られる	方形	N－12°－W	—	47.656	4.85	4.40	0.265	4	18.7	17.2	29.0	29.3	32.3	25.4	南	23.0×18.0×19.8	—	—	古墳後期	SI－064と重複	
SI066		竪穴住居跡	V14－60	V14－41	西側東側を欠く	円形？	N－13°－W	—	47.622	5.45	1.35＋	0.015	2＋	14.1	12.0					—	—	—	—	弥生後期	SI－067·073と重複	
SI067		竪穴住居跡	V14－60	V14－83	西側一部残存	方形？	N－35°－E	—	47.610	1.05＋	4.10＋	0.087	3＋	35.4	22.5	35.7				—	—	—	—	弥生後期	SI－066·073·074と重複	
SI068		竪穴住居跡	V11－50	V11－83	東壁を欠く	方形	N－14°－W	北	47.641	6.10	5.55＋	0.419	4	57.0	62.1	50.3	55.8			南東	24.0×22.0×18.9	北	51.0×48.0×52.0	古墳後期	SI－064と重複	土器SI－082と接合
SI069		竪穴住居跡	V12－70	V12－82	南半を欠く	隅丸方形？	N	—	47.648	3.35＋	4.20	0.122	2＋	29.6	37.8	31.3				—	—	—	—	古墳後期	—	
SI070		竪穴住居跡	U11－48	U11－59	北東側を欠く	方形	N－53°－E	北西	47.679	3.60	3.15＋	0.269	—							—	—	—	—	古墳後期	SD－025、SS006と重複	
SI071		竪穴住居跡	U13－89	U14－09	南東の一部残存	方形	—	—	47.665	—	—	—	—							—	—	—	—	弥生後期	SI－060·078と同一	
SI073		竪穴住居跡	V14－70	V14－92	北側を欠く	不正円形？	N－56°－E	—	47.620	5.95	4.70±	0.090	4＋	59.1 25.3	26.1 17.1	51.8 51.7	24.2	16.8	38.2	—	—	—	—	弥生中期	SI－066·067·074と重複	
SI074		竪穴住居跡	V14－51	V14－73	北側半分を欠く	楕円形？	N－03°－E	—	47.651	4.15＋	4.40＋	0.108	3＋	43.5	53.8	37.3				南	35.0×32.5×13.3	南	72.0×53.5×21.8	弥生後期	SI－058·067·073と重複	
SI075	a	竪穴住居跡	V12－40	V12－52	完存	方形	N－24°－W	—	47.627	3.55	2.95	0.184	—							—	—	—	—	古墳後期	SI－075b·c·082と重複	
SI075	b	竪穴住居跡	V12－40	V12－61	西壁のみ残存	方形？	—	—	—	3.10	3.10	0.183	—							—	—	—	—	古墳後期	SI－075a·c·082と重複	
SI075	c	竪穴住居跡	V12－61	—	南西隅のみ残存	方形？	—	—	—	0.60＋	0.70＋	0.095	—							—	—	—	—	古墳後期	SI－075a·b·082と重複	
SI076		竪穴住居跡	U11－88	U12－09	東側半分を欠く	楕円形？	N－23°－W	北西	47.573	2.35＋	3.40＋	0.168	—							—	—	—	—	弥生後期	SI－064·065と重複	
SI077		竪穴住居跡	U11－57	U11－88	北隅のみ残存	方形？	N－38°－W	—	47.688	3.40＋	4.20＋	0.143	—							—	—	—	—	古墳後期	SI－070と共通	
SI078		竪穴住居跡	U13－77	U13－78	—	—	—	—	47.670	—	—	—	—	72.0	63.3	32.9	41.7			—	—	北	85.0×58.0×72.0	古墳後期	SI－060·071と同一、竪穴の平面形不明	
SI079		竪穴住居跡	U12－69	V12－71	北東の一部のみ残存	—	N	—	47.680	4.15＋	4.00＋	0.033	2＋	22.5	27.0					南西	48.0×45.5×75.2	—	—	古墳後期	SI－069·SS004と重複	

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置 1	グリッド位置 2	遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	遺構標高(m)	規模(m) 長軸長(最大幅)	規模(m) 短軸長(最小幅)	規模(m) 深さ(壁高)	主柱	柱穴の深さ(cm) P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12	入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	備考(遺物)
SI080		竪穴住居跡	U11－78	U11－69	北東の一部のみ残存	―	N－50°－W	―	47.675	3.30＋	5.80±	0.201	―							―	―	―	―	弥生後期	―	遺物全くなし
SI081		竪穴住居跡	―	―	―	―	―	―	47.695	―	―	―	―							―	―	―	―	古墳後期	遺構不明	遺物のみ
SI082		竪穴住居跡	V12－32	V12－72	北西側と東隅を欠く	方形	N－24°－W	―	47.684	5.80	4.40±	0.189	1＋	19.8						南	34.5×32.0×39.7	北	59.0×53.0×15.5	古墳後期	SI－075a,b,cと重複	SI－068と遺物接合、帰属は082,須恵器・土製円板あり
SI083		竪穴住居跡	U15－28	V15－50	北東側半分残存	隅丸方形	N－15°－E	北	―	7.90±	7.70±	0.165	4	64.5	56.4	52.6	20.7			南	86.0×76.0×50.5	南	103.0×66.0×48.9	弥生後期	―	遺物なし
SI084		竪穴住居跡	U15－38	V15－51	南側一部を欠く	方形	N－15°－E	北	―	6.40±	5.40	0.035	4	69.0	57.5	91.6	70.1			南	51.0×38.0×28.8	―	―	弥生後期	―	遺物なし
SI085		竪穴住居跡	U15－39	V15－40	―	―	N－18°－E	―	―	4.40±	4.20±	0.036	―							―	―	―	―	弥生後期	―	遺物なし
SI086		竪穴住居跡	U15－48	U15－58	東側一部残存	円形？	―	―	―	2.90	1.40＋	0.121	―	11.6	18.0					―	―	―	―	弥生後期	―	SI068と接合
SI087		竪穴住居跡	U15－68	―	―	―	―	―	―	―	―	0.049	―							―	―	―	―	弥生後期	―	遺物なし
SI088		竪穴住居跡	U15－79	V15－61	南西隅一部残存	―	―	―	―	―	―	0.042	―							―	―	―	―	弥生後期	―	遺物なし
SI089		竪穴住居跡	U15－79	V15－61	南東隅一部残存	隅丸方形？	N－77°－W	―	―	5.20	5.00±	0.141	4	71.6	59.9	78.0	65.4			南東	35.0×33.0×19.3	―	―	弥生後期	―	遺物なし
SI090		竪穴住居跡	U15－78	V1570	南壁のみ残存	円形？	―	―	―	―	―	0.058	―							―	―	―	―	弥生後期	―	遺物なし
SI091		竪穴住居跡	V15－50	V15－62	主柱穴のみ残存	―	N－46°－W	―	―	5.10±	4.40±	―	―							―	―	―	―	古墳時代か	焼土、炭分布あり	遺物なし
SI110		竪穴住居跡	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―							―	―	―	―	弥生後期	遺構台帳、図面にはない、遺物台帳にあり	
SA001		柵列	V15－93	V16－14				―	47.665	4.90	―	―	3	6.0	18.5	24.2				―	―	―	―	中世	P6・P7	
SB001		掘立柱建物跡	U09－48	V9－61	―	―	N－07°－W	―	47.828	6.40	4.20	―	8	39.5 35.7	64.2 65.8	6.2	64.4	36.5	53.3	―	―	―	―	奈良・平安	SB005と重複	
SB002		掘立柱建物跡	V09－43	V9－64	―		N－09°－E	―	47.461	4.20	3.90	―	6	16.5	22.2	87.0	77.9	10.5	14.6	―	―	―	―	奈良・平安	―	土師器・須恵器 縄文土器
SB003		掘立柱建物跡	U07－89	U8－09	―		N－90°－W	―	47.616	3.60＋	2.85	―	5	39.6	27.9	55.9	38.5	28.6		―	―	―	―	中世	SB004と重複	土師器
SB004		掘立柱建物跡	U07－97	V8－10	―		N－10°－W	―	47.553	4.80＋	2.85	―	4	11.0	12.8	7.2	36.8			―	―	―	―	中世	SB003と重複	土師器
SB005		掘立柱建物跡	V09－60	V9－83	―	―	N－06°－E	―	―	5.80	3.40	―	8	36.3 49.6	44.9 35.5	45.7	22.1	45.0	15.5	―	―	―	―	中世	SB001と重複	土師器
SB006		掘立柱建物跡	V10－00	V10－31	―	―	N－15°－E	―	―	5.60＋	2.00	―	20	26.5 34.5 35.5 51.3	47.1 14.7 64.5 74.2	62.1 86.9 24.8 11.1	65.9 18.8 60.8	52.9 32.4 19.8	54.8 30.4 96.0	―	―	―	―	中世	―	
SB007		掘立柱建物跡	V10－02	V10－34	―	―	N	―	―	5.60＋	4.20	―	14	11.2 52.1 11.8	30.8 29.7 11.4	46.0 9.0	43.2 15.8	15.4 72.3	48.0 55.9	―	―	―	―	中世	―	
SB008		掘立柱建物跡	V09－43	V09－64	―	―	N－03°－E	―	―	2.10＋	4.20	―	4	88.0	83.5	56.7	77.9			―	―	―	―	中世	―	
SB009		掘立柱建物跡	V10－51	V10－64	―	―	N	―	―	4.80＋	1.90	―	13	26.8 24.6 33.5	60.2 43.8	28.6 32.0	20.0 7.7	9.5 29.9	18.6 10.3	―	―	―	―	中世	―	
SB010		掘立柱建物跡	V09－03	V09－24	―	―	N－05°－W	―	―	2.80＋	3.70	―	8	4.0 48.4	5.5 12.7	4.2	18.9	49.5	5.0	―	―	―	―	中世	―	
SB011		掘立柱建物跡	V07－91	V08－03	―	―	N－76°－E	―	―	3.30＋	3.60	―	5	37.9	50.8	33.8	25.9	14.5		―	―	―	―	中世	―	
SB012		掘立柱建物跡	V09－70	V09－94	―	―	N－04°－W	―	―	8.00＋	4.40	―	9	28.1 72.7	21.9 37.2	63.3 16.4	5.3	80.9	33.1	―	―	―	―	中世	―	
SH001		ピット群	U16－69	V16－70	P1～P10を含む	―	―	―	47.340	―	―	―	―							―	―	―	―	中世	（A区）	
SH002		ピット群	U06－67	U7－48	P1～P14を含む	―	―	―	47.344	―	―	―	―							―	―	―	―	中世	（D区）	
SK001		土坑	U09－88	U09－99	ほぼ完存	長方形	N－70°－E	―	47.650	―	―	―	―							―	―	―	―	不明	―	遺物あり
SK002		土坑	V07－70	V7－81	底面未検出 完存	円形	N－32°－W	―	47.622	1.90	1.60	1.642	―							―	―	―	―	弥生中期	性格不明	遺物あり
SK003		土坑	―	―	―	―	―	―	47.620	―	―	―	―							―	―	―	―		―	
SK004		土坑	―	―	―	―	―	―	47.619	―	―	―	―							―	―	―	―		―	
SK005		土坑	U09－19	V9－10	浅い 完存	円形	N－63°－E	―	47.701	1.40	1.20	0.136	―							―	―	―	―	弥生中期	性格不明	遺物あり
SK006		土坑	U15－99	V15－90	西側一部を欠く	円形	N－73°－W	―	47.625	1.10	1.00	0.596	―							―	―	―	―	弥生後期	性格不明	遺物、土器出土多い
SK007		土坑	U09－29	―	完存	長楕円形	N	―	47.615	1.15	0.40	0.225	―							―	―	―	―	不明	性格不明、SK008と並行	
SK008		土坑	U09－29	―	完存	長楕円形	N	―	47.692	0.90	0.45	0.293	―							―	―	―	―	不明	性格不明、SK007と並行	
SK009		土坑	U09－37	U9－48	西側を欠く	円形	N	―	47.576	1.61	1.06＋	0.167	―							―	―	―	―	古墳後期	底面はほぼ水平	遺物出土あり
SK010		土坑	V08－43	―	北東を欠く	楕円形	N－39°－E	―	47.460	1.50	1.05	0.229	―							―	―	―	―	奈良・平安	底面は２カ所あり	遺物出土あり
SK011 a		土坑	V08－44	V8－54	―	―	―	―	47.615	0.87	0.80	0.628	―							―	―	―	―	奈良・平安	SI－027のカマド堀方	
SK011 b		土坑	V08－44	V8－54	―	楕円形	N－54°－E	―	―	0.94	0.35	0.648	―							―	―	―	―	奈良・平安	同上	

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置 1	グリッド位置 2	遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	遺構標高(m)	規模(m) 長軸長(最大幅)	規模(m) 短軸長(最小幅)	規模(m) 深さ(壁高)	主柱	柱穴の深さ(cm) P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12	入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	備考(遺物)
SK012		土坑(地下式坑)	V13－71	V13－82	完存	長方形	N－89°－W	—	47.637	3.80	奥 2.55 入口 0.90	1.012	—							—	—	—	中世	地下式坑、入り口部付き	
SK013		土坑	V12－92	V13－03	北側を欠く	楕円形	N－33°－E	—	47.625	1.84	1.55	0.317	—							—	—	—	中世＞	底面は水平、土層は2層で、左右に分かれる	実測遺物なし
SK014		土坑	V14－81	V14－92	ほぼ完存	円形	N－56°－E	—	47.484	1.40	1.30	0.622	—							—	—	—	—	奈良・平安	弥生土器片あり	性格不明
SK015		土坑(地下式坑)	V13－11	V13－22	完存	方形	N－90°－E	—	47.740	3.15	2.95	0.673	—							—	—	—	—	中世	SK023と重複	
SK016		土坑	V12－94	V13－04	東は調査区外	—	N－16°－E	—	47.736	2.75	1.35＋	1.275	—							—	—	—	—	中世	井戸か	
SK017		土坑	V14－60	V14－70	ほぼ完存	楕円形	N－63°－E	—	47.678	1.30	0.70	1.197	—							—	—	—	—	不明	径に比較して深い	石のみ
SK018		土坑	U12－97	U13－08	北は溝、西は調査区外	方形	—	—	47.613	2.75＋	2.25＋	0.753	—							—	—	—	—	古墳後期	平面方形の中に、楕円形の落ち込み	古墳後期のの甕底部出土
SK019		土坑	V13－42	V13－53	北西隅を欠く	不正形	N－11°－E	—	47.655	4.35	3.30	0.682	—							—	—	—	—	中世	—	実測遺物なし
SK020		土坑	V12－93	V13－14	東は調査区外	方形	N	—	47.736	4.10	2.20＋	0.529	—							—	—	—	—	中世	—	実測遺物なし
SK021		土坑	V13－03	V13－13	北東側を欠く	楕円形	N－36°－W	—	47.777	1.70	0.70＋	0.328	—							—	—	—	—	中世＞	—	実測遺物1点あり
SK022		土坑	—	—	—	—	—	—	47.787	—	—	—	—							—	—	—	—	—	—	実測遺物1点あり
SK023		土坑	V13－21	V13－33	北壁を欠く	方形	N－83°－E	—	47.834	3.40	2.40＋	0.460	—							—	—	—	—	中世	SK015と重複	
SK024		土坑	V12－64	V12－74	端部東側を欠く	溝か？	N－35°－E	—	47.690	2.85＋	1.70	1.362	—							—	—	—	—	中世	性格不明、SS003を切る	縄文1点あり
SK025		土坑	V07－00	—	完存	楕円形	N－78°－W	—	47.810	0.90	0.55	0.289	—							—	—	—	—	古墳後期	性格不明、周囲に所属遺構なし、単独所在	土器出土
SK026		土坑	V06－61	V06－72	南を欠く	不正形	N	—	47.640	3.25＋	2.15	0.630	—							—	—	—	—	古墳後期	性格不明平面形は凹凸あり	
SK027		土坑	V06－92	V07－03	—	楕円形	—	—	—	—	—	—	—							—	—	—	—	古墳	—	
SS001	a	方形周溝墓	U08－23	U08－44	ほぼ完存	長楕円形	N	—	47.690	上 5.15 下 4.75	上 1.80 下 1.20	0.230	—							—	—	—	—	弥生	—	
SS001	b	方形周溝墓	U08－57	U08－68	西は調査区外	長楕円形	N－79°－E	—	—	上 2.85＋ 下 2.65＋	上 1.15 下 0.40	0.790	—							—	—	—	—	弥生	四隅切れるタイプ	
SS002	b	方形周溝墓	U12－17	U12－48	西は調査区外	長楕円形	N－04°－E	—	47.738	上 6.80＋ 下 5.80	上 1.40＋ 下 0.60＋	0.424	—							—	—	—	—	弥生	—	
SS003	a	方形周溝墓	V12－30	V12－32	完存	長楕円形	N－81°－E	—	47.757	上 5.20 下 4.60	上 1.45 下 0.60	0.420	—							—	—	—	—	弥生	—	
SS003	b	方形周溝墓	V12－43	V12－74	南西隅を欠く	長楕円形	N	—	—	上 6.90 下 6.30	上 1.75 下 1.10	0.434	—							—	—	—	—	弥生	四隅切れるタイプ	
SS003	c	方形周溝墓	V12－80	V12－83	完存	長楕円形	N－88°－E	—	—	上 5.80 下 5.30	上 1.40 下 0.75	0.397	—							—	—	—	—	弥生	四隅切れるタイプ	
SS003	d	方形周溝墓	U12－49	U12－79	完存	長楕円形	N－06°－W	—	—	上 6.95 下 5.85	上 1.60 下 0.90	0.581	—							—	—	—	—	弥生	四隅切れるタイプ	
SS004	c	方形周溝墓	U12－87	U12－88	西は調査区外	長楕円形	N－79°－E	—	47.721	上 2.40＋ 下 2.10＋	上 1.15 下 0.55	0.455	—							—	—	—	—	弥生	—	
SS005	c	方形周溝墓	V12－84	—	東は調査区外	—	N－89°－W	—	47.702	上 0.68＋ 下 0.64＋	上 1.00 下 0.93	0.203	—							—	—	—	—	弥生	—	
SS006	a	方形周溝墓	U11－47	U11－57	西は調査区外	—	N－60°－E	—	—	上 0.65＋ 下 0.50＋	上 1.05 下 0.90	0.082	—							—	—	—	—	弥生	—	
SS006	b	方形周溝墓	U11－48	U11－69	南側を欠く	長楕円形	N－27°－W	—	—	上 2.35＋ 下 2.20＋	上 1.20 下 0.60	0.129	—							—	—	—	—	弥生	—	
SX001		方墳(周溝)	U16－57	V16－14	南側東側は調査区外	—	—	—	47.690	上 4.30＋ 下 3.40＋	—	南西隅 0.074 中央 0.837	—							—	—	—	—	古墳	—	
SX002		—	—	—	—	—	—	—	47.690	—	—	—	—							—	—	—	—	—	—	
SX003		溝	U10－67	V11－14	東西端は調査区外	—	—	—	47.724	7.60	5.00	1.634	—							—	—	—	—	奈良・平安	—	
SX004		方墳(周溝)	U14－27	V14－54	東西端は調査区外	—	—	—	47.696	6.80	6.10	大 0.673 小 0.517	—							—	—	—	—	古墳	—	
SX005		方墳(周溝)	U14－97	U16－18	北側西側は調査区外	—	—	—	47.712	—	—	—	—							—	—	—	—	古墳	—	
SD001		溝状遺構	U16－59	U16－79	北端調査区外	—	—	—	47.387	0.51	0.31	0.143	—							—	—	—	—	中世以降	—	弥生土器
SD002		溝状遺構	U16－57	U16－88	西端調査区外 北端SX001を切る	—	—	—	47.750	0.53	0.31	0.155	—							—	—	—	—	中世以降	—	土師器
SD003		溝状遺構	U09－88	V9－65	東端調査区外	—	—	—	47.709	2.75	0.50	0.369	—							—	—	—	—	中世	—	土師器
SD004		溝状遺構	U09－97	V11－24	東西端調査区外 SX003を切る	—	—	—	47.657	1.80	0.55	0.501	—							—	—	—	—	中世	—	
SD005		溝状遺構	U10－47	V11－44	東西端調査区外 SX003を切る	—	—	—	47.553	2.10	1.10	0.960	—							—	—	—	—	中世	—	土師器

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置		遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	遺構標高(m)	規模(m)			主柱	柱穴の深さ(cm)						入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	備考(遺物)
			1	2						長軸長(最大幅)	短軸長(最小幅)	深さ(壁高)		P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12							
SD006		溝状遺構	V11－52	V11－74	東端調査区外 北端はSD005と重複する	—	—	—	47.608	1.45	0.80	0.546	—							—	—	—	—	中世	—	
SD007		溝状遺構	V08－51	V8－55	東端調査区外	—	—	—	47.160	0.45	0.30	0.178	—							—	—	—	—	中世	—	
SD008		溝状遺構	U08－08	V7－71	SK002を切る	—	—	—	47.187	1.70	0.50	0.879	—							—	—	—	—	中世	—	
SD009		溝状遺構	U07－58	U7－69	南東端調査区外	—	—	—	47.215	0.70	0.70	0.135	—							—	—	—	—	中世	—	
SD010		溝状遺構	U07－47	V7－45	西端調査区外 東端SD011、029と重複しSD016を切る	—	—	—	47.280	西 3.05 東 2.35	—	西 0.430 東 0.363	—							—	—	—	—	中世	—	
SD011		溝状遺構	U07－27	V7－88	東西端調査区外 SD029と重複しSD016を切る	—	—	—	47.284	2.85	1.80	0.756	—							—	—	—	—	中世	—	
SD012		溝状遺構	U06－97	V6－92	西端調査区外 SK027、SI008、SD016を切りSD029と重複する	—	—	—	47.280	1.10	0.70	0.184	—							—	—	—	—	中世	SD029と合流	
SD013		溝状遺構	U06－77	—	西端調査区外	—	—	—	47.270	0.65	—	0.179	—							—	—	—	—	中世	SD029と合流	
SD014		溝状遺構	U09－57	V9－23	西端調査区外	—	—	—	47.284	2.10	1.70	0.529	—							—	—	—	—	古墳	—	
SD015		溝状遺構	U09－17	U9－29	東端調査区外	—	—	—	47.277	0.85	0.65	0.066	—							—	—	—	—	不明	—	
SD016		溝状遺構	U06－47	V8－06	南北端調査区外 SD029、013に切られる。一部調査区外	—	—	—	47.270	1.55	0.45	0.472	—							—	—	—	—	弥生中期後葉～後期前葉	環濠(V字溝)	
SD017		溝状遺構	V10－52	V10－63	南端SX003と重複する	—	—	—	47.275	1.00	0.55	—	—							—	—	—	—	奈良・平安	—	
SD018		溝状遺構	U13－87	V13－24	東西端調査区外	—	—	—	47.288	1.60	0.65	0.957	—							—	—	—	—	弥生中期後葉～後期前葉	環濠(V字溝)	
SD019		溝状遺構	U12－97	V12－93	西端調査区外 東端SK020と重複する	—	—	—	47.288	1.10	0.35	0.328	—							—	—	—	—	中世＞	—	
SD020		溝状遺構	U13－27	U13－38	西端調査区外	—	—	—	47.193	1.45	1.20	—	—							—	—	—	—	中世＞	—	
SD021		溝状遺構	U13－27	V13－30	西端調査区外 SD020と重複する	—	—	—	47.266	2.90	0.95	—	—							—	—	—	—	中世＞	—	
SD022		溝状遺構	U12－07	U12－68	両端西側調査区外	—	—	—	47.248	1.00	0.80	0.800	—							—	—	—	—	古墳	—	中世の遺物なし
SD023		溝状遺構	V13－90	V13－92	完存	—	—	—	47.280	0.80	0.60	—	—							—	—	—	—	中世＞	—	遺物なし
SD024		溝状遺構	U12－39	V12－43	西端SD022に東端SS003bを切る	—	—	—	47.280	0.50	0.30	0.271	—							—	—	—	—	中世	—	実測遺物なし
SD025		溝状遺構	U11－68	V11－40	西端調査区外	—	—	—	47.290	1.55	0.70	0.717	—							—	—	—	—	中世	—	
SD026		溝状遺構	U11－88	V12－32	北端SI027に南端SI082に切られる	—	—	—	47.303	1.60	1.00	0.297	—							—	—	—	—	中世	—	
SD027		溝状遺構	U11－97	V11－70	西端調査区外 東端SI068を切る	—	—	—	47.334	0.75	0.50	0.237	—							—	—	—	—	中世	—	遺物は弥生のみ
SD028		溝状遺構	U06－89	V6－92	東西端調査区外 SD029と重複しSD016、SI008を切る 一部調査区外	—	—	—	47.340	2.90	1.30	0.770	—							—	—	—	—	中世	—	
SD029		溝状遺構	U06－47	V7－50	北端調査区外 SD013と重複する 一部調査区外	—	—	—	47.260	1.10	0.35	0.480	—							—	—	—	—	中世	—	台帳にない
SD030		溝状遺構	V07－00	V7－02	東端調査区外	—	—	—	47.267	0.65	0.45	0.278	—							—	—	—	—	中世	—	台帳にない
SD031		溝状遺構	—	—	—	—	—	—	47.294	—	—	—	—							—	—	—	—		—	

表３－２　宇戸台遺跡遺構一覧

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置		遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	規模(m)			主柱	柱穴の深さ(cm)						入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	カマド有無	備考(遺物)
			1	2					長軸長(最大幅)	短軸長(最小幅)	深さ		P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12								
SI001		竪穴住居跡	N18－73	N18－94	大半は調査区外	方形	N－3°－E		3.65	—	0.340		19.1	20.5					—				8世紀前半			
SI002		竪穴住居跡	N18－54	N18－74	大半は調査区外	方形	N－3°－E		3.65＋	2.34＋	0.111		40.1	20.4	14.5	7.2			—		—		古墳時代後期			小破片のみ
SI003		竪穴住居跡	N18－63	N18－74	大半は調査区外	方形	N－0°－W		2.09＋	1.19＋	0.140		5.9	20.0					—		—		8世紀後半			小破片２点のみ
SI004		竪穴住居跡	N20－72	N20－94	西側は調査区外	方形	N－78°－E	東カマド	3.78＋	4.86	0.402		37.0	38.1	38.2	10.8			—		—		8世紀後半		東カマド	

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置 1	グリッド位置 2	遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	規模(m) 長軸長(最大幅)	規模(m) 短軸長(最小幅)	規模(m) 深さ	主柱	柱穴の深さ(cm) P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12	入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	カマド有無	備考(遺物)
SI005		竪穴住居跡	N20－74	N20－85	1/2残存	方形	N－18°－W		4.40±	3.90±	0.124		22.3	56.2	37.4	26.6				P5 18.5×17.0×47.7	—		9世紀後半			
													11.0+	5.6						P6 16.5×16.5×37.0						
SI006		竪穴住居跡	N20－64	N20－75	3/4残存	方形	N－22°－W		3.00+	3.00+	0.173			33.5	33.8	31.0			—		—		10世紀			土師器甕小破片のみ
SI007		竪穴住居跡	N20－62	N20－74	南側欠	方形	N－24°－W	北西カマド(焼土のみ)	3.56	3.59	0.434		26.4	15.9	38.5	37.6			—		—		8世紀中葉			
SI008		竪穴住居跡	N20－62	N20－73	大半は調査区外	方形	N－22°－W		2.05±	2.18±	0.338		17.9	19.3	31.3				—		—		8世紀後半			土師器甕片のみ
SI009		竪穴住居跡	N20－73		カマド煙道部のみ残存	不明	N－13°－W	北カマド(煙道のみ)	—	—	—								—		—		8世紀後半		北カマド	土師器杯・甕の細片のみ
SI010		竪穴住居跡	N20－13	N20－34	西側を欠く	方形	N－22°－W		3.12	2.52+	0.135		13.2	18.7	14.5				—		—		古墳時代後期			遺物なし
SI011		竪穴住居跡	N20－33	N20－34	南側のみ残存	方形	N－69°－E		2.13±	0.51±	0.078								—		—		古墳時代後期			遺物なし
SI012		竪穴住居跡	N20－33	N20－43	大半は調査区外	方形	N－20°－W		2.53±	1.21±	0.111		12.6						—		—		古墳時代後期			遺物なし
SI013		竪穴住居跡	N20－43	N20－55	完存	方形	N－19°－W		3.47	3.35	0.206								—		—		古墳時代後期			土師器杯・甕の細片のみ
SI014		竪穴住居跡	N18－04	N18－14	大半は調査区外	方形	N－55°－E		2.06±	0.50±	0.310								—		—		古墳時代後期			遺物なし
SI015		竪穴住居跡	N17－94	N18－14	大半は調査区外	方形	N－2°－E		4.68	1.36+	0.428		58.0	68.4					—		—		6世紀後半			
SI016		竪穴住居跡	N16－86	N16－98	北東の一部欠く	方形	N－13°－W	北カマド	2.57	3.40	0.368		24.3	22.0	24.0	22.2				P5 23.5×22.5×24.6	—		8世紀中		北カマド	
SI017		竪穴住居跡	O17－51	O17－73	東側は調査区外	方形	N－35°－W	北カマド	4.78	4.76	0.127		40.4	33.1	19.9				—			36.0×30.0×23.0	7世紀前半		北カマド	
SI018		竪穴住居跡	O17－00	O17－12	北西の一部欠	横長方形	N－4°－W		4.29	3.37	0.380		11.3	8.2	8.3	7.5			—		—		8世紀後半			古墳時代後期と奈良時代の遺物混在
SI019		竪穴住居跡	N16－79	O16－80	南東側調査区外	方形	N－15°－W	北カマド	3.14+	3.04	0.432								—		—		9世紀後半		北カマド	杯類は新しいが、甕片は厚手のものが多い
SB001		掘立柱建物跡	N18－54	—	大半は調査区外	方形	N－11°－W		1.20+		—		8.6	12.3					—		—		奈良・平安時代			灰釉陶器と考えられる小破片が出土
SB002		掘立柱建物跡	N20－13	N20－34	大半は調査区外	不明	N－19°－W		2.10+	2.10+	—		39.3	44.3	65.3	37.7			—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代の土師器杯片と薄手の土師器甕小破片が出土
SB003		掘立柱建物跡	N20－43	N20－62	大半は調査区外	不明	N－37.5°－W		1.80+	2.00+	—		54.4	53.2	33.0				—		—		奈良・平安時代			古墳時代後期～奈良時代と考えられる土師器杯・甕細片が出土。
SB004		掘立柱建物跡	N17－07	N17－20	完存	東西棟	N－6.5°－W		4.10	3.30	—		56.2	49.1	27.5	4.8	10.0	51.4	—		—		奈良・平安時代			土師器細片
													52.0	62.1	49.6	44.7										
SB005		掘立柱建物跡	N17－10	N17－33	東側調査区外	不明	N－10°－W		4.60+	3.80	—		18.6	14.2	39.8	50.7	34.3	51.2	—		—		奈良・平安時代			土師器細片
													35.1													
SB006		掘立柱建物跡	O16－82	O17－03	北東の一部調査区外	南北棟	N－7.5°－W		5.20+	3.00	—		29.5	45.0	35.7	35.6	23.1	40.3	—		—		奈良・平安時代			
													37.6	23.2	35.3											
SK001		土坑	N20－35	N20－45	完形	長方形	N－75°－E		1.73	1.31	0.254								—		—		奈良・平安時代			薄手の土師器甕
SK002		土坑	N17－94	N17－95	西半欠	隅丸方形	N－82°－W		1.30+	1.25	0.352		3.8						—		—		古墳時代後期			遺物検出されていない。
SK003		土坑	N17－40	N17－50	完形	略円形	N－30°－W		1.20	1.04	0.577								—		—		奈良・平安時代			平安時代土師器杯細片・古墳時代後期～奈良時代の土師器甕細片
SK004		土坑	N17－17	N17－27	完形	長方形	N－31°－W		1.40	0.80	0.121								—		—		奈良・平安時代			遺物検出されていない。
SK005		土坑	N16－65	N16－66	南端欠	不整形	N－16°－E		2.00+	1.17	0.280								—		—		奈良・平安時代			遺物検出されていない。
SK006		土坑	N16－55	N16－56	西半欠	円形	N－20°－E		0.91	0.76+	0.229								—		—		奈良・平安時代			遺物検出されていない。
1号方形周溝墓		方形周溝墓	N17－46	O17－92	南半欠		N－30°－E		9.40	5.00+	0.434															SD003
2号方形周溝墓		方形周溝墓	N18－14	N18－26	北周溝のみ		－		4.50	—	0.307															SD002
3号方形周溝墓		方形周溝墓	N17－24	N17－56	東側1/4のみ		－		7.40	—	0.562															SD005a・006a
4号方形周溝墓		方形周溝墓	N16－69	O17－43	東側調査区外		N－52°－W		10.50	10.0+	0.736															SD010
5号方形周溝墓		方形周溝墓	N16－16	O16－90	西半調査区外		N－44°－W		6.2+	12.3	0.505															SD014
1号墳		古墳周溝	N17－84	N18－58	西周溝のみ		N－30°－E		10.5	2.5+	0.434															SD001
2号墳		古墳周溝	N16－85	O17－50	墳丘は削平		N－6°－E		9.4	9.0	0.580															SD005b・006b・008・009
SD004		溝	N17－64	N17－66	西側は調査区外	—	N－75°－E		5.00+	1.10	0.10								—		—		古墳時代			
SD007		溝	A区西側		西側は調査区外	—	N－10°－W		23.60+	1.15	0.20								—		—		中世			

遺構番号	枝	遺構の種類	グリッド位置		遺存度	形状	主軸方位	炉・カマド位置	規模(m)			主柱	柱穴の深さ(cm)						入口施設	入口施設規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴規模(cm)	時期	備考(遺構)	カマド有無	備考(遺物)
			1	2					長軸長(最大幅)	短軸長(最小幅)	深さ		P1 P7	P2 P8	P3 P9	P4 P10	P5 P11	P6 P12								
SD011		道跡	A区東側		北側は調査区外	—	N－2°－W		35.80＋	4.70	0.30								—		—		中世			遺物あり
SD012		溝	N16－76	N16－79	西側は調査区外	—	N－79°－E		7.70＋	0.55	0.10								—		—					土師器杯片
SD013		溝	N16－76	O16－60	西側は調査区外	—	N－79°－E		9.80＋	0.50	0.12								—		—					土師器杯片
SE001		井戸	N16－87	N16－98	完形	円形	N－1°－E		2.32	2.23	1.556＋								—		—		中世			遺物あり
SH001		ピット	N20－44		完形	不整円形			1.05	0.57	0.140								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器 武蔵型土師器甕
SH003		ピット	N20－24		東半欠	円形			1.02	0.86＋	0.427								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器
SH004		ピット	N20－34		完形	不整円形			0.72	0.72	0.332								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器 武蔵型土師器甕
SH005		ピット	N20－24		完形	不整円形			0.89	0.80	0.300								—		—		平安時代			平安時代土師器 武蔵型土師器甕 実測
SH009		ピット	N20－55		完形	楕円形			0.54	0.38	0.284								—		—		古墳時代～奈良時代			古墳時代～奈良時代土師器甕
SH010		ピット	N20－55		完形	円形			0.54	0.46	0.450								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器甕
SH011		ピット	N20－46		完形	円形			0.41	0.35	0.383								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH012		ピット	N20－36		西半欠	円形			0.46	0.39＋	0.431								—		—		奈良・平安時代			鉄釘出土
SH013		ピット	N20－35		東半欠	円形			0.69	0.49＋	0.508								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH014		ピット	N20－34		完形	楕円形			0.50	0.28	0.264								—		—		古墳時代後期			古墳時代後期土師器杯 実測
SH015		ピット	N20－52		完形	円形			0.55	0.48	0.565								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH016		ピット	N20－43		完形	円形			0.40	0.33	0.530								—		—		奈良時代			奈良時代土師器
SH017		ピット	N20－42		完形	円形			0.58	0.48	0.311								—		—		奈良・平安時代			土師器甕細片
SH018		ピット	N20－26		完形	円形			0.44	0.43	0.331								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH020		ピット	N18－44		完形	円形			0.43	0.42	0.250								—		—		弥生時代			弥生時代壺
SH021		ピット	N18－34		西半欠	円形			0.61＋	0.14＋	0.306								—		—		弥生時代			弥生時代壺
SH022		ピット	N18－14		完形	円形			0.33	0.30	0.430								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH023		ピット	N17－74		完形	円形			0.39	0.37	0.311								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH024		ピット	N17－75		完形	円形			0.33	0.32	0.482								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH025		ピット	N18－05		東端欠	円形			0.28	0.26＋	0.296								—		—		古墳時代～奈良時代			古墳時代～奈良時代土師器甕
SH026		ピット	N17－54		完形	円形			0.68	0.63	0.375								—		—		奈良時代			奈良時代土師器杯・椀
SH027		ピット	N17－65		完形	不整円形			0.62	0.44	0.536								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH028		ピット	N17－65		完形	円形			0.46	0.40	0.283								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH030		ピット	N17－66		南西端欠	円形			0.34	0.26＋	0.231								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH031		ピット	N17－64		完形	円形			0.41	0.31	0.305								—		—		古墳時代～奈良時代			古墳時代～奈良時代土師器甕
SH032		ピット	N17－25		完形	円形			0.19	0.18	0.240								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH033		ピット	N17－85		完形	円形			0.47	0.47	0.405								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器
SH034		ピット	N17－75		完形	円形			0.42	0.32	0.091								—		—		奈良時代			奈良時代土師器
SH035		ピット	N17－75		完形	円形			0.60	0.46	0.424								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器
SH036		ピット	N17－75		完形	円形			0.59	0.53	0.323								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器
SH037		ピット	N17－75		完形	円形			0.51	0.47	0.120								—		—		奈良時代			奈良時代土師器
SH038		ピット	N17－65		東端欠	楕円形			0.65＋	0.44	0.100								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器
SH039		ピット	N17－65		完形	楕円形			0.60	0.36	0.207								—		—		奈良・平安時代			奈良・平安時代土師器
SH040		ピット	N17－66		完形	円形			0.37	0.27	0.074								—		—		平安時代			平安時代土師器
SH041		ピット	O17－31		完形	円形			0.50	0.38	0.125								—		—		奈良・平安時代			土師器細片
SH044		ピット	O17－03		完形	円形			0.31	0.30	0.202								—		—		奈良時代			奈良時代土師器
SH045		ピット	N17－08		完形	円形			0.34	0.31	0.401								—		—		平安時代			平安時代土師器杯

表4　萱野遺跡（1）土器・土製品観察表

※計測値の（ ）は復元値、［ ］は現存値を表す。
※胎土の緻密なものは「緻密」欄に○をした。含有混和材の◎は多量、○は中量、△は少量、▲は微量を表す。
※焼成の◎は良好、○は普通、△は不良を表す。

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値（cm）（ ）は推定値、［ ］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
10－01	SD－001	3	弥生土器	壺	全体の95%	――	3.8			［11.5］	ミガキ（ヨコ）、S字結節文山形文	ヘラナデ（ヨコ）	○		△	ウンモ	灰黄色～灰黄褐色	2.5Y7/2～10YR5/2	浅黄色～黄灰色	2.5Y7/3～2.5Y5/1	赤彩（赤褐色）
10－02	SD－001	5	弥生土器	壺	口縁部の25%	（19.1）	――			［3.2］	網目状撚糸文	ヘラナデ（ヨコ）	△		△	ウンモ	にぶい橙色（黒褐色）	5YR6/4（5YR3/1）	にぶい橙色～橙色	5YR7/4（5YR6/6）	赤彩
10－03	SD－001	5	弥生土器	高坏	脚部の100%	――	11.0			［8.6］	ミガキ（タテ）	ミガキ、ヘラナデ（ヨコ）	○	△	△	ウンモ黒色粒	橙色	5YR6/6	にぶい黄橙色～灰色	10YR6/3～5Y4/1	
10－04	SD－001	2	弥生土器	高坏	脚部の100%	――	9.6			［7.8］	ミガキ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）		△	△	ウンモ黒色粒	にぶい赤褐色～にぶい橙色	5YR5/4～7.5YR7/4	浅黄色～にぶい橙色～褐灰色	2.5Y7/3～7.5YR7/4～10YR5/1	
10－05	SD－001	5	弥生土器	高坏	口縁部の25%	（10.8）	――			［4.7］	ヘラナデ（タテ～ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	○			ウンモ黒色粒	にぶい黄橙色～灰黄褐色	10YR7/4～10YR6/2	にぶい黄橙色	10YR7/4	
10－06	SD－001	5	弥生土器	甕	口縁部の20%	（17.8）	――			［8.7］	頸部刻み目、口縁押圧文	ヘラナデ（ヨコ）	○	△	△	ウンモ黒色粒	にぶい黄橙色灰褐色	10YR6/3～10YR4/1	黒褐色	10YR3/1	
10－07	SD－001	5	弥生土器	甕	口縁部の25%	（20.4）	――			［3.9］	口縁押圧文、頸部輪積文	ヘラナデ（ヨコ）	○			ウンモ黒色粒	にぶい橙色～にぶい褐色	7.5YR7/3～7.5YR5/3	灰褐色～灰褐色	7.5YR5/2～7.5YR4/1	
10－08	SD－001	4	弥生土器	甕	底部の100%	――	8.4			［7.0］	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	○		△	ウンモ黒色粒	にぶい黄橙色～明赤褐色	10YR7/4～2.5YR5/6	黒褐色～にぶい黄橙色	2.5Y3/1～10YR7/4	
10－09	SD－002	2	在地土器	カワラケ小皿	全体の20%	（8.0）	（5.4）			1.5	ロクロ挽き	ロクロ挽き	○				灰白色	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/1	底部調整糸切り回転糸付着（黒褐色）
10－10	SD－004	2	弥生土器	壺	ほぼ完形	（4.2）	4.4			12.2	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）、輪積み痕残	○		◎	ウンモ黒色粒	にぶい黄橙色	10YR6/3	橙色～にぶい黄橙色	7.5YR6/8～10YR7/3	赤彩
10－11	SD－004	2	弥生土器	高坏	脚部の100%	――	8.8			［8.9］	ミガキ（タテ）、ヘラナデ（ヨコ）	ミガキ、ヘラナデ（ヨコ）	○		◎		橙色	5YR6/8	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
10－12	SD－004	3	弥生土器	壺	底部の25%	――	（6.8）			［3.0］	——	ヘラナデ（ヨコ）	△	○	○	黒色粒	灰色～灰黄色	7.5Y4/1～2.5Y7/2	浅黄橙色	10YR8/4	外面摩滅
10－13	SD－004	1	弥生土器	壺	底部の25%	――	（9.0）			［3.0］	ヘラケズリ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	○				にぶい橙色	7.5YR7/4	橙色	7.5YR6/6	
10－14	SD－004	3	弥生土器	甕	口縁部の15%	（21.4）	――			［8.1］	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	○	△		ウンモ黒色粒	にぶい黄橙色～褐灰色	5YR7/4～5YR5/1	にぶい黄橙色～灰色～オリーブ黒	10YR6/4～10Y4/1～10Y3/1	
10－15	SD－001	5	弥生土器	壺	破片	――	――			——	羽状縄文、棒状浮文、押文圧	ヘラナデ（ヨコ）	○		△	黒色粒	にぶい黄橙色～橙色	10YR7/2～7.5YR7/6	橙色	2.5YR7/8	赤彩
10－16	SD－001	5	弥生土器	壺	破片	――	――			——	羽状縄文	ミガキ	○	◎	◎		明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい橙色～橙色	7.5YR7/4～7.5YR7/6	赤彩
10－17	SD－001	5	弥生土器	鉢	破片	――	――			——	網目状撚糸文	ミガキ	○			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR7/2	赤彩
10－18	SD－001	5	弥生土器	壺	破片	――	――			——	網目状撚糸文		○		◎	ウンモ	にぶい黄橙色（黒褐色）	10YR6/4（10YR3/2）	にぶい黄橙色～黄灰色	10YR7/4～2.5Y5/1	内面摩滅　赤彩（赤褐色）
10－19	SD－005	1	弥生土器	壺	破片	――	――			——	羽状縄文山形文	——	○	△		ウンモ	浅黄橙色～にぶい黄褐色	10YR8/3～10YR5/4	浅黄色	2.5Y7/3	赤彩（赤褐色）、内面摩滅
10－20	SD－005	1	弥生土器	鉢	破片	――	――			——	羽状縄文	ヘラナデ（ヨコ）	○		△	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色～橙色	10YR7/4～7.5YR7／6	
10－21	SD－005	1	弥生土器	甕	破片	――	――			——	ヘラナデ、口縁部押圧文	刷毛（ヨコ）	○		○		灰白色	5Y7/1	灰黄色～にぶい黄橙色	2.5Y7/2～10YR6/3	
10－22	SD－003	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	網目状撚糸文	ヘラナデ（ヨコ）	○	△	○		橙色	2.5YR6/6	橙色	5YR6/6	赤彩（にぶい赤褐色）
10－23	SX－001	2	土製品	土錘	全体の90%	――	――		（4.0）	——			○						明黄褐色	10YR7/6	最大幅（2.0×1.9）

表5　萱野遺跡（2）土器観察表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値（cm）（ ）は推定値、［ ］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
14－001	SI－001	1、3	弥生土器	壺	口縁部の25%	（16.0）	——			［2.1］	ナデ	ナデ	◎	◎		ウンモ	橙色～にぶい黄橙色	5YR6/6～10YR7/3	橙色	7.5YR7/6	折返口縁縄文、押捺、4ヶ所棒状浮文
14－002	SI－001	4	弥生土器	壺	底部の95%	——	8.4			［2.0］	ナデ	ナデ	◎	◎		ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	5YR6/6	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
14－003	SI－001	4	弥生土器	壺	底部の25%	―	(4.6)			[3.5]	ヘラナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR6/6	
14－004	SI－001	1	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			[4.1]	―	―	△				橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
14－005	SI－001	4	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.5]	―	―	◎		◎		にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	
14－006	SI－001	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[2.9]	―	―	◎		◎		橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/4～4/1	
14－001	SI－007	1、16	弥生土器	甕	全体の60％口縁部の20%	(24.6)	6.8			29.3	ナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	赤色～にぶい橙色	10R5/6～7.5YR6/4	橙色～灰黄褐色	5YR6/6～10YR6/2	輪積痕、内外面摩滅
15－001	SI－023	26	弥生土器	甕	口縁部の20%胴部の40%	(22.2)	―			[23.1]	ナデ（ヨコ）、羽状縄文	ナデ（ヨコ）	◎			白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
15－002	SI－023	20	弥生土器	甕	底部の20%	―	(14.3)			[4.6]	縄文、木葉痕	ヘラナデ	△	△			にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
15－003	SI－023	31	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	赤彩
15－004	SI－023	27	弥生土器	甕	口縁部の25%底部の90%	(30.9)	8.5			40.1	ヘラナデ	ヘラナデ	△			ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/4～4/1	
15－005	SI－023	3、7	弥生土器	小型鉢	口縁部の25%	(11.0)	―			[4.2]	ミガキ（ヨコ）、S字状結節文	ミガキ	△			ウンモ	褐色～黒褐色	7.5YR4/3～3/1	褐色～黒褐色	7.5YR4/3～3/1	赤彩
15－006	SI－023	12	弥生土器	壺	頸部の50%	―	―			[7.1]	S字状結節文	―	△			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩、内外面摩滅
15－007	SI－023	11	弥生土器	台付甕	脚台部の30%	―	(8.1)			[4.4]	ヘラケズリ(タテ)	ヘラナデ（タテ）	◎				橙色	5YR6/8	橙色	7.5YR6/6	
15－008	SI－023	14	弥生土器	壺	底部の25%	―	(5.6)			[1.7]	ヘラケズリ（タテ）、木葉痕	ヘラナデ	△				褐灰色	7.5YR4/1	橙色	7.5YR7/6	
15－009	SI－023	14	弥生土器	壺	底部の100%	―	5.6			[4.8]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅
15－010	SI－023	13	弥生土器	壺	底部の20%	―	(6.2)			[3.1]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ　石英	褐灰色	7.5YR5/1	橙色	7.5YR7/6	内外面摩滅
15－011	SI－023	3	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
15－012	SI－023	3	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
15－013	SI－023	12	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	にぶい黄橙色～にぶい橙色	10YR7/3～7.5YR6/4	赤彩
15－014	SI－023	4	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
15－015	SI－023	12	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ黄色粒	褐灰色	10YR5/1	橙色	7.5YR6/6	赤彩
15－016	SI－023	12	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	赤彩
15－017	SI－023	28	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ黄色粒	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/3～4/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
15－018	SI－023	9	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄褐色	10YR5/3	
15－019	SI－023	22?	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色～黒色	7.5YR6/4～2/1	黒褐色	7.5YR3/1	
15－020	SI－023	29	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR7/4	褐灰色	7.5YR4/1	
15－021	SI－023	12	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ黄色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	
16－001	SI－031	12	弥生土器	小型壺	胴部100%底部100%	―	5.4			[14.1]	ミガキ（タテ）	ナデ					浅黄色	2.5Y7/3	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR6/4～2.5YR4/3	赤彩
16－002	SI－031	16	弥生土器	甑	底部の25%	―	(5.8)			[3.2]	ヘラケズリ（タテ）、ナデ	ナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ黒色粒白色粒	黒色	5YR3/1	にぶい橙色	5YR6/3	底面穿孔
16－003	SI－031	11	弥生土器	甕	全体の95%	20.7	―			―	ヘラナデ(ナナメ)	ミガキ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～5/1	にぶい褐色～黒色	7.5YR6/3～2/1	外面に縄文の痕跡
16－004	SI－031	13、14	弥生土器	壺	底部の100%	―	(7.2)			[5.9]	ミガキ（タテ）木葉痕	ヘラナデ	◎			白色粒（～1㎜）	褐灰色	7.5YR4/1	褐灰色	7.5YR5/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
16－005	SI－031	7	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	灰褐色	7.5YR6/2	内面赤彩
16－006	SI－031	17	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい橙色	5YR7/4	外面赤彩
16－007	SI－031	17	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎				にぶい橙色	7.5YR7/4	灰黄褐色	10YR6/2	外面赤彩
16－008	SI－031	17	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	
16－009	SI－031	16	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	外面赤彩
17－001	SI－003	№なし	その他	手づくね	全体の50%	―	(2.6)			[2.2]	―	―	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
17－002	SI－003	6、52、81、153	弥生土器	壺	口縁部の40%	(26.2)	―			[3.4]	ナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	明赤褐色	5YR5/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
17－003	SI－003	1、219、228、240、241、243、248、249	弥生土器	壺	口縁部の25%	(22.8)	―			[9.7]	ナデ、縄文	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ	赤褐色	2.5YR4/8	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩
17－004	SI－003	17	弥生土器	壺	口縁部の25%	(12.8)	―			[8.1]	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩、内外面摩滅
17－005	SI－003	14	弥生土器	壺	口縁部の40%	(18.9)	―			[6.8]	羽状縄文	ヘラナデ(ヨコ)、ミガキ	◎			ウンモ	にぶい褐色～にぶい赤褐色	7.5YR6/3～5YR4/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	赤彩
17－006	SI－003	1、11、12、100、251	弥生土器	壺	全体の20%	―	―			4.7	ミガキ、胴部下半ミガキ、羽状縄文	ヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい灰褐色	7.5YR4/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	頸部外面赤彩
17－007	SI－003	151	弥生土器	壺	胴部の30%	―	―			[9.7]	ミガキ（ヨコ）、ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	浅黄橙色	10YR8/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩（内面は不明）
17－008	SI－003	1	弥生土器	台付甕	脚台部の10%	(11.8)	―			[3.5]	ナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
17－009	SI－003	39	弥生土器	甕	底部の50%	―	(4.6)			[3.8]	ハケ（タテ）	ヘラナデ	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR7/4	灰黄褐色	10YR6/2	
17－010	SI－003	157	弥生土器	壺	底部の50%	―	(6.4)			[3.5]	底部下端ヘラナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4 10R4/6	赤彩
17－011	SI－003	1	弥生土器	甕	底部の 50%	―	(7.2)			[3.0]	ナデ	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	10YR7/4	橙色	7.5YR7/6	内外面摩滅
17－012	SI－003	18	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	―	7.2			[4.9]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（タテ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
17－013	SI－003	233	弥生土器	台付甕	脚台部の40%	―	(8.0)			[4.2]	ヘラナデ	ナデ	◎		◎	ウンモ	橙色	5YR7/8	にぶい橙色	7.5YR7/4	
17－014	SI－003	235、250	弥生土器	台付甕	脚台部の70%	―	(8.2)			[5.9]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ(タテ)、ケズリ	△			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄橙色	10YR6/3	
17－015	SI－003	114	弥生土器	甕	底部の100%	―	5.4			[3.0]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	褐灰色	7.5YR5/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	
18－016	SI－003	34	弥生土器	鉢	破片	―	―			[7.7]	ミガキ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩（5YR4/6）
18－017	SI－003	136	弥生土器	壺	破片	―	―			―	羽状縄文	ミガキ	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	橙色	7.5YR7/6	赤彩
18－018	SI－003	63、77	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.2]	S字状結節文、羽状縄文	ナデ	◎			ウンモ	橙色	5YR6/8	橙色	7.5YR6/8	赤彩
18－019	SI－003	1、64	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	赤褐色	2.5YR4/6	浅黄橙色	10YR8/4	赤彩
18－020	SI－003	54	弥生土器	壺	破片	―	―			[2.7]	ナデ	ヘラナデ	◎		◎	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	内外面赤彩
18－021	SI－003	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[2.0]	縄文	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤褐色	5YR4/6	赤彩
18－022	SI－003	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色～灰黄褐色	7.5YR6/6～10YR5/2	浅黄色～灰黄褐色	10YR8/3～10YR5/2	赤彩
18－023	SI－003	69	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.4]	ナデ	ヘラナデ	△			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/8	赤彩
18－024	SI－003	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	5YR7/8	橙色	5YR7/8	赤彩
18－025	SI－003	108	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	灰白色	2.5Y8/2	浅黄橙色	10YR8/4	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
18－026	SI－003	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
18－027	SI－003	1、250	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	にぶい橙色	10YR7/4	
18－001	SI－004	7	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
18－002	SI－004	1、9	弥生土器	鉢	口縁部の25%	(16.6)	―			[6.7]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR4/2	にぶい黄橙色	10YR6/3	内外面摩滅、内外面赤彩
18－003	SI－004	19	弥生土器	台付甕	全体の50% 胴部の50% 脚台部の100%	(23.8)	10.0			30.0	ミガキ（タテ）、口縁部近くナデ（ヨコ）	ナデ	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色～黒褐色	7.5YR6/4～3/1	
18－004	SI－004	10	弥生土器	壺	底部の90%	―	(5.4)			[3.1]	ミガキ	ナデ	◎	◎		ウンモ 白色粒	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい赤褐色～灰黄褐色	2.5YR5/3～10YR5/2	赤彩、内外面摩滅
18－005	SI－004	21	弥生土器	壺	底部の100%	―	5.8			[2.1]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ　石英	褐灰色～明赤褐色	5YR4/1～2.5YR5/6	橙色	7.5YR6/6	赤彩
19－001	SI－018	1	弥生土器	甕	胴部の5%	―	―		(28.4)	[10.6]	ハケ、ナデ	ナデ	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	5YR6/6	
19－002	SI－018	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	ハケ	ナデ	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
19－003	SI－018	6	弥生土器	壺	底部の25%	―	(8.1)			[3.6]	ナデ	ヘラナデ（ヨコ）	◎		◎	石英	明赤褐色	2.5YR5/6	明赤褐色～にぶい赤褐色	2.5YR5/6～5/3	
20－001	SI－019	12	その他	台付甕ミニチュア	脚台部の100%	―	5.4			[3.7]	ヘラケズリ　ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	
20－002	SI－019	18	その他	壺ミニチュア	全体の95% 口縁部の90% 底部の90%	6.0	3.6			2.0	ヘラケズリ(タテ)	ヘラナデ(ヨコ)、手持ちナデ	◎	◎		ウンモ 白色粒	にぶい褐色	7.5YR6/3	灰褐色	7.5YR6/2	
20－005	SI－019	56、90、91	弥生土器	壺	全体の30%	―	―			[23.5]	ミガキ	ナデ	◎				にぶい橙色	7.5YR6/4	明赤褐色～にぶい橙色	2.5YR5/6～7.5YR6/4	赤彩、内外面摩滅
21－006	SI－019	90、91	弥生土器	壺	胴部下半部 底部100%	―	8.4			[8.8]	ミガキ（ヨコ）	ヘラナデ	◎	◎		ウンモ	にぶい橙色	5YR7/4	にぶい橙色	5YR7/3	外面赤彩
21－007	SI－019	15	弥生土器	壺	底部の60%	―	(10.0)			[4.1]	ミガキ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎				にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	
21－008	SI－019	51	弥生土器	甕	底部の90%	―	(6.6)			[3.1]	―	ナデ	◎			ウンモ　石英	灰黄褐色	10YR6/2	褐灰色	10YR5/1	内外面摩滅
21－009	SI－019	6	弥生土器	壺	底部の25%	―	(10.0)			[2.1]	ナデ	ナデ	◎				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
21－010	SI－019	16	弥生土器	壺	底部の100%	―	(6.1)			[3.0]	ナデ	ナデ	◎	◎		ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR5/2	
21－011	SI－019	4、54、95、44、46	弥生土器	台付甕	全体の90%	(24.4)	8.9			31.4	ハケ（ヨコ）、台部ナデ（タテ）	ヘラナデ	◎			ウンモ　1～2㎜大の小石	橙色	5YR6/6	橙色（部分的に黒色）	5YR6/6	
21－012	SI－019	1、89	弥生土器	台付甕	口縁部の50% 胴部の10%	(17.6)	―			[12.1]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎				にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	輪積痕
21－013	SI－019	1	弥生土器	壺	底部の20%	―	(7.8)			[3.5]	ナデ	ヘラナデ、底部ミガキ	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄橙色	10YR6/3	
21－014	SI－019	41	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	―	8.7			[5.3]	ナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
21－015	SI－019	4	弥生土器	台付甕	脚台部の40%	―	(8.3)			[3.8]	ヘラナデ	ヘラナデ（ヨコ）	◎		◎		橙色	5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	
21－016	SI－019	5	弥生土器	台付甕	脚台部の60%	―	(8.4)			[6.4]	―	―	◎	◎		ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	内外面摩滅
21－017	SI－019	59	弥生土器	台付甕	脚台部の80%	―	―			[4.9]	―	ヘラナデ	◎	◎		ウンモ 白色粒	明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい褐色	7.5YR6/3	外面摩滅
21－018	SI－019	24	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
21－019	SI－019	2、4	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色～にぶい橙色	5YR6/6～7.5YR7/4	橙色～にぶい橙色	5YR6/6～7.5YR7/4	
21－020	SI－019	26	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
21－021	SI－019	2、4	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色～灰褐色	5YR6/6～7.5YR5/2	赤彩

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
21－022	SI－019	4	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
21－023	SI－019	31	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ 白色粒	橙色	7.5YR7/6	にぶい橙色	7.5YR7/4	
21－024	SI－019	7	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
21－025	SI－019	45	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色、褐灰色	7.5YR6/4、4/3	赤彩
21－026	SI－019	25	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい橙色	2.5YR6/4	
21－027	SI－019	73	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ 黄色粒	にぶい赤褐色	2.5YR4/3	にぶい赤褐色	5YR5/4	赤彩
21－028	SI－019	2、4	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色～灰黄褐色	7.5YR6/4～10YR4/2	にぶい橙色～灰黄褐色	7.5YR6/4～10YR6/2	
21－029	SI－019	81	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
21－030	SI－019	31	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				にぶい黄橙色	10YR7/3	橙色	7.5YR7/6	
21－031	SI－019	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			黄色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR5/2	
21－032	SI－019	81	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
21－033	SI－019	81	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎				にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/2	
21－034	SI－019	3	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/3	灰黄褐色	10YR5/2	
22－001	SI－024	1、7	弥生土器	台付甕	口縁部の100% 胴部の95%	22.5	―			[22.9]	胴部ヘラナデ（ヨコ）、輪積痕	ナデ	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面摩滅
22－002	SI－024	1、4、5	弥生土器	甕	胴部の50%	―	―			[7.7]	ミガキ（タテ）、輪積痕	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ 石英	橙色	5YR6/6	橙色～褐灰色	5YR6/6～10YR6/1	内外面摩滅
22－003	SI－024	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	褐灰色	10YR5/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
22－004	SI－024	4	弥生土器	台付甕	胴部の40%	(14.5)	―			[15.7]	ナデ 輪積痕	ナデ	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	にぶい赤褐色（部分的に褐灰色）	2.5YR5/4 (10YR4/1)	内外面摩滅
22－005	SI－024	2	その他	手づくね	底部の100%	―	3.0			[1.9]	ナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ 石英	灰褐色	7.5YR4/2	灰黄褐色	10YR5/2	
22－006	SI－024	7	弥生土器	台付甕	脚台部の25%	―	(8.3)			[6.2]	ヘラナデ	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
22－007	SI－024	6	弥生土器	鉢	底部の50%	―	(6.4)			[6.1]	ナデ	ミガキ	◎			ウンモ 石英	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
22－008	SI－024	1	弥生土器	甕	底部の15%	―	(8.6)			[2.3]	ヘラナデ（タテ）	―	◎			ウンモ	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅
22－009	SI－024	1	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	明褐灰色	7.5YR7/2	赤彩
22－010	SI－024	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
22－011	SI－024	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ 石英	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	赤彩
22－012	SI－024	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎		◎	黒色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
22－013	SI－024	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
22－014	SI－024	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR6/3	
23－001	SI－025	7	弥生土器	壺	底部の100%	―	6.3			[3.1]	ヘラナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/3	橙色～にぶい黄橙色	5YR6/6～10YR7/3	内外面摩滅
23－002	SI－025	1	弥生土器	壺	底部の60%	―	(6.0)			[2.6]	―	―	◎			ウンモ	灰白色	10YR8/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	内外面摩滅
23－003	SI－025	1	弥生土器	台付甕	脚台部の80%	―	(7.3)			[5.0]	ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
23－004	SI－025	21	弥生土器	台付甕	脚接合部の100%	——	——			[4.0]	ナデ	ナデ	◎	◎		ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅
23－005	SI－025	1	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	△				灰褐色	5YR4/2	灰褐色	5YR4/2	
23－006	SI－025	2	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ 黒色粒	橙色	7.5YR7/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	
23－007	SI－025	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△				橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
23－008	SI－025	2	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	灰黄褐色	10YR5/2	
23－009	SI－025	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	灰黄褐色	10YR6/2	
23－010	SI－025	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
23－011	SI－025	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	△			石英	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
23－001	SI－034	2	弥生土器	壺	頸部の40%	——	——			[7.9]	ミガキ（タテ）	ミガキ	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい橙色～にぶい赤褐色	7.5YR6/4～2.5YR4/3	赤彩 内面摩滅
24－001	SI －030A	4	弥生土器	甕	底部の20%	——	(7.2)			[2.0]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	黄灰色	2.5Y5/1	黒褐色	10YR3/1	
24－002	SI －030A	3	弥生土器	高坏	胴部の10%	——	(9.0)			[3.5]	ミガキ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	外面赤彩
24－003	SI －030A	19	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	ミガキ、縄文	——	○				浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色	10YR8/4	内面剥離
25－001	SI－042	1、6、7	弥生土器	鉢	全体の25%	(21.8)	(6.0)			9.8	ミガキ（ヨコ）、羽状縄文	ミガキ	◎	◎		ウンモ 長石	橙色	5YR6/6	明黄褐色～赤褐色	10YR6/6～5YR4/6	赤彩
25－002	SI－042	15	弥生土器	鉢	口縁部の20%	(18.6)	——			[3.9]	ナデ、羽状縄文	ナデ	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	赤彩
25－003	SI－042	1、24、25	弥生土器	甕	口縁部の35%	(22.2)	——			[8.1]	ナデ（ヨコ）、輪積痕	ヘラナデ（ヨコ）					にぶい黄橙色～黒褐色	10YR6/4～3/1	にぶい黄橙色	10YR6/3	
25－004	SI－042	9	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	——	8.6			[6.7]	ナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ	褐灰色、にぶい橙色	7.5YR5/1 7.5YR7/3	橙色	2.5YR6/6	
25－005	SI－042	1	弥生土器	甕	底部の20%	——	(6.7)			[2.9]	ナデ（ヨコ）	ナデ	△			ウンモ	黄灰色	2.5Y6/1	灰黄色	2.5Y6/2	
25－006	SI－042	1	弥生土器	壺	底部の70%	——	(10.0)			[2.3]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	
25－007	SI－042	1	弥生土器	壺	底部の20%	——	(9.3)			[2.1]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
25－008	SI－042	8	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	赤彩
25－009	SI－042	34	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色、にぶい赤褐色	7.5YR6/6 2.5YR4/4	赤彩
25－010	SI－042	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
25－011	SI－042	12	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	灰黄褐色	10YR6/2	赤彩
25－012	SI－042	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——					黄灰色	2.5Y5/1	にぶい黄橙色	10YR6/3	
25－013	SI－042	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
25－014	SI－042	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△				にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
25－015	SI－042	23	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	△				橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
26－001	SI－043	3	弥生土器	台付甕	脚接合部の100%	——	——			[4.1]	ナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ	灰黄色	2.5Y6/2	黒褐色	2.5Y3/1	
26－002	SI－043	1	弥生土器	甕	底部の25%	——	(6.3)			[2.5]	ヘラナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR6/2	
26－003	SI－043	1	弥生土器	壺	底部の20%	——	(7.0)			[2.4]	ハケ（タテ）	——	△				灰色	5Y6/1	灰黄色	2.5Y6/2	内面摩滅

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
26－004	SI－043	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
26－005	SI－043	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	明赤褐色	2.5YR5/6	橙色	7.5YR6/6	赤彩
26－006	SI－043	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩
26－007	SI－043	1	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ 黄色粒	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
26－008	SI－043	1	弥生土器	甕	破片	――	――			――	――	――	◎	◎		ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	褐灰色	7.5YR4/1	
26－001	SI－047	2、55	弥生土器	台付甕	口縁部の90% 胴部100%	17.1	――			[13.4]	台部ミガキ（タテ）、胴部ヘラナデ（ヨコ）	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～5/1	
26－002	SI－047	2、39、56	弥生土器	台付甕	台部の60%	――	(7.9)			[5.7]	ナデ	ナデ	◎				橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅
26－003	SI－047	55	弥生土器	鉢	底部100%	――	5.6			[1.9]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	黄灰色、暗赤褐色が残る	2.5Y4/1 2.5YR3/6	にぶい黄橙色、暗赤褐色が残る	10YR6/3 2.5YR3/6	赤彩
26－004	SI－047	1、3、51	弥生土器	台付甕	台部の60%	――	(7.8)			[6.3]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	内外面摩滅
26－005	SI－047	1	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	◎			黄色粒	橙色～にぶい赤褐色	7.5YR6/6～5YR4/3	橙色	7.5YR6/6	赤彩
26－006	SI－047	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色～にぶい黄橙色	5YR6/6～10YR6/3	
26－007	SI－047	40、41	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ 長石	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
26－008	SI－047	48	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎		◎		にぶい赤褐色	2.5YR4/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
26－009	SI－047	7	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい黄橙色	10YR6/3	
26－010	SI－047	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎				にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR6/2	
26－011	SI－047	8	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎		◎	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
26－012	SI－047	11	弥生土器	甕	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ 黄色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
27－001	SI－044	3、26	弥生土器	鉢	口縁部の25%	(18.2)	――			[6.4]	ミガキ、縄文	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ 黒色粒	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR7/3～5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	内外面赤彩
27－002	SI－044	5、6、8	弥生土器	鉢	全体の20%	(19.4)	5.4			9.6	ミガキ（タテ）、羽状縄文	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR6/4～2.5YR4/4	外面赤彩 黒斑
27－003	SI－044	14、17	弥生土器	鉢	口縁部の30%	――	――			――	口縁部縄文、ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	△		△	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR4/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
27－004	SI－044	31	弥生土器	鉢	底部100%	(12.7)	4.2			5.3	ナデ	ナデ	◎		◎		にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色、褐灰色	7.5YR6/4 7.5YR4/1	
27－005	SI－044	1、34、35	弥生土器	壺	口縁部の30%	(24.8)	――			[7.9]	ミガキ（タテ）	ナデ、ミガキ	◎			ウンモ	明黄褐色	10YR7/6	明黄褐色	10YR7/6	内外面赤彩
27－006	SI－044	1、27	弥生土器	壺	頚部の100%	――	――			[5.2]	羽状縄文	ミガキ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR6/4～2.5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
27－007	SI－044	183、190、193、197、198、200、203	弥生土器	壺	底部の90%	――	(7.4)			[5.8]	ナデ		◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	7.5YR7/6	内外面摩滅
27－008	SI－044	24	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	――	7.6			[6.5]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
27－009	SI－044	1	弥生土器	高坏	脚接合部の50%	――	――			[4.6]	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ	◎				にぶい黄色	2.5Y6/3	にぶい黄色	2.5Y6/3	
27－010	SI－044	16	弥生土器	鉢	底部の100%	――	5.6			[4.3]	ミガキ	ナデ	◎			ウンモ 黒色粒	褐灰色	7.5YR4/1	赤色	10R4/6	赤彩
27－011	SI－044	35、SI－31－17	弥生土器	高坏	脚台部の90%	――	(13.6)			[9.0]	ナデ	ナデ	◎				赤色	10R5/6	橙色～灰褐色	7.5YR6/6～4/2	
27－012	SI－044	15	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	――	9.0			[9.0]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	橙色	5YR6/8	橙色	7.5YR6/6	
27－013	SI－044	15	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	――	8.5			[7.6]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄色	2.5Y6/2	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
27－014	SI－044	26	弥生土器	甕	胴部の一部	——	——			[14.9]	ヘラナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
27－015	SI－044	1、7、9	弥生土器	甕	底部の100%	——	9.8			[20.4]	ヘラナデ	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	褐灰色	7.5YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/3	煤付着
27－019	SI－044	216	弥生土器	壺	破片	——	——			[2.7]	羽状縄文	ミガキ	△			ウンモ	赤褐色	2.5YR4/6	にぶい黄橙色	10YR6/3	赤彩
27－020	SI－044	10	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	赤褐色、にぶい褐色	10R4/4 7.5YR7/4	赤色	10R4/6	赤彩
27－021	SI－044	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	褐灰色	7.5YR5/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	
27－022	SI－044	1	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	△				赤色	7.5R4/6	にぶい橙色、赤色	7.5YR7/4 7.5R4/6	赤彩
27－023	SI－044	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△		△		にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
27－024	SI－044	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	
28－026	SI－044	28	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
28－027	SI－044	98	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR6/2	
29－001	SI－045	53	弥生土器	壺	口縁部の25%	(15.0)	——			[4.3]	羽状縄文		◎				橙色	7.5YR6/6	橙色～褐灰色	7.5YR6/6～5/1	内面摩滅
29－002	SI－045	50、53、54、58	弥生土器	壺	胴部の80% 底部100%	——	(7.8)			[21.0]	ミガキ（タテ）	ヘラナデ	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色（部分的に黒色）	10YR6/4 10YR2/1	にぶい黄橙色（部分的に黒色）	10YR6/4	赤彩 外面摩滅
29－003	SI－045	25	弥生土器	台付甕	脚台部の60%	——	(6.6)			[3.8]	——	——	◎			黄色粒	明黄褐色	10YR7/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	内外面摩滅
29－004	SI－045	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	赤褐色	2.5YR4/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
29－005	SI－045	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	橙色～にぶい赤褐色	7.5YR6/6～2.5YR4/4	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR7/4～2.5YR4/4	赤彩
29－006	SI－045	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
29－007	SI－045	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	褐色	7.5YR4/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
29－008	SI－045	51	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	赤彩
29－009	SI－045	1	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR4/3	橙色	7.5YR6/6	赤彩
29－010	SI－045	10	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/4	褐灰色	10YR5/1	
30－001	SI－046	7	弥生土器	壺	底部の30%	——	(3.7)			[1.4]	ミガキ	ミガキ	△			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR4/3	にぶい赤褐色	2.5YR4/3	赤彩
30－002	SI－046	11	弥生土器	壺	底部の60%	——	(9.6)			[2.1]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	
30－003	SI－046	18	弥生土器	甕	底部の30%	——	(6.0)			[4.0]	ハケ（タテ）	ヘラナデ	◎			ウンモ	黄灰色	2.5Y4/1	褐灰色	10YR4/1	
30－004	SI－046	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	橙色	5YR6/6	赤彩
30－005	SI－046	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
30－006	SI－046	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	ナデ	ナデ	◎		◎		にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
30－007	SI－046	9	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ 黒色粒	橙色	7.5YR6/6	灰黄褐色	10YR5/2	
31－001	SI－049	14	弥生土器	台付甕	脚部100%	——	9.0			[6.3]	——	ナデ	◎				橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	内外面摩滅
31－002	SI－049	12	弥生土器	台付甕	脚部の30%	——	(7.8)			[5.5]	——	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	内外面摩滅
31－003	SI－049	8、16	弥生土器	甕	胴部の40%	——	——			[15.3]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄褐色	10YR4/2	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
31－004	SI－049	21	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				褐灰色	10YR5/1	灰黄色～褐色	2.5Y7/2～7.5YR4/3	赤彩
31－005	SI－049	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄色～にぶい褐色	2.5Y7/2～7.5YR5/4	赤彩
32－001	SI－050	5	弥生土器	壺	頚部の25%	―	―			[6.05]	縄文	―	◎			ウンモ 黒色粒	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい赤色	7.5R4/4	赤彩 内外面摩滅
32－002	SI－050	18	弥生土器	壺	胴部の40% 底部100%	―	7.2			[11.2]	ミガキ（ヨコ）	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい赤褐色～灰褐色	2.5YR4/4～7.5YR4/2	赤彩 外面摩滅
32－003	SI－050	11、13	弥生土器	甕	口縁部の30%	(17.8)	―			[5.2]	輪積痕	ナデ	◎		◎	黒色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄褐色～橙色	10YR5/2～5YR6/6	
32－004	SI－050	4	弥生土器	台付甕	脚接合部の100%	―	―			[5]	ナデ（タテ）	ヘラナデ	◎			ウンモ	橙色	5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	
32－005	SI－050	2、39	弥生土器	台付甕	台部の80%	―	(10.0)			[7.2]	ヘラナデ	ヘラナデ（タテ）	◎	◎		ウンモ	橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	
32－006	SI－050	10	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	△				褐灰色	7.5YR4/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
32－007	SI－050	9	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
32－008	SI－050	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			1mm大の小石	橙色	5YR6/6	橙色	2.5YR6/8	
33－001	SI－051	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ 石英	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩（10R4/6）
33－002	SI－051	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	浅黄橙色	10YR8/3	橙色	5YR6/6	
33－003	SI－051	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				赤橙色	10R6/8	にぶい黄橙色	10YR6/4	
33－004	SI－051	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―					にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
33－005	SI－051	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
33－006	SI－051	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR6/6	
33－001	SI－052	2	弥生土器	鉢	口縁部の25%	(11.4)	―			[5.4]	縄文	ナデ	◎			白色粒 石英	橙色	5YR6/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	外面赤彩
33－002	SI－052	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			黒色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
33－003	SI－052	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	赤彩
34－001	SI－053	1、15	弥生土器	壺	底部～胴部の30%	―	(7.0)			[9.4]	ミガキ、撚糸結節、縄文痕	ナデ					淡赤橙色	2.5YR7/4	橙色	2.5YR6/6	内外面赤彩
34－002	SI－053	1、18	弥生土器	壺	口縁部の25%	(20.7)	―			[2.0]		ミガキ	◎	◎		ウンモ	浅黄色～にぶい赤褐色	2.5Y7/3～2.5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩 外面摩滅
34－003	SI－053	17	弥生土器	壺	底部の100%	―	7.6			[6.55]	ミガキ ナデ	ナデ	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	にぶい黄褐色	10YR5/4	
34－004	SI－053	9	弥生土器	鉢	底部の100%	―	5.8			[3.6]	―	―	◎			ウンモ	赤褐色	5YR4/6	赤褐色	5YR4/6	赤彩 内外面摩滅
34－005	SI－053	5	弥生土器	壺	底部の90%	―	4.2			2.75	ミガキ ナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	
34－006	SI－053	20	弥生土器	壺	底部の45%	―	8.2			[1.65]	ナデ	ヘラナデ	◎				にぶい黄橙色	10YR7/4	赤褐色	2.5YR4/8	赤彩
34－007	SI－053	6	その他	台付甕ミニチュア	脚部の80%	―	6			[3.9]	ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
34－008	SI－053	8、16	土師器	甕	底部の100%	―	5.2			[2.9]	ナデ	ヘラナデ	◎			石英	にぶい黄橙色	10YR7/3	黄灰色	2.5Y6/1	混入品
34－009	SI－053	1	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	羽状縄文	―	◎			ウンモ	赤褐色	2.5YR4/6	にぶい黄橙色	10YR6/3	赤彩
34－010	SI－053	1	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	灰色	5Y6/1	明灰黄色	2.5Y5/2	
34－011	SI－053	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
34－012	SI－053	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	5YR6/6	赤彩
34－013	SI－053	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英 白色粒	褐灰色	10YR4/1	灰黄褐色	10YR5/2	
34－014	SI－053	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	浅黄橙色	10YR8/4	赤彩
34－015	SI－053	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	浅黄橙色	10YR8/3	赤彩
34－016	SI－053	18	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			石英	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩（10R4/8）
34－017	SI－053	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			黒色粒	橙色	2.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	
34－018	SI－053	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			黒色粒	橙色	5YR7/6	橙色	2.5YR7/8	
34－001	SI－056	3	弥生土器	壺	口縁部の90%	12.8	―			[8.4]	羽状縄文	ミガキ（ヨコ）	△		△		赤褐色、褐灰色	2.5YR4/6 7.5YR4/1	灰黄色～浅黄色	2.5Y6/2～ 7/4	赤彩
34－002	SI－056	2	弥生土器	壺	底部の30%	―	(4.3)			[1.95]	ミガキ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	赤彩
35－001	SI－054	1	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	橙色	2.5YR6/8	橙色	5YR6/8	赤彩？
35－002	SI－054	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
35－003	SI－054	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				黒色	2.5Y2/1	明赤褐色	2.5YR5/6	
35－001	SI－057	3	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR7/6	赤彩
35－002	SI－057	1	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	暗赤褐色	2.5YR3/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩
35－003	SI－057	3	弥生土器	甕	破片	―	―			―	内外面摩滅	―	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
35－004	SI－057	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR7/6	赤彩
35－005	SI－057	3	弥生土器	壺	底部の100%	―	4.3			[1.6]	―	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面摩滅
35－006	SI－057	1	弥生土器	高坏	脚部の20%	―	―			[5.5]	ナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR6/2	
36－001	SI－058	30、37	弥生土器	鉢	口縁部の15% 底部の100%	(20.1)	5.9			8.4	ミガキ、羽状縄文	―	△			白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩 内外面摩滅
36－002	SI－058	4、27	弥生土器	鉢	底部の100%	―	6.2			[6.8]	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色、 褐灰色	10YR7/3 10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩 内外面摩滅
36－003	SI－058	3	弥生土器	高坏	坏底部の20%	―	―			[6.1]	ミガキ	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ 白色粒	黄灰色	2.5Y4/1	にぶい黄橙色 （赤彩　赤褐色）	10YR7/4 (2.5YR4/6)	赤彩 内外面摩滅
36－004	SI－058	27	弥生土器	甕	口縁部の20%	(21.6)	―			[11.7]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
36－005	SI－058	39	弥生土器	台付甕	脚台部ほぼ 100%	―	(9.0)			[6.7]	ナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	煤付着
36－006	SI－058	18	弥生土器	甕	口縁部の25%	(23.5)	―			[5.6]	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
36－007	SI－058	22	弥生土器	台付甕	底部の20%	―	(7.6)			[6.5]	―	ヘラナデ(タテ)、 ナデ	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	外面摩滅
36－008	SI－058	56	弥生土器	台付甕	全体の90%	24.6	8.7			25.1	ミガキ（タテ）	ナデ（ヨコ）、ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	黒斑？
36－009	SI－058	14	弥生土器	台付甕	脚台部の90%	―	(7.4)			[5.7]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	褐灰色	10YR5/1	にぶい黄橙色	10YR6/3	内外面摩滅
36－010	SI－058	28	弥生土器	台付甕	脚台部の90%	―	7.8			[4.4]	ヘラナデ（タテ）	ナデ	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
36－011	SI－058	17	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	―	5.3			[3.4]	ナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄褐色	10YR6/2	
36－012	SI－058	7	弥生土器	台付甕	脚台部100%	―	5.6			[3.6]	内外面摩滅	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい橙色	5YR6/3	にぶい橙色	5YR6/3	内外面摩滅

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
36－013	SI－058	26	弥生土器	壺	底部の20%	――	――			［8.1］	ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	外面摩滅
36－014	SI－058	25	弥生土器	甕	底部の100%	――	5.2			［7.0］	ミガキ	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ　石英	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	赤彩
36－015	SI－058	46	弥生土器	甕	底部100%	――	9.9			［3.5］	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	2.5YR6/8	
36－016	SI－058	27	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	5YR6/6	赤彩
36－017	SI－058	36	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい橙色～にぶい赤褐色	5YR6/4～2.5YR4/4	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR7/4～2.5YR4/4	赤彩
36－018	SI－058	57	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	橙色	2.5YR6/6	赤彩
37－001	SI－071	15	弥生土器	壺	頸部の40%	――	――			――	ミガキ（タテ）	――	◎			ウンモ	橙色	5YR7/8	橙色	7.5YR7/6	赤彩 内面摩滅
37－002	SI－071	3、4、7、16、17	弥生土器	壺	頸～肩部の40%	――	――			［14.4］	S字状結節文、縄文	――	◎			ウンモ	橙色	2.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	内面摩滅 外面摩滅、赤彩不明
37－003	SI－071	15	弥生土器	壺	肩部の20%	――	――			［9.6］	波状文	ヘラナデ	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	明黄褐色	10YR7/6	赤彩
37－004	SI－071	8	弥生土器	壺	底部の40%	――	(6)			［6.2］	ミガキ（タテ）	ミガキ					明赤褐色	2.5YR5/6	橙色	7.5YR6/6	内外面赤彩
37－005	SI－060	1	弥生土器	甕	底部の40%	――	(9.6)			［3.1］	ヘラナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	7.5YR7/6	内外面摩滅
37－006	SI－071	5、16	弥生土器	壺	胴部の25%	――	(7.8)			［32.6］	――	――	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	明黄褐色	10YR6/6	赤彩　煤付着 内外面摩滅
37－007	SI－071	6、16	弥生土器	壺	胴部の25% 底部の40%	――	(6.4)			［17.7］	縄文	――	◎			ウンモ	黄灰色	2.5Y5/1	橙色	7.5YR6/6	赤彩 内外面摩滅
37－008	SI－071	9	弥生土器	壺	底部の20%	――	(6.8)			［2.6］	――	――	△			ウンモ	橙色	5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅、外面赤彩
37－009	SI－071	8	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	にぶい黄色	2.5Y6/3	
37－010	SI－071	3	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎	◎		ウンモ	にぶい橙色	2.5YR6/3	にぶい橙色	2.5YR6/3	
37－011	SI－071	9	弥生土器	甕	破片	――	――			――	――	――	△			ウンモ	にぶい橙色	2.5YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	黒斑？
37－001	SI－110	1	弥生土器	甕	底部の20%	――	(6.5)			［3.8］	ハケ（タテ）	ヘラナデ	△			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	黒斑
37－002	SI－110	1	弥生土器	甕	破片	――	――			――	――	――	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	
38－001	SI－066	2	弥生土器	鉢	全体の50%	(17.8)	6.4			10.6	ミガキ（胴中央ヨコ、下部タテ）、羽状縄文	ナデ	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	外面摩滅
38－001	SI－067	1	弥生土器	壺	底部の10%	――	(11.4)			［2.4］	――	――	◎			ウンモ　石英 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	内外面摩滅
38－002	SI－067	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	明黄褐色	10YR6/6	
38－003	SI－067	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎	◎		ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/4	明黄褐色	10YR7/6	
38－001	SI－073	74	弥生土器	台付甕	全体の90%	15.5	6.6			17.6	ナデ（タテ）、輪積装飾	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	灰黄褐色～褐灰色	10YR5/2 4/1	灰黄褐色～褐灰色	10YR5/2～ 4/1	
38－002	SI－073	14（SI－014－74）	弥生土器	甕	底部の90%	――	(12.0)			［3.9］	ナデ（タテ）、底部ヘラ切り、ヘラ切り	ヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	
38－003	SI－073	2	弥生土器	甕	底部の40%	――	(5.6)			［2.5］	ヘラナデ	ナデ	◎			ウンモ　石英 長石	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～ 10YR5/1	
38－004	SI－073	2	弥生土器	壺	底部の30%	――	(5.5)			［2.8］	――	――	◎			ウンモ　石英 黒色粒	明黄褐色	10YR7/6	橙色	5YR6/6	内外面摩滅
38－005	SI－073	2	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	◎			石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	褐色	10YR4/4	赤彩
38－006	SI－073	2	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
38－007	SI－073	2	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―	△				明赤褐色	5YR5/6	明黄褐色～灰黄褐色	10YR7/6～10YR5/2	赤彩
38－008	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
38－009	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英黒色粒	にぶい黄褐色	10YR5/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
38－010	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			黄色粒	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
38－011	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	明黄褐色	10YR7/6	赤彩
38－012	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			石英	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	
38－013	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			石英黒色粒	明黄褐色	10YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
38－014	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ黒色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
38－015	SI－073	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英黒色粒	明黄褐色	10YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	
38－016	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ黒色粒	明黄褐色～灰黄褐色	10YR6/6～10YR5/2	明黄褐色～橙色	10YR6/6～2.5YR6/6	赤彩
38－017	SI－073	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
38－018	SI－073	2	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/4～10YR5/1	にぶい黄橙色～灰黄褐色	10YR6/4～10YR6/2	
38－019	SI－073	2	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	褐灰色	7.5YR5/1	橙色	7.5YR7/6	
38－001	SI－074	7	弥生土器	壺	胴部の15%	―	―			[9.3]	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	内外面摩滅
38－002	SI－074	6	弥生土器	壺	底部の40%	―	(6.6)			[3.4]	ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	2.5YR6/3	黄褐色～黄灰色	2.5YR5/3～2.5YR4/1	
38－003	SI－074	4	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.5]	―	―	◎			ウンモ	褐色	7.5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
39－001	SI－076	3	弥生土器	台付甕	全体の60%	(27)	―			[17.1]	―	ヘラナデ（ヨコ）	◎			石英	明黄褐色	10YR7/6	明黄褐色	10YR7/6	外面摩滅
42－001	SD－016	3	弥生土器	高坏	全体の60%	25	6.8			18	ヘラナデ、羽状縄文	ヘラナデ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	橙色	5YR7/8	橙色	5YR7/8	赤彩
42－002	SD－016	6、8	弥生土器	壺	口縁部の50%	(10.2)	―			[12.2]	―	―	◎			ウンモ　長石白色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	5YR6/8	赤彩 内外面摩滅
42－003	SD－016	8	弥生土器	壺	底部の100%	―	8.2			[5.6]	―	ナデ	◎			ウンモ　石英	橙色	2.5YR6/8	にぶい黄橙色	10YR6/3	外面摩滅
42－004	SD－016	1、2	弥生土器	甑	全体の80%	26.1	7			30	―	ヘラナデ	◎			ウンモ　1㎜大の小石	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	外面摩滅
42－005	SD－016	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	黄灰色	2.5Y5/1	
42－006	SD－016	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	橙色	7.5YR6/6	橙色	5YR6/6	
42－007	SD－016	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR6/6	
42－008	SD－016	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―					灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR5/2	
42－009	SD－016	8	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	灰色	5Y5/1	
42－010	SD－016	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	橙色	7.5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	
46－001	SD－018	1、10、113、119、181	弥生土器	壺	全体の30%	―	―			[15.1]	羽状縄文	ヘラケズリ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩
46－002	SD－018	184、187	弥生土器	壺	口縁部100% 胴部の50%	―	―			[18.3]	羽状縄文	ケズリ（タテ）	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	5YR6/4	赤彩
46－003	SD－018	3、4、6	弥生土器	壺	胴部の25%	―	―			[7.8]	羽状縄文	ヘラケズリ（ヨコ）	△	△	△	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR6/2	赤彩（10R4/4）

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
46－004	SD－018	51	弥生土器	壺	肩部の50%	——	——			[6.4]	ミガキ（ヨコ）、羽状縄文 斜縄文	ヘラナデ（ヨコ）	△		△	ウンモ 黒色粒	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR6/6	赤彩（10R4/4）
46－005	SD－018	1、119	弥生土器	壺	胴部の30%	——	——			[18.3]	羽状縄文	——				ウンモ	黄橙色	7.5YR7/8	黄橙色	7.5YR7/8	赤彩 内面摩滅
46－006	SD－018	40	弥生土器	壺	口縁部の20%	(18.8)	——			[6.5]	ミガキ（タテ）	ミガキ（ヨコ）	△		△	ウンモ	赤褐色～暗褐色	2.5YR4/6～2.5Y3/1	赤褐色～にぶい黄色	2.5YR4/6～2.5Y6/3	内外面赤彩
46－007	SD－018	1、78	弥生土器	壺	肩部の70%	——	——			[5.0]	羽状縄文、ひし形文様	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩（5YR4/4）
46－008	SD－018	7、58	弥生土器	壺	肩部の40%	——	——			[9.3]	ミガキ	——	◎	◎	◎	ウンモ	橙色	7.5YR7/6	明赤褐色	2.5YR5/6	赤彩 内外面摩滅
46－009	SD－018	88、237、246	弥生土器	壺	全体の70%	(15.8)	6.6			28.8	ミガキ（胴下部ヨコ、頸部タテ）、羽状縄文	——	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR6/2	赤彩（7.5YR5/2） 内面摩滅
46－010	SD－018	193、204、221	弥生土器	壺	全体の90%	19.3	6.0			31.8	羽状縄文	ナデ	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色～にぶい黄橙色	5YR6/6～10YR7/2	赤彩 黒斑 内外面摩滅
46－011	SD－018	239	弥生土器	壺	全体の25% 胴部の25%	——	——			[16.8]	ミガキ 山形文	ヘラナデ(ヨコ)、輪積痕	◎	◎		ウンモ 白色粒 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色～橙色	7.5YR7/4～5YR6/8	外面赤彩（2.5YR4/4） 内外面摩滅
46－012	SD－018	112、238	弥生土器	壺	全体の60%	19.0	9.0			38.0	ミガキ（頸部下タテ、胴部中央下ヨコ）、羽状縄文	ナデ、ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい赤褐色～にぶい黄橙色	2.5YR4/4～10YR7/3	にぶい赤褐色～にぶい黄橙色	2.5YR4/4～10YR7/3	赤彩 外面摩滅
47－013	SD－018	1、5、9、74、139	弥生土器	壺	全体の40%	(11.2)	——			[21.5]	ミガキ（頸部タテ）、羽状縄文、口縁部縄文	——	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR4/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	赤彩 内面摩滅
47－014	SD－018	1	弥生土器	壺	口縁部の80%	——	——			[5.5]	ミガキ（タテ）	ナデ	△		△	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩（2.5YR4/4）
47－015	SD－018	31	弥生土器	壺	口縁部の50%	(10.4)	——			[6.8]	羽状縄文	ミガキ（ヨコ～タテ）	△			ウンモ	明黄褐色～にぶい黄橙色	10YR7/6～10YR6/3	明黄褐色～にぶい黄橙色	10YR7/6～10YR7/3	内外面赤彩
47－016	SD－018	279	弥生土器	壺	頸部の100% 肩部の50%	——	——			[8.7]	ナデ（タテ）、羽状縄文	ヘラナデ（ヨコ）		△	○	ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～10YR5/1	にぶい橙色～黄灰色	7.5YR7/4～2.5Y4/1	赤彩（2.5YR
47－017	SD－018	247	弥生土器	壺	全体の80% 胴部100% 底部100%	——	6.5			[24.5]	ミガキ(胴部タテ、底部近くヨコ)、羽状縄文	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	赤彩 外面摩滅
47－018	SD－018	125	弥生土器	壺	口縁部100%	(14.9)	——			[15.0]	ミガキ？羽状縄文	ミガキ？ケズリ？	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	赤彩（5YR5/3）
47－019	SD－018	271	弥生土器	壺	頸部の70%	(17.0)	——			[10.9]	ヘラケズリ（ヨコ）、羽状縄文	ケズリ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色～暗赤褐色	10YR6/4～2.5YR3/6	明黄褐色	10YR7/6	内外面赤彩
47－020	SD－018	153	弥生土器	壺	胴部100%	——	4.7			[10.0]	——	——	◎		△	ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	灰褐色～にぶい赤褐色	7.5YR5/2～2.5YR5/4	赤彩、内外面摩滅
47－021	SD－018	37、270、271	弥生土器	壺	全体の50% 口縁部100% 胴部の50% 底部の80%	——	——			——	ミガキ（胴下部ヨコ、頸部タテ）、羽状縄文、S字状結節、胴部中央縄文	ケズリ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	5YR6/4	赤彩（2.5YR5/4）
47－022	SD－018	12、108、111、118、238	弥生土器	壺	全体の40% 口縁部の40%	(15.4)	——			[25.0]	ミガキ（タテ）、羽状縄文	ヘラケズリ(ヨコ)	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR5/4	赤彩（10R5/4）
47－023	SD－018	118、119、206	弥生土器	壺	全体の80%	——	7.8			[29.0]	ミガキ（胴上部タテ、胴下部ヨコ）、頸部羽状縄文	ケズリ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	赤彩
47－024	SD－018	185、186、187	弥生土器	壺	全体の70%	17.0	7.8			37.4	口唇部縄文、頸部羽状縄文	ケズリ（ヨコ）	◎	△			にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	穿孔3つ、内面口縁外面赤彩
48－025	SD－018	1、6、270、272	弥生土器	壺	全体の50%	——	7.2			[27.7]	ミガキ（ヨコ）	——	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/3	赤彩（2.5YR5/3） 内面摩滅
48－026	SD－018	4、5、6	弥生土器	小型壺	全体の40% 胴部の50% 底部の100%	——	5.2			(15.0)	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	△			白色粒	橙色	7.5YR6/6	にぶい橙色～褐灰色	7.5YR7/4～10YR5/1	赤彩（2.5YR4/4） 内外面摩滅
48－027	SD－018	265	弥生土器	甕	底部100%	——	7.4			[5.2]	ヘラナデ（タテ 底部付近ヨコ）	——	◎		△		にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	内面摩滅
48－028	SD－018	46、116	弥生土器	壺	全体の40% 胴部の50% 底部の100%	——	7.6			[15.3]	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎	◎			にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色～黄灰色	7.5YR7/4～2.5Y5/1	赤彩（2.5YR6/6） 内外面摩滅

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
48－029	SD－018	183	弥生土器	壺	全体の40% 胴部の50% 底部100%	——	6.2			[15.4]	ヘラナデ（ヨコ）	——	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩（5YR5/4） 内外面摩滅
48－030	SD－018	110	弥生土器	壺	全体の50% 胴部100% 底部100%	——	6.6			[16.4]	ミガキ（ヨコ）、 底部外面ヘラケズリ	ヘラナデ		◎	◎	ウンモ 白色粒	橙色	7.5YR6/8	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩（10R5/6）
48－031	SD－018	213、216、218、903	弥生土器	壺	胴部60% 底部100%	——	10.6			[27.3]	ミガキ、ナデ（ヨコ→タテ）	——	◎			ウンモ	にぶい黄灰色～黄灰色	10YR5/3～2.5Y5/1	橙色	5YR6/6	内面摩滅、外面赤彩
48－032	SD－018	29	弥生土器	壺	全体の20% 胴部の10% 底部100%	——	6.6			[5.8]	ミガキ（ヨコ）、 ヘラナデ（ヨコ）	——	◎	◎	◎	黒色粒	にぶい橙色	7.5YR7/4	橙色	7.5YR6/6	赤彩（2.5YR6/6） 内面摩滅
48－033	SD－018	64、67	弥生土器	壺	全体の20% 胴部の20% 底部の50%	——	6.0			[7.8]	——	——	◎	◎		ウンモ 黒色粒	橙色	5YR6/8	橙色～褐灰色	7.5YR7/6～7.5YR5/1	赤彩 内外面摩滅
48－034	SD－018	4、10、129、204、221	弥生土器	壺	全体の80%	——	7.8			[26.5]	羽状縄文	——	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	赤彩 内面摩滅
49－035	SD－018	905	弥生土器	鉢	全体の40%	(21.9)	5.4			8.5	ミガキ（タテ）、 羽状縄文	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	赤褐色～灰黄褐色	5YR4/6～10YR4/2	橙色～赤褐色	2.5YR6/6～10R4/4	内外面赤彩
49－036	SD－018	11、140、259、187、275	弥生土器	鉢	全体の70%	21.2	5.4			9.2	ヘラナデ(タテ)、 ナデ（ヨコ）	ヘラナデ(ヨコ)、 ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	黄灰色	2.5Y4/1	にぶい黄橙色	10YR7/3	内外面赤彩
49－037	SD－018	1、91、155、180	弥生土器	台付甕	全体の60%	(15.4)	7.0			22.4	ナデ	台部ヘラナデ、ナデ	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/3～5/1	内外面摩滅
49－038	SD－018	223、224、240	弥生土器	台付甕	全体の85%	20.4	9			25.2	——	ナデ	◎			ウンモ　長石	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	外面摩滅
49－039	SD－018	278	弥生土器	鉢	全体の90%	19.0	7.4			10.0	ミガキ（タテ）	——	◎	△	△	ウンモ	橙色	7.5YR7/6	にぶい橙色	5YR6/4	内外面赤彩、口唇部縄文、 内面摩滅
49－040	SD－018	4、97、224	弥生土器	鉢	全体の90%	11.0	6.0			11.3	ミガキ（タテ）、 羽状縄文	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい橙色～にぶい赤褐色	10YR7/4～2.5YR4/4	にぶい橙色～赤褐色	10YR7/4～10R4/4	内外面赤彩 内面摩滅
49－041	SD－018	275	弥生土器	台付甕	全体の90%	18.2	7.1			20.95	脚部ミガキ(タテ)、ヘラナデ	ヘラナデ（ヨコ）	△	△		ウンモ　白色粒　2～3㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色、褐灰色	7.5YR7/6 10YR5/1	
49－042	SD－018	205	弥生土器	台付甕	口縁部の95% 胴部の100%	18.1	——			[15.9]	ヘラナデ（胴部ヨコ、脚部近くタテ）	ナデ					にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/3～4/1	
49－043	SD－018	72	弥生土器	甕	口縁部の30%	(16.6)	——			[3.7]	輪積痕	ケズリ（ヨコ）				ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR4/2	
49－044	SD－018	119	弥生土器	台付甕	口縁部の50% 胴部の95%	(20.7)	——			23.7	ミガキ（ヨコ）、 輪積痕	ミガキ（ヨコ）	△		△		にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
49－045	SD－018	70、109	弥生土器	甕	全体の40%	(24.0)	——			[19.2]	輪積痕	ヘラケズリ(ヨコ)				ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい橙色、オリーブ色	7.5YR6/4 5Y5/6	
49－046	SD－018	1、121、122、123	弥生土器	台付甕	胴部の40% 脚台部の100%	——	7.1			[17.6]	ミガキ（タテ）、 ヘラナデ（ヨコ）	ナデ	◎			ウンモ 黄色粒	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/4～4/1	褐灰色、橙色	10YR4/1 5YR6/6	
49－047	SD－018	8	弥生土器	台付甕	口縁部の30%	(20.6)	——			[3.4]	輪積痕	ヘラナデ　ケズリ				ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
49－048	SD－018	68、274	弥生土器	台付甕	口縁部の25%	(20.0)	——			[4.2]	輪積痕	ケズリ（ヨコ）					にぶい褐色	7.5YR6/3	灰褐色	7.5YR5/2	
49－049	SD－018	1、246	弥生土器	台付甕	胴部の50%	(24.2)	——			[21.9]	輪積痕	——	◎				にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/4～4/1	橙色～褐灰色	5YR6/6～4/1	黒斑？ 内外面摩滅
49－050	SD－018	1、250	弥生土器	台付甕	口縁～胴部の20%	(24.0)	——			[9.1]	ミガキ（タテ）、 輪積後指圧	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	灰褐色	7.5YR5/2	
49－051	SD－018	272	弥生土器	台付甕	破片	(32.0)	——			[7.0]	輪積痕	——	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	内面摩滅
50－052	SD－018	113	弥生土器	台付甕	口縁部の100% 胴部の100%	23.4	——			[21.8	ミガキ（タテ）、 輪積痕	ナデ	◎			ウンモ 黄色粒	にぶい黄褐色～黒褐色	10YR6/4～3/1	にぶい黄褐色～黒褐色	10YR6/4～3/1	
50－053	SD－018	115、117	弥生土器	台付甕	胴部の90%	23.1	——			[23.8]	ヘラナデ(ヨコ)、 輪積痕	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色～褐灰色	7.5YR7/6～4/1	漉し器として使用
50－054	SD－018	3、77、220	弥生土器	台付甕	全体の50%	(22.0)	——			[23.8]	ナデ	ヘラナデ（ヨコ） 後粗いミガキ、ナデ	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色～褐灰色	7.5YR5/4～4/1	外面摩滅
50－055	SD－018	1、4、39、117、171 V13－51－1	弥生土器	台付甕	胴部の50%	——	——			[23.1]	ミガキ（タテ）	ミガキ（ヨコ）	△	△		ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	褐灰色～灰褐色	7.5YR5/1～7.5YR6/2	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
50－056	SD－018	81	弥生土器	高坏	全体の10% 胴部の10%	——	——			［7.8］	ヘラケズリ（ヨコ）、脚部ミガキ（タテ）	——	◎			ウンモ 白色粒	褐灰色	5YR4/1	橙色～にぶい赤褐色	5YR6/8～5YR5/4	赤彩 内面摩滅
50－057	SD－018	158	弥生土器	高坏	脚接合部の100%	——	——			［3.8］	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄橙色	10YR7/4	
50－058	SD－018	4	弥生土器	高坏	脚台部100%	——	9.0			［9.4］	ナデ（タテ）	ヘラナデ(ヨコ)、ケズリ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄色～明黄褐色	2.5Y6/3～10YR6/6	
50－059	SD－018	66	弥生土器	高坏	脚台部100%	——	7.2			［7.7］	ミガキ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△		△	ウンモ	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR6/3～2.5YR4/4	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR6/3～2.5YR4/4	内外面赤彩
50－060	SD－018	208	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚台部100%	——	8.8			［6.4］	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎	◎	◎	ウンモ	橙色	7.5YR6/6	明黄褐色	10YR6/6	外面摩滅
50－061	SD－018	49	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚台部の90%	——	6.8			［5.9］	ミガキ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ 白色粒	橙色	5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	
50－062	SD－018	71	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚台部100%	——	6.4			［5.9］	ミガキ（タテ）	ナデ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	浅黄色～黄灰色	2.5Y7/4～2.5Y5/1	
50－063	SD－018	26	弥生土器	器台	全体の40% 脚部の90%	——	7.6			［5.8］	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ 白色粒	にぶい橙色	5YR6/4	浅黄色	2.5Y7/4	
50－064	SD－018	175	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚台部の100%	——	8.0			［4.3］	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色～橙色	10YR7/4～5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面摩滅
50－065	SD－018	11	弥生土器	台付甕	脚台部の50%	——	(7.0)			［6.0］	ミガキ（タテ）	ケズリ（ヨコ）	△		△	ウンモ	橙色	5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/3	
50－066	SD－018	134	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	——	(6.6)			［5.7］	ミガキ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
50－067	SD－018	296	弥生土器	台付甕	脚接合部の40%	——	——			［5.0］	ナデ	ナデ	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	
50－068	SD－018	246	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚台部100%	——	5.4			［5.3］	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ 白色粒	明灰黄色	2.5Y5/2	褐灰色	7.5YR5/1	
50－069	SD－018	904	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚台部100%	——	7.6			［7.8］	——	ヘラナデ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ 白色粒 黒色粒	橙色	7.5YR6/6	明黄褐色	10YR6/6	外面摩滅
50－070	SD－018	83	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚台部100%	——	7.6			［6.2］	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	淡赤橙色	2.5YR7/4	外面摩滅
50－071	SD－018	210	弥生土器	器台	全体の50% 脚部100%	——	8.8			［7.4］	ヘラナデ(ナナメ)	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ 白色粒 黒色粒	橙色	2.5YR6/6	橙色～明褐灰色	7.5YR7/6～7.5YR7/1	外面摩滅
50－072	SD－018	1	その他	手づくね	破片	(4.2)	——			［3.0］	——	——	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	輪積痕
51－081	SD－018	1	弥生土器	壺	破片	——	——			［4.0］	——	——	△	△			橙色	5YR7/6	浅黄橙色	7.5YR8/6	
51－082	SD－018	1	弥生土器	壺	破片	——	——			［4.3］	——	——	△				褐灰色	10YR6/1	褐灰色	10YR6/1	
51－083	SD－018	1	弥生土器	壺	破片	——	——			［2.8］	——	——	◎	△	△		にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
51－084	SD－018	1	弥生土器	壺	破片	——	——			［3.6］	——	——	◎		△	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	内面赤彩（2.5YR4/4）
51－085	SD－018	10	弥生土器	甕	破片	——	——			［3.8］	——	——	△		△	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
51－086	SD－018	3、5	弥生土器	台付甕	破片	——	——			［4.4］	——	——	◎				にぶい橙色	5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
51－087	SD－018	30	弥生土器	甕	破片	——	——			［9.8］	——	——	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄褐色	10YR5/3	
51－088	SD－018	291	弥生土器	台付甕	破片	——	——			［6.8］	——	——	△			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	
51－089	SD－018	21	弥生土器	甕	破片	——	——			［11.9］	——	——	◎			ウンモ	褐灰色	10YR4/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	
51－090	SD－018	292	弥生土器	甕	破片	——	——			［14.8］	——	——	△			ウンモ	明灰黄色	2.5Y5/2	にぶい黄橙色～灰色	10YR6/3～N4/	煤付着
52－001	SK－002	1	弥生土器	壺	口縁～胴部の20%	——	——			［4.7］	縄文	ケズリ（ヨコ）	△			ウンモ　長石	橙色	5YR6/8	橙色	2.5YR6/8	
52－002	SK－002	3	弥生土器	壺	首部破片	——	——			［9.1］	ミガキ（タテ）	——	△			ウンモ	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/4～4/1	赤色	10R4/8	内外面赤彩

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
52－003	SK－002	1、2	弥生土器	壺	底部の100%	―	6.6			[10.2]	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラケズリ(タテ)	◎	△		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	明黄褐色	10YR6/6	赤彩？外面煤付着
52－001	SK－005	1、3、4	弥生土器	甕	胴部の20%	―	―			[12.5]	ハケ（ナナメ）	ヘラナデ(ヨコ)、ハケ（ヨコ）	△		△	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい黄褐色～黒褐色	10YR6/4～3/1	外面煤付着
52－002	SK－005	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	ハケ　ヘラナデ	ヘラナデ	△		△		にぶい赤褐色	5YR4/4	灰褐色	5YR4/2	赤彩
52－003	SK－005	2	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	ハケ	ヘラナデ（ヨコ）			△	ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/4	灰褐色	7.5YR4/2	内面煤付着
52－004	SK－005	1	弥生土器	甕	底部の40%	―	9.0			―	ヘラケズリ（ヨコ）、網代痕	ナデ				ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/4	にぶい黄褐色	10YR5/4	
52－001	SK－006	4、5、6、10	弥生土器	高坏	全体の50%口縁部の25%胴部の70%	(25.0)	―			[11.0]	ミガキ(胴部タテ、口縁近くヨコ)、口縁斜縄文	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）				ウンモ	黄橙色（赤彩　にぶい赤）	7.5YR8/8（7.5R4/4）	橙色（赤彩　暗赤色）	7.5YR6/6（7.5R3/6）	内外面赤彩
52－002	SK－006	なし	弥生土器	壺	底部の100%	―	8.7			[3.0]	ヘラケズリ(ヨコ)	―	◎			ウンモ　石英長石	褐灰色	7.5YR4/1	にぶい橙色～にぶい赤褐色	10YR6/4～5YR5/4	内面剥離
52－003	SK－006	4	弥生土器	鉢	破片	―	―			―	―	―				ウンモ　石英	にぶい赤褐色	5YR4/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	内面赤彩
52－004	SK－006	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	羽状縄文	―				ウンモ　石英	黄灰色	2.5Y5/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩（5YR4/6）
52－005	SK－006	3	弥生土器	甕	破片	―	―			―	ミガキ（タテ）	ヘラナデ	△			長石	橙色	7.5YR6/8	橙色	7.5YR6/6	
53－001	SS－001a	2	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			粗い砂	明黄褐色	10YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
53－002	SS－001a	2	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
53－003	SS－001a	2	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―					にぶい黄褐色	10YR5/3	灰黄褐色	10YR4/2	
53－004	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
53－005	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
53－006	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
53－007	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―					にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
53－008	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
53－009	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
53－010	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
53－011	SS－001b	3	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	赤彩
53－012	SS－001a	2	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	橙色	7.5YR6/6	にぶい褐色～灰褐色	7.5YR5/3～7.5YR4/2	
53－013	SS－001a	2	弥生土器	甕	底部の10%	―	(5.8)			[5.8]	ハケ（ナナメ）	ヘラナデ	△	△		1㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
55－001	SS－002	9	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい黄褐色	10YR5/3	
55－002	SS－002	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～10YR4/1	赤彩
55－003	SS－002	4	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	
55－004	SS－002	1	弥生土器	甕	破片	―	(7)			[3.3]	ハケ（タテ）	―	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	5YR7/6	
55－001	SS－003b	3	弥生土器	壺	頸部の100%	―	―			[11.7]	―	―	△			石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色～黄灰色	5YR7/4～2.5YR5/1	内外面摩滅、外面赤彩
55－002	SS－003b	SK－024－1	弥生土器	壺	首部破片	―	―			[8.6]	ミガキ（タテ）	ヘラナデ(タテ)、ハケ（ヨコ）	△			ウンモ　石英	橙色	5YR6/6	にぶい橙色	5YR6/4	
55－003	SS－003b	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	灰黄褐色、一部にぶい橙色	10YR6/2 5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
55－004	SS－003a	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				褐灰色	10YR6/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	
55－005	SS－003b	SK－024－1	弥生土器	深鉢	破片	―	―			―	縄文	―	△		△	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	小片
55－006	SS－003c	1	弥生土器	壺	底部の20%	―	(8)			[2.7]	ヘラケズリ、ナデ（タテ）	ナデ	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	黄灰色	2.5Y4/1	
55－007	SS－003b	SK－024－1	弥生土器	甕	底部の50%	―	(5.4)			[3.1]	ハケ（タテ）	ナデ（タテ）				石英 褐色粒	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
55－008	SS－003d	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	
55－009	SS－003a	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
55－010	SS－003a	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄褐色	10YR5/3	
55－011	SS－003a	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR4/2	
55－012	SS－003b	4、5	弥生土器	壺	胴部の一部 底部の100%	―	(7)			[9.3]	ハケ（ナナメ）、木葉痕	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ　石英	明褐色	7.5YR5/6	暗灰黄色～黒褐色	2.5Y5/2～ 2.5Y3/1	
55－013	SS－003b	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英 黄色粒	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR7/6	
55－014	SS－003b	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎			白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	
55－015	SS－003c	1	弥生土器	甕	底部の20%	―	(10.2)			[4.9]	ハケ（タテ）、木葉痕	ナデ？ハケ(ヨコ)	△			ウンモ黄色粒 長石　石英	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～ 10YR4/1	にぶい黄褐色、一部褐灰色	10YR5/3 10YR4/1	
55－016	SS－003b	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	
55－017	SS－003a	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/3	黒褐色	10YR3/1	
55－018	SS－003a	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ 白色粒	褐灰色～にぶい黄橙色	10YR4/1～ 10YR7/4	褐灰色	10YR4/1	赤彩
55－019	SS－003a	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			石英　長石	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	7.5YR7/6	
55－001	SS－006	SI－070－1、5	弥生土器	壺	全体の80%	―	(4.4)			[15.6]	ミガキ、羽状縄文	ナデ	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	外面摩滅
56－001	U13－37	4	弥生土器	壺	全体の90% 口縁部の98% 胴部の90% 底部100%	9.8	6.0			31.7	ミガキ（タテ）、胴部中央から下ハケ（ヨコ～ナナメ）、木葉痕	ヘラナデ	△			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色～オリーブ黒色	7.5YR6/4～ 5Y3/1	内面摩滅
56－002	V13－83、92、93	83－2、92－3、7、93－2	弥生土器	鉢	全体の30%	(13.0)	―			[5.5]	ミガキ（タテ）、S字状結節文	ミガキ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	外面赤彩
56－003	B区P－22	1	弥生土器	壺	頸部破片	(10.6)	―			[5.5]	羽状縄文	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	○			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	内面赤採
56－004	V15－30	2	弥生土器	小型壺	口縁部100%	7.0	―			[3.4]	口唇部縄文痕	ヘラナデ	○		△	ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい黄褐色	10YR5/3	赤彩
56－005	V15－60	2	弥生土器	壺	胴部の25%	―	―			[6.9]	頸部縄文痕	ヘラナデ（ヨコ）					灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	外面赤彩
56－006	V14－84	3	弥生土器	壺	全体の10%	14.0	―			[6.9]	羽状縄文	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	内面赤彩
56－007	V14－30、41	30－2、41－3	弥生土器	壺	頸部の40%	―	―			[3.6]	縄文痕、竹痕	ナデ	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	外面赤彩
56－008	V13－51	1	弥生土器	甕	底部の100%	―	5.6			[3.3]	―	―	△			ウンモ	灰褐色	5YR5/2	灰褐色	5YR5/2	内外面摩滅
56－009	U15－68	20	弥生土器	壺	頸部の70%	―		13.0		[17.5]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ　石英 黄色粒	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	内外面赤彩 内面摩滅
56－010	V15－50	14	弥生土器	鉢	全体の50%	(22.0)	5.6			14.7	ハケ（タテ）、波状口縁	ヘラナデ、口縁内側指頭痕	○		△	ウンモ	灰褐色	5YR4/2	赤灰色～灰色	2.5YR4/1～ N4/	
56－011	V15－70	6	弥生土器	甕	口縁部の30%	(13.8)	―			[2.6]	ヘラナデ(ヨコ)、波状口縁	ヘラナデ					褐灰色	10YR5/1	褐灰色	7.5YR4/1	
56－012	U14－89		弥生土器	壺	破片	―	―			[2.0]	―	―	△				浅黄色	2.5Y7/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、〔〕は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
56－013	V15－72	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔1.9〕	―	―	△		△		橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	
56－014	U15－08	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.8〕	―	―	◎	◎	◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
56－015	U15－48	1	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.5〕	斜縄文	ミガキ（ヨコ）ナデ			△		にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
56－016	V15－31	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.0〕	―	―				ウンモ 白色粒	明灰黄色	2.5Y5/2	明灰黄色	2.5Y5/2	
56－017	V15－63	7	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.3〕	―	―	◎	◎			橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	
56－018	U15－98	8	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.7〕	―	―	◎	◎	◎	ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
56－019	V15－02	1	弥生土器	壺	破片	―	―			〔1.9〕	―	―	△			ウンモ	明灰黄色	2.5Y5/2	にぶい黄色	2.5Y6/4	
56－020	V15－50	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔3.2〕	―	―	◎		◎	ウンモ	褐灰色～黒褐色	10YR4/1～3/1	明灰黄色	2.5Y5/2	
56－021	V15－30	1	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.7〕	―	―				ウンモ 白色粒	明灰黄色	2.5Y5/2	明灰黄色	2.5Y5/2	
56－022	V15－60	2、16	弥生土器	壺	破片	―	―			〔5.3〕	―	―				ウンモ 白色粒	灰色	10Y4/1	灰黄色	2.5Y6/2	
56－023	V15－30	1	弥生土器	壺	破片	―	―			〔4.2〕	疑似流水文	―	◎	◎		ウンモ	橙色	7.5YR7/6	褐灰色	7.5YR6/1	内面摩滅
56－024	V15－50	1	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.7〕	―	―		△		白色粒	灰色	5Y5/1	明黄褐色	10YR7/6	
56－025	U15－58	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔2.9〕	櫛描文	ヘラナデ（タテ）	◎		◎	ウンモ 白色粒	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	
56－026	U13－99	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔6.1〕	―	―	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	
56－027	U13－98	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔4.5〕	―	―			◎	ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい赤褐色	5YR5/4	
56－028	U13－79	2	弥生土器	甕	破片	―	―			〔5.2〕	―	―	△			ウンモ	灰褐色	5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
56－029	U13－76、78	76－2、78－2	弥生土器	甕	破片	―	―			〔4.8〕	―	―	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	
56－030	U15－69、78	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔3.2〕	―	―				白色粒	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
56－031	U13－89	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔3.5〕	―	―	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰褐色	7.5YR5/2	赤彩
56－032	V15－30	7	弥生土器	壺	破片	―	―			〔5.3〕	―	―	◎	◎	◎	ウンモ	橙色	5YR7/8	明黄褐色	10YR7/6	赤彩、内面剥離
56－033	B区P－74	1	弥生土器	壺	破片	―	―			〔5.7〕	―	―	◎			ウンモ	灰黄色	2.5Y6/2	明黄褐色	10YR6/6	赤採（5YR3/4）
56－034	V14－50	4	弥生土器	甕	破片	―	―			〔5.9〕	―	―		△	◎	ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
56－035	U13－89	2	弥生土器	甕	破片	―	―			〔3.4〕	―	―	◎		◎	ウンモ	褐灰色	10YR5/1	黄灰色	2.5Y5/1	
56－036	3T－003	22	弥生土器	甕	破片	―	―			〔3.2〕	ハケ（タテ）	ハケ（ヨコ）	△		△	ウンモ	明赤褐色	2.5YR5/6	明赤褐色	2.5YR5/6	
56－037	V14－23	3	弥生土器	甕	破片	―	―			〔4.0〕	ハケ（タテ、ヨコ）	ハケ（ヨコ）			△		黄灰色	2.5Y4/1	オリーブ黒色	7.5Y3/1	
56－038	V14－62	2	弥生土器	小型甕	破片	―	―			〔3.7〕	―	―		△		ウンモ 白色粒	黄橙色	7.5YR7/8	灰褐色	7.5YR5/2	
56－039	U13－57	2	弥生土器	甕	破片	―	―			〔4.5〕	―	ミガキ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	明赤褐色	2.5YR5/6	明赤褐色	2.5YR5/6	
56－040	V15－60	10	弥生土器	甕	破片	―	―			〔4.8〕	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ	褐灰色	7.5YR5/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	
56－041	V13－02	2	弥生土器	甕	破片	―	―			―	ヘラナデ（タテ）	―	△		△	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	褐灰色	7.5YR4/1	波状口縁
56－042	V14－23	2	弥生土器	壺	破片	―	―			〔3.5〕	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
57－043	V13－82、92	82－3、92－5	弥生土器	壺	口縁部の30%	(23.0)	――			[2.9]	ナデ	ナデ	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/3	内面赤彩
57－044	V15－60	13	弥生土器	壺	口縁部の20%	(22.4)	――			[4.8]	羽状縄文、口唇部縄文	ヘラナデ（ヨコ）	○		△	ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	灰褐色	5YR5/2	赤彩
57－045	U15－59	15	弥生土器	鉢	全体の30%	(22.6)	7.1			11.4	ミガキ（タテ）、口唇部、口縁部縄文	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ　石英	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/4	内外面赤彩
57－046	V15－41	2	弥生土器	鉢	全体の25%	――	(6.2)			[5.2]	――	――	◎			ウンモ	褐灰色	10YR4/1	褐灰色	10YR5/1	内外面摩滅
57－047	U15－49	10	弥生土器	鉢	底部の70%	――	6.0			[5.4]	ミガキ（タテ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	灰黄褐色	10YR5/2	内外面赤彩 内外面摩滅
57－048	U15－68	18	弥生土器	甕	口縁部の25% 胴部の25%	(19.6)	――			[16.1]	ミガキ（タテ）、ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	灰褐色	7.5YR5/2	
57－049	V14－84	3	弥生土器	甕	口縁部の30%	(34.0)	――			[6.3]	輪積痕	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
57－050	U15－69	9	弥生土器	甕	口縁部の60% 胴部の80%	14.7	――			[12.0]	ミガキ（ヨコ）	ミガキ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	褐灰色	7.5YR4/1	灰褐色	7.5YR5/2	
57－051	U15－69	11	弥生土器	甕	全体の30% 胴部の30% 口縁部	(26.6)	――			[24.0]	ヘラナデ（ヨコ）	頸部ナデ（ヨコ） ミガキ（ヨコ）					にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	輪積痕
57－052	V13－2、51、62	2－5、51－2、62－3	弥生土器	甕	全体の70%	(20.2)	――			[21.3]	ヘラナデ(ヨコ)、輪積痕	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	
57－053	U15－68	21	弥生土器	壺	底部の100%	――	9.0			[12.5]	ミガキ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい橙色	5YR6/3	外面赤彩
57－054	U15－79	14	弥生土器	甕	口縁部の100% 胴部の90%	18.2	――			[15.3]	ミガキ（ヨコ～ナナメ）	ミガキ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	褐灰色	7.5YR4/1	褐灰色	7.5YR4/1	
57－055	U15－69	6	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	――	8.1			[6.4]	ミガキ（タテ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ　1～2㎜大の小石	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
57－056	U14－58	4	弥生土器	台付甕	脚台部の50%	――	(8.0)			[6.0]	ヘラケズリ(ヨコ)後ミガキ（タテ）	ナデ	◎	◎		ウンモ	明灰黄色	2.5Y5/2	明灰黄色	2.5Y5/2	
57－057	B区P－179	1	弥生土器	台付甕	全体の20% 脚部100%	――	10.0			[6.5]	――	ナデ（ヨコ）				ウンモ 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面摩滅
57－058	V15－61	2	弥生土器	台付甕	脚台部の60%	――	(3.8)			[5.5]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）					褐灰色	10YR4/1	灰黄褐色	10YR5/2	
57－059	U16－17	1	弥生土器	台付甕	脚接合部の30%	――	――			[5.4]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ 白色粒	橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	
57－060	U14－69	1	弥生土器	台付甕	全体の10% 脚台部の90%	――	――			――	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラナデ	◎	◎		ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
57－061	V15－60	7	弥生土器	甕	底部の30%	――	(8.6)			[2.4]	――	――	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	内外面摩滅
57－062	V14－84	3	弥生土器	壺	底部の100%	――	8.4			[3.5]	ミガキ（タテ）、底部外面ヘラケズリ	ヘラナデ	◎	◎		ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
57－063	V14－84	3	弥生土器	台付甕	脚部の50%	――	(11.3)			[7.9]	ナデ（タテ）	ヘラケズリ（ナナメ）	○			ウンモ	灰褐色	5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	
57－064	U15－49	14	弥生土器	台付甕	脚台部の100%	――	11.8			[4.5]	ミガキ（タテ）、ナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	内外面摩滅
57－065	V14－34	4	弥生土器	台付甕	脚部100%	――	6.0			[4.0]	ヘラナデ	ナデ					橙色	7.5YR6/8	橙色	7.5YR6/8	
58－066	U14－28	4	弥生土器	鉢	破片	――	――			[3.9]	――	ミガキ	◎			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩（5YR4/6）
58－067	V14－74	3	弥生土器	鉢	破片	――	――			[5.1]	――	――	△			ウンモ	明黄褐色	10YR7/6	明赤褐色	5YR5/6	赤彩
58－068	U15－87	1	弥生土器	鉢	破片	――	――			[5.4]	――	――	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
58－069	U15－58	5	弥生土器	鉢	破片	――	――			[6.1]	――	――	◎		◎	ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
58－070	U14－28、39	3、4	弥生土器	壺	破片	――	――			[4.3]	――	ミガキ	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩（5YR4/4）
58－071	V15－62	2	弥生土器	鉢	破片	――	――			[3.8]	――	――	△	△	△	ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	橙色	5YR6/6	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
58－072	V13－50	2	弥生土器	高坏	脚部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	
58－073	U14－58	3	弥生土器	台付鉢	破片	―	―			[5.1]	―	―	◎			ウンモ	暗赤灰色	10R3/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
58－074	V14－42	4	弥生土器	鉢	破片	―	―			[3.9]	―	―				ウンモ 白色粒	赤褐色	5YR4/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
58－075	U15－53	7	弥生土器	壺	破片	―	―			[6.5]	―	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎	◎		にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	赤彩（5YR4/6）
58－076	V15－60	8	弥生土器	壺	口縁部の15%	(16.6)	―			[2.7]	ミガキ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面赤彩
58－077	U15－48	2	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.4]	―	―	◎		◎	ウンモ	にぶい橙色～橙色	7.5YR7/4～7/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	内面赤彩
58－078	V15－90	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[1.3]	―	―	△			ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
58－079	V14－92	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[2.8]	―	―	△			ウンモ	赤褐色	2.5YR4/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩
58－080	V14－83	2	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.1]	―	―	△	△		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩
58－081	V15－13	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.1]	ミガキ	―	◎		◎	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
58－082	V14－51	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.5]	―	ナデ（ヨコ）		△	△	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄色	2.5Y6/3	赤彩
58－083	U15－19	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.7]	―	―	△			ウンモ	赤褐色	5YR4/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	赤彩
58－084	V15－70	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.0]	―	―		△		ウンモ 白色粒	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
58－085	U14－28	3	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.2]	―	―				ウンモ 黒色粒	明黄褐色	10YR7/6	浅黄橙色	7.5YR8/6	赤彩
58－086	V14－82	2	弥生土器	壺	破片	―	―			[2.1]	―	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	橙色	7.5YR7/6	赤彩
58－087	V14－34	3	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.2]	―	―	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	7.5YR7/6	
58－088	V14－60	2	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.5]	―	―	◎		◎	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR4/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
58－089	U15－29	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.3]	―	―	◎	◎		ウンモ 2㎜大の小石 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩（2.5YR4/4）
58－090	V14－62	2	弥生土器	壺	破片	―	―			[5.4]	―	―	◎	◎		ウンモ	赤褐色	5YR4/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
58－091	V14－42	4	弥生土器	壺	破片	―	―			[5.4]	―	―	◎	◎	◎	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
58－092	U15－87	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.3]	羽状縄文	ナデ（ヨコ）		◎		ウンモ 白色粒 黒色粒	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
58－093	V13－90	2	弥生土器	壺	頸部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	赤彩
58－094	U15－59	2	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.3]	ミガキ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	暗緑灰色	10YR3/1	赤彩
58－095	U15－79	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.9]	―	―	△			白色粒	明灰黄色	2.5Y5/2	にぶい黄橙色	10YR7/3	
58－096	V14－24	4	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.4]	―	―				ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	褐灰色	10YR5/1	赤彩
58－097	V15－11	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.0]	―	―	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
58－098	B区P－92	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[3.8]	―	―	◎			ウンモ 白色粒	橙色	7.5YR6/6	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	赤採 内外面摩滅
58－099	U15－77	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[5.1]	―	ヘラナデ（タテ）			△	ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
58－100	V15－73	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.3]	―	ミガキ（ヨコ）		△		ウンモ 黒色粒	黒褐色	10YR3/1	にぶい黄橙色	10YR7/3	赤彩
58－101	3T－003	18、19	弥生土器	壺	破片	―	―			[9.8]	―	―	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/2	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
58－102	3T－003	16、18	弥生土器	壺	破片	―	―			[8.6]	―	―				ウンモ 小石	橙色	7.5YR6/6	灰黄色	2.5Y6/2	外面摩滅
59－103	3T－003	16、18、19	弥生土器	壺	破片	―	―			[14.4]	―	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	浅黄色	2.5Y7/3	赤彩
59－104	3T－002	30付近	弥生土器	甕	破片	―	―			[3.5]	―	ナデ（ヨコ）				ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
59－105	U14－38	3	弥生土器	甕	破片	―	―			[2.6]	―	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
59－106	V14－01	1	弥生土器	甕	破片	―	―			[2.7]	―	―	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
59－107	U14－28	2	弥生土器	甕	破片	―	―			[2.9]	―	―	△			ウンモ	浅黄色	2.5Y7/3	浅黄色	2.5Y7/3	
59－108	U15－19	1	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.2]	―	―			△	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR6/6	赤彩
59－109	V16－00	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△		△		にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	赤彩
59－110	U15－69	2	弥生土器	壺	破片	―	―			[4.8]	―	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩（2.5YR5/6）
59－111	V15－50	13	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	◎		△	ウンモ	灰褐色	7.5YR6/2	暗赤灰色	10R4/1	
59－112	U13－78	2	弥生土器	甕	破片	―	―			[3.4]	―	―	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
59－113	V15－40、50	2	弥生土器	甕	破片	―	―			[2.5]	付加条縄文	―	◎			ウンモ 白色粒	灰黄色	2.5Y6/2	にぶい黄色	2.5Y6/3	
60－001	D区一括	－	弥生土器	甑	底部100%	―	―			―	―	―					にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR6/6	内外面摩滅
60－002	V11－51	2	弥生土器	甕	底部の80%	―	7.4			[1.8]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ 白色粒	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
60－003	V11－83	2	弥生土器	台付甕	底部の100%	―	(11.6)			[6.3]	ヘラナデ（ヨコ調整後タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	
60－004	V11－71	2	弥生土器	台付甕	底部の100%	―	8.6			6.3	ヘラナデ（ヨコ調整後タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	褐灰色	7.5YR4/1	にぶい黄橙色	10YR6/3	
60－005	V11－61	2	弥生土器	壺	底部の50%	―	(5.2)			[3.9]	ヘラケズリ（ナナメ～ヨコ）、ナデ、木葉痕	ヘラナデ(ナナメ)	△	◎		白色粒 2㎜大の黒色粒	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
60－006	V10－81	4	弥生土器	甕	底部の40%	―	(10.4)			[3.0]	ヘラナデ(タテ)、木葉痕	ヘラナデ	△				暗赤灰色	10R4/1	赤灰色～にぶい褐色	10R5/1～7.5YR5/3	
60－007	V11－73、74、83	73－2、74－1、83－2	土師器	壺	全体の30%	―	―			[14.2]	ヘラナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ 長石2～3㎜大の小石	褐灰色	7.5YR4/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	櫛描波状文
60－008	SK－001	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	口唇部に縄文	―	△				橙色	7.5YR7/6	橙色	5YR6/6	
60－009	SK－001	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	縄文	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4～7/3	にぶい橙色～橙色	7.5YR7/4～6/6	
60－010	SK－001	1	弥生土器	壺	破片	―	―			―	縄文	―	△			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
60－011	SK－001	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	縄文	―	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3～6/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
60－012	SK－001	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	口唇部に縄文	―	◎			ウンモ 白色粒	にぶい橙色～褐灰色	7.5YR7/4～5/1	にぶい褐色	7.5YR5/4	
60－013	SK－001	1	弥生土器	甕	破片	―	―			―	口唇部に縄文	―	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	褐灰色	10YR5/1	
63－001	SI－014	53	土師器	鉢	全体の80%	(16.3)	5.8			7.1	ミガキ（タテ）、口縁部ナデ(ヨコ)	ミガキ（タテ）	◎			ウンモ 黒色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	明黄褐色～灰黄色	10YR6/6～2.5YR6/2	赤彩？内外面摩滅
63－002	SI－014	54	土師器	高坏	全体の90%	18.5	9.6			12.2	脚部ミガキ（タテ）、ナデ	―	◎			黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	内外面摩滅
63－003	SI－014	46	土師器	高坏	全体の90%	15.2	12.8			11.0	ミガキ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）、ヘラ切り	ミガキ	◎		◎	ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
63－004	SI－014	47	土師器	高坏	坏部の40%	(16.0)	―			[4.9]	ミガキ（タテ）リ	ミガキ	◎				黄灰色	2.5YR5/1	灰白色～灰黄色	2.5Y7/1～7/2	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
63－005	SI－014	47	土師器	高坏	坏部の95%	21.6	——			[7.5]	ミガキ（タテ）、口縁部ナデ(ヨコ)	ミガキ	△		△	ウンモ	橙色～黒色	7.5YR6/6～2/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	坏部黒斑
63－006	SI－014	39	土師器	高坏	底部の50%	——	——			[4.4]	——	——	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅
63－007	SI－014	5	弥生土器	高坏	脚部の50%	——	——			[4.7]	台部ミガキ(タテ)	——					灰褐色	7.5YR5/1	橙色	7.5YR6/6	内面摩滅
63－008	SI－014	9	弥生土器	高坏	脚部の80%	——	——			[6.0]	ナデ（タテ）	ヘラナデ	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい黄橙色	10YR7/4	ヘラナデの当たり部分強い
63－009	SI－014	46	土師器	小型鉢	完形	7.5	3.4			4.5	ハケ、ナデ（口縁ヨコ、胴部タテ）、底外ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ	△			ウンモ	にぶい橙色～黒褐色	5YR6/4～2/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	底部指による成形
63－010	SI－014	54	土師器	小型鉢	完形	6.7	4.2			4.7	ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）					にぶい橙色	2.5YR6/4	橙色	2.5YR6/6	
63－011	SI－014	56、58	土師器	壺	全体の70%	10.8	7.2			[29.1]	ミガキ（タテ、ヨコ、ナナメ）、口縁部ナデ（ヨコ）、ヘラ切り	ヘラナデ	◎				にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい橙色～灰褐色	7.5YR6/4～4/2	赤彩　頚部縄文
63－012	SI－014	57	土師器	壺	全体の80%	——	9.3			[26.5]	ミガキ(底部タテ、胴部中央下ヨコ、胴中央～頚部タテ)、ヘラ	ヘラナデ	◎				褐灰色	7.5YR5/1	にぶい赤褐色～褐灰色	2.5YR5/4～7.5YR4/1	
63－013	SI－014	18	土師器	壺	底部の100%	——	6.6			[10.1]	ミガキ(ナナメ)、ヘラ切り	ヘラナデ（ヨコ）	◎			黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色～黒褐色	10YR7/4～3/1	黒斑
63－014	SI－014	52	土師器	甕	全体の90%	17.0	8.4			23.5	ナデ(口縁部ヨコ、底部付近タテ）ヘラ切り	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR7/3～5YR5/3	
63－015	SI－014	54	土師器	壺	口縁部の60%	(9.8)	——			[5.7]	頚部ミガキ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	——	◎		◎		にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	内面剥離
63－016	SI－014	48	土師器	壺	頚部の50%	——	——			[5.5]	ミガキ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
63－017	SI－014	48	土師器	壺	底部の100%	——	(5.2)			[3.3]	ミガキ（タテ）、ヘラ切り	——	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	赤彩、内面摩滅
63－018	SI－014	51	土師器	壺	全体の50% 胴部の50% 底部の100%	——	6.0			[9.3]	胴部ミガキ(タテ、ヨコ)、ナデ（底部付近ヨコ）、底部ヘラ切り、ヘラケズリ	ヘラナデ（ヨコ）				ウンモ　石英	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
63－019	SI－014	28	土師器	壺	底部の100%	——	5.2			[2.7]	ヘラケズリ（ヨコ）、ヘラ切り	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
63－020	SI－014	46、50	土師器	台付甕	口縁部の50%	(19.6)	——			[8.2]	ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
63－021	SI－014	46、49、50	土師器	台付甕	全体の80%	16.2	9.4			25.8	胴部ヘラケズリ(ヨコ)、脚部ミガキ（タテ）、ナデ	ナデ	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR7/6	
63－022	SI－014	66	土師器	台付甕	脚台部の50%	——	(6.2)			[5.7]	——	——	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	赤彩、内外面摩滅
64－023	SI－014	46	その他	大型鉢	底部の100%	——	(19.5)			[26.0]	ヘラケズリ(ヨコ、底部近タテ)、ヘラ切り	——	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR6/6	混入品 内面摩滅
64－024	SI－014	26	弥生土器	壺	口縁部の25%	(16.0)	——			[4.0]	縄文	——	◎			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	内面赤彩、摩滅
64－025	SI－014	68	弥生土器	壺	口縁部破片	——	(9)			[1.9]	——	——	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
64－026	SI－014	34	弥生土器	壺	頚～肩部の30%	——	——			[4.3]	羽状縄文	ナデ	△	△		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	
64－027	SI－014	60	弥生土器	甕	底部の50%	——	(6.0)			[3.0]	ハケ	ナデ	◎				にぶい黄橙色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR6/2	
64－028	SI－014	3	弥生土器	甕	底部の50%	——	(6.8)			[2.2]	——	——	△		△	ウンモ	灰黄色	2.5Y7/2	にぶい橙色	7.5YR7/4	木葉痕

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
64－029	SI－014	16	弥生土器	甕	底部の100%	――	9.0			[1.9]	――	――	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	内外面摩滅 外面赤彩
64－030	SI－014	13	弥生土器	甕	底部の60%	――	(7.6)			[1.9]	ヘラ切り	――	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	灰黄褐色	10YR6/2	内面剥離
64－031	SI－014	80	弥生土器	壺	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
64－032	SI－014	44	弥生土器	壺	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ　石英	橙色	7.5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
64－033	SI－014	44	弥生土器	壺	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
64－034	SI－014	80	弥生土器	壺	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
64－035	SI－014	80	弥生土器	壺	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
64－036	SI－014	45	弥生土器	壺	頸部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	灰黄色	2.5YR6/2	灰黄色	2.5YR6/2	
64－037	SI－014	44	弥生土器	壺	胴部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	黄灰色	2.5Y5/1	にぶい黄色	2.5Y6/3	赤彩 内面摩滅
64－038	SI－014	10	弥生土器	壺	胴部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
64－039	SI－014	79	弥生土器	壺	胴部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	橙色	5YR6/6	赤彩
64－040	SI－014	80	弥生土器	鉢	破片	――	――			――	――	――	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
64－041	SI－014	80	弥生土器	甕	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/3	灰黄褐色	10YR5/2	
64－042	SI－014	80	弥生土器	甕	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	明黄褐色	10YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/2	
64－043	SI－014	44	弥生土器	甕	口縁部破片	――	――			――	――	――	◎		◎	ウンモ	褐灰色	10YR5/1	灰黄褐色	10YR4/2	
69－001	SX－004	38	土師器	小型鉢	完形	9.8	3.4			5.0	ミガキ（タテ）、口縁部ナデ(ヨコ)	ミガキ（タテ）	◎	◎			灰褐色	7.5YR4/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	
69－002	SX－004	139	土師器	小型鉢	底部～胴部の80%	――	4.2			[4.3]	ナデ（タテ）	ナデ	△			小石	黒褐色	10YR3/1	にぶい赤褐色	5YR5/4	
69－003	SX－004	249	土師器	小型鉢	全体の50%	(9.6)	3.0			6.5	ミガキ（タテ）	ミガキ（タテ）	△	△	△	ウンモ　小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
69－004	SX－004	35	土師器	鉢	底部の100% 胴部の50%	――	7.4			[9.5]	ミガキ（タテ）、ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（タテ）	◎				灰褐色	7.5YR5/2	灰褐色	7.5YR5/2	
69－005	SX－004	239、241	土師器	高坏	口縁～体部の20%	(19.6)	――			[8.3]	口縁部ナデ（ヨコ）、体部ヘラナデ	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい橙色～にぶい黄橙色	7.5YR6/4～10YR6/3	にぶい黄色	2.5Y6/3	赤彩
69－006	SX－004	37	土師器	高坏	全体の80% 坏部の50%	22.8	――			[11.8]	ミガキ（タテ）	ミガキ（タテ）	◎	◎			橙色	5YR6/6	橙色～にぶい黄橙色	2.5YR6/8～10YR6/4	内面赤彩
69－007	SX－004	166	土師器	高坏	脚台接合部の20%	――	――			[5.6]	ミガキ（タテ）	――	◎		△		にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	内面摩滅
69－008	SX－004	239	土師器	高坏	全体の30%	――	――			[5.9]	――	――	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	内外面摩滅
69－009	SX－004	146	土師器	台付甕	脚台接合部の100%	――	――			[4.3]	ヘラケズリ、ミガキ	ミガキ	△				灰黄褐色	10YR4/2	灰赤色	10R6/2	
69－010	SX－004	125	土師器	台付甕	脚台部の50%	――	――			[4.4]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ　小石	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
69－011	SX－004	152	土師器	高坏	脚部の30%	――	――			[5.2]	脚部横線	圧痕	△			ウンモ	灰赤色	2.5YR4/2	灰褐色	5YR4/2	
69－012	SX－001	171	土師器	高坏	脚部の30%	――	――			[4.9]	ヘラミガキ(タテ)	ナデ	△			ウンモ 褐色粒	褐灰色	10YR4/1	灰褐色	7.5YR5/2	
69－013	SX－004	80	土師器	高坏	脚部の50%	――	――			[6.3]	ミガキ（タテ）	ミガキ（タテ）	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
69－014	SX－004	31	土師器	高坏	全体の80% 底部の90%	――	12.4			[7.9]	ミガキ（タテ）	ナデ（ヨコ）、ミガキ、ヘラナデ(ヨコ)	△		△	ウンモ	橙色	7.5YR7/6	にぶい褐色～褐灰色	7.5YR6/3～7.5YR4/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
69－015	SX－004	24	土師器	小型壺	全体の70% 口縁部の60% 胴部の50%	9.5	―			[6.7]	ミガキ（タテ）	ミガキ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
69－016	SX－004	19	土師器	小型壺	胴部の20%	―	―			[6.1]	ハケ（ヨコ）	棒状工具によるナデ	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	赤彩
69－017	SX－004	33	土師器	小型壺	全体の80%	(8)	(5)			13.9	ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
69－018	SX－004	200	土師器	壺	口縁部の100% 胴部の20%	10.2	―			[15.5]	ミガキ（頸部タテ、胴部ヨコ）	ミガキ（ヨコ）ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	明灰黄色	2.5Y5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
69－019	SX－004	101?	土師器	壺	ほぼ完形	14.1	4.8			21.2	ミガキ（タテ）	ミガキ（タテ）ナデ	△		△		にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい褐色～褐灰色	7.5YR5/3～5YR4/1	
69－020	SX－004	28	土師器	壺	全体の40%	(10.0)	(16.0)			[14.2]	ナデ	ミガキ（ヨコ）	△		△	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	外面摩滅
69－021	SX－004	116、124	土師器	壺	全体の25%	―	―	(9.5)	(26.0)	[11.6]	―	―	◎	△		ウンモ　小石	明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい褐色	7.5YR5/3	内外面摩滅
69－022	SX－004	14	土師器	壺	口縁部の30%	(19.6)	―			[4.1]	ヘラナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	内外面摩滅
69－023	SX－004	205	土師器	壺	胴部の100% 底部の100%	―	8.0			[21.0]	ミガキ（頸部下タテ、胴部～底部ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
69－024	SX－004	1、15、29、136、140、146、154、156、159、161、170、171、193 U14－36－3、4	土師器	壺	口縁部の60%	18.9	―			[29.1]	ミガキ（タテ）	粗いミガキ（口縁部タテ　胴部ヨコ）	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	
70－025	SX－004	172	土師器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	灰褐色	7.5YR4/2	
70－026	SX－004	43	土師器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	
70－027	SX－004	1	土師器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			小石	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい黄褐色	10YR5/3	
70－028	SX－001	103、173	土師器	壺	胴部の70% 底部の10%	―	(8)			[26.7]	ミガキ、ナデ	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/4～10YR6/1	にぶい褐色～褐灰色	7.5YR6/4～7.5YR5/1	
70－029	SX－001	1、63、102、159、171、173	土師器	壺	全体の70%	―	(8.4)			[29.1]	ミガキ（タテ）	ヘラナデ	◎			ウンモ 白色粒	橙色	2.5YR6/8	橙色、部分的に赤橙色、灰色など	5YR7/8、10R6/8、N5/1	内外面摩滅
70－030	SX－004	96、115	土師器	壺	底部の100% 胴部の20%	―	8.0			[7.4]	ミガキ（タテ）	ヘラナデ	○			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/4	
70－031	SX－004	1	土師器	壺	底部の100%	―	2.1			[1.3]	ヘラケズリ	ヘラナデ	○			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
70－032	SX－004	229	土師器	壺	底部の30%	―	(4.6)			[2.1]	ミガキ（タテ）	ヘラナデ	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	外面赤彩
70－033	SX－004	267	土師器	壺	底部の100%	―	6.2			[3.3]	ミガキ（タテ）、木葉痕	ナデ	△			ウンモ　小石	黄灰色	2.5Y4/1	にぶい褐色	7.5YR6/3	
70－034	SX－001	165	土師器	壺	底部100%	―	8.0			[3.1]	ハケ（タテ）	ナデ	△			ウンモ	褐灰色	10YR5/1	褐灰色、灰褐色	2.5Y4/1 7.5YR4/2	内外面赤彩
70－035	SX－001	125	土師器	壺	底部の100%	―	4.2			[2.3]	ミガキ（ヨコ）	ナデ	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい赤橙～黄灰色	5YR5/4～2.5Y5/1	赤彩
70－036	SX－001	171	土師器	甕	底部の50%	―	(7.6)			[3.7]	ハケ（タテ）	ナデ	△			ウンモ　白色粒　褐色粒	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
70－037	SX－004	243	土師器	壺	底部の100%	―	7.0			[3.0]	ミガキ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
70－038	SX－004	85	土師器	壺	底部の35%	―	(10.0)			[2.6]	―	ナデ	◎			ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	外面摩滅
70－039	SX－001	52	土師器	壺	底部の30%	―	(5.6)			[4.0]	―	ナデ	△		△	ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	明赤褐色	2.5YR5/6	外面摩滅
70－040	SX－004	47	土師器	壺	底部の50%	―	(13.0)			[3.8]	―	―	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/4	外面摩滅 内面剥離

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
70－041	SX－001	1、136、138、172	土師器	壺	口縁部の30% 胴部の30% 底部の90%	(24.0)	11.2	(13.6)	42.0	[49.0]	ミガキ、ヘラナデ（ヨコ、底部付近タテ）、肩部羽状縄文	ヘラナデ	◎			ウンモ 黄色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	外面赤彩　底部穿孔
71－042	SX－004	119	土師器	小型甕	全体の30%	(10.4)	——			[10.4]	ヘラケズリ（タテ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ　小石	にぶい褐色	7.5YR5/4	灰褐色	7.5YR4/2	
71－043	SX－004	62	土師器	小型甕	全体の30%	(11.5)	——			[11.5]	——	——	◎			ウンモ　小石	にぶい赤褐色	5YR5/4	明赤褐色	2.5YR5/6	内外面摩滅
71－044	SX－004	292	土師器	小型甕	ほぼ完形	(12.8)	5.6			11.0	ヘラナデ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	赤彩
71－045	SX－004	1、203、211、219、220、U14－39－4	土師器	小型甕	口縁部の70% 胴部の100%	4.1	——			[11.3]	ヘラナデ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（タテ）、ハケ（タテ）	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR4/2	灰褐色	7.5YR5/2	
71－046	SX－004	287	土師器	甕	口縁～胴部の20%	(17.4)	——			[10.6]	ミガキ（ナナメ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ミガキ（ヨコ）	△			ウンモ　小石	にぶい赤褐色	5YR5/4	明赤褐色	2.5YR5/6	
71－047	SX－004	212、262	土師器	甕	口縁部の20%	(17.7)	——			[11.2]	ハケ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）、ハケ（ヨコ）	△				にぶい褐色	7.5YR5/3	灰黄褐色	10YR5/2	
71－048	SX－004	1、115	土師器	甕	口縁部の50%	(17.2)	(14.7)			[6.2]	口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	◎	◎		ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/3	灰黄褐色	10YR4/2	
71－049	SX－001	173	土師器	甕	底部の40%	——	(7.0)			[1.8]	ヘラケズリ（ヨコ）	ナデ	△			ウンモ	褐灰色	5YR4/1	褐灰色	7.5YR4/1	
71－050	SX－004	210、218	土師器	甕	全体の20%	(19.4)	——			[10.2]	——	——	◎			ウンモ	黄灰色	2.5Y5/1	灰黄褐色	10YR4/2	内外面摩滅
71－051	SX－004	20	土師器	甕	底部の80% 胴部の25%	——	6.4			[8.8]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ　小石	褐灰色	7.5YR4/1	灰褐色	7.5YR5/2	
71－052	SX－004	226	土師器	台付甕	全体の60%	(18.4)	——			[19.2]	——	——	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	内外面摩滅
71－053	SX－004	84	土師器	甕	底部の100%	——	4.0			[3.5]	ヘラケズリ（ヨコ）、ハケ（タテ）	ハケ（ヨコ）	△			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	黄灰色	2.5Y4/1	
71－054	SX－004	9	土師器	台付甕	胴部破片	——	——			[5.9]	ハケ（タテ）	ハケ（ナナメ）	△			ウンモ　小石	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
71－055	SX－004	236	土師器	台付甕	脚台部の100%	——	7.9			[5.7]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）、ナデ	◎			ウンモ	明灰黄色	2.5Y5/2	明灰黄色	2.5Y5/2	
71－056	SX－004	2	土師器	台付甕	脚台部ほぼ完形	——	7.2			[6.3]	ヘラケズリ（タテ）	ハケ（ヨコ）	◎			ウンモ	黄灰色～にぶい黄橙色	2.5Y5/1～10YR6/3	にぶい黄褐色～褐灰色	10YR5/3～4/1	
71－057	SX－004	205	土師器	台付甕	脚部の60%	——	(6.8)			[6.6]	ミガキ（タテ）	工具圧痕（タテ）	○			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/4	暗赤褐色	5YR3/2	
71－058	SX－004	36	土師器	台付甕	脚台部の100%	——	7.5			[6.5]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	黒褐色	10YR3/1	にぶい赤褐色	5YR5/3	
71－059	SX－001	171	土師器	台付甕	胴部の50%	——	——			[3.9]	ナデ	ナデ	△			ウンモ 褐色粒	褐灰色	7.5YR4/1	にぶい褐色	7.5YR5/3	
71－060	SX－004	124	土師器	台付甕	脚台部の80%	——	(8.6)			[6.0]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	
71－061	SX－004	13	土師器	台付甕	脚部の30%	——	(10.0)			[5.4]	——	工具圧痕	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/4	外面摩滅
71－062	SX－004	250	土師器	台付甕	脚台接合部の100%	——	——			[4.3]	ヘラケズリ（タテ）	——	△			ウンモ	灰褐色～黒褐色	7.5YR5/2～10YR3/1	にぶい褐色	7.5YR5/4	内外面摩滅
71－063	SX－004	266	土師器	台付甕	脚台接合部の100%	——	——			[4.0]	ナデ（タテ）	ナデ	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR4/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
71－064	SX－001	1	土師器	台付甕	脚台部の25%	——	(8.0)			[4.0]	ヘラケズリ（タテ）	ナデ	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい黄褐色	10YR5/3	
72－071	SX－004	1、5、179、180、181、186、188、190、250、260	弥生土器	壺	全体の80%	——	——			[27.6]	ミガキ（ヨコ）、S状結節文、円形浮文、棒状浮文	ナデ？	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	赤彩 内面摩滅
72－072	SX－004	276、281	弥生土器	壺	口縁部の25%	(26.0)	——			[3.6]	——	ナデ	◎			ウンモ　石英	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい橙色	5YR6/4	赤彩、外面摩滅
72－073	SX－001	55	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色～にぶい赤褐色	10YR7/3～2.5YR4/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
72－074	SX－004	224	弥生土器	鉢	全体の50%	(16.4)	(6.6)			7.8	ナデ（ヨコ）、口縁に撚糸の格子	ミガキ（タテ）	◎			ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	底部内面剥離

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値（cm）（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頚部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
72－075	SX－004	290	弥生土器	鉢	底部の100% 胴部の20%	―	4.4			[5.2]	ミガキ（タテ）、口縁縄文	ミガキ（タテ）	△			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
72－076	SX－004	172、173、196	弥生土器	甕	口縁部の30%	(17.2)	―			[7.3]	ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ 黒色粒	灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR5/2	
72－077	SX－004	32	弥生土器	台付甕	口縁部100% 胴部100%	14.4	―			[12.6]	ヘラナデ(ヨコ)、輪積装飾	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	褐灰色	10YR4/1	黄灰色	2.5Y5/1	
72－078	SX－004	7	弥生土器	壺	底部の100%	―	6.8			[4.5]	ナデ	ヘラナデ（ヘラ状工具ヨコ）				ウンモ　小石	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/4	
72－079	SX－001	45	弥生土器	台付甕	脚台部の50%	―	(6.0)			[5.0]	―	―	◎			ウンモ 褐色粒	灰褐色	5YR4/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	内外面摩滅
72－080	SX－001	91	弥生土器	壺	底部の40%	―	(6.0)			[3.4]	ナデ	ナデ	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	
72－081	SX－001	174	弥生土器	高坏	脚部の40%	―	―			[6.3]	ヘラナデ	ヘラケズリ(ヨコ)	△			ウンモ	灰黄褐色	10YR4/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	赤彩
72－082	SX－004	17	弥生土器	高坏	脚台接合部の100%	―	―			[7.2]	ミガキ（ヨコ）、縄文	ナデ、ミガキ	◎			黄色粒	黄灰色	2.5Y4/1	灰黄褐色	10YR5/2	外面の一部に赤彩
72－083	SX－004	26	弥生土器	高坏	脚台接合部の100%	―	―			[7.5]	―	―	◎			ウンモ　小石	灰褐色、にぶい赤褐色	7.5YR4/2 5YR5/4	にぶい褐色～にぶい黄橙色	7.5YR5/4～10YR6/3	外面赤彩 内外面摩滅
72－084	SX－004	32	弥生土器	高坏	脚台接合部の100%	―	―			[4.2]	―	―	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	
72－085	SX－004	225	弥生土器	高坏	脚部の30%	―	―			[3.0]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（タテ）	◎	△		ウンモ	黒褐色	7.5YR3/1	灰赤色	2.5YR5/2	
72－086	SX－004	120	弥生土器	高坏	脚台接合部の100%	―	―			―	指頭圧痕	ナデ	△			ウンモ	褐灰色	7.5YR4/1	褐灰色	10YR4/1	
72－087	SX－004	11	弥生土器	高坏	脚台接合部の100%	―	―			[5.3]	―	ナデ	◎			ウンモ	黒褐色～褐灰色	10YR3/1～10YR4/1	黒褐色	7.5YR3/1	
72－088	SX－004	95	弥生土器	高坏	脚台接合部の80%	―	―			[6.3]	ミガキ（タテ）、指頭圧痕	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	黒褐色	10YR3/1	にぶい黄橙色	10YR6/3	
72－089	SX－005	1	弥生土器	高坏	底部の100%	―	7.9			[7.1]	ミガキ（タテ）	―	◎			ウンモ　石英1～2㎜大の小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	外面赤彩 内外面摩滅
72－090	SX－001	172	弥生土器	鉢	破片	―	―			[4.1]	―	―					黄灰色	2.5Y5/1	灰黄褐色	10YR5/2	
72－091	SX－004	132	弥生土器	鉢	口縁部破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄褐色	10YR5/3	
72－092	SX－004	106	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
72－093	SX－004	285	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	赤褐色	10R5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
72－094	SX－004	1	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
72－095	SX－001	113	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	灰褐色	5YR4/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
72－096	SX－004	280	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△				灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
72－097	SX－001	171	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
72－098	SX－001	144	弥生土器	壺	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ 褐色粒	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい橙色	5YR6/4	
72－099	SX－004	280	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	赤彩
72－100	SX－001	174	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	赤彩
72－101	SX－001	172	弥生土器	甕	破片	―	―			[2.5]	―	―	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR6/2	
72－102	SX－001	171	弥生土器	鉢	胴部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ 褐色粒	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	
72－103	SX－004	290	弥生土器	壺	胴部破片	―	―			―	―	―	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	赤彩

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
72－104	SX－004	1	弥生土器	壺	胴部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
72－105	SX－004	35	弥生土器	壺	胴部破片	―	―			―	―	―	△	△		ウンモ	褐灰色	7.5YR4/1	黄灰色	2.5Y4/1	赤彩
72－106	SX－004	279	弥生土器	壺	胴部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/3	灰褐色	7.5YR4/2	赤彩
72－107	SX－004	280	弥生土器	壺	胴部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	赤彩
72－108	SX－004	280	弥生土器	壺	胴部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR6/3	赤彩
72－109	SX－004	234	弥生土器	壺	胴部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英小石	明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	
72－110	SX－004	1、231	弥生土器	甕	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	赤灰色	7.5R5/1	褐灰色	7.5YR4/1	
72－111	SX－004	291	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	○			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	
72－112	SX－004	239	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
72－113	SX－001	173	弥生土器	甕	破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
72－114	SX－004	245	弥生土器	壺	口縁部破片	―	―			―	―	―	△			ウンモ　石英	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい黄褐色	10YR5/3	
73－115	SX－001	2	須恵器	盤類	全体の5%	(23.0)	―			[2.9]	回転ヘラナデ	回転ナデ				白色粒	灰色	5Y4/1	黄灰色	2.5Y5/1	ロクロ調整
73－116	SX－001	30	土師器	椀	全体の60%	(12.8)	―			5.1	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△	ウンモ 褐色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	
73－117	SX－001	171	土師器	坏	全体の40%	(14.0)	―			[3.7]	回転ナデ	回転ナデ	△		△	ウンモ	灰褐色	7.5YR4/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	ロクロ調整内外面赤彩
73－118	SX－001	2	須恵器	台付盤	脚部の20%	―	(15.0)			[5.5]	回転ナデ	回転ナデ				白色粒	暗灰黄色	2.5Y5/2	黄灰色	2.5Y5/1	ロクロ調整、重ね焼きのあとが残る
73－119	SX－001	172	須恵器	坏	全体の40%	(13.2)	―			[3.6]	回転ヘラケズリ	回転ナデ				白色粒	褐灰色	10YR5/1	灰色	5Y5/1	ロクロ調整
73－120	SX－001	171	須恵器	壺	破片	―	―			[3.8]	ヘラナデ	回転ナデ	△				灰白色	10YR7/1	オリーブ黒色	10Y3/1	ロクロ調整
73－121	SX－001	172	須恵器	坏	口縁部破片	―	―			[1.4]	―	―	△				灰色	5Y6/1	灰色	10Y5/1	ロクロ調整
73－122	SX－001	173	須恵器	坏	口縁部破片	―	―			[2.5]	―	―	△				灰色	10Y5/1	灰色	10Y5/1	ロクロ調整
73－123	SX－001	172	須恵器	坏	胴部破片	―	―			[2.5]	―	―	△				灰色	7.5Y5/1	灰色	7.5Y5/1	ロクロ調整
74－001	SI－006	6	土師器	坏	口縁部の50% 体部の100% 底部の100%	(11.2)	―			3.8	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）		△			にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
74－002	SI－006	57	土師器	坏	全体の20%	(12.0)	―			[3.5]	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ（ヨコ）	ヘラミガキ（タテ）	◎			白色粒 黒色粒	にぶい橙色	5YR6/3	にぶい橙色	5YR7/6	暗文
74－003	SI－006	10	土師器	坏	全体の20%	(12.0)	―			3.7	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ	ヘラケズリ、ミガキ（ヨコ）		◎			褐灰色	10YR4/1	にぶい赤褐色	5YR5/4	内面黒色処理
74－004	SI－006	19	土師器	坏	完形	14.2	9.3			4.3	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ(ヨコ)、底部手持ちヘラケズリ	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	赤橙色	10R6/6	にぶい橙色	5YR7/4	歪み大きい
74－005	SI－006	59、61	土師器	坏	全体の20%	(14.2)	―			[4.5]	ナデ、輪積み痕残る	ナデ	◎	◎		黒色粒	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	内外面摩滅
74－006	SI－006	18	土師器	鉢	全体の60%	(11.2)	7.3			8.5	ヘラケズリ(ヨコ)、ナデ（ヨコ）、木葉痕	ナデ　ヘラナデ	△				にぶい橙色	5YR7/6	にぶい橙色	5YR7/6	輪積痕明瞭
74－007	SI－006	2、26、30、49、54、55	土師器	甕	全体の50% 口縁部の40% 胴部の50%	(22.5)	―			[27.8]	ヘラナデ（口縁部近くタテ、胴部中央～下部タテ、ヨコ）	ヘラケズリ(ヨコ)	◎			白色粒	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/4	全体に歪み大きい

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
74－008	SI－006	2、15、16、17、47、48、50、56、60	土師器	甕	口縁部の10% 胴部の50%	(16.2)	——			[8.9]＋[17.2]	ハケ、ナデ(タテ)	ナデ（ヨコ）	◎		◎		灰褐色	7.5YR4/2	にぶい赤褐色	5YR4/3	
75－001	SI－002	8	土師器	坏	全体の25%	(9.8)	——			[3.5]	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ	△	△			橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6～2.5YR6/8	内外面摩滅
75－001	SI－011	2	土師器	甕	口縁部の20%	(22.2)	——			[3.6]	口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ	△			ウンモ	明赤褐色	2.5YR5/6	明赤褐色	2.5YR5/6	
75－002	SI－011	17	土師器	甕	底部の70%	——	(5.4)			[1.7]	ヘラケズリ（タテ）、底部付近ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎				にぶい黄橙色	10YR7/3	灰黄褐色	10YR6/2	
75－003	SI－011	29	その他	手づくね	全体の25%	(8.5)	(7.4)			3.4	ナデ 静止ヘラ切り	ナデ	◎	◎			にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
75－004	SI－011	SI－010－4、SI－011－42、43、44、47	土師器	甕	底部の50%	——	(9.9)			[7.8]	ヘラケズリ（タテ）、ヘラナデ、木葉痕	ナデ、ハケ(ヨコ)	◎			1～3㎜大の小石	橙色	5YR6/6	明褐色	7.5YR5/6	
76－001	SI－010	7	土師器	坏	全体の30%	(10.9)	——			4.1	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色（部分的に黒褐色）	10YR7/4（10YR3/1）	
76－002	SI－010	65	須恵器	高台付坏	底部の20%	——	(9.6)			[2.0]	ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				黄灰色	2.5Y5/1	にぶい褐色 高台うら灰オリーブ色	7.5YR5/35Y6/2	
76－003	SI－010	81	土師器	鉢	口縁部の40% 底部の95%	(15.4)	7.4			10.6	ヘラケズリ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）、底面回転ヘラケズリ	ナデ	△				明赤褐色	5YR5/6	灰褐色	7.5YR4/2	内外面摩滅
76－004	SI－010	85	土師器	甑	底部の25%	(15.6)	——			[10.3]	——	——	◎			1～2㎜大の小石	明赤褐色	5YR5/6	橙色	7.5YR6/6	焼成後の穿孔、内外面溶けて調整不明
76－005	SI－010	109、130	土師器	小型甕	口縁部の25%	(12.9)	——			[5.3]	——	——	◎			1～2㎜大の小石	橙色	2.5YR6/8	にぶい赤褐色	5YR5/3	内外面摩滅
76－006	SI－010	82	土師器	甕	口縁部の25%	(23.5)	——			[6.3]	ヘラナデ(ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ	△			ウンモ	明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい赤褐色～黒褐色	5YR5/4～3/1	
76－007	SI－010	39、45、47、57、85、97、102	土師器	甕	全体の30% 底部の60%	——	9.0			[22.5]	ヘラケズリ（タテ）、ナデ(ヨコ)、木葉痕	ヘラナデ	◎			1㎜大の小石	明赤褐色	5YR5/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	内外面摩滅
77－001	SI－013	1、27、28	土師器	坏	口縁部の25%	(12.4)	——			3.6	底部ヘラケズリ(ヨコ)、ナデ（ヨコ）、手持ちヘラケズリ	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR6/2	底部文様あり
77－002	SI－013	161	土師器	坏	全体の95%	14.6	——			4.4	胴部ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ（ヨコ）	ミガキ	△				にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	
77－003	SI－013	2、45、48、127	土師器	坏	全体の40%	(12.8)	——			6.7	体部ヘラケズリ後ミガキ（ヨコ）、ナデ	ミガキ（ヨコ）	△	△			にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色、一部黒色	10YR6/4、2/1	
77－004	SI－013	10、169	土師器	坏	口縁部の30%	(14.6)	——			3.5	ヘラケズリ（ヨコ)、ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△	△			にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	
77－005	SI－013	107	土師器	坏	全体の25%	(12.3)	——			3.0	体部ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	橙色～褐灰色	2.5YR6/6～5YR4/1	内外面摩滅
77－006	SI－013	62、126、139、141、147、148、149	土師器	甕	全体の40% 口縁部の20% 底部の100%	(14.9)	6.6			28.2	胴部ヘラケズリ(タテ)、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△	△			明赤褐色	5YR5/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	
77－007	SI－013	2、4、51、66、79、130、143、145、150、156	土師器	甑	全体の20%	(20.0)	(7.8)			[21.9]	ヘラケズリ、口縁部ナデ（ヨコ）、ヘラナデ	ヘラナデ	◎	◎			にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
77－008	SI－013	142	土師器	甕	口縁部の25%	(17.0)	——			[7.3]	ヘラケズリ（ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ（ヨコ）	△				灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
78－009	SI－013	1、2、8、21、23、26、38、39、42、57、151	土師器	鉢	全体の50% 口縁部の25% 底部の50%	(22.1)	(6.9)			8.3	ヘラケズリ(ヨコ)後ミガキ、口縁部ナデ（ヨコ）、木葉痕	ヘラナデ	△				灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色～褐灰色	10YR5/2～4/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
78－010	SI－013	115、145、168	土師器	甕	底部の100%	——	6.0			[3.3]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ(ヨコ)、放射状暗文	◎	◎		1～2㎜大の小石	にぶい黄褐色	10YR5/3	灰褐色	7.5YR4/2	
78－011	SI－013	99	土師器	甕	底部の50%	——	(5.8)			[3.5]	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラナデ（ヨコ）	△	△			灰黄褐色	10YR5/2	赤色に赤黒が混じる	10R5/6、10R2/1	
78－012	SI－013	129、137	土師器	甕	全体の15%	(19.4)	——			[11.1]	胴部ヘラケズリ(タテ)、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	◎	◎			にぶい赤褐色	5YR5/4	褐灰色	7.5YR4/1	
78－013	SI－013	2、30、74、152	土師器	壺	底部の20%	——	(7.8)			[12.5]	ヘラケズリ（底部タテ)、ハケ調整後ヘラナデ	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎			にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	5YR6/6	
78－014	SI－013	85	土師器	高坏	脚部の50%	——	——			[4.7]	ヘラケズリ(タテ)	ナデ	△				にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	赤彩
78－015	SI－013	143	土師器	甕	口縁部の25%	(24.0)	——			[7.5]	ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△	△			橙色～黒褐色	7.5YR6/6～3/1	橙色	7.5YR6/6	内外面摩滅
78－001	SI－015	1	土師器	坏	口縁部の25%	(12.8)	——			[3.5]	——	——	△				橙色	2.5YR6/8	橙色	2.5YR6/8	内外面摩滅
78－002	SI－015	1	須恵器	蓋	破片	——	——			[1.9]	ヘラナデ、自然釉が薄くかかる	ナデ	△				灰白色	2.5YR7/1	灰黄色	2.5YR6/2	ロクロ調整
80－001	SI－017	26	土師器	坏	口縁部の20%	(12.1)	——			[3.9]	体部ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ					暗灰色	N3/	にぶい橙色	7.5YR7/4	内面黒色処理
80－002	SI－017	2	土師器	坏	口縁部の20%	(13.8)	——			[3.7]	体部ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ					にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	
80－003	SI－017	25	土師器	坏	口縁部の25%	(16.0)	——			[5.2]	口縁部ナデ（ヨコ)、胴部ハケ後ナデ	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	外面赤彩
80－004	SI－017	17	須恵器	甕	破片	——	——			——	タタキ、ヨコ方向のカキ目	——	△				灰色	N5/	灰色	N5/	
81－001	SI－020	4	土師器	甕	口縁部の20%	(18.9)	——			[6.4]	ハケ、ナデ（タテ口縁部ヨコ）	ナデ（ヨコ)、ハケ目後ナデ(ヨコ)	◎				灰褐色～黒褐色	7.5YR5/2～3/1	にぶい黄橙色	10YR6/3	
81－002	SI－020	4	土師器	甕	底部の30%	——	(7.3)			[1.8]	ナデ	ナデ	△	△			橙色	7.5YR7/6	橙色	5YR6/6	内外面摩滅
81－001	SI－029	2	土師器	甕	底部の25%	——	(6.6)			[2.1]	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラナデ	◎	◎		黒色粒白色粒	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	
82－001	SI－035	1	土師器	高坏	脚接合部の100%	——	——			[3.7]	——	——	△				にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	内外面摩滅
82－002	SI－035	5、19	土師器	坏	口縁部の20%	(14.8)	——			[3.7]	——	——	△				橙色	2.5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR7/4	内外面摩滅
82－003	SI－035	1	土師器	坏	全体の90%	(12.0)	(5.8)			5.7	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△	△			にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	赤彩
82－001	SI－041	1	土師器	高坏	脚裾部の15%	——	(16.6)			[1.9]	脚端部ナデ(ヨコ)	ナデ	◎			黄色粒　石英1～2㎜大の小石	灰褐色	7.5YR5/2	橙色	7.5YR6/6	
82－002	SI－040	4	土師器	甕	口縁部の20%	(12.6)	——			[4.0]	ハケ（タテ)、口縁部ハケ後ナデ	ナデ					にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	
82－003	SI－040	4	土師器	甕	底部の25%	——	(7.4)			[4.0]	ヘラナデ	ナデ	◎		◎		橙色	5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/3	煤付着
82－004	SI－041	1	弥生土器	甕	底部の25%	——	(5.8)			[2.5]	——	——	◎	◎			褐灰色	7.5YR4/1	橙色	7.5YR6/6	内外面摩滅
82－005	SI－041	1	弥生土器	甕	底部の25%	——	(6.4)			[3.4]	ハケ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ　石英	橙色	7.5YR6/6	にぶい赤褐色	5YR5/4	
82－006	SI－041	2	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ黒色粒	橙色～褐灰色	7.5YR6/6～6/1	橙色～褐灰色	7.5YR6/6～6/1	
82－007	SI－041	1	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色、にぶい赤褐色	10YR7/4 2.5YR4/4	赤褐色	2.5YR4/6	赤彩
83－001	SI－059	1、2、6、7、8	土師器	鉢	全体の80% 底部の90%	(17.1)	7.3			8.9	ヘラナデ(ナナメ)	ナデ	◎			2～3㎜大の小石	灰褐色	7.5YR5/2	赤褐色～黒色	10R5/4～7.5YR2/1	
83－002	SI－059	3	土師器	坏	全体の15%	(12.4)	——			3.0	ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△				赤褐色	2.5YR4/6	赤褐色、赤黒色	2.5YR4/6 2.5YR2/1	赤彩

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頚部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
83－003	SI－059	4	土師器	甕	底部の30%	──	(7.0)			[2.1]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△				黒色	7.5YR2/1	褐灰色	5YR4/1	
83－004	SI－059	2	弥生土器	甕	底部の20%	──	(7.2)			[3.1]	ナデ	ヘラナデ	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
83－005	SI－059	10、15	土師器	甕	全体の90%	17.3	8.4			31.0	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	◎				灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
84－001	SI－063	29	土師器	坏	完形	14.5	──			5.7	口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)、ミガキ	△	△			にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	
84－002	SI－063	20	土師器	坏	全体の50%	(15.3)	(7.0)			4.5	──	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面磨滅
84－003	SI－063	20	土師器	坏	全体の50%	12.2	6.0			4.7	ヘラナデ 、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△				灰黄褐色	10YR6/2	にぶい黄橙色	10YR7/3	
84－004	SI－063	20	土師器	坏	口縁部の30%	(13.8)	──			[3.3]	──	ヘラナデ	△				灰黄褐色～黒褐色	10YR6/2～3/1	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/3～5/1	内外面磨滅
84－005	SI－063	28	土師器	鉢	ほぼ完形	16.1	6.2			8.7	ヘラケズリ（底部近くヨコ）、ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			1～2㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
84－006	SI－063	20	土師器	鉢	口縁部の30%	(14.2)	──			[8.8]	ヘラケズリ、ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ミガキ	△				オリーブ黒色	5Y3/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	内面黒色処理
84－007	SI－063	32	土師器	甕	全体の80%	22.6	──			[16.9]	ハケ、ヘラナデ、ナデ（ヨコ）	ヘラナデ、ナデ(ヨコ)	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
84－008	SI－063	1、9、14、27	土師器	壺	口頚部の20% 胴部の30% 底部の20%	──	(6.4)			24.8	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			1～2㎜大の小石	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
84－009	SI－063	3	土師器	甕	口縁部の20%	(17.5)	──			[8.8]	ハケ ナデ(ヨコ)	ヘラナデ（ヨコ）	◎				にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色	10YR5/2	
84－010	SI－063	30、31	土師器	甕	口縁部の70%	(18.0)	──			[2.5]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎				褐灰色～にぶい黄橙色	10YR4/1～7/3	褐灰色～にぶい黄橙色	10YR4/1～6/3	
84－011	SI－063	24	土師器	甑	底部の20%	──	(9.8)			[10.5]	ハケ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
84－012	SI－063	30	土師器	甕	全体の90% 口縁部の90% 胴部の90%	16.0	──			[28.2]	ハケ ナデ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	──					にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	内外面磨滅
85－001	SI－064	1	土師器	坏	全体の10%	(13.8)	──			[3.7]	ヘラケズリ ナデ	ヘラナデ	△	△			黒色	2.5Y2/1	浅黄色	2.5Y7/3	内外面磨滅
85－002	SI－064	1	土師器	甕	底部の25%	──	(8.6)			[4.0]	木葉痕	ヘラナデ（ヨコ）	◎			黄色粒 2～5㎜大の小石	褐灰色	10YR4/1	灰褐色	7.5YR5/2	外面磨滅
85－003	SI－064	8	土師器	甕	口縁部の25%	(13.4)	──			[6.1]	ヘラナデ（口縁付近ヨコ、胴部タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				灰黄褐色	10YR4/2	灰褐色	7.5YR5/2	
85－004	SI－064	1	土師器	甕	底部の40%	──	(6.4)			[2.1]	──	──	◎			石英 白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	橙色	7.5YR7/6	内外面磨滅
85－005	SI－064	1	土師器	甕	底部の40%	──	(6.4)			[3.5]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ	灰黄色	2.5Y6/2	黒褐色	2.5Y3/1	
85－006	SI－064	1	須恵器	壺	破片	──	──			[2.8]	ナデ（櫛目）	ヘラナデ	△				灰色	10Y5/1～4/1	灰色	7.5Y6/1～5/1	ロクロ調整
87－001	SI－065	66	土師器	坏	全体の70%	14.8	──			4.9	──	ナデ（ヨコ）	△				橙色	5YR6/6	にぶい黄橙色、灰色	10YR6/4 5YR4/1	外面磨滅、黒色処理？
87－002	SI－065	52	土師器	坏	全体の90%	13	──			5.3	ヘラケズリ(ヨコ)	ナデ（ヨコ）	△				灰黄褐色	10YR6/2	浅黄橙色	10YR8/4	
87－003	SI－065	69	土師器	坏	全体の70%	14.2	──			4.5	ヘラケズリ(ヨコ)後ナデ、口縁部ナデ	ナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR5/2	黒斑？
87－004	SI－065	2	土師器	坏	全体の20%	11.4	──			3.8	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	外面磨滅
87－005	SI－065	2、29、39、40	土師器	坏	全体の50%	15.2	──			4.7	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色、暗灰色	10YR7/2 N3/	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
87－006	SI－065	61	土師器	坏	ほぼ完形	11.6	——			5.0	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ミガキ（タテ）、ナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色～黒色	10YR7/3～2.5Y2/1	
87－007	SI－065	47、50	土師器	坏	全体の70%	12.5	——			4.6	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ミガキ？ナデ（ヨコ）	△				灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
87－008	SI－065	1、59	土師器	坏	全体の80%	11.6	——			4.0	ヘラナデ（ヨコ）	下部ヘラナデ（ヨコ）上部雑なミガキ	△				橙色	7.5YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒斑？
87－009	SI－065	60	土師器	坏	完形	13.6	——			5.2	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ミガキ（ヨコ）、ナデ（ヨコ）	△				灰黄褐色	10YR5/2	黒色	10YR2/1	輪積痕残る
87－010	SI－065	1、59、68	土師器	坏	全体の90%	13.0	——			4.5	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				黒色	10YR2/1	黒色～にぶい黄橙色	10YR2/1～6/4	黒色処理
87－011	SI－065	35	土師器	坏	全体の30%	12.2	——			4.6	ヘラケズリ(ヨコ)後ナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	浅黄橙色	10YR8/4	
87－012	SI－065	58	土師器	坏	完形	10.6	——			4.4	ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（指）？、ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
87－013	SI－065	1、49	土師器	坏	全体の95%	12.4	——			4.6	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）、ヘラナデ	ナデ（ヨコ）	△				明灰黄色	2.5Y5/2	褐灰色～にぶい黄橙色	10YR5/1～7/3	
87－014	SI－065	30	土師器	坏	全体の80%	11.2	——			5	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
87－015	SI－065	14	土師器	坏	全体の40%	——	——			[3.1]	ヘラケズリ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色、褐灰色	10YR7/4 10YR5/1	
87－016	SI－065	2	土師器	坏	全体の20%	12.4	——			[3.6]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				橙色	7.5YR6/6	にぶい橙色、灰黄色	5YR6/4 2.5Y7/2	外面摩滅
87－017	SI－065	1、2、36、47	土師器	坏	全体の90%	11.2	——			4.4	ナデ（ヨコ）、接合痕、輪積痕	ミガキ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	
87－018	SI－065	1	土師器	坏	全体の20%	14.4	——			[4]	ヘラケズリ（ヨコ） ヘラナデ(ヨコ） 口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色、灰色	10YR6/2 N4/	黒斑？
87－019	SI－065	1	土師器	坏	全体の45%	13.4	——			[3.8]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色、黒色	10YR6/2 N2/	外面黒色処理？
87－020	SI－065	43	土師器	坏	全体の45%	13.8	——			[4.2]	口縁部ナデ（ヨコ）、ケズリ後ナデ	丁寧なナデ	△				黄灰色	2.5Y4/1	にぶい黄橙色、暗灰色	10YR7/3 N3/	外面黒斑？
87－021	SI－065	2	土師器	坏	全体の30%	11.4	——			[4]	ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色、褐灰色	10YR7/2 10YR5/1	
87－022	SI－065	17	土師器	坏	全体の30%	14.6	——			[5.4]	ヘラケズリ後ナデ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				黒褐色	2.5Y3/1	黄灰色	2.5Y4/1	黒色処理
87－023	SI－065	1、2、40	土師器	坏	全体の50%	14	——			[4.2]	ヘラナデ(ヨコ)、接合痕あり	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	浅黄橙色	10YR8/4	
87－024	SI－065	11	土師器	坏	全体の60%	——	——			[3.8]	ヘラケズリ後ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR7/6	
87－025	SI－065	2	土師器	高坏	全体の25%	14.4	——			[3.45]	——	——	△	△			橙色	7.5YR7/6	橙色	5YR6/6	内外面摩滅
87－026	SI－065	2	土師器	鉢	全体の20%	12	——			[6.2]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい橙色	7.5YR6/4	浅黄橙色、一部褐色	10YR8/4 7.5YR4/4	内外面赤彩 外面摩滅
87－027	SI－065	2	土師器	鉢	全体の25%	8.8	——			[3.85]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				黒色	N2/	にぶい黄橙色	10YR7/3	内面黒色処理？

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、〔〕は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
87－028	SI－065	3	土師器	坏	全体の20%	11.6	——			〔3.25〕	体部ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△	△			灰黄褐色	10YR6/2	にぶい橙色	7.5YR7/4	黒色処理？
87－029	SI－065	2	土師器	高坏	脚接合部の100%	——	——			〔3.3〕	ナデ	ヘラナデ	◎			1㎜大の小石	橙色	5YR6/8	橙色	7.5YR6/6	
87－030	SI－065	1、2、42	土師器	鉢	全体の50%	11.6	——			〔5.8〕	——	——	△				にぶい橙色	2.5YR6/4	にぶい橙色	5YR6/4	内外面摩滅
87－031	SI－065	1、15、22	土師器	鉢	全体の50%	17.2	7			7.35	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△		△		橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
87－032	SI－065	34	土師器	鉢	全体の70%	21.9	6.7			12.7	ヘラナデ ハケ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎				灰黄褐色～黒褐色	10YR5/2～3/1	灰黄褐色～黒褐色	10YR5/2～3/1	外面摩滅
87－033	SI－065	21	土師器	鉢	全体の20%	17	——			〔3.5〕	ヘラケズリ後ナデ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△		△	ウンモ	橙色	7.5YR6/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	
87－034	SI－065	57	土師器	鉢	全体の70%	——	6			〔9.1〕	ヘラケズリ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			1㎜大の小石	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄褐色	10YR5/3	
87－035	SI－065	71	土師器	甕	口縁部の30%	26.1	——			〔12.6〕	ハケ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ 1㎜大の小石	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
87－036	SI－065	65	土師器	甕	完形	15.3	6.0			21.8	ハケ（タテ）、ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）、底部ハケ後ヘラナデ、木葉痕	ヘラナデ、ナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
88－037	SI－065	63	土師器	甕	全体の60%	(22.1)	8.6			31.6	ヘラケズリ（胴部中央タテ）、ハケ（頚部～胴部ヨコ）、ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△				灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
88－038	SI－065	1、2、26、32	土師器	甕	口縁部の30% 胴部の一部	(16.2)	——			〔19〕	ハケ（頚部付近ヨコ、胴部タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△			白色粒 1～2㎜大の小石	にぶい黄褐色	10YR5/4	橙色～褐灰色	10YR6/6～10YR6/1	
88－039	SI－065	25	土師器	甕	底部100%	——	7.4			〔8〕	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ（ヨコ） 木葉痕	ヘラナデ（ヨコ）	◎			1.5㎜大の小石	橙色	7.5YR6/6	黄橙色	7.5YR7/8	
88－040	SI－065	2、38	土師器	甕	口縁部の25%	(16.1)	——			〔7.6〕	ハケ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ	褐灰色	10YR4/1	橙色	7.5YR7/6	
88－041	SI－065	61	土師器	甕	底部の60%	——	(8.4)			〔2.4〕	ヘラケズリ（ヨコ）、木葉痕	ヘラナデ（ヨコ）	△			1㎜大の小石	橙色	7.5YR7/6	橙色	2.5YR6/6	
88－042	SI－065	2	土師器	甕	底部の30%	——	(8)			〔2.6〕	ヘラケズリ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（タテ）	△				黄灰色	2.5Y4/1	暗灰黄色、暗灰色	2.5Y5/2 N3/	
88－043	SI－065	2	土師器	甕	底部の20%	——	(7.8)			〔3.2〕	ヘラケズリ（タテ）、ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△	△		1㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	
88－044	SI－065	1、4	土師器	甕	底部100%	——	7			〔13.05〕	ヘラケズリ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			1㎜大の小石	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
88－045	SI－065	20	土師器	甕	底部の45%	——	(9.8)			〔2.7〕	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ？	◎			1.5㎜大の小石	褐灰色	10YR5/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	
88－046	SI－065	2	土師器	甕	底部の70%	——	(7)			〔2.2〕	ヘラケズリ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ	暗灰色	N3/	にぶい黄橙色	10YR6/3	
88－047	SI－065	1、23、31、46、53、56	土師器	甑	全体の70%	25.1	9.5			24.3	ハケ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎	◎		1～3㎜大の小石	黒色	2.5Y2/1	浅黄色～黒褐色	2.5Y7/3～3/1	
88－048	SI－065	70	土師器	甑	口縁部の45% 胴部の40%	(30.8)	——			19.8	胴上部ハケ（タテ）、胴下部ヘラナデ（タテ）、口縁部ナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）、ハケ（ヨコ）	△				にぶい黄色～黒褐色	2.5Y6/3～3/1	にぶい褐色	7.5YR5/4	黒色処理？
88－049	SI－065	62	土師器	甑	全体の85%	25.7	8.4			21.4	ハケ（頚部ヨコ、胴部タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎			にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
88－050	SI－065	1	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	明黄褐色	10YR7/6	赤彩
88－051	SI－065	65	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	△			石英	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	橙色	7.5YR7/6	赤彩
88－052	SI－065	1	弥生土器	甕	破片	――	――			――	――	――	△			石英	黄橙色	7.5YR7/8	灰黄色	2.5Y7/2	
88－053	SI－065	2	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	
88－054	SI－065	2	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	明赤褐色、にぶい黄橙色	2.5YR5/6 10YR6/3	赤彩
88－055	SI－065	4	弥生土器	壺	破片	――	――			――	――	――	△				橙色	7.5YR7/6	赤褐色、橙色	2.5YR4/6 7.5YR7/6	赤彩
89－001	SI－068	33、40	土師器	坏	底部の90%	――	――			[3.8]	ヘラケズリ	ナデ（ヨコ）	△				灰赤色	2.5YR6/2	にぶい橙色	2.5YR6/3	内外面摩滅
89－002	SI－068	34	土師器	坏	ほぼ完形	12.6	――			4.5	ヘラケズリ(ヨコ) 口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ（ヨコ） ヘラナデ	△			ウンモ　1～5㎜大の小石	浅黄橙色	7.5YR8/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩　遺物№34の甕に入っていた
89－003	SI－068	3	土師器	坏	ほぼ完形	14	――			4.9	ナデ（ヨコ）、不明	ナデ（ヨコ）	△				明黄褐色	10YR7/6	浅黄橙色	7.5YR8/6	内外面赤彩　煤付着
89－004	SI－068	16	土師器	坏	全体の60%	(12.6)	――			3.6	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ（ヨコ）	△	△			にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩
89－005	SI－068	1、44、 (V11－61－2)	土師器	坏	口縁部の20%	(11.6)	――			[4.3]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ	△				橙色	7.5YR7/6	明黄褐色	10YR7/6	内外面摩滅
89－006	SI－068	1、41、44、 (V11－61－2)	土師器	坏	全体の60%	(15.0)	――			[4.4]	ナデ、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ 白色粒	明黄褐色	10YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩 外面摩滅
89－007	SI－068	42	土師器	鉢	全体の45%	(16.7)	11.5			[7.4]	ナデ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			1～2㎜大の小石	にぶい黄褐色	10YR5/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	煤付着
89－008	SI－068	34	土師器	甕	完形	18.8	7.0			16.7	ヘラケズリ（タテ）、ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	遺物№34の坏が入っていた
90－009	SI－068	11	土師器	甕	口縁部の5%	(16.8)	――			[10.8]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			1～2㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色、明赤褐色	10YR7/3 2.5YR5/6	黒班
90－010	SI－068	24	土師器	甕	底部の80%	――	(8)			[6.7]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△			1㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰色	5Y5/1	
90－011	SI－068	9	土師器	甕	口縁部の35%	(28.4)	――			[7.0]	ヘラナデ(タテ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	黒班
90－012	SI－068	1、4、9、18、20	土師器	甕	底部100%	――	(6.2)			[6.6]	ヘラナデ（タテ） 焼成後穿孔、指頭圧痕	ヘラナデ（タテ）	△				褐灰色	10YR4/1	橙色、褐灰色	5YR6/6 7.5YR5/1	
90－013	SI－068	17	土師器	甕	口縁部の35%	(18.1)	――			[6.7]	ヘラナデ(タテ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ（ヨコ）	◎			1～2㎜大の小石	灰黄褐色、橙色	10YR6/2 5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR6/3	
90－014	SI－068	19、 22(SI－082－21)	土師器	甕	底部の15%	――	(9.1)			[13]	ヘラナデ(ナナメ)	ヘラナデ（ヨコ）	△			1～2㎜大の小石	橙色～褐灰色	7.5YR6/6～ 10YR4/1	橙色	7.5YR6/6	
90－015	SI－068	2、37、44	土師器	甑	底部の100% 胴部の25%	――	8.0			[19.3]	ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ） ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		黄色粒	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	
90－001	SI－069	1	土師器	坏	全体の35%	(15)	――			[4.1]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色	10YR6/2	
91－001	SI－070	4	弥生土器	壺	底部の90%	――	(8.1)			[4.8]	――	――	△				橙色	5YR6/6	明赤褐色	5YR5/6	内外面摩滅
91－002	SI－070	8	土師器	甕	口縁～肩部の25%	(17.4)	――			[11.0]	ハケ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	
91－003	SI－070	1、9	土師器	甕	胴部の10%	――	――			[13.7]	ハケ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				褐灰色	10YR4/1	灰黄褐色～黒褐色	10YR4/2～3/1	外面摩滅
91－004	SI－070	6	土師器	小型壺	底部の90%	――	5			[4.8]	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ(ヨコ)、ヘラナデ	ミガキ　ヘラナデ	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	褐灰色	10YR4/1	
91－005	SI－070	1	須恵器	坏	破片	――	――			[3.2]	――	――	△				灰色	7.5Y5/1	灰色	7.5Y5/1	ロクロ調整

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
91－001	SI－077	1	須恵器	坏	口縁部の10%	(13.1)	——			［2.6］	回転ケズリ	回転ナデ	△			白色粒	灰色	7.5Y5/1	灰色	7.5Y5/1	ロクロ調整
91－002	SI－077	3	須恵器	坏	口縁部の15%	(11.6)	——			［3.1］	回転ケズリ	回転ナデ	△				灰白色	7.5Y7/1	灰白色	7.5Y7/1	ロクロ調整
91－003	SI－077	10	土師器	坏	ほぼ完形	9.8	——			3.1	ヘラケズリ後ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色～橙色	10YR7/4～2.5YR6/6	
91－004	SI－077	8	土師器	坏	完形	11.9	——			5.0	ヘラナデ(ヨコ)、輪積痕	ヘラナデ	△				浅黄橙色～灰黄褐色	10YR8/4～4/2	浅黄橙色～黒色	10YR8/4～2/1	
91－005	SI－077	2	土師器	坏	全体の45%	(14.6)	——			4.0	口縁部ナデ(ヨコ)	——	△	△			橙色～黒褐色	7.5YR6/6～3/1	にぶい褐色～黒褐色	7.5YR5/3～3/1	内外面摩滅
91－006	SI－077	1、2、3	土師器	坏	全体の40%	(12.0)	——			3.7	ヘラケズリ(ヨコ)	ナデ	△	△			明黄褐色	10YR7/6	明黄褐色	10YR7/6	ロクロ調整
91－007	SI－077	3	土師器	坏	全体の25%	(15.8)	——			［4.5］	ヘラナデ(ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	口縁部ナデ(ヨコ)	◎	◎			にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
91－008	SI－077	7	土師器	高坏	脚部の100%坏部の30%	(10.8)	9.4			6.6	ヘラナデ（脚部タテ）、底部、口縁ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎	◎			橙色	7.5YR7/6	橙色～暗灰黄色	7.5YR7/6～2.5Y5/2	
91－009	SI－077	5	土師器	高坏	全体の25%	(13.3)	——			［5.6］	ヘラナデ（ヨコ）	——	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩内外面摩滅
91－010	SI－077	9	土師器	高坏	脚部の30%	——	(10.7)			［5.3］	ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	△	△			にぶい黄橙色	10YR7/4	褐灰色	10YR5/1	
91－011	SI－077	1	須恵器	短頸壺	肩部の25%	——	——			［3.2］	回転ナデ	回転ナデ	◎			白色粒	灰色	7.5Y5/1	灰色～灰白色	7.5Y5/1～7/2	ロクロ調整
91－012	SI－077	2	須恵器	壺	底部の20%	——	——			［3.5］	回転ヘラケズリ	回転ナデ	△				青灰色	5B5/1	緑黒色	5G2/1	ロクロ調整
91－013	SI－077	1、2	土師器	小型甕	口縁部の10%	(12.8)	——			［6.1］	ヘラケズリ（ヨコ）、ヘラナデ（頸部付近タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい赤褐色～褐灰色	2.5YR4/4～7.5YR4/1	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/4～4/1	赤彩
91－014	SI－077	2、4	土師器	小型壺	底部の90%	——	5.8			［6.3］	ヘラナデ(ヨコ)、木葉痕	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色（一部黒色）	10YR7/4（10YR2/1）	黒斑
91－015	SI－077	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	5YR6/6	
91－016	SI－077	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△		△	ウンモ	黄灰色	2.5Y4/1	灰黄褐色	10YR5/2	
92－001	SI－078	2	土師器	甕	全体の95%	18.6	6.8			29.3	ヘラケズリ（底部ヨコ）、ハケ、ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎			1㎜大の小石	明灰黄色	2.5Y5/2	にぶい黄褐色～黒褐色	10YR5/3～3/2	
92－002	SI－078	1	土師器	甕	完形	18.5	6.8			28.5	底部ヘラケズリ、ハケ（ヨコ～ナナメ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎			灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色～黒褐色	10YR5/2～3/1	
92－003	SI－078	12	須恵器	壺	破片	——	——			［3.8］	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				黄灰色	2.5Y5/1	緑灰色	10GY6/1	
93－001	SI－075	SI－082－27、30、91、144 SI－075－10	土師器	甕	全体の80%	17.7	7.6			29.8	ヘラナデ（胴部タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ、ナデ(ヨコ)	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色	10YR5/2	
93－002	SI－075	10、SI－082－144	土師器	甕	全体の80%	17.8	5.0			29.3	ヘラナデ（胴部タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）、木葉痕	ヘラナデ、ナデ(ヨコ)	◎	◎			にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/3～5/1	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/3～5/1	
93－003	SI－075	1	須恵器	蓋	口縁部の10%	(14.0)	——			［4.1］	回転ナデ	回転ナデ	△				にぶい橙色	5YR6/3	にぶい橙色	5YR6/3	ロクロ調整
93－004	SI－075	11、SI－082－125	土師器	坏	ほぼ完形	12.9	——			3.8	ヘラケズリ（ヨコ）、ヘラナデ、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ	△	△			黒色	N2/	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/2～4/1	黒色処理
93－005	SI－075	1	土師器	甕	底部の30%	——	(7.2)			［1.1］	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎			白色粒 1㎜大の小石	暗赤灰色	2.5YR3/1	暗赤灰色	2.5YR3/1	
93－006	SI－075	1、2、SI－082－67、147	土師器	甕	底部100% 胴部の30%	——	(6)			［9.4］	ミガキ（タテ）	ナデ、ヘラナデ	△			白色粒 1㎜大の小石	にぶい黄褐色	10YR5/3	褐色、明黄褐色	7.5YR4/3 2.5YR6/6	上欄の遺物3と同一個体

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
93－006	SI－075	2、11、SI－082－144	土師器	甕	胴部の40%	―	―			［19.3］	ミガキ（タテ）	ヘラナデ（胴中央ヨコ、底部近くタテ）	△			白色粒 1㎜大の小石	灰黄色	10YR6/2	灰黄色	10YR6/2	下欄の遺物4と同一個体
94－007	SI－082	77、78、102、125	須恵器	蓋	ほぼ完形	14.2	―			4.1	ナデ（ヨコ）	回転ナデ	△			白色粒	青灰色	5PB5/1	青灰色	5B5/1	窯記号「×」ロクロ調整
94－008	SI－082	78	須恵器	蓋	全体の25%	(14.0)	―			4.0	回転ヘラ切り	回転ナデ	△			白色粒	青灰色	10BG6/1	青灰色	10BG6/1	ロクロ調整
94－009	SI－082	99	須恵器	蓋	全体の15%	(14)	―			［2.6］	ヘラケズリ	回転ナデ	△			白色粒	青灰色	5B5/1	青灰色	5B5/1	ロクロ調整
94－010	SI－082	78	須恵器	蓋	口縁部の25%	(15.0)	―			［2.9］	―	―	△				灰色	7.5Y5/1	灰色	7.5Y4/1	ロクロ調整
94－011	SI－082	125、62	須恵器	坏	全体の15%	(13.2)	―			［3.1］	回転ヘラ切り	回転ナデ	△			白色粒	灰色	7.5Y5/1	灰色	N5/	ロクロ調整
94－012	SI－082	106	須恵器	坏	全体の25%	(13.4)	―			［3.7］	回転ヘラ切り	回転ナデ	△			白色粒 2㎜大の小石	オリーブ灰色	2.5GY6/1	灰色	N5/	ロクロ調整
94－013	SI－082	6、14	土師器	坏	全体の25%	(17.6)	―			4.3	―	―	△				橙色	7.5YR7/6	橙色～灰色	7.5YR7/6～N4/	黒斑？ 内外面摩滅
94－014	SI－082	17、103、104	土師器	坏	全体の85%	12.4	―			4.5	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	外面赤彩
94－015	SI－082	123	土師器	坏	全体の70%	14.2	―			4.6	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△			ウンモ 1.5㎜大の小石	浅黄橙色	10YR8/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	
94－016	SI－082	114、115	土師器	坏	全体の55%	(12.2)	―			4.1	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				浅黄橙色	7.5YR8/6	浅黄橙色	10YR8/4	内面煤付着？
94－017	SI－082	116	土師器	坏	全体の80%	10.4	―			3.7	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△		△		橙色	7.5YR7/6	にぶい橙色～橙色	7.5YR7/4～2.5YR6/6	内外面赤彩
94－018	SI－082	105	土師器	坏	全体の40%	(13)	―			3.8	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△		△		灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR5/2	
94－019	SI－082	108	土師器	坏	全体の50%	(11.6)	―			4.5	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ヘラナデ（ヨコ）	△				橙色	7.5YR7/6	浅黄橙色～赤褐色	10YR8/4～2.5YR4/6	赤彩
94－020	SI－082	45	土師器	坏	全体の50%	(13)	―			3.9	ヘラケズリ（ヨコ）後ナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△				浅黄橙色	7.5YR8/6	黄褐色	2.5Y5/3	
94－021	SI－082	1、22、144	土師器	坏	全体の30%	(14)	―			［6.0］	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				橙色	7.5YR7/6	にぶい黄橙色	10YR6/3	
94－022	SI－082	89	土師器	坏	全体の20%	(14)	―			［3.6］	胴部ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△				明赤褐色	2.5YR5/6	橙色～明赤褐色	5YR6/6～2.5YR5/6	赤彩
94－023	SI－082	42	土師器	坏	全体の20%	(11.2)	―			［3.2］	ヘラナデ（ヨコ）	ミガキ（ヨコ）	△				黒色	N2/	暗灰色	N3/	黒色処理
94－024	SI－082	92、143	土師器	坏	全体の30%	(14.8)	―			［4.45］	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色～明赤褐色	10YR7/4～2.5YR5/6	明赤褐色	2.5YR5/6	赤彩
94－025	SI－082	141	土師器	坏	口縁部の20%	(13.7)	―			［4］	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒色処理
94－026	SI－082	114、115	土師器	坏	全体の30%	(13.2)	―			［3.7］	口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
94－027	SI－082	1、9、144	土師器	坏	全体の25%	(14)	―			［3.9］	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			1㎜大の小石	赤褐色	2.5YR4/8	明赤褐色	2.5YR5/6	赤彩
94－028	SI－082	81	土師器	坏	全体の20%	(16)	―			［3.5］	ヘラケズリ（ヨコ）後口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△		黒色～にぶい橙色	7.5YR2/1～7.5YR7/4	黒色～にぶい橙色	N2/～7.5YR6/4	黒色処理
94－029	SI－082	69	土師器	坏	全体の15%	(11)	―			［3.1］	胴部ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△				黒色	N2/	黒色	N1.5/	黒色処理

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
94－030	SI－082	71	土師器	坏	口縁部の20%	(13.2)	——			[4.3]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ミガキ、ケズリ	△	△			にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	内外面摩滅
94－031	SI－082	123	土師器	坏	全体の10%	(11.6)	——			[3.75]	ヘラケズリ　、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△		にぶい赤褐色～にぶい橙色	2.5YR4/4～7.5YR6/4	赤褐色	2.5YR4/6	赤彩
94－032	SI－082	85	土師器	坏	全体の15%	(13)	——			[3.15]	ヘラケズリ、口縁部ナデ（ヨコ）	——	△	△			橙色	7.5YR7/6	明赤褐色	5YR5/6	赤彩　外面一部剥離　内面摩滅
94－033	SI－082	109	土師器	坏	全体の30%	(13.8)	——			[4.1]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）ヘラナデ	△				にぶい褐色	7.5YR5/3	浅黄橙色	10YR8/4	赤彩
94－034	SI－082	86、87、123、144、SI－075－2	土師器	鉢	全体の80%	12.6	5.3			6.9	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）、指頭圧痕	ナデ（ヨコ）	△			1㎜大の小石	にぶい黄橙色～暗灰色	10YR6/4～N3/	にぶい黄橙色～暗灰色	10YR6/4～N3/	
94－035	SI－082	121	土師器	坏	ほぼ完形	12	——			5.65	ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△		△		黄橙色	7.5YR7/8	橙色	7.5YR7/6	
94－036	SI－082	32	その他	手づくね	全体の55%	(6.8)	——			3	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（指）、指頭圧痕	△				にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
94－037	SI－082	35、82、83、90、94、120	土師器	高坏	全体の90%	(15.9)	14			10.2	脚部ヘラケズリ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
94－038	SI－082	16、120	土師器	高坏	全体の50%	(15)	——			10.5	脚部ヘラケズリ（タテ、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい赤褐色	2.5YR4/4	にぶい赤褐色	2.5YR4/4	赤彩
94－039	SI－082	122、125	土師器	壺	全体の60%	——	(8.7)			[25.6]	底部ヘラケズリ（ヨコ）、摩滅	ヘラナデ（ヨコ）	△	△		ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	明黄褐色	10YR6/6	
94－040	SI－082	145	土師器	甕	口縁部の40%胴部の40%	(17.1)	——			[25.6]	ヘラケズリ（タテ）、口縁部ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ　石英1㎜大の小石	明灰黄色～黒褐色	2.5Y4/2～2.5YR3/2	にぶい黄橙色～明灰褐色	10YR6/4～10YR5/2	
95－041	SI－082	52	土師器	甕	口縁部の25%	(17.7)	——			[13.5]	胴部ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	——	◎			1㎜大の小石	橙色	7.5YR7/6	橙色～橙色	5YR6/6～2.5YR6/6	内外面摩滅
95－042	SI－082	61、124、SI－075－1	土師器	甕	口縁部の20%	(30.6)	——			[7.6]	口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ（ヨコ）	◎			2㎜大の小石	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	7.5YR6/6	外面摩滅
95－043	SI－082	112	土師器	甕	口縁部の30%	(18.8)	——			[11.5]	ヘラケズリ(タテ)	ヘラナデ（ヨコ）	△			1㎜大の小石	黒色	N1.5/	にぶい黄橙色	10YR7/3	
95－044	SI－082	48	土師器	甕	全体の45%	27	——			[20]	ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			2㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄褐色	10YR5/3	外面摩滅
95－045	SI－082	68、75、76、82	土師器	甕	胴部の50%底部の90%	——	6.4			[23.1]	ヘラケズリ（タテ）、ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ1㎜大の小石	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	
95－046	SI－082	53、74、125	土師器	甕	胴部の15%	——	——			[10.5]	ヘラケズリ（タテ）、輪積痕	ヘラナデ（ヨコ）	◎			石英1㎜大の小石	灰黄褐色	10YR4/2	橙色	5YR6/6	
95－047	SI－082	79	土師器	甕	底部100%	——	6			[2.7]	ヘラケズリ(タテ)	指ナデ	△				黄灰色	2.5Y4/1	明灰黄色	2.5Y5/2	
95－048	SI－082	40	土師器	甕	底部の90%	——	6			[2]	ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△			1㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR7/3	橙色	5YR6/6	
95－049	SI－082	20、101	土師器	甕	底部の70%	——	7.4			[5.1]	ヘラケズリ（タテ）、木葉痕	ヘラナデ（タテ）	△			1㎜大の小石	にぶい橙色	7.5YR6/4	褐灰色	10YR4/1	
95－050	SI－082	19	土師器	甕	底部100%	——	8.4			[2.4]	ヘラケズリ（タテ）、木葉痕	ヘラナデ	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	浅黄橙色	7.5YR8/4	
95－051	SI－082	111	土師器	甕	底部の80%	——	7			[15.9]	ヘラケズリ(タテ)	ヘラナデ（ヨコ）	◎			石英1.5㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
95－052	SI－082	95、96	土師器	甑	底部の25%	——	8.0			[8.0]	ヘラナデ（タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			1.5㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
95－053	SI－082	1	土師器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ　石英	黄橙色	7.5YR7/8	明黄褐色～浅黄色	10YR6/6～2.5YR7/3	
96－001	SI－079	8	土師器	甕	口縁部の40%	(17.7)	——			[13.3]	ヘラケズリ（胴部ナナメ）、ヘラナデ（ヨコ）	ヘラナデ(ヨコ)、指頭圧痕	△				灰赤色	2.5YR5/2	にぶい黄橙色、明灰黄色	10YR7/4 2.5YR5/2	
96－002	SI－079	4	土師器	壺	底部の25%	——	(6.2)			[2.7]	ヘラナデ？	ヘラナデ？	△			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	混入品

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
96－003	SI－079	4	土師器	壺	底部の45%	——	(5.9)			[1.7]	ヘラナデ	ヘラナデ、ケズリ	△			ウンモ	灰黄褐色	10YR4/2	橙色	2.5YR6/6	混入品
96－004	SI－079	4	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ　石英	にぶい黄褐色	10YR5/3	灰黄褐色	10YR4/2	
96－001	SI－081	1	須恵器	坏	全体の35%	(11.2)	——			[3.9]	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	△			白色粒 1㎜大の小石	暗緑灰色	5G4/1	暗緑灰色	5G4/1	ロクロ調整
96－002	SI－081	1	土師器	坏	体部の10%	——	——			[2.3]	ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	赤灰色	2.5YR4/1	赤彩
96－003	SI－081	1	土師器	甕	口縁部の5%	(18.4)	——			[7.1]	ヘラナデ(タテ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ	△			1㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	
96－004	SI－081	1	土師器	甕	口縁部の30%	(16.4)	——			[2.8]	ヘラケズリ(ヨコ)	——	△			1～2㎜大の小石	明黄褐色	10YR6/6	橙色	7.5YR6/6	内外面摩滅
96－005	SI－081	1	土師器	甕	底部の20%	——	(7.6)			[2.5]	ヘラナデ（タテ）	——	△			1㎜大の小石	オリーブ黒色	5Y3/1	橙色	2.5YR6/6	内面摩滅
97－001	SK－009	10	土師器	坏	口縁部の10%	(10.3)	——			[3.0]	ヘラケズリ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ				褐色粒	灰黄色	2.5Y6/2	浅黄色	2.5Y7/3	
97－002	SK－009	9	土師器	甕	口縁部の20%	(14.2)	——			[5.9]	ハケ、ナデ(タテ、ヨコ)	ヘラナデ（タテ、ヨコ）	◎			褐色粒	橙色～灰褐色	7.5YR6/8～5/2	橙色	7.5YR6/6	
97－003	SK－009	9	土師器	高坏	脚部の25%	——	——			[4.9]	ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
97－004	SK－009	2、5、9、12、13	土師器	甕	胴部の15%	——	——			[12.6]	ハケ、ナデ(タテ)	ヘラナデ（タテ）	△			褐色粒	橙色～にぶい黄橙色	5YR6/8～10YR6/3	褐灰色	7.5YR4/1	
97－001	SK－018	1	土師器	高坏	脚部の15%	——	(8.0)			[1.8]	ヘラケズリ(ヨコ)	ナデ					オリーブ黒色	10Y3/1	オリーブ黒色	10Y3/1	内面煤付着
97－001	SK－025	1	土師器	甕	底部の100%	——	9.6			[16.4]	ヘラケズリ（タテ）、ナデ（タテ）木葉痕	ナデ（ヨコ）　ヘラナデ	◎	◎			にぶい褐色～灰色	7.5YR5/4～7.5Y4/1	にぶい橙色～灰褐色	7.5YR7/4～7.5YR5/2	
98－001	SK－026	64	土師器	坏	完形	11.0	——			3.5	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
98－002	SK－026	51	土師器	坏	全体の80%	10.8	——			3.5	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△		橙色	2.5YR6/6	浅黄橙色	7.5YR8/6	外面赤彩
98－003	SK－026	45	土師器	坏	全体の40%	(12.8)	——			3.9	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	△		△		橙色	5YR7/6	にぶい黄橙色	10YR6/4	
98－004	SK－026	51、56	土師器	坏	全体の９０%	12.6	——			4.0	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△	ウンモ	橙色	2.5YR6/6	にぶい橙色	2.5YR6/4	赤彩
98－005	SK－026	57、68、70	土師器	坏	全体の30%	(12.0)	——			[3.5]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△		橙色	2.5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR7/4	
98－006	SK－026	54	土師器	坏	全体の70%	13.0	——			4.7	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△	ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
98－007	SK－026	18	土師器	坏	全体の90%	13.0	——			3.3	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△		橙色	7.5YR7/6	にぶい橙色～黄灰色	7.5YR7/4～2.5Y4/1	
98－008	SK－026	57、62	土師器	坏	全体の70%	16.8	——			5.1	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ	△		△		橙色	7.5YR7/6	にぶい橙色	7.5YR7/4	
98－009	SK－026	44、46	土師器	小型甕	口縁部の20%	(14.8)	——			[8.2]	ハケ、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎	◎			灰褐色	7.5YR5/2	褐灰色～橙色	7.5YR6/1～7.5YR7/6	
98－010	SK－026	8、60、64	土師器	小型甕	全体の80%	16.0	6.0			12.5	ヘラケズリ（ナナメ～タテ）、ハケ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）、木葉痕	——	◎			白色粒 小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色～灰色	7.5YR6/4～7.5Y4/1	内面摩滅
98－011	SK－026	13、23	土師器	甕	口縁部の30%	(17.8)	——			[18.4]	ハケ　ナデ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（タテ）	◎	◎			にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色～褐灰色	2.5YR6/4～7.5YR5/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頚部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
98－012	SK－026	61、67	土師器	甕	口縁部の20%	(21.6)	――			[15.0]	ハケ、ナデ(ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ	◎	◎			にぶい橙色～にぶい褐色	7.5YR7/4～7.5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	
98－013	SK－026	21、30、32	土師器	甕	底部の50%	――	(10.4)			[7.0]	ヘラケズリ(ヨコ)、ヘラナデ(タテ)、木葉痕	ヘラナデ(ヨコ)	◎	◎			オリーブ黒色	7.5Y3/1	にぶい褐色	7.5YR6/3	
98－014	SK－026	5	土師器	甕	底部の100%	――	7.9			[8.7]	ナデ(タテ)、木葉痕	ナデ(ヨコ)	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい橙色～灰黄褐色	5YR6/4～10YR6/2	
98－015	SK－026	34	灰釉陶器	椀	底部破片	――	4.4			[1.8]	回転糸切り	灰釉					灰白色(釉：暗オリーブ灰)	N7/2.5GY4/1	灰白色	10YR7/1	ロクロ成形
98－016	SK－026	36	須恵器	広口壺	胴部破片	――	――			[5.8]	タタキ(平行)、カキ目	青海波紋	△				褐灰色	10YR6/1	褐灰色	10YR5/1	ロクロ調整
98－001	SK－027	1	土師器	坏	口縁部の20%	(6.9)	――			――	ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	△				にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
98－002	SK－027	1	土師器	甕	底部の40%	――	(6.8)			[2.7]	ヘラナデ(タテ)	ナデ	○			ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	2.5YR6/6	
99－001	U14－38	4	土師器	鉢	全体の20% 口縁部の25% 胴部の10%	(11.4)	――			4.5	口縁部ナデ(ヨコ)、ヘラナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)	◎	◎		ウンモ	橙色	5YR7/6	明黄褐色	10YR7/6	
99－002	U13－98	2	土師器	小型甕	全体の30%	(9.3)	――			[5.5]	ヘラケズリ(タテ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)	◎			ウンモ　石英	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
99－003	V14－32	4	土師器	高坏	脚部底部30%	――	(18.0)			[6.6]	ミガキ(タテ)	ナデ(ヨコ)	△			ウンモ　5㎜大の小石	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	赤彩
99－004	U14－39	2	その他	ミニチュア高坏	脚部の30%	――	――			[1.9]	ハケ(タテ)	――					にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩(10R6/6)手づくね
99－005	V14－23	4	土師器	高坏	脚接合部の100%	――	――			[4.2]	ミガキ	ヘラナデ				ウンモ 白色粒	橙色	2.5YR6/8	橙色	2.5YR6/8	外面赤彩
99－006	U14－38	4	土師器	器台	器台部の100%	――	――			[2.3]	――	――				ウンモ 白色粒	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	内外面摩滅
99－007	U13－67	2	土師器	器台	脚部 全体の10%	――	――			[3.8]	脚部ミガキ(タテ)	ヘラナデ		△		ウンモ 白色粒	明赤褐色	5YR5/6	明赤褐色	5YR5/6	赤彩
99－008	U14－37	4	土師器	坩？小壺？	全体の20%	――	――			[5.1]	ミガキ	ヘラナデ(ヨコ)				ウンモ	黄灰色	2.5Y4/1	にぶい橙色	2.5YR6/4	赤彩
99－009	V15－02	1	土師器	甕	底部の100%	――	4.0			[2.5]	ミガキ(タテ)	ヘラナデ(ヨコ)	△		△	ウンモ 白色粒	黄灰色	2.5Y5/1	褐灰色	10YR4/1	
99－010	V15－70	16	土師器	甕	底部の100%	――	4.8			[1.9]	ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	△				灰赤色	2.5YR4/2	灰黄褐色	10YR6/2	赤彩
99－011	V13－92	7	土師器	壺	底部の100%	――	7.6			[2.3]	ミガキ(タテ)	ナデ	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	外面赤彩
99－012	U13－58	2	土師器	鉢	底部100%	――	5.6			[3.4]	ヘラナデ(ヨコ)	ミガキ(ヨコ)	△			石英	灰褐色	7.5YR5/2	灰黄褐色	10YR6/2	
99－013	V15－60	12	土師器	鉢	底部の30%	――	(6.1)			[3.9]	ナデ	ナデ					にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	内外面赤彩
99－014	V15－70	1	土師器	甕	底部の90%	――	(5.2)			[2.7]	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラナデ	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色～褐灰色	7.5YR5/3～7.5YR5/1	赤彩
99－015	3T－003	32	土師器	壺	底部100%	――	7.4			[2.7]	ヘラナデ(ヨコ)	ヘラナデ(タテ、ヨコ)				2㎜大の小石	黄灰色	2.5Y4/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅
99－016	U14－89	4	土師器	壺	底部の100%	――	8.8			[3.3]	――	ヘラナデ(ヨコ)	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰黄褐色	10YR5/2	外面摩滅
99－017	3T－003	32	土師器	坏	全体の30% 口縁部の30% 胴部の30%	(11.8)	――			[4.0]	ヘラケズリ(ヨコ)、ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)					オリーブ黒色	10Y3/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	内面黒色処理
99－018	V14		土師器	坏	全体の50%	(10.8)	――			4.4	ヘラケズリ(ヨコ)	ナデ、ヘラナデ(ナナメ)	△		△	ウンモ	褐灰色	10YR4/1	にぶい褐色	7.5YR6/3	
99－019	V14－40、50	40－1、3 50－2	土師器	坏	全体の40%	(13.2)	――			4.0	口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	△				にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	
99－020	U13－89	2	土師器	坏	全体の30% 口縁部の30% 胴部の40% 底部の40%	(15.0)	――			3.9	ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)					にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい橙色	5YR6/4	赤彩(2.5YR4/6)

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
99－021	U13－48	3	土師器	坏	ほぼ完形	12.0	——			4.0	ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)		△			にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	赤彩　漆仕上げ
99－022	V14－23	2	須恵器	坏	破片	(12.0)	——			[2.9]	——	——				白色粒	青灰色	10BG5/1	青灰色	10BG5/1	ロクロ調整
99－023	U14－39	2	須恵器	坏	口縁部の20%	(12.7)	——			[2.7]	回転ナデ	回転ナデ				白色粒	灰色	7.5Y5/1	オリーブ灰色	5GY6/1	ロクロ調整
99－024	U13－79	1	須恵器	坏	口縁部の10%	——	——			[2.1]	回転ナデ	回転ナデ					灰色	7.5Y5/1	灰白色	5Y7/2	ロクロ調整
99－025	U13－89	2	須恵器	坏	口縁部の15%	(13.8)	——			[2.6]	回転ナデ	回転ナデ					灰色	7.5Y5/1	灰色	7.5Y5/1	ロクロ調整
99－026	V14－42	2	須恵器	坏	破片	(13.0)	——			[3.5]	——	——				5㎜大の小石	灰色	5Y5/1	灰色	5Y5/1	ロクロ調整
99－027	V12－61	1	須恵器	坏	底部の20%	——	——			[1.5]	回転ヘラケズリ	回転ナデ				白色粒(2～3㎜大)	青灰色	10BG5/1	青灰色	10BG5/1	ロクロ調整
99－028	V12－91	2	須恵器	蓋	全体の15%	——	——			[3.0]	回転ヘラケズリ	回転ナデ				白色粒	灰黄色	2.5Y6/2	灰黄色	2.5Y6/2	ロクロ調整
99－029	U13－58	3	土師器	鉢	全体の80% 口縁部の90% 胴部の90% 底部の5%	7.0	(5.4)			[8.0]	ヘラケズリ(タテ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)		◎		白色粒 2㎜大の小石	灰褐色	7.5YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
99－030	V14－31	2	須恵器	坏	底部の60%	——	(9.4)			[0.9]	底部回転ヘラケズリ	回転ナデ				白色粒	灰白色	10Y7/1	灰白色	10Y7/1	ロクロ調整
99－031	U14－67	1	土師器	甕	口縁部の50%	12.8	——			[5.2]	ヘラナデ(口縁部ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)	◎	◎			黄灰色	2.5Y5/1	にぶい褐色	7.5YR5/3	内外面摩滅
99－032	V12－91	2	須恵器	坏	底部の40%	——	4.6			[1.1]	回転ヘラケズリ	回転ナデ				白色粒	灰色	10Y6/1	緑灰色	5G5/1	ロクロ調整
99－033	V14－32、42	2	土師器	高坏	脚部の30%	——	——			[6.3]	ナデ(タテ、ヨコ)	ナデ(ヨコ)		△			にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	外面赤彩
99－034	U14－49	2	土師器	甕	底部の70%	——	7.4			[3.7]	ヘラケズリ(ヨコ)、底部手持ちヘラケズリ	ナデ		◎		黒色粒	灰黄色	2.5Y6/2	にぶい黄橙色	10YR7/4	
99－035	U14－39	2	土師器	甕	口縁部の30%	(6.4)	——			[6.2]	口縁部ナデ(ヨコ)、粗いハケ、ヘラナデ	ヘラナデ(ヨコ)	△				にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
99－036	V12－34	2	土師器	甕	口縁部の10%	(20.0)	——			[8.9]	ハケ(ヨコ)、口縁部ヘラナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)					にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
99－037	V12－52	1	土師器	甕	口縁部の30%	(17.8)	——			[8.2]	ヘラナデ(ナナメ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ナナメ)	△			小石	灰褐色	5YR5/2	灰褐色	7.5YR5/2	
99－038	U14－67	1	土師器	甑	全体の30%	(16.1)	——			[16.6]	ヘラナデ、口縁部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)	◎			1～2㎜大の小石	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	内外面摩滅
99－039	V14－40	2	土師器	甕	全体の70%	20.3	——			[27.7]	ハケ(タテ)	ハケ(ヨコ)				ウンモ　2～3㎜大の小石	灰褐色	7.5YR4/2	にぶい赤褐色	5YR5/3	
99－040	U13－59	4	土師器	甕	全体の30% 胴部の30%	——	——			[11.0]	ヘラケズリ(ヨコ～タテ)、頸部ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)		◎		白色粒　2㎜大の小石	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	
99－041	U13－37	3	土師器	甕	全体の30% 胴部の20% 底部100%	——	7.6			[12.1]	ヘラケズリ(タテ)　底部付近ナデ(ヨコ)　木葉痕	ヘラナデ(ヨコ)		◎		白色粒1～2㎜大	黒褐色	7.5YR3/1	にぶい褐色	7.5YR5/4	内外面摩滅
99－042	U15－77	1	須恵器	長頸壺	頸部の100%	——	——			[7.8]	回転ナデ	回転ナデ					青灰色	10BG5/1	黄灰色	2.5Y5/1	ロクロ調整
99－043	U12－99	2	須恵器	壺	底部の20%	——	(9.0)			[2.7]	回転ヘラケズリ	回転ナデ					灰黄色	2.5Y7/2	灰黄色	2.5Y7/2	ロクロ調整
100－001	V11－84	2	土師器	高坏	胴部の40%	——	——			——	ヘラケズリ(タテ)、ナデ(ヨコ)底部ヘラ切り	ナデ(ヨコ)	△			小石	浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色	10YR8/4	
100－002	V11－72、82、93	72－2、82－2、93－2	土師器	坏	口縁部の20% 底部の30%	(13.6)	——			[4.0]	ヘラケズリ(ヨコ)、口縁部ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	△				にぶい赤褐色	2.5YR5/3	にぶい赤橙色	10R6/4	内外面赤彩

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
100－003	V11－84	2	土師器	甕	口縁部の20%	(18.2)	――			[5.6]	口縁部ナデ（ヨコ)、ヘラナデ（タテ）	ナデ（ヨコ） ヘラナデ	△			ウンモ 黒色粒	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
100－004	V11－C区	1	須恵器	坏	坏部の20%	(15.0)	――			[2.8]	回転ナデ	回転ナデ					暗青灰色	5B4/1	暗青灰色	5B4/1	線刻、ロクロ調整
100－005	V11－80	2	須恵器	高坏	破片	――	――			[6.8]	――	――				白色粒	青灰色	5BG6/1	青灰色	5BG6/1	ロクロ調整
100－006	V10－83	1	須恵器	広口壺	破片	――	――			[4.8]	口縁部ナデ（ヨコ)、櫛書波状文	――				白色粒	灰色	7.5Y6/1	灰色	7.5Y6/1	
100－007	V8－52	1	須恵器	長頸瓶	破片	――	――			[3.5]	――	――					オリーブ黒色	7.5Y3/2	灰白色	7.5Y7/1	ロクロ調整
102－001	SI－005	64	灰釉陶器	段皿	全体の20%	(15.8)	(7.6)			[3.3]	――	――	◎			ウンモ 黒色粒	灰黄褐色	10YR6/2	褐灰色	10YR6/1	ロクロ成形
102－002	SI－005	55	灰釉陶器	椀	全体の50%	(16.2)	――			[5.8]	灰釉ハケぬり	灰釉ハケぬり	◎			黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/2	灰白色	2.5Y7/1	ロクロ成形
102－003	SI－005	26、29、39、46、47、49、96、SD018－129	灰釉陶器	瓶	胴部の20%	――	――			[10.4]	胴部中央下回転ヘラケズリ	ナデ（ヨコ）	△				灰黄色	2.5Y6/2	灰オリーブ色～にぶい黄橙色	5Y5/2～10YR7/2	ロクロ成形
102－004	SI－005	43	土師器	坏	体部の10% 底部100%	――	4.5			[1.1]	回転糸切り	回転ナデ	◎		◎	白色粒 黒色粒	橙色	2.5YR6/6	橙色	2.5YR6/8	ロクロ調整
102－005	SI－005	7、80	土師器	坏	全体の60%	(14.2)	6.8			4.2	手持ちヘラケズリ	回転ナデ	◎	◎		ウンモ 白色粒	橙色	5YR6/6	橙色	5YR7/8	ロクロ調整
102－006	SI－005	102	土師器	坏	口縁部の15% 体部の15% 底部の80%	(12.4)	7.5			3.4	ヘラケズリ	回転ナデ	◎		◎		橙色	2.5YR6/6	橙色	2.5YR6/6	ロクロ調整
102－007	SI－005	2、6、60	土師器	坏	完形	12.2	7.0			3.4	回転糸切り、手持ちヘラケズリ（外周）	回転ナデ	◎	◎	◎	ウンモ	にぶい橙色	2.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	ロクロ調整
102－008	SI－005	37	土師器	坏	全体の20%	(14.0)	(6.4)			[4.7]	――	回転ナデ	◎	◎		白色粒 黒色粒	にぶい赤褐色	10R6/4	赤褐色	10R6/6	ロクロ調整、外面摩滅
102－009	SI－005	2、58、68	土師器	高台付椀	全体の60%	17.0	8.6			7.0	つまみ出し高台	ミガキ（ヨコ）	△				黒色	N2/	にぶい橙色	7.5YR7/3	ロクロ調整、内面・口縁部に黒色処理
102－010	SI－005	70	土師器	高台付椀	全体の10%	(16.4)	(8.2)			[6.4]	底部外面ナデ	回転ナデ	◎	◎		白色粒 黒色粒	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	ロクロ調整
102－011	SI－005	13	土師器	高台付椀	体部の20% 底部の40%	――	(7.2)			[2.0]	回転ヘラ切り	回転ナデ	◎		◎	黒色粒	橙色	2.5YR6/8	橙色	5YR6/6	ロクロ調整
102－012	SI－005	20	須恵器	甕	破片	――	――			[9.2]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			1～2㎜大の小石	黄灰色	2.5Y5/1	褐灰色	10YR5/1	ロクロ調整
102－013	SI－005	21	須恵器	甕	破片	――	――			[14.9]	タタキ（平行）	ヘラナデ（ヨコ）	△			2㎜大の小石	黄灰色	2.5Y4/1	オリーブ黒色～黒色	7.5Y3/1～2/1	
103－001	SI－008	2	須恵器	蓋	全体の30%	――	――			[2.5]	自然釉	回転ナデ	△				黄灰色	2.5Y6/1	灰オリーブ色	7.5Y5/2	ロクロ調整
103－002	SI－008	2	須恵器	高台付坏	全体の20%	(14.7)	(10.1)			4.6	回転ナデ	回転ナデ	△				灰白色	10YR7/1	灰白色	10Y7/1	ロクロ調整
103－003	SI－008	2	瀬戸美濃	平碗	口縁部の20%	(14.6)	――			[6.5]	――	――	△				灰オリーブ色	7.5Y5/3	灰オリーブ色～灰黄色	7.5Y5/3～2.5Y6/2	古瀬戸後期様式Ⅱ期 灰釉
103－004	SI－008	1	土師器	甕	全体の10%	(27.5)	――			[12.6]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR7/6	
103－005	SI－008	2	須恵器	坏	破片	――	――			[2.7]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	灰白色	10YR7/1	褐灰色	10YR6/1	ロクロ調整
103－006	SI－008	2	土師器	甕	破片	――	――			――	ヘラナデ	――	◎	◎			橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
103－007	SI－008	2	須恵器	平瓶把手	破片	――	――			――	――	――					灰色	N4/	灰色	N5/	
103－001	SI－009	10	土師器	坏	全体の20%	(15.8)	(8.5)			3.7	ヘラケズリ(ヨコ)	ナデ（ヨコ）	◎	◎			にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	粘土紐接合痕
103－002	SI－009	12	土師器	坏	全体の30%	(14.6)	(6.5)			4.6	ヘラケズリ（ヨコ)、ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△	△			橙色	5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR7/4	内外面摩滅
103－003	SI－009	20	土師器	甕	底部の95%	――	6.7			[3.5]	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラナデ（タテ）	◎			1㎜大の小石	灰黄褐色	10YR5/2	灰褐色～黒褐色	7.5YR4/2～3/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
103－004	SI－009	28	須恵器	蓋	破片	――	――			[1.3]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	黄灰色	2.5Y6/1	灰黄色	2.5Y6/2	ロクロ調整
103－001	SI－012	1	土師器	高坏	脚部の20%	――	――			[4.0]	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラケズリ(ヨコ)	△		△	ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/4～10YR5/1	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～10YR4/1	
104－001	SI－021	2	土師器	甕	破片	――	――			――	ヘラナデ	――	◎			1～2㎜大の小石	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
104－001	SI－026 SI－027	?	須恵器	蓋	口縁部の15%	(16.0)	――			[2.1]	回転ナデ	回転ナデ	△				灰白色	5Y7/1	灰白色	10Y7/1	ロクロ調整
104－002	SI－026 SI－027	14	土師器	甕	底部の30%	――	(6.4)			[3.3]	――	――	△				橙色	5YR6/6	にぶい赤褐色	5YR5/4	混入品？ 内外面摩滅
104－003	SI－027	3	土師器	鉢	口縁部の20%	(15.8)	――			[4.5]	ヘラケズリ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	――	△				橙色	5YR6/6	灰黄褐色	10YR5/2	内外面摩滅
104－004	SI－026 SI－027	14	土師器	甕	口縁部の15%	(30.0)	――			[10.5]	ヘラナデ（口縁部ヨコ　胴部タテ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			白色粒	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～4/1	
105－001	SI－026	8	土師器	鉢	口縁部の10%	(21.6)	――			[5.7]	――	――	△	△		1～2㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	全体に剥離
105－002	SI－026	5、6	土師器	高坏	坏部の30%	(16.2)	――			[5.4]	体部ヘラナデ（ヨコ）	口縁部ナデ（ヨコ）　ヘラナデ(ヨコ)					橙色	7.5YR6/6	灰褐色	7.5YR4/2	
106－001	SI－037	2	土師器	坏	全体の60%	13.2	4.6			4.0	ヘラケズリ(ヨコ)	ナデ	◎	◎	◎		にぶい黄橙色、黒色	10YR6/4、10YR2/1	にぶい黄橙色、黒色	10YR6/4、10YR2/1	黒斑
106－002	SI－037	1、3	土師器	甕	胴部の50%	――	――			[22.2]	ハケ（タテ）	ヘラナデ(ヨコ)、ハケ	◎	◎			にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	
106－003	SI－037	1、2、9	土師器	甕	口縁部の40%	(25.6)	――			[12.4]	ヘラナデ、口縁部ナデ（ヨコ）	ヘラナデ	◎	◎		1㎜大の小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
106－004	SI－037	2	土師器	壺	底部の100%	――	3.2			[2.0]	――	――	◎			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面摩滅
106－005	SI－037	2	土師器	甕	底部の80%	――	(10.0)			[2.2]	ヘラナデ　木葉痕	ヘラナデ	◎	◎		1㎜大の小石	黒褐色	10YR3/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	
106－006	SI－037	1	土師器	甕	底部の50%	――	(9.8)			[3.0]	ヘラケズリ、ヘラナデ、木葉痕	ヘラナデ	◎	◎	◎		にぶい橙色	7.5YR6/4	黒色	N2/	
106－007	SI－037	12	土師器	甕	底部100%	――	(8.8)			[1.0]	木葉痕	ヘラナデ	◎	◎	◎	黒色粒	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	
106－008	SI－037	4	土師器	甕	底部の20%	――	(9.8)			[3.4]	底部ヘラケズリ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎			黒褐色	10YR3/1	灰褐色	7.5YR5/2	SI－028出土
106－009	SI－037	1	須恵器	蓋	破片	――	(3.7)			――	天井部回転ヘラケズリ	回転ナデ	△				灰白色	7.5Y7/1	灰白色	7.5Y7/2	ロクロ調整、SI－028出土
107－001	SK－011	1	土師器	椀	底部～胴部の15%	(20.2)	(11.0)			[5.6]	ヘラケズリ（ヨコ）、ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	△			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色～灰褐色	5YR6/8～7.5YR4/2	
108－001	V10－70	2	土師器	蓋(ツマミ)	ツマミ部100%のみ	――	――			[1.2]	ナデ	ナデ							にぶい橙色	7.5YR6/4	
108－002	V10－83	3	土師器	小皿	胴部の5% 底部の90%	――	4.4			[1.2]	ヘラケズリ（ヨコ）、底部回転糸切り、無調整	ナデ（ヨコ）					にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	7.5YR7/6	ロクロ調整
108－003	B区P－86	1	土師器	小皿	全体の50% 底部100%	――	――			[1.5]	底部回転糸切り、無調整	回転ナデ		△		ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	ロクロ調整
108－004	V14－32	2	土師器	坏	底部の30%	――	(5.0)			[1.4]	ナデ	ナデ	△		△		にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	
108－005	V14－34	3	土師器	高坏	脚部底部の80%	――	――			――	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい赤褐色	2.5YR5/4	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	内外面赤彩
108－006	V14－32、34	32－3、34－2	土師器	高台付坏	底部の40%	――	(7.0)			[1.8]	回転ナデ	回転ナデ	△		△		にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	ロクロ調整
108－007	V14－31	2	土師器	坏	体部～底部の10%	――	(5.2)			[2.3]	底部回転糸切り	回転ナデ	△		△		灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	ロクロ調整
108－008	V9－12	1	須恵器	蓋	破片	――	――			[0.7]	――	――				白色粒	黄灰色	2.5Y6/1	黄灰色	2.5Y6/1	ロクロ調整
108－009	U14－68	1	須恵器	短頸壺	破片	(5.8)	――			[2.4]	――	――					灰色	7.5Y5/1	灰色	7.5Y5/1	ロクロ調整
108－010	U14－28	1	須恵器	長頸壺	頸部の20%	――	――			[7.5]	回転ナデ	回転ナデ				黒色粒	灰白色	2.5Y7/1	灰白色	2.5Y7/1	ロクロ調整

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
108－011	V10－70	3	須恵器	蓋	口縁部の20%	(16.0)	――			[2.5]	回転ナデ	回転ナデ				白色粒	灰白色	5Y7/1	灰白色	5Y7/1	ロクロ調整
108－012	B区P－62	1	須恵器	短頸壺	肩部の20%	――	――			[4.0]	回転ナデ	回転ナデ					オリーブ黒色	7.5Y3/1	灰色	10Y5/1	ロクロ調整
108－013	V9－51	1	須恵器	高台付盤	底部の20%	――	(15.8)			[2.9]	回転ナデ	回転ナデ					明灰黄色	2.5Y5/2	明灰黄色～にぶい赤褐色	2.5Y5/2～2.5YR5/4	ロクロ調整
108－014	1T－002下層	－	須恵器	高盤	底部の20%	――	――			[1.5]	ヘラケズリ(回転)	回転ナデ				白色粒	灰オリーブ色	7.5Y6/2	灰色	5Y6/1	ロクロ調整
108－015	V10－81	2	須恵器	甕	破片	――	――			[3.5]	――	――				白色粒	灰色	5Y6/1	灰色	5Y4/1	ロクロ調整
108－016	V10－60	2	須恵器	壺	破片	――	――			[3.0]	――	――					黄灰色	2.5Y5/1	黄灰色	2.5Y5/1	ロクロ調整
117－001	SK－016	1	常滑	片口鉢	全体の20%	(26.2)	――			[8.2]	ヘラケズリ(タテ)、指圧痕	ナデ(ヨコ)、ミガキ使用痕	△			ウンモ	赤灰色～灰赤色	2.5YR5/1～5/2	灰赤色	2.5YR5/2	口縁は砥石に転用
117－002	SK－020	2	在地土器	カワラケ坏	全体の15%	(14.0)	(8.8)			4.0	ヘラケズリ(ヨコ)、ナデ(ヨコ)、回転糸切り	見込みに横方向の強いナデ	△		△	ウンモ 褐色粒	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	ロクロ調整、糸切り痕をナデで消している
117－003	SK－016	1	瀬戸美濃	緑釉小皿	口縁部の25% 底部の25%	(10.6)	(4.8)			2.1	口縁に灰釉、回転糸切り	回転ナデ					灰黄色	2.5Y6/2	灰黄色 (釉:灰オリーブ)	2.5Y6/2 (5Y)	古瀬戸後期様式Ⅲ期 灰釉
117－004	SK－016	1	在地土器	カワラケ坏	底部の40%	――	(7.6)			[1.5]	ヘラケズリ(ヨコ) 回転糸切り	見込みに強くナデ(ヨコ)	△				橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR7/6	ロクロ調整、糸切り痕を板状工具で消している
117－005	SK－016	1	在地土器	カワラケ小皿	底部の25%	――	(7.0)			[2.2]	ヘラケズリ(ヨコ)、回転糸切り	ヘラナデ(ヨコ)、見込みに強く横方向のナデ	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	ロクロ調整、糸切り痕を板状工具で消している
117－006	SK－016	1	青磁	碗	底部の50%	――	(6.2)			[2.2]	施釉	見込みに劃花文					灰色～オリーブ灰色	10Y6/1～6/2	にぶい黄色～灰色	2.5Y6/3～10Y5/1	中世貿易陶磁、ロクロ成形
117－007	SK－016	1	瀬戸美濃	緑釉小皿	口縁部の15%	(9.6)	――			[1.5]	口縁に灰釉	回転ナデ					にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色 (釉:灰オリーブ)	10YR6/4 (7.5Y5/3)	古瀬戸後期様式Ⅲ期 灰釉
117－001	SK－024	1	瀬戸美濃	折縁中皿	底部の50%	――	(7.0)			[1.9]	ヘラケズリ(ヨコ)、灰釉 回転糸切り	灰釉ハケ塗り					灰黄色 (釉:灰オリーブ)	2.5Y7/2 (5Y6/2)	橙色 (釉:灰オリーブ)	5YR6/6	古瀬戸後期様式Ⅰ～Ⅱ期 灰釉
117－002	SK－024	1	常滑	甕	胴部破片	――	――			――	自然釉が流れる	砂が残る	△				灰黄褐色	10YR4/2	黒褐色 (釉:灰オリーブ)	10YR3/1	
118－001	SK－023	3	瀬戸美濃	折縁深皿	破片	――	――			――	灰釉ハケ塗り	灰釉ハケ塗り					灰白色～灰黄色	2.5Y8/2～6/2	灰白色～灰黄色	2.5Y8/2～6/2	古瀬戸後期様式Ⅲ期 灰釉
118－002	SK－023	2	瀬戸美濃	折縁深皿	破片	――	――			――	灰釉ハケ塗り	灰釉ハケ塗り					灰白色	2.5Y8/2	灰白色	2.5Y8/2	古瀬戸後期様式Ⅲ期 灰釉ハケぬり
119－001	V14－31	2	青磁	鎬蓮弁文碗	破片	――	――			[2.9]	ロクロ挽き整形後、蓮弁レリーフ	ロクロ挽き整形					オリーブ灰色	10Y6/2	オリーブ灰色	10Y6/2	龍泉窯系青磁 Ⅰ－5b類
119－002	C区P－21	1	青磁	蓮弁文坏か	底部～胴部の20%	――	(7.0)			[3.5]	――	――					灰色	5Y6/1	灰色	10Y6/1	蓮弁文、ロクロ調整 龍泉窯系青磁
119－003	U10－08	1	瀬戸美濃	天目茶碗	全体の25% 口縁部の25%	(12.0)	――			[4.6]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					釉:オリーブ黒色～褐色	5Y2/2～7.5YR4/3	淡黄色	2.5Y8/3	古瀬戸後期様式Ⅰ期、鉄釉
119－004	V13－73	2	瀬戸美濃	天目茶碗	口縁部の20%	(12.0)	――			[3.3]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					釉:黒色～褐色	10YR2/2～10YR4/4	釉:黒色～褐色	10YR2/2～10YR4/4	古瀬戸後期様式Ⅱ期
119－005	V14－03	1	瀬戸美濃	平碗	口縁～体部の20%	(16.0)	――			[5.6]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					浅黄色	2.5Y7/3	にぶい黄橙色 (釉:灰黄色)	10YR7/3 (2.5Y7/2)	古瀬戸後期様式Ⅲ期 灰釉
119－006	B区P－118	1、SD－025－1、B区P118－1、P123－1、V13－30－2、42－3、40、2	瀬戸美濃	平碗	胴部の15%	――	――			[5.1]	ヘラケズリナデ(回転)、回転ナデ	回転ナデ					灰白色	2.5Y8/1～8/2	釉:灰白色～灰黄色	2.5Y7/1～5/1	古瀬戸後期様式Ⅱ期 灰釉、ロクロ成形
119－007	V13－04	3	瀬戸美濃	卸皿	底部の25%	(13.6)	――			[2.4]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					にぶい黄褐色(釉:灰オリーブ色～オリーブ黒色)	10YR5/4 (7.5Y5/3～7.5Y3/2)	にぶい橙色～にぶい黄橙色	7.5YR6/4～10YR7/3	古瀬戸後期様式Ⅱ期 灰釉
119－008	D区一括	3	瀬戸美濃	卸皿	底部の50%	――	1.0			[6.0]	底部回転糸切り	卸目あり					にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	古瀬戸後期様式
119－009	U12－97 U13－78 V13－14	2、2、2	瀬戸美濃	緑釉小皿	全体の20% 口縁部の50%	(11.4)	――			2.3	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					淡黄色(釉:灰オリーブ色)	2.5Y8/3 (5Y5/3)	淡黄色(釉:灰オリーブ色)	2.5Y8/3 (5Y5/3)	古瀬戸後期様式Ⅲ期 灰釉

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頚部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
119－010	V13－80	2	瀬戸美濃	緑釉小皿	全体の25%	(11.0)	(5.2)			2.3	ロクロ挽き整形、底部回転糸切り	ロクロ挽き整形					浅黄色（釉：灰オリーブ色）	2.5Y7/3 (7.5Y6/2)	にぶい赤褐色～灰黄色	2.5YR5/4～2.5Y7/2	古瀬戸後期様式Ⅲ期　灰釉　内面使用の痕跡
119－011	V13－62	3	瀬戸美濃	折縁深皿	破片	――	――			[2.6]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					灰黄色	2.5Y6/2	灰黄色	2.5Y6/2	古瀬戸後期様式Ⅰ期　灰釉　断面に漆補修の跡
119－012	D区一括	2	瀬戸美濃	折縁深皿	破片	――	――			[1.6]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					灰オリーブ色	5Y6/2	灰オリーブ色	5Y6/2	古瀬戸後期様式Ⅰ期　灰釉
119－013	U12－97、98 U13－08	97 (1、2、?) 98 (2) U13－08 (2)	瀬戸美濃	直縁大皿	口縁部の30% 底部の5%	(27.8)	(5.4)			[15.4]	ロクロ挽き整形、ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	ロクロ挽き整形					オリーブ灰色～灰白色	10Y6/2～7.5Y7/1	灰黄色	2.5Y7/2	古瀬戸後期様式Ⅱ期　内面にトチン痕、灰釉
119－014	D区一括	1	瀬戸美濃	直縁大皿	口縁部の20%	(28.4)	――			[6.4]	体部中央下ヘラケズリ、ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					にぶい黄色（釉：灰白色）	2.5Y6/3 (2.5Y8/2)	黄灰色（釉：灰白色～灰オリーブ色）	2.5Y6/1 (2.5Y8/2～5Y4/2)	古瀬戸後期様式Ⅲ期　灰釉
119－015	V10－73 V10－91 V10－93	1、1、2	渥美	短頚壺	口縁部の10%	(12.0)	――			[2.0]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）					黄灰色	2.5Y5/1	灰白色～灰オリーブ色	5Y8/2～5Y6/2	外面自然釉がかかる
119－016	U13－79	2	常滑	壺	肩部の25%	――	――			[6.9]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）				長石粒やや多い	黄灰色	2.5Y4/1	黒褐色(自然釉：灰白色～オリーブ灰色)	2.5Y3/1（10Y8/2～4/2)	3型式
119－017	V11－33	1	瀬戸美濃	小壺	全体の10% 底部の70%	――	(5.0)			[2.4]	ロクロ挽き整形 底部回転糸切り	ロクロ挽き整形					オリーブ灰色～暗赤灰色	10Y6/2～2.5YR3/1	灰オリーブ色（釉：赤灰色）	5Y6/2 (2.5YR4/1)	古瀬戸後期様式Ⅲ期～Ⅳ期（古）　鉄釉
119－018	V13－60	2	瀬戸美濃	筒型容器	口縁部の10%	(21.0)	――			[5.6]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					灰オリーブ色～オリーブ灰色	7.5Y6/2～10Y5/2	オリーブ灰色～オリーブ灰色	10Y6/2～10Y4/2	古瀬戸後期様式Ⅲ期　灰釉
119－019	V10－80 V10－91	1、1	瀬戸美濃	擂鉢	底部の5%	――	(4.4)			[10.0]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形	△			石英少量	暗青灰色	5B4/1	暗青灰色	5B4/1	古瀬戸後期様式Ⅳ期　内外面重ね焼き痕　錆釉
119－020	V11－00	1	瀬戸美濃	擂鉢	口縁部の25%	(27.6)	――			[3.3]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					暗青灰色	5B4/1	暗青灰色	5B4/1	大窯1　片口部が残る　錆釉
119－021	V12－61、94	61－1、94－2	常滑	片口鉢	口縁部の25% 胴部の20%	30.0	――			[5.3]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）				3㎜大の白色小石	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	砥石転用
119－022	V12－92	2	常滑	片口鉢	底部の10%	――	(15.0)			[5.5]	ヘラミガキ	ナデ	◎			白色粒	灰色	10Y4/1	黄灰色	2.5Y5/1	
119－023	D区一括	1	常滑	片口鉢	口縁部の15%	(21.2)	――			[4.9]	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）				長石粒少量	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR4/3	Ⅱ類9型式　外面に重ね焼き痕が残る
119－024	U12－98	2	常滑	片口鉢	口縁部の30%	(25.3)	――			[6.0]	ヘラケズリ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）、ハケ使用痕残る				長石微粒少量	赤灰色～赤黒色	7.5R5/2～10R2/1	にぶい赤褐色	5YR5/3	Ⅱ類9型式
119－025	表採	1	常滑	片口鉢	破片	――	――			[2.4]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				黄灰色	2.5Y6/1	黄灰色	2.5Y6/1	Ⅰ類5型式
119－026	V11－C区	1	常滑	片口鉢	破片	――	――			[4.8]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）				長石粒	灰色	10Y4/1	灰色	5Y4/1	Ⅱ類9型式
119－027	V13－63	3	常滑	片口鉢	破片	――	――			[3.5]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）				長石粒	灰色	5Y5/1	褐灰色	7.5YR4/1	Ⅱ類9型式
119－028	U13－79	2	常滑	片口鉢	破片	――	――			[6.4]	ヘラケズリ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）回転ナデ）				長石粒	灰赤色	2.5YR5/2	黒色	2.5Y2/1	Ⅱ類10型式
119－029	V11－C区	1	常滑	甕	破片	――	――			[3.9]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）				長石粒やや多い	黄灰色	2.5Y5/1	にぶい赤褐色～暗赤灰色	2.5YR5/4～2.5YR3/1	6ｂ型式
119－030	V11－C区	1	常滑	甕	破片	――	――			[7.2]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）				長石粒	赤褐色	10R4/3	赤褐色	10R4/3	9型式
119－031	V10－72	1	渥美	甕	破片	――	――			[6.9]	ナデ（タテ）	ナデ（ヨコ）					暗緑灰色	5G4/1	灰色	5Y6/1	外面に押印文
119－032	U13－37	1	在地土器	カワラケ坏	全体の50% 口縁部・胴部・底部の各50%	(14.4)	9.0			3.8	底部回転糸切り、板状工具	見込み部分ヘラナデ		△		ウンモ 白色粒	黒褐色	10YR3/2	橙色	7.5YR6/6	ロクロ調整
119－033	V14－11	2	在地土器	カワラケ小皿	全体の70%	(6.9)	4.4			[2.1]	ナデ、底部外面回転糸切り	ナデ	△		△	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	ロクロ調整
119－034	V10－82	2	在地土器	カワラケ小皿		(9.0)	――			[1.6]	ロクロ挽きによる指ナデ	ロクロ挽きによる指ナデ	△	△			橙色	2.5YR6/8	橙色	2.5YR6/8	
119－035	V10－72	2	在地土器	カワラケ小皿	全体の25% 口縁部の20% 胴部・底部の各25%	(8.8)	(6.0)			1.5	ロクロ挽きによる指ナデ　底部回転糸切り	ロクロ挽きによる指ナデ	△	△	△	ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
119－036	V13－42	3	瓦質土器	香炉	全体の20％口縁部の25％	(10.0)	——			[3.5]	ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）					灰白色～褐灰色	10YR7/1～10YR6/1	灰白色～黄灰色	2.5Y7/1～2.5Y5/1	外面に梅花スタンプ文
122－001	SX－003	6	土師器	坏	全体の20％	(10.6)	(5.2)			3.3	回転糸切り	回転ナデ	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色～黄灰色	10YR7/3～2.5Y6/1	にぶい黄橙色～黄灰色	10YR7/3～2.5Y6/1	ロクロ調整
122－002	SX－003	11	土師器	坏	完形	9.7	4.8			3.4	回転糸切り	回転ナデ	△		△		にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	ロクロ調整
122－003	SX－003	6	土師器	椀	全体の30％底部の60％	(11.1)	5.8			4.1	回転糸切り	回転ナデ	◎		◎	ウンモ	褐灰色～にぶい黄橙色	7.5YR5/1～10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	ロクロ調整
122－004	SX－003	7	土師器	椀	底部の60％	——	(5.8)			[2.1]	ヘラナデ(ヨコ)、回転糸切り　回転ヘラケズリ	ナデ				底部に2～5㎜大の小石（白～褐色）	にぶい橙色～オリーブ黒色	7.5YR7/3～5Y3/1	橙色	5YR6/6	内面煤付着　平安時代
122－005	SX－003	7	土師器	高台付坏	底部100％	——	6.7			[2.0]	回転ナデ	回転ナデ	◎		◎	ウンモ	オリーブ黒色～にぶい黄橙色	7.5Y3/1～10YR6/3	にぶい黄褐色～灰黄褐色	10YR5/4～10YR4/2	ロクロ調整
122－006	SX－003	7	土師器	坏	底部の20％	——	(10.0)			[1.0]	ナデ	ナデ	△			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
122－007	SX－003	3、6	土師器	高台付椀	全体の60％	15.7	(8.3)			6.5	ナデ	ミガキ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	黒褐色	10YR3/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	ロクロ調整、黒色処理
122－008	SX－003	6	土師器	皿	全体の40％	(15.1)	7.2			2.7	回転ナデ	回転ナデ	△				にぶい橙色～橙色	2.5YR6/4～5YR7/8	にぶい橙色～橙色	2.5YR6/4～5YR7/8	ロクロ調整
122－009	SX－003	6、7	土師器	甕	底部100％	——	6.1			[2.6]	ヘラケズリ(ヨコ)	ヘラナデ（ヨコ）	△	△			にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色～オリーブ黒色	10YR7/4～7.5Y3/1	
122－010	SX－003	6	土師器	甕	底部の30％	——	(6.6)			[4.6]	ヘラケズリ(タテ)	ヘラナデ（ヨコ）	△	△			にぶい褐色	7.5YR5/4	黒褐色	7.5YR3/1	
122－011	SX－003	5	須恵器	蓋	蓋の一部つまみ部100％	——	——			[1.9]	回転ヘラケズリ	回転ナデ	△				#REF!		灰黄色	2.5Y6/2	ロクロ調整
122－012	SX－003	11	須恵器	高台付坏	底部100％	——	9.8			[2.1]	回転ヘラケズリ	回転ナデ	△				青灰色	5PB5/1	暗青灰色	5B4/1	ロクロ調整
122－013	SX－003	1	須恵器	長頸瓶	高台部の50％	——	(8.8)			[2.2]	回転ナデ	回転ナデ	△				灰白色	10YR7/1	浅黄橙色	10YR8/3	ロクロ調整
122－014	SX－003	7	須恵器	高台付坏	体部の10％	——	——			[4.6]	回転ナデ	回転ナデ	△				緑灰色	5G	緑灰色	5G	ロクロ調整
122－015	SX－003	5	須恵器	平底坏	底部の80％	——	7.8			[1.4]	ヘラケズリ（ヨコ）、手持ちヘラケズリ	ナデ	△				橙色、赤橙色	7.5YR6/6 10R6/6	灰赤色	2.5YR6/2	
122－016	SX－003	6	須恵器	長頸瓶	頸部の50％	——	——			[6.7]	回転ナデ	回転ナデ	△				黄灰色	2.5Y6/1	灰オリーブ色	5Y5/2	ロクロ調整
122－017	SX－003	7	須恵器	高坏	脚部の5％	——	——			[2.0]	ヘラナデ	ナデ（ヨコ）	△			3㎜大の小石	青灰色	5B5/1	青灰色	5B5/1	
122－018	SX－003	7	須恵器	広口壺	破片	——	——			[4.0]	口縁部ナデ（ヨコ）、ゆるい波状文	ナデ	△				オリーブ黒色に灰白色の点	10Y3/1 10Y8/1	青灰色、自然釉：灰白色～オリーブ灰色	5B5/1、10Y8/1～10Y5/2	
122－019	SX－003	7	土師器	坏	全体の40％	(15.4)	——			[5.6]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△	△			にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	
122－020	SX－003	6	土師器	椀	全体の40％	(13.0)	——			[4.2]	ナデ	ミガキ（ヨコ）	◎			ウンモ	黒褐色	2.5Y3/1	明褐色	7.5Y5/6	ロクロ調整、内面黒色処理
122－021	SX－003	6	土師器	小型甕	口縁部の25％	(12.4)	——			[5.8]	ヘラケズリ（ヨコ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△			ウンモ	褐灰色	7.5YR5/1	にぶい褐色	7.5YR6/3	
122－022	SX－003	7	土師器	小型甕	口縁部の25％	(12.2)	——			[4.2]	ヘラケズリ、ナデ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		ウンモ	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/2～10YR4/1	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/2～10YR6/1	
122－023	SX－003	6、7	土師器	甕	底部の100％	——	(8.0)			[4.8]	ハケ（タテ）、木葉痕	ヘラナデ（タテ）	◎	◎		1～2㎜大の小石	にぶい黄橙色～橙色	10YR7/4～7.5YR7/6	にぶい橙色～黄灰色	7.5YR7/4～2.5Y4/1	
122－024	SX－003	6	土師器	高坏	脚部の60％	——	10.0			[5.8]	ミガキ（タテ）	ナデ（ヨコ）　ハケ（ヨコ）	◎		◎	ウンモ	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
122－025	SX－003	3	土師器	甕	底部の30％	——	(9.6)			[2.9]	ハケ（タテ）、木葉痕	ヘラナデ（ヨコ）	△	△			にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色～オリーブ黒色	7.5YR7/4～7.5Y3/1	外面摩滅
122－026	SX－003	6	土師器	甕	底部の30％	——	(6.8)			[3.0]	ヘラケズリ（ヨコ）、木葉痕	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		1～2㎜大の小石	灰黄色～黄灰色	2.5Y6/2～2.5Y6/	橙色	5YR6/6	
122－027	SX－003	7	土師器	甕	破片	——	——			[3.3]	ハケ（ヨコ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎	◎		1～2㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色～橙色	10YR7/4～5YR6/6	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
122－028	SX－003	6	土師器	甕	破片	――	――			[2.2]	――	――	◎		◎	ウンモ	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
122－029	SX－003	6	縄文土器	深鉢	破片	――	――			[5.2]	――	――	◎		◎	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい橙色	5YR6/4	
122－030	SX－003	6	その他	手づくね	完形	4.0	3.2			2.7	ナデ（指）	ナデ（指）	△				にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
122－031	SX－003	7	その他	手づくね	全体の30%	(5.8)	(5.5)			2.8	ヘラケズリ(タテ)	ナデ（指）	△				にぶい黄橙色～黄灰色	10YR7/4～2.5Y4/1	にぶい黄橙色～黄灰色	10YR7/4～2.5Y4/1	
122－032	SX－003	5	その他	手づくね（坏）	全体の40%	(8.2)	(6.6)			4.6	ナデ、輪積痕	ナデ	△				にぶい赤褐色	5YR5/4	橙色～明褐色	7.5YR7/6～7.5YR5/6	
125－001	SD－017	2	常滑	甕	破片	――	――			――	タタキ(一部格子)	――	△				灰色	10Y5/1	灰色	N4/	
126－001	SD－005	2	常滑	甕	底部の20%	――	(13.6)			[4.6]	ヘラナデ	ナデ	◎			白色粒 3～4㎜大の小石	にぶい赤褐色	5YR5/3	橙色～にぶい赤褐色	5YR7/8～5YR5/4	
131－001	SD－011	1	常滑	甕	破片	――	――			[5.5]	口縁部に自然釉がかかる	――	△			白色粒	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	灰色	5Y5/1	4と接合
131－001	SD－011	1	常滑	甕	破片	――	――			――	――	――	△			白色粒	褐色	7.5YR4/3	暗褐色	10YR3/3	2と接合
131－002	SD－011	1	瀬戸美濃	甕	破片	――	――			――	鉄釉がかかる	――	△			2㎜大の小石	灰黄褐色	10YR5/2	暗オリーブ色	5Y4/3	
131－003	SD－019	2、6	常滑	広口壺	胴部の5%	――	――			[7.5]	ヘラケズリ(タテ)	ナデ（ヨコ）	△			2㎜大の小石	明赤褐色	5YR5/6	にぶい赤褐色～明赤褐色	2.5YR4/3～2.5YR5/6	
131－004	SD－018	1、SD－025－1、SK－016－1	瀬戸美濃	平碗	口縁部の20%	(16.4)	――			[3.3]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					灰黄色	2.5Y7/2	黄灰色（灰白色～灰黄色）	2.5Y6/1～5/1(2.5Y7/1～7/2)	古瀬戸後期様式Ⅱ期 灰釉 被熱
131－005	SD－014	1	須恵器	壺	破片	――	――			[2.7]	ナデ（ヨコ）	ナデ	△				黄灰色	2.5Y5/1	灰色	10Y4/1	ロクロ調整
131－006	SD－025	1	須恵器	甕	破片	――	――			[2.0]	タタキ（平行）	ヘラナデ	△				灰白色	2.5Y7/1	黄灰色	2.5Y6/1	
131－007	SD－028	1	在地土器	カワラケ坏	底部の20%	――	(9)			[1.2]	底部回転糸切り	回転ナデ	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	橙色	5YR6/6	ロクロ調整
131－008	SD－028	1	須恵器	壺	胴部小片	――	――			[4.0]	タタキ（平行）	青海波痕	△				黄灰色	2.5Y6/1	黄灰色	2.5Y5/1	
131－009	SD－028	1	須恵器	甕	胴部小片	――	――			[5.3]	タタキ（平行）	ナデ	△				灰色	5Y6/1	灰色	5Y6/1	
131－010	SD－012	1	須恵器	広口壺	破片	――	――			――	――	――				白色粒	灰白色	10YR7/1	灰白色	2.5Y7/1	
131－011	SD－007	2	土師器	坏	全体の30%	(12.4)	(6.8)			[3.5]	ナデ（ヨコ）、糸切り痕	回転ナデ			△	小石	橙色	5YR6/6	橙色	5YR7/6	ロクロ調整
131－012	SD－016	1	須恵器	蓋（宝珠ツマミ）	口縁部の15%	(17.2)	――			[2.8]	ヘラナデ	ヘラナデ	△				灰白色	2.5Y7/1	灰白色	2.5Y7/1	ロクロ調整、混入品 奈良・平安時代
131－013	SD－008	1	弥生土器	鉢	底部の５０％	――	7			[4.5]	――	――	◎		◎	ウンモ 白色粒	明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩 内外面摩滅
131－014	SD－025	1、6	土師器	坏	全体の10%	――	――			[3.2]	ヘラナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				にぶい黄橙色	10YR6/4	明赤褐色～黒褐色	2.5YR5/8～2.5Y3/1	赤彩
131－015	SD－012	1	土師器	甕	口縁部の25%	(18.4)	――			[3.8]	ナデ	――				2㎜大の小石	にぶい橙色	5YR6/3	橙色	2.5YR6/8	内外面摩滅
131－016	SD－025	1	土師器	坏	口縁部の20%	(15.4)	――			[5.5]	ヘラケズリ、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△				浅黄色	2.5Y7/4	灰黄褐色～オリーブ黒色	10YR5/2～7.5Y3/1	
131－017	SD－012	1	土師器	甕	底部の100%	――	5.8			[1.95]	――	――	◎			石英	にぶい橙色	7.5YR7/4	橙色	7.5YR7/6	内外面摩滅
131－018	SD－012	1	土師器	甕	底部100%	――	8			[2.4]	――	――	◎			白色粒	橙色	7.5YR7/6	橙色～橙色	5YR6/8～7.5YR7/6	内外面摩滅
131－019	SD－014	5	土師器	甕	底部の100%	――	7.2			[3.6]	ナデ（タテ、底部ヨコ）	ヘラナデ(ナナメ)	◎		◎	ウンモ 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	
131－020	SD－026	1	土師器	高坏	脚部の50%	――	(10)			[8.4]	ハケ、ヘラナデ(タテ)	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ 石英	にぶい橙色	7.5YR7/4	暗灰黄色～にぶい黄橙色	2.5Y4/2～10YR7/4	赤彩（2.5Y5/6）
131－021	SD－025	2	土師器	甑	全体の60%	――	8			[19.7]	粗いハケ（タテ～ナナメ）	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ 石英	明黄褐色	10YR6/6	にぶい黄橙色～黒色	10YR6/4～2.5GY2/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
131－022	SD－022	1	土師器	甕	全体の40%	(18.3)	——			[23.9]	ヘラケズリ(タテ)、指頭圧痕	ヘラナデ(ヨコ)	◎			ウンモ 白色粒	黄灰色	2.5Y4/1	黄褐色	2.5Y5/3	
131－023	SD－025	3	土師器	甕	口縁部の25%	38.8	——			[13.3]	ヘラケズリ(タテ)	ヘラナデ(ヨコ)、輪積痕	◎			石英 1㎜大の小石	にぶい黄褐色～オリーブ黒色	10YR4/3～7.5Y3/1	橙色～暗灰黄色	7.5YR7/6～2.5Y5/2	煤付着
131－023	SD－025	3	土師器	甕	底部の100%	——	8			[1.8]	ヘラケズリ(ヨコ)、底部ヘラケズリ？	ヘラナデ	◎			石英 1㎜大の小石	黄灰色	2.5Y4/1	明灰黄色	2.5Y4/2	
131－023	SD－025	1、2、3	土師器	甕	胴部の15%	——	——			[15.2]	ヘラナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)	◎			石英 1㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
132－024	SD－008	1	弥生土器	壺	底部100%	——	6			[4.8]	ハケ、ナデ(ヨコ)	ヘラナデ(ヨコ)	◎		◎	ウンモ 石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	5YR6/4	
132－025	SD－014	1	弥生土器	壺	底部の100%	——	7			[4.6]	ハケ(タテ)	ナデ(ヨコ)			◎	ウンモ 石英 白色粒	橙色～灰色	5YR6/6～5Y4/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	
132－026	SD－014	1、3	弥生土器	壺	全体の80%	(14.6)	5.2			[8.8]	磨滅しているが、一部ヘラの当たりと輪積痕がみられる	ヘラナデ 輪積痕	◎		◎	1㎜大の小石	橙色	7.5YR6/8	橙色	7.5YR6/6	
132－027	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/4	橙色	5YR6/6	
132－028	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——			◎	ウンモ 1㎜大の小石	赤灰色	2.5YR4/1	橙色	7.5YR6/6	赤彩
132－029	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——			◎	ウンモ 白色粒	黄灰色	2.5Y5/1	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
132－030	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ 石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
132－031	SD－025	1	弥生土器	壺	破片	——	——			[3.4]	——	——	◎			ウンモ	明灰黄色	2.5Y5/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	
132－032	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ	橙色	7.5YR6/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	
132－033	SD－026	1	弥生土器	壺	破片	——	——			[2.2]	——	——	◎			石英	にぶい黄橙色	10YR7/4	褐灰色	10YR4/1	
132－034	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ 石英	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR6/4	
132－035	SD－025	2	土師器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			石英	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
132－036	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——			◎	ウンモ 白色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
132－037	SD－026	1	弥生土器	壺	破片	——	——			[2.4]	——	——	◎		◎	ウンモ	灰黄色	2.5Y6/2	橙色	7.5YR7/6	
132－038	SD－026	1	弥生土器	甕	破片	——	——			[3.2]	——	——			△	ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR6/3～10YR4/1	
132－039	SD－014	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	白色粒	にぶい黄褐色	10YR5/3	橙色	7.5YR6/6	
132－040	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ	灰褐色	7.5YR6/2	灰色	7.5Y6/1	
132－041	SD－014	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——				白色粒 石英	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
132－042	SD－014	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——			◎	ウンモ 白色粒	橙色	5YR6/6	にぶい褐色	7.5YR5/3	
132－043	SD－028	1	縄文土器	深鉢	破片	——	——			[7.2]	——	——	◎			ウンモ	赤褐色～黒褐色	2.5YR4/6～5YR3/1	暗赤褐色	2.5YR3/4	
132－044	SD－026	1	弥生土器	甕	破片	——	——			[2.1]	——	——				黒ウンモ 石英 白色粒	明灰黄色	2.5Y5/2	橙色	7.5YR7/6	
132－045	SD－011	1	その他	手づくね	全体の50%	(5.4)	4.4			2.9	ナデ	指頭圧痕			◎	ウンモ	褐灰色	5YR4/1	暗灰色	N3/	
133－001	B区P－134	1	その他	ミニチュア	全体の50% 口縁部の40% 胴部の50% 底部の40%	(4.2)	(3.4)			2.5	ヘラナデ(ヨコ)	ヘラナデ	◎		◎	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	黄灰色	2.5Y4/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頚部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
133－002	U14－28、39	2	その他	ミニチュア台付鉢	全体の30% 口縁部の25% 胴部の25%	(6.0)	——			[3.0]	——	——		△			にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
133－003	B区P－29	1	その他	手づくね	全体の40% 胴部の20% 底部100%	——	3.0			[2.4]	ヘラナデ(ヨコ)、回転ヘラケズリ	回転ナデ			△	ウンモ 白色粒	明灰黄色	2.5Y5/2	明灰黄色	2.5Y5/2	
133－004	U15－48～59	2	その他	ミニチュア甕	底部の90%	——	2.1			[2.1]	ナデ	ナデ	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
133－005	V14－84	3	その他	ミニチュア高坏	全体の50% 脚部の100%	——	3.8			[2.7]	ヘラナデ	ヘラナデ		△	△	ウンモ	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
133－006	V14－23	4	その他	ミニチュア甕	全体の50% 胴部の50% 底部の100%	——	3.2			[3.1]	——	——	△				橙色	2.5YR6/6	橙色	2.5YR6/6	内外面摩滅
133－007	V14－64	1	その他	ミニチュア高坏	脚部の80%	——	5.0			[3.7]	ヘラナデ	ナデ				ウンモ	橙色	7.5YR6/8	橙色	7.5YR6/8	
133－008	U14－28	2	その他	ミニチュア鉢	全体の40% 胴部の30% 底部の100%	——	3.0			[5.0]	ミガキ（タテ）、底部無調整	ミガキ	◎	◎		白色粒	明黄褐色	10YR6/8	橙色	5YR7/6	
——	3T－003	28	弥生土器	甕	底部90%	——	7.6			[3.0]	——	ヘラナデ、ヘラケズリ	◎				にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	外面摩滅
——	3T－003	29	弥生土器	壺	底部60%	——	(6.0)			[1.9]	——	——	◎			ウンモ	暗赤褐色	2.5YR3/6	暗赤褐色	2.5YR3/6	赤彩 内外面摩滅
——	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ	にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	
——	SD－014	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——			◎	ウンモ 白色粒	にぶい橙色	7.5YR6/4	灰色	5Y5/1	
——	SI－002	7	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	黒褐色	2.5Y3/1	黄灰色	2.5Y6/1	
——	SI－006	1、38	須恵器	壺	破片	——	——			[8.7]	タタキ（平行　カキ目調整）	当て具痕、青海波文	△			1～1.5㎜大の小石	灰色	7.5Y5/1	灰色	7.5Y6/1	ロクロ調整
——	SI－017	4	土師器	坏	破片	——	——			——	——	——					にぶい橙色	7.5YR7/4	暗灰色	N3/	
——	SI－023	1、15、22	弥生土器	鉢	底部の10%	——	(7.4)			[6.7]	ナデ	ナデ	◎			ウンモ 白色粒	赤褐色	2.5YR4/8	赤褐色	2.5YR4/8	赤彩
——	SI－024	1	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	赤彩
——	SI－024	9	土師器	坏	底部の90%	——	——			[2.6]	ヘラナデ	ヘラナデ	△				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
——	SI－025	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
——	SI－026	7	土師器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎	◎		1～3㎜大の小石	橙色	2.5YR6/6	にぶい赤褐色	5YR5/3	
——	SI－035	16	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ　石英	にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色	10YR5/2	
——	SI－035	20	土師器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	橙色	7.5YR6/6	灰黄褐色	10YR5/2	
——	SI－037	1	須恵器	甕	破片	——	——			——	——	——				白色粒	灰色	10Y5/1	灰色	N5/	
——	SI－044	19	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎		◎	ウンモ	明赤褐色	2.5YR5/8	赤褐色	2.5YR4/8	赤彩
——	SI－045	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤彩
——	SI－053	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	灰黄褐色	10YR6/2	黒褐色	10YR3/2	
——	SI－053	26	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR6/2	橙色	7.5YR7/6	赤彩
——	SI－055	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	5YR6/8	赤彩
——	SI－055	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△				にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
——	SI－058	41	土師器	壺	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ 黒色粒	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
——	SI－058	62	土師器	甕	破片	——	——			——	——	——	◎			1～3㎜大の小石	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい橙色	5YR6/4	
——	SI－065	3	その他	瓦	破片	——	——			——	——	——	◎			ウンモ　石英	浅黄橙色	10YR8/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
——	SI－065	1、18、41	土師器	甕	口縁部の20% 胴部の一部	(27.2)	——			[13.0]	ハケ（タテ）、口縁部ナデ（ヨコ）	ナデ（ヨコ）	△	△		白色粒 1㎜大の小石	灰黄褐色	10YR4/2	にぶい黄橙色、褐色	10YR6/3 10YR4/1	
——	SI－065	1、26	土師器	甕	全体の20%	——	——			[11.55]	ハケ（タテ）、ナデ（ヨコ）	ナデ	◎			ウンモ 1㎜大の小石	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色、一部灰色	7.5YR7/4 5Y4/1	黒斑？
——	SI－068	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
——	SI－068	1	弥生土器	壺	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ	灰赤色	2.5YR6/2	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
——	SI－068	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——	△				橙色	7.5YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/4	
——	SI－068	1	弥生土器	台付甕	破片	——	——			——	——	——	△			1～2㎜大の小石	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	
——	SI－068	1	弥生土器	甕	破片	——	——			——	——	——					にぶい黄橙色	10YR6/4	灰黄褐色	10YR5/2	
——	SI－068	41	弥生土器	鉢	破片	——	——			——	——	——	△			ウンモ　石英	赤褐色	10R5/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	赤彩
——	SI－079	5	弥生土器	壺	底部の98%	——	(3.2)			[4.2]	——	——	◎			小石	黄橙色	7.5YR7/8	橙色	2.5YR6/8	混入品 内外面摩滅
——	SK－024	1	須恵器	壺	高台部破片	——	——			[2.3]	——	底部付近に釉付着					灰オリーブ色	5Y6/2	灰色	5Y5/1	
——	U14－39	2	須恵器	大型壺	破片	——	——			[8.5]	タタキ（平行）	同心円状の工具をあてている					灰白色	7.5Y7/1	灰オリーブ色	5Y6/2	
——	U15－38	6	弥生土器	高坏脚部	破片	——	——			[7.8]	——	ヘラナデ（ヨコ）	◎			ウンモ	明黄褐色	10YR6/6	明黄褐色	10YR6/6	
——	V11－C区	1	瀬戸美濃	折縁輪禿鉢	破片	——	——			[2.5]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					灰白色	5Y8/2	灰白色	5Y8/2	登窯７
——	V12－03、13	03－2、13－2	土師器	壺	肩部の40%	——	——			[5.6]	ヘラナデ（タテ）	ハケ（ヨコ）	△			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色～褐灰色	7.5YR5/3～10YR4/1	
——	V13－64	3	弥生土器	台付甕	脚部の10%	——	——			——	ナデ	ナデ	△			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	外面赤彩
——	V13－80	2	弥生土器	壺	破片	——	——			——	ナデ	ナデ	△			ウンモ	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	赤彩
——	V14－13	2	瀬戸美濃	折縁深皿	破片	——	——			[2.7]	ロクロ挽き整形	ロクロ挽き整形					灰オリーブ色	7.5Y5/3	オリーブ灰色	10Y6/2	古瀬戸後期様式Ⅱ期　灰釉
——	表採	1	土師器	壺	胴部下部破片	——	7.4			[11.8]	ヘラケズリ（タテ）、ナデ	ヘラナデ（タテ）	△			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	褐灰色	10YR4/1	赤彩

表６　宇戸台遺跡土器類観察表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
148－1	SD－003	4	弥生土器	壺	全体40%	——	(8.2)			[16.0]	ハケ、底部から向かって横から縦になる	ヘラナデ	◎				にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	刷毛目単位１㎝当10本
149－1	SD－005	2、3、5	弥生土器	長頸壺	全体90%	9.5	(5.9)			32.5	縦方向のイタナデ、後ヘラナデ、口唇部胴部縄文痕	横方向のヘラナデ、口縁部指ナデ	◎		○	白色砂粒○ ウンモ	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	
149－2	SD－005	1	弥生土器	長頸壺	口頸部70%	(11.6)	——			[5.8]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎				灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	
150－1	SD－010	21	弥生土器	長頸壺	全体90%	——	4.9	6.4	23.2	[32.9]	ヘラミガキ、縄文痕、底外ナデ	不明	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	胴部縄文、３本で１単位
150－2	SD－010	14	弥生土器	長頸壺	底部100%	——	7.0			[8.3]	ハケ、ヘラナデ	横方向のヘラナデ	○		▲	ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
150－3	SD－010	5	弥生土器	長頸壺	胴部50%	——	6.0		(26.2)	[25.5]	底部に向かって横方向のヘラミガキから縦方向へと変わる、流水紋	摩滅のため不明	◎			白色砂粒◎ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	流水文（沈線文以外全て赤彩）
151－4	SD－010	4	弥生土器	長頸壺	全体30%	——	6.6			[15.0]	縦方向のヘラミガキ、ハケ、底外ナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい赤褐色	5YR5/4	
151－5	SD－010	23、24	弥生土器	長頸壺	全体40%	——	7.0		20.1	[17.4]	ハケ	ヘラナデ、剥離	◎		◎	ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい赤褐色	5YR5/3	
151－6	SD－010	18	弥生土器	長頸壺	全体20%底部100%	——	7.2		(18.6)	[13.5]	ハケ、底外木葉痕	ヘラナデ、剥離	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	刷毛目単位1cm当4本
151－7	SD－010	5、9、19	弥生土器	壺	底部100%	——	7.2			[7.0]	ミガキ後ナデか	ヘラナデか、剥離	◎			白色砂粒△	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
151－8	SD－010	22	弥生土器	鉢	全体90%	15.4	6.8			11.8	口縁部横方向のハケ、胴部右下がり、底外ナデ	ハケ調整後ナデ消す	○			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	刷毛目単位1cm当4本、口唇部刻み
151－9	SD－010	25	弥生土器	甕	胴部30%	(39.4)	——			[29.6]	右下がりのヘラナデ	横方向のヘラナデ	◎		▲	ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	5YR4/2	口唇部押捺から刻みに変わる
151－10	SD－010	25	弥生土器	小型甕	全体30%	(15.6)	17.4			4.3	ヘラナデ	ヘラナデ	◎				にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	口唇部刻み、内外面摩滅
151－11	SD－010	6、15、19	弥生土器	甕	全体40%	(28.0)	——			29.0	左下がりのヘラナデ	摩滅のため不明				白色砂粒◎ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	口唇部刻み
151－12	SD－010	18	弥生土器	甕	全体50%	(25.0)	——			[19.5]	縦方向のヘラナデ、口縁部ヨコナテ	右下がりのヘラナデ				白色砂粒◎ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	口唇部刻み
152－1	SD－014	1	弥生土器	壺	底部100%	——	7.6			[4.6]	ヘラミガキ、横方向のナデ	摩滅のため不明	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
154－1	SD－001	6	土師器	壺	破片	(12.8)	——			[2.6]	口縁ヨコナデ	不明	○				にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	
154－2	SD－001	20	土師器	壺	底部70%	——	(5.0)			[2.0]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	○				にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい橙色	2.5YR6/4	
154－3	SD－001	5	土師器	壺	底部100%	——	7.0			[5.0]	ヘラナデ	ヘラナデ	◎			ウンモ	赤灰色	2.5YR4/1	灰褐色	7.5YR5/2	
154－4	SD－001	13、16、19	土師器	高坏	脚部80%	——	(17.8)			[5.4]	ヘラミガキ	摩滅のため不明	◎			白色砂粒▲混入物◎	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	孔6ヶ（3ヶずつ2段）
154－5	SD－001	3、4、7、9～16	土師器	壺	全体80%	19.0	(9.2)			23.9	口縁ヨコナデ、頸部左下がりヘラミガキ、胴部右下がりヘラミガキ	ヘラナデ	◎			混入物◎	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	有段口縁　輪積痕
156－1	SD－008	8	土師器	高坏	坏部ほぼ完形	20.0	——			[7.4]	摩滅のため不明	剥離	◎				にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR6/3	
156－2	SD－009	1、6	土師器	壺	口縁部60%	11.7	——			[4.6]	ヘラミガキ、横方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	横方向のヘラナデヘラケズリ	◎	○	◎	黒色砂粒◎	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR5/4	
156－3	SD－009	1	土師器	壺	口縁部破片			(8.4)		[2.5]	ヘラミガキ	ヘラナデ	◎	○	◎	黒色砂粒◎	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
156－4	SD－008	3、5、9、10	土師器	壺	口頸部100%	11.8	——			[10.7]	ヘラミガキ	横方向のヘラナデ	○			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい黄褐色	10YR5/3	
156－5	SD－006	4	土師器	壺	胴部20%	——	——		(20.0)	——	上部縦方向のミガキ、下部ヨコミガキ	ヘラミガキ					褐灰色	7.5YR4/1	にぶい橙色	5YR6/3	外面赤彩
156－6	SD－006	6	土師器	壺	口縁部破片	(11.6)	——			[4.0]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎			白色砂粒▲ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	
156－7	SD－006	3	土師器	台付甕	脚部100%	——	11.0			[7.5]	ヘラミガキ、指ナデ痕	ヘラケズリ	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	にぶい橙色	5YR6/4	
156－8	SD－008	4	土師器	小型甕	全体80%	(10.4)	3.1			9.0	ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	ヘラケズリ	◎			ウンモ	灰褐色	7.5YR4/2	にぶい赤褐色	5YR5/4	
156－9	SD－008	7	土師器	壺	全体80%	15.7	——		34.0	36.3	ヘラミガキ、横方向のナデ、口縁部ヨコナデ	ヘラナデ、頸部は横方向のヘラミガキ	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	焼成後底部穿孔
156－10	SD－008	5、6、7	土師器	壺	全体80%	14.9	——		31.9	35.7	ヘラミガキ、横方向のナデ、口縁部ヨコナデ	右下がりのヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	焼成後底部穿孔、底に向かってミガキの巾が広くなる
156－11	SD－006	5	土師器	高坏	脚部50%	——	——			[2.5]	ヘラミガキ	ヘラナデ	◎			ウンモ	褐灰色	5YR4/1	にぶい褐色	7.5YR5/3	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)（）は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
156－12	SD－008	1、3	土師器	壺	底部100%	——	5.5			[7.1]	摩滅のため不明	ヘラケズリ	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	灰黄褐色	10YR5/2	
156－13	SD－010	13	土師器	壺	胴部25%	——	——	(8.0)	(25.0)	[17.5]	縦方向のヘラミガキ	横方向のヘラナデ	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	
156－14	SD－008	2	土師器	壺	底部50%	——	(6.5)			[7.1]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎		▲	ウンモ	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい褐色	7.5YR5/4	
156－15	SD－008	2	土師器	甕	底部40%	——	(7.0)			[2.0]	ヘラナデ	不明	◎			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	
157－16	SD－010	2、3、4	土師器	大型短頸壺	全体70%	17.5	——		51.9	[52.0]	ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、S字状結節文	剥離のため不明	◎			ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	焼成後底部穿孔、S字状結節文4本で1単位
159－1	SI－015	5	土師器	坏	全体80%	13.8	——			4.1	口縁部横方向のナデ、摩滅のため不明	ナデ	◎	△			にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR6/3	
159－2	SI－015	4	土師器	坏	口縁部10%	(12.6)	——			[4.1]	横方向のヘラケズリ、口縁部横方向のナデ	ヘラナデ	◎	△	▲		にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	
159－3	SI－015	4	土師器	甕	口縁部破片	——	——			——	不明	不明	◎	○			にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	上総地域産
159－4	SI－015	4	土師器	甕	口縁部破片	——	——			——	不明	不明	◎	△			にぶい褐色	7.5YR6/3	灰黄褐色	10YR5/2	上総地域産
160－1	SI－017	4	土師器	坏	全体90%	14.7	——			4.3	底外ヘラケズリ（手持ち）、一部にミガキが残る	一部にミガキが残る	◎		△	ウンモ	灰褐色	7.5YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
160－2	SI－017	1	土師器	甕	全体70%	19.8	7.8			29.8	ハケ、ヘラナデ、口縁部横方向のナデ	ヘラナデ	◎			灰色小石	灰褐色	7.5YR5/2	にぶい褐色	7.5YR5/3	在地産
160－3	SI－017	2	土師器	甕	全体40%	18.8	7.4			32.3	ハケ、ヘラナデ、口縁部横方向のナデ	ヘラナデ	◎	△		灰色小石	灰褐色	5YR5/2	にぶい赤褐色	5YR5/3	在地産
162－1	SI－001	13	須恵器	高台付坏	底部25%	——	(10.0)			[1.3]	ヨコナデ、底外ヘラケズリ（回転）	ヨコナデ	△				褐灰色	10YR5/1	灰色	5Y6/1	転用硯
162－2	SI－001	1、2	土師器	坏	全体30%	(13.2)	(8.2)			3.6	ヨコナデ、底外ヘラケズリ（手持ち）	不明	◎	△			褐灰色	10YR4/1	にぶい褐色	7.5YR6/3	
162－3	SI－001	2	土師器	坏	全体30%	(13.4)	(7.0)			4.5	不明	不明	◎	△		ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
162－4	SI－001	13	土師器	坏	全体20%	(13.6)	(7.6)			3.6	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎	△			にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
162－5	SI－001	6、8	土師器	坏	口縁部35%	(13.4)	——			[3.3]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎	○		1～2㎜大の小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	
162－6	SI－001	2	土師器	坏	全体15%	(12.3)	(7.3)			4.4	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎		▲		にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
162－7	SI－001	4	土師器	坏	口縁部20%	(13.8)	(6.2)			4.7	指頭圧痕、口縁部横方向のナデ	横方向のナデ	◎		○	ウンモ、2～3㎜大の小石	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい橙色	2.5YR6/4	
162－8	SI－001	8	土師器	坏	全体30%	(16.0)	(8.8)			[3.7]	不明	不明	◎	△			にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
162－9	SI－001	13	土師器	坏	口縁部35%	(15.8)	——			[4.6]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎				橙色	2.5YR6/6	橙色	2.5YR6/6	
162－10	SI－001	8、10、13	土師器	鉢	口縁部35%	(15.4)	——			[4.5]	ヘラケズリ（手持ち）、口縁部横方向のナデ	ヘラナデ	◎	○		ウンモ	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR5/3	
162－11	SI－001	2	須恵器	甕	破片	——	——			[4.0]	平行タタキ	ヘラケズリ及びヘラナデ	▲				黄灰色	2.5Y6/1	灰色	5Y6/1	
162－12	SI－001	12	須恵器	甕	破片	——	——			——	平行タタキ	同心円文当て具痕	△				褐灰色	10YR6/1	褐灰色	7.5YR6/1	東海地域産甕
162－13	SI－001	11	須恵器	甕	破片	——	——			——	平行タタキ	同心円文当て具痕	▲				褐灰色	10YR6/1	にぶい黄橙色	10YR7/2	東海地域産甕
162－14	SI－001	2、6	土師器	甕	口縁部25%	(18.0)	——			[7.4]	斜め方向のヘラケズリ、口縁部ヨコ方向のナデ	不明	◎	△		ウンモ、1～2㎜大の小石白色粒	にぶい橙色	5YR6/4	灰褐色	7.5YR5/2	
162－15	SI－001	13	土師器	甕	口縁部15%	(16.8)	——			[4.0]	横方向のナデ	横方向のナデ	◎			ウンモ	にぶい橙色	5YR6/4	灰褐色	5YR5/2	武蔵型甕
164－1	SI－004	13	須恵器	坏	底部45%	——	(7.4)			[1.7]	ヨコナデ、底外ヘラケズリ（回転）	ヨコナデ	△				灰黄褐色	10YR6/2	黄灰色	2.5Y6/1	

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値（cm）（）は推定値、［］は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頚部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
164－2	SI－004	3	土師器	坏	全体80%	12.4	7.6			4.5	不明	不明	◎	◎			にぶい橙色	5YR6/4	にぶい橙色	5YR6/4	
164－3	SI－004	14、17、18	土師器	坏	全体50%	(12.4)	8.0			[3.3]	ヨコナデ、底外ヘラケズリ（手持ち）	ヨコナデ	◎	○			にぶい橙色	2.5YR6/4	にぶい橙色	2.5YR6/4	
164－4	SI－004	2、13	土師器	坏	全体95%	12.0	7.0			3.7	不明	不明	◎			1～2㎜大の小石 白色粒	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	
164－5	SI－004	8	土師器	坏	全体90%	12.0	6.7			3.7	横方向のナデ、底外糸切り（回転）ヘラケズリ（手持ち）	不明	◎	△			にぶい橙色	2.5YR6/4	にぶい橙色	5YR6/4	
164－6	SI－004	16、22	土師器	椀	口縁部10%	(13.0)	(5.8)			[5.9]	ヘラケズリ（手持ち）、口縁部横方向のナデ	ナデ	◎	○			灰褐色	7.5YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	
164－7	SI－004	1	土師器	高台付椀	底部40%	——	(9.0)			[2.0]	ヨコナデ、底外ヘラケズリ（回転）	ミガキ	◎				灰色	N4/0	にぶい黄橙色	10YR6/3	内面黒色処理 削り出し高台
164－8	SI－004	13	須恵器	長頚壺	底部30%	——	(7.8)			[3.0]	底外ヘラケズリ（回転）、ヨコナデ、部分的に自然釉付着	底部に自然釉付着	△				黄灰色	2.5Y6/1	灰黄褐色	10YR6/2	
164－9	SI－004	13	土師器	甕	口縁部10%	——	——			——	口縁部横方向のナデ	不明	◎		○		にぶい赤褐色	5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	
164－10	SI－004	13	土師器	甕	口縁部15%	(14.0)	——			[4.1]	指頭圧痕、口縁部横方向のナデ	不明	◎	△		ウンモ	褐灰色	7.5YR4/1	灰褐色	7.5YR4/2	
164－11	SI－004	9	土師器	甕	口縁部15%	(17.0)	——			[3.0]	横方向のナデ	横方向のナデ	◎		○	ウンモ、白色粒	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR5/3	
164－12	SI－004	13	須恵器	甕	破片	——	——			——	平行タタキ	横方向のナデ、同心円文当て具痕	△				褐灰色	10YR5/1	灰色	N5/0	産地不明
164－13	SI－004	6	須恵器	甕	破片	——	——			——	平行タタキ	ヘラケズリ 無文の当て具痕	△			黒色ふき出し釉	灰褐色	7.5YR5/2	褐灰色	5YR6/1	東海地域産
164－1	SI－005	4	土師器	高台付椀	底部20%	——	(8.0)			[3.8]	ヨコナデ	ミガキ	◎		▲	ウンモ	赤灰色	2.5YR4/1	にぶい褐色	7.5YR6/3	内面黒色処理
164－1	SI－008	1	土師器	甕	破片	——	——			[5.6]	ヘラケズリ	ヘラナデ	◎			灰色小石	灰黄褐色	10YR5/2	灰褐色	7.5YR5/2	在地産
165－1	SI－007	35	土師器	坏	全体50%	(14.0)	8.0			4.1	ヘラケズリ（手持ち）	摩滅のため不明	◎			2～3㎜大の小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰黄褐色	10YR5/2	上総型坏
165－2	SI－007	1	土師器	無頚壺	口縁部40%	(7.6)	——			[4.1]	ヘラケズリ（手持ち）	ヘラナデ	◎	▲			にぶい赤褐色	5YR5/4	灰褐色	5YR4/2	
165－3	SI－007	1、11、13、18、33、36、40、41	土師器	甕	口縁部～胴部上半部10%	(20.2)	——			[20.8]	縦方向のヘラケズリ、ヘラナデ、口縁部横方向のナデ	ヘラナデ	◎	△	△	1～2㎜大の灰色小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	上総地域産
165－4	SI－007	1、7、19、37、42、43、44	土師器	甕	口縁部15% 胴部30%	(20.4)	——			[23.2]	縦方向のヘラケズリ、ヘラナデ、口縁部の一部に極めて粗いハケ調整がみられる	ナデ	◎	△		灰色小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰褐色	7.5YR5/2	在地産
165－5	SI－007	38、45、46、47、50、51、52、57、58	土師器	甕	口縁部10% 胴部60%	(18.0)	——			[23.8]	縦方向のヘラケズリ、口縁部横方向のナデ	ナデ	◎	△		灰色小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい黄褐色	10YR5/3	在地産
165－6	SI－007	1、16、17	土師器	甕	口縁部45% 胴部20%	(20.4)	——			[13.6]	縦方向のヘラケズリ、口縁部横方向のナデ	ヘラナデ、ハケ	◎	▲		灰色小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	在地産
165－7	SI－007	3、42	土師器	甕	口縁部50%	(19.8)	——			[10.2]	縦方向のヘラケズリ、ヘラナデ、口縁部横方向のナデ	ナデ	◎	▲		灰色小石	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	在地産
165－8	SI－007	1、20	土師器	甕	口縁部～胴部上半部15%	(16.8)	——			[11.3]	口縁部横方向のナデ	ヘラナデ	◎	▲	▲		灰褐色	7.5YR5/2	にぶい赤褐色	5YR5/4	
166－9	SI－007	54、56、59、60	土師器	甕	口縁部25%	(21.6)	——			[7.5]	横方向のヘラケズリ、口縁部横方向のナデ	ナデ	◎	▲		灰色小石	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	在地産
166－10	SI－007	1	土師器	甕	口縁部20%	(18.1)	——			[7.6]	ヘラナデ、口縁部横方向のナデ	不明	◎	△			にぶい褐色	7.5YR5/3	灰黄褐色	10YR5/2	
166－11	SI－007	38、53、54	土師器	甕	底部100%	——	8.0			[10.9]	縦方向のヘラケズリ、底外木葉痕	ナデ、ハケ	◎			灰色小石	赤灰色	2.5YR5/1	灰黄褐色	10YR5/2	在地産
166－12	SI－007	49	土師器	甕	口縁部20%	(15.1)	——			[9.0]	ヘラナデ（タテ）、口縁部横方向のナデ	ヘラナデ	◎	▲		石英、灰色小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	在地産

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm) ( )は推定値、[ ]は現存値					調整		胎土				内面色調		外面色調		備考
						口径	底径	頸部径	最大径	器高	外面	内面	砂粒	赤色粒	白色針	その他					
167－1	SI－016	11、12	土師器	坏	全体30%	(14.6)	(9.8)			[4.2]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎	△		灰色小石	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい橙色	5YR6/4	
167－2	SI－016	1	土師器	坏	全体30%	(13.7)	(7.1)			3.7	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎	○		灰色小石	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
167－3	SI－016	6	土師器	小型甕	口縁部15%	(14.6)	——			[4.0]	不明口縁部横方向のナデ	ナデ	◎	△			にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/3	
168－1	SI－018	4	土師器	坏	口縁部15%	(13.8)	(10.0)			[4.0]	斜め方向のヘラケズリ(手持ち)、口縁部横方向のナデ	ナデ	◎	▲			にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	
168－2	SI－018	4	土師器	甕	底部10%	——	(7.0)			[4.5]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎	▲		灰色小石	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	在地産
168－3	SI－018	4	その他	ミニチュア坏	完形	4.3	——			1.6	不明	指頭圧痕	◎				灰褐色	7.5YR4/2	黄灰色	2.5Y5/1	
168－1	SI－019	4	土師器	坏	全体10%	(13.2)	(7.8)			3.7	ヘラケズリ(手持ち)、口縁部横方向のナデ	不明	◎			灰色小石	灰褐色	7.5YR5/2	灰褐色	7.5YR5/2	在地産
168－2	SI－019	2、8	土師器	坏	口縁部20%	(12.8)	(7.7)			[3.8]	摩滅のため不明	摩滅のため不明	◎			灰色小石	にぶい赤褐色	5YR5/3	にぶい橙色	5YR6/4	
168－3	SI－019	1	土師器	甕	底部破片	——	——			——	横方向のヘラケズリ	不明	◎	▲		ウンモ、灰色小石	にぶい黄橙色	10YR6/3	褐灰色	7.5YR4/1	
169－1	SB－002	P2-3	土師器	坏	口縁部破片	——	——			——	不明	不明	◎	△			にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	
173－1	SH－014	1	土師器	坏	口縁部10%	(12.6)	——			[3.7]	横方向のヘラケズリ(手持ち)、口縁部横方向のナデ	不明	◎		△		灰褐色	7.5YR4/2	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	
173－2	SH－005	1	土師器	甕	破片	——	——			——	横方向のヘラケズリ、コの字形の頸部を有する	ナデ	○			ウンモ	にぶい赤褐色	5YR5/3	褐灰色	7.5YR4/1	武蔵型甕
174－1	SD－007	SI-007 1	青磁	碗	破片	——	——			——							灰色	10Y5/1	灰色	10Y5/1	龍泉窯系　I-5b類
174－2	SD－007	SD-003 2	土師器	坏	底部100%	——	4.8			(2.7)	ヨコナデ、ロクロ調整、底外糸切り(回転)	ヨコナデ、ロクロ調整	○				にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい赤褐色	5YR5/4	
175－1	SD－011	SI018 4	瀬戸美濃	折縁小皿	全体40%	(8.7)	(4.2)			2.1	灰釉、ロクロ調整、底外糸切り(回転)	灰釉、ロクロ調整					黄灰色	2.5Y6/1	黄灰色	2.5Y4/1	古瀬戸後期様式Ⅰ期
175－2	SD－011	SI018 4	瀬戸美濃	筒形香炉	口縁部30%	(11.8)	——			[5.4]	灰釉、ロクロ調整	ロクロ調整					灰黄褐色	10YR6/2	灰オリーブ色	5Y6/2	古瀬戸後期様式Ⅰ期
175－3	SD－011	5	渥美	壺	底部50%	——	(7.2)			[4.3]	横方向のナデ、下端部線状ヘラケズリ、ロクロ調整、底外荒いナデ、圧痕	ナデ(指)、横方向のナデ、ロクロ調整				白色砂粒▲	褐灰色	7.5YR5/1	褐灰色	10YR5/1	型式不明
175－4	SD－011	3	瀬戸美濃	折縁深皿	口縁部破片	——	——			——	ヘラケズリ(回転)、ヨコナデ、ロクロ調整	ロクロ調整				白色砂粒▲	灰白色	10YR8/2	灰黄褐色	10YR6/2	古瀬戸後期様式Ⅰ期
175－5	SD－011	1	灰釉陶器	長頸壺	底部45%	——	(7.8)			[3.1]	ヘラケズリ(回転)、ヨコナデ、ロクロ調整	ロクロ調整、自然釉					褐灰色	10YR5/1	褐灰色	10YR6/1	
176－1	SE－001	3	常滑	甕	底部30%	——	(15.0)			[4.8]	ナデ、底外砂目	自然釉付着	○				褐灰色	10YR5/1	褐灰色	5YR4/1	
176－2	SE－001	5	渥美	壺	破片	——	——			——	タタキ、文様あり	無文の当て具使用	○				赤灰色	10R5/1	褐灰色	7.5YR5/1	刻画文壺、袈裟襷文・蓮弁文
177－1	N17－75	1	土師器	高坏	坏部30%	(14.0)	——			[5.9]	摩滅不明	ミガキ	◎	△		ウンモ、2～3㎜大の小石	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	
177－2	トレンチ5	1	瀬戸美濃	平碗	口縁部15%	(18.4)	——			(5.7)	ヘラケズリ(回転)、ロクロ調整(灰釉)	ロクロ調整(灰釉)					灰黄色	2.5Y6/2	灰黄色	2.5Y6/2	古瀬戸後期様式Ⅰ期

表7　萱野遺跡銭貨観察表

挿図番号	保存リスト番号	遺構番号	遺物番号	銭種	書体	読	初鋳年	外縁外径(㎜)	外縁内径(㎜)	内郭外径(㎜)	内郭内径(㎜)	外縁厚(㎜)	内面厚(㎜)	量　目(g)	備　考
120－01	15	V13－72	3	淳化元宝	草書	回読	990年	24.68	18.19	6.73	5.57	1.17	0.65	2.72	
120－02	18	V14－10	2	咸平元宝	真書	回読	998年	24.05	18.8	7.51	5.45	1.27	0.65	2.28	
120－03	2	U13－59	2	祥符元宝	真書	回読	1009年	24.4	19.38	7.31	6.04	1.31	0.90	3.27	
120－04	8	V13－33	3	皇宋通宝	篆書	対読	1038年	24.57	19.86	8.64	7.51	1.47	0.95	2.80	
120－05	12	V13－51	3	皇宋通宝	篆書	対読	1038年	24.21	16.92	7.64	6.07	1.25	1.05	(2.22)	破損
120－06	16	V14－02	2	皇宋通宝	篆書	対読	1038年	24.46	20.62	8.89	7.8	1.05	0.65	1.74	一部に亀裂
120－07	17	V14－03	2	皇宋通宝	真書	対読	1038年	23.69	17.77	8.09	6.27	1.05	1.05	(2.21)	破損
120－08	20	V16－14	2	皇宋通宝	真書	対読	1038年	24.99	19.05	8.7	7.01	1.20	0.85	2.42	破損
120－09	22	SD－001	1	(皇)宋(通宝)	真書	対読	1038年	24.68	18.99	8.52	6.78	1.25	1.00	(3.08)	
120－10	13	V13－52	3	(皇宋)通(宝)	真書	対読	(1038年)	(23.89)	—	—	—	1.15	(1.50)	(1.01)	破損　砂付着
120－11	1	SK－016	2	嘉祐通宝	真書	対読	1056年	24.36	20.02	9.33	7.31	1.59	1.01	3.74	
120－12	4	U14－08	2	嘉祐(通)宝	篆書	対読	1056年	23.63	19.9	7.62	6.36	1.25	0.75	1.99	
120－13	5	V11－81	2	(嘉祐通宝)	篆書	対読	1056年	24.93	18.97	9.35	7.8	1.26	1.20	2.87	X線で文字判別
120－14	11	V13－51	3	熙寧元宝	真書	回読	1068年	23.76	19.42	8.66	7.11	1.28	0.85	2.80	
120－15	9	V13－33	3	元豊通宝	行書	対読	1078年	24.63	19.15	8.72	6.59	1.20	0.85	2.54	
120－16	6	V11－81	2	元豊通(豊)	行書	回読	1078年	24.03	17.88	8.06	6.34	1.32	0.85	(1.71)	破損
120－17	23	SD－001	7	元豊通宝	篆書	回読	1078年	25.63	17.75	7.81	6.66	1.11	0.65	2.68	
120－18	21	表採	2	(元)豊通宝	篆書	回読	1078年	24.25	19.33	8.29	6.65	1.49	0.85	(1.75)	1/4破損
120－19	10	V13－34	2	元祐通宝	草書	回読	1086年	24.67	20.13	8.45	6.58	1.42	0.95	2.88	
120－20	3	U13－99	3	聖宋元宝	篆書	回読	1101年	24.15	19.34	7.95	6	1.36	0.98	2.77	
120－21	7	V13－32	3	宣和通宝	篆書	対読	1119年	24.61	20.46	7.71	5.69	1.39	0.62	(2.60)	破損
—	14	V13－71	3	(不明)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(1.90)	破損
—	19	V14－33	3	(不明)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(1.21)	細片

表8　萱野遺跡金属製品観察表

実測番号	挿図番号	遺構番号	グリッド位置	遺物番号	材質	製品名	時代	現存長・径(㎜)	最大幅・高さ(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	備　考
	015－022	SI－023	V14－92	16	銅	腕輪	弥生	13.40	10.96	2.67	2.54	破損（長12×幅9×厚1.3）
	018－028	SI－003	V14－94	41	銅	腕輪	弥生	17.28	10.44	3.06	1.93	バリ状の縁がある
	018－006	SI－004	V15－23	6	銅	腕輪	弥生	28.30	9.62	1.56	1.01	
	021－035	SI－019	V15－01	27	銅	指輪	弥生	19.26×19.46	6.94	1.79	2.43	片端に孔あり、砂付着
	064－044	SI－014	V14－61	45	鉄	棒状	古墳前期	85.2＋	6.80	4.00	7.13	
1	085－007	SI－064	V11－80	1	鉄	ヤリガンナ	古墳	58.2＋	6.20	2.00	3.25	
2	085－008	SI－064	V11－80	1	鉄	ヤリガンナ	古墳	58.15＋	6.33	2.13	3.68	
1	092－004	SI－078	U13－77	16	鉄	タガネ	古墳	52.68	9.66	4.86	10.20	SI－060出土
2	092－005	SI－078	U13－77	16	鉄	タガネ	古墳	48.60	5.27	4.84	6.40	SI－060出土
	118－001	SK－015	V13－11	1	鉄	帯先金具	中世	32.16	18.27	2.54	7.97	裏に布付着、鋲装着
	118－002	SK－015	V13－11	1	鉄	板状	中世	23.27	16.23	1.99	3.17	
	118－001	SK－019	V13－42	2	銅	耳かき	中近世	136.97	12.67	3.12	14.47	完形
	135－001	U15－98	U15－98	6	銅	腕輪	弥生	19.95	10.96	2.67	2.54	両端がやや膨らみ中央部が窪む
	135－002	V10－92	V10－92	1	鉄	小刀	古代	224.20	24.50	4.70	109.20	刀身長201.50　茎長21.50
	135－003	V10－72	V10－72	4	鉄	刀子	古代～中世	118.00	16.20	—	31.28	砂付着　刃部長62.30　茎長56.20
	135－004	U14－67	U14－67	1	鉄	刀子	古代～中世	42.49＋	11.35	4.07	5.77	
	135－005	V10－81	V10－81	1	鉄	工具かタガネ	古墳以降	64.02	8.39	—	19.02	
	135－006－1	V10－82	V10－82	5	鉄	ヤリガンナ	古代～中世	33.01	6.01	2.13	2.31	
	135－006－2	V10－82	V10－82	3	鉄	ヤリガンナ柄	古代～中世	33.88	4.57	—	9.50	
	135－007	C区－P9		1	鉄	方形金具	古代～中世	34.93	40.23	2.27	14.41	

表9　宇戸台遺跡金属製品観察表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	材質	製品名	時代	現存長・径(㎜)	最大幅・高さ(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	備考
173－3	SH－012	1	鉄	鎹	平安	35.95	5.85	5.54	4.12	
176－4	SE－001	15	鉄	鎗？	中世	44.70	19.85	3.51	10.75	
177－5	N17－75	1	鉄	鑿	奈良・平安	230.05	12.50	5.15	68.27	

表10　萱野遺跡鍛冶関連遺物観察表

挿図番号	リスト番号	遺構番号	遺物番号	種類	メタル度	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備考
143－01	44	V10－71	1	羽口(先端部)		70.29	55.12	44.22	99.58	
143－02	82	V14－02	3	羽口か炉壁		39.03	26.05	16.67	11.59	
143－03	89	V15－50	2	トリベ？被熱土器		52.04	59.98	39.00	40.09	
143－04	4	B区一括	1	鉄滓		38.96	29.53	24.07	28.22	
143－05	6	SD－010		鉄滓		38.59	36.04	26.27	43.93	
143－06	14－1	SI－063	1	鉄滓		49.88	22.12	21.25	37.02	
143－07	2	B区－P106	2	板状(鋳造)		125.19	56.01	27.03	144.41	
143－08	14－2	SI－063	1	椀形鍛冶滓		47.93	32.69	21.99	35.98	
143－09	20	SX－003	9	羽口(溶解物付着)		70.35	47.69	42.26	63.29	
143－10	21	SX－003		鉄滓		31.11	26.15	12.59	5.22	
143－11	23－1	U10－57	1	羽口片		33.10	28.51	22.93	12.23	
143－12	23－2	U10－57	1	鉄滓		27.19	20.82	15.66	13.33	
143－13	24	U10－89	2	羽口片		35.09	27.09	25.33	15.37	
143－14	25	U11－69	1	鉄滓		33.28	23.83	18.37	13.76	
143－15	39	V10－42	1	鉄滓		34.15	32.35	19.39	23.08	
143－16	37	U9－68		鉄滓		74.29	62.78	31.59	147.99	
143－17	41－1	V10－61	1	椀形滓(炉底滓)		113.14	96.88	40.18	336.27	
144－18	40	V10－60	1	鉄滓(炉底滓)		46.83	40.59	42.76	99.18	
144－19	42－2	V10－70	4	椀形滓		41.09	35.52	21.23	23.41	
144－20	41－2	V10－61	1	鉄滓		48.26	48.36	34.66	93.45	
144－21	42－1	V10－70	4	鉄滓		64.36	51.76	54.78	184.92	
144－22	42－3	V10－70	4	鉄滓		26.93	21.01	21.10	9.85	
144－23	42－4	V10－70	4	鉄滓		28.60	29.69	15.73	18.55	
144－24	43－2	V10－71	1	椀形滓		66.61	64.12	44.37	197.16	
144－25	43－1	V10－71	1	椀形滓		96.86	79.13	43.65	252.94	
144－26	46	V10－73	1	含鉄鉄滓	L(●)	40.67	55.68	19.82	19.55	
144－27	47－1	V10－80	1	椀形滓		65.85	47.29	24.72	69.13	
144－28	47－2	V10－80	1	鉄滓		51.12	33.27	29.91	46.24	
144－29	48	V10－81	1	鉄滓		51.44	38.29	26.90	53.05	
144－30	49	V10－81	1	鉄滓		39.69	27.68	15.96	20.02	
144－31	53	V10－91	1	鉄滓		36.01	30.14	14.61	11.91	
144－32	55	V10－92	1	鉄滓		40.78	31.07	23.96	19.27	
144－33	52－1	V10－83	2	鉄滓		46.85	35.94	24.58	33.50	
145－34	56	V10－93	2	鉄滓		44.83	32.31	20.01	30.24	
145－35	57	V11－10	1	椀形滓(炉底滓)		44.38	54.75	20.33	66.78	
145－36	60	V12－90	2	椀形滓		50.87	43.22	32.33	86.63	
145－37	61	V13－00	2	鉄滓		40.21	33.64	17.01	21.02	
145－38	62	V13－24	2	含鉄鉄滓(錆化)		34.35	19.00	18.04	8.83	
145－39	69－1	V13－52	3	鉄滓		43.49	26.29	17.41	31.05	
145－40	69－2	V13－52	3	含鉄鉄滓(錆化)		30.45	32.29	15.01	17.47	
145－41	69－3	V13－52	3	鉄滓		35.67	20.23	12.80	6.77	
145－42	75－1	V13－80	1	鉄滓		36.02	29.56	20.73	19.21	
145－43	75－2	V13－80	1	含鉄鉄滓(錆化)		39.77	33.48	35.39	35.57	
145－44	75－3	V13－80	1	鉄塊系遺物(錆化)		29.74	26.60	15.37	12.73	
—	75－4	V13－80	1	含鉄鉄滓	M(◎)	—	—	—	105.32	腐蝕により計測不可

表11　宇戸台遺跡鍛冶関連遺物観察表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種類	メタル度	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重　量(g)	備考
176－3・178－1	SE－001	15	羽口		6.75	—	4.60	134.91	同一個体片　23.16g
178－2	SD－007	1	羽口		5.15	4.50	2.35	23.32	
178－3	SI－015	4	炉壁		5.05	3.70	3.00	24.21	
178－4	SI－015	4	鉄滓		4.25	4.10	1.75	65.25	
178－5	SI－016	6	鉄滓		5.00	2.60	2.45	39.17	他小破片２点　20.50g
178－6	SD－005	5	椀形滓		3.45	3.40	2.75	40.44	
178－7	SD－006	7	含鉄椀形滓	H(○)	6.20	4.95	3.70	134.17	
178－8	SD－007	1	椀形滓		3.65	2.55	2.10	23.20	他小破片２点　14.85g
178－9	SD－007	1	椀形滓		2.15	3.40	2.40	19.87	
178－10	SD－007	1	鉄滓		4.80	3.85	2.50	28.23	
178－11	SD－011	4	椀形滓		5.15	3.35	2.20	41.68	
178－12	SD－011	3	含鉄椀形滓	H(○)	6.40	7.50	3.60	206.28	
178－13	SE－001	15	椀形滓		3.65	4.45	2.10	34.11	
178－14	SE－001	15	含鉄椀形滓	H(○)	3.35	3.25	2.30	24.71	
178－15	SE－001	15	含鉄椀形滓	H(○)	10.95	9.05	4.60	421.24	
178－16	SE－001	15	含鉄椀形滓	H(○)	8.95	8.45	3.60	236.84	

表12　萱野遺跡玉類計測表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	枝番号	種別	長さ（高さ）		径（幅）		孔径		厚	重量	材質	色調	マンセル記号	備考
					最大値	最小値	最大値	最小値	最大値	最小値						
					(㎜)	(㎜)	(㎜)	(㎜)	(㎜)	(㎜)	(㎜)	(g)				
016－010	SI－031	8		小玉	3.90		6.4×6.1		3.4×2.4	3.3×2.4		0.19	ガラス	藍色		
021－036	SI－019	85		小玉	4.10		5.6×5.3		2.4×2.6	2.3×2.3		0.14	ガラス	藍色	3.3PB2.5/5.0	
027－025	SI－044	36		小玉	3.60		4.9×5.1		2.4×2.3	2.3×1.9		0.11	ガラス	にぶ青緑		
064－045	SI－014	65		小玉	2.90		3.3×3.4		2.2×2.1	2.1×2.0		0.05	ガラス	にぶ青緑	10.0BG5.5/5.5	他に同色の破片１
067－001	SX－001	65		勾玉	15.10		10.50		5.9×5.7	4.9×4.4	10.20	2.73	蛇紋岩	灰味黄緑	2.0G5.0/1.0	黒のふ入り
067－002	SX－001	82		勾玉	13.50		9.30		3.4×3.4	3.3×2.5	8.40	1.18	蛇紋岩	灰味黄緑	5.0GY5.0/2.0	ふ入りなし
067－003	SX－001	69	①	土製管玉	3.4+		4.6×4.8		1.3×1.2			0.10	土製	赤茶（えび茶）	5.0R3.5/3.0	赤彩
067－004	SX－001	69	②	土製管玉	9.2+		4.8×5.2		1.3～1.4			0.18	土製	赤茶（えび茶）		
067－005	SX－001	132		小玉	2.70		4.5±		1.1±			0.02	ガラス	明るい青緑	10.0BG6.0/6.0	３片に割れる
076－008	SI－010	131		勾玉	33.50		20.60		5.8×4.3	5.1×4.0	15.50	10.69	蛇紋岩	黄茶、暗い黄茶	2.5Y5.0/3.0 5.0Y3.0/1.0	マーブル状
079－001	SI－016	25		勾玉	20.10		10.30		2.5×2.7	2.7×2.5	6.20	1.55	滑石	青味灰	10.0BG2.5/1.0	
085－009	SI－064	11		管玉	6.00		2.60	2.60	1.4×1.6	1.50		0.07	碧玉	にぶ緑	8.5G4.5/3.0	両側穿孔
134－001	U15－49	9		勾玉	16.80		12.60		4.3×3.1	2.8×1.7	5.70	2.30	蛇紋岩	灰味黄緑	2.0G5.0/1.0	黒のふ入り
134－002	U15－49	20		勾玉	16.90		11.90		2.5×2.7	2.3×1.8	10.10	2.21	蛇紋岩	灰味黄緑	5.0GY5.0/2.0	黒のふ入り
134－003	U15－59	16		勾玉	19.90		14.80		2.9×2.1	2.6×2.4	11.60	3.38	蛇紋岩	灰味黄緑	2.0G5.0/1.0	黒のふ入り
134－004	U15－98	13		勾玉	11.50		7.60		2.5×2.5	2.5×2.5	6.60	0.60	蛇紋岩	灰味黄緑		黒のふ入り
134－005	U15－29	1		碧玉破片	17.40		14.50				8.30	2.03	碧玉	にぶ緑	8.5G4.5/3.0	
134－006	U15－09	1		小玉	5.00		4.9～5.4		2.3×2.4	2.2×2.3		0.16	ガラス	藍色（こい青）	3.5PB2.5/5.0	
134－007	U15－18	1		小玉	3.10		3.4±		1.0～1.1			0.03	ガラス	青 （ビクトリアブルー） 4.0	4.0PB3.5/8.0	半欠
134－008	V13－72	3		小玉	6.80		6.5～6.7		2.7×2.3	2.5×2.2		0.43	ガラス	藍色		
134－009	V13－42	1		小玉	2.20		3.40		0.8～0.9			0.02	ガラス	明るい青緑 （ヴェニスグリーン）	10.0BG6.0/6.0	
134－010	B区P－17	1		小玉	3.90		5.50		1.8±	1.6±		0.09	ガラス	にぶ青緑 （シーグリーン）	10.0BG5.5/5.5	半欠
134－011	B区一括	1		小玉	4.3+		5.80		1.80			0.10	ガラス	にぶ青緑（半透明）	10BG5.5/5.5	側面に指押さえあり、半欠
134－012	B区P－33	1		垂飾	17.90		11.90	10.10	6.5×5.6	6.2×6.0	8.10	3.12	蛇紋岩	灰味黄緑	2.0G5.0/1.0	黒のふ入り
134－013	SD－022	5		垂飾	28.00		19.50		5.8×5.7	4.5×4.4	19.00	15.54	滑石	青味黒	10.0BG2.5/1.0	両側穿孔

表13　萱野遺跡土製品計測表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	実測番号	種別	長さ（高さ）		径（幅）		孔径		厚	重量	色調	マンセル記号	備考
					最大値	最小値	最大値	最小値	最大値	最小値					
					(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(g)			
073－124	SX－004	274	125	土製勾玉	52.00		16.00		4.00	3.00	18.00	20.37	にぶい黄橙	10YR6/3	
081－003	SI－020	6	2	円板形			74.00	53.00			9.00	42.30	褐灰	10YR4/1	
095－054	SI－082	73	49	鏡形			53.00	52.00			16.00	28.96	橙	7.5YR6/6	
095－055	SI－082	126	48	紡錘車			56.00	53.00			15.00	32.41	にぶい黄橙	10YR6/4	
095－056	SI－082	50	50	勾玉形	43.00		12.00		2.00	1.50		5.65	にぶい黄褐	10YR5/3	
122－033	SX－003	12	37	土錘	45.00		11.00		4.00	3.00	11.00	4.78	浅黄～黄灰	2.5Y7/3～2.5Y6/1	
122－034	SX－003	12	36	土玉			26.00	23.00	3.00	3.00	22.00	11.33	にぶい黄橙	10YR6/4	
122－035	SX－003	12	35	土玉			40.00	39.00	9.00	9.00	36.00	43.88	にぶい黄橙	10YR7/4	
132－046	SD－010	1	1	土錘	36.00		13.00		4.00	4.00		3.75	橙	7.5YR7/6	
133－009	V10－73	1	13	紡錘車			34.00	13.00	裏 7.50 表 4.00	裏 5.00 表 3.00		12.31	にぶい黄橙	10YR7/4	
133－010	V15－60、70	2	43	円板形			40.10	30.70	3.50	3.30		9.32	内 灰 外 にぶい橙	内 5Y6/1 外 7.5YR7/4	中央の孔が貫通していない
133－011	V12－40	1	8	勾玉形	(47.00)		12.00		3.00	2.00		5.69	にぶい赤褐	5YR5/4	
133－012	V14－32、34	32－2、34－2	66	勾玉形	59.00		23.00					26.26	にぶい褐	7.5YR6/3	未製品
133－013	B区P－86	2	2	鏡形			48.00	30.00	9.00	6.00		11.86	内 橙 外 橙	内 7.5YR6/6 外 5YR6/8	
133－014	B区P－84	1	1	土錘	48.00		18.00		—	—	17.00	11.37	オリーブ黒	7.5Y3/2	
133－015	D区一括		1	土錘	48.00		16.00		4.50	3.00		8.93	明黄褐	10YR6/6	
135－008	V10－71	1	44	羽口	65.00		64.00					99.50	溶解 黄灰 還元 褐灰	溶解 2.5Y5/1 還元 10YR5/1	
135－009	V15－50	2	89	トリベ	62.00		52.00					40.05	溶解 紫灰 還元 赤灰	溶解 5RP5/1 還元 7.5R5/1	

表14　宇戸台遺跡土製品計測表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種別	計測値（mm）（）は推定値、[ ]は現存値					重量（g）	調整	胎土	色調		備考
				長さ	幅	厚さ	外径	孔径						
166－13	SI－007	53	土錘	44	18	—	—	6.5	10.80	ナデ	密	にぶい黄橙色	10YR6/3	
166－14	SI－007	23	不明土製品	27	11.5	—	—	—	3.86	ナデ	密	にぶい黄橙色	10YR6/3	
167－4	SI－016	13	支脚	199	72	56	—	—	520.90	—	やや粗	灰黄褐色	10YR5/2	
167－5	SI－016	15	支脚	110	71	49	—	—	266.60	—	やや粗	灰褐色	7.5YR5/2	

表15　萱野遺跡石器・石製品観察表

※石器・石製品集成図の番号

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考
14－8	67	SI－001	1	砥石	砂岩	99.1	44.7	16.9	120.9	
14－10	46	SI－001	1	砥石	流紋岩	47.3	45.5	19.6	43.8	
		SI－001	1	砥石	砂岩	59.0+	21.6+	17.3+	29.6	
14－7		SI－001	5	炉石	凝灰岩質砂岩	213.0+	213.0	80.7	3186.7	
14－9	11	SI－001	6	石斧	砂岩	54.8	39.8	16.3	56.0	
		SI－002	2	敲石	石英斑岩	62.0	58.2+	35.0+	200.1	欠損品
18－32	68	SI－003	1	砥石	砂岩	37.1+	35.9	11.1	27.0	
		SI－003	1	砥石	砂岩	60.7+	44.9+	42.9	121.2	
18－29	47	SI－003	21	砥石	流紋岩	35.0+	41.2+	35.5+	34.3	
		SI－003	48	砥石	砂岩	46.6	44.3+	25.8+	75.1	
		SI－003	58	砥石	砂岩	48.9+	46.6+	37.2+	84.2	
		SI－003	67	砥石	凝灰岩	64.4+	58.3	24.2	80.0	
18－31	69	SI－003	112	砥石	砂岩	86.6	50.8	9.7	70.1	

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重　量(g)	備　考
		SI－003	169	砥石	軽石	31.7+	30.1	25.5	6.2	
		SI－003	170	砥石	砂岩	55.4+	36.5+	30.6	67.0	
		SI－003	221	砥石	砂岩	83.3+	56.4	31.8	179.8	
18－30	59	SI－003	225	砥石	凝灰岩	66.5	54.8	28.6	114.3	
		SI－003	226	砥石	砂岩	72.0	47.5	28.3	127.6	
		SI－003	244	砥石	砂岩	84.7	58.6	32.5	266.5	
		SI－003	250	砥石	砂岩	78.6+	27.4+	34.5	71.6	
		SI－004	30	砥石	砂岩	73.4	28.5	13.1	37.7	
		SI－006	31	砥石	砂岩	117.2	81.8	53.1	460.9	
14－2	33	SI－007	8	砥石	軽石	119.8	93.4	58.4	149.6	
		SI－007	8	軽石製品	軽石	56.3	44.7	18.9	9.4	
14－3	70	SI－007	12	砥石	砂岩	76.6	85.7	32.4	227.0	
		SI－008	2	砥石	砂岩	85.2+	77.3	34.1	214.5	
		SI－008	5	砥石	凝灰岩	56.2+	35.3	30.8	73.1	
		SI－009	1	砥石	凝灰岩	25.9	22.9	7.4	3.6	
103－5	60	SI－009	6	砥石	凝灰岩	82.1	36.4	28.6	58.2	
		SI－011	1	軽石製品	軽石	53.0	38.9	31.9	24.6	
64－46	2	SI－014	45	抉入石斧	溶結凝灰岩	146.9	43.8	40.6	486.0	
		SI－014	63	砥石	砂岩	100.4	63.5	47.5+	322.7	
64－48	71	SI－014	75	砥石	砂岩	110.9+	37.2	33.0	185.3	
64－47	72	SI－014	75	砥石	砂岩	117.1	59.4+	45.5	420.5	
		SI－014	75	砥石	砂岩	68.5+	43.0+	22.5	107.4	
		SI－014	75	砥石	砂岩	56.4	53.0+	48.0	153.0	
		SI－014	78	砥石	凝灰岩	71.2+	42.4	20.4	50.1	
		SI－014	80	砥石	砂岩	66.1	25.4	19.8	35.0	
79－2	21	SI－016	2	敲石	凝灰岩	84.3	82.9	55.6	514.2	
79－4	74	SI－016	2	砥石	砂岩	61.1	30.6	13.3	30.0	
79－3	73	SI－016	2	砥石	砂岩	89.6	59.2	43.3+	262.5	
		SI－017	34	砥石	砂岩	88.3+	74.6	6.6+	53.0	
		SI－017	43	砥石	砂岩	94.9+	39.7	40.6	111.9	
		SI－019	2	砥石	流紋岩	53.2+	48.4+	20.3	38.9	
		SI－019	4	砥石	軽石	77.0	52.2	54.7	39.1	
		SI－019	32	砥石	砂岩	49.8+	35.1+	16.2+	49.0	
20－4	75	SI－019	61	砥石	砂岩	88.7	48.1	11.8	61.8	穂摘み具か？
20－3	76	SI－019	63	砥石	砂岩	61.9+	26.0	12.3	33.4	
		SI－019	64	砥石	砂岩	116.9+	80.4	36.7	358.5	
22－15	48	SI－024	3	砥石	流紋岩	61.2	54.0	38.7	155.0	
		SI－025	1	砥石	凝灰岩	67.0+	53.3	9.1	24.1	
		SI－025	1	砥石	砂岩	90.8+	35.4+	21.1	82.2	
		SI－025	1	砥石	砂岩	66.9+	37.9	26.0	79.6	
81－2	31	SI－029	4	石皿	砂岩	149.2	119.5	57.2	849.3	2点を接合
24－4	9	SI－030A	3	石斧	粘板岩	36.9+	15.5	11.3	12.3	
24－5	14	SI－030A	4	石斧	ホルンフェルス	62.6	28.7	13.2	37.3	
		SI－030A	4	砥石	砂岩	62.0+	37.9	15.9	53.3	
		SI－030A	6	砥石	砂岩	71.1	40.1	15.5	60.3	
16－11	23	SI－031	2	敲石	砂岩	83.8	65.5	45.4	393.1	
16－12	32	SI－031	15	石皿(台石)	凝灰岩質砂岩	210.0	276.0	89.3	4360.6	

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考
		SI－031	16	砥石	砂岩	101.1	36.9	30.1	109.7	
		SI－031	16	砥石	砂岩	54.4+	23.0	22.7	32.4	
		SI－031	16	砥石	砂岩	103.5	55.6	36.3	204.1	
		SI－034	1	砥石	砂岩？	38.2	29.9	13.4	14.3	
		SI－034	1	砥石	砂岩	64.4	41.8	24.3	114.4	
		SI－035	11	砥石	砂岩	80.8	35.5	22.9	83.1	
		SI－042	1	砥石	砂岩	64.4+	47.3	24.0	101.4	
25－16	77	SI－042	13	砥石	砂岩	135.1	82.0	49.3	587.9	
		SI－043	1	砥石	砂岩	97.8+	47.1+	16.2	107.6	
		SI－043	1	砥石	砂岩	85.2	30.1	26.3	86.8	
26－9	78	SI－043	1	砥石	砂岩	61.1+	49.5	41.5	140.3	
27－17	24	SI－044	1	敲石	砂岩	74.4	50.4	37.6	184.0	
27－18	79	SI－044	1	砥石	砂岩	57.9+	35.1	19.1	56.3	
		SI－044	13	砥石	流紋岩	74.1	59.6	36.0	103.7	
27－16	34	SI－044	30	砥石	軽石	118.5	84.5	61.5	66.5	
		SI－044	33	砥石	流紋岩	75.9	59.9	37.9	100.3	
		SI－045	1	砥石	砂岩	94.4+	33.8	26.6	111.4	
		SI－045	1	砥石	砂岩	93.8	41.1	36.2+	119.3	
		SI－045	1	砥石	砂岩	109.5	43.9	35.3	145.8	
		SI－045	33	砥石	砂岩	75.2	56.3	37.2	184.7	
29－12	35	SI－045	34	砥石	軽石	94.7	112.9	48.2	115.2	
29－11	1	SI－045	41	環状石斧	玄武岩	107.3	42.4+	33.9	160.1	中央孔、径3.9～4.5cm
		SI－045	46	砥石	砂岩	73.4+	67.6	25.4+	148.2	
		SI－049	18	砥石	砂岩	103.5	56.4	37.3	180.0	
31－6	80	SI－049	21	砥石	砂岩	89.5	34.2	19.5	89.3	
		SI－050	15	砥石	砂岩	66.4+	39.6	38.8+	100.5	
32－9	49	SI－050	16	砥石	流紋岩	50.2+	61.8	29.5	107.7	
		SI－050	17	砥石	砂岩	78.5	58.1	29.6	131.7	
		SI－052	2	砥石	流紋岩	106.0	59.4	30.7	148.8	
		SI－052	2	砥石	砂岩	84.3	44.1	8.8	51.9	
		SI－052	2	砥石	砂岩	87.6	48.9	24.9	105.2	
		SI－053	1	砥石	砂岩	81.7+	60.6	34.3	153.9	
		SI－053	1	砥石	砂岩	102.9	48.0	25.3	183.2	
		SI－053	2	砥石	砂岩	92.0	30.1	23.6	75.5	
34－19	18	SI－053	19	磨石類	閃緑岩	82.6	127.3	73.7	1007.6	
		SI－053	21	砥石	流紋岩	74.1+	62.7	29.0	138.4	
		SI－053	23	砥石	軽石	74.3	72.7	26.1	33.4	
35－7	22	SI－057	1	敲石	凝灰岩	86.1	91.8	74.3	786.3	
36－20	29	SI－058	42	敲石？	流紋岩	37.5	26.5	23.7	24.3	
36－19	50	SI－058	45	砥石	流紋岩	115.6	60.5	21.5	216.9	
		SI－066	1	砥石	砂岩	103.5	45.5	18.6	100.6	
		SI－068	1	砥石	砂岩	88.4	44.7	17.7+	112.2	
		SI－068	41	砥石	砂岩	67.1+	37.1	11.4	38.6	
37－13	16	SI－071	11	磨石類	砂岩	96.9	72.7	43.8	509.5	
37－12	25	SI－071	20	敲石	砂岩	80.5	44.3	32.8	191.2	
		SI－071	21	砥石	砂岩	96.7	52.8	27.3	149.5	
		SI－074	2	砥石	砂岩	64.5	30.6	29.1	115.0	

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重　量（g）	備　考
		SI－077	1	砥石	砂岩	44.7+	39.1	13.0	23.2	
		SI－079	5	砥石	砂岩	87.0	62.3	28.7	170.9	
		SI－082	1	砥石	砂岩	44.3	28.2	10.7	19.9	
95－57	26	SI－082	98	敲石	砂岩	101.8+	63.2	42.6	441.0	
95－58	81	SI－082	99	砥石	砂岩	125.7	54.4	44.1	441.4	
		SI－110	1	砥石	砂岩	74.3	45.6	22.7	89.6	
		SK－010	2	砥石	砂岩	240.0	100.8	68.9	2480.0	
		SK－010	2	砥石	砂岩	89.4+	53.5	34.5	196.7	
107－1	82	SK－010	3	砥石	砂岩	240.0	100.8	68.9	2480.0	
		SK－010	4	砥石	砂岩	59.0	51.8	42.4	198.0	
98－17	17	SK－026	37	磨石類	砂岩	50.5	36.1	37.5	92.5	
		SD－001	5	軽石製品	軽石	50.6	41.2	27.8	11.3	
		SD－001	5	軽石製品	軽石	39.1	33.1	17.9	4.4	
		SD－001	5	軽石製品	軽石	44.3	32.9	28.1	7.0	
		SD－001	5	軽石製品	軽石	38.9	27.3	12.8	3.0	
		SD－003	1	砥石	砂岩	85.9	57.7	20.7	98.5	
		SD－003	1	砥石	砂岩	42.2	29.2+	11.9	20.1	
		SD－003	1	砥石	砂岩	65.9	32.8	22.2	68.5	
		SD－003	1	軽石製品	軽石	41.7	35.3	29.2	9.7	
		SD－004	1	砥石	砂岩	106.0+	41.3	36.3	247.5	
		SD－005	2	砥石	砂岩	97.8	67.8	33.0	145.1	
		SD－005	2	砥石	砂岩	76.3	62.4	29.2+	169.6	
		SD－010	1	砥石	砂岩	90.6	57.2	31.7+	132.1	
		SD－012	1	砥石	砂岩	66.3+	35.1	19.5	54.8	
132－47	19	SD－014	2	敲石	はんれい岩	89.2+	54.1	39.2	29.6.8	
42－11	39	SD－016	1	砥石	軽石	68.7	60.3	60.5	49.8	
42－12	38	SD－016	1	砥石	軽石	102.6	70.1	54.3	82.2	
		SD－016	1	砥石	砂岩	120.6+	60.3	37.5	392.6	
		SD－018	1	砥石	砂岩	66.9+	44.7+	34.0	133.3	
		SD－018	1	砥石	砂岩	81.3+	64.5	21.3	144.2	
		SD－018	1	砥石	砂岩	85.9	83.8	15.8	169.3	
		SD－018	1	砥石	砂岩	63.3	41.3+	14.6	67.3	
		SD－018	1	砥石	砂岩	74.4+	59.5	25.9	100.8	
		SD－018	1	砥石	砂岩	47.4+	46.2	20.9+	57.5	
50－73	40	SD－018	2	砥石	軽石	74.3	76.7	55.4	57.1	
		SD－018	2	砥石	砂岩	59.2	41.1	24.3	73.7	
		SD－018	2	砥石	砂岩	57.6	47.5+	32.7	70.4	
		SD－018	2	砥石	砂岩	100.4+	40.9	32.9	163.6	
		SD－018	2	砥石	砂岩	66.6+	54.9	32.0+	148.6	
		SD－018	2	砥石	砂岩	78.5	46.7	35.8	167.8	
50－74	43	SD－018	8	砥石	軽石	79.6	66.9	39.8	37.7	
		SD－018	28	砥石	砂岩	74.6+	41.2+	22.1	65.4	
		SD－018	75	砥石	砂岩	81.2	50.2+	28.2+	125.1	
50－75	41	SD－018	96	砥石	軽石	70.1	102.7	44.5	57.2	
50－80	42	SD－018	101	砥石	軽石	104.1	91.5	53.7	87.5	
50－76	66	SD－018	105	砥石	凝灰岩質砂岩	107.4	77.7	28.1	218.6	
50－78	3	SD－018	127	太型蛤刃石斧	砂岩？	100.5+	63.2	42.2	348.9	被熱により割れる？

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重　量（g）	備　考
		SD－018	150	砥石	砂岩	46.4	45.0+	28.9	113.6	
		SD－018	212	砥石	砂岩	92.7	50.4	34.3	192.5	
50－79	30	SD－018	216	石錘	流紋岩	88.2	58.1	51.5	247.5	
50－77	51	SD－018	244	砥石	流紋岩	72.8+	38.9	20.6	66.1	
		SD－018	256	砥石	砂岩	77.2	59.4	16.6	101.4	
		SD－018	289	砥石	砂岩	88.5+	47.4	25.8	114.2	
130－1	87	SD－022	1	砥石	砂岩	91.5+	55.4	12.1	95.1	
132－48	61	SD－025	7	砥石	凝灰岩	141.5	72.4	67.6	752.1	
		SD－026	1	砥石	砂岩	57.9	44.2	10.8	30.4	
		SD－044	32	砥石	軽石	82.4	49.4	39.3+	28.1	
55－20	83	SS－003(b)	2	砥石	砂岩	77.6+	63.7	31.7	179.0	
		SX－001	2	砥石	砂岩	58.9+	34.1	21.0	41.9	
71－67	84	SX－001	79	砥石	砂岩	71.3+	56.1	36.8	218.7	
71－65	57	SX－001	141	砥石	安山岩	86.4	46.9	22.1	88.0	
		SX－001	171	砥石	砂岩	56.8	49.5+	19.6	77.4	
		SX－001	171	砥石	砂岩	62.9+	43.0	38.0	151.8	
122－37	86	SX－003	3	砥石	砂岩	55.3+	54.2	54.5	298.3	
		SX－003	3	砥石	砂岩	54.0	44.0	32.8	81.4	
		SX－003	5	砥石	砂岩	58.5	42.3	26.9	107.1	
		SX－003	5	砥石	砂岩	79.1	67.5+	45.5+	237.0	
		SX－003	6	砥石	砂岩	69.3	47.7	35.4	131.1	
		SX－003	6	砥石	砂岩	65.7	35.0	20.1	43.7	
		SX－003	6	砥石	砂岩	76.8+	65.8	29.3	125.6	
		SX－003	6	砥石	砂岩	100.1	57.5	23.8	126.7	
122－36	85	SX－003	6	敲石	砂岩	140.1	43.2	40.5	303.6	
		SX－003	6	砥石	砂岩	64.7+	43.7+	27.5+	82.3	
		SX－003	6	砥石	砂岩	64.7+	41.8+	24.7+	66.6	
		SX－003	6	砥石	砂岩	52.6	36.0	20.9	45.6	
		SX－003	6	砥石	砂岩	84.4+	79.1	40.8	311.1	
		SX－003	6	砥石	砂岩	100.7	37.0+	40.5+	195.5	
		SX－003	6	砥石	軽石	58.2	49.7	40.8	33.6	
		SX－003	8	砥石	砂岩	73.6+	69.7+	44.2+	227.2	
		SX－003	8	砥石	砂岩	116.9	56.8	37.3	179.6	
		SX－003	8	砥石	砂岩	82.6	30.8	28.5	88.6	
		SX－003	13	砥石	砂岩	150.0	80.5	50.7+	623.9	
		SX－004	1	砥石	流紋岩	73.0	49.8	34.6	132.4	
		SX－004	1	砥石	砂岩	42.6+	36.0	26.7+	77.4	
71－69	36	SX－004	97	砥石	軽石	94.3	108.3	31.3	89.3	
71－68	58	SX－004	109	砥石	安山岩	111.8	82.8	62.4	500.5	
		SX－004	184	砥石	砂岩	118.3	44.4	28.3	170.6	
		SX－004	237	砥石	砂岩	72.6	72.4	66.9	427.4	
71－70	65	SX－004	239	砥石	凝灰岩質砂岩	97.3+	86.8	61.0	387.7	
71－66	37	SX－004	255	砥石	軽石	64.8	63.7	44.2	29.1	
		SX－004	289	砥石	砂岩	90.2	59.2+	31.5+	183.5	
		U13－09	2	砥石	砂岩	75.3	41.5+	18.8	90.9	
		U13－09	2	砥石	砂岩	70.4	19.0+	19.0	33.1	
		U13－18	1	砥石	軽石	72.9	55.3	27.4	15.7	

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重　量(g)	備　考
		U13－18	1	軽石製品	軽石	44.5	30.5	21.6	7.8	
		U13－28	2	砥石	軽石	55.1	41.5	33.8	13.8	
		U13－28	2	砥石	軽石	51.0	30.0	29.2	8.0	
139	62	U13－39	1	砥石	凝灰岩	53.2+	19.5	10.3	19.5	
136	4	U13－48	5	石斧	閃緑岩	33.5+	45.7+	14.5	20.8	
136	5	U13－59	3	石斧	閃緑岩	37.4+	40.3+	11.5	13.7	
		U13－79	2	砥石	砂岩	67.1+	30.6	10.9+	36.8	
		U13－87	2	砥石	砂岩	50.7+	33.8+	10.0	24.7	
		U13－97	1	砥石	砂岩	120.7	60.5	34.8	272.8	
		U13－98	1	砥石	軽石	76.2	36.8+	39.0	20.6	
		U14－18	2	砥石	砂岩	51.2	51.2	24.6	69.6	
138	44	U14－23	1	砥石	軽石	84.3	54.4	49.3	42.8	
		U14－23	4	砥石	砂岩	59.0	31.2+	17.6	39.7	
139	52	U14－27	1	砥石	流紋岩	52.6+	69.6	23.4	78.5	
		U14－27	4	砥石	砂岩	73.3+	57.8+	22.5+	100.1	
139	53	U14－28	1	砥石	流紋岩	69.7	75.0	31.9	109.1	
		U14－29	1	砥石	砂岩	95.6	50.5	16.8	103.8	
		U14－29	2	砥石	砂岩	31.6+	29.2+	22.9	25.6	
		U14－32	3	砥石	凝灰岩質砂岩	126.0	103.1	39.5	520.4	
		U14－48	1	砥石	砂岩	81.0	53.4	38.2	195.3	
		U14－49	2	砥石	砂岩	105.7	72.3	61.0	383.3	
		U14－49	3	砥石	砂岩	79.5+	33.5	20.0	59.6	
		U14－58	3	砥石	砂岩	66.9	43.3	32.8	98.4	
		U14－67	1	砥石	軽石	63.6	47.7	31.6	16.0	
139	63	U14－68	2	砥石	凝灰岩	200.0	75.8	29.4	462.7	
		U14－69	1	砥石	流紋岩	53.9+	28.2	23.0	46.0	
		U14－79	1	砥石	軽石	53.8	52.0	32.2	15.6	
141	88	U14－88	1	砥石	砂岩	11.1	40.9	19.3	135.3	
		U14－88	1	砥石	砂岩	106.2	60.3	26.4	212.6	
		U14－89	1	砥石	砂岩	80.3	27.4	16.0	32.9	
		U14－89	1	砥石	砂岩	95.2	24.2	13.5	42.9	
		U14－98	1	砥石	砂岩	55.2	30.4+	11.8	35.0	
		U14－99	1	砥石	軽石	33.1	21.1	20.0	2.6	
		U14－99	2	砥石	砂岩	59.1	53.9	11.4	50.1	
		U15－07	1	砥石	砂岩	55.3+	29.0+	17.2	35.2	
141	89	U15－07	1	砥石	砂岩	40.3+	54.5	15.7	47.3	
		U15－12	2	砥石	砂岩	48.1+	44.1	28.4	86.6	
137	20	U15－19	1	敲石	粘板岩	77.6	47.5	19.8	113.5	
		U15－19	1	砥石	砂岩	113.6	63.9	20.0	233.9	
		U15－29	1	砥石	砂岩	51.2	29.3	6.7	16.8	
		U15－30	1	砥石	砂岩	81.5	32.9	23.0	66.9	
		U15－39	2	砥石	砂岩	55.1+	33.1	26.2	41.7	
		U15－49	13	砥石	砂岩	81.0	73.8	45.4+	312.3	
		U15－58	1	砥石	砂岩	44.0+	40.8	26.4	54.7	
141	90	U15－59	14	砥石	ホルンフェルス	71.3+	41.4	31.6	174.2	
137	27	U15－89	1	敲石	砂岩	53.9+	33.4	28.6	70.6	
136	10	U15－98	2	石斧	粘板岩	40.0	39.4	8.4	28.5	

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重　量(g)	備　考
136	12	U15－98	9	石斧	砂岩	68.0	41.3	16.0	87.5	
136	8	U15－98	11	石斧	粗粒玄武岩	68.2	46.8	21.7	126.9	
136	15	U15－99	1	打製石斧	粘板岩	56.4	36.8	14.2	45.3	扁平片刃石斧の再製品？
		U16－14	2	砥石	砂岩	75.6	35.7	19.5	78.5	
		V10－71	3	砥石	砂岩	51.5+	46.8	19.3	62.2	
		V10－73	1	砥石	砂岩	97.8	68.0	36.0	305.1	
		V10－80	3	砥石	砂岩	62.2+	42.3	16.2	53.1	
		V10－81	3	砥石	砂岩	101.5	52.1	33.2	187.6	
		V10－81	3	砥石	砂岩	75.7	43.8	28.6	103.5	
		V11－00	1	砥石	砂岩	78.9	38.7	32.1+	121.9	
		V11－C区	1	砥石	砂岩	82.7	61.8+	51.2	279.7	
		V11－C区	1	砥石	砂岩	54.2	40.6	17.8	58.7	
		V12－02	2	砥石	砂岩	59.2	46.1	27.8	73.4	
		V12－13	3	砥石	砂岩	52.1+	42.8	26.7	74.0	
		V12－20	1	砥石	砂岩	80.0+	46.9+	32.0	139.4	
		V12－23	2	砥石	砂岩	97.3+	39.4	20.5	128.6	
		V12－24	2	砥石	凝灰岩	59.0	36.2	18.0	37.9	
		V12－94	2	砥石	砂岩	57.6+	46.6+	18.6	62.1	
		V12－94	2	砥石	砂岩	73.5	38.9+	18.4	65.9	
		V12－94	2	砥石	砂岩	81.7+	50.2+	16.9	122.2	
		V13－24	3	砥石	砂岩	62.5+	56.3+	26.0	104.7	
		V13－53	4	砥石	砂岩	100.4	44.0	21.3	136.7	
		V13－53	6	砥石	凝灰岩	75.9	40.0	22.9	84.2	
141	91	V13－60	2	砥石	砂岩	101.5	53.9	35.1	291.5	
		V13－62	3	砥石	砂岩	51.6+	41.7+	8.6	30.4	
		V13－62	6	砥石	砂岩	127.0	59.1	18.4	142.2	
		V13－80	2	砥石	砂岩	112.8+	46.6+	44.9+	246.5	
136	6	V13－81	3	太型蛤刃石斧	閃緑岩	150.8	65.1	37.3	437.3	
		V13－84	2	軽石製品	軽石	61.5	46.8	39.3	27.9	
		V13－91	5	砥石	砂岩	87.5+	58.0	14.6	108.2	
141	92	V14－01	5	砥石	ホルンフェルス	80.3	37.2	18.1	76.8	
		V14－02	3	砥石	砂岩	80.0+	63.9+	16.4	117.8	
		V14－03	2	砥石	砂岩	55.3+	30.8	30.0+	56.6	
		V14－09	3	砥石	砂岩	65.0+	23.9	11.1	20.4	
139	64	V14－13	2	砥石	凝灰岩	87.7+	31.5	25.4	77.3	
		V14－21	4	砥石	砂岩	79.4	54.5+	45.9+	215.0	
		V14－21	4	砥石	砂岩	85.7+	27.3+	20.1+	50.1	
		V14－22	3	砥石	砂岩	74.8	40.9	26.0	78.3	
		V14－22	3	砥石	砂岩	72.8+	52.0	20.4	103.8	
		V14－22	3	砥石	砂岩	66.1+	48.5	58.6	197.1	
		V14－22	3	砥石	砂岩	92.3+	33.5+	28.2+	98.1	
		V14－23	2	砥石	軽石	49.5	30.0	34.9	10.5	
		V14－23	4	砥石	砂岩	45.5+	21.3	15.6	20.4	
		V14－23	4	砥石	砂岩	66.1+	43.7	34.1	154.7	
		V14－24	2	砥石	砂岩	89.7+	60.2+	28.6	134.4	
		V14－30	2	砥石	砂岩	71.4	66.9+	34.9	194.6	
		V14－30	2	砥石	砂岩	85.0	60.9	35.2	222.0	

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重　量(g)	備　考
		V14－31	2	砥石	砂岩	71.4	36.3+	13.9	57.9	
		V14－31	4	砥石	凝灰岩	57.6	44.7	10.3	20.9	
		V14－32	2	砥石	砂岩	73.3+	48.7	34.5+	118.8	
		V14－32	2	砥石	砂岩	57.4	28.7	23.0	33.1	
		V14－32	4	砥石	軽石	53.8	40.9	30.1	13.1	
		V14－34	2	砥石	砂岩	45.2	44.5+	7.6	18.7	
		V14－34	3	砥石	砂岩	79.4	53.3	30.8	116.5	
139	54	V14－34	4	砥石	流紋岩	106.2	59.2	74.2	273.8	
		V14－34	4	砥石？	凝灰岩	63.3	46.2	37.2	85.7	
		V14－34	4	砥石	砂岩	83.0+	43.2	36.2	158.0	
		V14－34	4	砥石	砂岩	54.3+	47.6	50.2+	167.7	
		V14－40	2	砥石	砂岩	58.0+	40.3	32.3	92.7	
		V14－40	3	砥石	砂岩	65.8	32.7	18.7	48.9	
		V14－40	3	砥石	砂岩	54.3+	22.4	13.3	18.9	
		V14－42	4	砥石	砂岩	61.0	23.8	20.8	27.4	
		V14－43	4	砥石	砂岩	81.2	56.4+	54.4	479.2	
		V14－43	4	軽石製品	軽石	52.2	32.6	24.3	9.1	
139	55	V14－51	2	砥石	流紋岩	50.0+	52.0+	41.9	102.6	
		V14－52	2	砥石	砂岩	71.5+	61.4	24.0	147.8	
		V14－52	2	砥石	砂岩	84.5+	54.5	16.5	110.4	
		V14－52	4	砥石	砂岩	85.1	35.3	17.0	73.5	
		V14－53	2	砥石	砂岩	61.3	58.0	31.4	118.4	
		V14－60	1	砥石	砂岩	52.7+	28.6+	27.1+	48.2	
		V14－60	2	砥石	砂岩	43.5+	41.2	21.0	39.5	
		V14－60	2	砥石	砂岩	57.0	27.2	22.8	57.9	
		V14－61	2	砥石	砂岩	67.1+	51.7+	28.8	131.8	
		V14－61	2	砥石	砂岩	75.5	57.8	34.1	200.3	
		V14－62	2	砥石	砂岩	59.0+	52.7	48.3	159.7	
		V14－63	4	砥石	砂岩	51.2+	37.4	21.3	48.1	
		V14－63	4	砥石	砂岩	66.0+	44.4	8.0	37.3	
		V14－71	1	砥石	砂岩	68.0+	43.1+	34.5	116.4	
		V14－74	2	砥石	流紋岩	69.1	53.0	48.4+	160.0	
		V14－74	3	砥石	砂岩	74.9+	45.4	15.9	75.7	
139	56	V14－80	2	砥石	流紋岩	51.1	76.6	59.8	197.7	（石皿）再利用か？
		V14－80	2	砥石	砂岩	54.4+	38.3	29.4	67.4	
		V14－80	2	砥石	砂岩	73.3	54.8	32.9	142.3	
		V14－91	2	砥石	砂岩	72.2	22.5	35.2	49.6	
		V14－91	2	砥石	砂岩	71.4	50.6	12.9	49.3	
		V14－92	1	砥石	砂岩	130.6+	70.3	55.9	423.6	
		V14－92	2	砥石	砂岩	85.6	66.2	30.1	176.3	
		V14－92	2	砥石	砂岩	66.1	55.0	43.3	200.3	
		V15－00	1	砥石	砂岩	50.5+	28.4+	13.8	23.3	
		V15－01	1	砥石	軽石	39.6	35.0	29.3	7.5	
		V15－01	2	砥石	砂岩	62.6+	37.5	34.0	94.0	
		V15－01	2	砥石	砂岩	66.2+	43.7	38.8	119.7	
		V15－02	2	砥石	軽石	57.8	43.5	34.5	22.7	
		V15－11	1	砥石	砂岩	60.7+	42.4	21.2+	55.6	

挿図番号	※	遺構番号	遺物番号	種類	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考
		V15－11	1	砥石	砂岩	43.8	32.2	15.9	23.4	
		V15－12	1	砥石	砂岩	82.4	42.4	42.2	129.6	
		V15－12	2	砥石	砂岩	39.0	28.5	5.4	10.8	
		V15－30	1	砥石	砂岩	59.1+	43.5	14.0	59.9	
		V15－30	5	砥石	流紋岩	58.7	44.8	16.6	43.2	
		V15－31	1	砥石	砂岩	68.9+	49.8	35.5	156.7	
		V15－34	2	砥石	軽石	57.6	29.3	26.5	12.5	
138	45	V15－40·50	2	砥石	軽石	80.2	89.8	69.5	125.0	
		V15－40·50	2	砥石	軽石	55.1+	38.1	20.6	13.4	
		V15－50	11	砥石	砂岩	99.8+	61.5	25.7	192.1	
		V15－54	2	砥石	砂岩	52.1+	38.1	24.4	55.5	
		V15－60	2	砥石	砂岩	60.9	35.8	12.7	47.7	
		V15－61	2	砥石	砂岩	60.1+	31.6	14.6	37.9	
		V15－70	2	砥石	軽石	67.1	36.6	13.4	30.2	
137	28	V15－70	2	敲石	砂岩	119.8	46.3	44.9	312.8	
		V15－82	2	砥石	砂岩	41.6+	35.6	16.4	21.4	
136	13	3T－003	22	石斧	砂岩	37.3+	53.2+	22.4	42.8	
		3T－003	23	砥石	砂岩	92.1+	33.0	14.7	71.7	
		B区P－59	1	砥石	砂岩	53.6	36.1	13.3	32.2	
		B区P－81	2	砥石	砂岩	112.0	47.8	36.9	185.8	
136	7	B区P－97	1	石斧	閃緑岩	94.7	36.2	19.6	136.7	
		D区P－10	1	砥石	砂岩	120.8	97.6	66.0	650.7	

表16　宇戸台遺跡石器・石製品観察表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考
149－3・179－1	3号方形周溝墓	4	敲石	凝灰岩	56.6	50.2	44.3	182.7	
154－6・179－7	1号墳（SD－001）	18	砥石	砂岩	112.7	59.8	70.9	436.2	
159－5	SI－015	1	紡錘車	滑石	32.1	31.7	18.9	28.0	
160－4・179－5	SI－017	8	砥石	砂岩	114.3	50.2	49.1	229.8	
164－2・179－2	SI－005	3	砥石	凝灰岩	66.2＋	51.9	37.8	88.1	
166－15・179－4	SI－007	2	砥石	砂岩	82.3	67.9	36.9	351.8	
174－3・179－8	SD－007	1	砥石	砂岩	78.7	42.9	23.1	76.4	
175－6・179－9	SD－011		砥石	砂岩	100.2	61.2	37.7	315.7	SI－018－1から移動
176－5・179－3	SE－001	12	砥石	凝灰岩	142.9	98.2	50.3	536.9	
176－6・179－6	SE－001	7	砥石	砂岩	258.3＋	126.5	87.3	3425.0	
177－3	SD－006	1	石鏃	黒曜石	19.3	14.4	4.0	0.76	
177－4・179－10	N17－96	1	砥石	砂岩	119.8	114.2	71.7	1178.7	

写　真　図　版

萱野・宇戸台遺跡空中写真（1：10,000）

図版2

第2トレンチ遺構確認状況（南から）

発掘状況（北から）

SD001・002・003・004完掘状況（北から）

SD004（北から）

SD001・003・008（南から）

SD001内杭出土状況（南から）

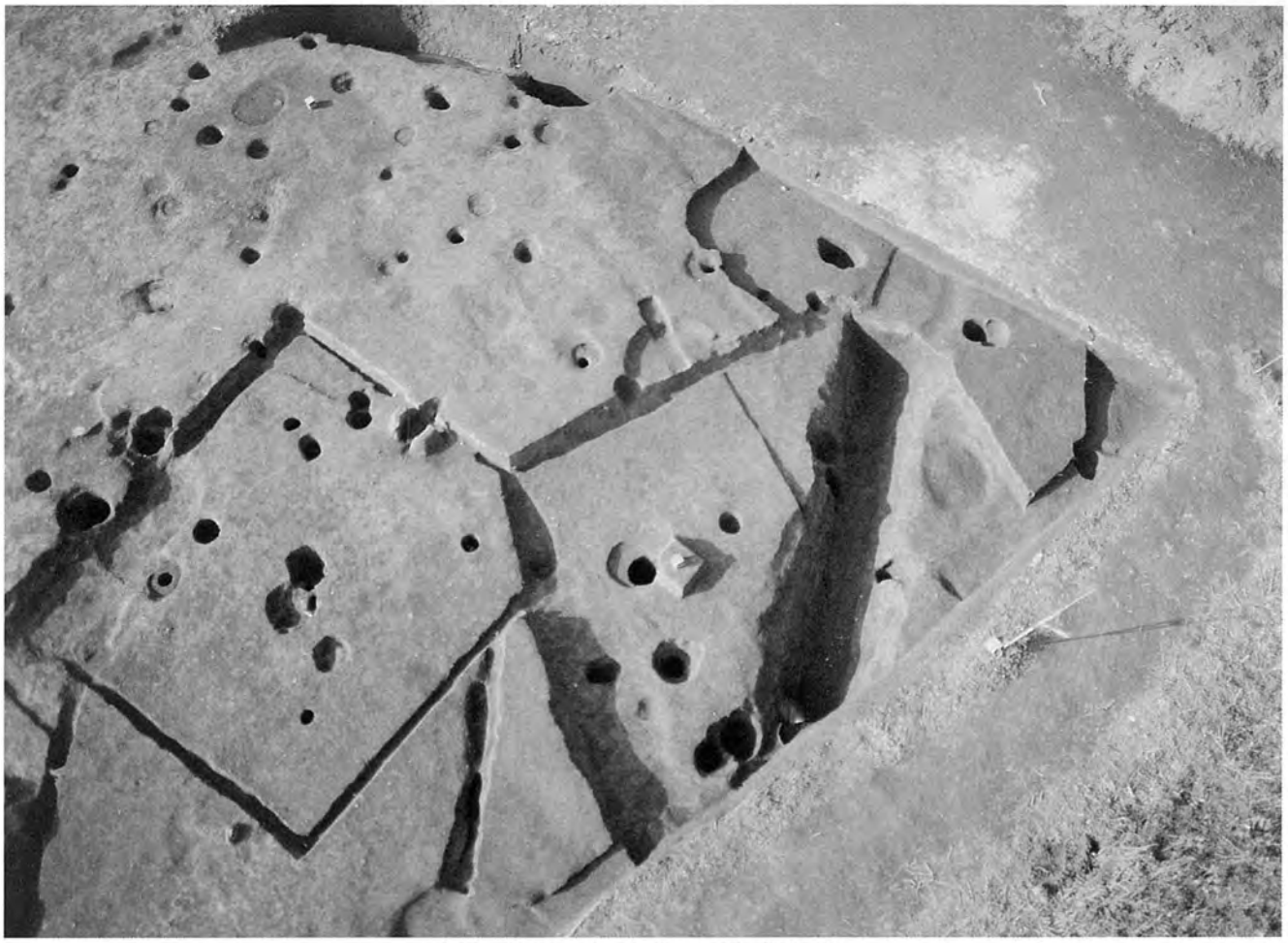
萱野遺跡１次調査区

B区、SS003と周辺の遺構群（北から）

B区、SD018と周辺の遺構群（北から）

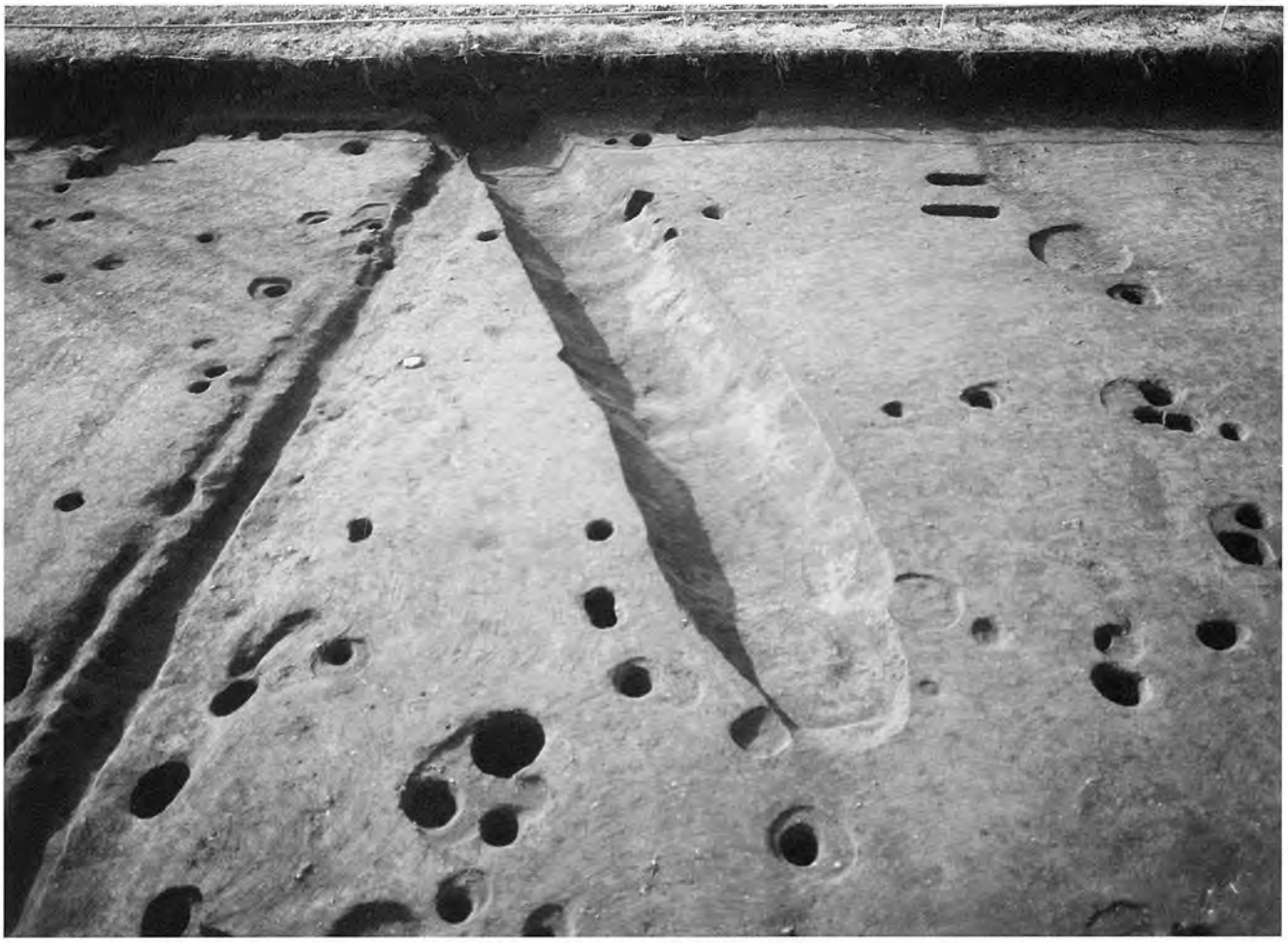
B区、１号墳下層の遺構群（北から）

C区遺構群（北東から）



C区、SI013・017とその周辺（西から）

C区、SI005・015とその周辺（南から）



C区、SD003・014（東から）

C区、SX003、SD004・005（西から）

C区、SX003、SD004・005（南東から）

D区、SD016・029検出状況（北西から）

SD016（北側環濠）南東部（西から）

SD016北西部（北西から）

SD016南東部遺物出土状況

SD016遺物出土状況

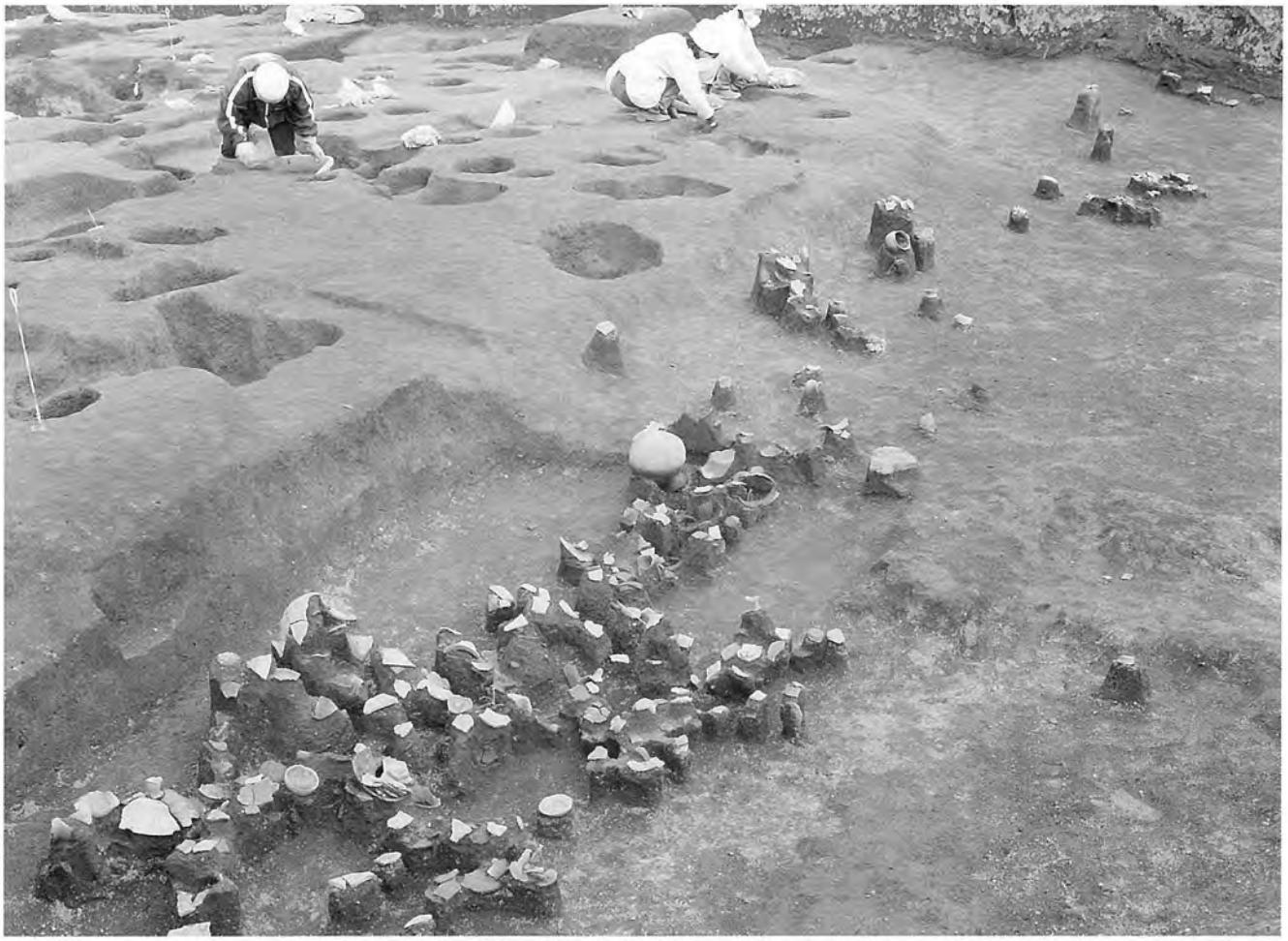
SD018（南側環濠）全景（西から）

SD018遺物出土状況（西から）

SD018遺物出土状況近景

1号墳南周溝（SX001）遺物出土状況（西から）

1号墳南周溝遺物出土状況（北から）



1号墳北周溝（SX004）遺物出土状況（西から）

1号墳北周溝遺物出土状況（東から）

SI001全景（南東から）

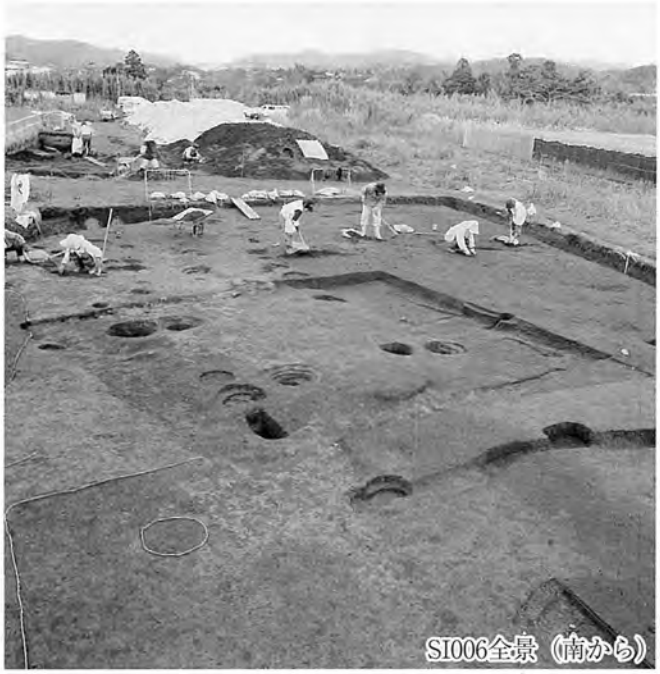
SI002全景（東から）

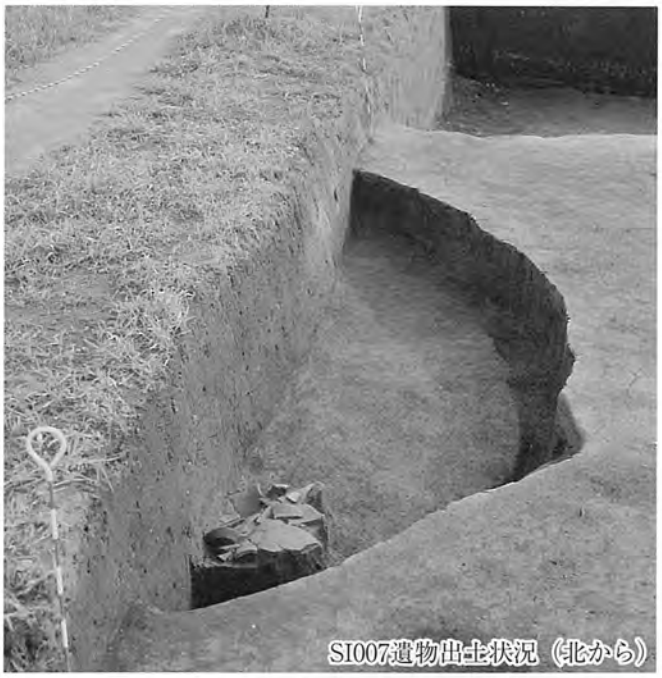
SI003全景（南から）

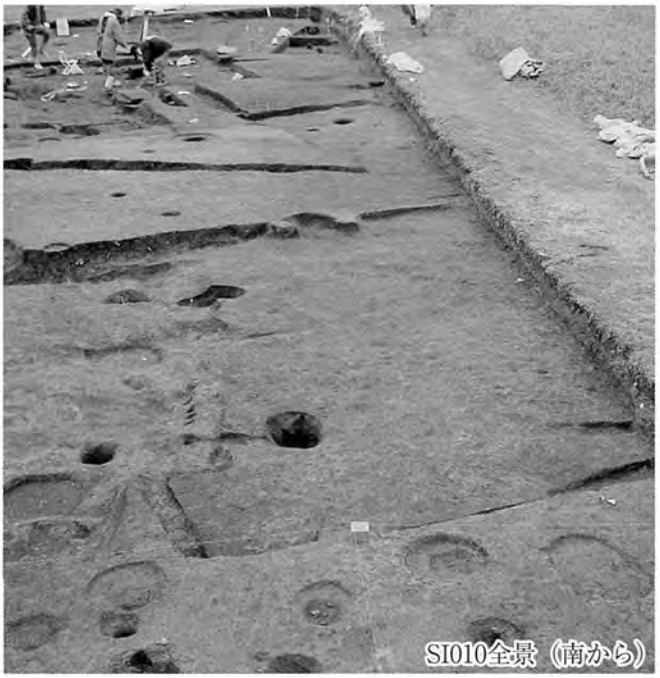
SI004全景（南から）

SI005全景（南から）

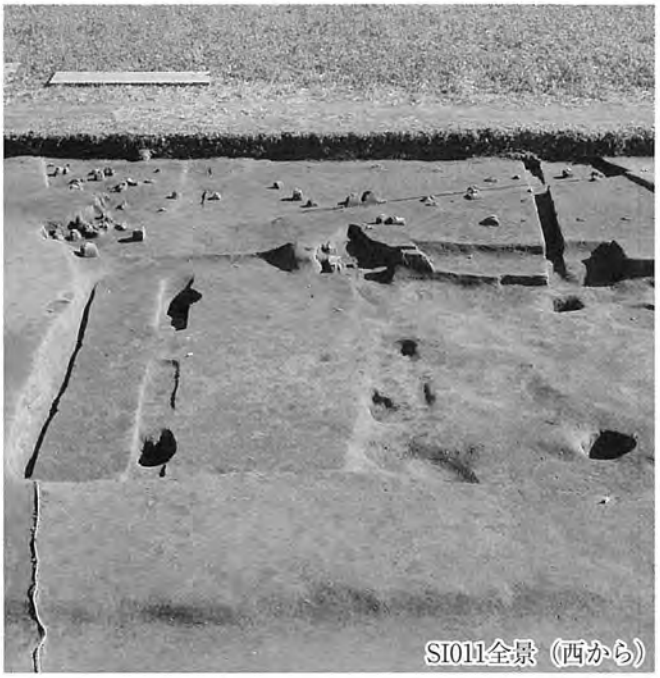
SI005遺物出土状況（南から）


SI006全景（南から）


SI007遺物出土状況（北から）


SI010全景（南から）

SI010カマド（南から）


SI011全景（西から）

SI011カマド（西から）

SI012全景（南から）

SI013全景、遺物出土状況（南東から）

SI014全景（南から）

SI015全景（南から）

SI018全景（東から）

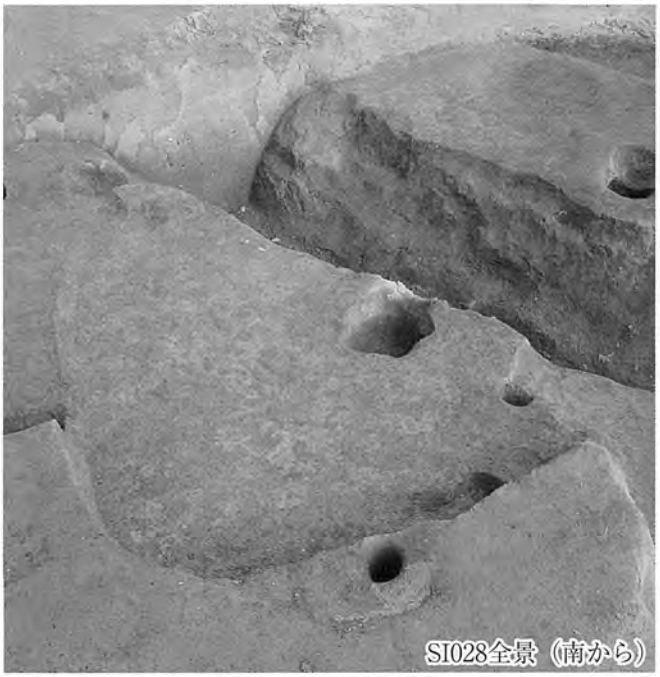
SI019全景（東から）

SI024全景（南から）

SI026全景（西から）

SI026全景（南から）

SI026カマド（南から）


SI028全景（南から）

SI040全景（南から）

SI042全景（南東から）

SI044・003・043全景（南から）

SI045全景（南西から）

SI046全景（南東から）

SI046炉石出土状況（南東から）

SI047全景（西から）

SI049全景（西から）

SI050全景（南東から）

SI058全景（南東から）

SI058炉石出土状況（東から）

SI059全景（南から）

SI068・064・065全景（北から）

SI065全景、遺物出土状況（北から）

SI076全景（北東から、065を含む）

SI078遺物出土状況（東から）

SI083炉石出土状況（北東から）

1号墳下層、V14の住居群（北東から）

1号墳下層、U15・V15の住居群（北西から）

SK002（南から）

SK006遺物出土状況（東から）

SK012（東から）

SK024土坑（南から）

SK026全景（西から）

SK026遺物出土状況（北から）

SD004・005（北から）

SD008（北東から）

SD010（北東から）

SD011（東から）

SD014（南西から）

SD022、SS003西溝（南東から）

SB001（南東から）

A区全景（東から）

B区ピット群（西から、左隅はSX004）

C区ピット群（南から、手前はSD003）

図版20

萱野１次

SD001－1

SD001－3

SD001－4

SD004－11

SD001－8

SD004－10

萱野２次

SI001－1

SI001－2

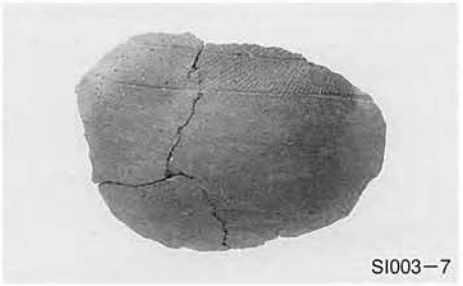
SI003－1

SI003－2

SI003－3

SI003－4

SI003－5

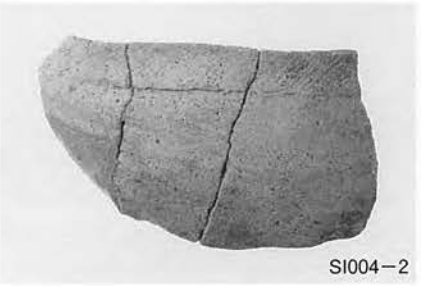

SI003－7

SI003－6

SI003－12

SI003－13

SI003－14


SI004－2

SI004－3

SI004－4

SI004－5

萱野遺跡１次調査区出土土器・２次調査区住居跡出土土器（１）

SI005−5

SI005−7

SI006−1

SI005−6

SI005−9

SI006−4

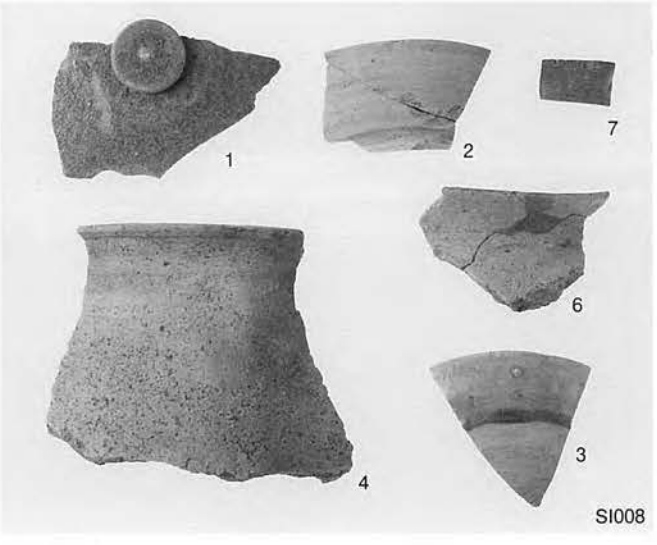
SI005

SI006−6

SI006−7

SI007−1

SI006−8



SI008

住居跡出土土器（2）

SI009－1

SI009－2

SI010－2

SI010－3

SI013－1

SI013－2

SI013－3

SI013－4

SI013－5

SI013－9

SI013－8

SI013－10

SI010－7

SI011－4

SI013－6

住居跡出土土器（3）

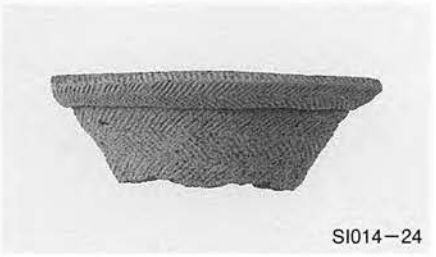
SI014−1

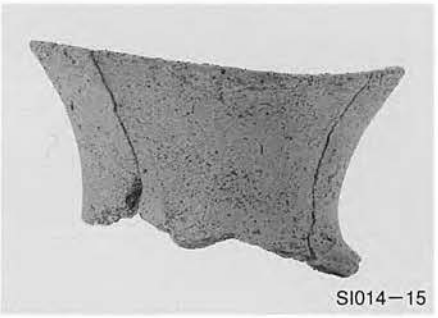
SI014−9

SI014−22

SI014−2

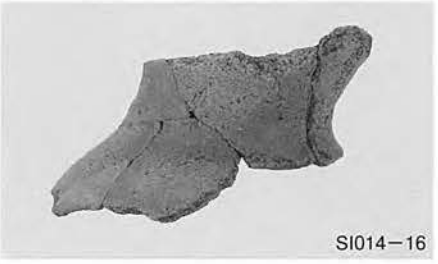
SI014−10


SI014−24


SI014−15

SI014−25

SI014−3


SI014−16

SI014−30

SI014−5

SI014−17

SI015−1

SI014−6

SI014−18

SI017−3

SI014−8

SI014−19

SI018−3

住居跡出土土器（4）

SI014－11

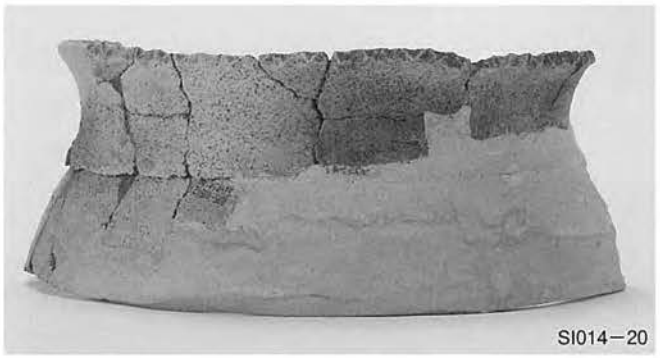
SI014－14

SI014－12

SI014－21

SI014－13

SI014－23


SI014－20

住居跡出土土器（5）

SI019−1

SI019−9

SI019−15

SI019−7

SI019−13

SI019−16

SI019−8

SI019−14

SI019−17

SI019−10

SI019−5

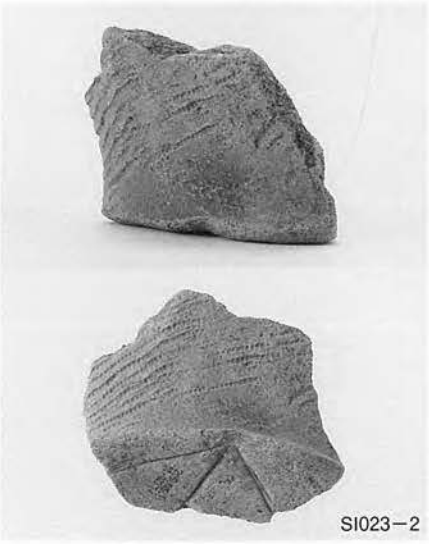
SI019−11

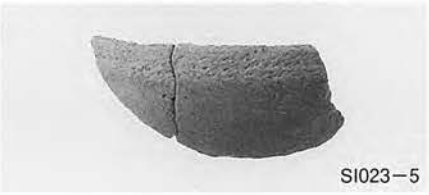
SI019−12

SI019−6

住居跡出土土器（6）

SI020－3


SI023－2

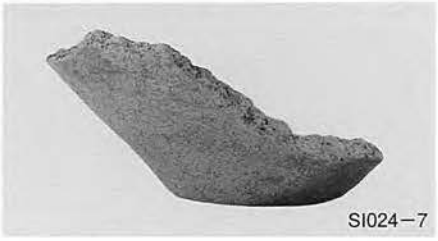

SI023－5

SI023－6

SI023－7

SI023－10

SI023－9


SI024－7

SI024－8

SI025－1

SI025－2

SI025－3

SI025－4

SI026－2

SI027－3

SI037－8

SI029－1

SI030(A)－1

SI031－1

SI031－2

SI031－4

住居跡出土土器（7）

SI023－1

SI024－2

SI023－4

SI024－4

SI027－4

SI024－1

SI031－3

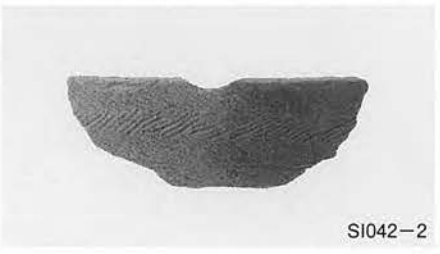
住居跡出土土器（8）

SI034－1

SI035－3

SI037－1

SI042－1


SI042－2

SI042－4

SI042－5

SI042－6

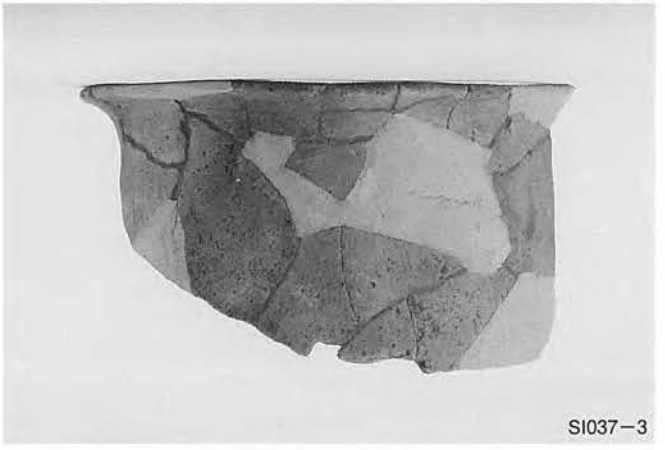
SI042－7

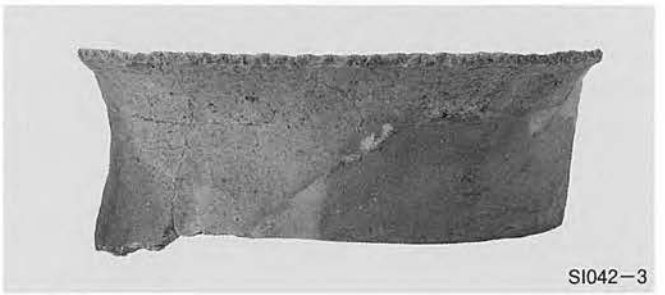
SI043－1

SI043－2

SI043－3

SI037－2


SI037－3

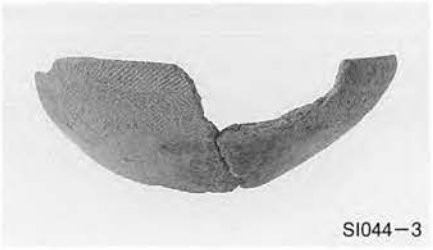

SI042－3

住居跡出土土器（9）

SI044－1

SI044－2

SI044－4


SI044－3

SI044－5

SI044－6

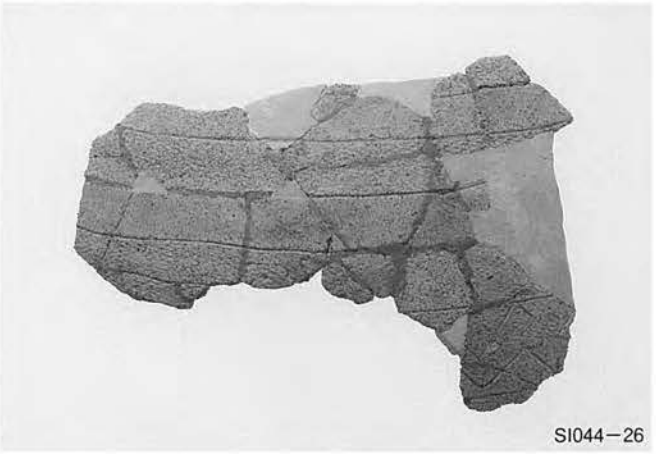
SI044－7

SI044－8

SI044－9

SI044－10

SI044－14


SI044－26

SI044－15

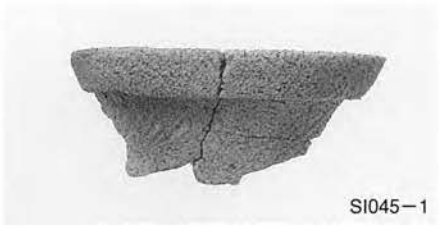
SI045－2

住居跡出土土器（10）

SI044－11

SI044－12

SI044－13


SI045－1

SI045－3

SI046－3

SI047－2

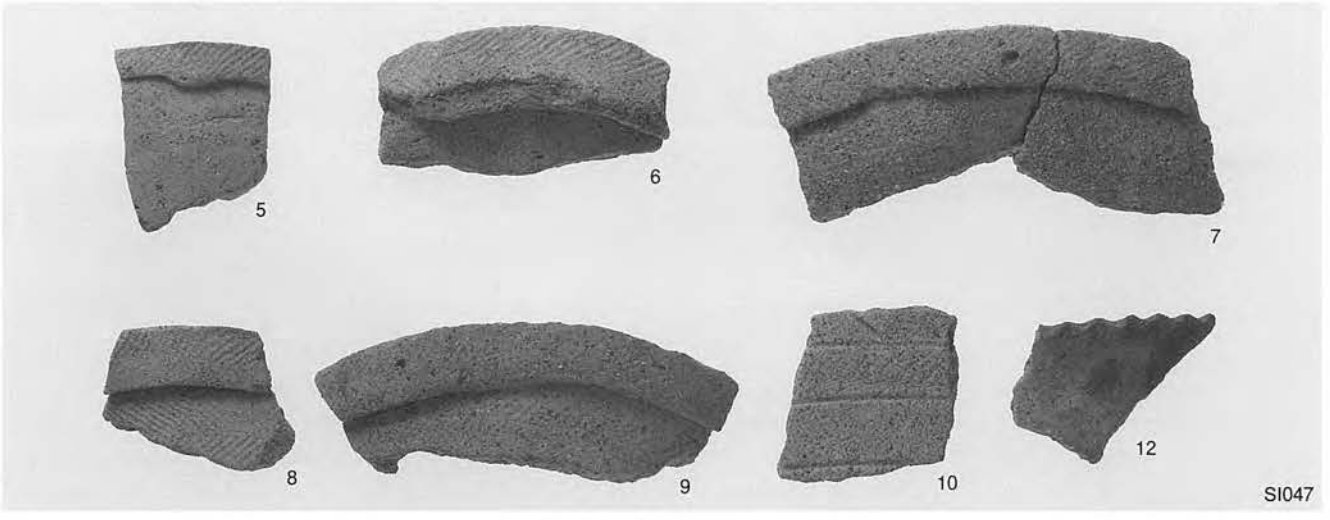
SI047－1

SI047－4

SI049－1

SI049－2

SI049－3



住居跡出土土器（11）

SI050－1

SI053－1

SI053－8

SI053－7

SI050－4

SI053－3

SI056－1

SI050－5

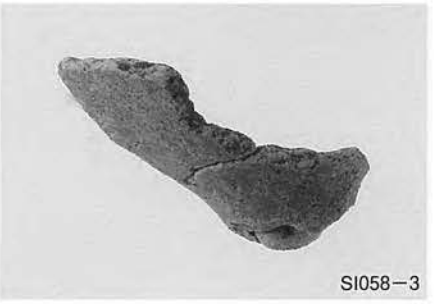
SI053－4

SI057－6

SI053－5

SI052－1

SI053－6


SI058－3

SI050－2

SI053－2

SI050－3

SI058－1

住居跡出土土器（12）

SI058－4

SI058－9

SI058－13

SI058－5

SI058－10

SI058－14

SI058－11

SI058－15

SI058－7

SI058－12

SI059－1

SI058－8

SI059－5

住居跡出土土器（13）

SI059－2

SI059－3

SI060－5

SI063－1

SI063－2

SI063－3

SI063－5

SI063－6

SI064－1

SI064－2

SI064－4

SI064－5

SI065－1

SI065－2

SI063－7

SI063－12

住居跡出土土器（14）

SI065－3

SI065－4

SI065－5

SI065－6

SI065－7

SI065－8

SI065－9

SI065－10

SI065－11

SI065－12

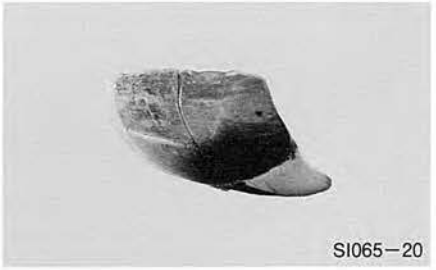
SI065－13

SI065－14

SI065－15

SI065－17

SI065－19


SI065－20

SI065－21

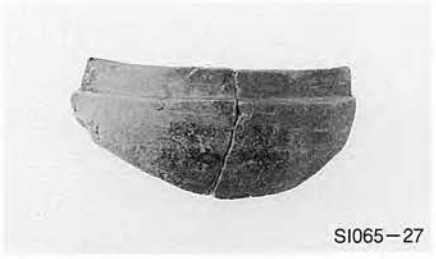
SI065－23

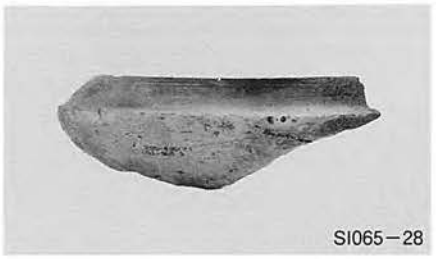
SI065－24

SI065－25

SI065－26

住居跡出土土器（15）


SI065－27


SI065－28

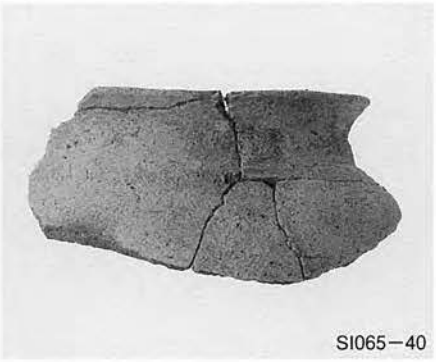
SI065－30

SI065－31

SI065－32

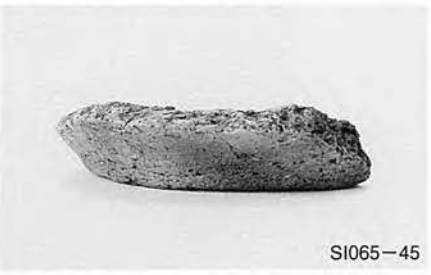
SI065－34

SI065－39


SI065－40

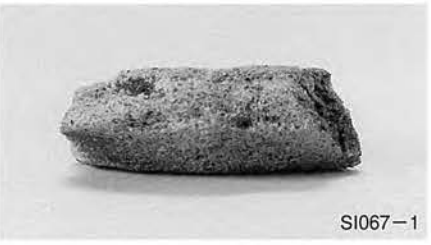
SI065－42

SI065－43


SI065－45

SI065－46

SI066－1


SI067－1

SI065－35

SI065－44

住居跡出土土器（16）

SI065－36

SI065－47

SI065－37

SI065－48

SI065－38

SI065－49

住居跡出土土器（17）

SI068－1

SI068－2

SI068－3

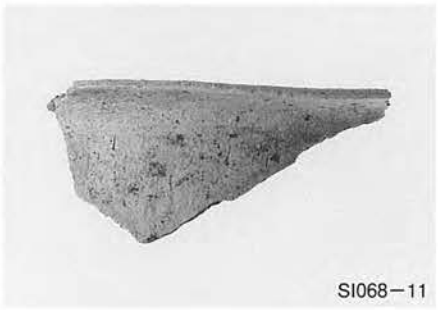
SI068－4

SI068－6

SI068－7

SI068－8

SI068－10


SI068－11

SI068－12

SI068－13

SI068－14

SI068－15

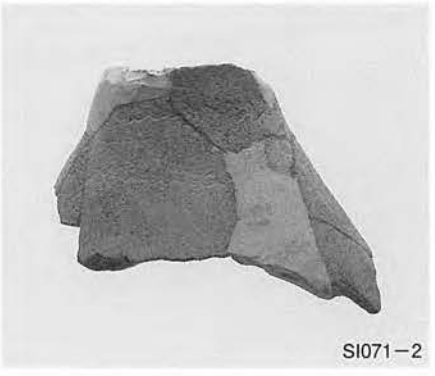
SI069－1

SI070－1

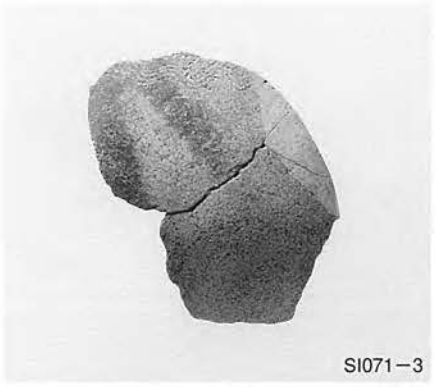
SI070－2

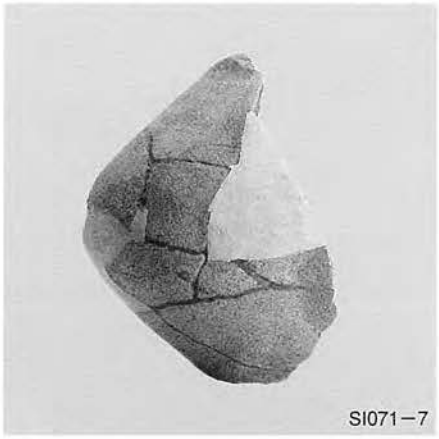
SI070－4

SI071－1


SI071－2

住居跡出土土器（18）

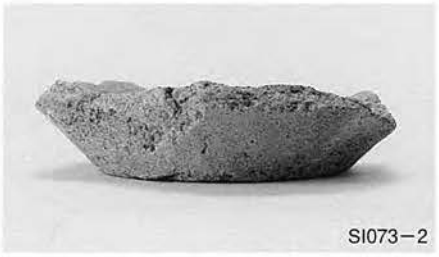

SI071－3


SI071－7

SI073－3

SI073－4

SI071－4


SI073－2

SI074－2

SI073－1

SI075－2

SI075－1

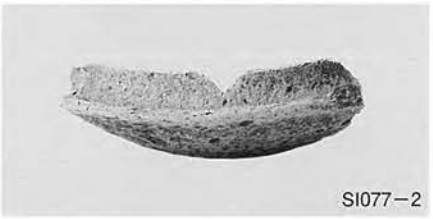
SI075－6

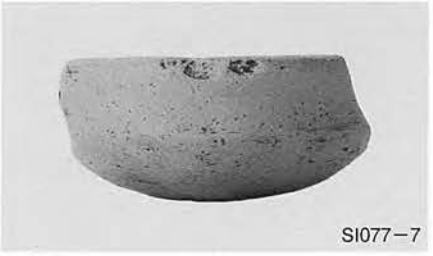
住居跡出土土器（19）

SI075－3

SI075－4

SI075－5


SI077－2


SI077－7

SI077－3

SI077－8

SI077－4

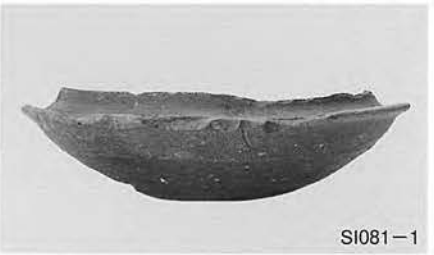
SI077－9

SI077－14

SI077－5

SI077－6

SI077－10


SI081－1

SI082－7

SI082－8

SI076－1

SI079－1

住居跡出土土器（20）

SI078－1

SI078－2

SI082－39

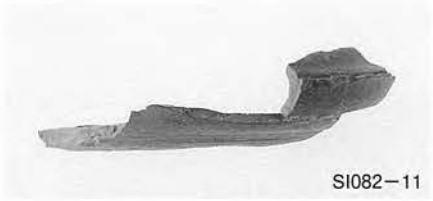
SI082－40

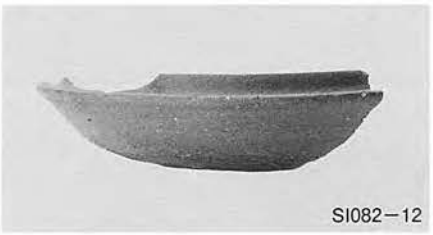
SI082－41

SI082－44

SI082－51

住居跡出土土器（21）


SI082－11


SI082－12

SI082－14

SI082－15

SI082－16

SI082－17

SI082－18

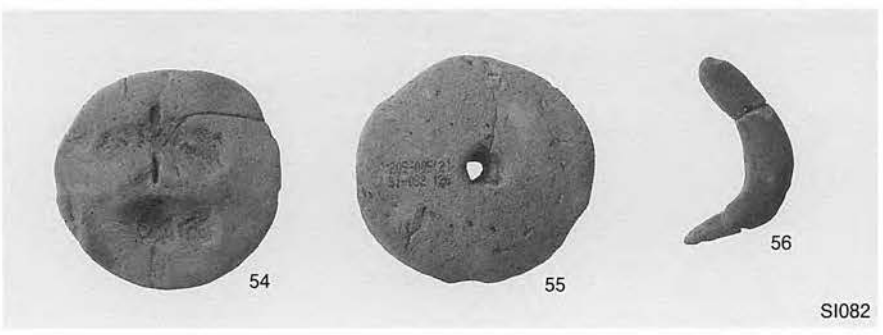
SI082－19

SI082－20

SI082－34

SI082－35

SI082－37



SI082

SI082－38

SI082－45

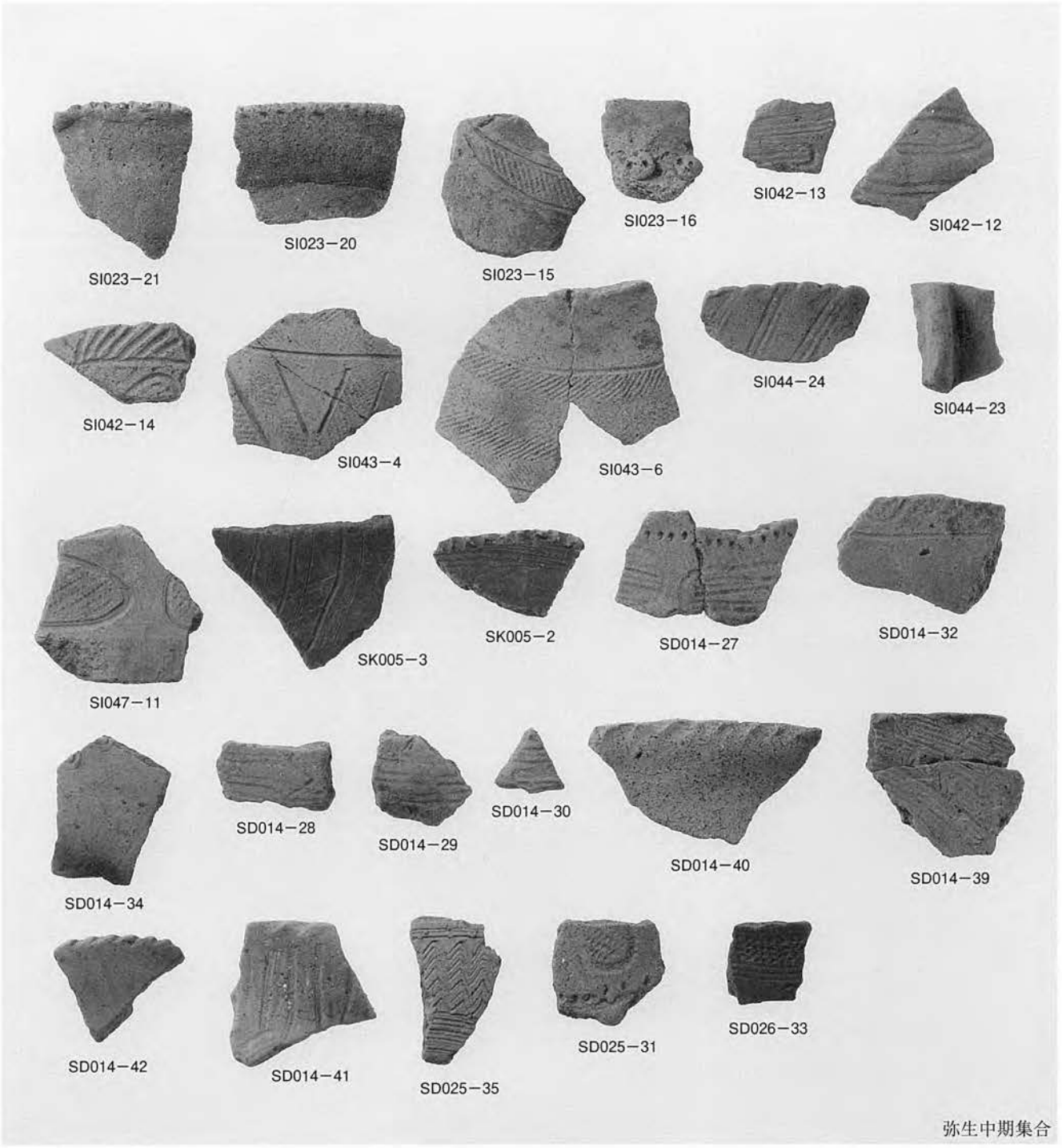
SI082－47

SI082－49

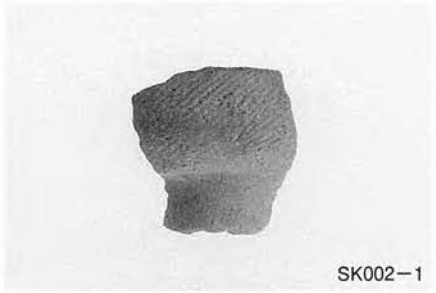
SI082－36

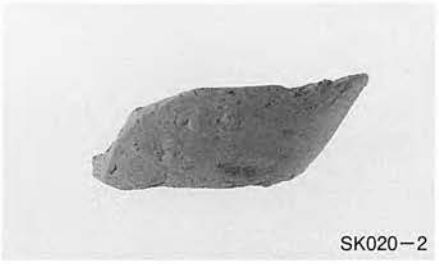
SI110－1

住居跡出土土器（22）・土製品


SI023−21
SI023−20
SI023−15
SI023−16
SI042−13
SI042−12
SI042−14
SI043−4
SI043−6
SI044−24
SI044−23
SI047−11
SK005−3
SK005−2
SD014−27
SD014−32
SD014−34
SD014−28
SD014−29
SD014−30
SD014−40
SD014−39
SD014−42
SD014−41
SD025−35
SD025−31
SD026−33
弥生中期集合
SI067−2
SI067−3
SI073−5
SI073−8
SI073−9
SI073−15
SI073−16
SI073−17
SI073−18
SI073−19
SI067・073弥生後期集合

住居跡等出土土器（23）


SK002－1


SK020－2

SK026－5

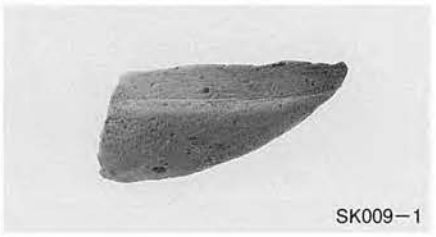
SK002－2

SK026－1

SK026－6

SK026－2

SK026－7


SK009－1

SK026－3

SK026－8

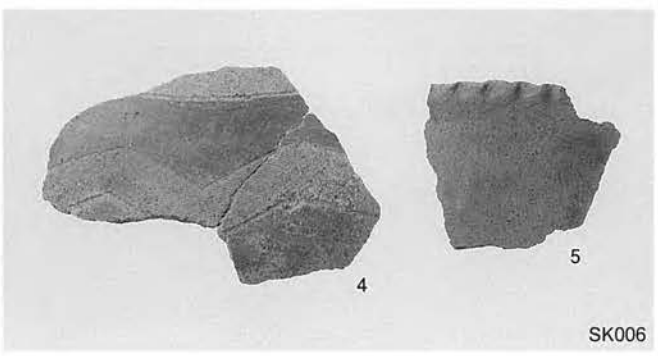
SK009－2

SK026－4

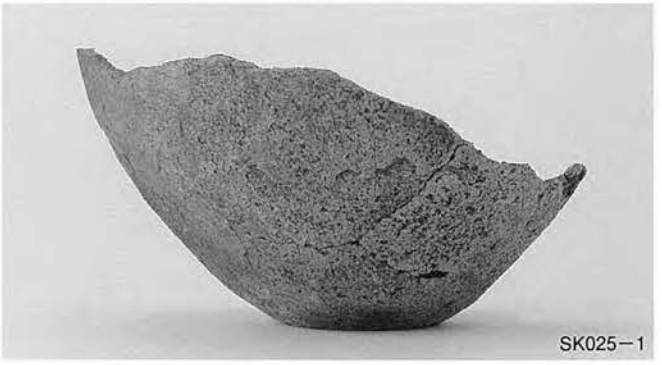
SK026－9

SK002－3

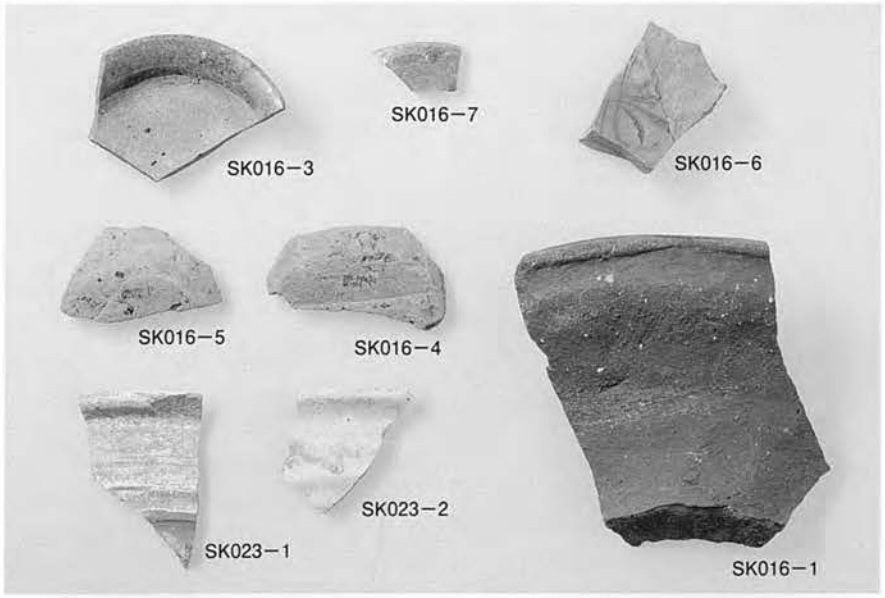
SK006－1

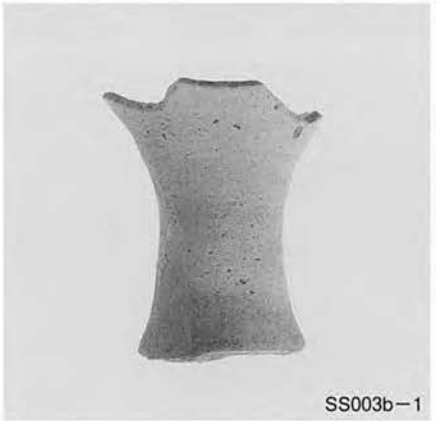


SK006

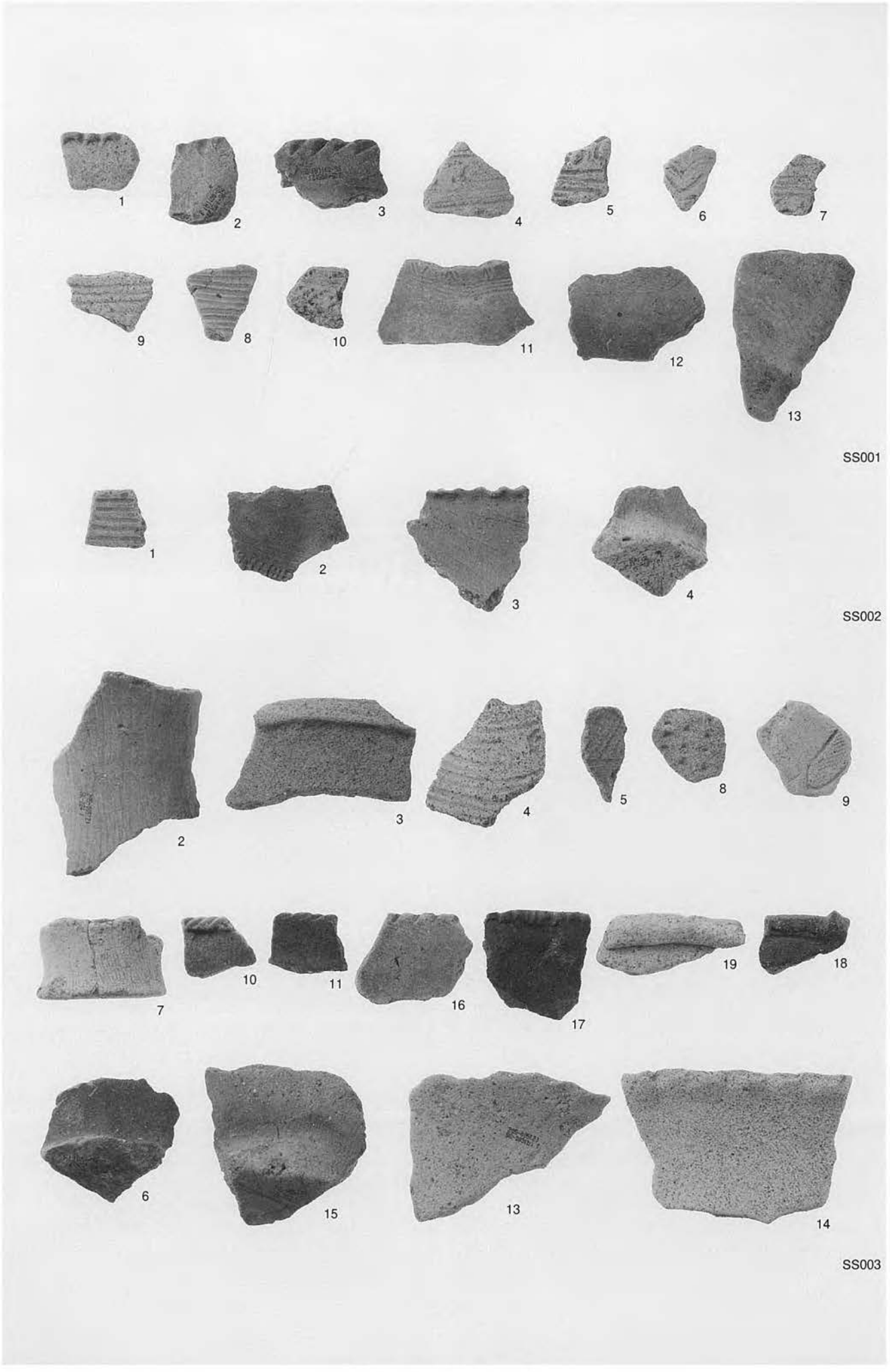

SK025－1

土坑出土土器（1）





土坑出土土器（2）・方形周溝墓出土土器（1）


1
2
3
4
5
6
7
9
8
10
11
12
13
SS001
1
2
3
4
SS002
2
3
4
5
8
9
7
10
11
16
17
19
18
6
15
13
14
SS003

方形周溝墓出土土器（2）

SX004－1

SX004－2

SX004－3

SX004－4

SX004－6

SX004－14

SX004－15

SX004－17

SX004－18

SX004－19

SX004－20

SX004－21

古墳出土土器（1）

SX004－23

SX001－29

SX004－24

SX001－28

SX001－41

古墳出土土器（2）

SX004－30

SX001－34

SX001－35

SX001－36

SX004－42

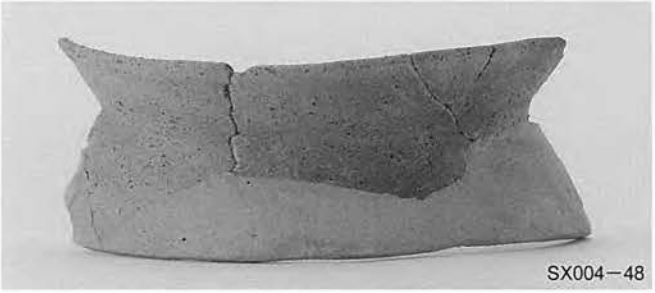
SX004－44

SX004－43

SX004－45

SX004－55

SX004－56


SX004－48

SX004－51

SX004－57

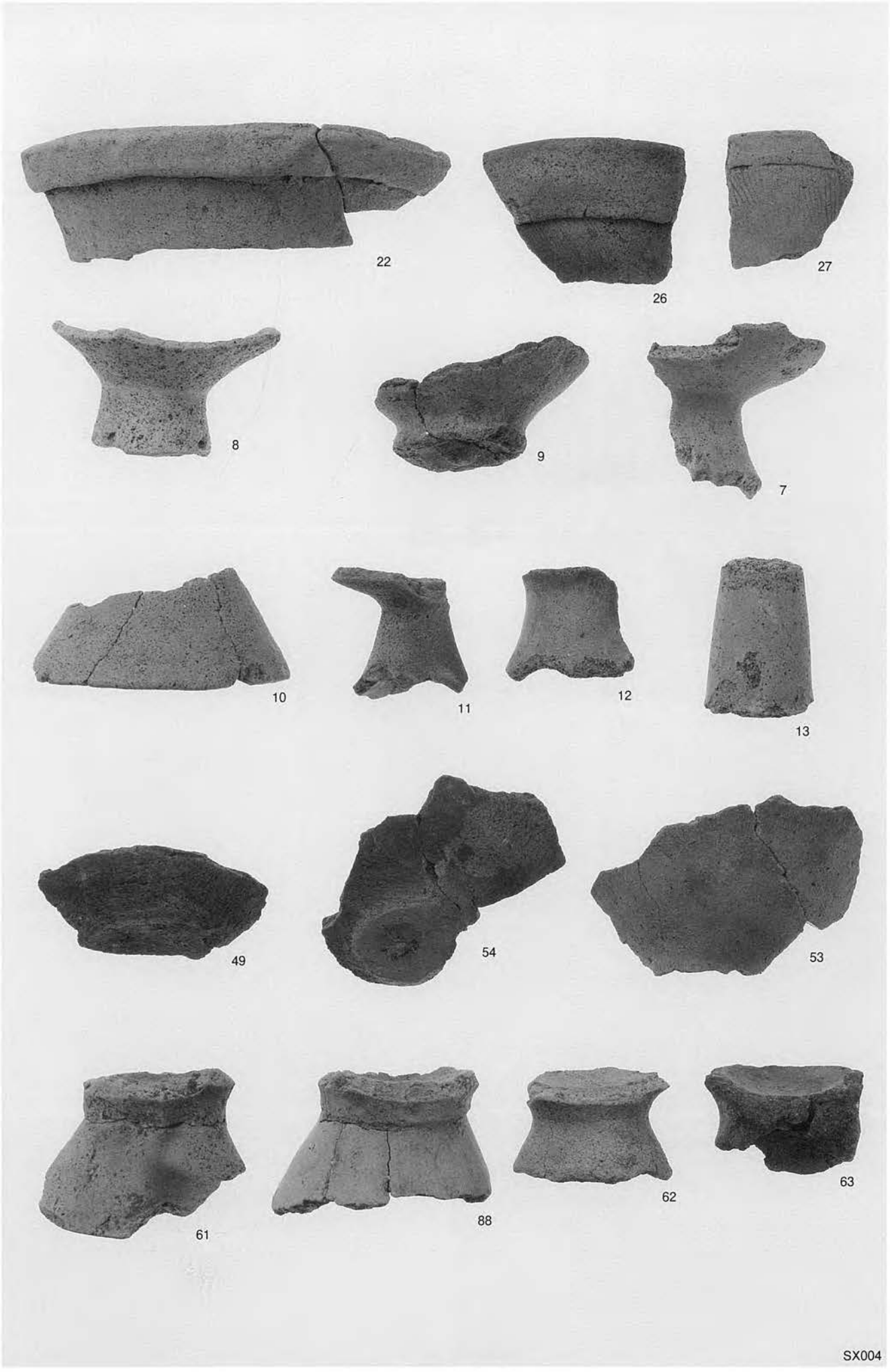
SX004－58

SX004－60

SX004－63

SX004－52

古墳出土土器（3）



古墳出土土器（4）

SX004－74

SX001－81

SX004－76

SX004－75

SX004－82

SX005－89

SX004－78

SX001－116

SX001－79

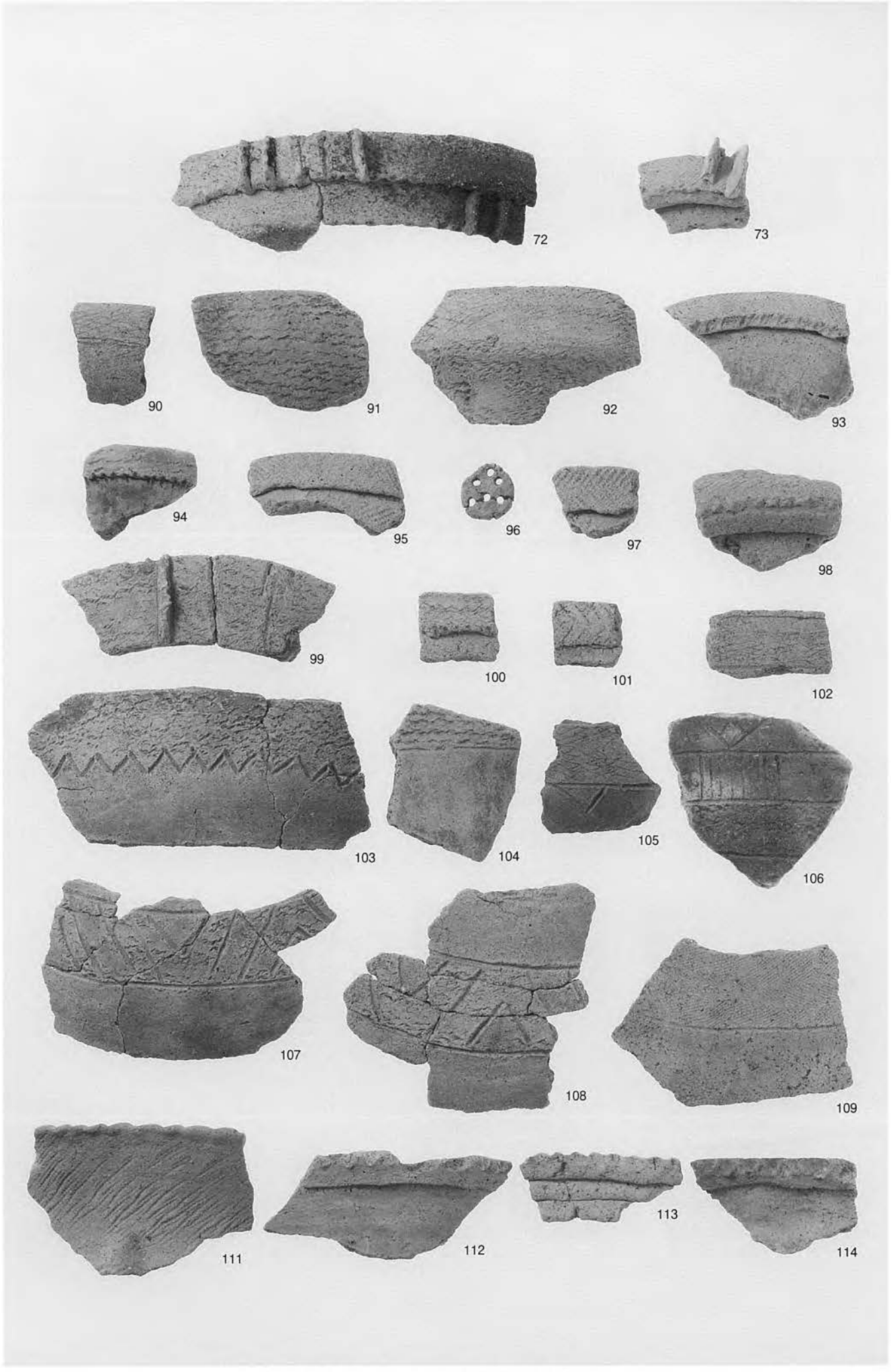
SX004－83

SX001－118

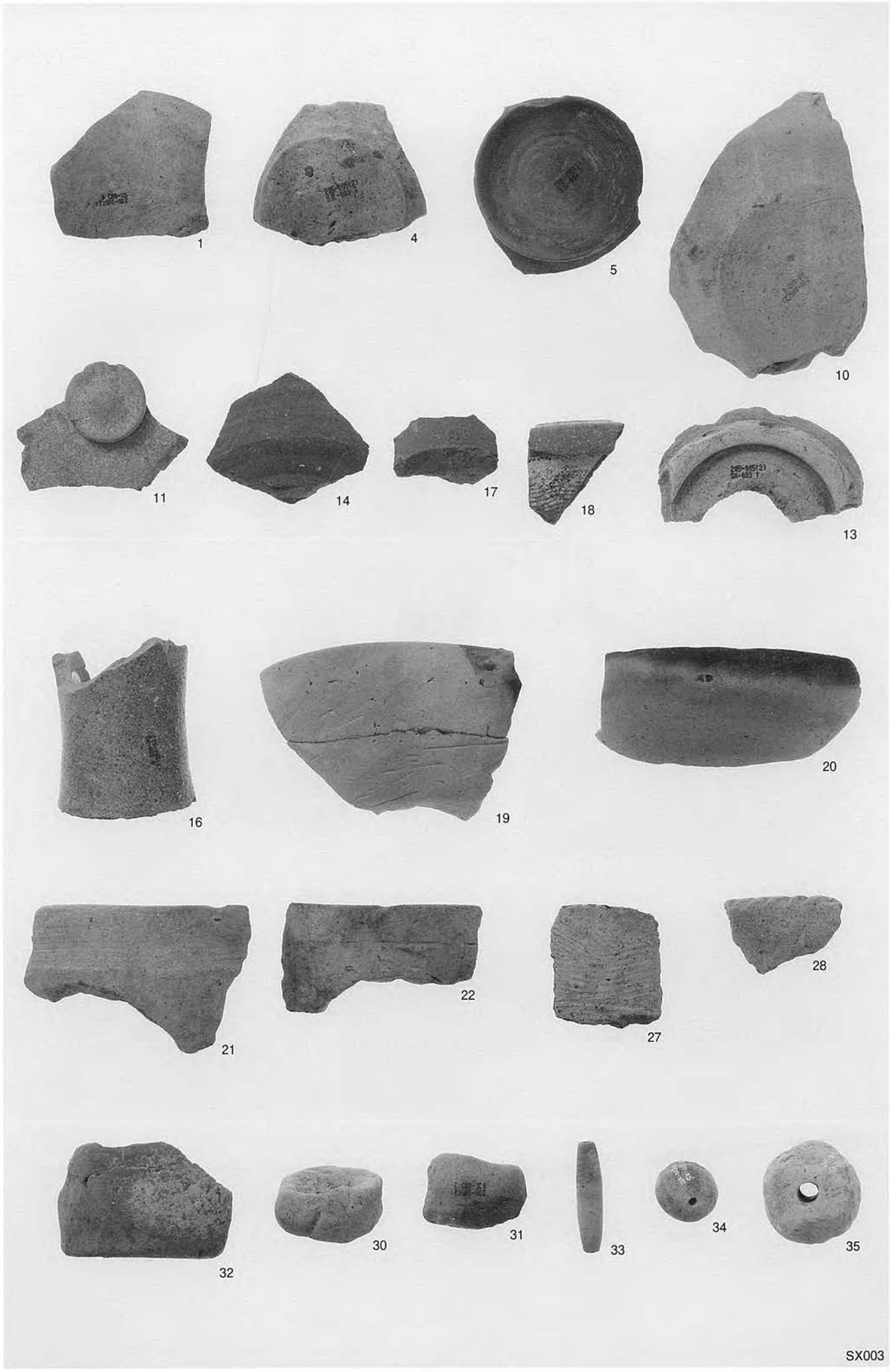
SX004－71

SX004－77

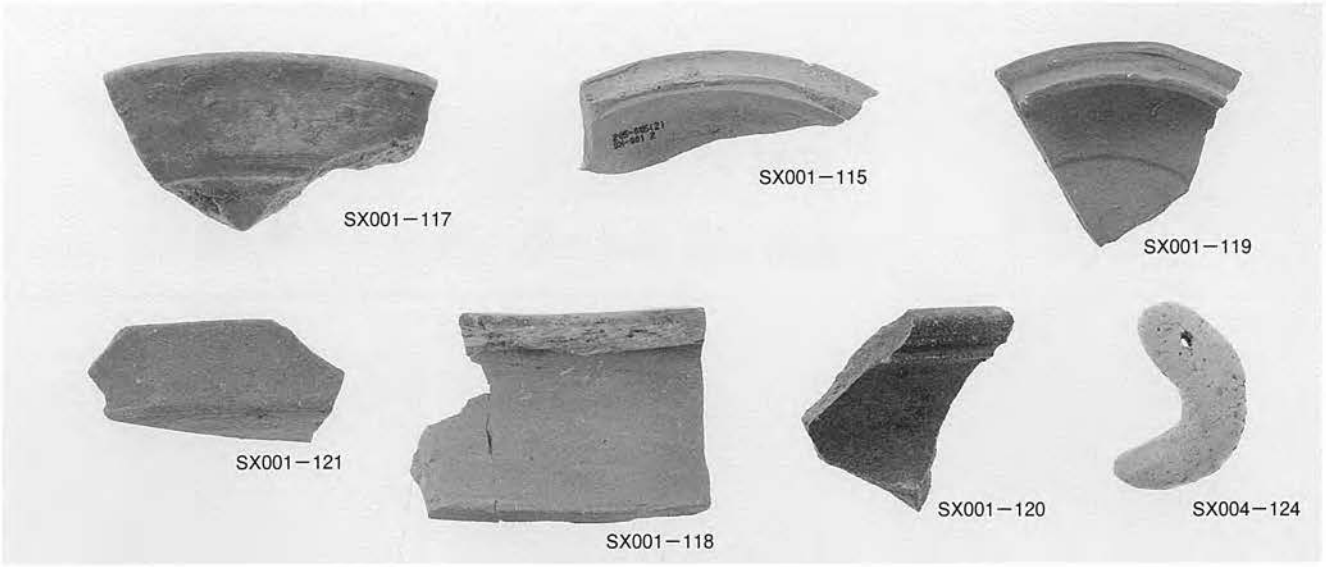
古墳出土土器（５）　古墳下層出土土器



古墳出土土器（6） 古墳下層出土土器



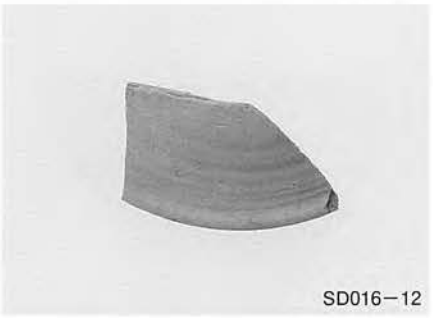
溝出土土器（1）

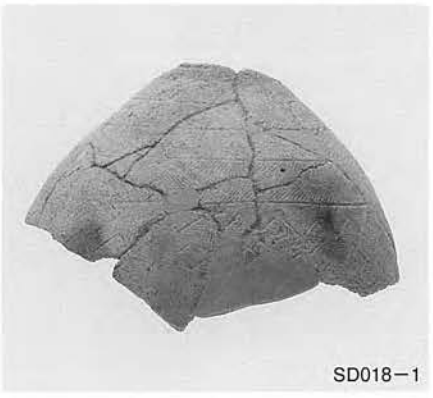


古墳上層出土土器・溝出土土器（2）

SD016－2

SD016－3


SD016－12


SD018－1

SD018－3

SD018－4

SD018－5

SD018－7

SD018－8

SD018－13

SD018－15

SD018－16

SD018－18

SD018－19

SD018－20

環濠（SD016・018）出土土器（1）

SD016－1

SD018－9

SD016－4

SD018－10

SD018－2

SD018－12

環濠（SD016・018）出土土器（2）

SD018－17

SD018－23

SD018－21

SD018－24

SD018－22

SD018－25

環濠（SD016・018）出土土器（3）

SD018－26

SD018－29

SD018－27

SD018－32

SD018－28

SD018－30

SD018－33

SD018－31

SD018－34

SD018－35

SD018－36

SD018－39

SD018－40

環濠（SD016・018）出土土器（4）

SD018－37

SD018－42

SD018－38

SD018－41

SD018－44

環濠（SD016・018）出土土器（5）

SD018－45

SD018－46

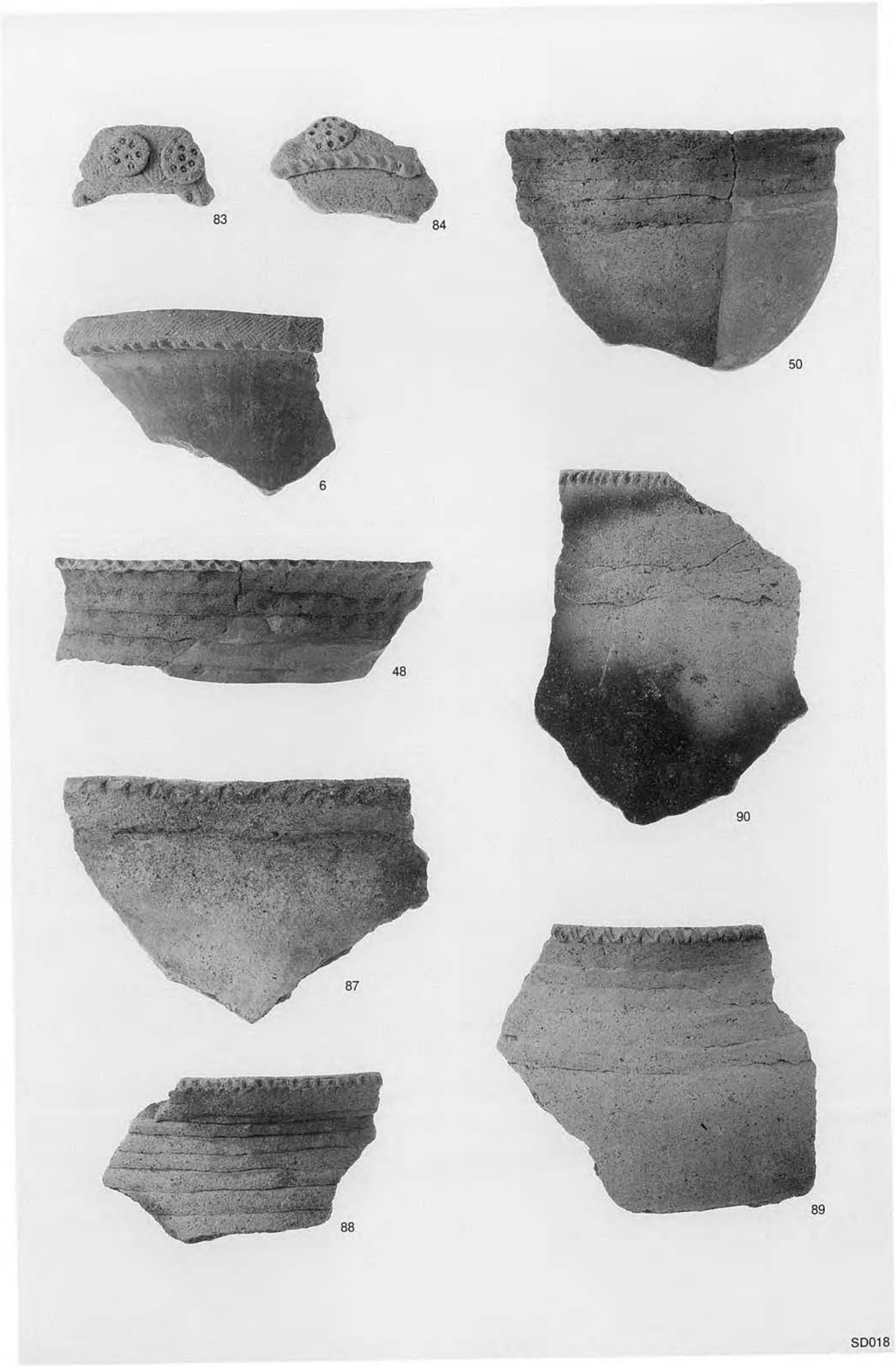
SD018－49

SD018－52

SD018－53

SD018－54

環濠（SD016・018）出土土器（6）



環濠（SD016・018）出土土器（7）

SD018−56

SD018−60

SD018−68

SD018−57

SD018−61

SD018−69

SD018−58

SD018−62

SD018−70

SD018−59

SD018−63

SD018−71

SD018−64

SD016−5

SD016−6

SD016−7

SD016−9

SD016−10

SD018−81

SD018−82

SD018−72

SD010−46

SD011−45

環濠（SD016・018）出土土器（8）・溝出土土器

V13−2

U15−48

B区−57

B区−3

U15−53

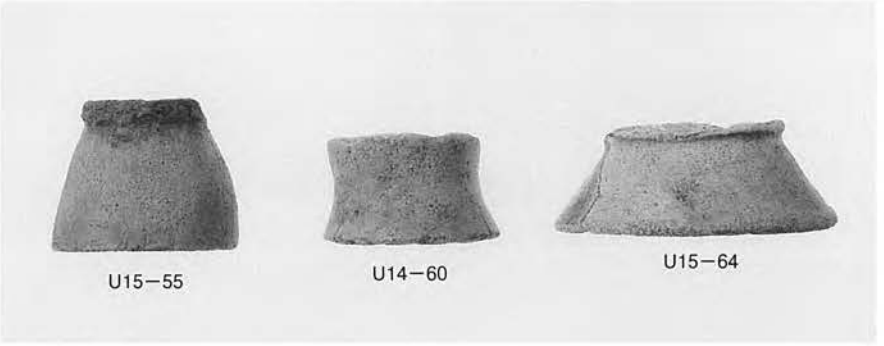
V15−58

V14−6

U14−56

V14−63

V14−7


U15−55

U14−60

U15−64

U15−9

V15−10

グリッド出土土器（1）

U13−1

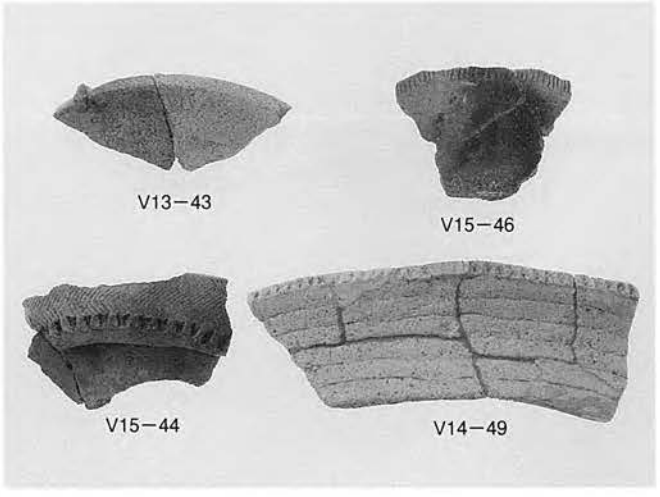
U15−50

V13−52

U15−45

U15−54

U15−51

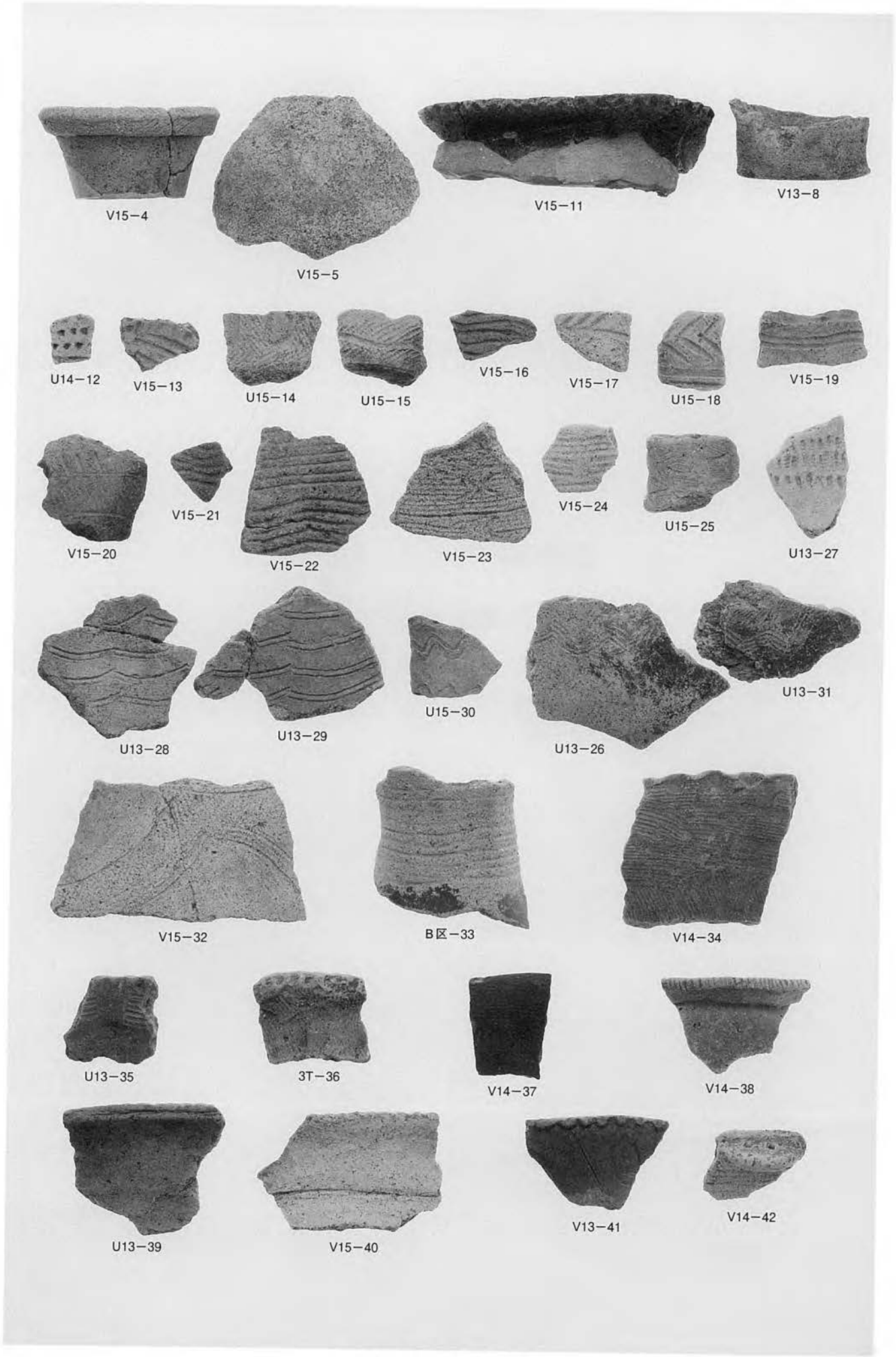

V13−43

V15−46

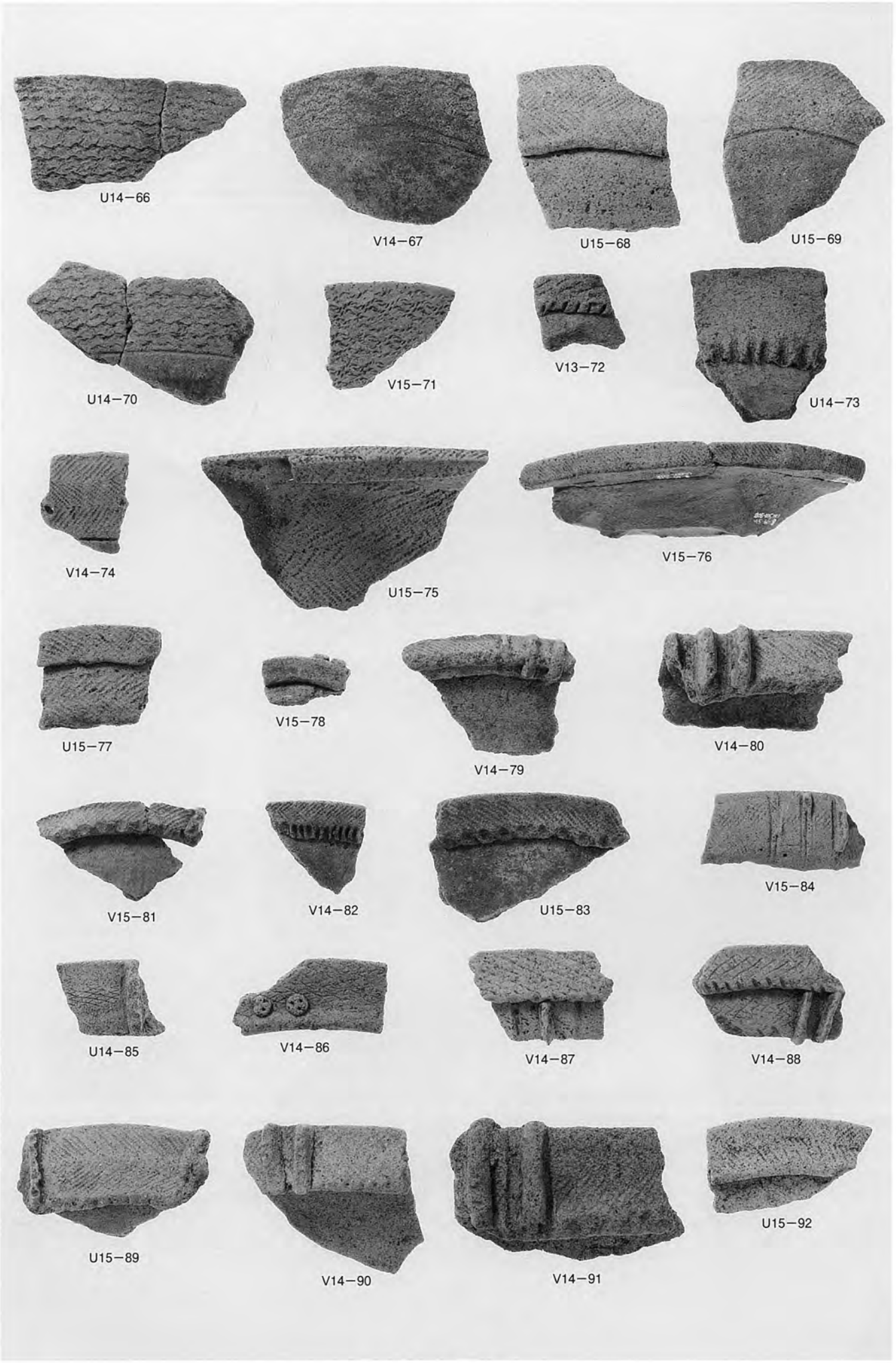
V15−44

V14−49

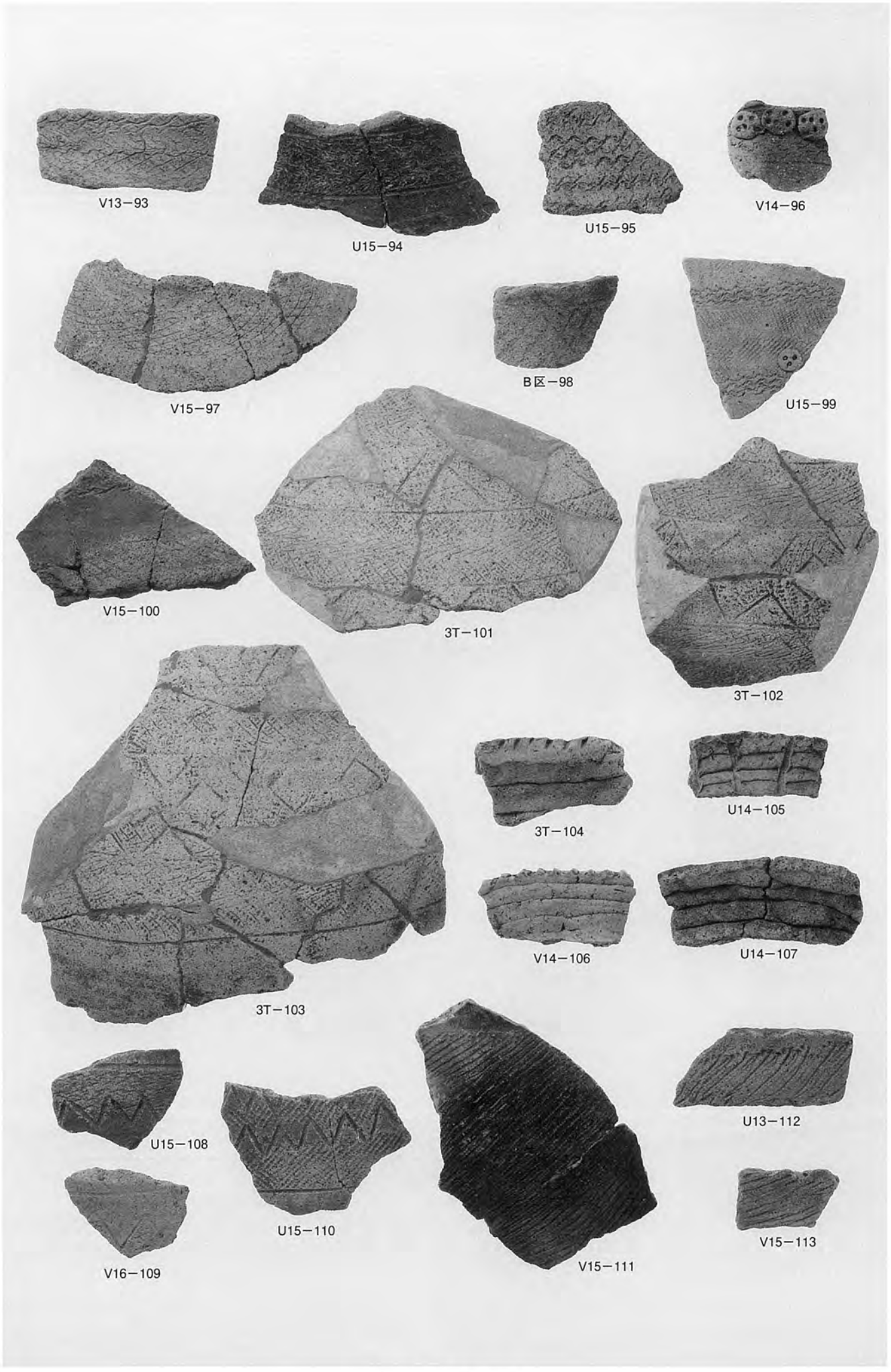
グリッド出土土器（2）


V15−4
V15−5
V15−11
V13−8
U14−12
V15−13
U15−14
U15−15
V15−16
V15−17
U15−18
V15−19
V15−20
V15−21
V15−22
V15−23
V15−24
U15−25
U13−27
U13−28
U13−29
U15−30
U13−26
U13−31
V15−32
B区−33
V14−34
U13−35
3T−36
V14−37
V14−38
U13−39
V15−40
V13−41
V14−42

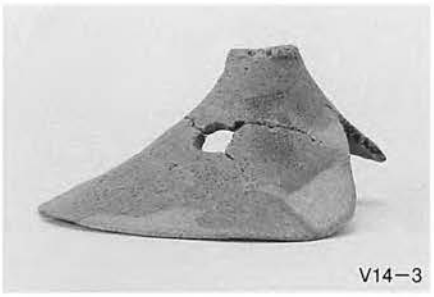
グリッド出土土器（3）


U14−66
V14−67
U15−68
U15−69
U14−70
V15−71
V13−72
U14−73
V14−74
U15−75
V15−76
U15−77
V15−78
V14−79
V14−80
V15−81
V14−82
U15−83
V15−84
U14−85
V14−86
V14−87
V14−88
U15−89
V14−90
V14−91
U15−92

グリッド出土土器（4）


V13−93
U15−94
U15−95
V14−96
V15−97
B区−98
U15−99
V15−100
3T−101
3T−102
3T−103
3T−104
U14−105
V14−106
U14−107
U15−108
U15−110
V16−109
V15−111
U13−112
V15−113

グリッド出土土器（5）


V14−3

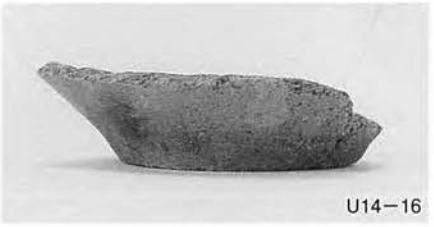
U14−35

V14−39

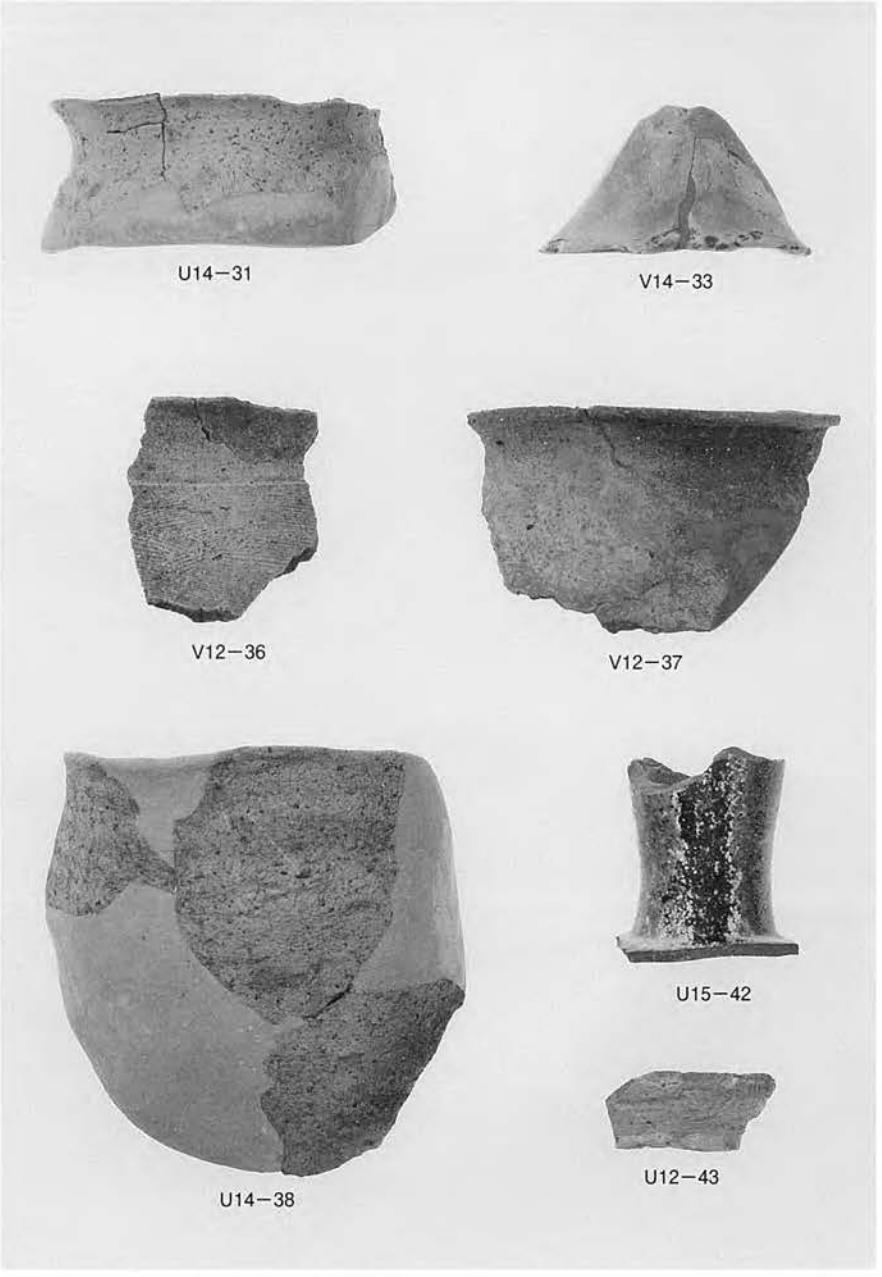
U14−8

U13−40

U13−41


U14−16

V14−18


U14−31
V14−33
V12−36
V12−37
U14−38
U15−42
U12−43

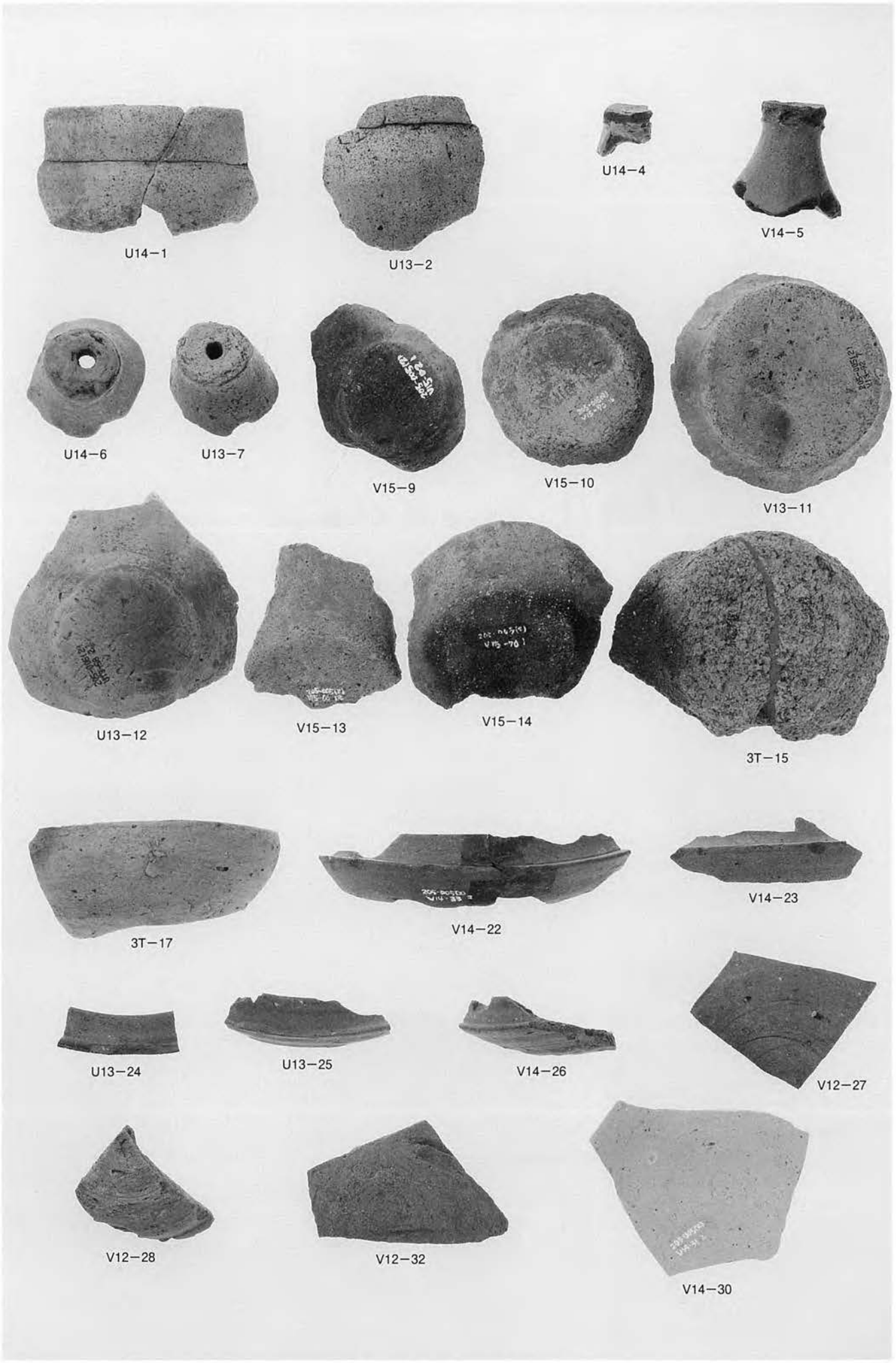
V14−19

U13−20

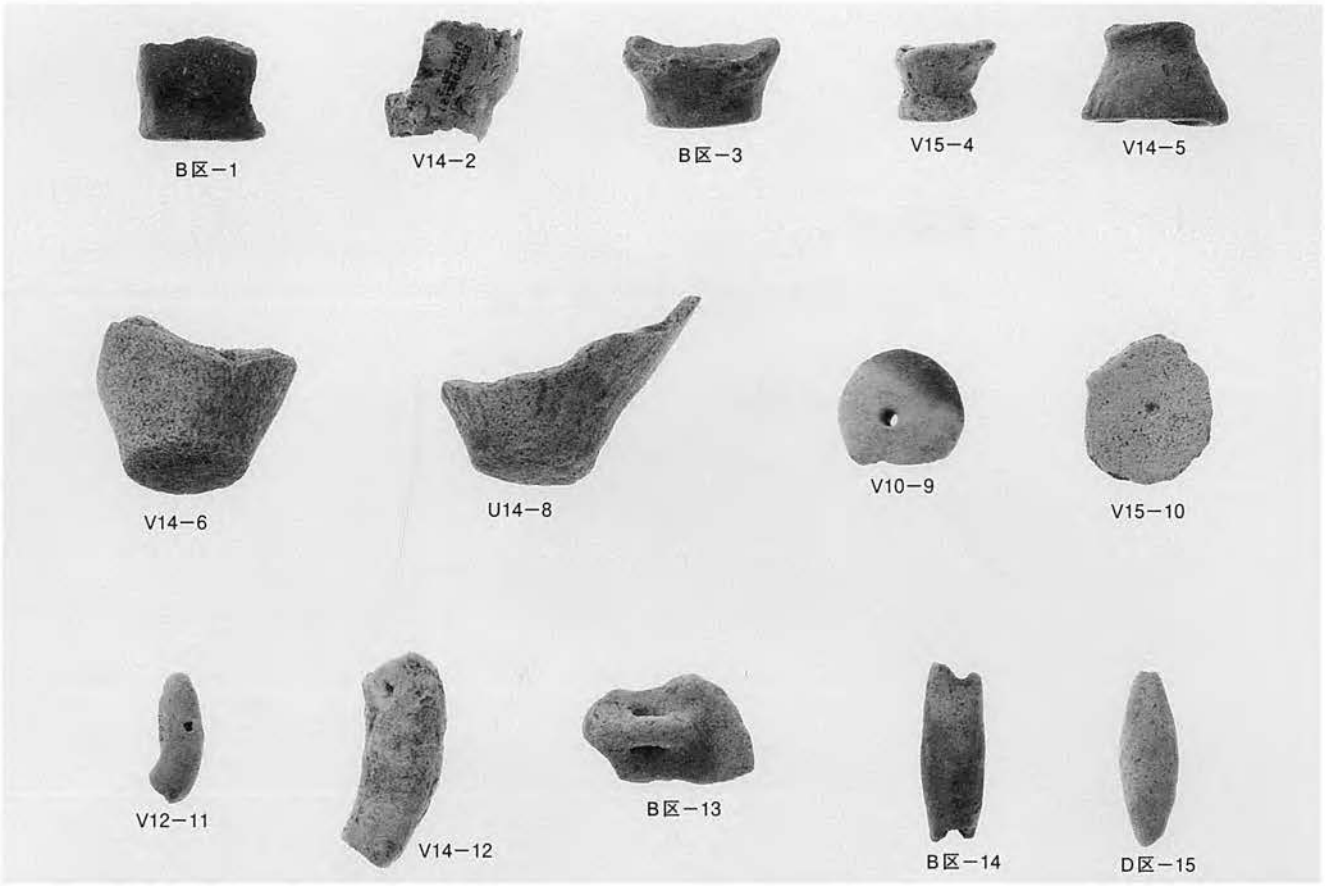
U13−21

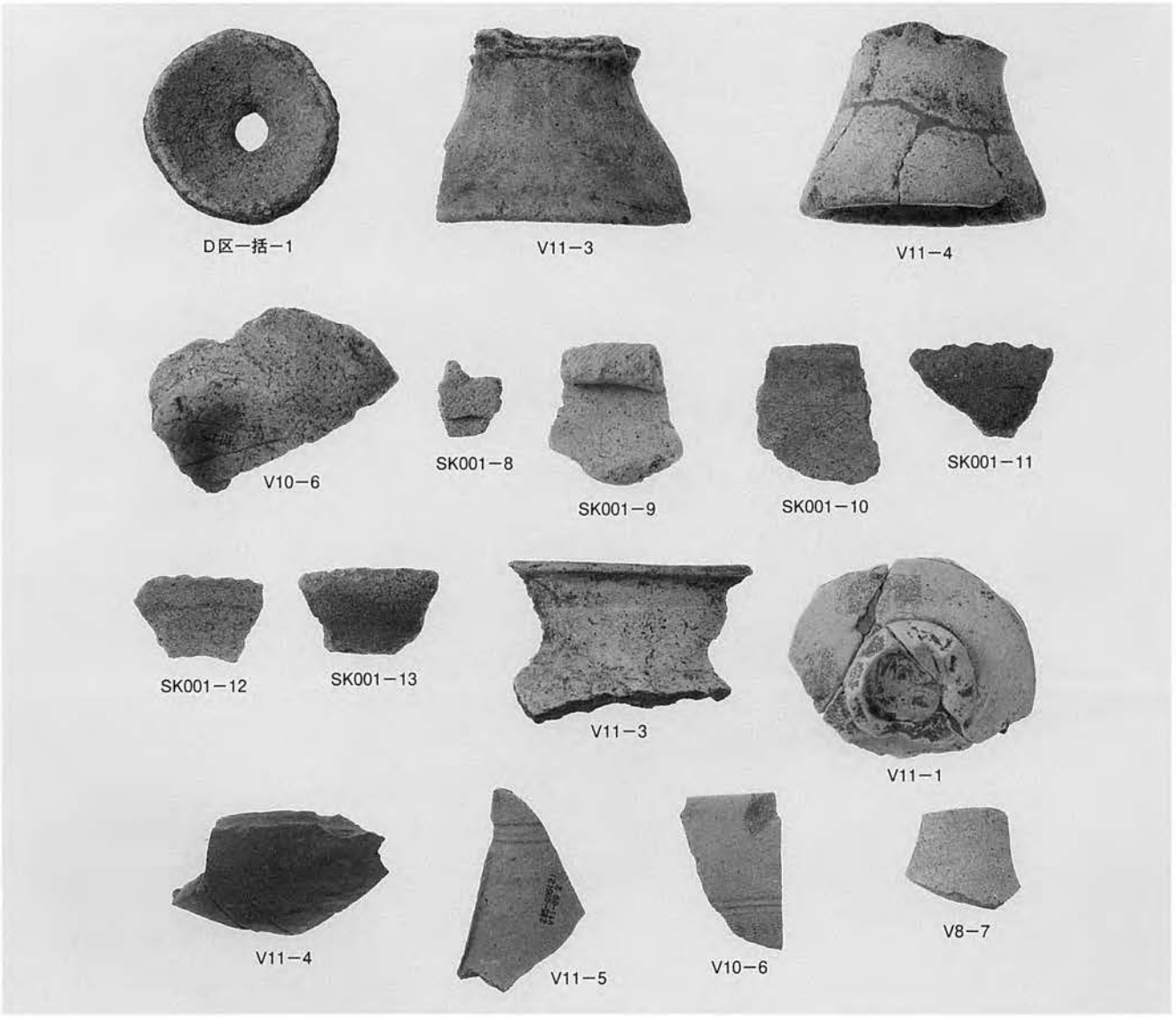
U13−29

グリッド出土土器（6）


U14−1
U13−2
U14−4
V14−5
U14−6
U13−7
V15−9
V15−10
V13−11
U13−12
V15−13
V15−14
3T−15
3T−17
V14−22
V14−23
U13−24
U13−25
V14−26
V12−27
V12−28
V12−32
V14−30

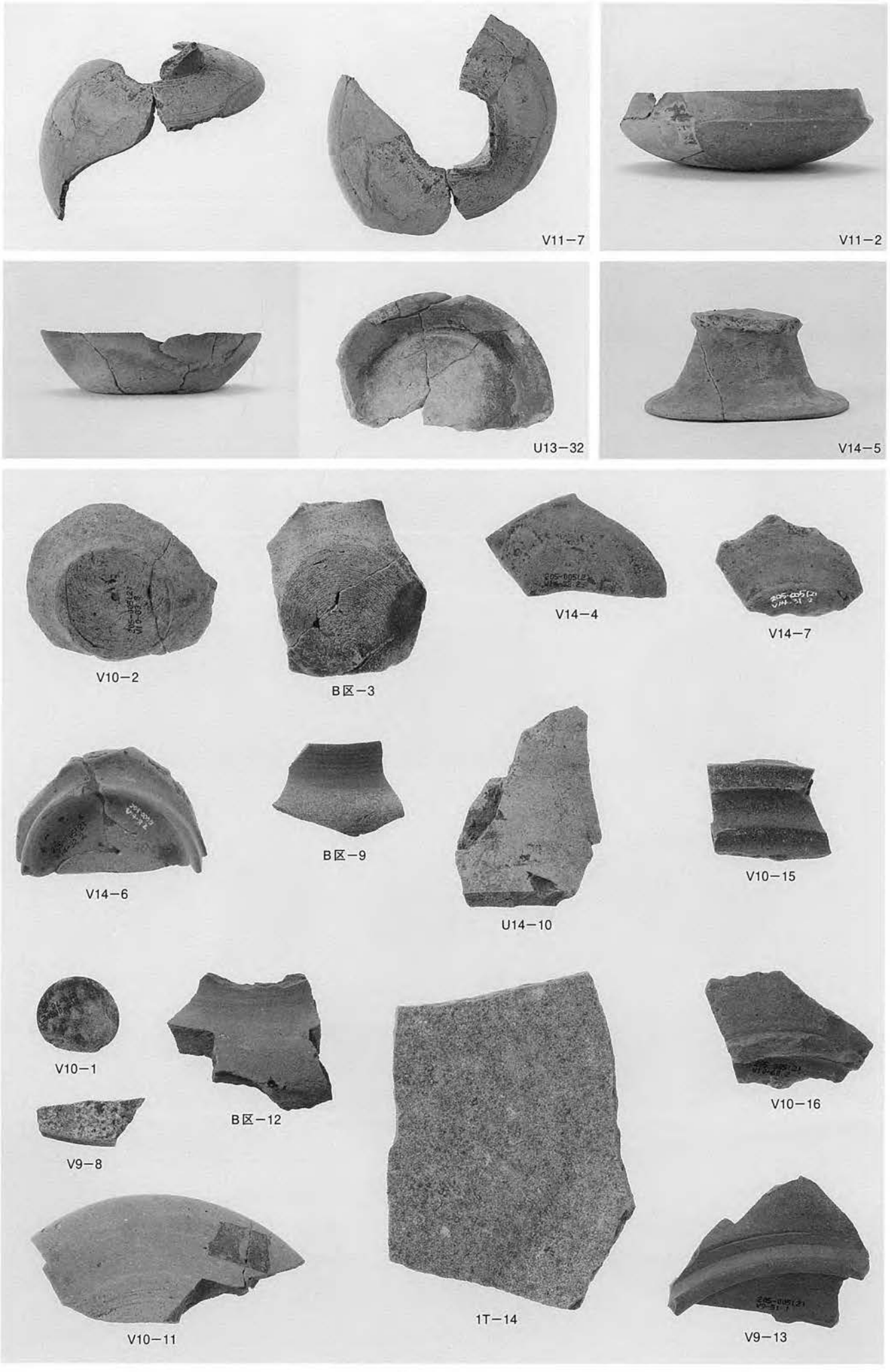
グリッド出土土器（7）



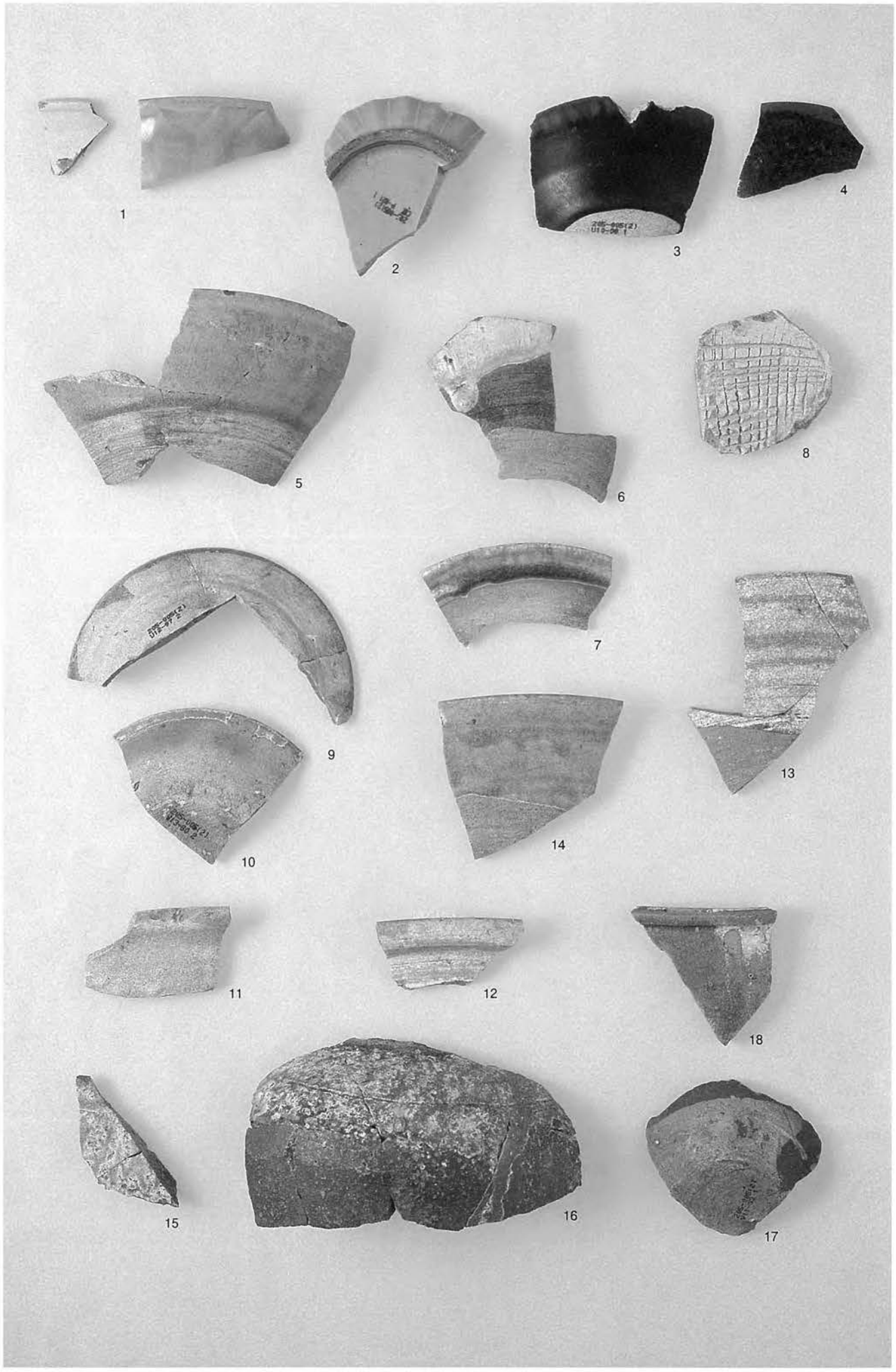


グリッド出土土器（8）・土製品

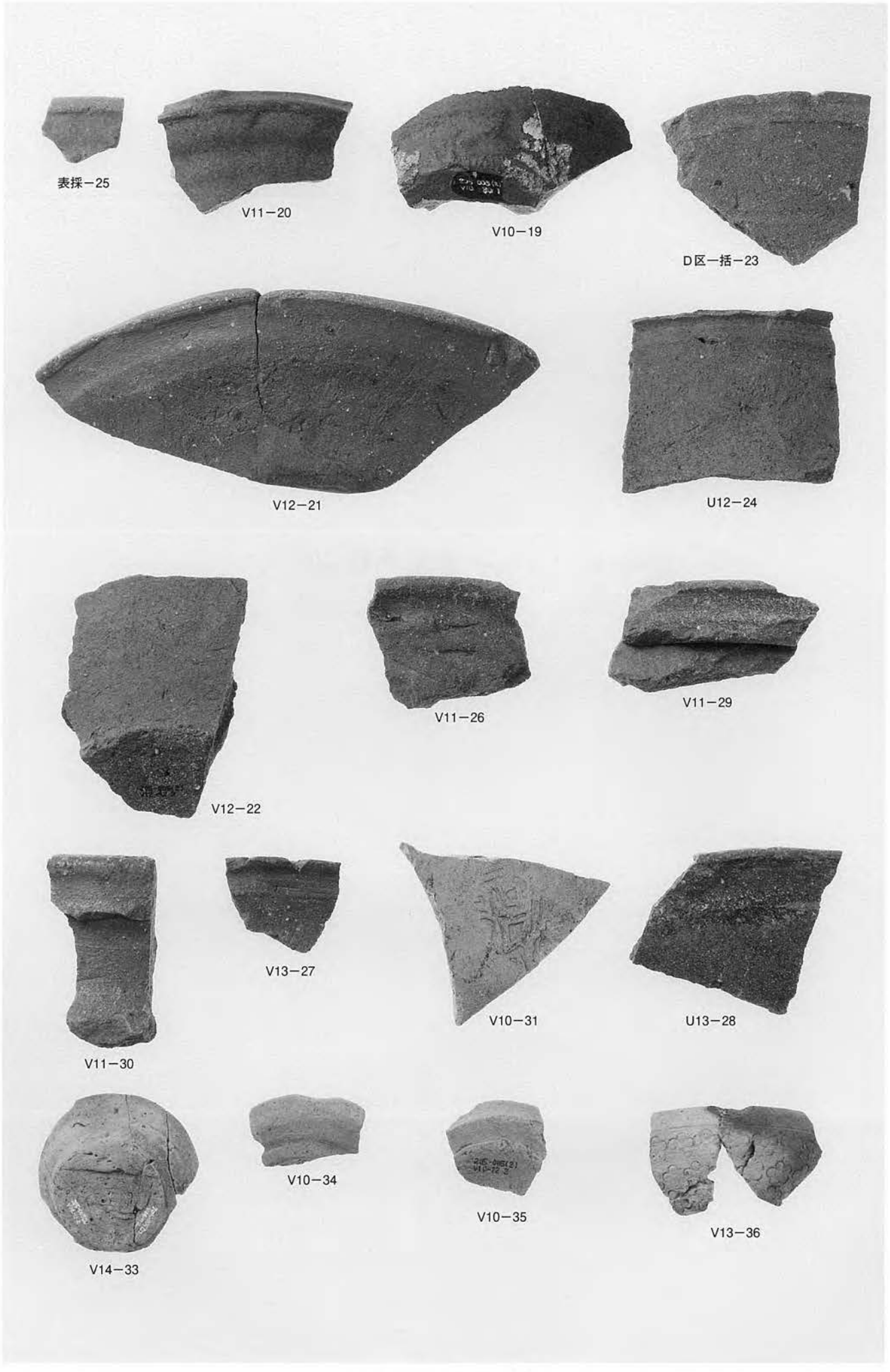
図版70



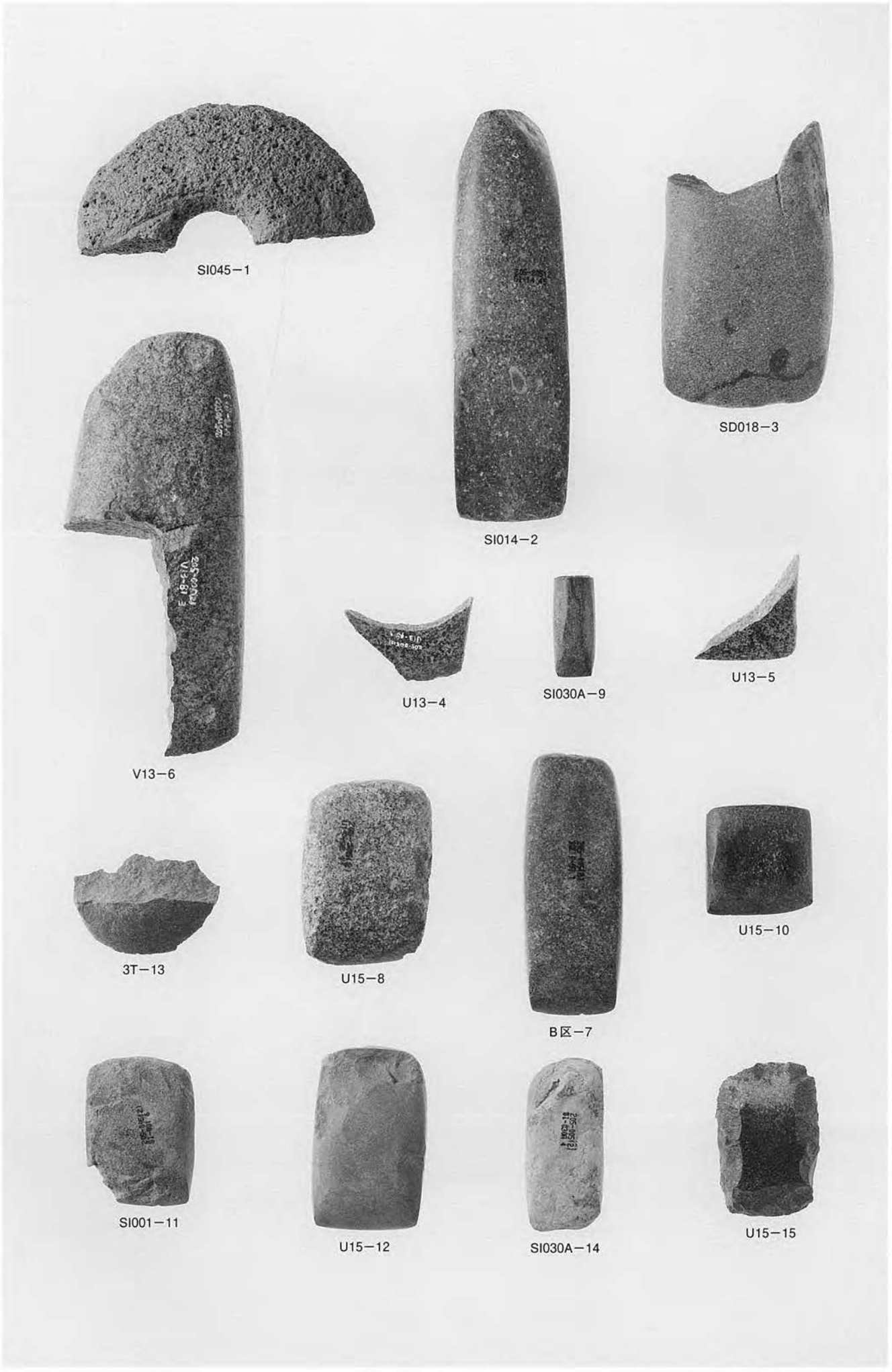
グリッド出土土器（9）



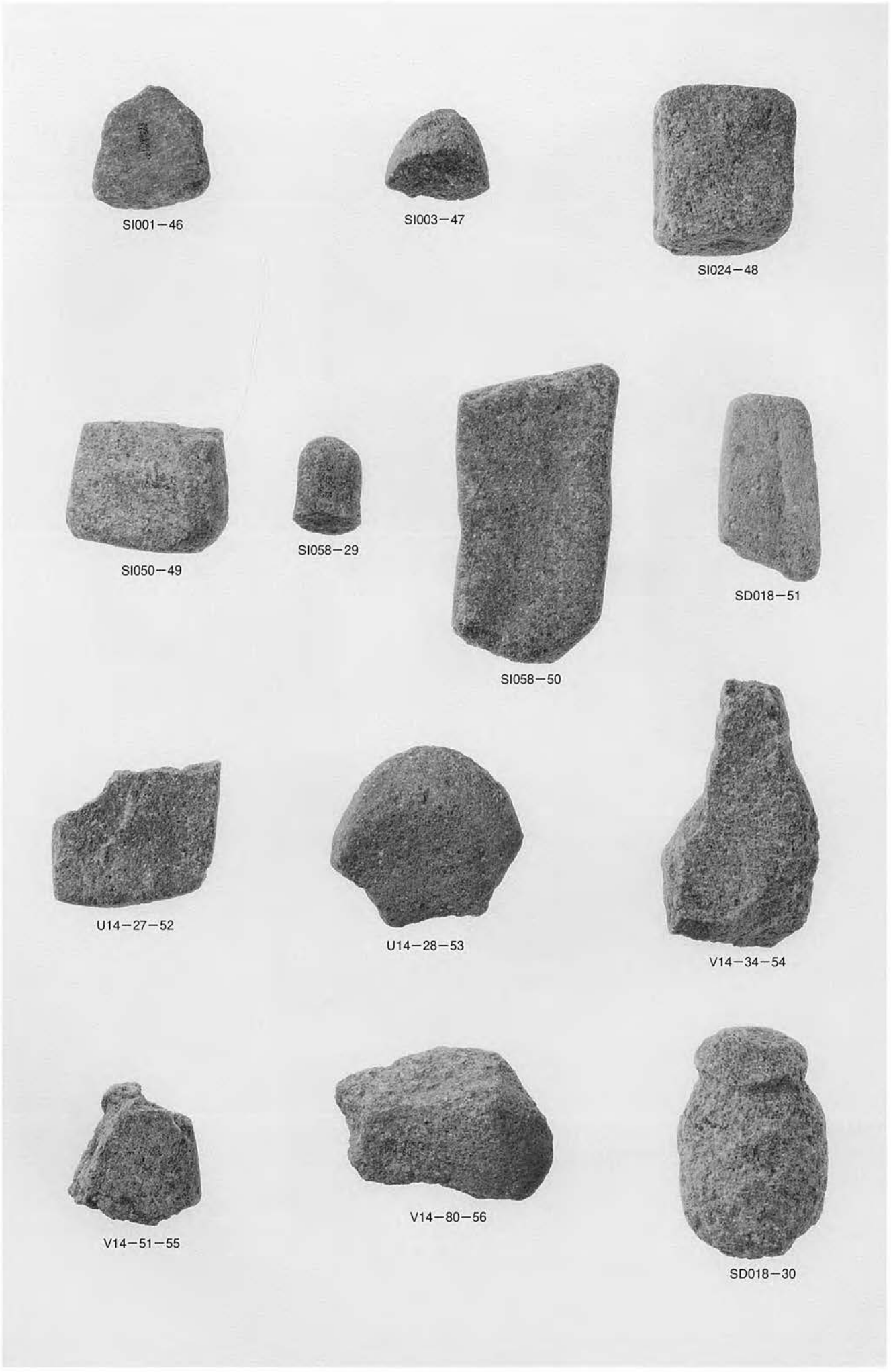
グリッド出土陶磁器（1）


表採－25
V11－20
V10－19
D区一括－23
V12－21
U12－24
V11－26
V11－29
V12－22
V13－27
V10－31
U13－28
V11－30
V10－34
V10－35
V13－36
V14－33

グリッド出土陶磁器（2）


SI045－1
SI014－2
SD018－3
V13－6
U13－4
SI030A－9
U13－5
3T－13
U15－8
B区－7
U15－10
SI001－11
U15－12
SI030A－14
U15－15

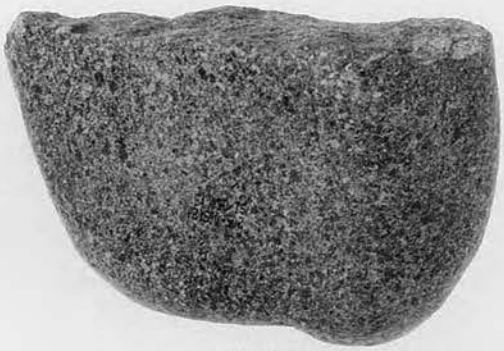
弥生時代出土石器


SI001－46
SI003－47
SI024－48
SI050－49
SI058－29
SI058－50
SD018－51
U14－27－52
U14－28－53
V14－34－54
V14－51－55
V14－80－56
SD018－30

流紋岩石製品

SI071－16

SK026－17



SI053－18

SD014－19

U15－19－20

SI016－21

SI057－22

SI031－23

SI044－24

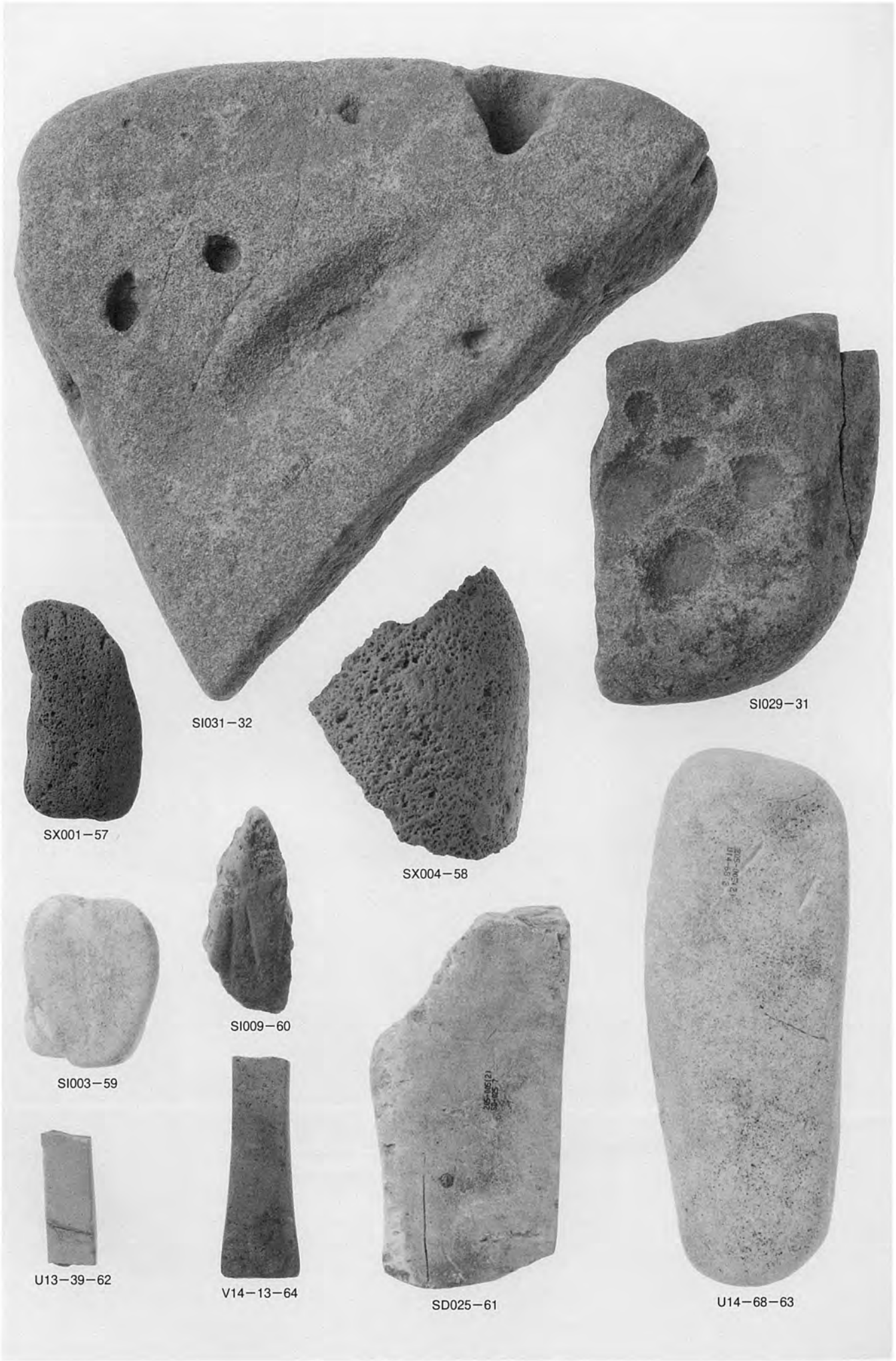
SI071－25

SI082－26

U15－89－27

V15－70－28

磨石・砥石類（1）


SI031－32
SI029－31
SX001－57
SX004－58
SI009－60
SI003－59
U13－39－62
V14－13－64
SD025－61
U14－68－63

磨石・砥石類（2）

SI007－33

SI044－34

SI045－35

SX004－36

SX004－37

SD016－38

SD016－39

SD018－40

SD018－41

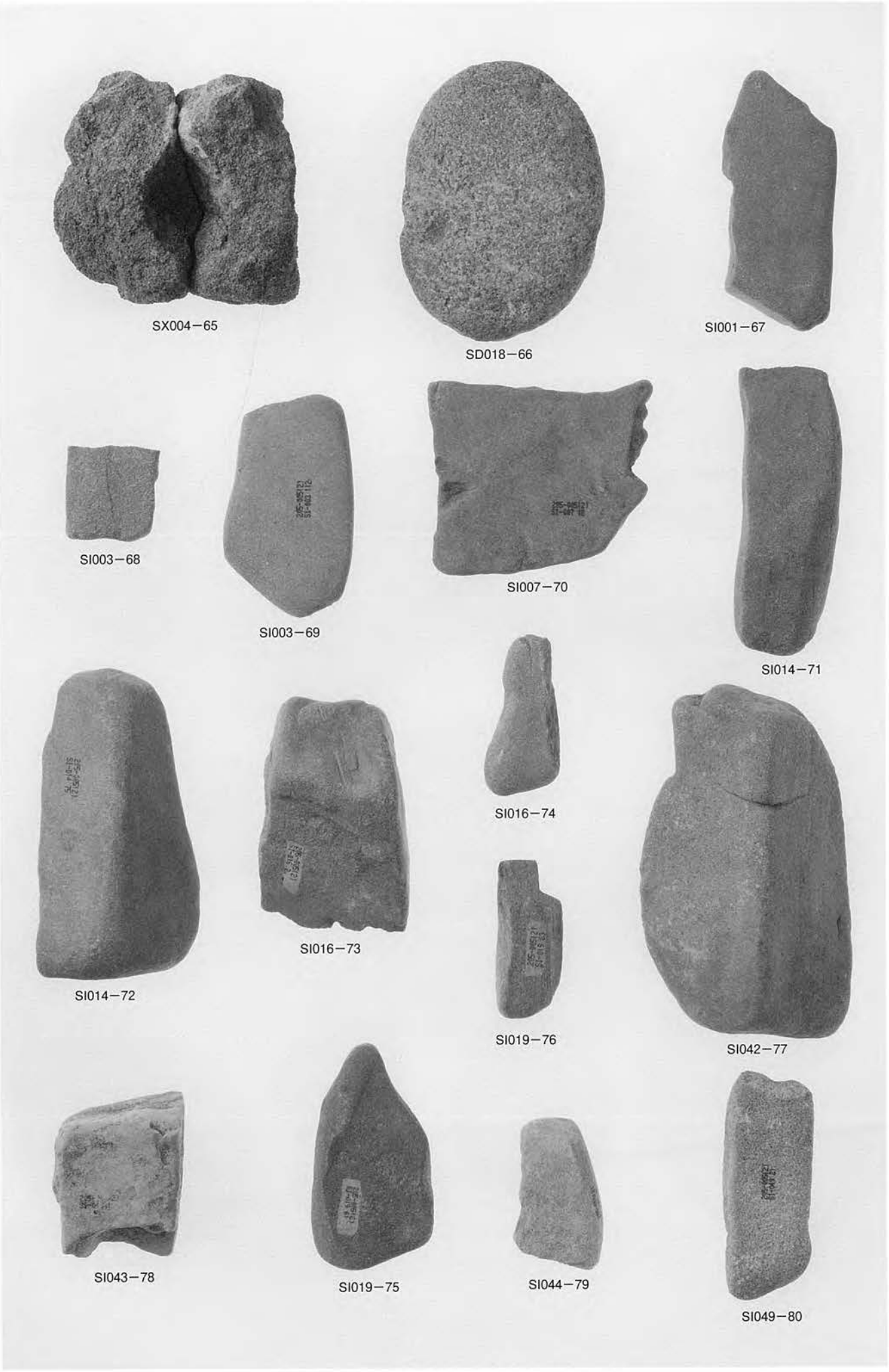
SD018－42

SD018－43

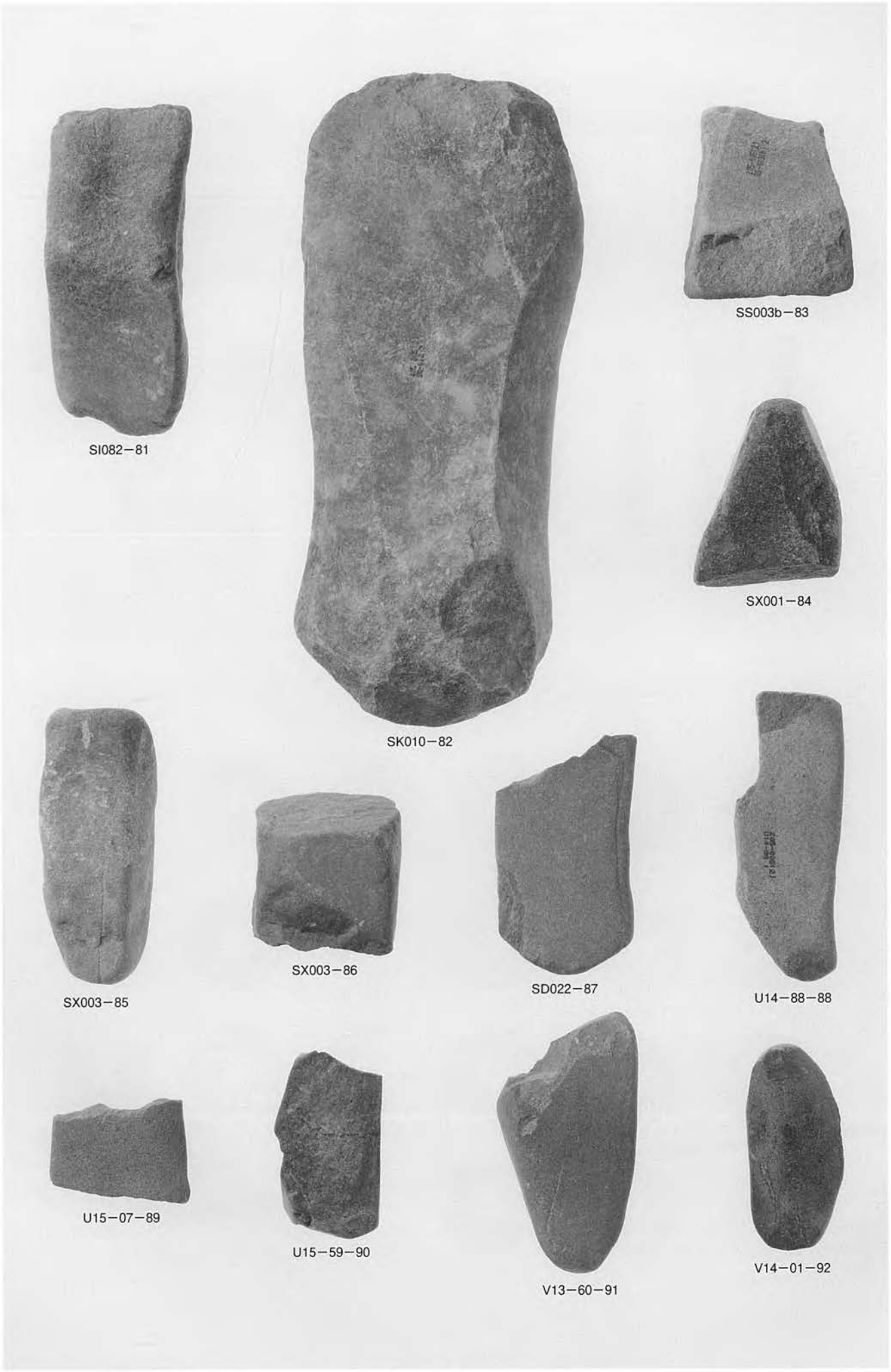
U14－23－44

V15－40・50－45

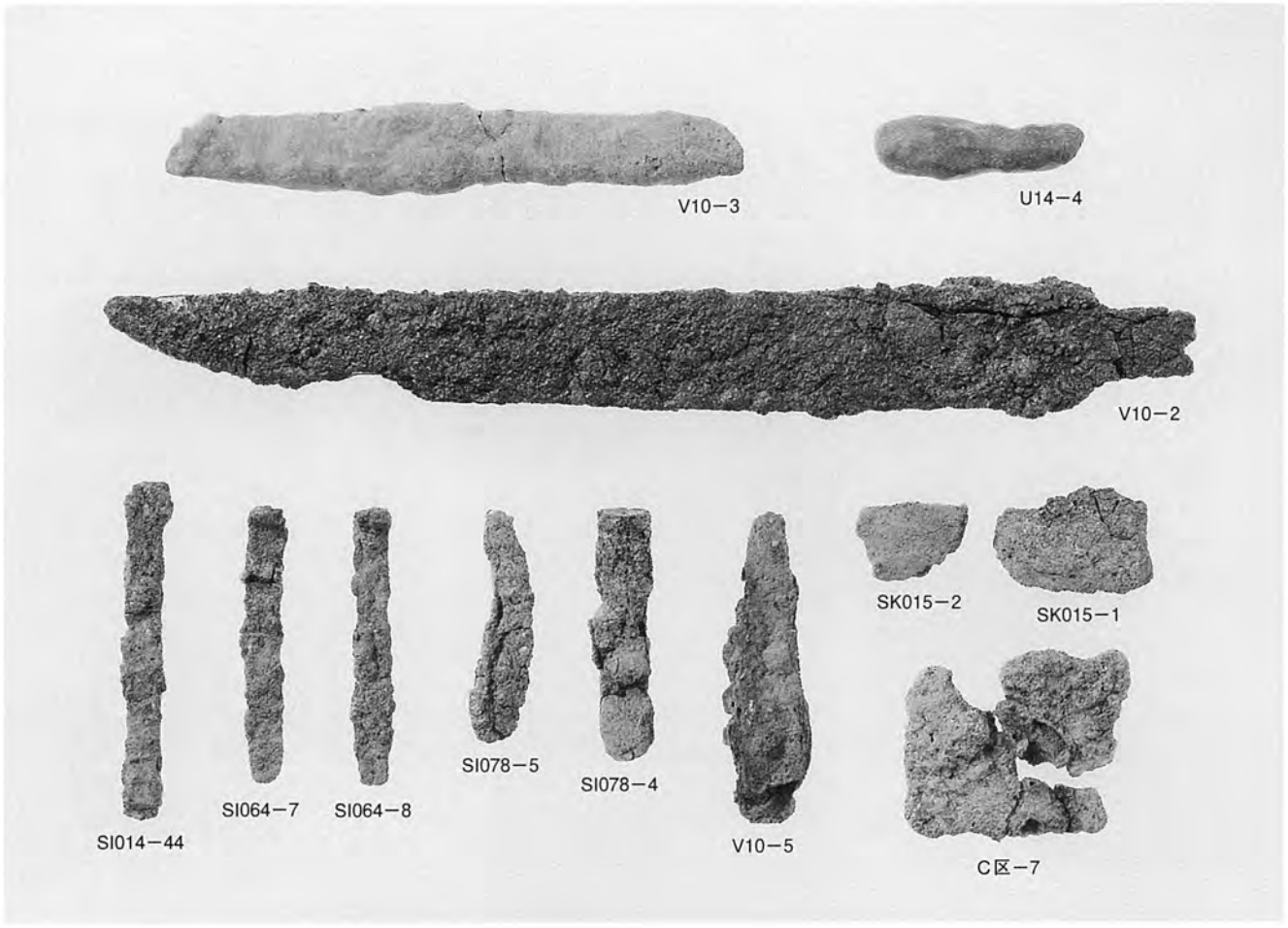
磨石・砥石類（3）

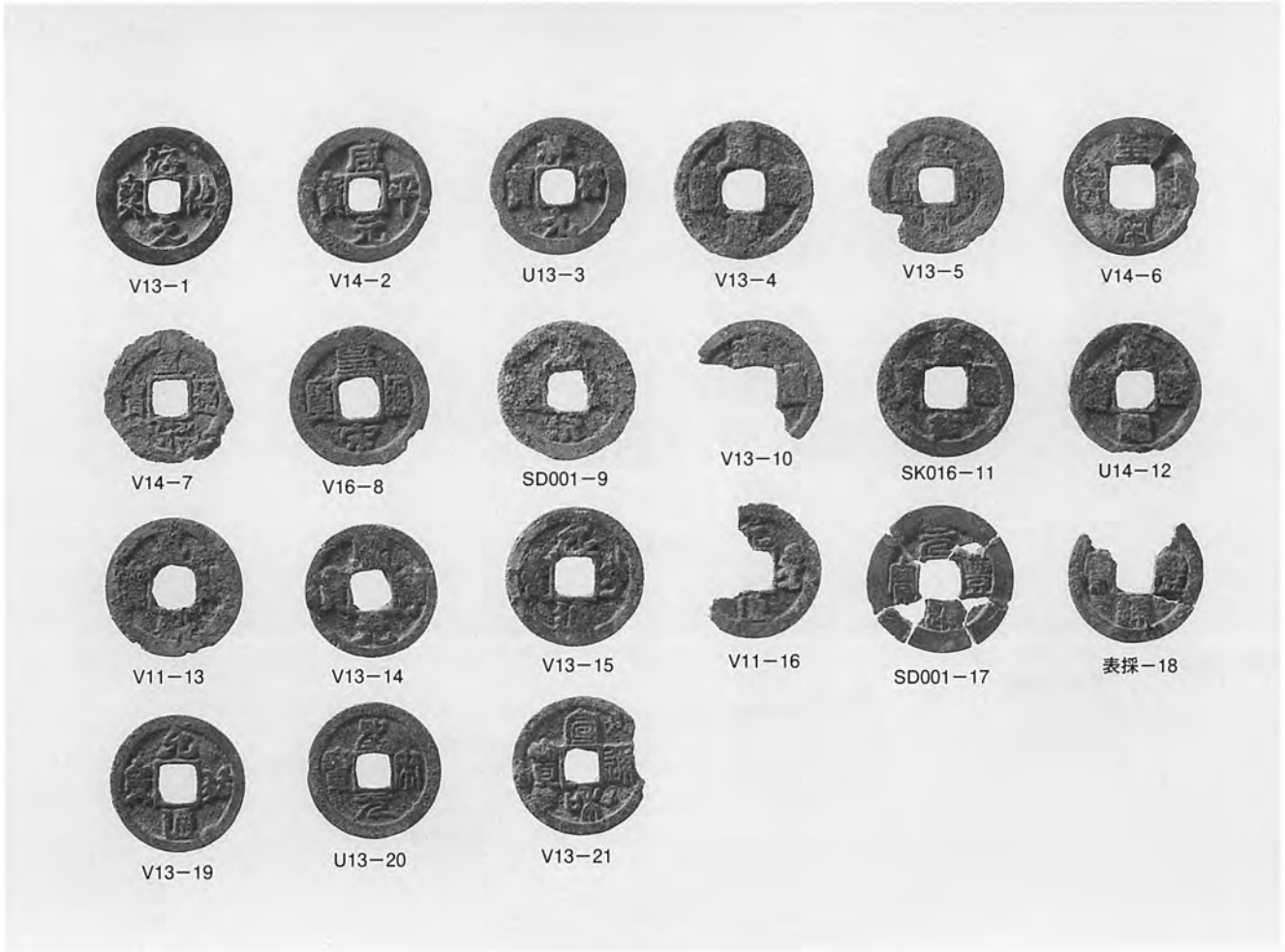

SX004－65
SD018－66
SI001－67
SI003－68
SI003－69
SI007－70
SI014－71
SI014－72
SI016－73
SI016－74
SI019－76
SI042－77
SI043－78
SI019－75
SI044－79
SI049－80

磨石・砥石類（4）


SI082－81
SK010－82
SS003b－83
SX001－84
SX003－85
SX003－86
SD022－87
U14－88－88
U15－07－89
U15－59－90
V13－60－91
V14－01－92

磨石・砥石類（5）


V10−3
U14−4
V10−2
SI014−44
SI064−7
SI064−8
SI078−5
SI078−4
V10−5
SK015−2
SK015−1
C区−7


V13−1
V14−2
U13−3
V13−4
V13−5
V14−6
V14−7
V16−8
SD001−9
V13−10
SK016−11
U14−12
V11−13
V13−14
V13−15
V11−16
SD001−17
表採−18
V13−19
U13−20
V13−21

出土鉄製品・古銭

全景（南から）

全景（北から）

宇戸台遺跡

A区全景（南から）

B区全景（南から）

SI001・002・003（南から）

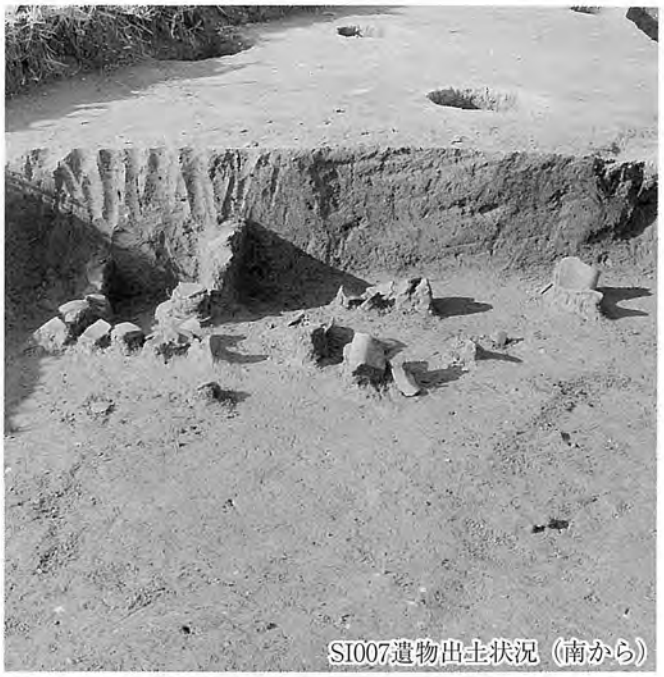
SI004（西から）

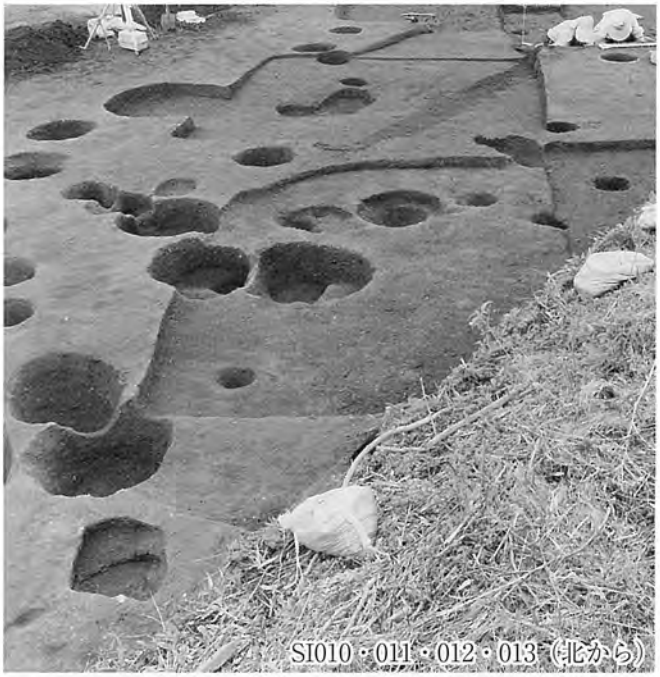
SI004カマド（西から）

SI009カマド（南から）

SI004・005・006・008・009（西から）

SI007（南から）


SI007遺物出土状況（南から）


SI010・011・012・013（北から）

SI013（南から）

SI014・015、SK002（南から）

SI016（南から）

SI016カマド（南から）

SI017（南から）

SI018（南から）

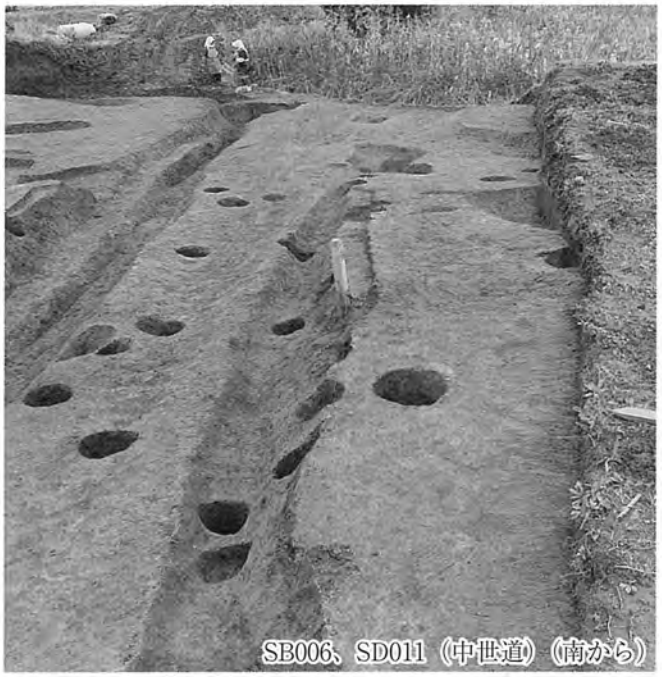
SI019（南から）

SI019カマド（南から）

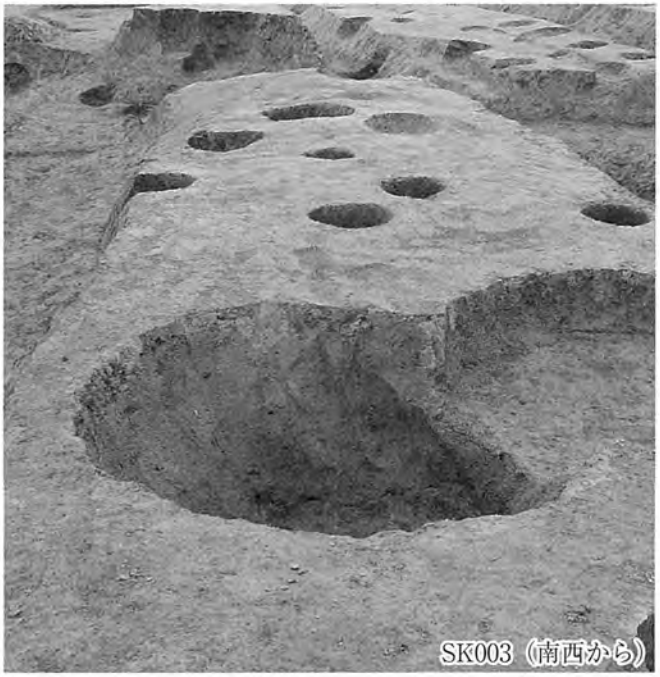
SB002（西から）

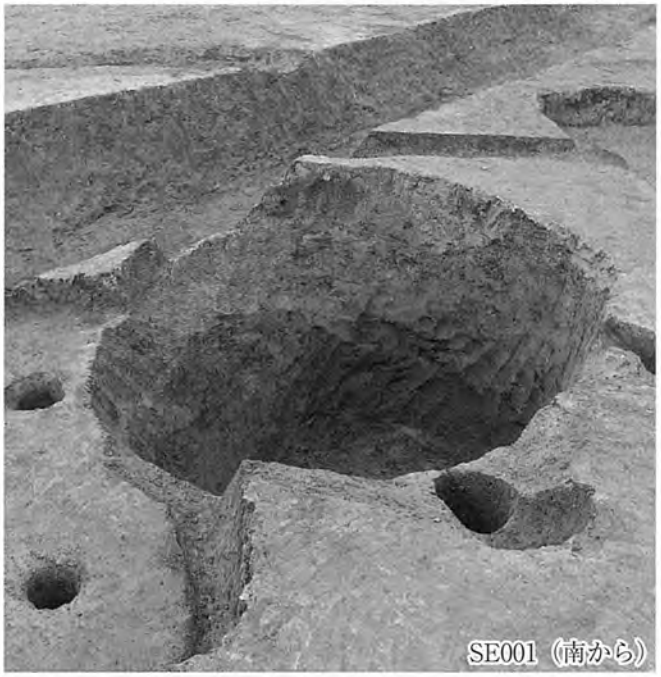
SB004（西から）

SB005（西から）


SB006、SD011（中世道）（南から）

SK002（西から）


SK003（南西から）


SE001（南から）

1号墳、2号方形周溝墓（東から）

1号墳遺物出土状況（南から）

A区全景（南から、中央は２号墳、３号方形周溝墓）

１号方形周溝墓、SI017（南東から）

2号墳前方部西周溝遺物出土状況（西から）

2号墳前方部東周溝遺物出土状況（東から）

4号方形周溝墓（南東から）

4号方形周溝墓北溝遺物出土状況（南西から）

5号方形周溝墓（北西から）

4号方形周溝墓西溝遺物出土状況（南から）

SI001－8

SI004－3

SI004－8

SI001－10

SI004－4

SI005－1

SI001－14

SI004－5

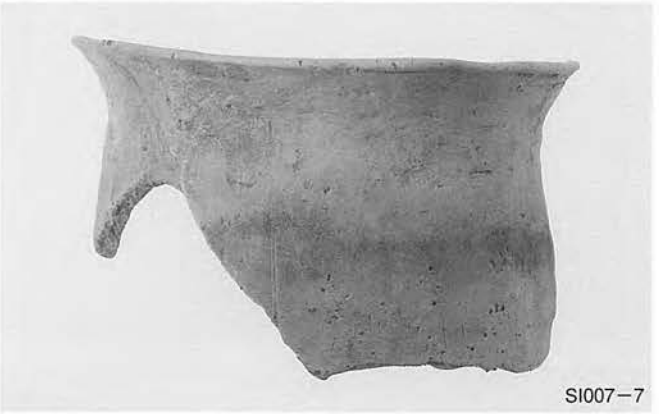
SI007－1

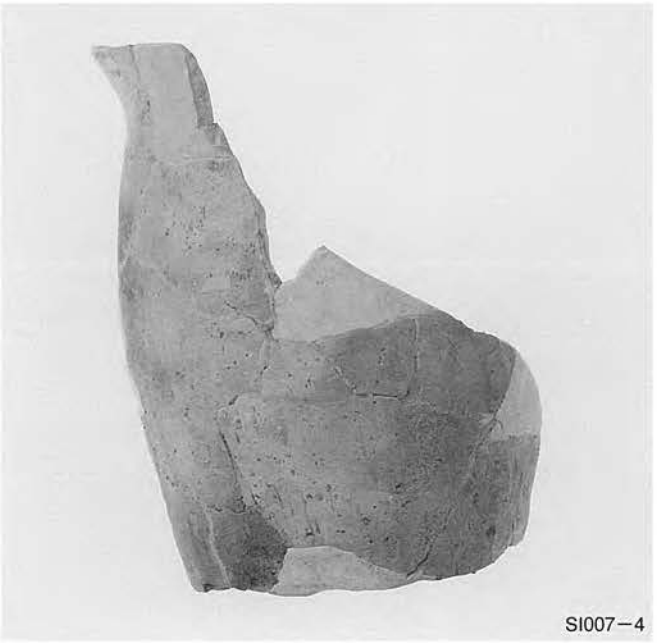
SI004－2

SI004－7

SI007－2

SI007－6


SI007－7


SI007－4

SI007－5

住居跡出土土器（1）

SI015－1

SI016－1

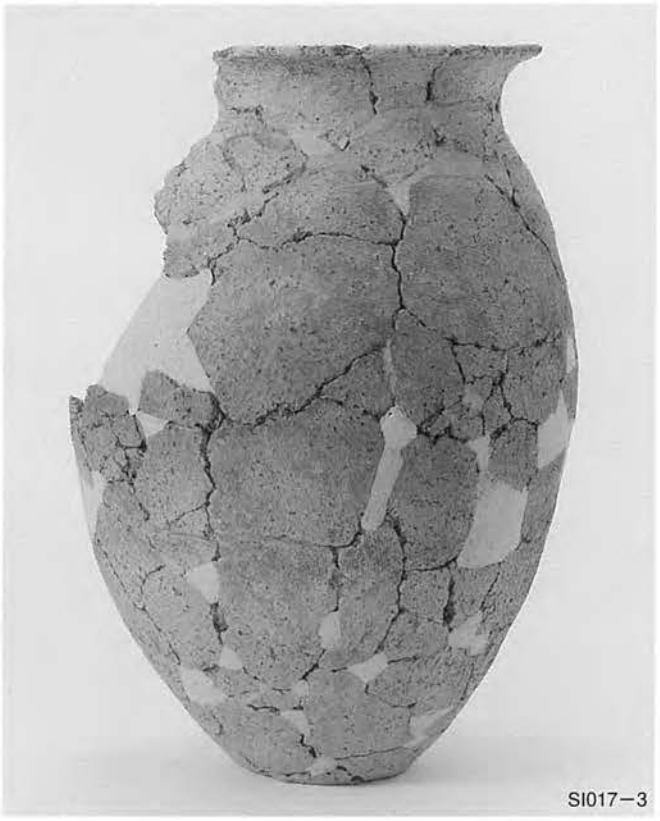
SI018－3

SI016－2

SI017－1

SI019－1

SI017－2


SI017－3

1号方形周溝墓－1

3号方形周溝墓－1

4号方形周溝墓－4

3号方形周溝墓－2

4号方形周溝墓－2

住居跡出土土器（2）・方形周溝墓出土土器（1）

4号方形周溝墓－1

4号方形周溝墓－6

4号方形周溝墓－9

4号方形周溝墓－3

4号方形周溝墓－8

4号方形周溝墓－5

4号方形周溝墓－10

方形周溝墓出土土器（2）

4号方形周溝墓－11

4号方形周溝墓－12

1号墳－5

2号墳－9

2号墳－16

2号墳－10

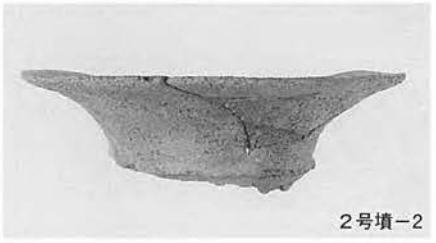
方形周溝墓出土土器（3）・古墳出土土器（1）

5号方形周溝墓－1

1号墳－3

1号墳－4

2号墳－1


2号墳－2

2号墳－4

2号墳－3

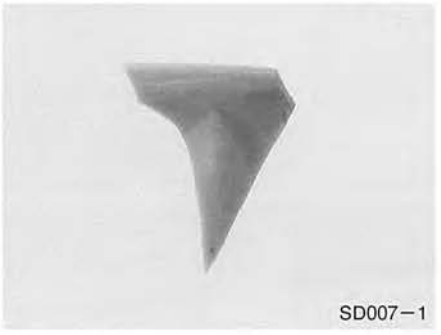
2号墳－7

2号墳－8

2号墳－11

2号墳－12

2号墳－14


SD007－1

SD007－2

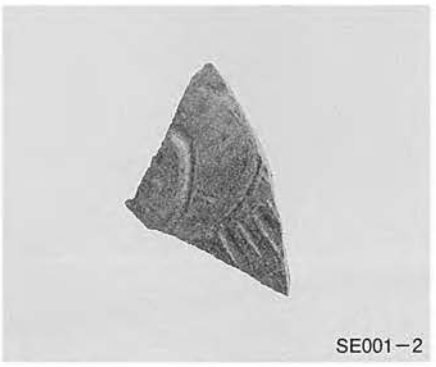
SD011－3

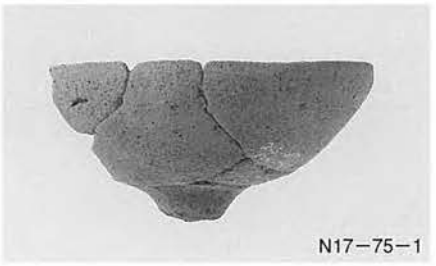
SD011－1

SD011－2

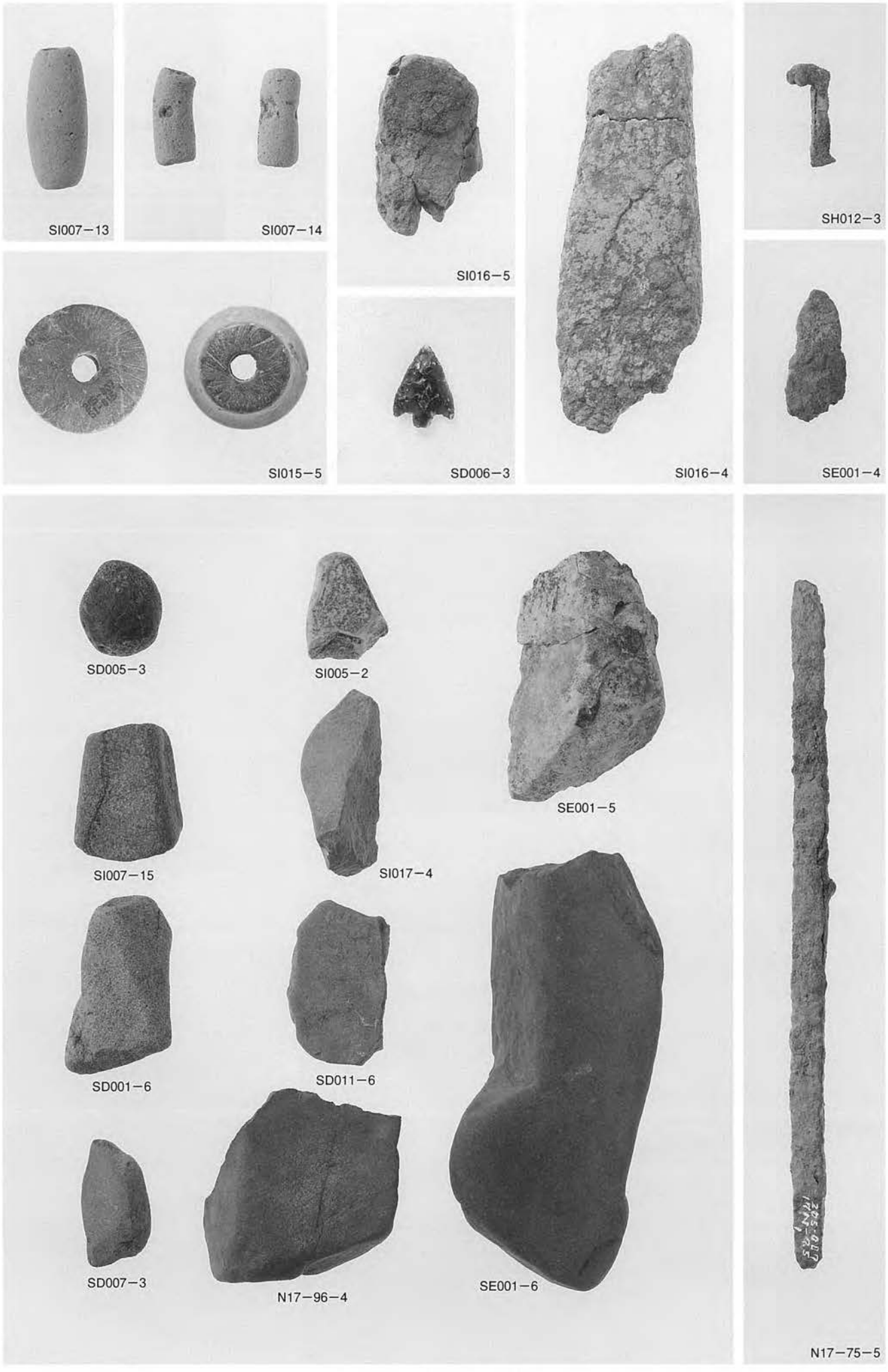
SD011－4

SE001－1


SE001－2


N17－75－1

古墳出土土器（2）・溝等出土土器


SI007－13
SI007－14
SI016－5
SH012－3
SI015－5
SD006－3
SI016－4
SE001－4
SD005－3
SI005－2
SE001－5
SI007－15
SI017－4
SD001－6
SD011－6
SD007－3
N17－96－4
SE001－6
N17－75－5

土製品・鉄製品・石製品

報告書抄録

ふりがな	たてやましかやのいせき・うどだいいせき
書名	館山市萱野遺跡・宇戸台遺跡
副書名	地方道路交付金委託富津館山線埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第639集
編著者名	白井久美子　小林信一
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL 043－424－4848
発行年月日	西暦2010年３月19日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
萱野遺跡（１）（かやのいせき）	千葉県館山市山本字芦野（ちばけんたてやましやまもとあざあし の）1,196-1ほか	12205	005	34度59分59秒	139度53分41秒	1999.4.5～1999.4.30	調査対象面積 3,666㎡ 本調査面積 0㎡	道路建設
萱野遺跡（２）（かやのいせき）	千葉県館山市国分字館ノ原（ちばけんたてやましこくぶんあざたて のはら）239ほか	12205	005	35度00分05秒	139度53分41秒	2002.8.1～2003.3.31	調査対象面積 4,500㎡ 本調査面積 4,500㎡	同上
宇戸台遺跡（うどだいいせき）	千葉県館山市腰越字上の台（ちばけんたてやましこしごえあざかみ のだい）44-2ほか	12205	007	35度00分17秒	139度53分28秒	2006.10.4～2006.11.30	調査対象面積 1,666㎡ 本調査面積 1,300㎡	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
萱野遺跡（１）	包蔵地	弥生時代～中世	流路跡（弥生時代） 流路跡（古代～中世）	弥生時代土器、平安時代土師器、中世陶磁器	弥生時代から中世にかけて、館山地域の低地における土地利用状況を知る貴重な資料を得た。
萱野遺跡（２）	集落跡 墓域 包蔵地	弥生時代～中・近世	住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、古墳、井戸跡、土坑、溝跡ほか	弥生時代土器、古墳時代土師器・須恵器、奈良・平安時代土師器・須恵器、中近世陶磁器、銅製品、鉄製品、鉄滓、石器、石製品、玉類、土製品、古銭	安房地域で初めて弥生時代環濠集落と古墳時代前期の大型方墳が検出され、今まで様相の分からなかった当地域におけるこの時代の解明に画期的な資料を加えた。また、古墳時代後期から中世まで連綿と集落が営まれており、戦国時代安房の前史を知る手がかりが得られた。
宇戸台遺跡	集落跡 墓域	弥生時代～中・近世	住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、古墳、井戸跡、土坑、溝・道跡ほか	弥生時代土器、古墳時代土師器・須恵器、奈良・平安時代土師器・須恵器、中近世陶磁器、鉄製品、鉄滓、石器、石製品	安房地域で初めて古墳時代前期の前方後方墳が検出され、当地域の古墳時代の墓域の様相がさらに明確となった。古墳時代後期から平安時代までの集落が営まれ、中世には道路が存在したことが判明した。

要約	調査の結果、館山市の平野部で弥生時代～平安時代の集落と墓域がまとまって検出され、今まで調査例の少なかった当該域における様相が明らかとなった。なお、萱野遺跡と宇戸台遺跡は川を挟んでいるが、ほぼ同様の性格をもつ遺跡と認識される。

千葉県教育振興財団調査報告第639集

館山市萱野遺跡・宇戸台遺跡

— 地方道路交付金委託富津館山線埋蔵文化財調査報告書 —

平成22年３月19日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町１－１

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　　株式会社　正　　文　　社
千葉市中央区都町１－10－６